

茨城県教育財団文化財調査報告第58集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19

長 峰 遺 跡  
(上)

平成 2 年 3 月

住宅・都市整備公団つくば開発局  
財団法人 茨 城 県 教 育 財 団

茨城県教育財団文化財調査報告第58集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19

なが なが 長 峰 みね 遺 跡  
(上)

平成 2 年 3 月

住宅・都市整備公団つくば開発局  
財団法人 茨 城 県 教 育 財 団

# 序

竜ヶ崎市の北部台地に、竜ヶ崎ニュータウンの建設が、住宅・都市整備公団によって進められております。ニュータウンの建設は、時代の要請に基づくものでありますが、一方、その開発区域内に存在する数多くの貴重な埋蔵文化財の保護と竜ヶ崎ニュータウンの建設を、どのように調和させていくかは大きな課題でありました。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県教育委員会の調整に基づき、住宅・都市整備公団の委託を受けて、昭和52年度から竜ヶ崎ニュータウン建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。これらの調査によって、数多くの貴重な遺構・遺物が検出され、竜ヶ崎市、ひいては茨城の原始・古代・中世を解明する上に、貴重な資料を提供することができたものと考えております。

本書は、長峰遺跡の昭和61・62年度の貴重な調査成果を収録したものであります。本書が、研究の資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望してやみません。

なお、発掘調査及び整理にあたり、委託者である住宅・都市整備公団からいただいた御協力に対して、感謝申し上げます。また、茨城県教育委員会・竜ヶ崎市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導・御協力に対し、衷心から謝意を表します。

平成2年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 儀 田 勇

# 例 言

- 1 本書は、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和61年度・62年度に実施した竜ヶ崎市長峰町に所在する長峰遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 長峰遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	川 又 友 三 郎	昭和61年 4 月～昭和63年 5 月	
	磯 田 勇	昭和63年 6 月～	
副 理 事 長	磯 田 勇	昭和61年 4 月～昭和63年 3 月	
	小 林 元	昭和63年 4 月～	
常 務 理 事	滑 川 貞 雄	昭和61年 4 月～平成元年 3 月	
	小 林 洋	平成元年 4 月～	
事 務 局 長	堀 井 昭 生	昭和60年 4 月～昭和62年 3 月	
	坂 場 庸 克	昭和62年 4 月～平成元年 3 月	
	一 木 邦 彦	平成元年 4 月～	
調 査 課 長	青 木 義 夫	昭和59年 4 月～平成元年 3 月	
	石 井 毅	平成元年 4 月～	
企 画 管 理 班	班 長	北 嶋 健	昭和60年 4 月～昭和62年 3 月
	〃	水 飼 敏 夫	昭和62年 4 月～
	主任調査員	山 本 静 男	昭和61年 4 月～平成元年 3 月
	〃	小 河 邦 男	平成元年 4 月～
	係 長	田 所 多 佳 男	昭和60年 4 月～昭和62年 3 月
	〃	園 部 昌 俊	昭和63年 4 月～
	主 任	山 崎 初 雄	昭和60年 4 月～平成元年 3 月
	主 事	富 永 明	昭和62年 4 月～昭和63年 3 月
	〃	大 部 章	昭和61年 4 月～
〃	吉 井 正 明	平成元年 4 月～	
調 査 第 一 班	班 長	沼 田 文 夫	昭和61・62年度
	主任調査員	中 村 幸 雄	昭和61年10月～昭和63年 3 月調査，昭和63年度整理・執筆
	〃	小 河 邦 男	昭和62年 4 月～昭和62年12月調査
	〃	小 山 映 一	昭和61年 7 月～昭和62年 3 月調査

主任調査員	高村 勇	昭和61年7月～昭和61年9月調査
調査員	後藤 義明	昭和62年4月～昭和63年3月調査，平成元年度整理・執筆
〃	吉川 明宏	昭和61年7月～昭和62年3月，昭和62年10月～昭和62年12月調査
整理班長	沼田 文夫	昭和63年度
〃	加藤 雅美	平成元年度

- 3 本書は，発掘調査担当者の協力を得て，中村幸雄が第1章，第2章，第3章第1節・第2節1・第4～6節・第9節・第10節1～3，第4章第1節・第3節・第5節を，後藤義明が第3章第2節2・3・第3節・第7節・第8節・第10節4，第4章第2節・第4節，終章を執筆分担当した。
- 4 本書の作成にあたり，弥生時代後期集落について千葉県印旛郡市埋蔵文化財センター大澤孝氏，古墳時代の土師器について茨城県立歴史館川井正一氏，群馬県埋蔵文化財調査事業団相京建史氏，埼玉県埋蔵文化財調査事業団村田健二氏，金属製品について茨城県立歴史館阿久津久氏にそれぞれ御指導を得た。
- 5 堀の実測については，シン航空株式会社に委託して航空写真測量を実施した。
- 6 本書に使用した記号等については，第3章第1節の項を参照されたい。

# 目 次

## — 上 卷 —

序

例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	2
1 地区設定	2
2 遺構確認	2
3 遺構調査	3
第3節 調査経過	5
第2章 位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	11
第3章 遺構と遺物	16
第1節 遺跡の概要と記載方法	16
1 遺跡の概要	16
2 遺構・遺物の記載方法	17
第2節 住居跡と出土遺物	25
1 弥生時代	25
2 古墳時代	139
3 時期不明	316
第3節 竪穴遺構と出土遺物	319
第4節 古墳と出土遺物	326

## 挿 図 目 次

第1図 調査区呼称方法概念図	2	第5図 長峰遺跡遺構配置図	23~24
第2図 調査区呼称図	4	第6図 第1号住居跡実測図	26
第3図 長峰遺跡周辺地形図	10	第7図 第1号住居跡出土遺物	
第4図 長峰遺跡周辺遺跡分布図	14	実測・拓影図	27

第 8 图	第 2 号住居跡実測図……………	28	第 29 图	第 25 号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………	49
第 9 图	第 2 号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………	29	第 30 图	第 29 号住居跡実測図……………	50
第 10 图	第 3 号住居跡実測図……………	30	第 31 图	第 29 号住居跡出土遺物 拓影図……………	51
第 11 图	第 3 号住居跡出土遺物 拓影図……………	31	第 32 图	第 30 号住居跡実測図……………	52
第 12 图	第 4 号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………	31	第 33 图	第 30 号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………	53
第 13 图	第 4 号住居跡実測図……………	32	第 34 图	第 34 号住居跡実測図……………	54
第 14 图	第 5 号住居跡実測図……………	34	第 35 图	第 34 号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………	55
第 15 图	第 5 号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………	35	第 36 图	第 37 号住居跡実測図……………	56
第 16 图	第 6 号住居跡実測図……………	36	第 37 图	第 37 号住居跡出土遺物 実測・拓影図— 1 ……………	57
第 17 图	第 6 号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………	37	第 38 图	第 37 号住居跡出土遺物 実測・拓影図— 2 ……………	58
第 18 图	第 7 号住居跡実測図……………	39	第 39 图	第 38 号住居跡実測図……………	60
第 19 图	第 7 号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………	40	第 40 图	第 38 号住居跡出土遺物 拓影図……………	61
第 20 图	第 8 号住居跡実測図……………	41	第 41 图	第 40 号住居跡実測図……………	62
第 21 图	第 8 号住居跡出土遺物 拓影図……………	42	第 42 图	第 40 号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………	63
第 22 图	第 9 号住居跡実測図……………	43	第 43 图	第 41 号住居跡実測図……………	65
第 23 图	第 9 号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………	44	第 44 图	第 41 号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………	66
第 24 图	第 10 号住居跡実測図……………	44	第 45 图	第 43 号住居跡実測図……………	68
第 25 图	第 10 号住居跡出土遺物 拓影図……………	45	第 46 图	第 43 号住居跡出土遺物 実測・拓影図— 1 ……………	69
第 26 图	第 23 号住居跡実測図……………	46	第 47 图	第 43 号住居跡出土遺物 実測図— 2 ……………	70
第 27 图	第 23 号住居跡出土遺物 拓影図……………	47	第 48 图	第 44 号住居跡実測図……………	72
第 28 图	第 25 号住居跡実測図……………	48	第 49 图	第 53 号住居跡実測図……………	73

第 50 图	第53号住居跡出土遺物 拓影图·····	73	第 71 图	第70号住居跡出土遺物 実測・拓影图·····	91
第 51 图	第54号住居跡実測图·····	74	第 72 图	第73号住居跡実測图·····	93
第 52 图	第54号住居跡出土遺物 拓影图·····	74	第 73 图	第73号住居跡出土遺物 実測・拓影图— 1 ·····	94
第 53 图	第55号住居跡実測图·····	75	第 74 图	第73号住居跡出土遺物 実測・拓影图— 2 ·····	95
第 54 图	第55号住居跡出土遺物 拓影图·····	75	第 75 图	第74号住居跡実測图·····	97
第 55 图	第58号住居跡実測图·····	76	第 76 图	第76号住居跡実測图·····	99
第 56 图	第58号住居跡出土遺物 実測・拓影图·····	77	第 77 图	第76号住居跡出土遺物 実測・拓影图·····	100
第 57 图	第59号住居跡実測图·····	78	第 78 图	第79号住居跡実測图·····	102
第 58 图	第59号住居跡出土遺物 実測・拓影图·····	79	第 79 图	第79号住居跡出土遺物 拓影图·····	102
第 59 图	第61号住居跡実測图·····	80	第 80 图	第80号住居跡実測图·····	103
第 60 图	第61号住居跡出土遺物 拓影图·····	81	第 81 图	第80号住居跡出土遺物 実測・拓影图·····	103
第 61 图	第62号住居跡実測图·····	82	第 82 图	第81号住居跡実測图·····	104
第 62 图	第62号住居跡出土遺物 実測・拓影图·····	82	第 83 图	第83号住居跡実測图·····	105
第 63 图	第63号住居跡実測图·····	83	第 84 图	第83号住居跡出土遺物 実測图·····	106
第 64 图	第64号住居跡実測图·····	84	第 85 图	第84号住居跡実測图·····	107
第 65 图	第64号住居跡出土遺物 実測・拓影图·····	85	第 86 图	第84号住居跡出土遺物 拓影图·····	107
第 66 图	第65号住居跡実測图·····	86	第 87 图	第92号住居跡実測图·····	108
第 67 图	第65号住居跡出土遺物 実測・拓影图·····	87	第 88 图	第92号住居跡出土遺物 実測・拓影图·····	109
第 68 图	第68号住居跡実測图·····	89	第 89 图	第98号住居跡実測图·····	110
第 69 图	第68号住居跡出土遺物 拓影图·····	89	第 90 图	第98号住居跡出土遺物 実測・拓影图·····	111
第 70 图	第70号住居跡実測图·····	90	第 91 图	第101号住居跡実測图 ·····	112



第 92 图	第101号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………113	第113图	第13号住居跡出土遺物 実測図……………142
第 93 图	第102号住居跡実測図 ……114	第114图	第14号住居跡実測図……………144
第 94 图	第102号住居跡出土遺物 実測・拓影図－1……………115	第115图	第14号住居跡出土遺物 実測図……………145
第 95 图	第102号住居跡出土遺物 実測・拓影図－2……………116	第116图	第15号住居跡実測図……………147
第 96 图	第106号住居跡実測図 ……119	第117图	第15号住居跡出土遺物 実測図……………148
第 97 图	第106号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………120	第118图	第16号住居跡実測図……………149
第 98 图	第113号住居跡実測図 ……121	第119图	第16号住居跡出土遺物 実測図……………150
第 99 图	第113号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………122	第120图	第17号住居跡実測図……………152
第100图	第116号住居跡実測図 ……125	第121图	第17号住居跡出土遺物 実測図……………152
第101图	第116号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………126	第122图	第18号住居跡出土遺物 実測図……………153
第102图	第119号住居跡実測図 ……128	第123图	第18号住居跡実測図……………154
第103图	第119号住居跡出土遺物 実測・拓影図－1……………129	第124图	第19号住居跡実測図……………155
第104图	第119号住居跡出土遺物 実測・拓影図－2……………130	第125图	第19号住居跡出土遺物 実測図……………156
第105图	第120号住居跡実測図 ……132	第126图	第20号住居跡実測図……………158
第106图	第120号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………133	第127图	第21号住居跡実測図……………159
第107图	第125号住居跡実測図 ……135	第128图	第21号住居跡出土遺物 実測図……………160
第108图	第125号住居跡出土遺物 拓影図……………135	第129图	第22号住居跡実測図……………161
第109图	弥生時代住居跡位置図……………138	第130图	第22号住居跡出土遺物 実測図……………162
第110图	第12号住居跡実測図……………139	第131图	第24号住居跡実測図……………163
第111图	第12号住居跡出土遺物 実測図……………140	第132图	第24号住居跡出土遺物 実測図……………164
第112图	第13号住居跡実測図……………141	第133图	第26号住居跡実測図……………165

第134图	第26号住居跡出土遺物 実測図……………166	第155图	第50号住居跡出土遺物 実測図……………192
第135图	第27号住居跡実測図……………167	第156图	第52号住居跡実測図……………193
第136图	第27号住居跡出土遺物 実測図……………168	第157图	第52号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………193
第137图	第28号住居跡実測図……………169	第158图	第56号住居跡実測図……………194
第138图	第28号住居跡出土遺物 実測図……………170	第159图	第56号住居跡出土遺物 実測図- 1……………195
第139图	第31号住居跡実測図……………172	第160图	第56号住居跡出土遺物 実測図- 2……………196
第140图	第31号住居跡出土遺物 実測図- 1……………173	第161图	第66号住居跡実測図……………198
第141图	第31号住居跡出土遺物 実測図- 2……………174	第162图	第66号住居跡出土遺物 実測図……………199
第142图	第32号住居跡実測図……………176	第163图	第67号住居跡出土遺物 実測図……………199
第143图	第32号住居跡出土遺物 実測図……………177	第164图	第67号住居跡実測図……………200
第144图	第33号住居跡実測図……………178	第165图	第69号住居跡実測図……………201
第145图	第33号住居跡出土遺物 実測図……………179	第166图	第69号住居跡出土遺物 実測図……………202
第146图	第36号住居跡実測図……………181	第167图	第72号住居跡実測図……………203
第147图	第36号住居跡出土遺物 実測図……………182	第168图	第72号住居跡出土遺物 実測図……………204
第148图	第39号住居跡実測図……………184	第169图	第75号住居跡実測図……………205
第149图	第39号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………185	第170图	第75号住居跡出土遺物 実測図……………206
第150图	第46号住居跡実測図……………186	第171图	第78号住居跡実測図……………208
第151图	第46号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………187	第172图	第78号住居跡出土遺物 実測図……………209
第152图	第47号住居跡実測図……………189	第173图	第82号住居跡実測図……………210
第153图	第47号住居跡出土遺物 実測図……………189	第174图	第82号住居跡出土遺物 実測図……………211
第154图	第50号住居跡実測図……………191	第175图	第85号住居跡実測図……………213

第176图	第85号住居跡石製品・未製品・ 剥片出土位置図……………214	第195图	第100号住居跡出土遺物 実測図-3 ……………234
第177图	第85号住居跡出土遺物 実測図-1 ……………215	第196图	第103号住居跡実測図 ……………236
第178图	第85号住居跡出土遺物 実測図-2 ……………216	第197图	第103号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………237
第179图	第86号住居跡実測図……………217	第198图	第104号住居跡出土遺物 実測図……………238
第180图	第86号住居跡出土遺物 実測図……………218	第199图	第104号住居跡実測図 ……………239
第181图	第91号住居跡実測図……………219	第200图	第107号住居跡実測図 ……………241
第182图	第91号住居跡炭化材・ 焼土位置図……………220	第201图	第108号住居跡実測図 ……………242
第183图	第91号住居跡出土遺物 実測図-1 ……………221	第202图	第108号住居跡出土遺物 実測図……………243
第184图	第91号住居跡出土遺物 実測図-2 ……………222	第203图	第110号住居跡実測図 ……………244
第185图	第93号住居跡実測図……………224	第204图	第111号住居跡実測図 ……………245
第186图	第94号住居跡実測図……………225	第205图	第111号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………246
第187图	第94号住居跡出土遺物 実測図……………226	第206图	第115号住居跡実測図 ……………249
第188图	第95号住居跡実測図……………227	第207图	第115号住居跡出土遺物 実測・拓影図……………250
第189图	第95号住居跡出土遺物 実測図……………228	第208图	第118号住居跡実測図 ……………251
第190图	第97号住居跡実測図……………229	第209图	第118号住居跡出土遺物 実測図……………251
第191图	第97号住居跡出土遺物 実測図……………230	第210图	第121号住居跡実測図 ……………253
第192图	第100号住居跡実測図 ……………231	第211图	第123号住居跡実測図 ……………254
第193图	第100号住居跡出土遺物 実測図-1 ……………232	第212图	第123号住居跡出土遺物 実測図……………255
第194图	第100号住居跡出土遺物 実測図-2 ……………233	第213图	第124号住居跡実測図 ……………257
		第214图	第124号住居跡出土遺物 実測・拓影図-1 ……………258
		第215图	第124号住居跡出土遺物 実測図-2 ……………259

第216図	第124号住居跡出土遺物 実測図 - 3	第235図	第71号住居跡実測図	260	291
第217図	第124号住居跡出土遺物 実測図 - 4	第236図	第77号住居跡実測図	261	293
第218図	第35号住居跡出土遺物 実測図	第237図	第77号住居跡出土遺物 実測図	266	294
第219図	第35号住居跡実測図	第238図	第88号住居跡実測図	267	295
第220図	第42号住居跡実測図	第239図	第88号住居跡出土遺物 実測図	269	296
第221図	第42号住居跡出土遺物 実測・拓影図	第240図	第90号住居跡実測図	270	298
第222図	第45号住居跡実測図	第241図	第90号住居跡出土遺物 実測・拓影図	272	299
第223図	第45号住居跡出土遺物 実測・拓影図 - 1	第242図	第99号住居跡実測図	273	301
第224図	第45号住居跡出土遺物 実測図 - 2	第243図	第99号住居跡出土遺物 実測図	274	302
第225図	第48号住居跡実測図	第244図	第105号住居跡実測図	277	303
第226図	第48号住居跡出土遺物 実測図 - 1	第245図	第105号住居跡出土遺物 実測図	278	304
第227図	第48号住居跡出土遺物 実測図 - 2	第246図	第112号住居跡実測図	279	306
第228図	第49号住居跡実測図	第247図	第112号住居跡出土遺物 実測・拓影図	282	307
第229図	第49号住居跡出土遺物 実測図	第248図	第114号住居跡実測図	283	308
第230図	第51号住居跡実測図	第249図	第114号住居跡出土遺物 実測図	285	309
第231図	第51号住居跡出土遺物 実測図 - 1	第250図	第117号住居跡実測図	286	311
第232図	第51号住居跡出土遺物 実測図 - 2	第251図	第117号住居跡出土遺物 実測図	287	312
第233図	第51号住居跡出土遺物 実測図 - 3	第252図	第122号住居跡実測図	288	313
第234図	第71号住居跡出土遺物 実測図	第253図	第122号住居跡出土遺物 実測図	290	314
		第254図	第11号住居跡実測図		316
		第255図	第96号住居跡実測図		317
		第256図	古墳時代及び時期不明 住居跡位置図		318

第257图	第1号竖穴遺構実測図……………	319	第279图	第3号古墳出土遺物 実測図-3……………	346
第258图	第2号竖穴遺構実測図……………	320	第280图	第3号古墳出土遺物 実測・拓影図-4……………	347
第259图	第3号竖穴遺構実測図……………	321	第281图	第3号古墳出土遺物 実測図-5……………	347
第260图	第3号竖穴遺構出土遺物 実測図……………	322	第282图	第4号古墳実測図……………	352
第261图	第4号竖穴遺構実測図……………	324	第283图	第4号古墳出土遺物 実測・拓影図……………	353
第262图	竖穴遺構位置図……………	325	第284图	第5号古墳実測図……………	354
第263图	第1号古墳墳丘図……………	327	第285图	第5号古墳出土遺物 実測・拓影図……………	354
第264图	第1号古墳実測図-1……………	328	第286图	第6号古墳実測図……………	356
第265图	第1号古墳実測図-2……………	329	第287图	第7号古墳実測図……………	357
第266图	第1号古墳出土遺物 実測図-1……………	330	第288图	第7号古墳出土遺物 実測図……………	358
第267图	第1号古墳出土遺物 実測図-2……………	331	第289图	第8号古墳実測図……………	359
第268图	第1号古墳出土遺物 実測図-3……………	332	第290图	第8号古墳出土遺物 実測図……………	360
第269图	第1号古墳出土遺物 実測・拓影図-4……………	333	第291图	第9号古墳実測図……………	361
第270图	第2号古墳墳丘図……………	336	第292图	第10号古墳実測図……………	363
第271图	第2号古墳実測図-1……………	337	第293图	第11号古墳実測図……………	364
第272图	第2号古墳実測図-2……………	338	第294图	第11号古墳出土遺物 実測図……………	365
第273图	第2号古墳出土遺物 実測・拓影図……………	338	第295图	第12号古墳実測図……………	366
第274图	第3号古墳実測・ 墳丘図-1……………	341	第296图	第12号古墳出土遺物 位置図……………	367
第275图	第3号古墳実測図-2……………	342	第297图	第12号古墳出土遺物 実測図-1……………	368
第276图	第3号古墳出土遺物 位置図……………	343	第298图	第12号古墳出土遺物 実測図-2……………	369
第277图	第3号古墳出土遺物 実測図-1……………	344	第299图	第13号古墳実測図……………	372
第278图	第3号古墳出土遺物 実測図-2……………	345			

第300图	第14号古墳実測図……………	374	第321图	第23号古墳出土遺物 実測・拓影図……………	400
第301图	第15号古墳実測図……………	376	第322图	第24号古墳実測図……………	402
第302图	第16号古墳実測図……………	377	第323图	第24号古墳出土遺物 実測・拓影図……………	402
第303图	第16号古墳出土遺物 実測・拓影図……………	378	第324图	第25号古墳実測図……………	404
第304图	第17号古墳実測・ 墳丘図-1……………	380	第325图	第25号古墳出土遺物 実測図……………	405
第305图	第17号古墳実測図-2……………	381	第326图	第26号古墳実測図……………	406
第306图	第17号古墳実測図-3……………	382	第327图	第26号古墳出土遺物 実測図……………	407
第307图	第17号古墳出土遺物 位置図……………	383	第328图	第27号古墳実測図……………	408
第308图	第17号古墳出土遺物 実測図-1……………	384	第329图	第27号古墳主体部 実測図……………	409
第309图	第17号古墳出土遺物 実測図-2……………	385	第330图	第27号古墳出土遺物 実測・拓影図……………	410
第310图	第17号古墳出土遺物 実測・拓影図-3……………	386	第331图	第28号古墳実測図……………	412
第311图	第17号古墳出土遺物 実測・拓影図-4……………	387	第332图	第28号古墳出土遺物 実測図……………	412
第312图	第17号古墳出土遺物 実測・拓影図-5……………	388	第333图	第29号古墳実測図……………	413
第313图	第18号古墳実測図……………	391	第334图	第29号古墳主体部 実測図……………	414
第314图	第19号古墳実測図……………	393	第335图	第29号古墳出土遺物 実測・拓影図……………	415
第315图	第20号古墳実測図……………	394	第336图	第30号古墳実測図……………	416
第316图	第21号古墳実測図……………	396	第337图	第30号古墳出土遺物 実測図……………	417
第317图	第21号古墳出土遺物 実測・拓影図……………	397	第338图	第31号古墳実測図……………	418
第318图	第22号古墳実測図……………	398	第339图	第31号古墳出土遺物 実測図……………	419
第319图	第22号古墳出土遺物 実測図……………	398	第340图	第32号古墳実測図……………	421
第320图	第23号古墳実測図……………	400			

第341図	第32号古墳出土遺物 実測図……………	422
第342図	第33号古墳実測図……………	423
第343図	第33号古墳出土遺物 位置図……………	424
第344図	第33号古墳出土遺物 実測図－1……………	425
第345図	第33号古墳出土遺物 実測図－2……………	426
第346図	第33号古墳出土遺物 実測図－3……………	427
第347図	第33号古墳出土遺物 実測図－4……………	428
第348図	第33号古墳出土遺物 実測図－5……………	429
第349図	第33号古墳出土遺物 実測図－6……………	430
第350図	第33号古墳出土遺物 実測図－7……………	431
第351図	第35号古墳実測図……………	436
第352図	第35号古墳出土遺物 実測図……………	437
第353図	第36号古墳実測図……………	438
第354図	第36号古墳出土遺物 実測・拓影図……………	439
第355図	字名・古墳・塚位置図……………	442

## 表 目 次

表 1	長峰遺跡周辺遺跡一覧表……………	15
表 2	弥生時代住居跡一覧表……………	135～137
表 3	古墳時代前期住居跡一覧表……………	264～266
表 4	古墳時代中期住居跡一覧表……………	315～316
表 5	時期不明住居跡一覧表……………	317
表 6	竪穴遺構一覧表……………	324
表 7	円墳・方墳一覧表……………	440～441
表 8	前方後円墳一覧表……………	441

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

住宅・都市整備公団は、自然の保全に留意した潤いのある生活環境のもとに、既成の竜ヶ崎市街地と有機的に結合した調和のある新しい町づくりを目指し、竜ヶ崎市の北部台地上に、総面積<sup>(1)</sup>671.5haに及ぶ竜ヶ崎ニュータウンの建設を着手した。これは、首都圏への人口や産業の集中を緩和すると同時に、膨大な住宅用地の需要に対応し、良好な居住環境を備えた住宅用地の供給と地域内に就業の場を設けることにより、居住者の地元定着をも意図している。

竜ヶ崎ニュータウンの建設計画は、当初日本住宅公団によって計画され、昭和46年1月「竜ヶ崎牛久都市計画事業」として市街地開発事業に関する都市計画が決定され、その事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整備事業」と称した。その後、昭和51年4月に設立された宅地開発公団茨城開発局が、日本住宅公団に代わって事業を引き継いだ。同56年10月1日付をもって、宅地開発公団と日本住宅公団が統合し、新たに「住宅・都市整備公団」として発足したが、従来の契約によって生じた権利・義務はそのまま新公団に継承され、今日に至っている。

茨城県教育委員会は、昭和45年に実施した埋蔵文化財の分布調査の結果に基づき、開発地域内に所在する遺跡について、文化財保護の立場から必要な措置を講ずるため、地元竜ヶ崎市教育委員会と協議を重ねた。その後、再度実施した分布調査によって、昭和51年7月に7遺跡、昭和55年5月に2遺跡、昭和56年5月に工業団地内で2遺跡、昭和57年10月に1遺跡を各々追加した。県教育委員会は、これら36遺跡（表1）について関係機関と再度協議を行った結果、現状保存が困難な31遺跡について、記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は、昭和52年4月、「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整備事業」の施行に係る埋蔵文化財発掘調査の業務委託契約を、当時の宅地開発公団と締結し、竜ヶ崎ニュータウン建設区域内の埋蔵文化財調査を継続して実施してきた。

昭和61年度は、屋代B遺跡<sup>(2)</sup>、南三島遺跡4区<sup>(3)</sup>と長峰遺跡の発掘調査を実施し、長峰遺跡の発掘調査は62年度も引き続いて実施した。なお、発掘調査は、昭和61年度・62年度とも茨城県教育財団本部調査課調査第一班が担当した。

注 (1) 開発面積は、小柴新田町・柏田町の全域と、若柴町・稲荷新田町・馴馬町・馴柴町・南中島町・別所町の一部からなる北竜台地区が326.6ha、貝原塚町・羽原町・八代町・長峰町の各一部からなる龍ヶ岡地区が344.9haである。

(2) 茨城県教育財団「屋代B遺跡Ⅲ」茨城県教育財団文化財調査報告第45集 昭和63年

(3) 茨城県教育財団「南三島遺跡3・4区(Ⅱ)」茨城県教育財団文化財調査報告 第49集 平成元年

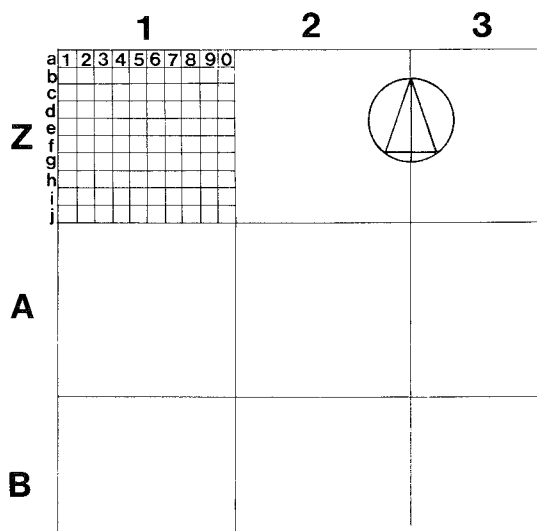


## 第2節 調査方法

### 1 地区設定

長峰遺跡の調査対象面積は、昭和61年度が16,808㎡、62年度は23,582㎡の予定であったが、5,083㎡が追加されて28,665㎡となり、遺跡全体では45,473㎡となった。調査区の地区設定は、昭和61年度当初に、62年度の調査エリアも含めて大調査区を設定した。しかし、昭和61年度の第1次調査を実施したところ、その北側にも遺構が延びていることが判明し、関係機関と協議をした結果、62年度にその遺構の延びるとされる面積を追加調査することにしたため、そこが当初設定した調査区の北側に出てしまった。そのため、その部分をZ区として大調査区を追加した。

地区設定は、日本平面直角座標第IX系、X軸（南北）-9,080m・Y軸（東西）+35,740mの交点を通る軸線を基準線とし、そこから北へ200m、西へ240m移動した軸線の交点を起点とし、西から東、北から南へと各々40mずつ平行移動して大調査区（大グリッド）を設定した。さらに、大調査区を西～東、北～南方向に各々10等分して、4m四方の小調査区（小グリッド）を設定した。すなわち、40m四方の大調査区内に4m四方の小調査区を100個設定した。大調査区は、北から南へ「A」・「B」…「H」、西から東へ「1」・「2」…「12」と大文字を付して、「A1」区・「B2」区のように呼称した。さらに、小調査区は、北から南へ小文字のアルファベットで「a」・「b」…「j」、西から東へ「1」・「2」…「0」と小文字を付した。各小調査区と大調査区を合わせて「A1a<sub>1</sub>」区・「B2b<sub>2</sub>」区のように表記し、呼称した。なお、追加された調査エリアでとび出た部分もこれらに従って「Z」区として追呼称した。（第1図）



第1図 調査区呼称方法概念図

### 2 遺構確認

昭和61年度の試掘は、調査エリア全域がカバー出来るように東～西、南～北へと幅2mのトレンチを入れる方法で実施した。トレンチは、大調査区に沿って40m毎に東～西に7本、南～北に5本

を設定して遺構・遺物の確認調査を行った。

試掘の結果、調査エリアの全域から住居跡・土坑・溝と思われる落ち込みの一部を確認し、それとともに少量の土器片を採集した。落ち込みの分布状況から、遺構の密集度合いは場所によって異なるが、遺構は調査エリア全域にわたって分布していることが判明した。その結果、調査エリアの全域について重機による表土除去を実施し、遺構の確認を行った。

昭和62年度の調査区は、4か所に分かれているため、調査の便宜上、昨年度と接している調査区を北からA地区（含むZ区）・B地区・C地区とし、二ノ谷の東側をD地区と呼称することにした(第2図)。D地区を除く3地区は、昨年度調査した住居跡や古墳が続いているため試掘を省略し、重機による表土除去を実施して遺構の確認を行った。

D地区は、昨年度の調査エリアから谷を挟んで東側の台地に所在し、比較的その面積が大きいため、昭和61年度と同様にトレンチを入れる方法で試掘を行った。その結果、このD地区にも遺構が全域にわたって分布していることが判明した。また、台地の西側の斜面部に幅広い落ち込みを確認したために、トレンチの本数を追加設定して試掘を実施した。その結果、堀と思われる幅広い落ち込みを確認したので、重機によって表土除去を実施し、その後遺構の確認を行った。なお、昭和61年度調査区を第1次調査区、昭和62年度調査区を第2次調査区と呼称した。

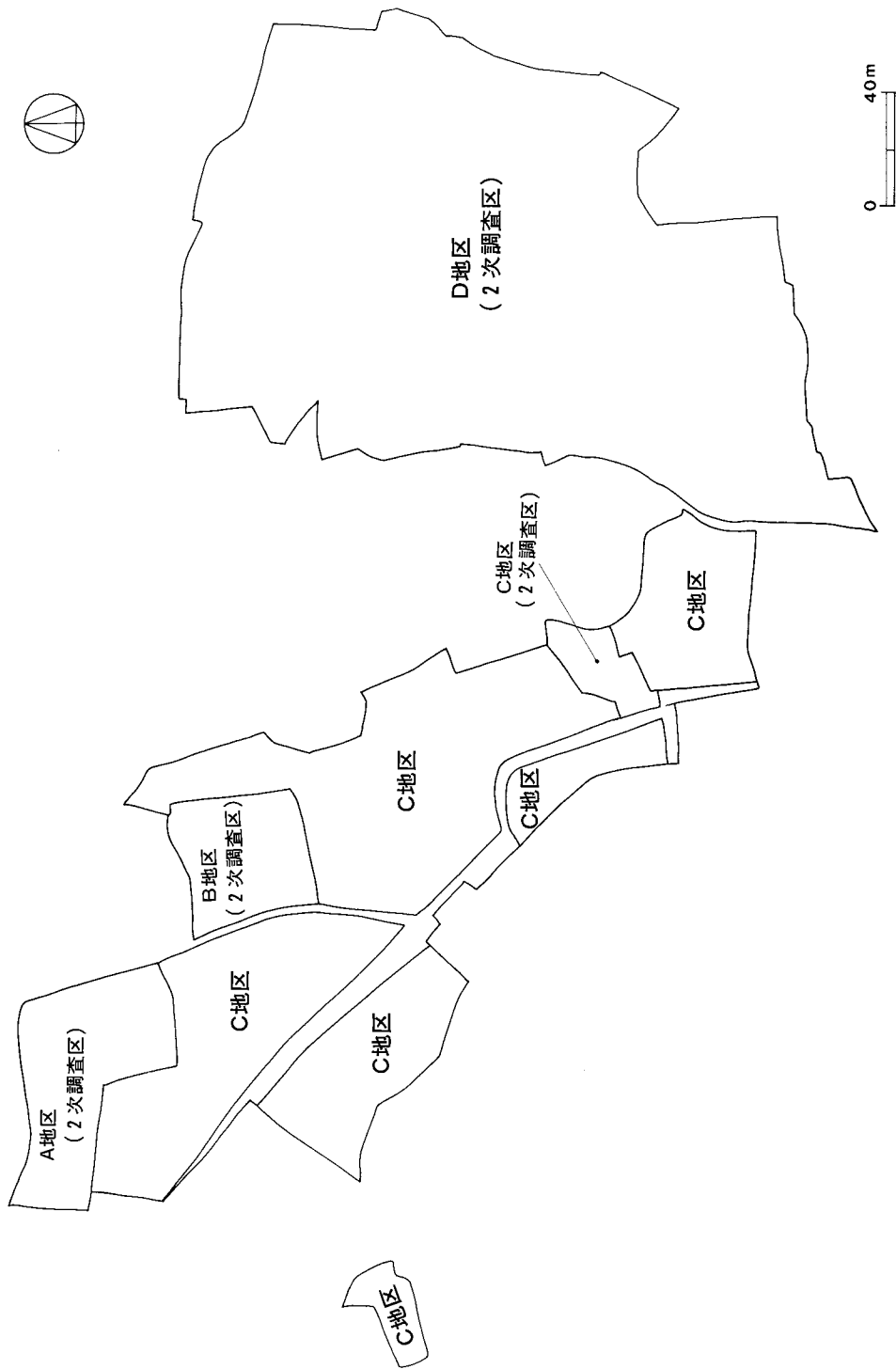
### 3 遺構調査

当遺跡における遺構の調査は、次の方法で行った。

住居跡の調査は、長軸方向とそれに直行する方向に土層観察用ベルトを設け、四分割して掘り込む「四分割法」で実施し、地区の名称は、北から時計回りに1～4区とした。土坑の調査は、長径方向で二分割して掘り込む「二分割法」で実施した。古墳の調査は、長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設け、四分割して掘り込む「四分割法」を原則にし、規模に応じて適宜数か所に土層観察用ベルトを設けて掘り込み調査した。なお、埋葬施設については、住居跡の調査法に準じた。溝・堀の調査は、規模に応じて、適宜数か所にそれらと直交する土層観察用ベルトを設定して調査を実施した。

土層観察は、色相・含有物・混入物の種類や量、及び粘性・縮まり具合等を観察して、土層分類の基準とした。色相の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社）を使用して行った。

遺構や遺物の平面実測は、水糸方眼地張り測量で行った。土層断面や遺構断面の実測は、遺跡内の水準点を基準として、レベルを用いて水糸を水平にセットした実測基準線を設定して行った。また、堀については航空写真測量を実施した。



第2図 調査区呼称図

遺物は、原位置を保ち、住居跡・土坑・古墳からの出土遺物については、各区名・遺物番号・出土位置・レベル等を遺物台帳や図面に記録して収納した。堀・溝の場合は、区名に代わってグリッド名を用い、他については住居跡・土坑・古墳と同様とした。

記録の過程は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土位置図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行うことを基本とした。図面や写真等に記録できない事項はその都度野帳等に記録し、これを記録調査カードや遺構カードに整理した。

### 第3節 調査経過

昭和61・62年度に実施した長峰遺跡の調査経過は、以下のとおりである。

昭和61年度

- 7 月 発掘調査の諸準備を整え、調査エリアの確認を行うとともに業者に依頼して雑木・篠等の伐開を行った。9日には、現地で関係者による鉄入れ式を挙行了。調査方法について担当者間で協議し、28日に発掘前の遺跡全景の写真を撮影し、29日からトレンチによる試掘を開始した。
- 8 月 試掘による遺構確認作業と並行し、18日から第1号古墳の調査を開始した。試掘の結果、調査エリア全域に住居跡・土坑・溝等の落ち込みを確認したので、遺構の分布状況や表土の厚さ等を検討して、25日から重機による表土の除去を開始した。表土除去作業と並行して遺構確認作業、また、順次第1～3号古墳の調査を開始した。
- 9 月 重機による表土除去作業が22日に終了し、続いて25日から26日にかけて大調査区内のグリッド杭打ちを行った。また、並行して進めて来た遺構確認作業が30日に終了し、当日、本年度調査を実施する遺構の確認状況の写真撮影を行った。
- 10 月 1日に調査担当者の一部異動が有り、業務の引継ぎと新担当者による調査方法等の打ち合せを行った。2日から古墳調査と並行して北側のA2・A3区から順次B3・B4・C4・C5区へと、南側に移動しながら住居跡・土坑・溝等の掘り込みを開始した。下旬には、第1・4・6～10・12号古墳、第1～10号住居跡等の調査を進めた。
- 11 月 前月に続いて古墳、住居跡等の調査を進めた。第12号古墳からは、多量の円筒埴輪片と、それに混じって人物埴輪の頭部も出土した。住居跡は、弥生時代の住居跡10軒を調査し、また、B6区から古墳時代の住居跡第11～14号の4軒も掘り込んだ。
- 12 月 引続いてC5・C6区からD5～D7区、E6・E7区へと調査の重点を移し、住居跡は、古墳時代のを14軒調査した。古墳は第16号古墳まで調査を進めた。その他、土坑、

溝の調査も進め、24日には、年末・年始の休暇に伴う安全対策等を実施して、26日から休暇に入った。

- 1 月 6日から調査を再開したが、積雪のために除雪作業を行い、本格的な調査は8日から、前月の調査の補足をするとともに、並行してE7・F7・F8区の住居跡5軒と不確定であった第26～28号住居跡と土坑、溝を掘り込んだ。またC1・D1区にまたがる飛地の第3号古墳について、雑木等の伐開、清掃、調査前の写真撮影、墳丘測量と精力的に調査を進めた。
- 2 月 前月に続いてE区・F区の住居跡、古墳、溝と飛地の第3号古墳の調査を進めた。並行して図面・写真等の点検をし、補足調査の準備をした。14日には、午後から現地説明会を実施した。
- 3 月 第3号古墳からは、円筒埴輪片が列状をなして出土した。初旬から本年度調査した遺構の補足調査をし、17日にはその調査を終了して、発掘後の遺跡全景写真撮影を行った。事務所では、諸帳簿の整理・点検をし、年度末の準備をした。さらに18日には、航空機で遺跡とその周囲の写真撮影を実施した。翌19日からは、発掘器材の点検と整備、倉庫内外の整頓、遺跡の保存と安全対策、諸帳簿や台帳等の作成をし、26日に本年度の調査を全て終了した。

#### 昭和62年度

- 4 月 定期の人事異動によって担当調査員の異動があり、業務の引継ぎをした。新担当者は、9日までに現地踏査・調査方法の打ち合せ等、発掘調査の諸準備を整えた。本年度の調査エリアは4地区に分かれているので、調査の便宜上昨年度に接しているエリアをそれぞれ北から南へA地区（含むZ地区）・B地区・C地区、谷を越えた東側台地をD地区と呼称することにした。13日からD地区へ入るため篠・雑木の伐開を開始し、仮の基本坑を打った。翌日から、一面篠と雑木、松に覆われているD地区の調査エリアを確認するため、東～西・南～北へと幅2mで伐開し、雑木等の運び出しと焼却を続けた。
- 5 月 前月に引き続いてD地区の伐開・運び出し・焼却を行い、7・8日には正確な基本杭打ちを実施し、調査区を設定した。12日から、東～西・南～北の大調査区のラインに沿ったトレンチを設定し、試掘を開始した。トレンチから、表土20～50cmを除去したところ、土師器片や埴輪片の遺物とともに住居跡・土坑・古墳の周溝と思われる落ち込みを多数確認した。また、試掘と並行して伐開・清掃を、業者の手によって16日からD地区、作業員の手によって25日からB地区、続いて29日からA地区においてそ

れぞれ実施した。

- 6 月 続いて5日からC地区の清掃を行った。初旬にA・B地区の発掘前の写真撮影を実施した。8日から両区の表土除去作業を重機によって実施し、9日からD地区の表土除去作業も開始した。12日にB地区の遺構確認を行い、15日から調査を開始した。17日にはA地区の遺構確認もした。
- 7 月 B地区の遺構調査を重点的に行い、中旬にはその掘り込みが殆ど終了したため、15日からA地区の掘り込みを開始した。また、C地区の第17号古墳とその他の古墳の墳丘測量を合わせて行った。さらに、D地区では、重機によって表土除去をし、その後方から遺構確認を続けた。22日には、表土除去が終了し、30日には遺構確認状況の写真撮影をした。
- 8 月 4日にはB地区の住居跡9軒、古墳、溝等の調査が終了し、発掘後の写真撮影をした。初旬に調査の重点をB地区からA地区に移したため、Z区・A区のあるA地区の住居跡9軒、古墳3基、溝1条等も調査が終了し、10日にはその発掘後の写真撮影を実施した。12日に調査担当で、主にD地区の調査計画について協議を行い、その結果C・D地区に確認した堀の調査については、堀の断面図作成のための掘り込みは人力で行い、その他の覆土の排土は重機によって実施し、全体の平面実測は、航空写真実測をとり入れることにした。また、D地区内のエリア南端部のF8～F11区、G8～G11区については崖崩れの危険があるため、渇水時にトレンチによる調査を行うことにした。その他のD地区は、北側のB9～B12区から南側のF9～F11区に向かって順に調査を進めることとし、5日から住居跡や土坑の掘り込みを開始した。
- 9 月 前月に続いてB9～B12区の住居跡を中心に調査を進めた。16日から堀の覆土除去を重機によって始めた。月末には、第46～73号住居跡まで調査が進み、弥生時代のもの17軒、古墳時代のもの11軒を調査した。なお、30日には第23号古墳の周溝も掘り始めた。
- 10 月 前月に続いてC9～C12区の住居跡、古墳、土坑の調査を進めた。住居跡は第95号まで、古墳は第24・25号古墳まで、土坑は第119号まで掘り込んだ。住居跡は、弥生時代のものが9軒で、他の13軒は古墳時代のものである。古墳からの出土遺物はない。第25号古墳には、埋葬施設が検出された。15日には重機による堀の覆土除去が終了した。
- 11 月 前月に続いてD9～D12区の調査を進めた。住居跡は第116号まで、古墳は第30号古墳とE12区の第31号古墳、土坑は第165号まで掘り込んだ。第29号古墳からは埋葬施設が検出された。28日からC地区の第17号古墳の調査を並行して開始した。
- 12 月 前月に続いて、E10～E12区の調査を進めた。住居跡は第124号まで、古墳は第33号古

墳，土坑はF10区にかかるものも含めて第185号まで掘り込んだ。D区・E区の住居跡は，弥生時代のものが9軒，その他の19軒は古墳時代もしくは時期不明のものである。土坑は，粘土を貼りつめたものが検出された。古墳は，第33号古墳の周溝から多量の円筒埴輪片が出土した。なお，17日には，航空機で堀の写真測量を行った。25日には，年末・年始の休暇中における安全対策等をして28日から休暇に入った。

- 1 月 1日付で調査担当者の一部異動が有り，担当調査員による今後の調査方法等の協議を行い，6日から調査を再開した。主としてE10・E11区，F10・G8・G9区古墳と第17号古墳を中心に調査を進めた。中旬には，古墳と並行して進めていたD区・E区住居跡・土坑等の調査は殆ど終了し，図面・写真等の点検を行って，下旬から補足調査に入った。
- 2 月 前月に続いて第17・33・35・38号古墳の調査を進めた。第17・37・38号古墳は封土が土饅頭状に保存されていたが，第37・38号古墳は古墳ではなく塚の様相を示し，また，どちらの遺構にも周溝は認められず，いずれの遺構からも埋葬施設は検出できなかった。中旬には天候も定まったので，D地区の南端部で危険と思われる範囲をトレンチ方式で総力を傾けて調査を開始した。その結果，G8区・G9区に堀が，G10区・G11区に谷が認められただけで，遺物の出土もなく，18日に終了した。また住居跡等の補足調査も並行して進めてきた結果，それも24日に終了した。なお，18日から調査後の全景写真撮影の準備を始め，26日までにそのための遺構清掃が終了した。27日には現地説明会を実施した。事務所では，諸帳簿の整理点検をして年度末の準備にとりかかった。
- 3 月 3日に発掘後の遺跡全景とその周辺を含めた航空写真撮影を行った。7日からトレンチの埋め戻しを始め，14日に終了した。補足調査も11日に全て終了して，当日，作業員の一次解雇をした。14日から危険か所の安全対策を実施し，15日から現場倉庫等撤収のための諸準備をした。17日に協力員報告会を行い，作業員の全員解雇をし，下旬には発掘調査の全てを終了した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

長峰遺跡は、茨城県竜ヶ崎市長峰町字宿654番地ほかに所在する。

竜ヶ崎市は茨城県の南部に位置し、東は稲敷郡江戸崎町・同郡新利根村、南は同郡河内村・北相馬郡利根町、西は取手市・北相馬郡藤代町・筑波郡伊奈町、そして北は稲敷郡莖崎町・牛久市に接している。市域は東西約12km、南北約9kmで、面積は約75km<sup>2</sup>である。人口は55,135人（平成元年11月1日現在）を数える。市街地は、古鬼怒川、小貝川によって形成された沖積平野に営まれており、JR常磐線佐貫駅から東へ延びる関東鉄道竜ヶ崎線の終点である竜ヶ崎駅付近から、東方へ約2kmにわたって細長く広がっている。近年、市街地付近の水田を埋め立て、また道路建設を進めており、市街地は徐々に広まりつつある。

竜ヶ崎市は、周辺の取手市・牛久市・藤代町等とともに東京への通勤圏内にあり、朝晩の通勤通学時間における常磐線上り電車は、東京方面へ出かける多くの人達の利用で非常に混雑している。また、かつては土浦市の商業圏に含まれていたが、千葉県の常磐線沿いの諸都市の商業圏の拡大に伴い、千葉県側との結び付きを強めつつあると同時に、東京への結びつきも強まりつつある。

竜ヶ崎市付近は北方の筑波台地から延びる稲敷台地の南縁にあり、北部台地には至るところに浸食谷が刻まれて複雑な地形を呈している。市域は、市街地の東から西北西にかけての南部低地と、北部市街地の東北東から北西にかけての北部台地とに大別できる。前者は、古鬼怒川と小貝川によって形成された標高3～6mの沖積平野であり、水田に利用されている。後者は、前述した標高20～27mの稲敷台地の南縁にあり、平地林・畑に利用されている。両者の境界は、標高15～20mの急崖となっている。地質は海成の成田層、河成の成田砂礫層を基盤とし、その上に厚さ1mほどの常総粘土層が重なり、さらに、その上に2～3mほどの関東ローム層が堆積している。

長峰遺跡は、竜ヶ崎市街地から北東に約4kmほどの台地上に位置する。古墳を除いた遺跡内の標高は27m前後で、ほぼ平坦である。この台地の北側は、長峰町と半田町の間で開口している浸食谷が、台地間を北西の貝原塚町方面へ延びて急崖を成し、南側にも谷津が入りこみ長峰町と八代町の間で開口し、樹枝状に台地を侵食しながら比較的ゆるやかな斜面を形成し貝原塚方面へ延びている。遺跡は、これらの両谷に挟まれ、長峰町と貝原塚町の間を東へ細長く延びている台地の東端長峰町寄りにある。南側は、眼下に広大な水田が広がり、遠くには小貝川・利根川、千葉県をはるかに望むことができる。

現在の長峰町の集落は、遺跡のある台地の南側裾部から東方へ、県道竜ヶ崎・潮来線に沿って細長く形成されている。





第3図 長峰遺跡周辺地形図

## 第2節 歴史的環境

稲敷台地には、明治16年飯島魁・佐々木忠次郎両博士や、八木契三郎博士により検証された<sup>おか</sup>陸平貝塚<sup>(1)</sup>（美浦村）を筆頭に、明治37年、大野延太郎博士により調査された<sup>あたごやま</sup>愛宕山古墳<sup>(2)</sup>（竜ヶ崎市）や、大正14年、清野謙次博士によってその大要が紹介された<sup>ところまく</sup>所作貝塚<sup>(3)</sup>（桜川村）など、周知されている著名な遺跡が数多く所在し、早くから考古学的に注目されてきた地域である。これらの遺跡が所在する台地は先に述べた通りであるが、特に霞ヶ浦から竜ヶ崎方面に通じるところの、いわゆる<sup>えのうら</sup>覆浦水系付近に多くの遺跡が認められ、自然の地の利を得て人々の生活が古くから営まれてきた地域である。

竜ヶ崎市を含めた稲敷郡の原始・古代遺跡を昭和62年発行の『茨城県遺跡地図』<sup>(4)</sup>に求めると、縄文時代160遺跡、弥生時代21遺跡、古墳時代194遺跡を数えることができる。その中には、昭和57年2月に国指定史跡となった縄文時代後・晩期<sup>ひろはた</sup>の広畑貝塚（桜川村）を始めとし、縄文時代前期の興津貝塚（美浦村）、中～晩期<sup>こやまだい</sup>の小山台遺跡（茎崎町）、後・晩期<sup>しいづか</sup>の椎塚貝塚（江戸崎町）、晩期の<sup>ほうどう</sup>法堂遺跡（美浦村）、弥生時代の<sup>とのうち</sup>殿内遺跡、古墳時代前期の<sup>ほら</sup>原古墳群、<sup>おじまさいし</sup>尾島祭祀遺跡（桜川村）、後期の<sup>きはらだい</sup>木原台古墳（美浦村）などが特に知られている。

また、竜ヶ崎ニュータウン建設に伴い、当教育財団が実施した発掘調査によって竜ヶ崎地方の時代的変遷を追うことが可能となった。

調査した中で最も古い遺跡としては、北竜台地区中央部北側の<sup>おきもち</sup>沖餅遺跡<sup>(5)</sup>があり、先土器時代終末期に属する舟底形石器が削器などとともに出土している。さらに沖餅遺跡と同一台地上の<sup>まつぼ</sup>松葉遺跡<sup>(6)</sup>や<sup>あかまつ</sup>赤松遺跡<sup>(7)</sup>からも先土器時代の遺物とみられる石器が出土している。

縄文時代に入ると、北竜台の別所集落の西方にある<sup>めぐり</sup>廻り地B遺跡<sup>(8)</sup>からは、早・前期の住居跡、炉穴や礫群が検出され、土器片や石器類が出土している。前期では龍ヶ岡の貝原塚集落北方の<sup>まち</sup>町田遺跡<sup>(9)</sup>の集落跡が上げられ、前・中期の遺跡としては、前述の赤松遺跡があり、ほぼ環状に分布する住居跡群と袋状土坑群が検出されている。中期になると、別所集落の西側谷津を隔てた舌状台地上に所在する小集落を検出した<sup>うちこし</sup>打越A遺跡<sup>(8)</sup>・<sup>うちこし</sup>打越C遺跡<sup>(8)</sup>、<sup>みなみしま</sup>地点貝塚を伴う南三島遺跡<sup>(10)</sup>2区がある。また、北竜台の駒馬集落の北西台地上にある<sup>めぐり</sup>廻り地A遺跡<sup>(11)</sup>は中期末から後期前半の時期にかけての大集落で、地点貝塚や多くの土坑群を伴っている。さらに、北竜台の南東端部に位置する<sup>なかねだい</sup>仲根台B遺跡<sup>(9)</sup>からも後期前半の遺構・遺物が検出されている。しかし、現在のところ竜ヶ崎市内では、晩期の遺構を伴う遺跡は調査されていない。

弥生時代では、龍ヶ岡の南部、幅400～500mの広い屋代台地上に、<sup>そとやしろ</sup>外八代遺跡<sup>(12)</sup>・<sup>やしろ</sup>屋代A遺跡<sup>(13)</sup>や当遺跡が所在し、弥生時代後期の遺構・遺物が検出されている。

古墳時代になると、北竜台のほぼ中央に位置する<sup>おおばやず</sup>大羽谷津遺跡<sup>(8)</sup>があり、古墳時代前期の遺構を

検出している。駒馬台地の西方の小舌状台地の縁辺近くには成沢遺跡<sup>(13)</sup>があり、低湿地に面して集落が形成されていた。また、前述の松葉遺跡<sup>(6)</sup>・沖餅遺跡<sup>(5)</sup>も古墳時代前期の集落跡である。中期の遺跡としては、駒馬台地のほぼ中央部に平台遺跡<sup>(14)</sup>がある。その他、屋代A遺跡<sup>(13)</sup>では古墳時代全時期を通じた住居跡と歴史時代（国分期）の住居跡が検出され、外八代遺跡<sup>(12)</sup>では古墳時代前・後期と歴史時代（国分期）の住居跡が検出されている。なお、今回調査した長峰遺跡も前期から中期にかけての集落跡である。古墳は、調査されたが古墳と認められなかった稲荷塚古墳<sup>(いなりづか)</sup>、35基の古墳が検出された当長峰古墳群と、未調査である稲荷古墳<sup>(いなり)</sup>、愛宕山古墳<sup>(あたごやま)</sup>、奈戸岡古墳群<sup>(なとおか)</sup>などが知られている。

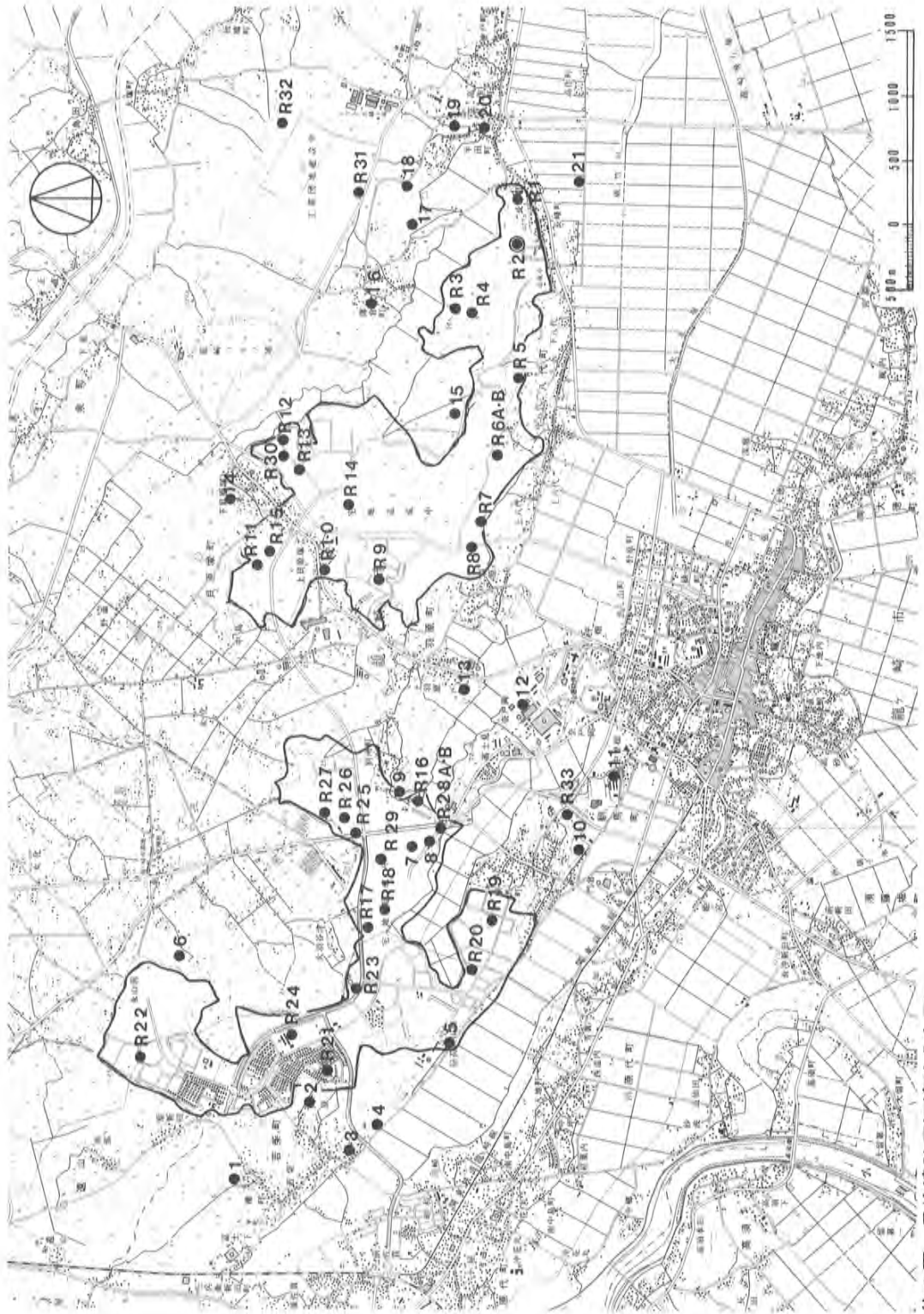
中世には、貝原塚集落の南方に前清水遺跡<sup>(8)</sup>があり、地下式坑を含む土坑群が検出されている。また、広大な堀跡等が調査された屋代B遺跡<sup>(15)</sup>、堀の一部が調査された当長峰遺跡や外八代遺跡などがある。また、その他周辺には駒馬城跡<sup>(26)</sup>、貝原塚城跡<sup>(27)</sup>などが見られる。

竜ヶ崎市の北部台地には、このように多くの遺跡が存在し、原始・古代・中世にかけて、人々の生活が営まれていたことが窺えるのである。

#### 注・参考文献

- (1) I・IJIMA, AND C・SASAKI, 「OKADAIRA SHELL MOUNDS AT HITACHI」 『TOKYO DAIGAKU, SCIENCE DEPARTMENT』 MEMOIR VOL 1) TOKYO DAIGAKU 明治16年
- (2) 大野延太郎「常陸国龍ヶ崎発見の埴輪土偶に就て」(『東京人類学雑誌』20-299) 東京大学人類学教室 明治38年
- (3) 清野謙次「日本原人の研究」岡書院 大正14年
- (4) 「茨城県遺跡地図」 茨城県教育委員会 1987年
- (5) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3 「沖餅遺跡」 茨城県教育財団 昭和55年
- (6) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書1 「松葉遺跡」 茨城県教育財団 昭和54年
- (7) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書4 「赤松遺跡」 茨城県教育財団 昭和55年
- (8) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5 「前清水遺跡・打越A遺跡・仲根台塚・大羽谷津遺跡・打越C遺跡・廻り地B遺跡」 茨城県教育財団 昭和56年
- (9) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書9 「町田遺跡・仲根台B遺跡」 茨城県教育財団 昭和59年
- (10) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10 「南三島遺跡1・2区」 茨城県教育財団 昭和59年
- (11) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7 「廻り地A遺跡」 茨城県教育財団 昭和57年
- (12) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書2 「外八代遺跡」 茨城県教育財団 昭和55年

- (13) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 6 「成沢遺跡・屋代A遺跡」 茨城県教育財団 昭和57年
- (14) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 8 「平台遺跡」 茨城県教育財団 昭和58年
- (15) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17 「屋代B遺跡Ⅲ」 茨城県教育財団 昭和63年
- (16) 県指定史跡，竜ヶ崎市馴馬町字下宿所在。春日顯国の立籠った城。興国5年（1334）落城。
- (17) 竜ヶ崎市貝原塚町字城山所在。



第4図 長峰遺跡周辺遺跡分布図

表 1 長峰遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				番号	遺跡名	種類	遺跡の時代										
			先土器	縄文	弥生	古墳				先土器	縄文	弥生	古墳	その他						
														○	●					
R 1	長峰城跡	城館跡					仲根台塚群	塚群(3・4号)												
R 2	長峰遺跡	集落跡・古墳群・城館跡			●	●	仲根台B遺跡	集落跡					●							
R 3	十三塚塚群	塚群				●	廻り地B遺跡	集落跡												
R 4	尾坪台遺跡	集落跡			●	●	白蔵寺遺跡	包蔵地												
R 5	外八代遺跡	集落跡・城館跡			●	●	簿倉古墳	塚												
R 6-A	屋代A遺跡	城館跡・集落跡			●	●	稲荷峰古墳	塚												
R 6-B	屋代B遺跡	城館跡・集落跡			●	●	山王台遺跡	集落跡												●
R 7	稲荷塚古墳群	古墳群				○	金塚遺跡	集落跡					○							○
R 8	南三島遺跡	集落跡			●	●	林遺跡	集落跡												○
R 9	ダシゴ塚	塚				○	若柴城跡	城館跡												○
R 10	町田塚群	塚群				●	宿畑遺跡	集落跡												○
R 11	かがみ塚	塚				○	稲荷古墳	古墳												○
R 12	高井城下城跡	城館跡・寺院跡				○	永山前遺跡	集落跡												○
R 13	前清水遺跡	集落跡・貝塚・塚群				●	仲根台遺跡	集落跡・古墳												○
R 14	塚下遺跡	塚群・他				●	奈戸岡古墳群	古墳群												○
R 15	町田遺跡	集落跡				●	堂ノ下貝塚	貝塚群												○
R 16	行部内遺跡	集落跡・貝塚				○	馴馬城跡	城館跡												○
R 17	大羽谷津遺跡	集落跡					愛宕山古墳	古墳												○
R 18	廻り地A遺跡	集落跡				●	奈戸岡祭祀遺跡	祭祀跡												○
R 19	平台遺跡	集落跡				●	西花輪貝塚群	貝塚群												○
R 20	成沢遺跡	集落跡				●	貝原塚城跡	城館跡												○
R 21	松栗遺跡	集落跡・塚群				●	向井原遺跡群	集落跡												○
R 22	庚申塚遺跡	集落跡				○	西平遺跡	集落跡												○
R 23	沖餅遺跡	集落跡				●	馬込稻荷遺跡	集落跡												○
R 24	赤松遺跡	集落跡				●	要害山館跡	城館跡												○
R 25	打越A遺跡	集落跡				●	半田遺跡	集落跡												○
R 26	打越C遺跡	集落跡				●	登城山館跡	城館跡												○
R 27	ウツブタ遺跡	集落跡				●	向須賀遺跡	包蔵地												○
R 28	仲根台塚群	塚群(1・2号)				●														

●は発掘調査を実施した遺跡等である。

# 第3章 遺構と遺物

## 第1節 遺跡の概要と記載方法

### 1 遺跡の概要

昭和45年、茨城県教育委員会が実施した分布調査によれば、当遺跡は長峰古墳群、当遺跡の南東に隣接する台地を長峰城跡とする周知の遺跡である。この長峰古墳群を再踏査した県教育委員会は、古墳やその周辺から採集される土器片等を検討した結果、古墳だけでなく、その他の遺構が存在することを確認し、長峰遺跡と呼称して調査することになった。長峰遺跡は、前述の通り昭和61年度から62年度にかけて発掘調査を実施し、調査面積は45,473㎡である。

調査の結果、当遺跡からは、弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡（竪穴遺構を含む）124軒、古墳35基、土坑178基、溝28条、掘立柱建物跡1棟、中世の長峰城跡の一部と考えられる堀7条、塚2基等が検出された。出土遺物は、弥生時代の壺・甕・器台の土器片、古墳時代の甕形・高環形・坑形土器片、埴輪片、その他に紡錘車、土玉や管玉・勾玉・内耳土器片等が収納箱（60×40×20cm）に約180箱出土した。その後、出土遺物を整理し、遺構の状況を再検討した結果、遺構でない判断したものを欠番として除外した。

その結果、当遺跡における最終的な遺構数は以下のとおりである。

#### 住居跡と竪穴遺構

弥生時代	51軒
古墳時代	68軒（前期……52軒，中期16軒）
時期不明	5軒
掘立柱建物跡	1棟
土坑	178基（粘土貼り土坑・壁溝を有する土坑・地下式坑を含む）
古墳	35基（円墳29基・方墳2基・前方後円墳4基）
塚	2基
堀	7条
木橋（土橋）跡	1か所
溝	28条






## 2 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、以下のとおりである。

### (1) 使用記号

遺構	名称	住居跡	竪穴遺構	土坑・地下式坑	堀・溝	塚	堀立柱建物跡	古墳
	記号	SI	ST	SK	SD	SA	SB	TM

### (2) 遺構・遺物の実測図中の表示

 = 焼土   
  = 炉   
  = 粘土   
  = 炭化粒子   
  = 釉・赤彩  
 ● 土器    □ 石器・石製品    ★ 土製品    △ 鉄製品

### (3) 遺構番号

遺構番号については、調査の過程において遺構の種別毎・調査順に付したが、整理の段階で遺構でないと判断したものは欠番とした。

### (4) 土層の分類

各遺構内の堆積土については、調査時に観察記録した結果に基づき、色調と含有物を下記のように整理して記号化した。色調と含有物の量については、『新版標準土色帖』（小山忠正・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社）を使用し、Hue7.5YRを基準とした。

なお、含有物の量については、少量（面積の10%未満）検出されたものを基準とし、中量（10%以上30%未満）検出されたものには「'」, 多量（30%以上）検出されたものについては「”」をアルファベットの右上に付加して表示した。（例……a'・a”）。

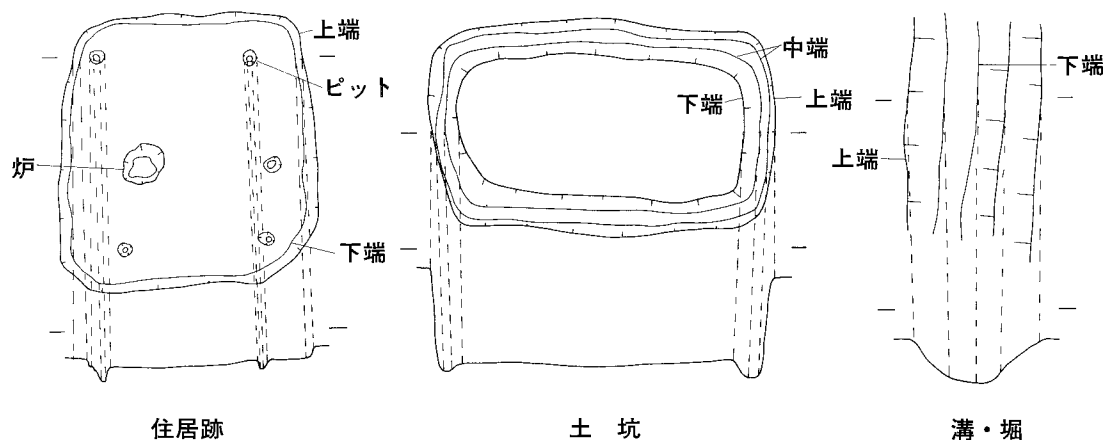
番号	土色名	色相	明度/彩度	記号	含有物
1	極暗赤褐色	2.5YR	$\frac{2}{2}$ $\frac{2}{3}$ $\frac{2}{4}$	a	ローム, ローム粒子
2	暗褐色	2.5YR	$\frac{3}{2}$ $\frac{3}{3}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{6}$	b	ロームブロック
3	赤褐色	2.5YR	$\frac{4}{6}$ $\frac{4}{8}$	c	焼土粒子
4	極暗赤褐色	5 YR	$\frac{2}{3}$ $\frac{2}{4}$	d	焼土ブロック
5	黒褐色	5 YR	$\frac{1}{2}$ $\frac{2}{2}$ $\frac{1}{3}$	e	炭化粒子
6	極暗褐色	5 YR	$\frac{2}{3}$ $\frac{2}{4}$	f	粘土ブロック
7	暗赤褐色	5 YR	$\frac{3}{2}$ $\frac{3}{3}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{6}$	g	ローム粒子・焼土粒子
8	赤褐色	5 YR	$\frac{4}{6}$ $\frac{4}{8}$	h	ローム粒子・炭化粒子
9	にぶい赤褐色	5 YR	$\frac{4}{3}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{5}{3}$ $\frac{5}{4}$	i	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子
10	黒色	7.5YR	$\frac{2}{1}$	j	黒色土・黒色土粒子・褐色土
11	黒褐色	7.5YR	$\frac{3}{1}$ $\frac{2}{2}$ $\frac{3}{2}$	l	黒色土ブロック
12	極暗褐色	7.5YR	$\frac{2}{3}$	m	炭化物・炭化材
13	暗褐色	7.5YR	$\frac{3}{3}$ $\frac{3}{4}$	n	木炭・灰
14	褐色	7.5YR	$\frac{4}{3}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{4}{6}$	o	砂・砂質土・砂粒
15	灰褐色	7.5YR	$\frac{4}{2}$ $\frac{5}{2}$ $\frac{6}{2}$	p	白色粘土・白色粘土粒子
16	にぶい褐色	7.5YR	$\frac{5}{3}$ $\frac{5}{3}$ $\frac{5}{4}$	q	礫



17	明	褐	色	7.5YR	$\frac{5}{6}$	$\frac{5}{8}$	r	腐植土		
18	黒	褐	色	10 YR	$\frac{3}{1}$	$\frac{2}{2}$	$\frac{3}{2}$	$\frac{2}{3}$	K	攪乱
19	暗	褐	色	10 YR	$\frac{3}{3}$	$\frac{3}{4}$	H	地山・耕作土		

#### (5) 遺構実測図の作成方法と掲載方法

- 各遺構の実測図は、縮尺20分の1の原図を浄書して版組し、縮尺3分の1で掲載することを基本とした。
- 溝・堀・古墳等については、その規模に応じて縮尺20分の1の原図を2分の1、4分の1、8分の1に縮小したものを浄書して版組し、それをさらに3分の1に縮小して掲載した。

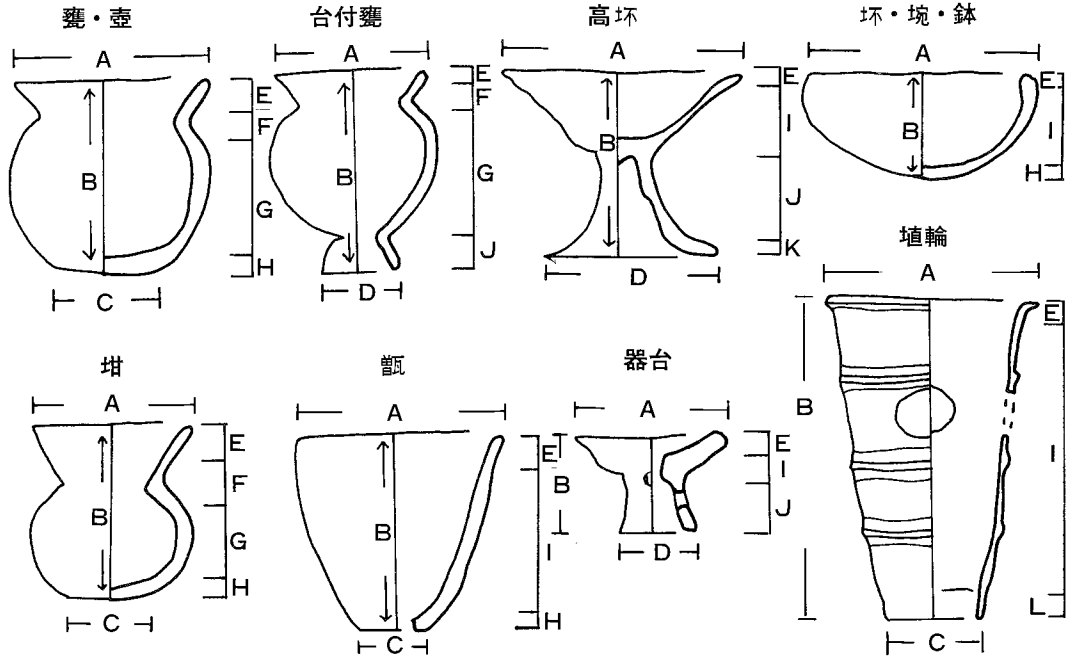


- 実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。また、同一図中で同一標高の場合に限り一つの記載で表し、標高が異なる場合は各々表示した。
- 遺構からの出土遺物は、(2)で示した記号を用い、出土位置を遺構平面図及び断面図中にドットで表示した。また、接合できた土器片は実線で結んだ。なお、出土遺物に付した数字は遺物実測図及び拓影図の番号と一致する。

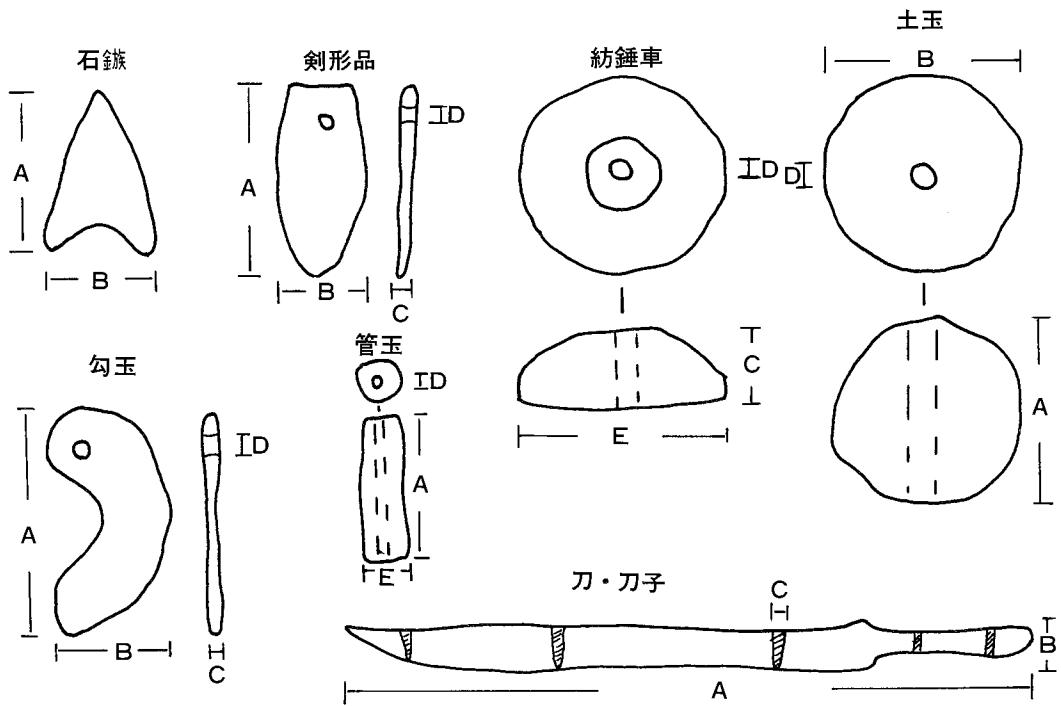
#### (6) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

- 土器の実測は、原則として中心線の左側に外面、右側に内面と断面を図示した。
- 土器拓影図は、右側に断面を図示した。表裏双方の拓影図を掲載する場合には、断面を中央に配し、左側を外面、右側を内面とした。
- 遺物は、原則として実測図を浄書したものを3分の1に縮小して掲載した。しかし、種類や大きさにより異なる場合もある。

各部位の名称と法量表現方法



A-口径 B-器高 C-底径 D-裾部径 E-口縁部 F-頸部  
 G-胴部 H-底部 I-体部 J-脚部 K-裾部 L-基部



A-長さ B-幅 C-厚み D-孔径 E-径

(7) 表の見方

住居跡一覧表

住居跡番号	位置	長(主)軸方向	平面形	規模		床面	ピット数	炉	貯蔵穴	床面積(m <sup>2</sup> )	出土遺物	備考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)							

- 住居跡番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま付した。整理の過程で、住居跡と判断しにくいものについては竪穴遺構として新しい番号を付した。
- 位置は、小調査区(小グリッド)名で表示した。他の調査区にまたがる場合は、遺構の占める面積の割合が最も大きい小調査区名をもって表示した。
- 方向は、長(主)軸が座標北から見てどの方向にどれだけ傾いているかを、角度で表示した。(例N-10°-E, N-10°-W)。なお、( )を付したものは推定である。
- 平面形は、現存している形状の上端面で判断し、方形・長方形・円形・楕円形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。
  - ・方形・円形……長軸(辺・径):短軸(辺・径)=1.1未満:1
  - ・長方形・楕円形……長軸(辺・径):短軸(辺・径)=1.1以上:1
- 規模の欄の長軸・短軸は、平面形の上端面の計測値であり、壁高は残存壁高の計測値である。
- 床面は凹凸・平坦・皿状等の様子を示し、締まり等は解説の項で述べた。
- ピット数は、住居跡に伴うものと考えられる総数を表示した。( )を付したものは推定を表す。
- 炉は、全ての住居跡が地床炉であるのでその数を記し、炉をもたない場合は空欄とした。
- 貯蔵穴は、有る場合はその数を記し、無いものは空欄とした。
- 出土遺物は、遺物の種類とその出土点数を記した。
- 備考は、重複関係や特徴等を記した。

円墳・方墳一覧表

古墳番号	位置	墳形	墳丘規模(m)		埋葬施設			周溝		遺物	備考
			長径(辺)×短径(辺)	主体部	主軸方向	遺物	平面形	断面形			

前方後円墳一覧表

古墳番号	位置	主軸方向	主軸長(m)=前方部長(m)+後円部長(m)	前方部長(m)		後円部幅(m)	埋蔵施設	遺物・その他
				最大長	くびれ部幅			

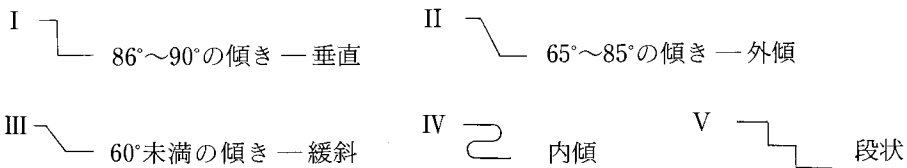
- 古墳番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま付した。整理の過程で、古墳でないとして判断したものは一覧表には記載せず、解説の項で記述した。
- 位置は、遺構の占める大調査区(大グリッド)名で表示した。
- 主軸方向は、前方後円墳についてだけ表示した。

- 規模は、円墳・方墳の表では長径（辺）と短径（辺）を、前方後円墳の表では主軸長の内訳と前方部長と後円部長の比率、前方部・後円部の幅をメートル（m）単位で表示した。
- 埋葬施設の項は、主体部の主軸方向とその遺物について記した。
- 周溝の平面形は、全周しているものは円（方）形、ブリッジをもつものと未調査部分があるものについては円（方）形状とした。断面形については壁面の傾斜を主とし、より特徴的な断面形をもつものはそのまま表示した。
- 遺物については、墳丘と周溝からの主な出土品の種類を記した。
- 備考は、ブリッジの方向等を記した。

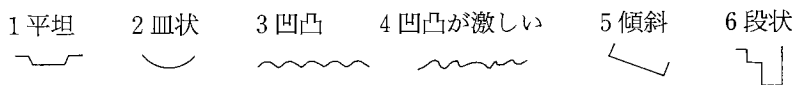
### 土坑一覧表

土坑番号	位置	長軸方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	出 土 遺 物
				長軸(m)×短軸(m)	深さ(cm)			

- 土坑番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また、整理の過程で遺構でないと判断したものは、備考にその理由を記した。
- 平面形は、下記の分類基準を設けて表示した。
  - 方形・円形……長軸（辺・径）：短軸（辺・径）=1.2未満：1
  - 長方形・楕円形……長軸（辺・径）：短軸（辺・径）=1.2以上：1
- 規模の欄の深さは、確認面から坑底の最も深い部分までの計測値である。
- 壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を下記の基準を設け、記号で表示した。



- 底面は、下記の基準を設け、番号で表示した。



### 溝 一 覧 表

溝番号	位置	主軸方向	断面	規 模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)					

- 溝番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま付し、整理の過程で堀に変更したものは備考の欄へその旨を記した。
- 位置は、遺構の占める大調査区（大グリッド）名で表示した。
- 長軸方向は、直線部の長い部分が座標北からみてどの方向にどれだけ傾いているかを、住居

跡一覧表の項に順じて表示した。

○断面形は、主としてどのような形をしているかを表示した。

○規模は、全長をメートル (m) 単位で、その他はセンチメートル (cm) 単位で最小～最大を表示した。(例・上端 (cm), 61～86)

○壁面・底面・覆土・出土遺物については、住居跡一覧表・土坑一覧表の項に順じた。

○備考欄は、溝の性格と整理の過程で何に変更したか等を記した。

#### 土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考

○図版番号は、実測図中の番号である。

○法量は、A－口径，B－器高，C－底径，D－裾部径を示し，現存値は( )，復元推定値は「 」を付して示した。

○備考の欄は，土器の残存率等を表示した。

#### 石器・石製品一覧表

図版番号	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石質	出土地点	台帳番号	備考
		最大長	最大幅	最大厚					

#### 土製品一覧表

図版番号	器種	法量 (cm)		孔径 (cm)	重量 (g)	出土地点	台帳番号	備考
		最大長	最大幅					

#### 金属製品一覧表

図版番号	器種	材質	法量 (cm)			重量 (g)	出土地点	台帳番号	備考
			最大長	最大幅	最大厚				

#### 古銭一覧表

図版番号	名称	素材	初鑄年	西暦	鑄造地	出土地点	台帳番号	備考

○図版番号は，実測図中の番号である。

○法量は，「(6)遺物実測図の作成法量と記載方法」の項で示したものに従った。その際，欠損品の現存値は( )を付して示した。

○備考は，遺物の特記すべき内容について記載した。



第5図 長峰遺跡遺構配置図

## 第2節 住居跡と出土遺物

### 1 弥生時代

#### 第1号住居跡（第6図）

本跡は、1次調査区のA2c<sub>7</sub>区を中心に確認され、第2号住居跡の北西側8m程に位置している。本跡の東側の一部は第4号古墳の周溝と重複している。

平面形は、推定長軸9.30m・短軸7.78mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-52°-Wを指している。壁は古墳の周溝に切られている部分を除けば、床面から内彎気味にゆるやかに立ち上がっている。壁の残存高は10~19cmである。床面はロームで、攪乱を受けている部分を除けば全体的に平坦で硬い。特に炉の北側がよく踏み締められている。ピットは4か所で、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>のいずれも支柱穴である。規模は、長径70~76cm・短径50~60cm、深さはそれぞれ83・86・90・103cmである。炉は床面の中央からやや北西側に位置し、平面形は径52×50cmのほぼ円形で、床面を凹めずを使用した地床炉である。炉内には少量のローム粒子と焼土ブロックを含む暗赤褐色土が堆積している。炉の東側半分程は攪乱を受けている。残った炉床は強い火熱を受けたらしく、床面からやや凹み、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約60m<sup>2</sup>である。

覆土は、一部に攪乱が見られるものの上層に少量のローム粒子とローム小ブロックを含んだ褐色土、下層に多量のローム粒子とローム小ブロックを含んだ暗褐色土が自然堆積をしている。

遺物は、主にP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>の北側の床面と床面直上から弥生式土器片30点、第7図10の紡錘車1点、11~13の砥石、このほかに覆土中から、1の甕の胴下半部片や2の壺の底部を含む弥生式土器片約260点、陶器1点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

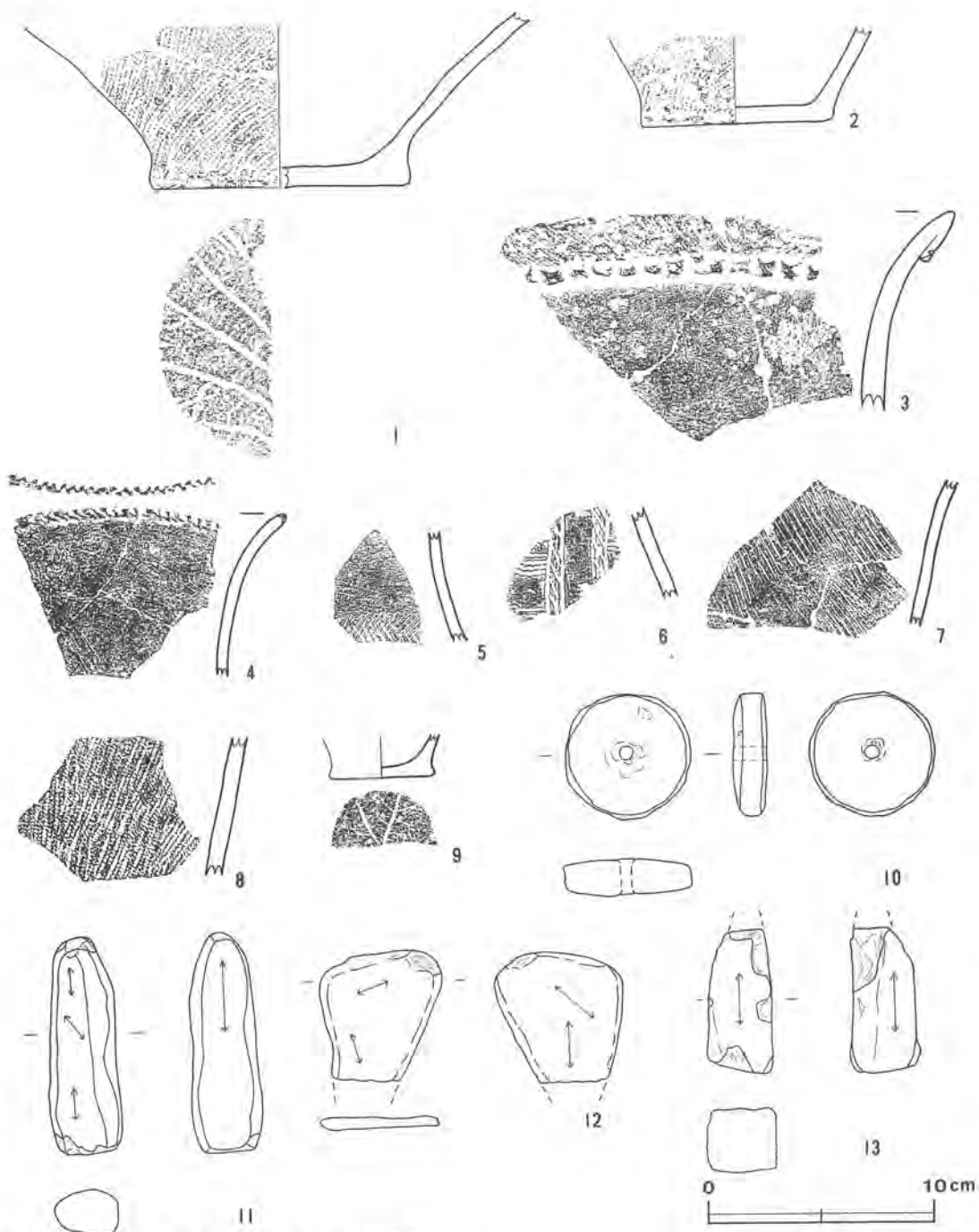
第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	甕 弥生式土器	B (7.3) C「11.2」	底部は平底で大きく、鮮明な木葉痕がある。胴部は底部から器厚をほぼ一定に保って直線的に外傾して立ち上がっている。外面は全体に付加条の縄文が施されている。	胴部内面はナデ整形。	砂粒 褐色 普通	5% P1
2	壺 弥生式土器	B (4.0) C 8.5	底部は平底である。胴部は底部から器厚をほぼ一定に保って直線的に外傾して立ち上がる。外面は全体に付加条の縄文が施されている。	胴部内面はナデ整形。	砂粒・石英 明褐色 普通	10% P2



第 6 图 第 1 号住居跡実測図





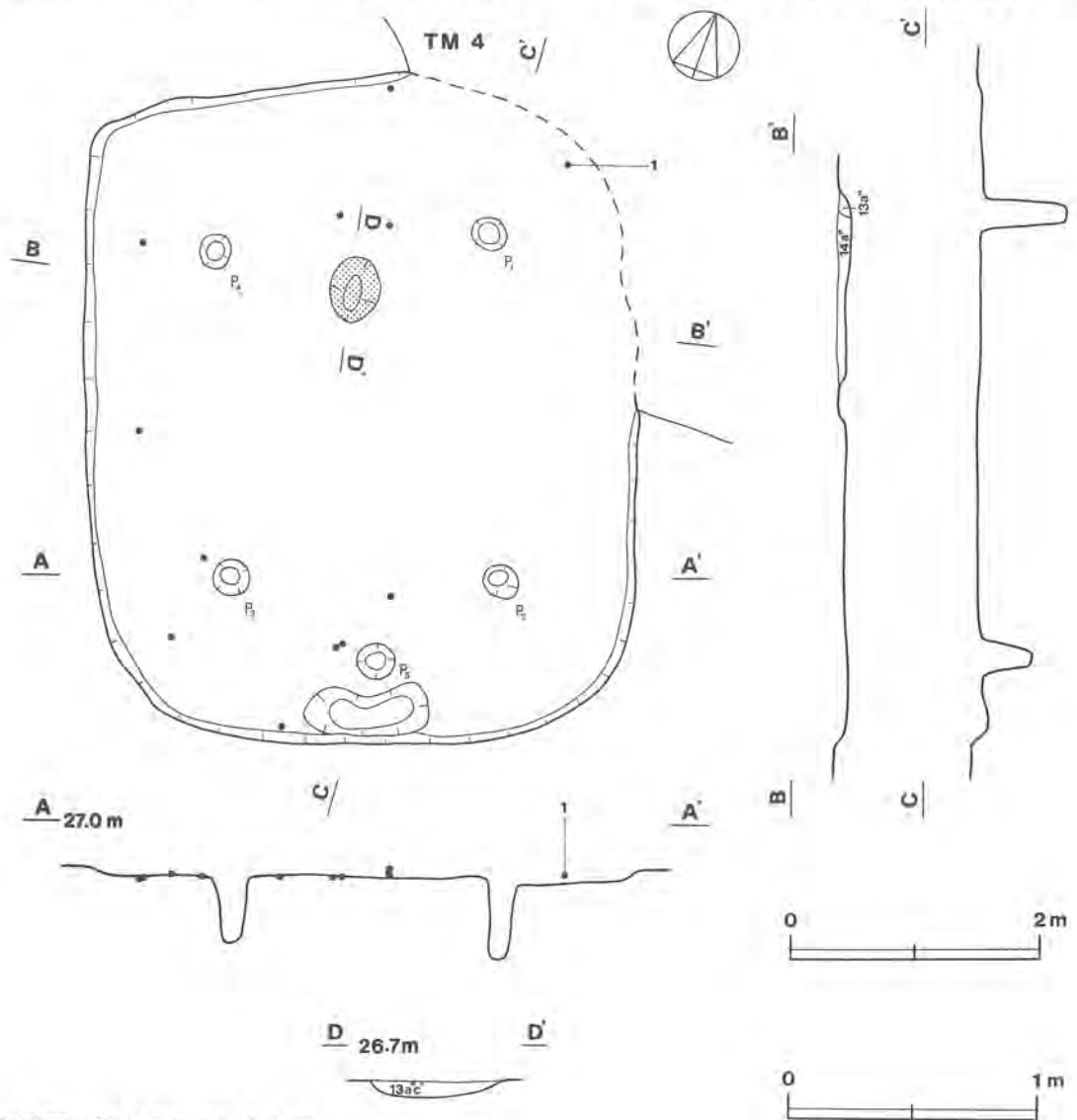
第7図 第1号住居跡出土遺物実測・拓影図

第7図の3～9は第1号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3・4は口縁部片である。3は折返しの口縁部に付加条の縄文を施し、下端に棒状工具による押圧を加えている。4は口唇部に棒状工具で押圧を加えている。5～8は胴部片である。5は無文帯の下に付加条の縄文を、6は櫛描の直線文を縦位に施して区画し、区画内には櫛描による直線文を横位に施している。7・8は付加条の縄文が施されている。9は木葉痕を持つ底部片である。

第2号住居跡 (第8図)

本跡は、1次調査区のA2g<sub>9</sub>区を中心に確認され、第1号住居跡の南東側8m程に位置している。また、本跡の北側の一部が第4号古墳の周溝に切られている。

平面形は、長軸5.38m・短軸4.46mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-29°-Wを指している。壁は、北側で古墳の周溝に切られている部分を除けば、全体的に床面から内彎気味にゆるやかに立ち上がっている。壁の残存高は4~11cmである。床面はロームで、全体的に平坦で良く締まっている。特に、炉の周囲と南西の床が硬い。ピットは5か所検出され、主柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4本である。規模は長径29~32cm・短径26~29cm、深さは55~69cmである。P<sub>5</sub>は位置とその北西側の床面の硬さの状態から、出入口に関する柱穴と思われる。炉は、床面の中央から北西側に位置し、



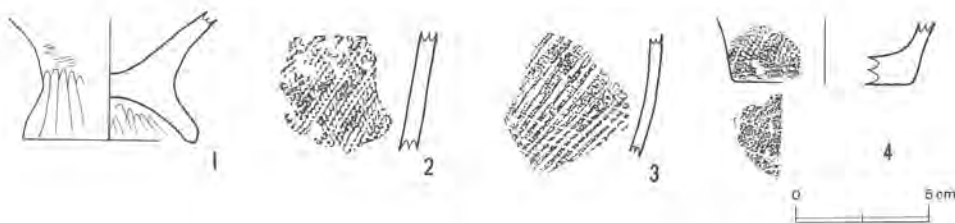
第8図 第2号住居跡実測図

平面形は径52×42cmの楕円形で、床面を皿状に5.5cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、多量のローム粒子と中量の焼土粒子を含むサラサラした暗褐色土が堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。P<sub>5</sub>と南東側の壁間に見られる凹みは、平面形が径100×41cmの楕円形を呈し、深さ15cm程で、遺物等の出土はなかったが、位置と締まりの状態から貯蔵穴ではないかと思われる。床面積は約20㎡である。

覆土は、一部で攪乱を受けているが、その他は多量のローム粒子を含む褐色土が自然堆積している。

遺物は、弥生式土器片だけで、炉跡北側の床面から胴部片2点、P<sub>1</sub>の北北東側の床面から第9図1の台付甕脚台部や胴部片9点、南側から胴部片6点、その他床面直上から弥生式土器の口縁部片8点、底部1点、胴部片約60点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第9図 第2号住居跡出土遺物実測・拓影図

### 第2号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	台付甕 弥生式土器	B 4.6 D 6.6	脚台部～胴下半部の一部である。脚台部は小さく、裾部まで直線的に「ハ」の字状に開いている。底部は中央部の器厚が薄く、ここから外傾して胴下半部へ立ち上がっている。	胴下半部内面は横ナデ整形。胴下半部外面、脚台部内・外面は寛ナデ整形。	砂粒 褐色 普通	10% P158

第9図の2～4は第2号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2・3は胴部片で、付加条の縄文を施している。4は木葉痕を持つ底部片で、胴部下端に付加条の縄文を施している。

### 第3号住居跡（第10図）

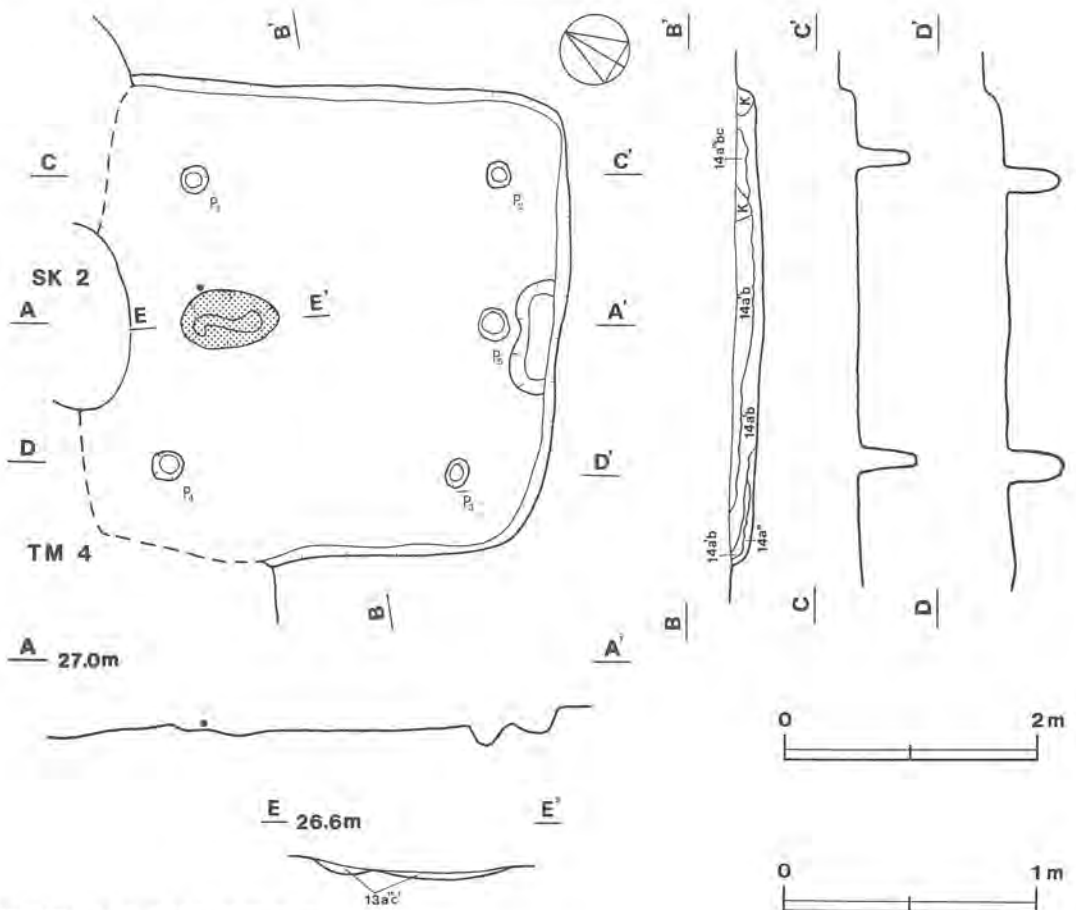
本跡は、1次調査区のA3f<sub>2</sub>区を中心に確認され、第4号住居跡の南西側5m程に位置している。また、本跡の北西側が第4号古墳の周溝に切られている。

平面形は、長軸3.82m・推定短軸3.78mの隅丸方形を呈するものと思われる。長軸方向はN-30°-Wを指している。壁は、北西側で古墳の周溝に切られている部分を除けば、床面から内彎気味にゆるやかに立ち上がっている。壁の残存高は10～21cmである。床面はロームで、壁付近から

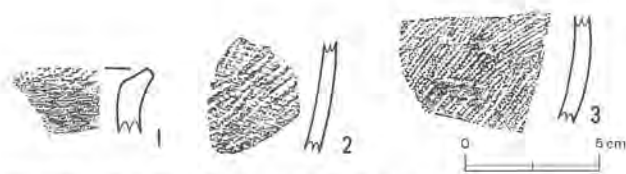
中央部にかけて皿状にやや低くなっている。特に、ピットの内側は、小さな凹凸を呈していて硬い。ピットは5か所検出されたが、支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4本である。規模は長径23~26cm・短径17~24cm、深さは45~47cmである。P<sub>5</sub>はその位置とP<sub>5</sub>の北側の床面の硬さの状態から、出入口に関する柱穴と思われる。炉は、床面の中央からやや北西側に位置し、平面形は径89×49cmの楕円形で、床面を皿状に7.5cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、多量のローム粒子と中量の焼土を含む暗褐色土がサラサラして堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。P<sub>5</sub>の南東側で壁に接している凹みは、平面形が径92×25cmの瓢箪状を呈し、深さ9~12cmでその位置と硬い縮まり状態から判断して貯蔵穴ではないかと思われる。床面積は約12m<sup>2</sup>である。

覆土は、上層に多量のローム粒子を含む褐色土、下層に中量のローム小ブロックを含む褐色土がそれぞれ縮まって自然堆積している。

遺物は、弥生式土器の胴部片1点が炉跡上から、床面直上から弥生式土器片26点、北西側の覆土上位から流れこみと思われる陶器片1点、土師器片3点が出土している。



第10図 第3号住居跡実測図



第11図 第3号住居跡出土遺物拓影図

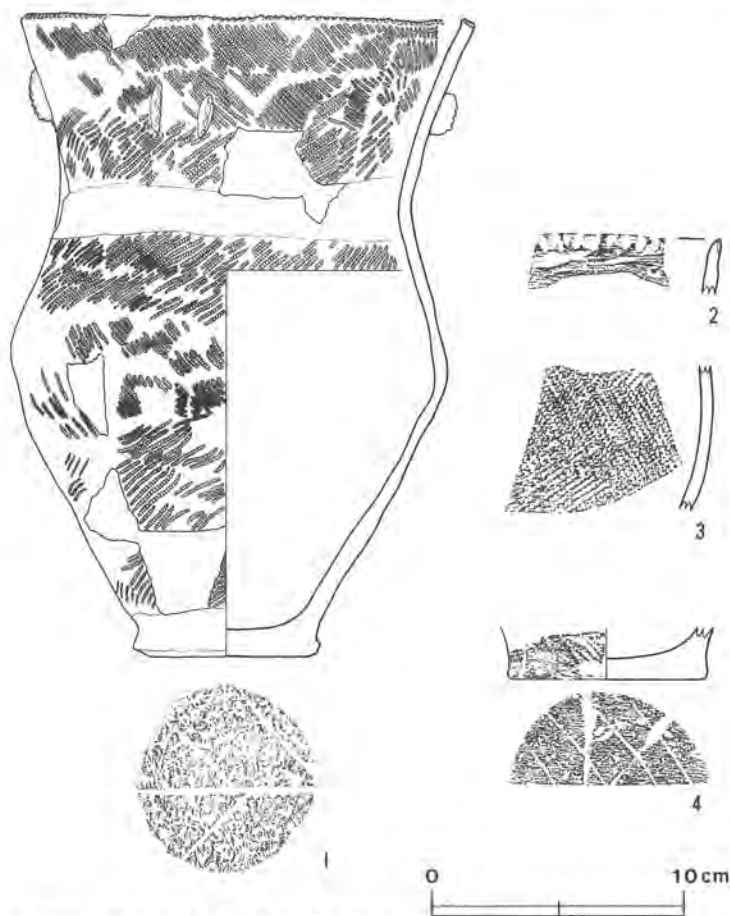
遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

第11図の1～3は第3号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は口縁部片で、口唇部に縄文を施文している。2・3は胴部片で、付加条の縄文を施している。

#### 第4号住居跡 (第13図)

本跡は、1次調査区のA3e区を中心に確認され、第3号住居跡の北東側5m程に位置している。本跡の西側3m程には、第4号古墳が所在している。

平面形は、長軸5.62m・短軸4.42mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-14°-Wを指している。壁は東側で攪乱を受けている部分を除けば、床面から外傾して立ち上がっている。壁の残存高は12～32cmである。床面はロームで、炉とP<sub>5</sub>の間がやや低くなっていて硬い。なお、一部を除いて

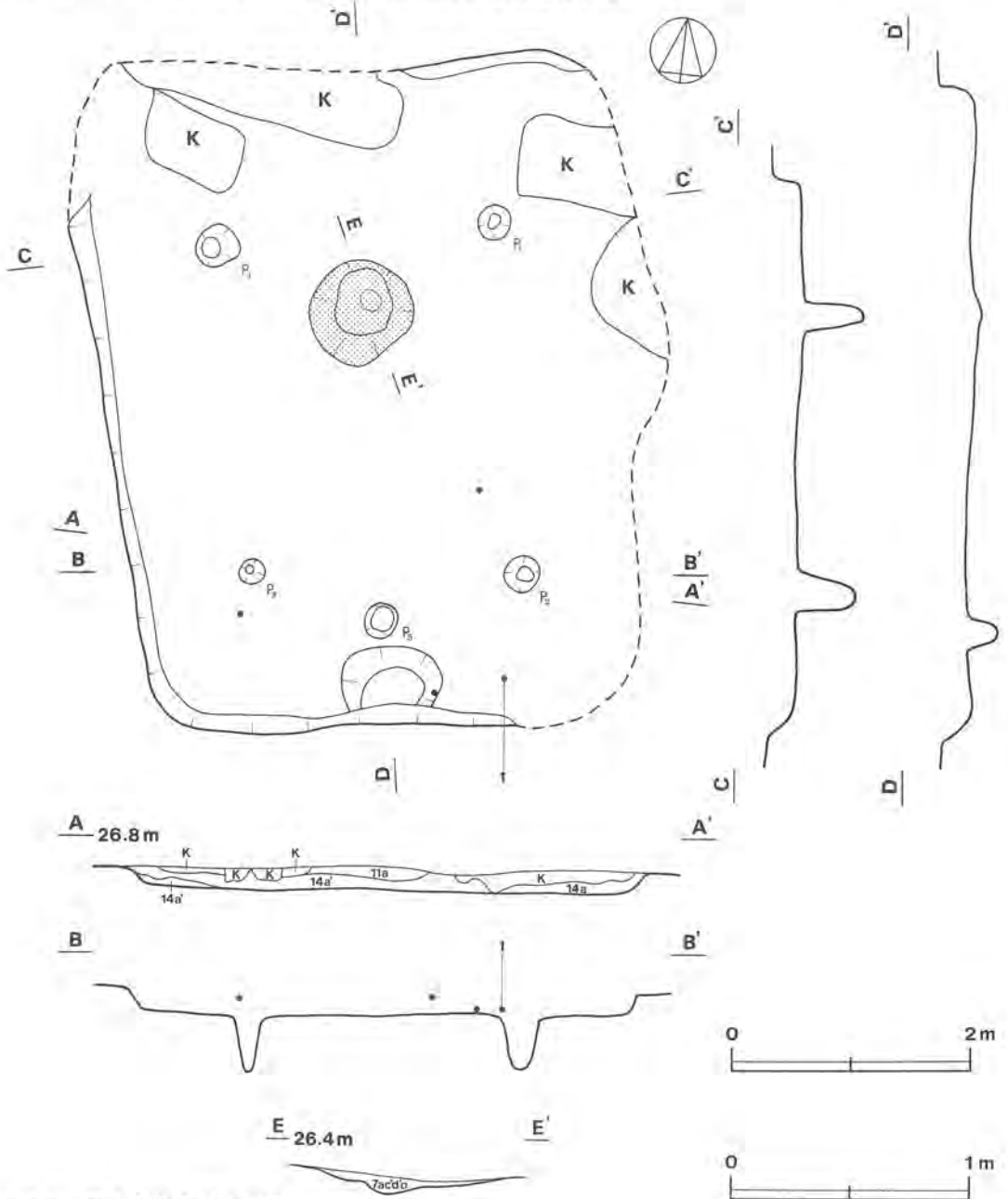


第12図 第4号住居跡出土遺物実測・拓影図

全体的にほぼ平坦であり、良く踏み締められている。ピットは5か所検出されたが、主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本である。規模は長径23～37cm・短径21～35cm、深さは46～53cmである。P<sub>5</sub>はその位置とP<sub>5</sub>の東・西の両側が特に硬くなっている様子から、出入口に関する柱穴と思われる。炉は床面の中央から北北西側に位置し、平面形は径97×87cmの不整楕円形で、床面を皿状に13cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には少量のローム粒子・砂を含む暗赤褐色の焼土が締

まって堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化し、小さい凹凸を呈している。P<sub>5</sub>と南側の壁間に見られる凹みは、平面形が径86×49cmの半円形状を呈し、深さ6cm程で、その位置と凹みの締まり状態から貯蔵穴ではないと思われる。床面積は約23m<sup>2</sup>である。

覆土は、一部に攪乱が見られるものの、上層に少量のローム粒子を含む黒褐色の砂質土、下層に中量のローム粒子を含む褐色の砂質土が自然堆積している。



第13図 第4号住居跡実測図

遺物は、南東側コーナー付近の床面から第12図1の弥生式土器の壺が横位で、貯蔵穴の北東部床面から木葉痕を付けた底部片、その他の床面から弥生式土器の胴部片等31点、土師器片3点、陶器片1点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

#### 第4号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 1	壺 弥生式土器	A「18.0」 B 25.6 C 6.8	底部は平底で厚く、安定感があり、木葉痕がある。胴部～口縁部にかけて器厚をほぼ一定に保つ。底部から胴中央部にかけて直線的に外傾して立ち上がり、ここでやや丸味を持って最大径を測る。胴中央部から頸部まで直線的につぼまり、頸部から再び直線的に開き口縁部に至る。外面は全体に付加条の縄文を施している。口縁部の中位には2個1単位の瘤を3か所（推定4か所）付している。なお、この瘤の上端と口唇部には篋状工具で明瞭な刻み目を付けている。さらに、瘤のすぐ上の縄文を磨消すように、棒状工具で雑に横線を廻らしているが、結び合わずにすれちがっている。	内面はナデ整形。頸部外面は磨消し。	砂粒・雲母 褐色 普通	80% P3

第12図の2～4は第4号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は口縁部片で、口唇部に棒状工具による押圧が施されている。3は胴部片で、付加条の縄文を羽状に施している。4は木葉痕を持つ底部片で、胴部下端に付加条の縄文を施している。

#### 第5号住居跡（第14図）

本跡は、1次調査区のA3i<sub>6</sub>区を中心に確認され、第4号住居跡の南東側14m程に位置している。本跡の北西側14m程には、第4号古墳が所在している。

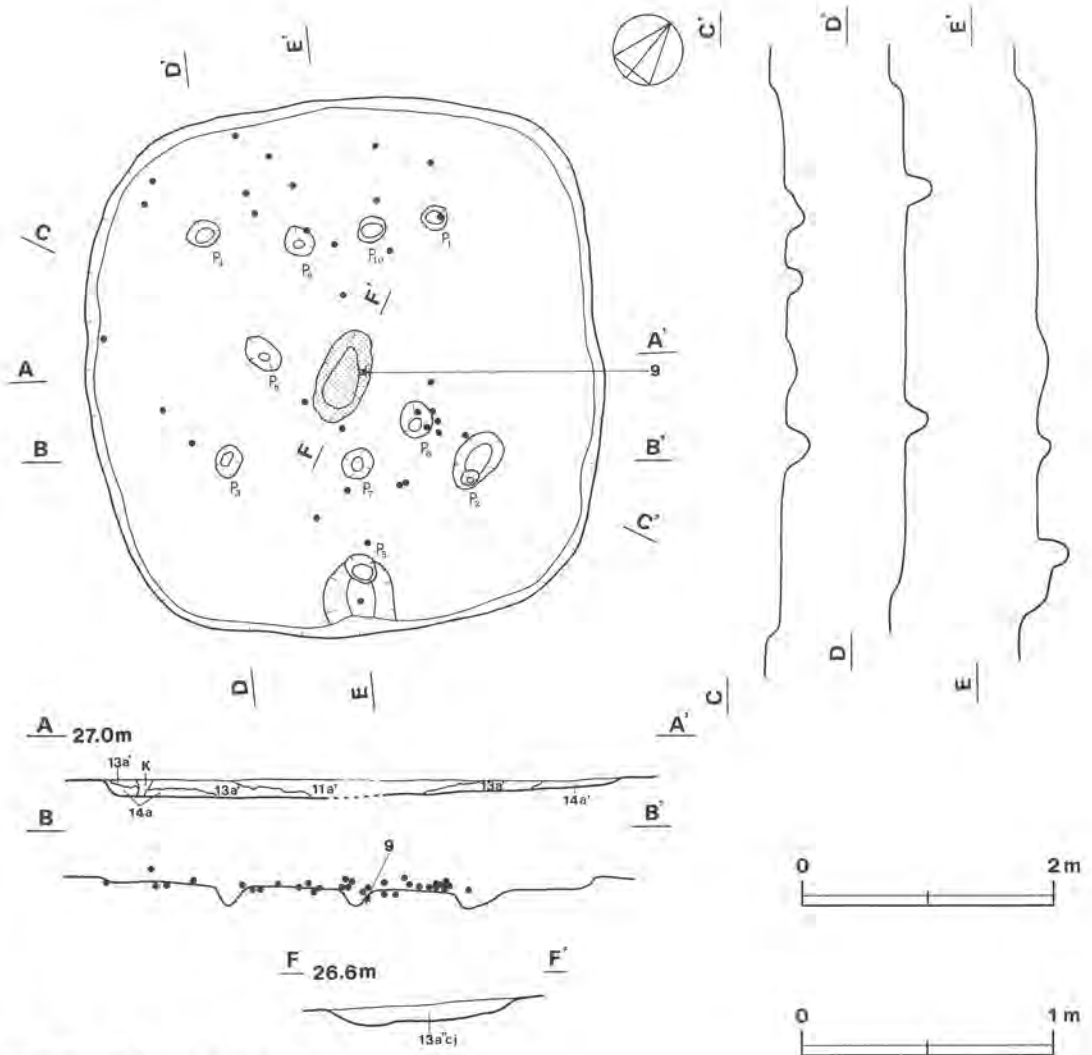
平面形は、長軸4.28m・短軸4.10mの各壁部がやや膨らむ隅丸方形を呈し、長軸方向はN-46°-Wを指している。壁は、全体が床面からゆるやかに立ち上がっている。壁高は5～19cmである。床面はロームで、中央部の一部がやや低いが、全体的にはほぼ平坦で良く締まっている。特に炉の周囲が良く踏み締められている。ピットは10か所検出されたが、支柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本で、規模は長径21～52cm・短径21～31cm、深さは16～24cmである。P<sub>5</sub>は位置が第2～4号住居跡の配列と酷似していることから、出入口に関する柱穴と思われる。その他のピットで炉を取り囲むような配列をしているP<sub>6</sub>～P<sub>10</sub>は、支柱穴と思われる。炉は、床面の中央部に位置し、平面形は径79×41cmの楕円形で、床面を皿状に9cmほど掘り凹めた地床炉である。炉内には黒色土が堆積している。炉床は火熱を受けて、ロームがやや赤変焼土化している。P<sub>5</sub>と南東壁間にある凹みは、平面

形が径56×50cmの半楕円形状を呈し、深さ15cm程で、その位置が前述の住居跡等と酷似していることから貯蔵穴と思われる。床面積は約14㎡である。

覆土は、レンズ状に自然堆積をしている。中央部が中量のローム粒子を含む黒褐色土、その外側が中量のローム粒子を含む暗褐色土、壁際は一部攪乱を受けているが、少量のローム粒子を含む褐色土で、いずれも粘性を帯びて締まっている。

遺物は、床面か床面直上の出土では、炉の北西側から弥生式土器片15点、炉の東～南東側から弥生式土器の底部や胴部片29点、炉肩部から第15図9の土製紡錘車1点、その他覆土中から弥生式土器片56点と壁際の攪乱部から土師器片4点が出土している。

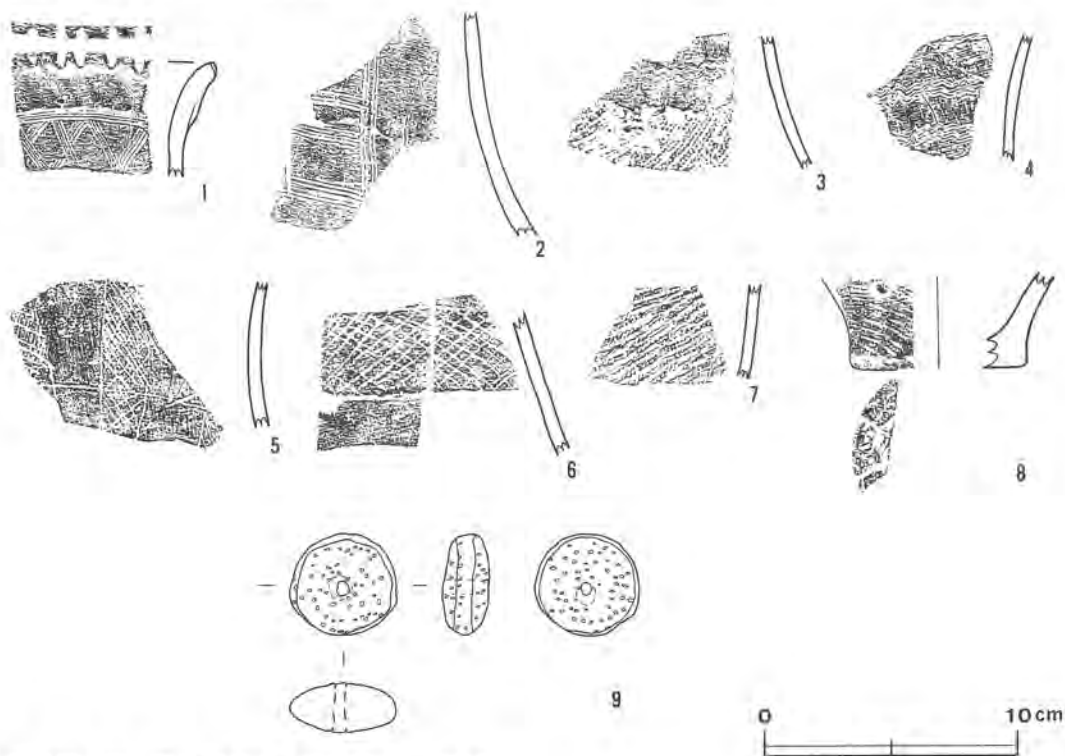
遺物とその出土状況、各壁部がやや膨らむ住居跡の形態等から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第14図 第5号住居跡実測図



第15図の1～8は第5号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は折返し口の縁部片で、櫛描による直線文を横位に施した下に同文を格子状に施している。2～4は頸部片である。2は櫛描による直線文を横位・縦位に施している。3は櫛描による波状文を横位に施した下に付加条の縄文を施している。4は櫛描による波状文を横位に施している。5～7は胴部片である。5・6は沈線を格子状に施し、7は付加条の縄文を施している。8は木葉痕を持つ底部片で、胴部下端に付加条の縄文を施している。

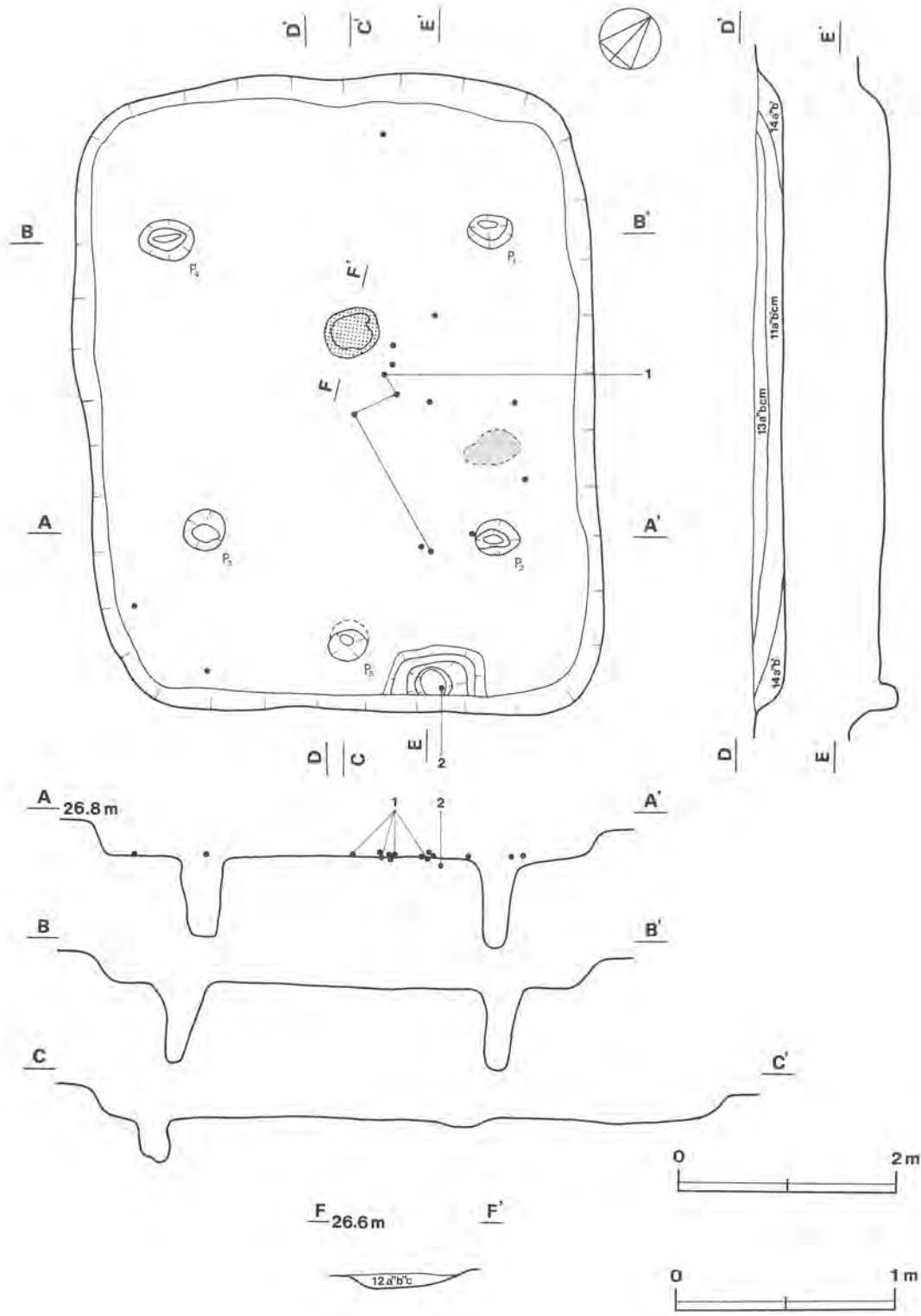


第15図 第5号住居跡出土遺物実測・拓影図

#### 第6号住居跡 (第16図)

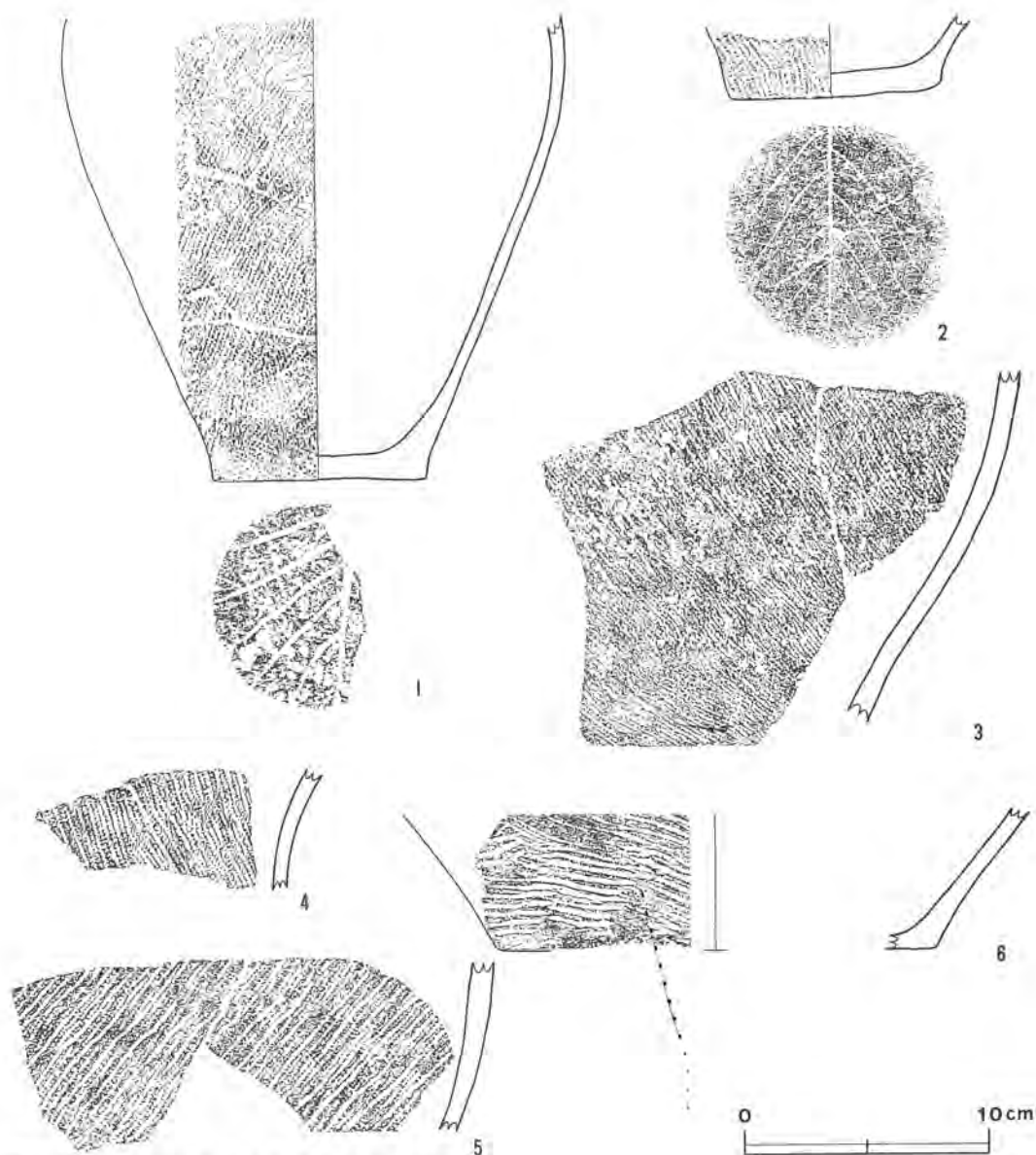
本跡は、1次調査区のB4<sub>2</sub>区を中心に確認され、第7号住居跡の北西側約20m程に位置している。本跡の北東側6m程には第8号古墳が所在している。

平面形は、長軸5.86m・短軸4.80mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-44°-Wを指している。壁は北西側壁で直線的にゆるい傾斜で立ち上がり、他は全て外傾気味に立ち上がっている。壁の残存高は20～31cmである。床面はロームで、ピットの内側は小さな凹凸を示して極めて硬く締まっている。ピットと壁の間は良く締まっていて平坦である。ピットは5か所検出されたが、支柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本である。規模は長径39～51cm・短径31～39cm、深さは74～79.5cmである。P<sub>5</sub>は位置が第2～5号住居跡と酷似していることから、出入口に関する柱穴と思われる。P<sub>5</sub>の深さは41



第16图 第6号住居跡実測図

cmである。なお、いずれの柱穴も楕円形に掘られている。さらに、P<sub>5</sub>は底部から上面にかけて壁方向に向かって斜めになっている。炉は、床面の中央から北西側に位置し、平面形は径51×43cmの楕円形状で、床面を皿状に9cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には多量のローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土を含む極暗褐色土が締まって堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化して小さい凹凸を示している。なお、南東壁に接する凹みは、平面形が径55×30cmの長方形を呈し、肩部が周堤状に20cm程の高まりをもち、貯蔵穴ではないかと思われる。床面積は約23㎡である。



第17図 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図

覆土は、レンズ状に自然堆積している。中央部が多量のローム粒子と少量のローム小ブロックを含む暗褐色土、その外側が多量のローム粒子と中量のローム小ブロックを含む黒褐色土、壁際は多量のローム粒子とローム小ブロックを含む褐色土であり、いずれも粘性を帯びて締まっている。

遺物は、炉の東側床面から第17図1の弥生式土器の壺の胴部や2の甕の底部等26点、貯蔵穴の底面付近から木葉痕のある弥生式土器の底部、その他覆土上位から須恵器片1点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

### 第6号住居跡出土土器観察表

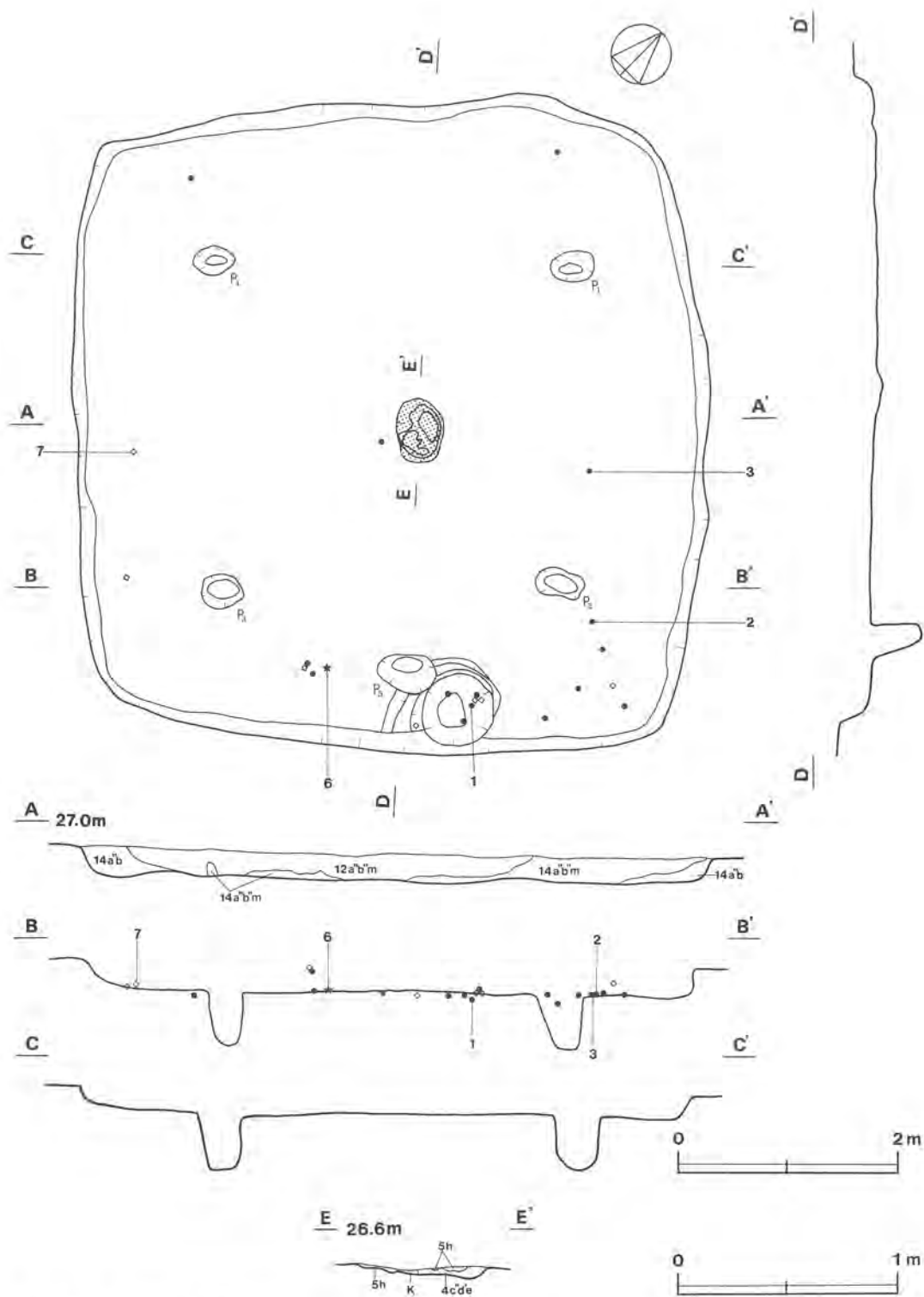
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	壺 弥生式土器	B(19.0) C 8.8	底部は平底で、鮮明な木葉痕と少量の剝離痕がある。胴部は底部から器厚を一定に保って直線的に外傾して立ち上がり、胴中央部よりやや上位で最大径を測り、丸味を持って内彎している。外面は全体に付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	40% P5
2	甕 弥生式土器	B(3.0) C 9.5	底部は平底で、木葉痕がある。胴下半部は底部から外傾している。外面には撚糸文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒・石英 橙色 普通	10% P4

第17図の3～6は第6号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～5は胴部片で、付加条の縄文を施している。6は底部片で、胴部下端に撚糸文を施している。

### 第7号住居跡(第18図)

本跡は、1次調査区のB4f<sub>7</sub>区を中心に確認され、第6号住居跡の南東側約20m程に位置している。本跡の北側12m程には第8号古墳が所在している。

平面形は、長軸6.02m・短軸5.82mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-55°-Wを指している。壁は、全て床面から外傾して立ち上がっている。壁高は14～25cmである。床面はロームで、全体としてはほぼ平坦で締まっている。特に、P<sub>5</sub>と炉の間、炉の周囲は硬く踏み締められている。なお、西～北にかけて小さな凹凸が見られる。ピットは5か所検出されたが、支柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本である。規模は長径40～46cm・短径25～33cm、深さは50～53.5cmである。P<sub>5</sub>はその位置とP<sub>5</sub>の北西側床面が特に硬く踏み締められている状態から、出入口に関する柱穴と思われる。炉は床面の中央部に位置し、平面形は径61×43cmの楕円形で、床面を皿状に6cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には極暗褐色の多量の焼土が堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化して小さい凹凸を示している。なお、南東壁に接し、凹みの肩部が周堤状に高ま



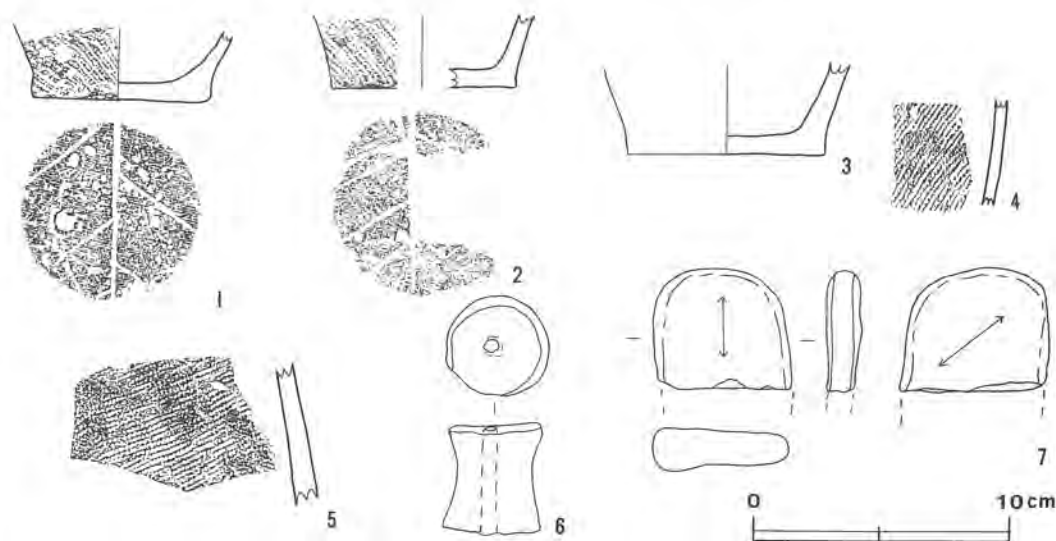
第18图 第7号住居跡実測图

りをもつ平面形が径95×81cmの楕円形を呈する所は、深さ21.5cm程で、その位置と凹みの縮まり状態から貯蔵穴と思われる。床面積は約30㎡である。

覆土は、一部に攪乱が見られるものの、ほぼレンズ状に自然堆積している。中央部が多量のローム粒子を含む暗褐色土、その外側が多量のローム粒子とローム小ブロックを含む極暗褐色土、壁際は多量のローム粒子と少量のローム小ブロックを含む褐色土が、いずれも粘性を帯びて縮まっている。

遺物は、東側コーナー部・P<sub>2</sub>と壁の間の床面から第19図2の弥生式土器の壺底部片を含む土器片6点、炉の北東側の床面から3の弥生式土器の壺の底部、貯蔵穴内から1の弥生式土器の壺の底部1点や胴部片8点が出土し、その他覆土中から弥生式土器片119点、6の管状土錘と7の砥石が各1点出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第19図 第7号住居跡出土遺物実測・拓影図

第19図の4・5は第7号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4・5は胴部片で、付加条の縄文を施している。

#### 第7号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 1	壺 弥生式土器	B(2.9) C 7.2	底部は平底で小さく、鮮明な木葉痕がある。胴下半部は底部から外傾している。外面には付加条の縄文を施している。	内面ナデ整形。	砂粒・石英 明褐色 普通	10% P6

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19回 2	壺 弥生式土器	B (2.9) C 「7.2」	底部は平底で小さく、鮮明な木葉痕がある。胴下半部は底部から外傾して立ち上がる。外面には付加条の縄文を施している。	内面ナデ整形。	砂粒・石英にふい橙色普通	5% P7
3	壺 弥生式土器	B (3.6) C 7.8	底部は平底である。胴下半部は底部から外傾して立ち上がる。	内・外面ともナデ整形。	砂粒にふい橙色普通	5% P8

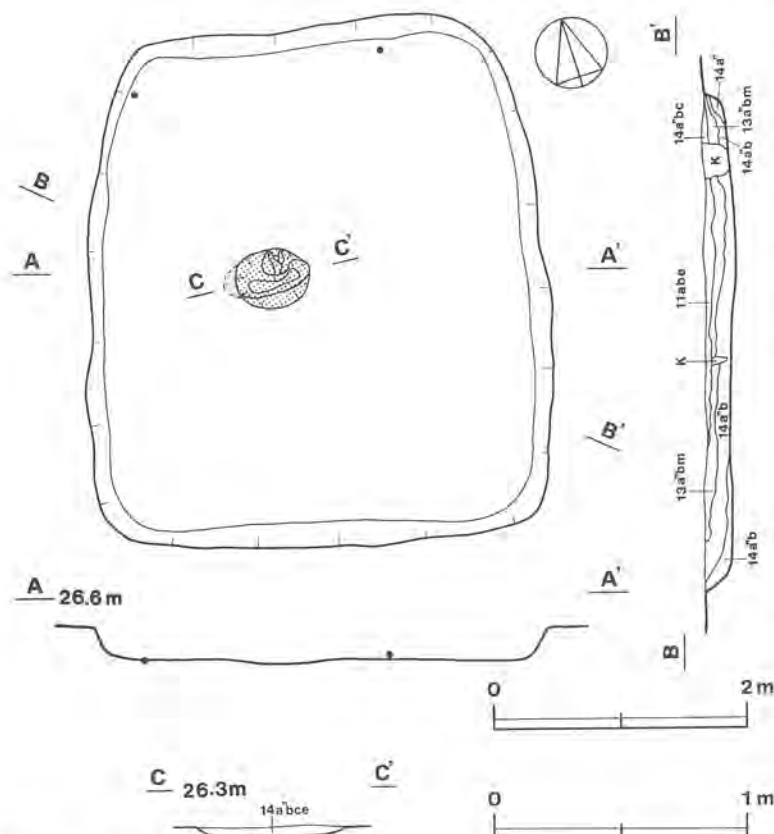
### 第8号住居跡 (第20図)

本跡は、1次調査区のB4b<sub>g</sub>区を中心に確認され、第9号住居跡の北東側2m程に位置している。本跡の北西側2m程には第8号古墳が所在している。

平面形は、長軸4.14m・短軸3.68mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-18°-Eを指している。壁は、北東側コーナー付近が床面からほぼ垂直に、他は全て外傾気味に立ち上がっている。壁高は23~30cmである。床面はロームで、全体が軟らかく平坦であり、西側から東側にかけて5cmほど低くなっている。ピットは、壁内・外を精査したが不明である。炉は、床面の中央から西側に位置し、平面形は径64×51cmの楕円形で、床面を皿状に5cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には

少量の焼土と多量のローム粒子を含む褐色土が締まって堆積している。炉床は凹凸を示しているが、その高い部分が火熱を受けたらしく、ロームがやや赤変焼土化している。床面積は約12.5㎡である。

覆土は、一部に攪乱が見られるものの、ほぼレンズ状に自然堆積している。中央部が多量のローム粒子・少量のローム小ブロック等を含む黒褐色土、その外側は含有物がほぼ同じ暗褐色土、壁際は極めて多量のローム粒

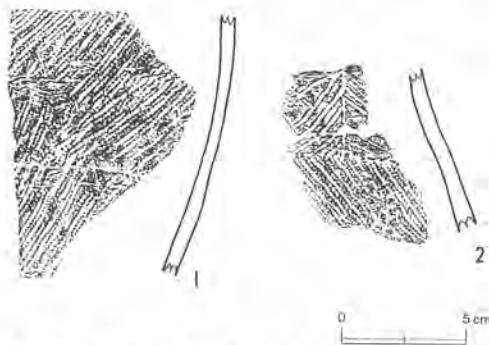


第20図 第8号住居跡実測図

子・少量のローム小ブロックを含む褐色土であり、いずれもよく締まっている。

遺物は、北西側コーナーの壁付近の床面から弥生式土器片2点、床面直上から弥生式土器片17点が出土している。

遺物は、流れ込みとは考えにくく、本跡に伴うものと思われるので、本跡は弥生時代後期のものと思われる。しかし、当遺跡の他の住居跡と比べた場合、床面の状態や柱穴がないことからその性格をやや異にする遺構と考えられる。



第21図の1・2は第8号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は胴部片で、付加条の縄文を施している。2は頸部から胴部にかけての破片で、頸部に沈線で綾杉文を、胴部には付加条の縄文を施している。

第21図 第8号住居跡出土遺物拓影図

#### 第9号住居跡 (第22図)

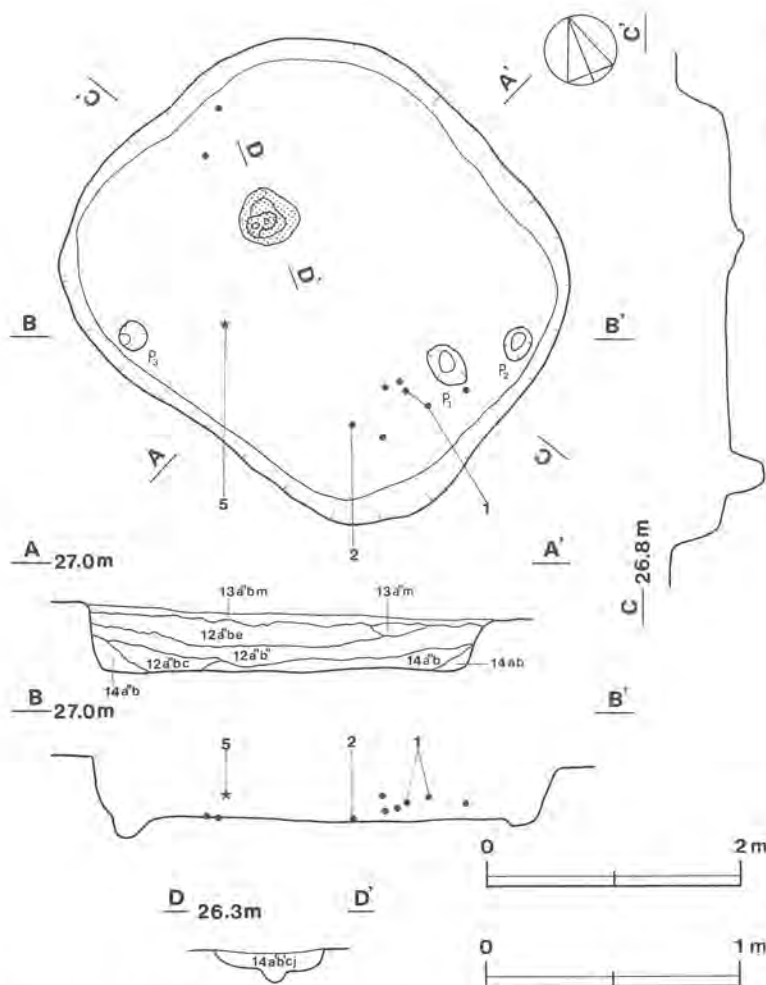
本跡は、1次調査区のB4c<sub>3</sub>区を中心に確認され、第8号住居跡の南西側2m程に位置している。本跡の北西側7m程には第8号古墳が所在している。

平面形は、長軸3.64m・短軸3.52mの北東壁がやや膨らむ隅丸方形を呈し、長軸方向はN-32°-Wを指している。壁は全て床面から外傾して立ち上がった後、壁上部でほぼ垂直になる。壁高は38~53cmである。床面はロームで、全体がほぼ平坦で良く締まっている。特に炉の周囲は硬い。ピットは3か所検出され、規模は長径23~39cm・短径21~36cm、深さはP<sub>1</sub>が34cmで深く、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>はそれぞれ7・16cmと浅い。炉は、床面の中央から北西側に位置し、平面形は径46×43cmの不整形円形で、床面を皿状に9cmほど掘り凹めた後、その中央部をさらに6cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には少量の焼土と多量のローム粒子を含む褐色土が締まって堆積している。炉床は火熱を受けて、ロームの一部が赤レンガ状に赤変硬化し、大部分は白レンガ状に白変硬化している。床面積は約9m<sup>2</sup>である。

覆土は、レンズ状に自然堆積している。上層に多量のローム粒子・少量のローム小ブロック等を含む暗褐色の砂質土、中層に含有物がほぼ同じの極暗褐色土、下層に多量のローム粒子とローム小ブロックを含む極暗褐色土、最下層の床上や壁際には、多量のローム粒子やローム小ブロックを含む褐色土が堆積し、いずれもよく締まっている。

遺物は、南側床面の5cm程上から第23図1・2の弥生式土器の壺の胴下半部や胴部片5点、炉





第22図 第9号住居跡実測図

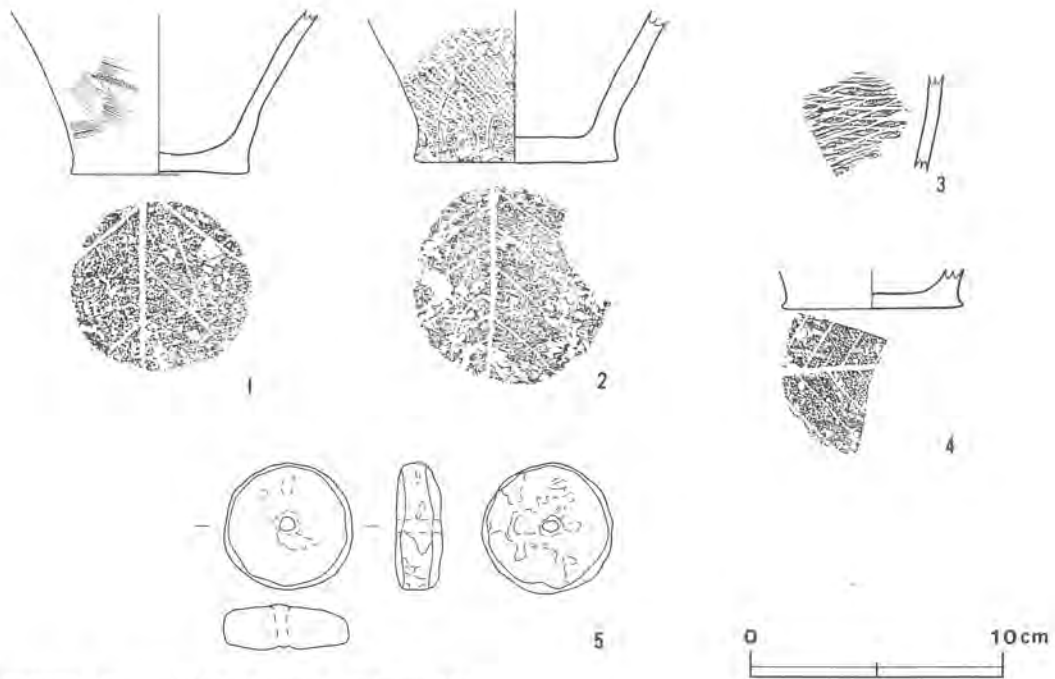
第9号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 1	壺 弥生式土器	B (6.4) C 7.0	底部は平底で中央部がやや凹み、鮮明な木葉痕がある。胴下半部は底部から外反して立ち上がっている。	内・外面ともナデ整形。	砂粒・石英 橙色 普通	20% P9
2	甕 弥生式土器	B (6.1) C 8.2	底部は平底で、鮮明な木葉痕がある。胴下半部は底部から直線的に外傾して立ち上がっている。外面には付加条の縄文を施している。	内面ナデ整形。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	20% P10

第23図の3・4は第9号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は胴部片で、格子文を施している。4は木葉痕を持つ底部片である。

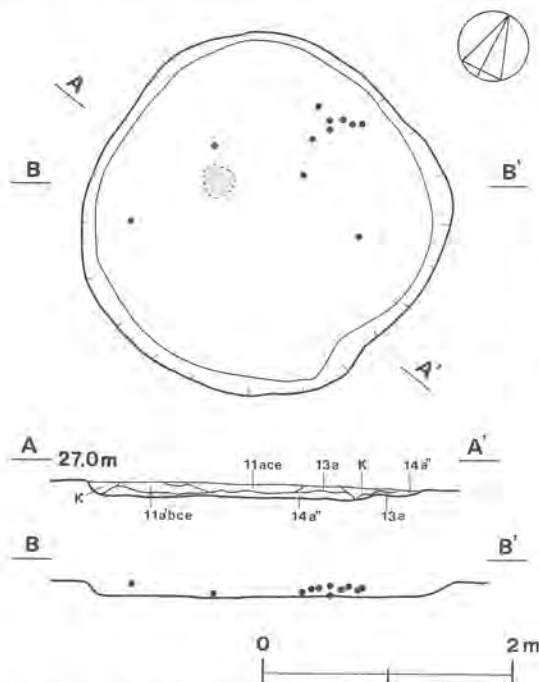
の北側床面直上から弥生式土器片27点、覆土上位から5の紡錘車1点と土師器片2点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第23図 第9号住居跡出土遺物実測・拓影図

第10号住居跡 (第24図)



第24図 第10号住居跡実測図

本跡は、1次調査区のB5i<sub>2</sub>区を中心に確認され、第34号住居跡の南側13m程に位置している。本跡の南側4m程には第12号古墳が所在している。

平面形は、長径2.98m・短径2.90mの円形を呈し、長径方向はN-54°-Eを指している。壁は全体が床面から内彎気味にゆるやかに立ち上がっている。壁高は4~11cmである。床面はロームで、全体が平坦で軟らかく、ほとんど締まりが感じられない。ピットは、壁内・外を精査したが検出されなかった。北西側の床面には焼土が径30cmほどの円形の範囲に薄く堆積していたが、炉という様子はいかたがえなかった。床面積は約5.5m<sup>2</sup>である。

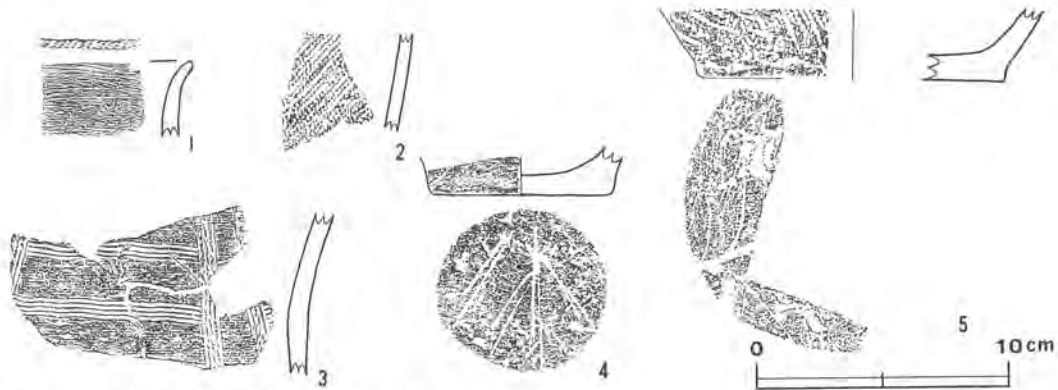
覆土は、ほぼ2層に自然堆積している。上

層は、少量のローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を含む黒褐色土、下層は、極多量～多量のローム粒子を含む褐色土で、いずれも粘性を帯びて締まっている。

遺物は、北側の床面上から弥生式土器の底部3点、口縁部片1点、胴部片9点が出土し、いずれも本跡に伴うものと思われる。

本跡は、床面に締まりがなく、ピット・炉・貯蔵穴等が検出されなかった等、当遺跡の住居跡の中ではややその性格を異にする。しかし、遺物とその出土状況、焼土等を総合的に検討すると、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

第25図の1～5は第10号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は口縁部片で、口唇部に付加条の縄文が施されている。2は胴部片で、付加条の縄文を、3は頸部片で、櫛描による直線文を横位・縦位に施している。4・5は木葉痕を持つ底部片で、胴部下端に付加条の縄文を施している。

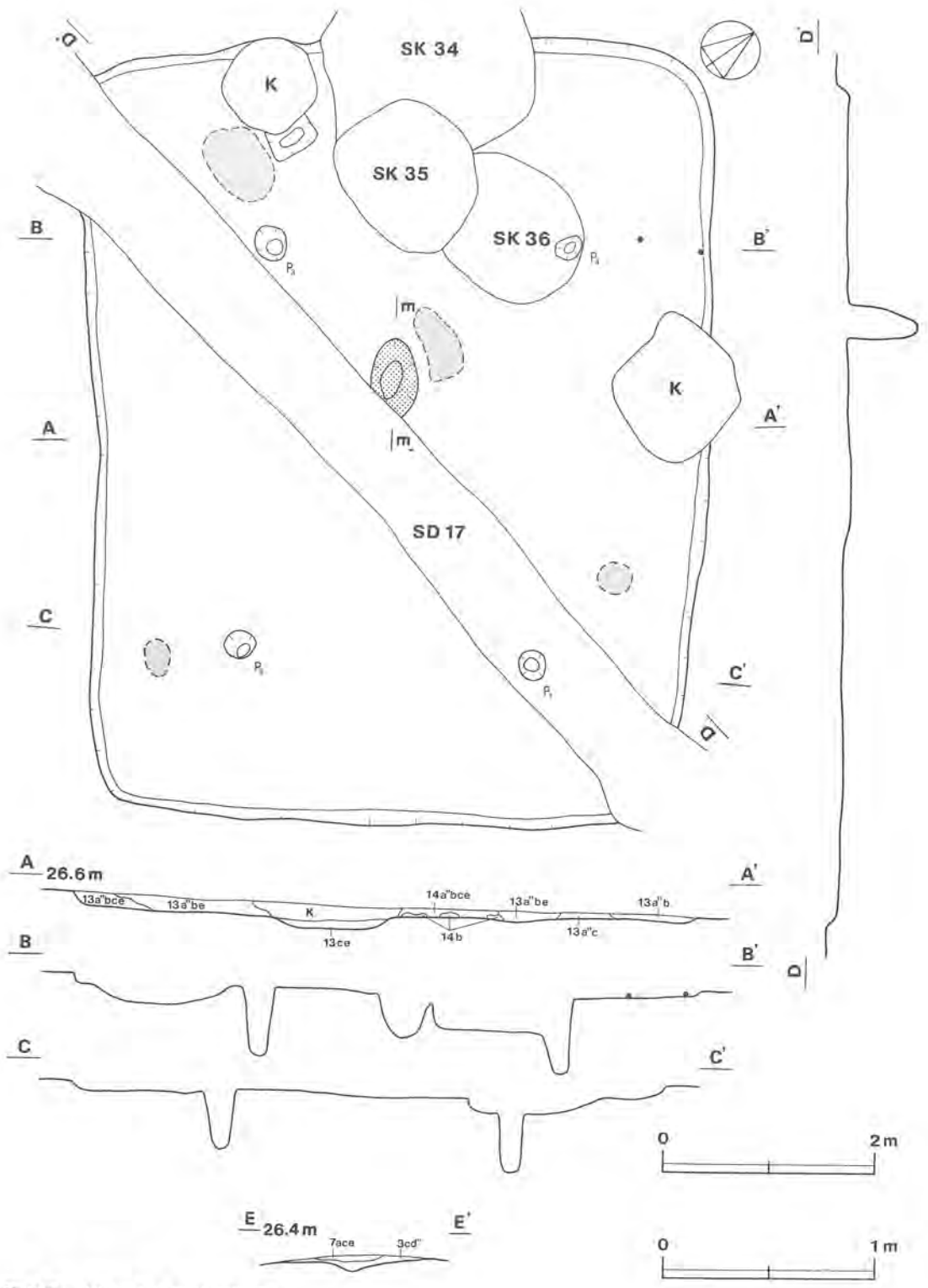


第25図 第10号住居跡出土遺物拓影図

### 第23号住居跡 (第26図)

本跡は、1次調査区のF8e<sub>1</sub>区を中心に確認され、第29号住居跡の北東側9m程に位置している。また、本跡は第17号溝や北西側床面上で第34～36号土坑に切られている。

平面形は、長軸7.38m・短軸5.78mの長方形を呈し、長軸方向はN-54°-Wを指している。壁は溝や土坑に切られている部分を除けば、床面から外傾して立ち上がっている。壁の残存高は3～17cmである。床面はロームで、他の遺構に切られている所以外は良く踏み締められていて、硬く平坦である。なお、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の間の南東壁近くの床面は、特に硬い。また、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>の周囲の床面には多量の焼土と炭化材が検出されたことから、本跡は焼失家屋と思われる。ピットは4か所検出され、規模は長径29～35cm・短径24～30cm、深さは58～66cmで、いずれも支柱穴である。炉は、床面の中央からやや北西側に位置し、南西側の一部が溝に切られている。平面形は径90×44cmの楕円形で、床面を2cm程凹めた地床炉である。炉内には暗赤褐色と赤褐色の焼土が締まって堆積し



第26图 第23号住居跡実測图

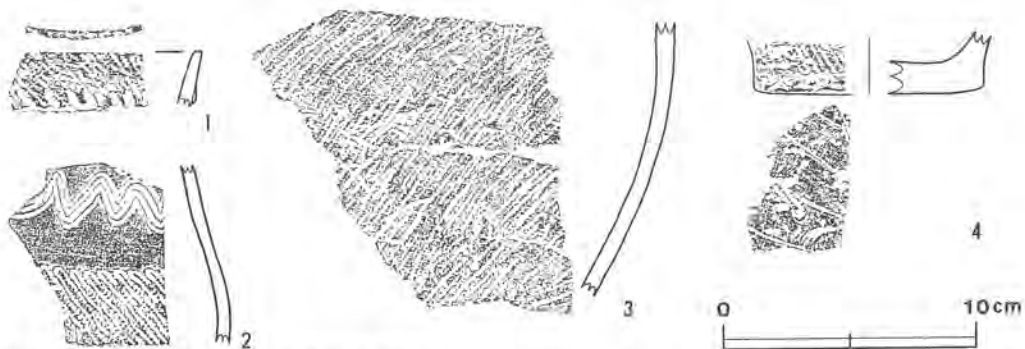
ている。炉床は火熱を受けて、ロームの一部が赤褐色に焼土化し、大部分は白レンガ状に白変硬化している。床面積は約39m<sup>2</sup>である。

覆土は、中央部が多量のローム粒子・少量のローム小ブロック等を含む褐色土、その外側と壁際は、多量のローム粒子・少量のローム小ブロックを含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は、床面直上から弥生式土器片27点、北西側の覆土中から流れ込みと思われる土師器片4点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

第27図の1～4は第23号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は口縁部片で、付加条の縄文を施し、下端に棒状工具による押圧を加えている。口唇部には縄文を施している。2は頸部から胴部にかけての破片であり、頸部に櫛描による波状文を横位に、胴部には付加条の縄文を施している。3は胴部片で、付加条の縄文を施している。4は木葉痕を持つ底部片で、胴部下端に付加条の縄文を施している。

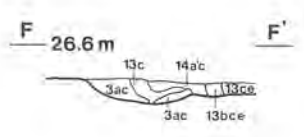
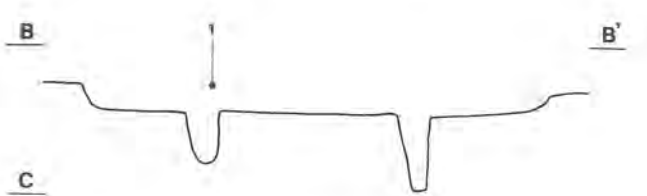
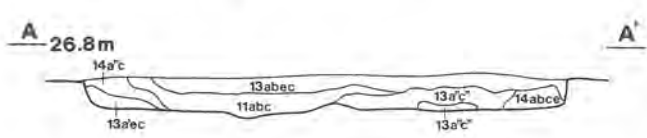
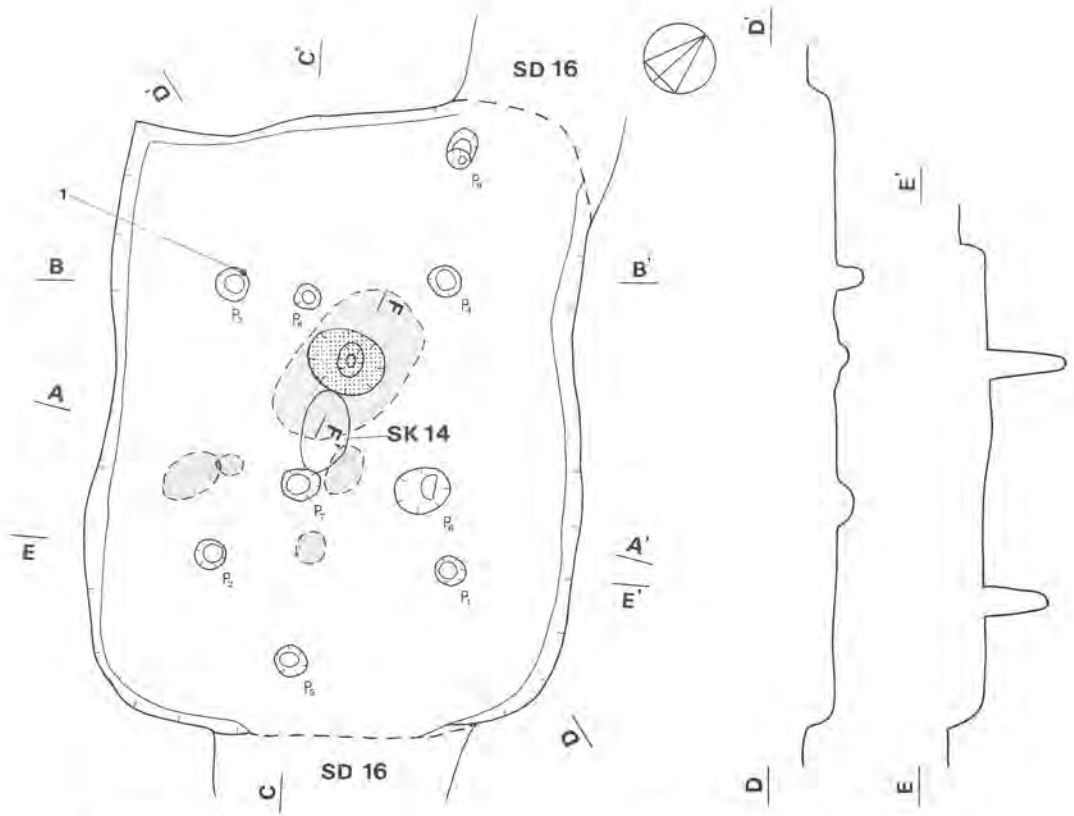


第27図 第23号住居跡出土遺物拓影図

#### 第25号住居跡 (第28図)

本跡は、1次調査区のF8g<sub>6</sub>区を中心に確認され、第23号住居跡の東南東14m程に位置している。また、本跡の壁と床面の一部が第16号溝や第14号土坑に切られている。

平面形は、推定長軸5.00m・短軸3.64mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-62°-Wを指している。壁は第16号溝に切られている部分を除いて、北壁が床面から外傾気味に、他は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁の残存高は11~28cmである。床面はロームで、締まりは弱いが平坦である。床面にはいたる所に少量の焼土と炭化物が堆積しており、本跡は焼失家屋と思われる。ピットは9か所検出され、主柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>である。規模は長径25~28cm・短径24~26cm、深さはそれぞれ63・50・42・63cmである。他のピットは24~36cmと浅い。炉は、床面の中央からやや西側に位置し、平面形は径63×54cmの楕円形で、床面を皿状に10cm程掘り凹めている。炉内には暗



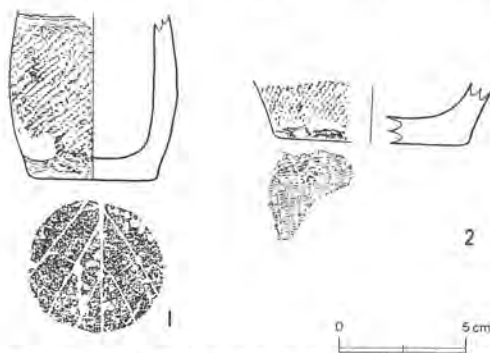
第28图 第25号住居跡実測图

赤褐色の焼土が締まって堆積している。炉内には強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約16.5㎡である。

覆土は、レンズ状に自然堆積している。上層に少量のローム粒子・多量のローム小ブロック等を含む暗褐色土、下層に少量のローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土と暗褐色土、壁際は多量のローム粒子を含む褐色土と暗褐色土が、それぞれ締まって堆積している。なお、上層と下層の境目に一部良く締まった部分があるが、第16号溝の底面であり、本跡が埋没した後に溝が掘られた事を示している。この溝の底面は平坦で、通路として使用されたような面もある。

遺物は、P<sub>3</sub>をとりまく焼土の中から第29図1の弥生式土器の壺が出土している。

遺物とその出土状況から本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第29図の2は第25号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は布目痕を持つ底部片で、胴部下端には付加条の縄文を施している。

第29図 第25号住居跡出土遺物実測・拓影図

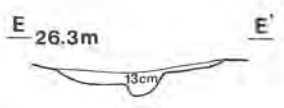
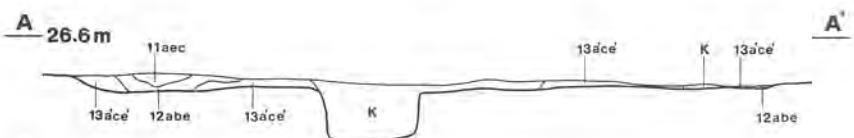
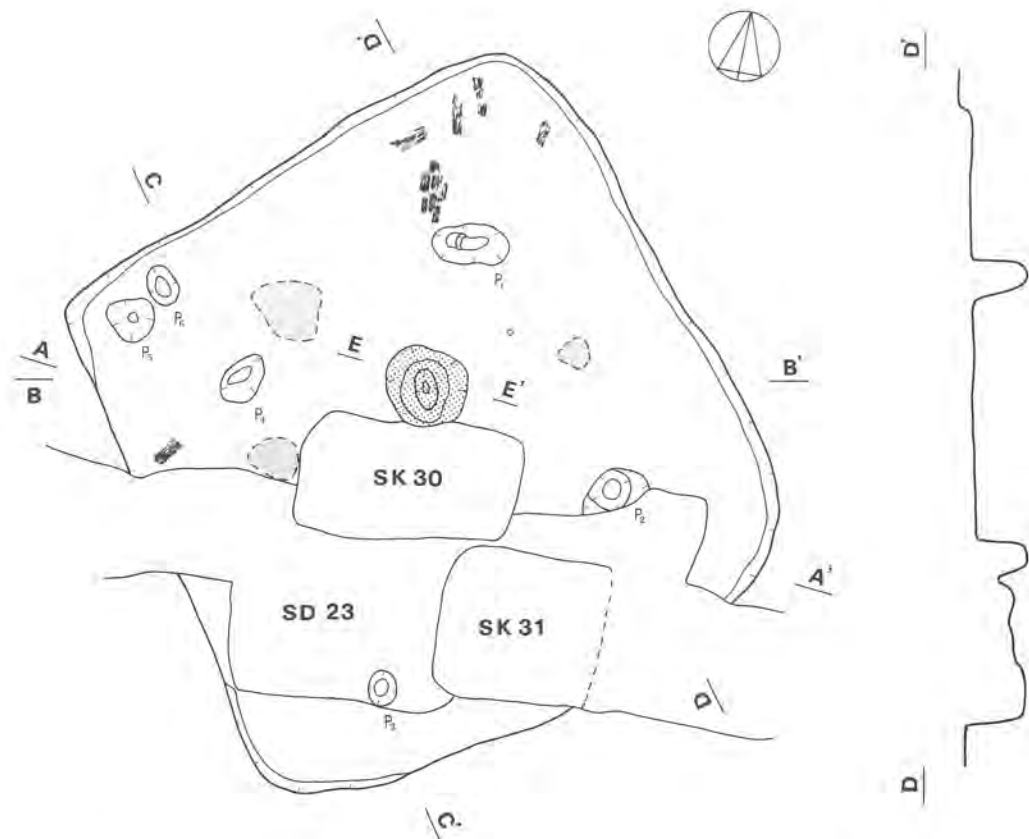
第25号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 1	壺 弥生式土器	B (6.7)	底部は平底で、中央部がやや凹んで不安定である。また、鮮明な木葉痕がある。胴部は、底部と器厚をほぼ同じに保ち、底部から外側にやや膨らんで垂直気味に立ち上がっている。外面は全体に付加条の縄文を施し、上部に篋状工具で浅く沈線を施している。	内面はナデ整形。	砂粒 に多い橙色 普通	10% P11
		C 5.4				

### 第29号住居跡 (第30図)

本跡は、1次調査区のF7h<sub>9</sub>区を中心に確認され、第23号住居跡の南西側9m程に位置している。また、本跡の南側が第23号溝、第30・31号土坑等に切られている。

平面形は、長軸4.92m・短軸4.58mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-36°-Wを指している。壁は、溝と土坑に切られている部分を除けば、床面から内彎気味に立ち上がっている。壁の残存高は2~16cmである。床面はロームで、溝等の攪乱を受けていない部分は良く締まって平坦であ



第30图 第29号住居跡実測图

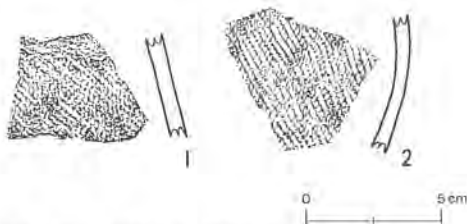


る。なお、残された床面の柱穴周辺には3～5cm程堆積した焼土と、P<sub>1</sub>の北側に柱状に残った炭化材が5か所検出されたことから、本跡は焼失家屋と思われる。ピットは6か所検出され、主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本である。規模は長径28～61cm・短径22～34cm、深さはそれぞれ44・39・21・45cmである。西側コーナー部のピットは深さが12～14cmと浅い。なお、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>の間にもピットが存在した可能性があるが、土坑によって切られていて不明である。炉は、床面の中央からやや北側に位置し、平面形は径71×65cmの円形で、床面を皿状に13cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には焼土粒子と炭化物を含む暗褐色土が堆積している。炉床は強い火熱を受けてロームが赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約20.5㎡である。

覆土は、攪乱を受けていない部分は、中量のローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土が縮まって自然堆積している。

遺物は、炉の北西側床面に石1点、床面直上から弥生式土器片5点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第31図の1・2は第29号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1・2とも胴部片で、付加条の縄文を施している。

第31図 第29号住居跡出土遺物拓影図

### 第30号住居跡 (第32図)

本跡は、1次調査区のF7g<sub>5</sub>区を中心に確認され、第23号住居跡の西南西側20m程に位置している。また、西側の一部は生活道路下に延びているために調査ができなかった。

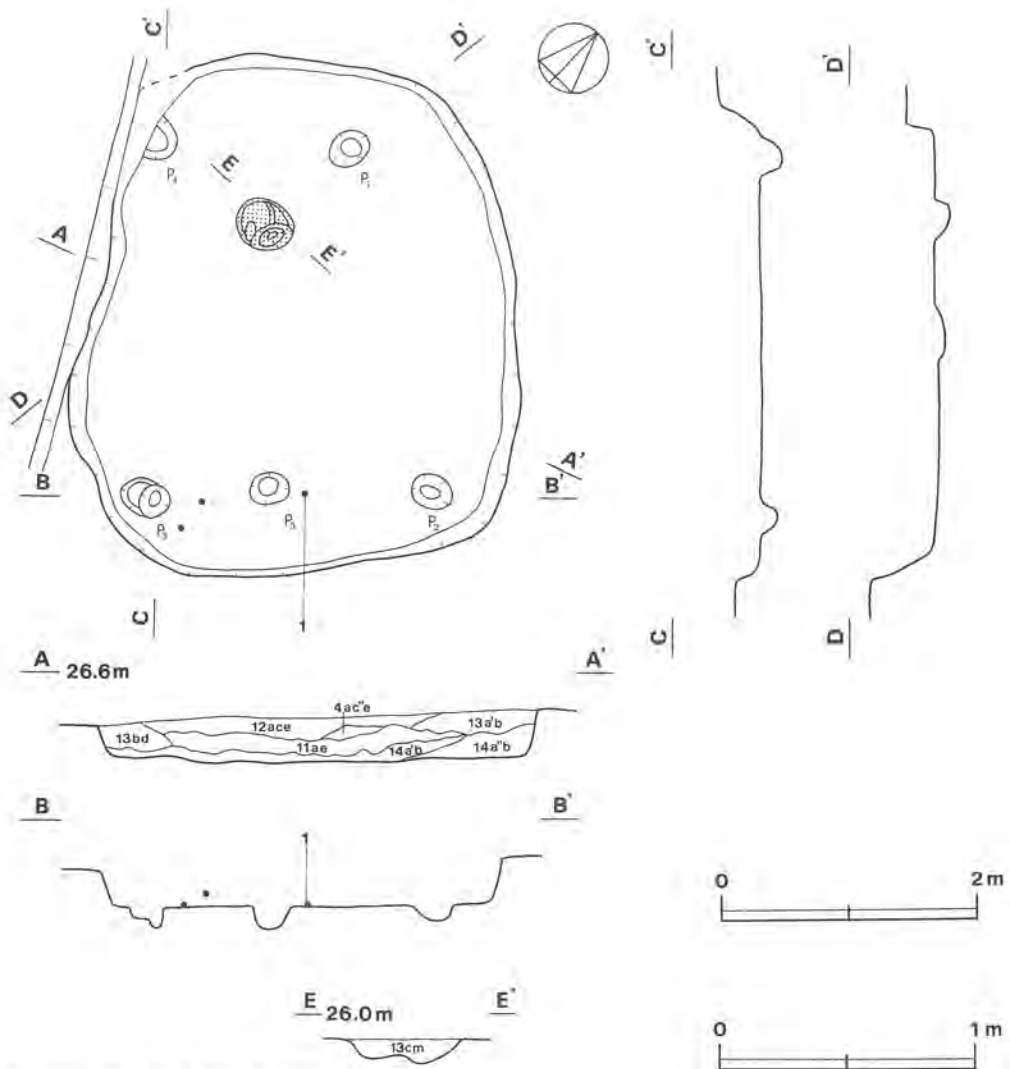
平面形は、長軸4.18m・短軸3.58mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-41°-Wを指している。壁は、床面から垂直ぎみに外傾して立ち上がっている。壁高は20～38cmである。床面はロームで、全体的に良く縮まっていて硬く、平坦である。ピットは5か所検出され、P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>が主柱穴である。規模は長径34～40cm・短径26～30cm、深さは14～19cmである。P<sub>5</sub>の深さは19cmである。炉は、床面の中央から北西側に位置し、西側の一部が攪乱を受けているが、平面形は径46×41cmのほぼ円形に近い楕円形で、床面を皿状に11cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には少量の焼土が残っている。炉床の攪乱を受けていない部分は強い火熱を受けており、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約11㎡である。

覆土は、ほぼ3層がレンズ状に自然堆積している。上層に少量のローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む極暗褐色土、中層に少量のローム粒子と炭化粒子を含む黒褐色土、下層に少量のロー

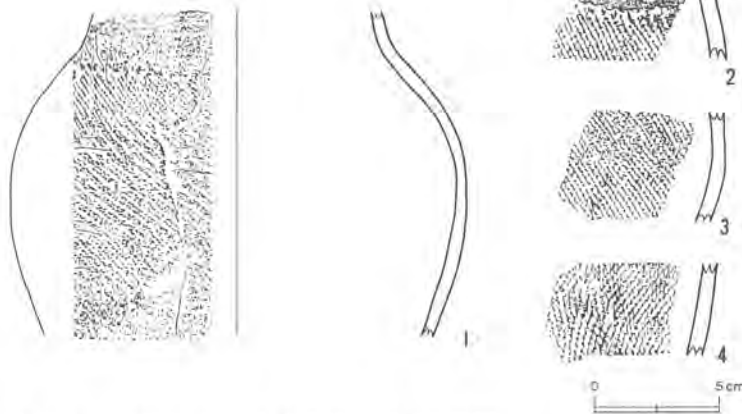
ム粒子とローム小ブロックを含む褐色土，壁際には多量のローム粒子とローム小ブロックを含む褐色土，中量のローム粒子と少量の焼土粒子を含む褐色土や暗褐色土がそれぞれ締まって堆積している。

遺物は，P<sub>5</sub>の北東側床面から第33図1の弥生式土器の壺の胴部片，覆土中から弥生式土器片13点が出土している。

遺物とその出土状況から，本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第32図 第30号住居跡実測図



第33図の2～4は第30号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2～4は胴部片で、付加条の縄文が施されている。

第33図 第30号住居跡出土遺物実測・拓影図

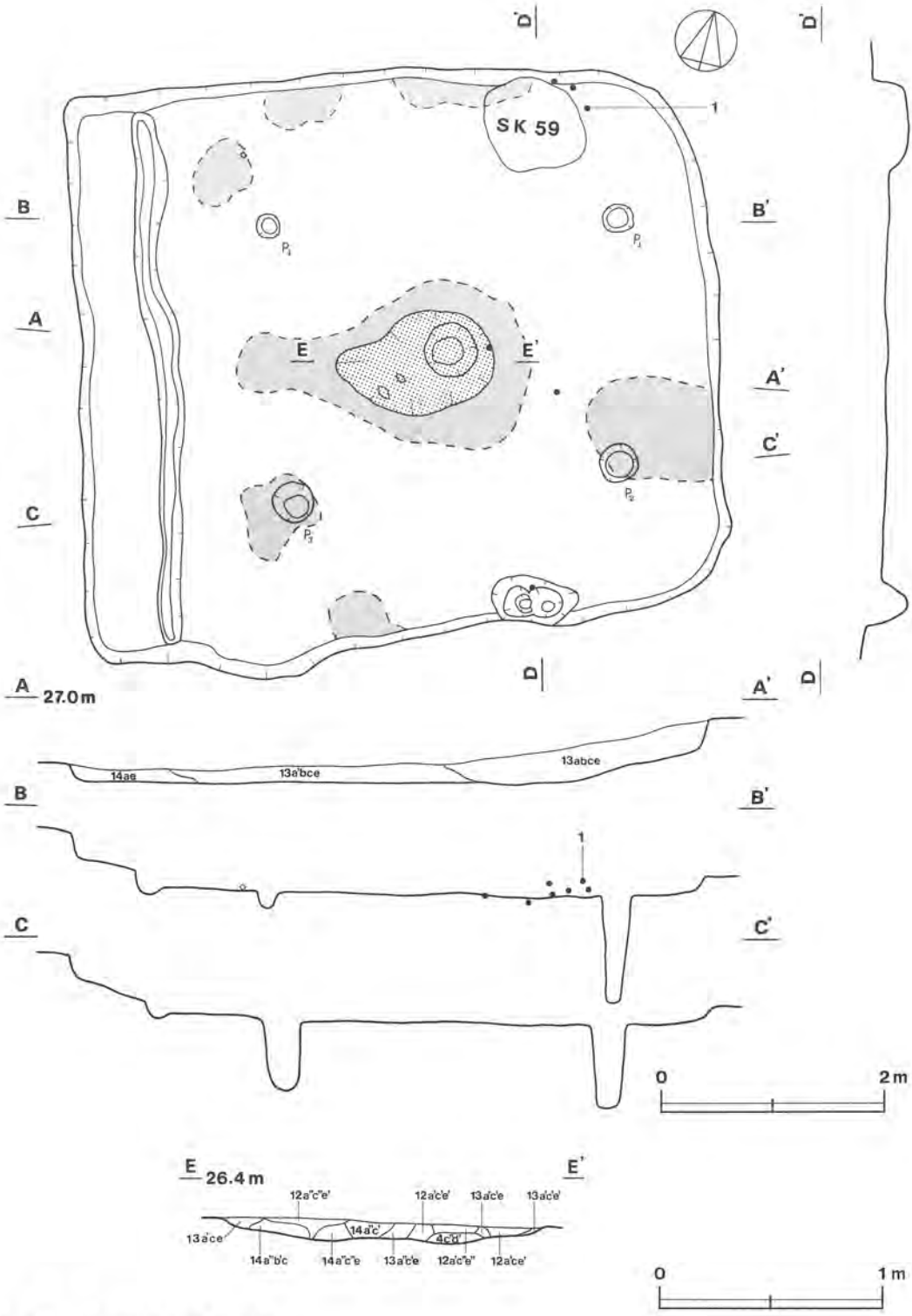
第30号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	壺 弥生式土器	B(13.0)	胴部から頸部にかけての破片で、器厚をほぼ一定に保っている。胴部は弓なりに張って立ち上がり、頸部付近でやや垂直気味に立ち上がっている。外面は、胴部に付加条の縄文を施しており、頸部には無文帯を残している。	内面はナテ整形。	砂粒 暗褐色 普通	30% P86

### 第34号住居跡 (第34図)

本跡は、2次調査区のB5e<sub>2</sub>区を中心に確認され、第8号住居跡の南東側13m程に位置している。また、本跡の北側壁付近が第59号土坑に切られている。

平面形は、長軸5.84m・短軸5.22mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-68°-Eを指している。壁は、西側壁が生活道路下に延びていたため著しく攪乱を受けて不明である。各ピットと壁の位置関係から判断すると、西側壁は床面に残された溝状の落ち込み付近にあったものと考えられる。他の壁は、床面から内彎した後に外傾して立ち上がっている。壁の残存高は8~26cmである。床面はロームで、壁周辺から中央部にかけてやや皿状に低くなり、貯蔵穴の北西部、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間、P<sub>3</sub>と壁の間の3か所が部分的に硬く締まっている。他は締まりが良くない。なお、北側壁に接して、第59号土坑が床面を切っている。また、焼土が床面上のいたる所に堆積しており、本跡は焼失家屋と思われる。ピットは4か所検出され、全て支柱穴である。規模は長径24~36cm・短径23~35cm、深さは、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の順に98・80・64・67cmである。炉は、床面の中央部に位置し、平面形は径144×90cmの不整楕円形で、床面を皿状に7cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には暗赤褐色の焼土が堆積している。炉床は、強い火熱を受けてロームが赤レンガ状に赤変硬化している。貯蔵穴



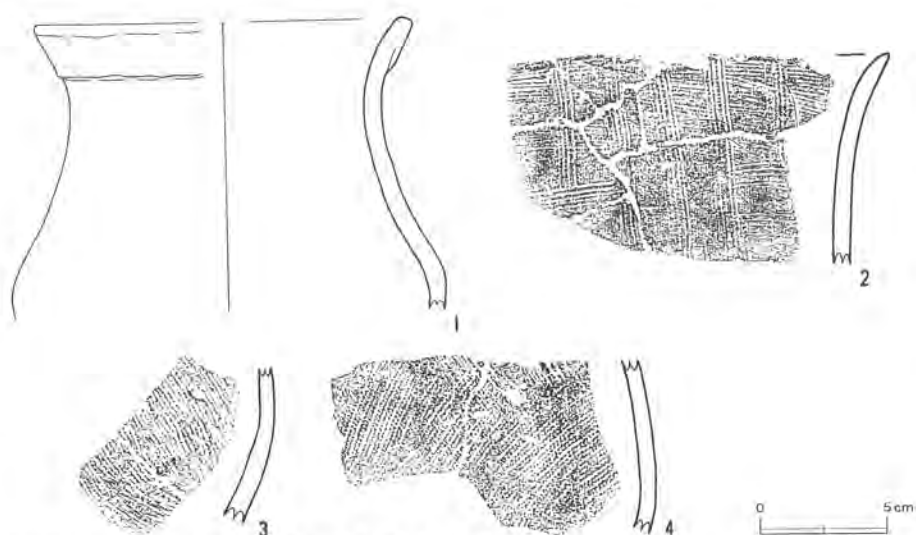
第34图 第34号住居跡実測図

は、南東側壁に接して位置し、平面形は径80×39cmの長楕円形を呈し、深さ26cm程の播鉢状に掘り凹めている。床面積は約27.5㎡である。

覆土は、大部分が中量のローム小ブロックとローム粒子を含む暗褐色土で、東側に少量のローム粒子と微量の炭化粒子を含む褐色土が、それぞれ締まって自然堆積している。

遺物は、北東コーナー部床面から第35図1の壺の胴中央から口縁部にかけての破片が出土したほかに、東側壁近くの床面や貯蔵穴内から弥生式土器片13点、床面直上から弥生式土器片23点、北側の覆土上位から土師器片21点が出土している。

遺物とその出土状況から判断して、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



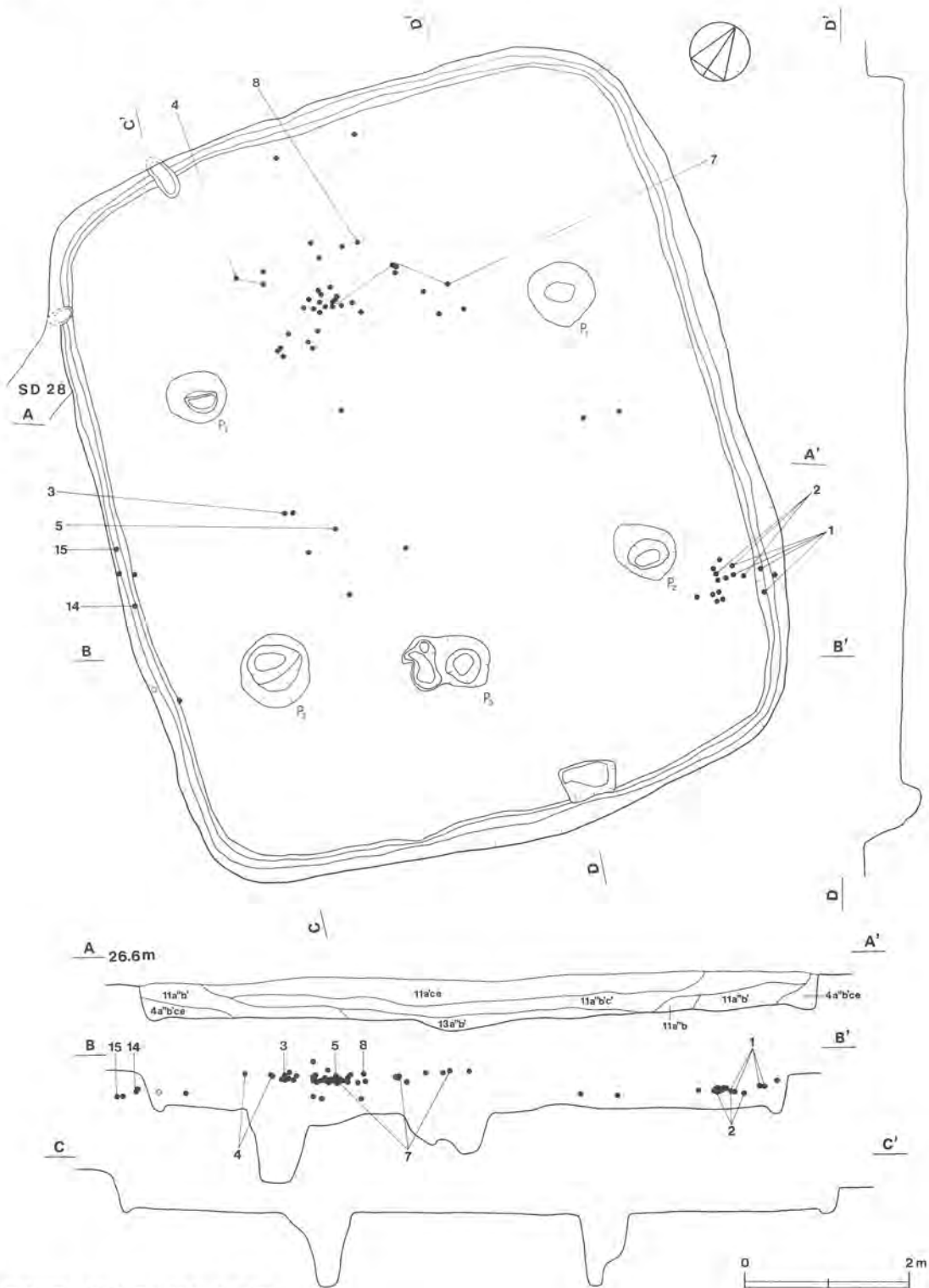
第35図 第34号住居跡出土遺物実測・拓影図

### 第34号住居跡出土土器観察表

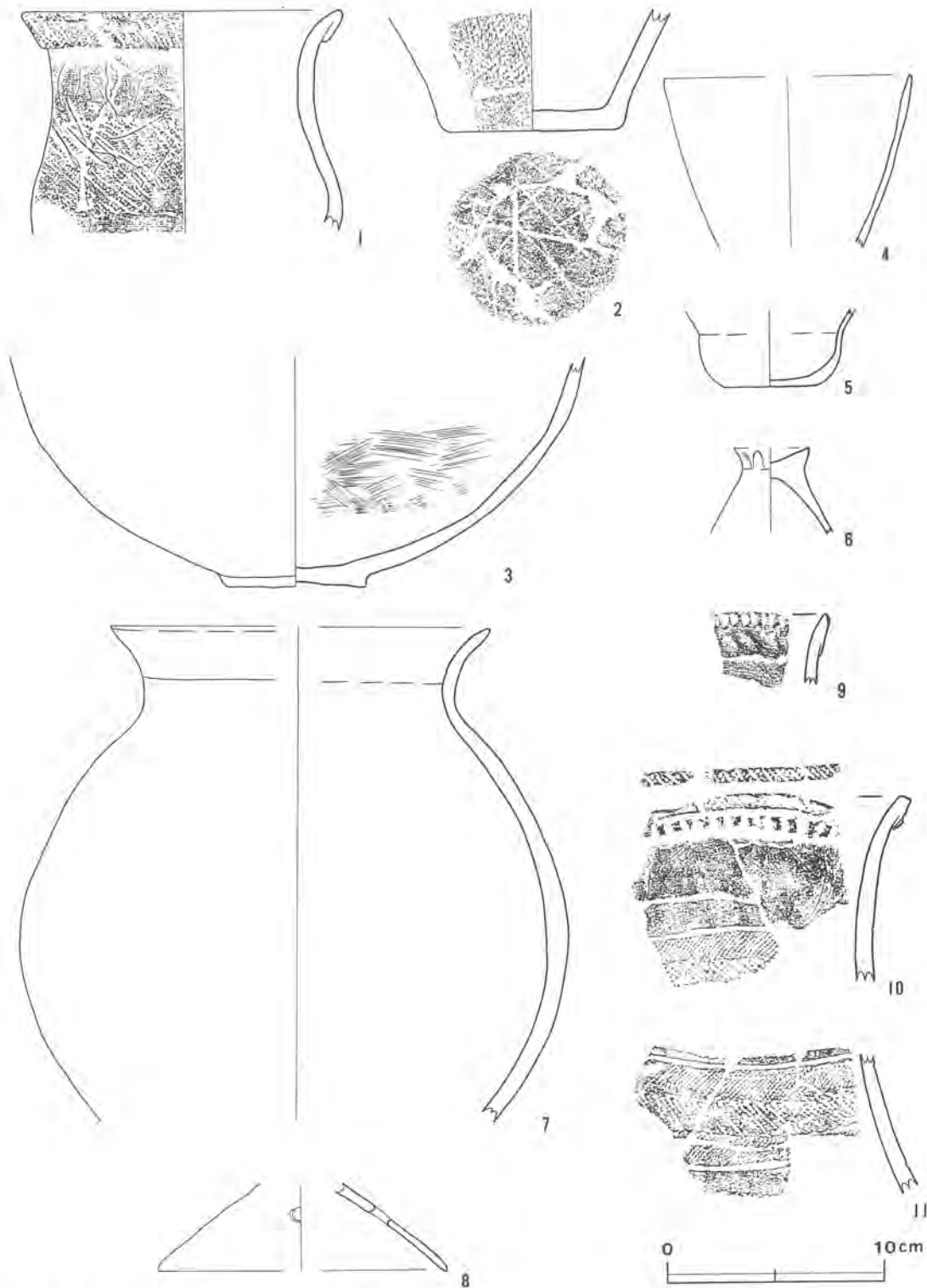
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 1	壺 弥生式土器	A(15.2) B(11.6)	胴上半部から口縁部にかけての破片で、器厚をほぼ一定に保っている。胴中央部から内彎してつばまり、頸部から口縁部にかけてやや外反して開き、緩いS字状を呈している。口縁部は複合口縁である。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒 に濃い橙色 普通	5% P222

第35図の2～4は第34号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は口縁部片で、櫛描による直線文を横位・縦位に施している。3は胴部片で、付加条の縄文を施している。4は胴部片で、付加条の縄文を羽状に施している。

第37号住居跡 (第36図)



第36図 第37号住居跡実測図



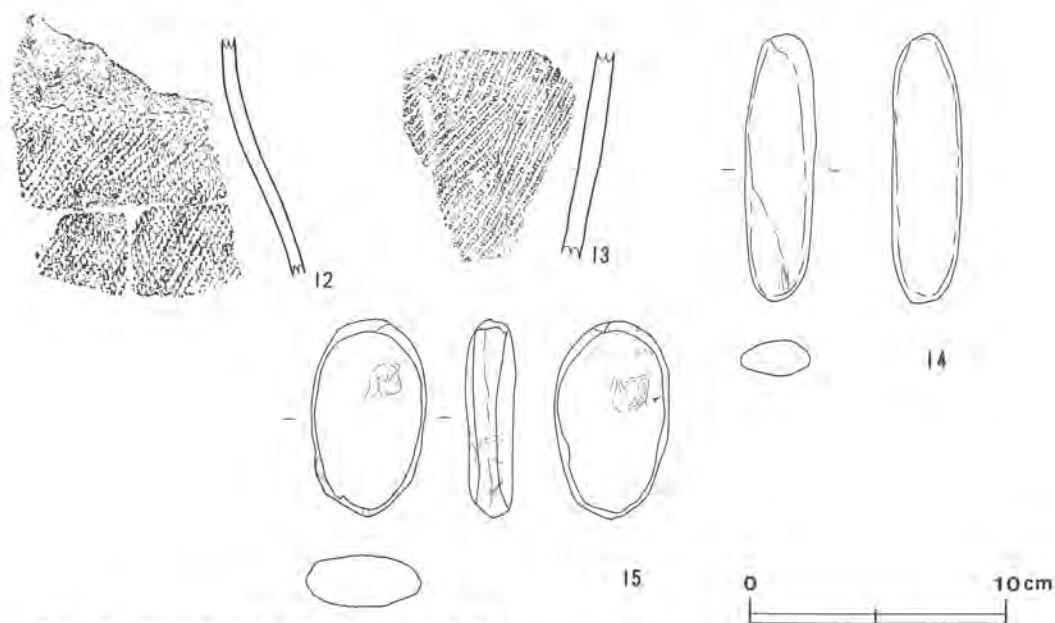
第37图 第37号住居跡出土遺物実測・拓影図-1

本跡は、2次調査区のB5<sub>g</sub>区を中心に確認され、第34号住居跡の東南東側25mに位置している。また、本跡は南西部が第28号溝に切られている。

平面形は、長軸9.62m・短軸8.00mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-49°-Wを指している。壁は、北西側壁の一部で上半分程が第28号溝に切られている。北東側壁は、床面から続く壁溝と一体になって壁溝底から外傾し、その他は壁溝と一体になり壁溝底からはほぼ垂直に立ち上がっている。壁の残存高は25~50cmである。壁溝は、浅いU字状を呈して幅20~41cm、深さ2~13cmで壁下を全周している。床面はロームで、全体的に壁付近から中央部にかけて浅い皿状になり、良く締まっている。特にP<sub>5</sub>と南東壁の間と貯蔵穴の周辺は硬く締まっている。ピットは5か所検出され、支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>である。規模は長径74~91cm・短径63~86cm、深さは90~93cmである。P<sub>5</sub>の深さは54cmである。炉は、検出されなかった。貯蔵穴は、南東側壁に接して位置し、平面形は径70×45cmの長方形で深さ24cm程の鍋底状に掘り凹めている。床面積は約71m<sup>2</sup>である。

覆土は、レンズ状に自然堆積している。上層に中量のローム粒子、少量の焼土粒子と炭化粒子を含む黒褐色土、中層に多量のローム粒子・中量のローム小ブロック等を含む黒褐色土、下層に中量のローム粒子・ローム小ブロック等を含む暗褐色土、壁際には多量のローム粒子・中量のローム小ブロック等を含む黒褐色土や極暗褐色土が、それぞれ締まって堆積している。

遺物は、東側壁寄りからは第37図1の弥生式土器の壺の胴中央から口縁にかけてや2の甕の胴下半部、貯蔵穴底面近くから弥生式土器片1点、床面直上と壁溝内から弥生式土器片52点、第38図14・15の敲石2点が出土している。第37図3・7の甕形土器、4・5の埴形土器とその口縁部、



第38図 第37号住居跡出土遺物実測・拓影図-2



6の器台形土器、8の高坏形土器の脚部等の土師器が出土しているが流れ込みと考えられる。

遺物とその出土状況、柱穴等の配列から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

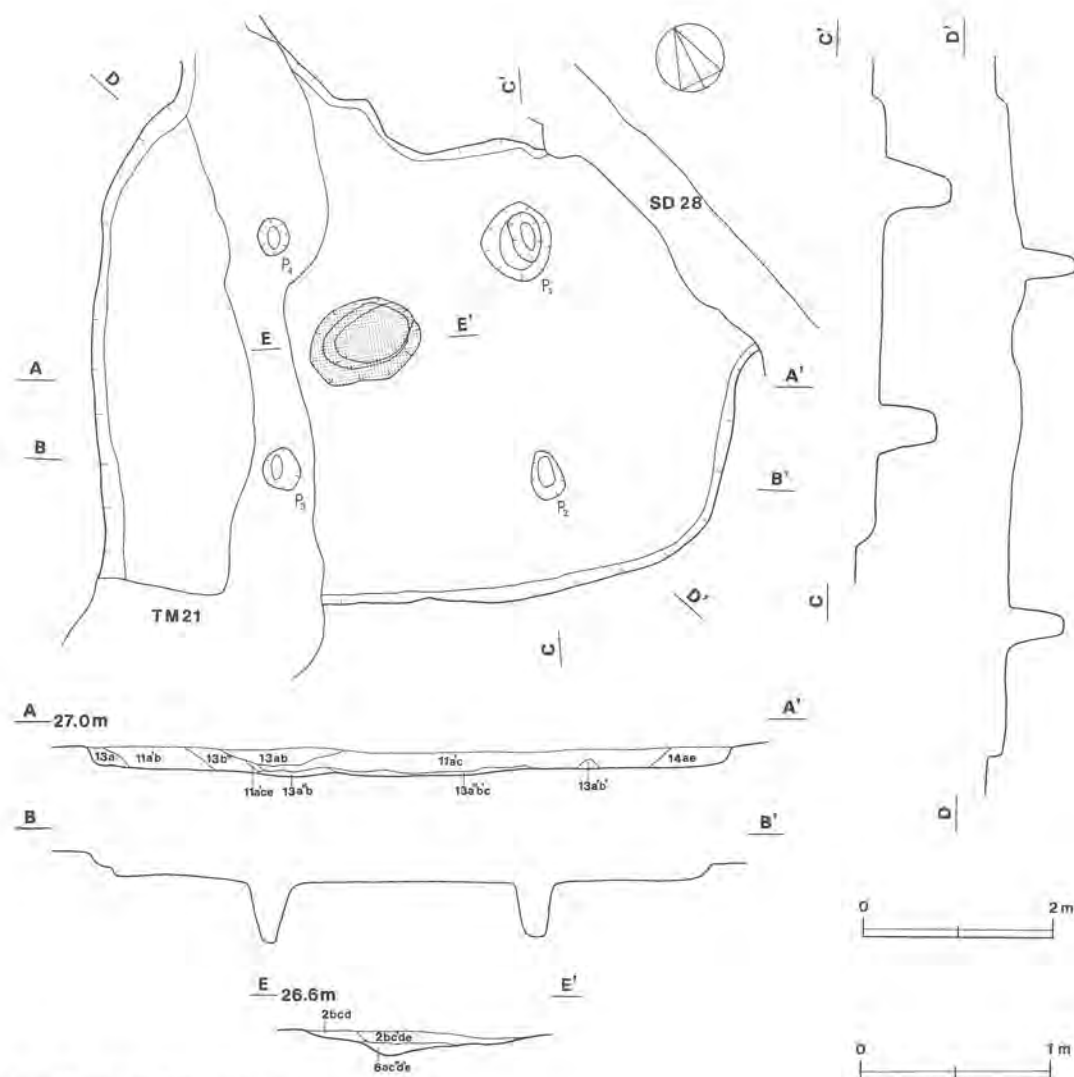
第37・38図の9～13は第37号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。9・10は折返し口縁部片である。9は口唇部に棒状工具による押圧を施している。10は口縁部下端に棒状工具による押圧を施し、頸部上半を無文帯とする。下半に沈線を1条廻らして下に付加条の縄文を羽状に施している。11は頸部片で、横位の沈線と付加条の縄文が羽状に施されている。12は頸部から胴部にかけての破片で、無文帯の下に付加条の縄文を施している。13は胴部片で、付加条の縄文を施している。

第37号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	壺 弥生式土器	A 15.1 B (10.5)	胴上半部から口縁部にかけての破片である。胴上半部は器厚をほぼ一定に保ち、口縁部に至ってやや厚くなってくる。口縁部は複合口縁である。外面は胴上半部、口縁部、口唇部に付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒 褐色 普通	35% P12
2	甕 弥生式土器	B (5.7) C 8.0	底部から胴下半部にかけての破片である。底部は平底で、不鮮明な木葉痕がある。胴下半部は器厚を一定に保ちながら、底部から直線的に外傾して立ち上がっている。外面は付加条縄文を施しているが、縄文がやや摩滅している。	内面はナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	10% P13
3	甕形土器 土師器	B (10.8) C 6.6	底部は平底で、中央部がやや凹む。体部は器厚を一定に保って内彎して立ち上がっている。内面の一部に輪積痕と剝離痕がある。やや粗雑な作りである。	底部・胴部の内面はハケ目整形後、篋ナデ整形。底部外面篋削り整形。胴部外面はハケ目整形後、篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	15% P231
4	埴形土器 土師器	A「11.6」 B (8.1)	頸部から口縁にかけての破片で、器厚を一定にしてゆるく内彎して立ち上がり、口縁端部でやや尖り気味になる。	内・外面篋ナデ整形後、ナデ整形。内・外面に朱を施している。	砂粒 にぶい橙色 普通	15% P234
5	埴形土器 土師器	B (3.6) C 4.2	底部は丸底であるが平底に近く安定感がある。胴部は底部から内彎して立ち上がり、上半部ではほぼ垂直になり、頸部はゆるい「く」の字状を呈し、口辺部は直線的に立ち上がっている。	内・外面とも篋ナデ整形後、内面だけナデ整形。内面に剝離痕が見られる。	砂粒 灰褐色 普通	35% P235
6	器台形土器 土師器	A「3.4」 B (4.0)	小形の器台である。脚部は「ハ」の字状に開いている。器受部は皿状を呈す。頸部の下位は2/3程欠損。	脚部内・外面、器受部内・外面ともナデ整形。	砂粒 浅黄橙色 普通	50% P239

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 7	甕形土器 土師器	A「17.8」 B「23.2」	胴下半部から内彎して立ち上がり、中央部で最大径を測り、やや器厚を増す。上半部から口縁部にかけてやや器厚を減じながら、頸部はゆるい「く」の字状を呈し、口縁部は外反している。粗雑な作りである。	胴部内・外面とも篋削り整形。頸部、口縁部内・外面指ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	25% P237
8	高坏形土器 土師器	B「4.1」 C「3.6」	脚部の1/3程の破片で、脚部はやや内彎気味ながら大きく開いて、中に2孔（推定4孔）を有している。裾部先端はやや尖る。	内・外面とも篋ナデ整形後、裾部内・外面指ナデ整形。	砂粒 に おい 橙色 普通	20% P236

第38号住居跡（第39図）



第39図 第38号住居跡実測図

本跡は、2次調査区のB5j<sub>9</sub>区を中心に確認され、第37号住居跡の南南西側6m程に位置している。また、本跡は東側で第28号溝に切られている。

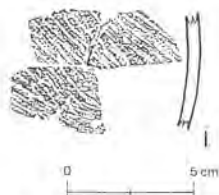
平面形は、推定長軸7.02m・短軸4.62mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-59°-Wを指している。壁は、古墳の周溝と溝に切られている部分を除けば、床面から内灣した後で外傾して立ち上がっている。壁の残存高は13~18cmである。床面はロームで、全体的に壁付近から中央部にかけて浅い皿状になり、縮まっている。ピットは4か所検出され、すべて主柱穴である。規模は長径39~84cm・短径34~74cm、深さはそれぞれ75・62・60・50cmである。炉は、床面の中央からやや北西側に位置し、平面形は径120×85cmの不整楕円形で、床面を12cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には暗赤褐色と極暗赤褐色の焼土が縮まって堆積している。炉床は強い火熱を受けたらしく、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約29m<sup>2</sup>である。

覆土は、レンズ状に自然堆積している。上層に中量のローム粒子・微量の焼土粒子を含む黒褐色土、下層に多量のローム粒子・中量のローム小ブロック等を含む暗褐色土、壁際には少量のローム粒子・微量の炭化粒子を含む褐色土が、それぞれ縮まって堆積している。

遺物は、炉の北西側床面から弥生式土器片16点が出土した。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

第40図の1は第38号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。



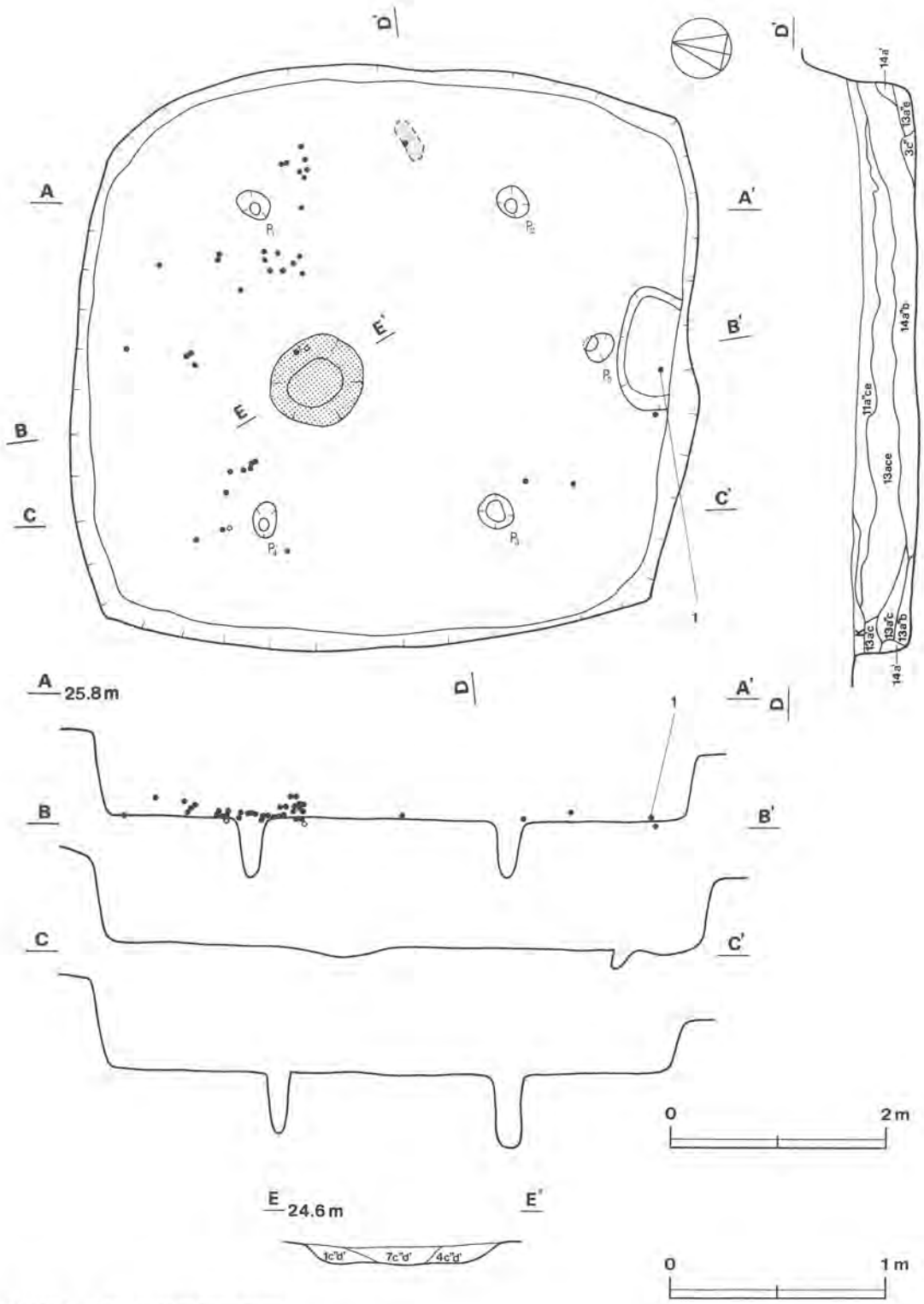
1は胴部片で、付加条の縄文を施している。

第40図 第38号住居跡  
出土遺物拓影図

#### 第40号住居跡 (第41図)

本跡は、2次調査区のZ4h<sub>1</sub>区を中心に確認され、第41号住居跡の北東側13m程に位置している。

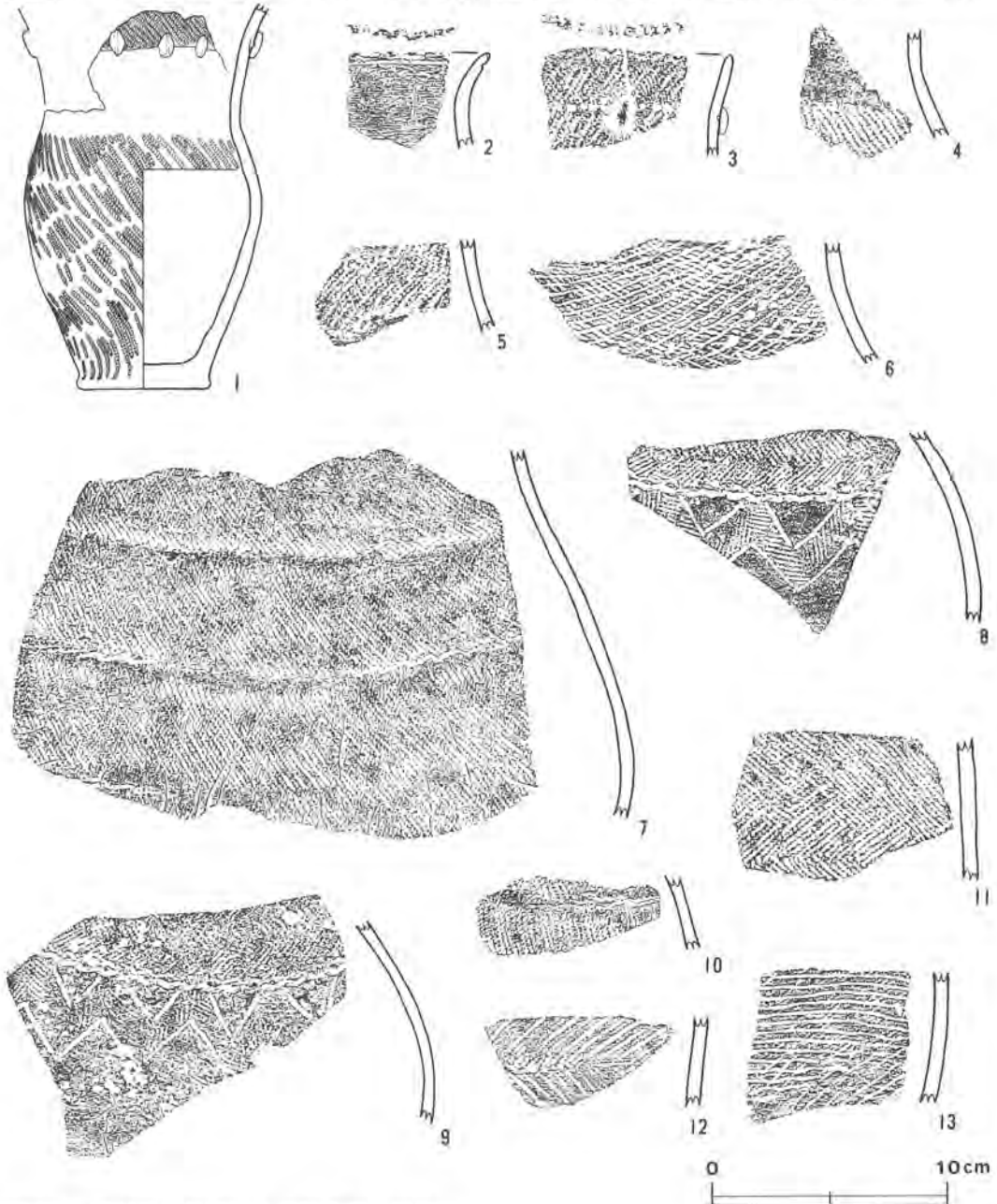
平面形は、長軸5.78m・短軸5.48mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-14°-Wを指している。壁は、床面から垂直に立ち上がっている。壁高は46~58cmである。床面はロームで、全体的に平坦で良く縮まっている。特に炉の周囲は硬い。ピットは5か所検出され、主柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>である。規模は長径31~35cm・短径24~32cm、深さは52~66cmである。P<sub>5</sub>は深さ22cmで外側に傾斜をしており、炉跡や他のピットとの位置関係から出入口に関するものと思われる。炉は床面の中央から北北西側に位置し、平面形は径83×91cmの楕円形で、床面を皿状に5cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、焼土小ブロックを含む暗赤褐色の焼土が縮まって堆積している。炉床は強い火熱



第41图 第40号住居跡実測図

を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。貯蔵穴は、P<sub>5</sub>と南側壁との間に壁と一体となり、平面形は径114×61cmの不整楕円形で、深さ7cm程の皿状に掘り凹めている。床面積は約26㎡である。

覆土は、レンズ状に自然堆積している。上層に多量のローム粒子・少量の焼土粒子や炭化粒子を含む黒褐色土、中層に少量の焼土粒子や炭化粒子と微量のローム粒子を含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子・少量のロームブロックと炭化粒子を含む褐色土、壁際には多量のローム粒子



第42図 第40号住居跡出土遺物実測・拓影図

等を含む褐色土が、それぞれ硬く締まって堆積している。

遺物は、貯蔵穴内から第42図1の弥生式土器の小形壺、北側床面から弥生式土器片が41点、覆土の上層から土師器片211点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

第40号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	小形壺 弥生式土器	B (16.3) C 5.7	底部は平底で小さいが、胴部等より器厚が厚く安定感がある。胴部から頸部、口縁部にかけて器厚をほぼ一定に保っている。胴部は底部からほぼ直線的に外傾して立ち上がり、胴上半部で内彎してややつぼまり、頸部から再び外反気味に口縁部に立ち上がっている。口縁部は複合口縁である。外面は胴部と口縁部に付加条の縄文を施し、頸部に無文帯を残している。また、複合口縁部下端には1個単位の瘤を3個(推定10個)付けている。	内面は篋ナデ整形後、頸部～口縁部にかけてナデ整形。	砂粒 褐色 普通	85% P14

第42図の2～13は第40号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2・3は口縁部片である。2は口縁部に沈線を1条廻らし、口唇部に棒状工具による押圧を施している。3は付加条の縄文を施した上に刺突を加え、瘤を1個貼付けている。口唇部には縄文を施している。4は頸部片で、無文帯の下に付加条の縄文を施している。5～13は胴部片である。5・7・10は付加条の縄文を施したものであり、6・13は付加条の縄文を施したものである。8・9は単節の縄文を施した上にS字状の結節縄文を施している。さらに、篋描による鋸歯状文で区画して外部を無文とし、朱を施している。11・12は付加条の縄文を羽状に施している。

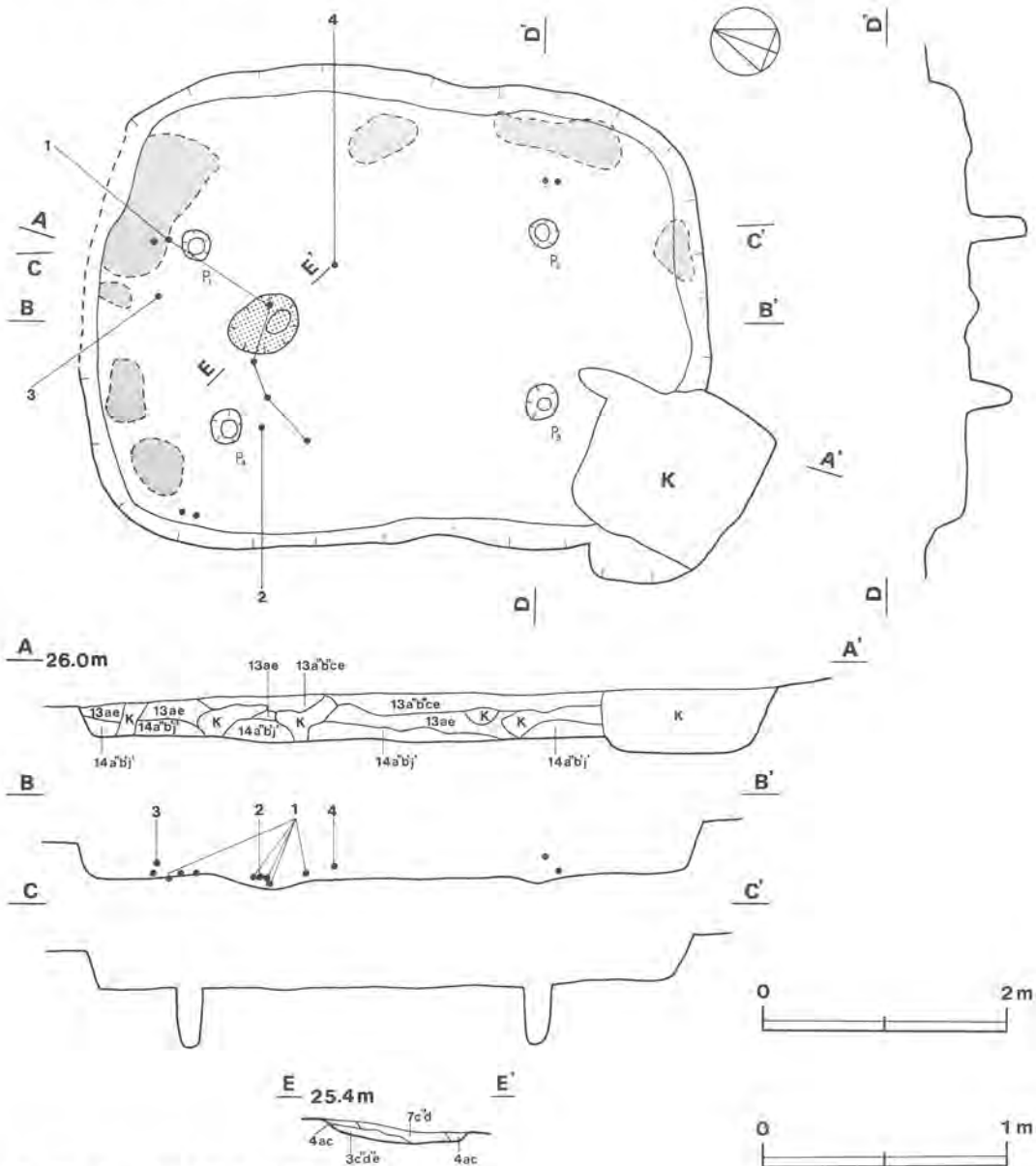
#### 第41号住居跡(第43図)

本跡は、2次調査区のZ3j<sub>0</sub>区を中心に確認され、第40号住居跡の南西側13m程に位置している。

平面形は、長軸5.14m・短軸3.92mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-24°-Wを指している。壁は、大部分が耕作による攪乱を受けている。残存壁は、床面から外傾して立ち上がっている。壁の残存高は13～54cmである。床面はロームで、図化できない程度の浅くて小さい凹みがあるが、全体としては平坦で良く締まっている。また、床面には焼土が多量に検出されたので、床面の範囲が比較的明確にとらえられた。なお、壁際にはさらに多量の焼土が堆積していることから、本跡は焼失した家屋と思われる。ピットは4か所検出され、すべて支柱穴である。規模は長径26～30cm・短径24～27cmの円形で、深さは40～51cmである。炉は、床面の中央から北北西側に位置し、

平面形は径60×45cmの楕円形で、床面を8cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、極暗赤褐色や赤褐色の焼土が堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約15.5㎡である。

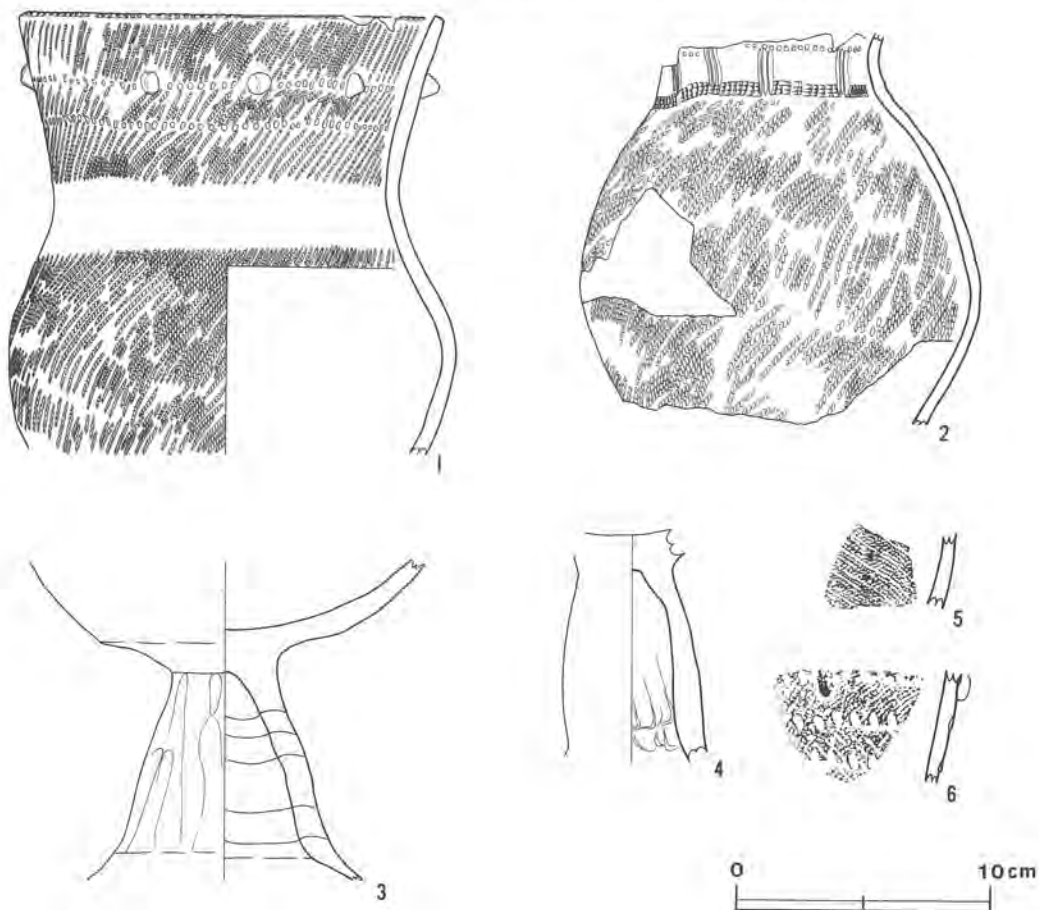
覆土は、攪乱を受けている部分を除くと、レンズ状に自然堆積の様相を示している。上層に多量のローム粒子・ローム小ブロック、少量の焼土粒子・炭化粒子を含む暗赤褐色土、中層に少量のローム粒子や微量の炭化粒子を含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子・中量のローム小ブロック等を含む褐色土が、それぞれ縮まって堆積している。



第43図 第41号住居跡実測図

遺物は、第44図1・2の弥生式土器の壺が主に北側床面から出土し、覆土上位からは流れ込みと思われる3・4の高坏形土器とその脚部など古墳時代中期の土師器片64点や須恵器片1点が出土した。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第44図 第41号住居跡出土遺物実測・拓影図

第41号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	壺 弥生式土器	A 16.8 B (17.7)	胴中央部から口縁部にかけての土器で、器厚をほぼ一定に保つ。胴上半部で最大径を測り、そこから内彎して頸部でつぼまり、頸部から直線的に外傾して立ち上がっている。外面は胴部、口縁部に付加条の縄文を施している。口縁部には棒状工具による刺突文を二重に廻らせている。また、上位の刺突文上には1個単位の瘤を10か所付けている。	胴部内面は篋ナデ整形。口縁部内・外面、頸部外面はナデ整形。	砂粒・雲母にふい褐色普通	50% P15



図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 2	壺 弥生式土器	B(15.7)	胴中央部から頸部の破片で、器厚をほぼ一定に保つ。胴中央部で最大径を測り、そこから内彎して頸部でつぼまり、頸部上位で外反気味になっている。胴部外面は付加条の縄文を施している。頸部は下位に簾状文を、上位に刺突文を廻らせている。この刺突文下から簾状文上の間を縦方向に柳描文を施し、区画している。	胴部内面は篋ナデ整形。頸部内面は指ナデ整形。	砂粒にぶい橙色普通	45% P16
3	高坏形土器 土師器	B(13.6)	脚部は坏底部からやや膨らみながら裾部に至り、裾部は開いている。坏底部は平坦で、坏部は底部から器厚を一定に保ち、やや内彎気味に大きく開く。また、坏底部外面上位には不明瞭な稜が見られる。	脚部内面に輪積痕が多数残り、外面は篋磨きを施している。坏部内・外面とも篋ナデである。脚部外面、坏部内・外面に剝離痕がある。	砂粒橙色普通	70% P252
4	高坏形土器 土師器	B(9.4)	脚部は中位部がやや膨らんだ円筒状をしている。	内面は輪積痕が全く見えない程ヘラ状工具でつぶしている。外面は篋ナデ整形を施している。	砂粒橙色普通	40% P253

第44図の5・6は第41号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5は付加条の縄文を施した胴部片である。6は付加条の縄文を施した上に棒状工具による刺突を3段に加えた胴部片である。

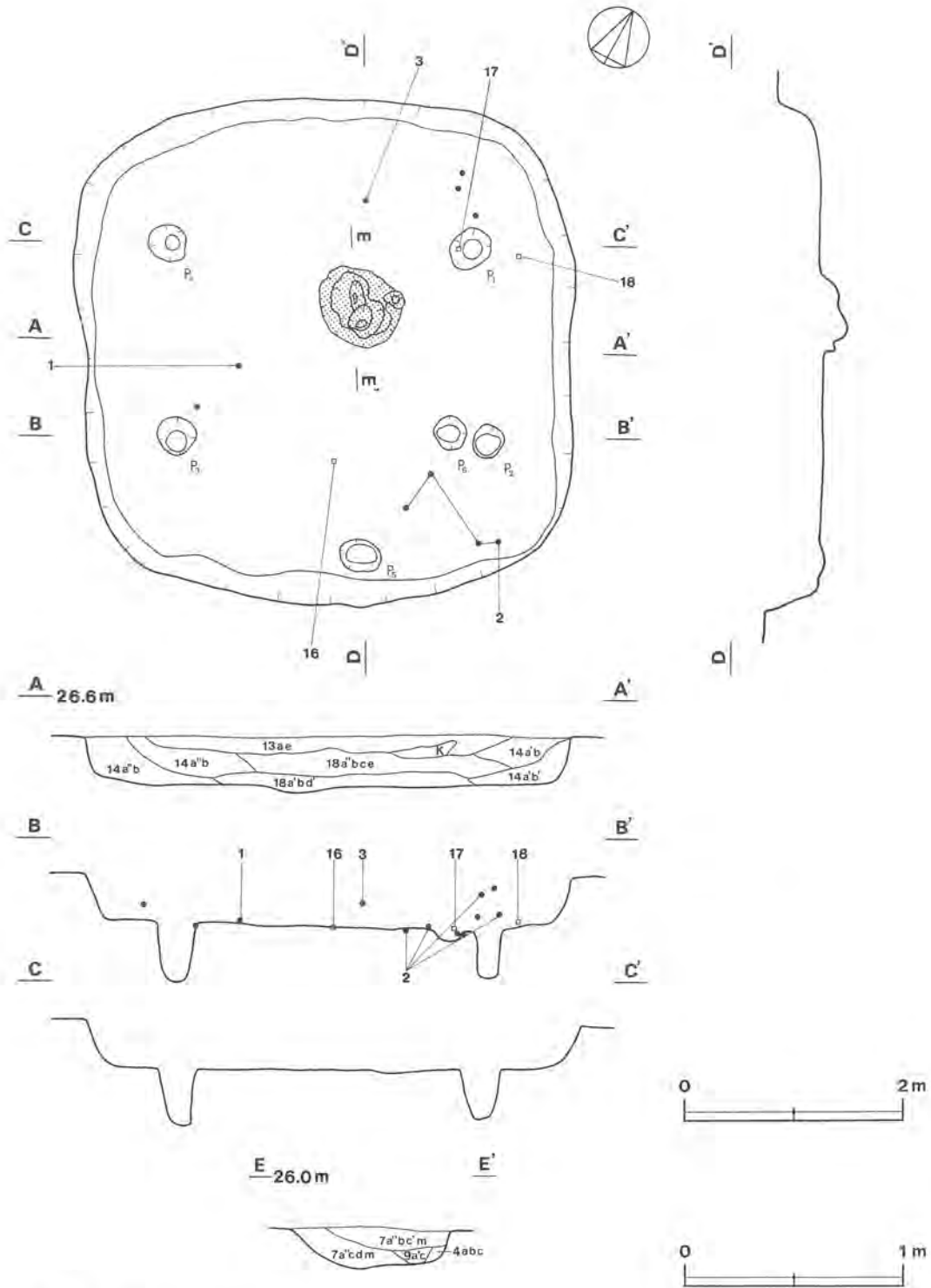
### 第43号住居跡（第45図）

本跡は、2次調査区のZ2j<sub>0</sub>区を中心に確認され、第2号住居跡の北側22m程に位置している。

平面形は、長軸4.68m・短軸4.52mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-38°-Wを指している。壁は、床面から外傾して立ち上がっている。壁高は32~53cmである。床面はロームで、全体的に平坦で良く締まっている。特に、P<sub>3</sub>から炉跡とP<sub>4</sub>方向にかけての部分は硬く締まっている。ピットは6か所検出され、支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>である。規模は長径31~41cm・短径26~36cm、深さはそれぞれ43・47・57・55cmである。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>の深さは4・10cmである。炉は、床面の中央からやや北側に位置し、平面形は径82×70cmの不整楕円形で、床面を鍋状に25cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には暗赤褐色の焼土が締まって堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化して凹凸を示している。床面積は約16m<sup>2</sup>である。

覆土は、レンズ状に自然堆積している。上層に少量のローム粒子・極少量の炭化粒子と焼土粒子を含む暗褐色土、中層に多量のローム粒子・少量のローム小ブロックと土器片等を含む黒褐色土や褐色土、下層に多量のローム粒子・中量のローム小ブロックを含む黒褐色土、壁際にはローム粒子等を含む褐色土が、それぞれ締まって堆積している。

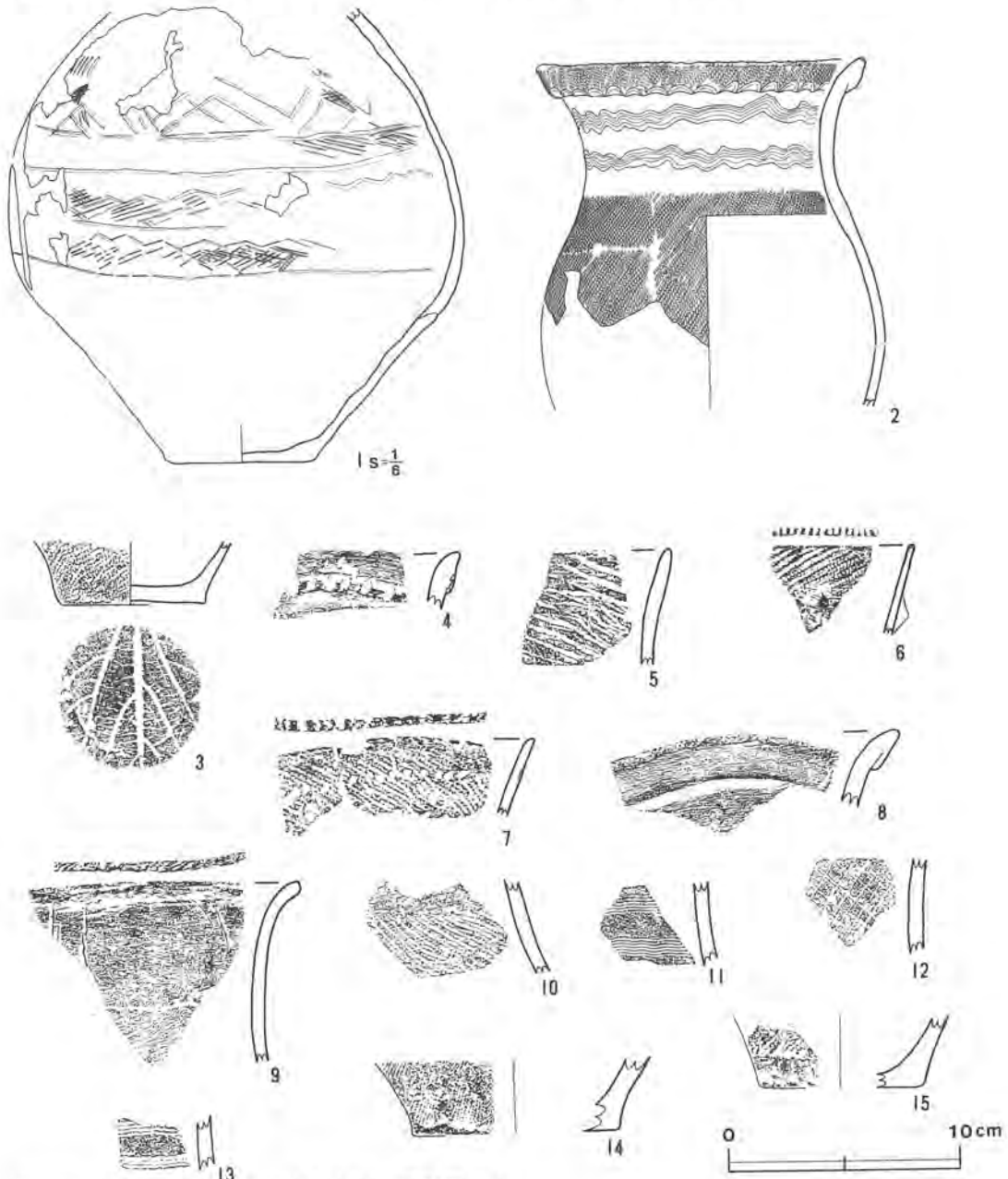
遺物は、第46図1の弥生式土器の大形壺がP<sub>3</sub>の北側床面から、2の壺が東側の床面から10cm程



第45图 第43号住居跡実測図

上位に、3の壺の底部が北西側の覆土中位に出土している。このほかに、第47図16の砥石、17の凹石、18の石皿が北東側の床面から出土している。

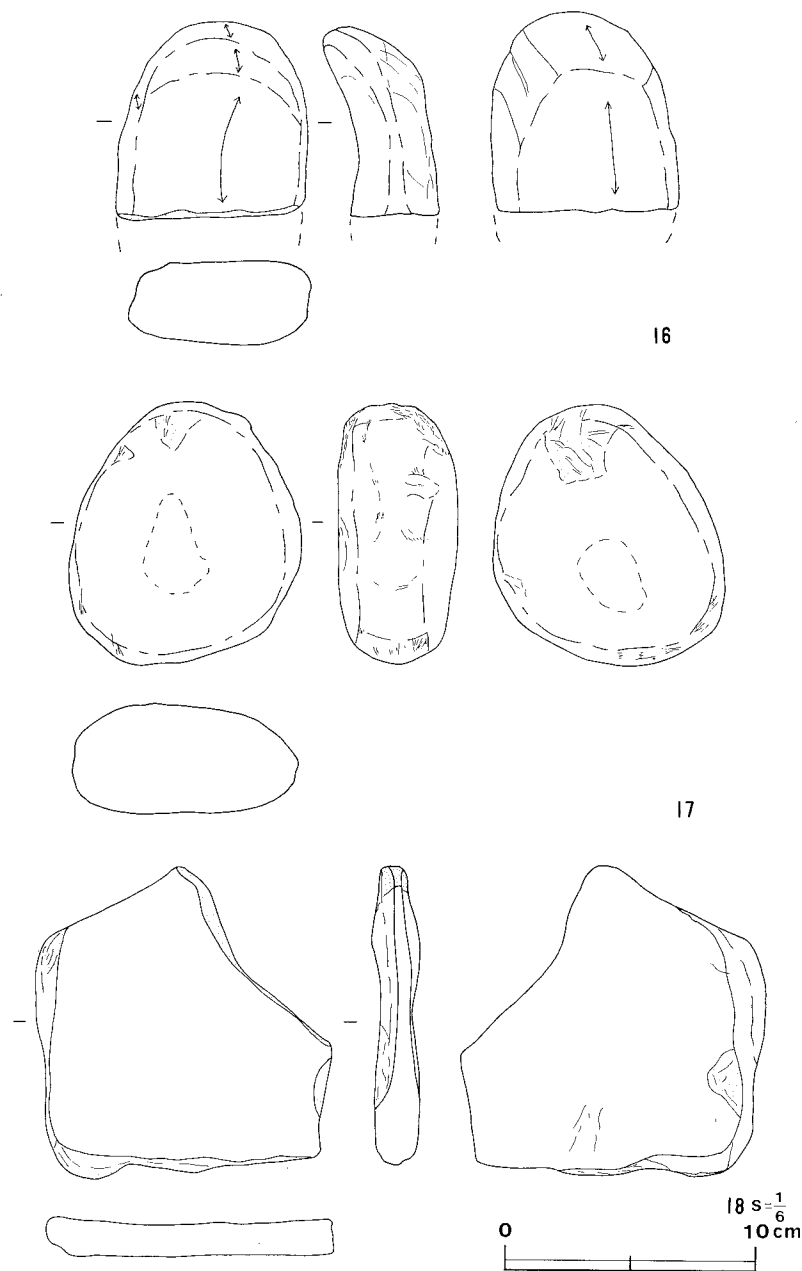
遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第46図 第43号住居跡出土遺物実測・拓影図-1

第46図の4～15は第43号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4～9は口縁部片である。4は棒状工具による押圧を加えたものであり、5は撚糸文を施したものである。6は付加条の縄文を施し、瘤を1個貼付けている。口唇部には縄文原体を押圧している。7は付加条の

縄文を施した上に押圧を加えている。口唇部には縄文原体を押圧している。8は折返し口縁で、口唇部に縄文を施している。9は口唇部に縄文を施している。10～13は頸部片である。10は無文帯の下に付加条の縄文を、11・13は櫛描による直線文を横位に施している。12は篋描による格子文を施している。14・15は無文の底部片である。14・15は胴部下端に付加条の縄文を施している。



第47図 第43号住居跡出土遺物実測図-2

### 第43号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	大形壺 弥生式土器	B (39.0) C 12.8	底部は平底。胴部は底部から外反気味に立ち上がり、中央部で内彎して最大径を測る。ここから更に内彎してつばまる。胴中央部は下側に直線、上側に山形の沈線を1単位として廻らし、その間へ燃糸文を充填し、これを2単位で施文している。胴上半部へは2本の沈線で区画した横帯状と山形文の間を燃糸文で充填している。また、施文の抜けている所へは朱を施している。さらに、その山形文の上へ4本1単位の縦長の棒状浮文(瘤)を2単位(推定4単位)貼付している。	内面はナデ整形。外面はナデ整形後、胴下半部に篋磨き整形。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	65% P17
2	壺 弥生式土器	A 14.3 B (15.1)	胴中央部から口縁までの破片で、頸部から口縁までの器厚は胴部よりやや厚い。胴中央部で最大径を測り、そこから頸部にかけて内彎し、頸部から口縁部にかけて緩く外反して立ち上がっている。口縁部は複合口縁である。外面の胴部、口縁部、口唇部にはLRの付加条の縄文を施している。また、頸部無文帯へは櫛歯による波状文を廻らしている。さらに、複合口縁部下端へは棒状工具で押圧している。	内面と頸部外面はナデ整形。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	45% P18
3	壺 弥生式土器	B (2.7) C 6.2	底部は平底で小さいが、中央部がやや凹み、鮮明な木葉痕がある。胴部は底部から器厚をやや減しながら直線的に外傾して立ち上がっている。胴部外面には付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒・石英 橙色 普通	10% P19

### 第44号住居跡 (第48図)

本跡は、2次調査区のA3b<sub>2</sub>区を中心に確認され、第43号住居跡の南東側10m程に位置している。また、本跡の南西側が第4号古墳の周溝に、南側が第62号土坑に切られている。

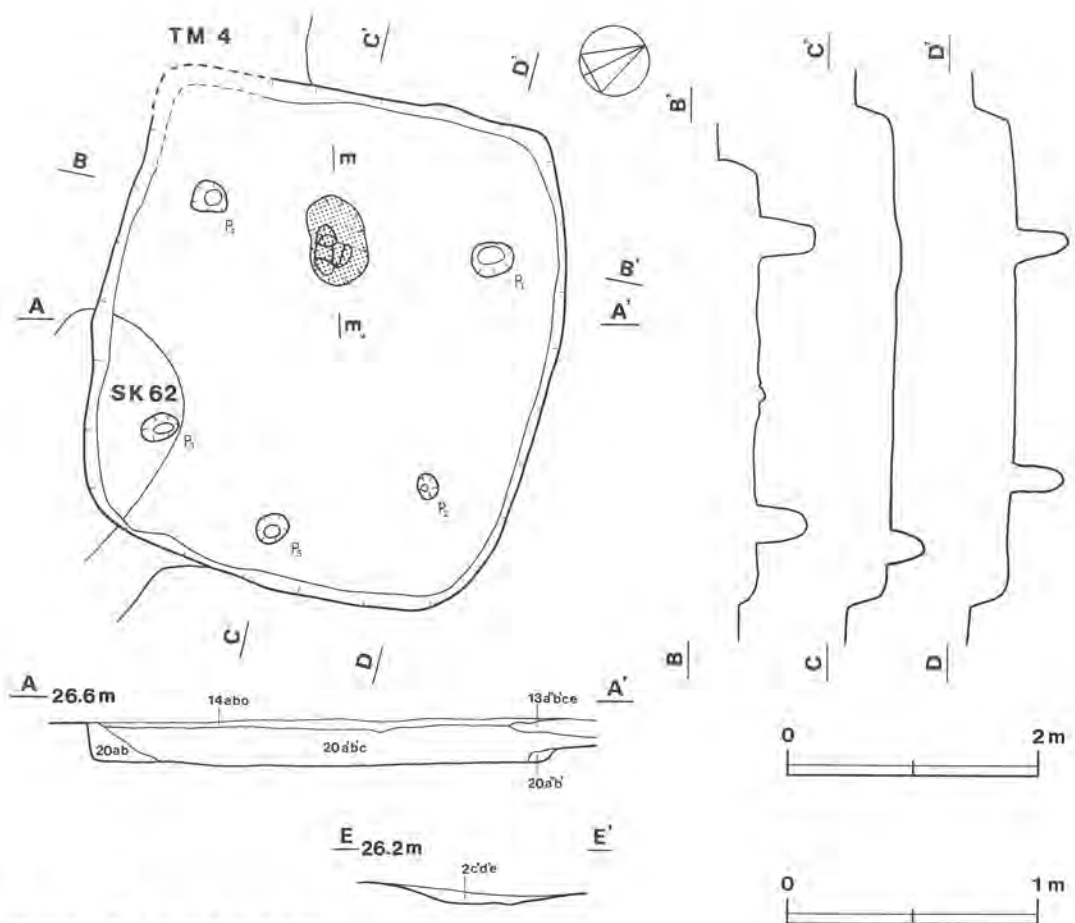
平面形は、長軸4.02m・短軸3.64mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-51°-Wを指している。壁は、周溝に南西側壁が15cm程、西側コーナー部で壁と床が切られている。他は床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁の残存高は14~33cmである。床面はロームで、全体的に平坦で良く締まっている。ピットは5か所検出され、支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>である。規模は長径20~34cm・短径16~30cm、深さは40~48cmである。P<sub>5</sub>の深さは31cmで浅く、その位置から出入口に関するピットと思われる。炉は、床面の中央から北西側に位置し、平面形は径70×46cmの不整楕円形で、床面を皿状

に7cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には暗赤褐色の焼土と焼土小ブロックが締まって堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化して凹凸を示している。床面積は12㎡である。

覆土は、上層に少量のローム粒子・ローム小ブロック・砂を含む褐色土、下層に中量のローム粒子・少量のローム小ブロック等を含む褐色土、壁際には少量のローム粒子と極少量のローム小ブロックを含む褐色土が、それぞれ締まって自然堆積している。

遺物は、床面直上と覆土中から弥生式土器片50点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

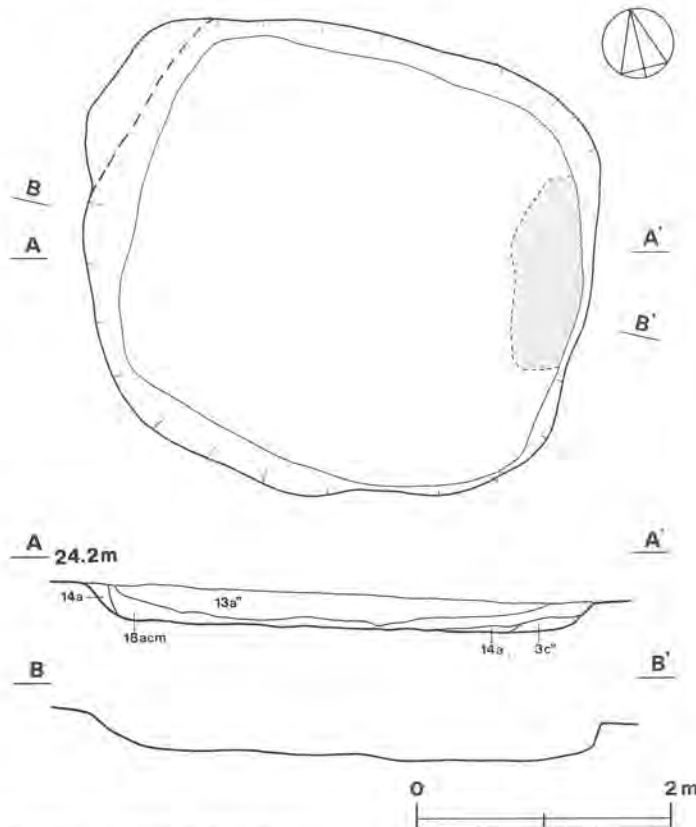


第48図 第44号住居跡実測図

第53号住居跡 (第49図)

本跡は、2次調査区のB11e<sub>s</sub>区を中心に確認され、第58号住居跡の北東側5m程に位置している。

平面形は、長軸4.00m・短軸3.56mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-54°-Wを指している。壁は、床面からゆるやかに立ち上がっている。壁高は22~32cmである。床面はロームで、凹凸をともなったゆるい起伏を示し、締まっている。また、南東側壁付近の床面には、ローム粒子を含む褐色土が堆積し、その上に多量の炭化材を含む焼土が検出された。このことから本跡は、住居が廃絶された後、しばらく時間が経過した後に焼失した家屋と思われる。ピット・炉は検出できなかった。床面積は約10.5㎡である。



第49図 第53号住居跡実測図

覆土は、上層に多量のローム粒子を含む暗褐色土、下層に少量のローム粒子と微量の焼土粒子・炭化材を含む黒褐色土がそれぞれ締まって堆積し、壁際には少量のローム粒子を含む褐色のソフトロームが自然堆積している。

遺物は、弥生式土器片が覆土中から75点出土している。

本跡は、床面に締まりがなく、ピット・炉・貯蔵穴等が検出されない等、当遺跡の住居跡とはややその性格を異にする。しかし、遺物や弥生時代の住居跡と覆土が類似していること等を考慮すると、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第50図 第53号住居跡出土遺物拓影図

第50図の1・2は第53号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は口縁部片で、付加条の縄文を施した上に刺突を加えている。口唇部には棒状工具による押圧を施している。2は頸部片で、櫛描による直線文を横位に廻らした下は付加条の縄文を施している。

第54号住居跡 (第51図)

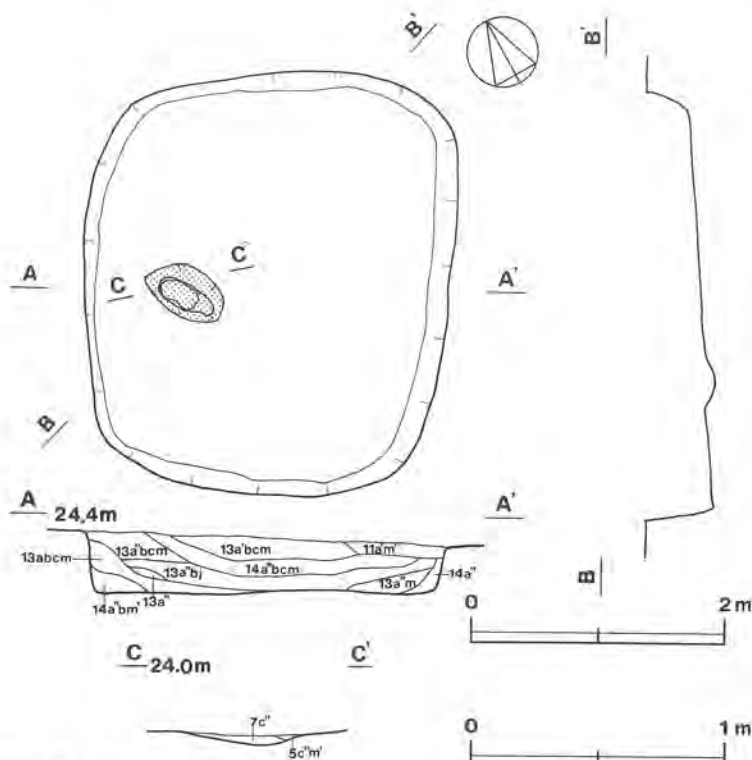
本跡は、2次調査区のB11f区を中心に確認され、第58号住居跡の東側2m程に位置している。平面形は、長軸3.40m・短軸2.90mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-29°-Eを指している。壁は、東側半分程が床面から外傾し、西側半分程はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は32~55cmである。床面はロームで、南側壁コーナー付近が軟らかい。他は良く締まって、北側から南側へ傾斜している。ピットは、壁内・外を精査したが検出できなかった。炉は床面の中央から西側に位置し、平面形は径66×39cmの楕円形で、床面を皿状に深さ4cm程掘り凹めている。炉内には暗赤褐色の焼土が締まって堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約7.5㎡である。

覆土は、レンズ状に自然堆積している。上層に多量のローム粒子と少量のローム小ブロック・

焼土粒子・炭化物を含む暗褐色土、中層に上層と同じ含有物を含んだ褐色土、下層に多量のローム粒子と少量のローム小ブロック・黒色粒子を含む暗褐色土、壁付近には褐色土が、それぞれ締まって堆積している。

遺物は、弥生式土器片が床面の中央部から2点、床面直上から22点、その他流れこみと思われる土師器片12点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期



第51図 第54号住居跡実測図



第52図 第54号住居跡出土遺物拓影図

の住居跡と考えられる。

第52図の1~3は第54号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1~3は胴部片で、1・2は付加条の縄文を、3は単節の縄文を施している。



第55号住居跡（第53図）

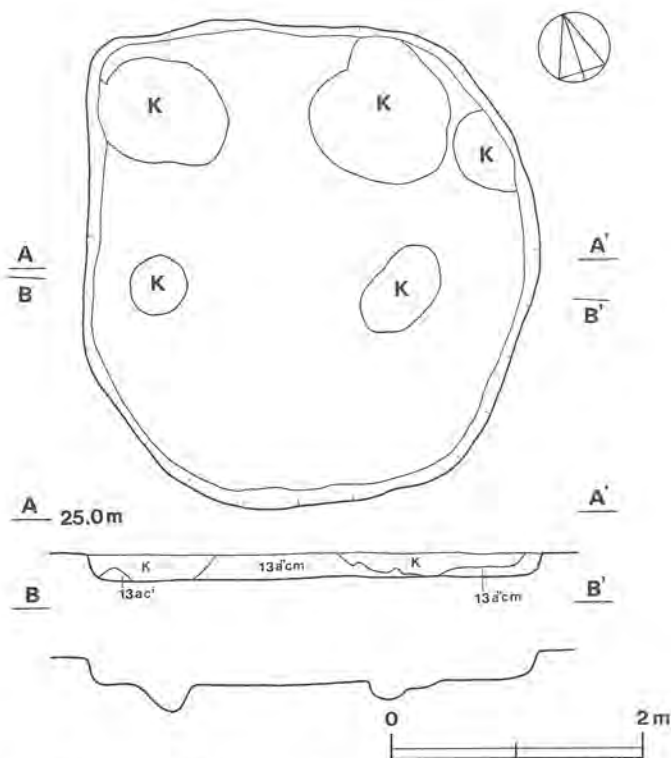
本跡は、2次調査区のB11i<sub>7</sub>区を中心に確認され、第58号住居跡の南東側8m程に位置している。

平面形は、長径3.86m・短径3.58mの不整円形を呈し、長径方向はN-25°-Eを指している。壁は、床面から垂直に近い角度で外傾して立ち上がっている。壁高は9~28cmである。床面はロームで、平坦であるが締まっていない。床面に見える穴は全て覆土がブカブカしている現代の攪乱穴で、本跡に伴うピットは、壁内・外を精査したが検出できなかった。床面積は約11m<sup>2</sup>である。

覆土は、半分ほど攪乱を受けているが、その他は中量のローム粒子と多量のソフトローム、微量の焼土粒子・炭化材を含む暗褐色土が締まって自然堆積している。

遺物は、南東側床面から弥生式土器片20点、その他攪乱土の中から土師器片20点が出土している。

本跡は、床面に締まりがなく、ピット・炉・貯蔵穴等が検出されない等、当遺跡の他の住居跡とはややその性格を異にしている。しかし、遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の遺構と考えられる。



第53図 第55号住居跡実測図

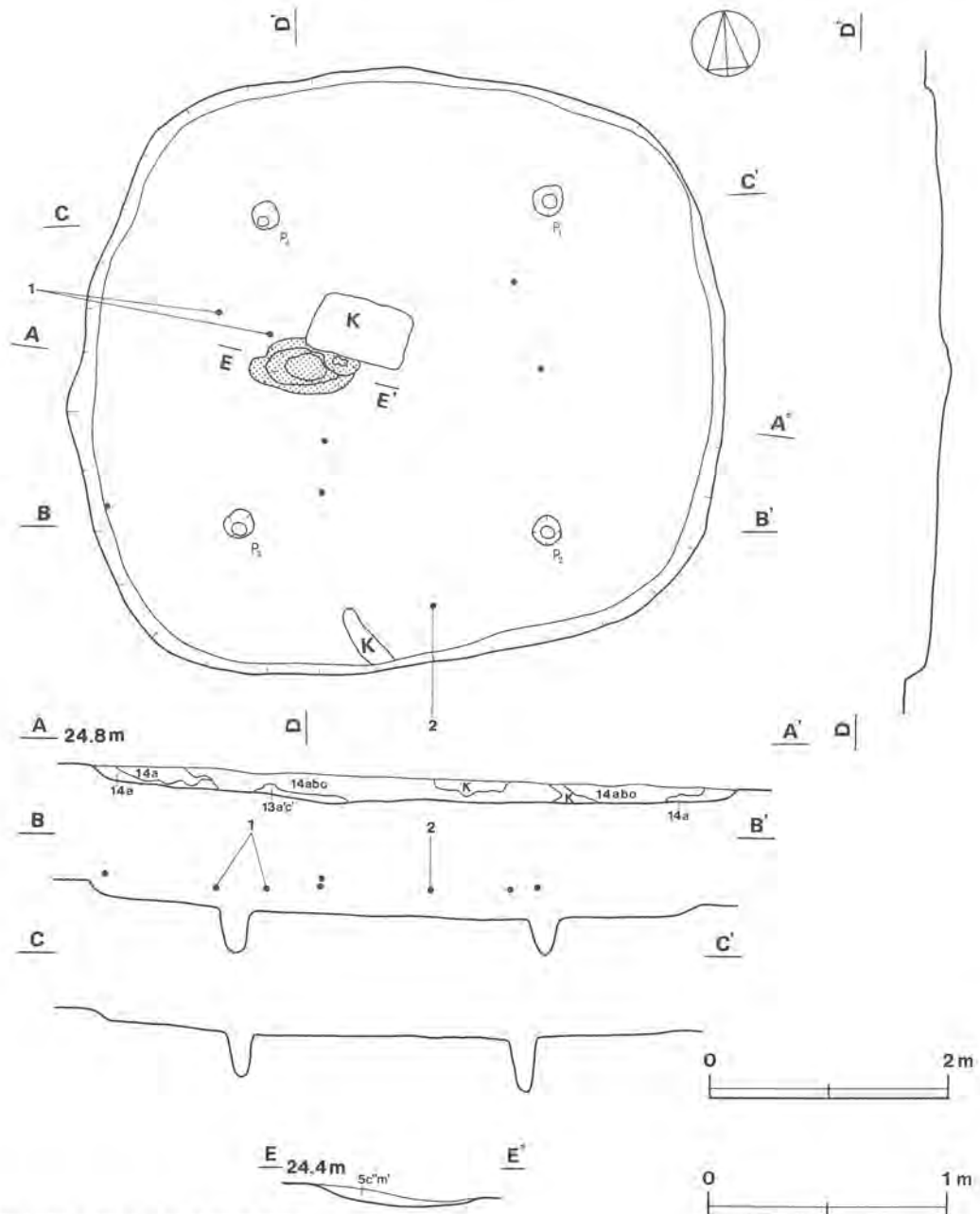


第54図 第55号住居跡出土遺物拓影図

第54図の1・2は第55号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1・2とも胴部片で、付加条の縄文を施している。

第58号住居跡 (第55図)

本跡は、2次調査区のB11f<sub>3</sub>区を中心に確認され、第54号住居跡の西側2m程に位置している。  
 平面形は、長軸5.48m・短軸5.02mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-89°-Eを指している。  
 壁は、床面から外傾して立ち上がっている。壁高は5~14cmである。床面はロームで、全体が壁  
 付近から中央部にかけて皿状に低くなり、良く締まっている。特に、炉の東側から東側壁にかけ



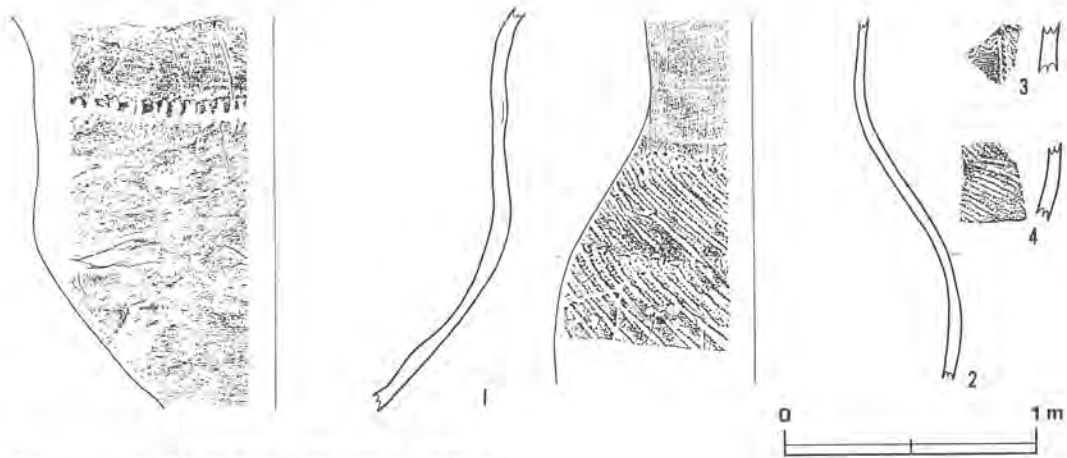
第55図 第58号住居跡実測図

ては硬く締まっている。ピットは4か所検出され、すべて主柱穴である。規模は長径24~29cm・短径21~26cm、深さは31~48cmである。炉は、床面の中央から西側に位置し、北東側で炉床の一部が攪乱を受けている。平面形は径92×45cmの不整楕円形で、床面を皿状に5cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には多量の焼土と、中量の炭化物を含む黒褐色土が締まって堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約22㎡である。

覆土は、一部が攪乱を受けているものの、少量のローム粒子・砂と極少量のローム小ブロックを含む褐色土、壁際には少量のローム粒子を含む褐色土が、それぞれ締まって堆積している。

遺物は、西壁付近の床面から第56図1の弥生式土器の甕の胴部片、南壁付近から2の壺の頸部から胴部にかけての破片、炉の西側から14点、炉の東側から5点、覆土上層から弥生式土器片21点、土師器片66点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第56図 第58号住居跡出土遺物実測・拓影図

第56図の3・4は第58号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3・4は胴部片で、3は櫛描による沈線を横位・縦位に、4は付加条の縄文を施したものである。

第58号住居跡出土土器観察表

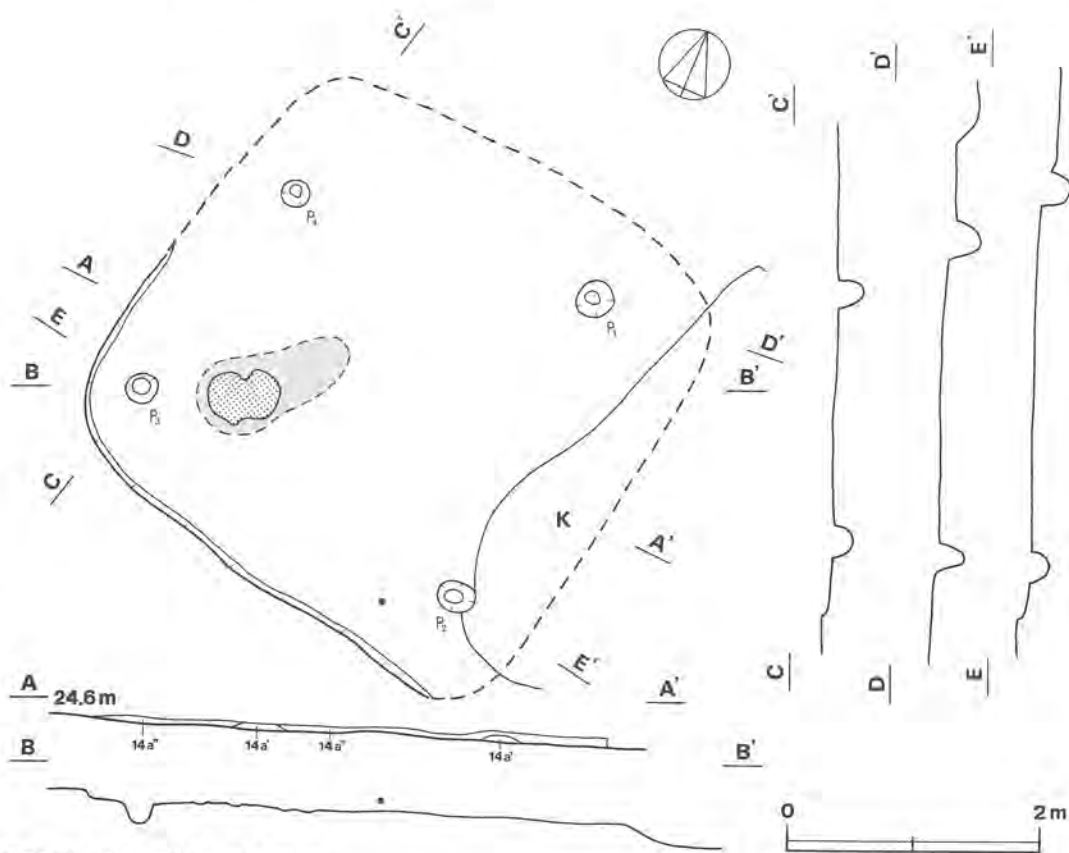
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	甕 弥生式土器	B(15.7)	胴下半部から頸部までの破片で、器厚は一定していない。胴下半部から内側気味に胴中央部まで大きく開き、そこからほぼ垂直に立ち上がって頸部に至り、更に外反気味に口縁部方向へ立ち上がる。頸部下端には1条の突帯を廻らし、その上に筭状工具で刻み目を施している。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒 黒褐色 普通	20% P94

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 と	壺 弥生式土器	B (14.5)	胴中央部から頸部にかけての破片で、器厚をほぼ一定に保つ。胴中央部で最大径を測り、そこから内彎して頸部はつぼまり、頸部はほぼ直線的にやや外傾気味に立ち上がっている。外面は頸部を無文帯とし、胴部へは付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒 橙色 普通	50% P21

### 第59号住居跡 (第57図)

本跡は、2次調査区のB11d<sub>4</sub>区を中心に確認され、第58号住居跡の北北西側4m程に位置している。

平面形は、長軸4.96m・推定短軸4.18mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-71°-Wを指している。壁は、削平と攪乱を受け、南側の約半分が低く残っている。残った壁は床面から内彎して立ち上がっている。壁の残存高は5~9cmである。床面は、全体として北西側壁付近から南東側にかけて低く傾斜し、炉の周囲だけが縮まっており、他は軟らかい。ピットは4か所検出され、



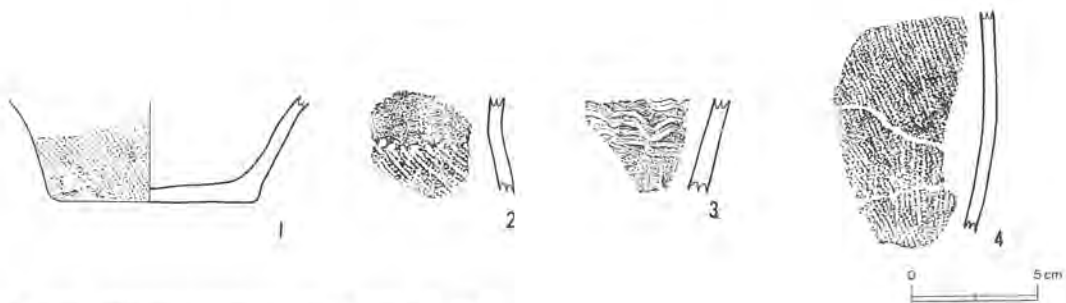
第57図 第59号住居跡実測図

すべて支柱穴である。規模は長径22～31cm・短径23～30cm、深さは18～25cmである。炉は、床面の中央から南西側に位置し、平面形は径56×40cmの不整楕円形で、床面は掘り込んでいない。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化し、激しく凹凸を示している。床面積は約15㎡である。

覆土は、多量のローム粒子を含む褐色土が締まって堆積している。

遺物は、P<sub>2</sub>の南西側床面から弥生式土器片33点、床面直上から弥生式土器片12点、覆土中から第58図1の壺の胴下半部片や流れ込みと思われる土師器片7点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第58図 第59号住居跡出土遺物実測・拓影図

第59号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第58図 1	壺 弥生式土器	B (4.0) C 8.3	底部は平底である。胴部は底部から器厚を減じながら外反気味に立ち上がっている。外面は付加条の縄文が施されている。	内面はナデ整形。	砂粒・石英にふい橙色普通	10% P22

第58図の2～4は第59号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は頸部片であり、頸部を無文とし、下位に付加条の縄文を施している。3・4は胴部片で、3は櫛描による波状文を横位に、4は付加条の縄文を施したものである。

#### 第61号住居跡 (第59図)

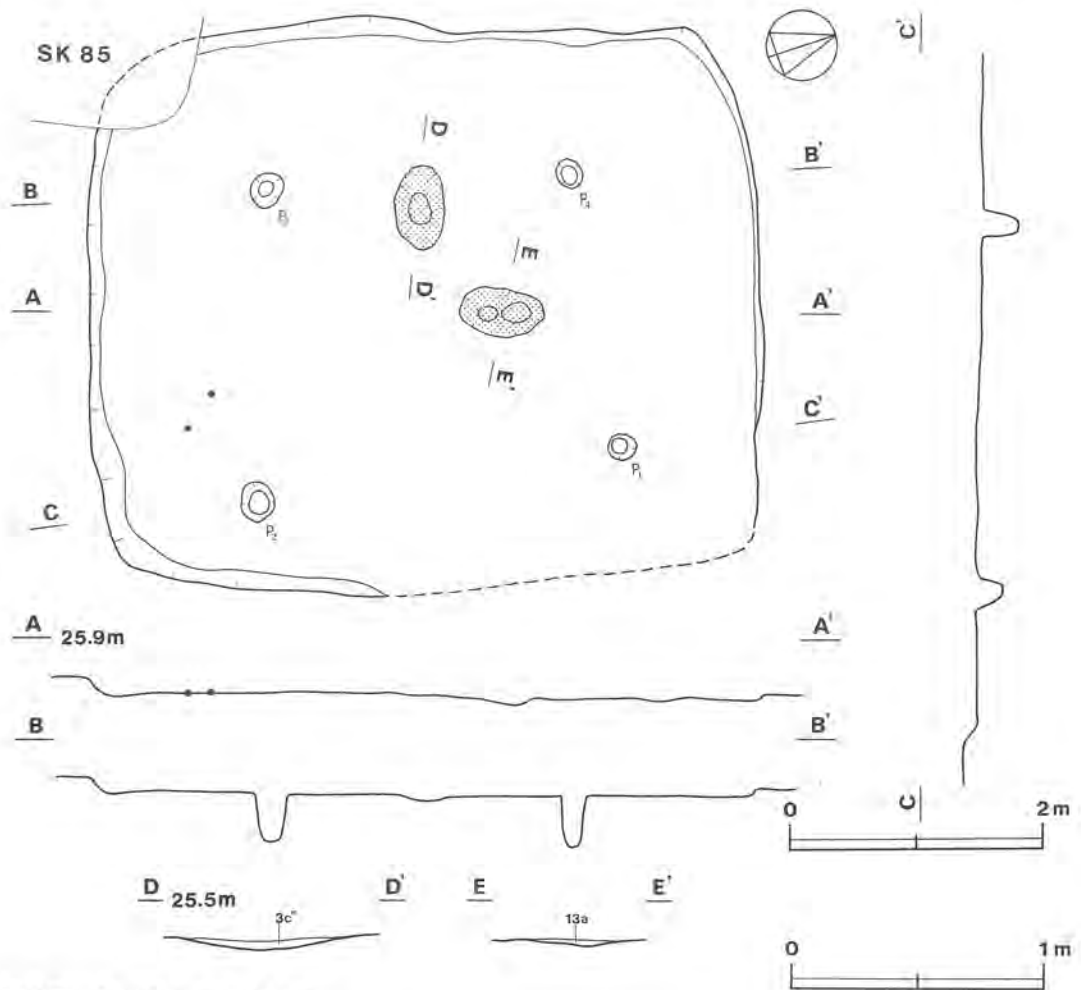
本跡は、2次調査区のB11j<sub>2</sub>区を中心に確認され、第64号住居跡の南側6.5m程に位置している。また、本跡の南西コーナー部が第85号土坑に切られている。

平面形は、長軸5.43m・短軸4.62mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-22°-Eを指している。壁は、土坑に切られている部分を除いて、床面からゆるやかに立ち上がっている。壁の残存高は、5～12cmである。床面はロームで、図化できないような小さい凹凸があり、全体的にゆるい起伏

を示して良く締まっている。ピットは4か所検出され、すべて支柱穴である。規模は長径22~32cm・短径20~26cm、深さは、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の順にそれぞれ30・21・40・42cmである。炉は2か所である。床面の中央から北側に位置するものを第1号炉と仮称する。第1号炉の平面形は径68×41cmの楕円形で、床面を皿状に6cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、中量のローム粒子を含む暗褐色土が締まって堆積している。炉床は、強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。第2号炉は、床面の西側に位置し、平面形は径70×40cmの楕円形で、床面を皿状に6cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、赤褐色の多量の焼土が堆積している。炉床は第1号炉と全く同じである。どちらの炉も同レベルに位置し、同じような使われ方をしており、第1・2号炉が同時存在なのか、あるいは新・旧が存在するのかわ不明である。床面積は約21.5m<sup>2</sup>である。

覆土は、多量のローム粒子を含む褐色土が締まって堆積している。

遺物は、西側炉内から弥生式土器片3点、南側床面でP<sub>2</sub>の西側から弥生式土器片5点、その他

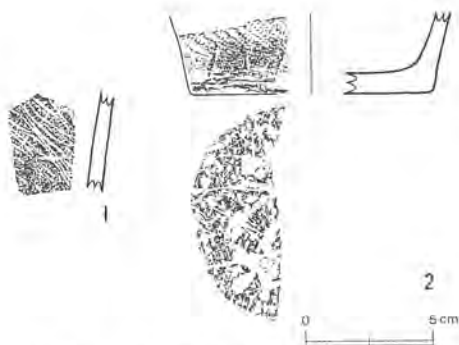


第59図 第61号住居跡実測図

覆土中から弥生式土器片9点、覆土の上位に土師器片35点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

第60図の1・2は第61号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は胴部片で、付加条の縄文が施されている。2は木葉痕を持つ底部片で、胴部下端には付加条の縄文が施されている。



第60図 第61号住居跡出土遺物拓影図

#### 第62号住居跡 (第61図)

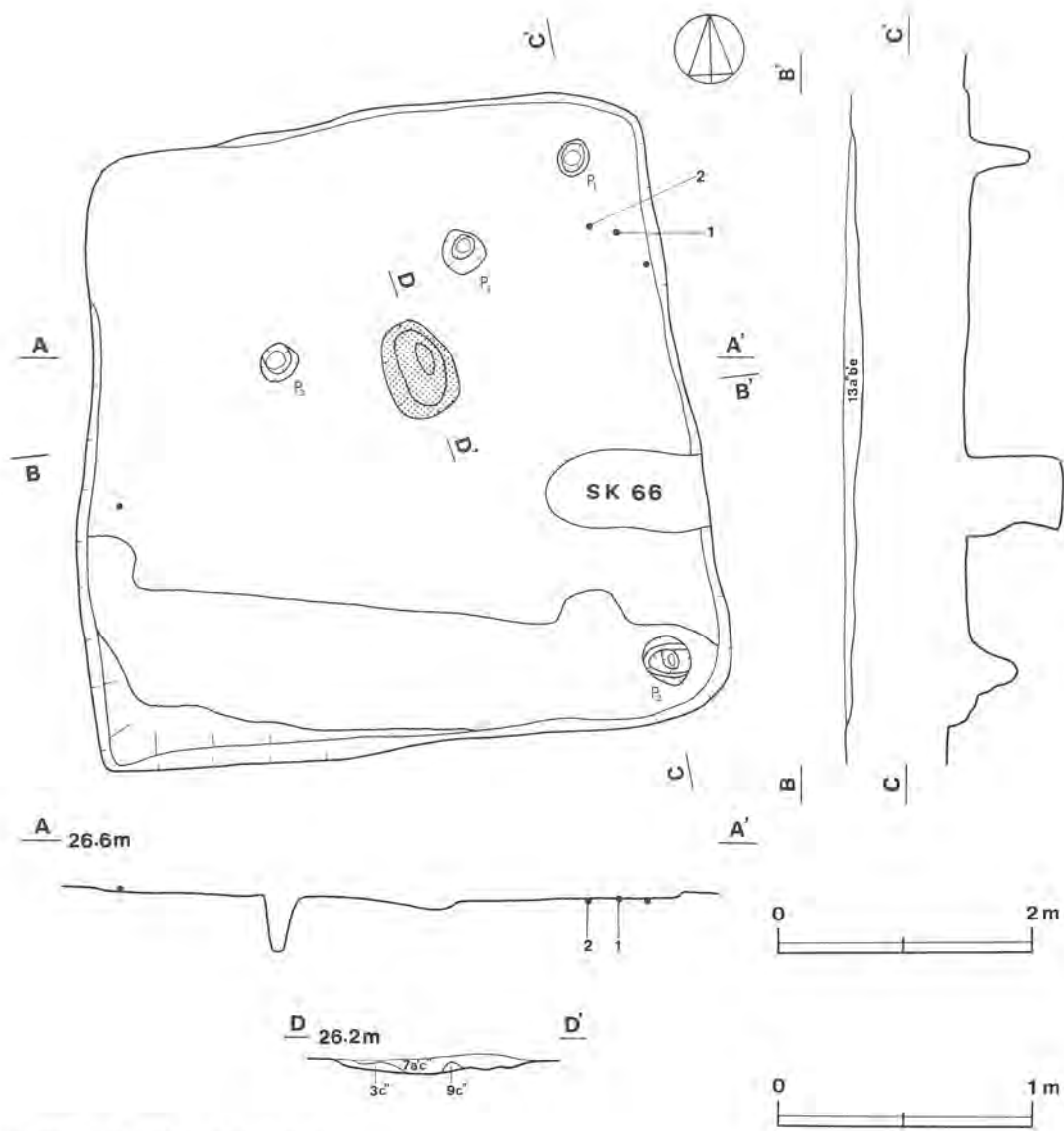
本跡は、2次調査区のC10b<sub>6</sub>区を中心に確認され、第76号住居跡の東側9m程に位置している。また、本跡の東側は第66号土坑に切られ、南側は住居跡の上に現代の道路が通っていたため上から強く圧力を加えられている。

平面形は、長軸5.14m・短軸4.72mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-6°-Wを指している。壁は、北西側コーナー部が削平されていて不明である。その他も、本跡のプランを確認出来る程度の高さだけが、床面からゆるやかに立ち上がって残っている。壁の残存高は4~18cmである。床面はロームで、東側壁付近が土坑に切られている。南側は道路により東~西にかけて強い圧力を受けて帯状に硬く縮まって低くなっている。その他は良く縮まっている。特に炉の南側は硬い。ピットは4か所検出され、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は支柱穴である。規模は長径30~42cm・短径26~36cm、深さは40~48cmである。炉は床面の中央からやや北側に位置し、平面形は径80×40cmの楕円形で、床面を皿状に10cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、中量のローム粒子を含む暗赤褐色の焼土が堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化して凹凸をしている。床面積は約23m<sup>2</sup>である。

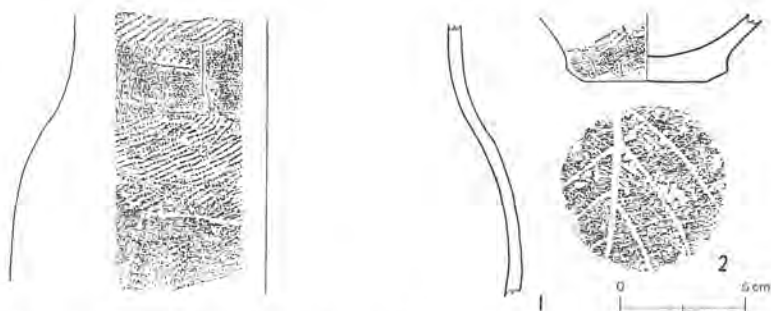
覆土は、多量のローム粒子、中量のローム小ブロック、微量の炭化粒子を含む暗褐色土が、硬く縮まって堆積している。

遺物は、北東側の床面から、第62図1の弥生式土器の壺の胴部片や2の甕の底部を含む土器等28点、その他覆土中から弥生式土器片15点、覆土の上層から土師器片28点や陶器片3点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第61图 第62号住居跡実測図



第62图 第62号住居跡出土遺物実測・拓影図



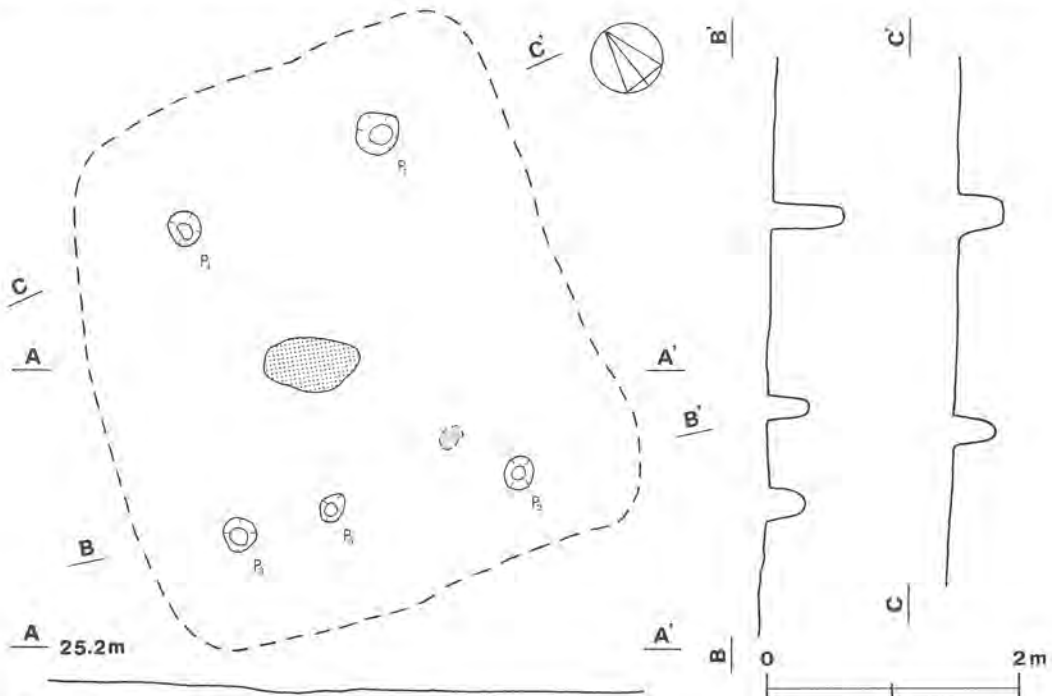
第62号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	壺 弥生式土器	B (11.0)	胴中央部から頸部にかけての破片で、器厚を一定に保っている。胴中央部は縦く内彎して頸部に至り、頸部は外反して立ち上がっている。	内面と頸部外面はナデ整形。	砂粒 にふい褐色 普通	20% P23
2	壺 弥生式土器	B (2.7) C 8.8	底部は平底で鮮明な木葉痕があるが、中央部がやや膨らんで不安定である。胴下半部は底部から直線的に外傾して立ち上がっており、一部に付加糸の縄文を施している。	内面は瓦ナデ整形。	砂粒 にふい橙色 普通	5% P95

第63号住居跡（第63図）

本跡は、2次調査区のB11f<sub>2</sub>区を中心に確認され、第64号住居跡の北側1m程に位置している。

平面形・規模・壁高・床面積・覆土等は、削平されているために不明である。床面はロームで、炉の北東側が半円状に良く締まって残っている。他は攪乱を受けて軟かいロームが南から北側へ低く傾斜している。ピットは5か所検出され、支柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本である。規模は長径25～36cm・短径21～33cm、P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の深さは、それぞれ35・57・29・34・43cmである。炉は、支柱穴の位置から判断して、住居跡のほぼ中央部に位置するものと思われる。また、床面上で火を使用した



第63図 第63号住居跡実測図

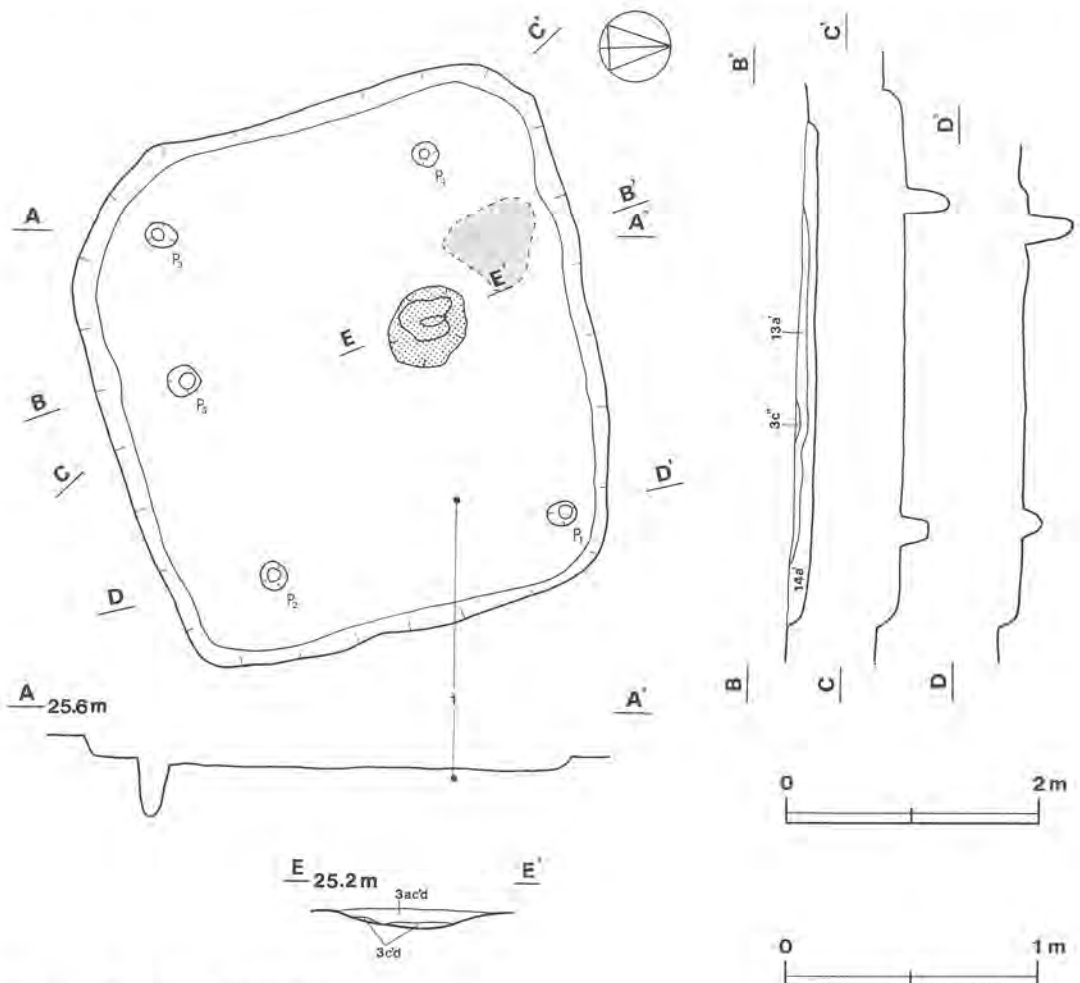
らしく、平面形は径77×44cmの楕円形で、掘り込みのない地床炉である。炉床は強い火熱を受けて、中央部のロームが赤レンガ状に赤変硬化し、外側が白レンガ状に白変硬化し小さい凹凸を呈している。

遺物は出土していないが、柱穴の状態や周辺の住居跡等から考えて、弥生時代後期の住居跡の可能性が高いと思われるが、正確な時期は不明である。

#### 第64号住居跡（第64図）

本跡は、2次調査区のB11g<sub>1</sub>区を中心に確認され、第61号住居跡の北側6m程に位置している。

平面形は、長軸4.20m・短軸3.96mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-84°-Eを指している。壁は、床面から外傾して立ち上がっている。壁高は6~17cmである。床面はロームで、全体的に平坦で良く締まっている。特に、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の内側は硬い。また、炉の北西側床面から多量の焼土が



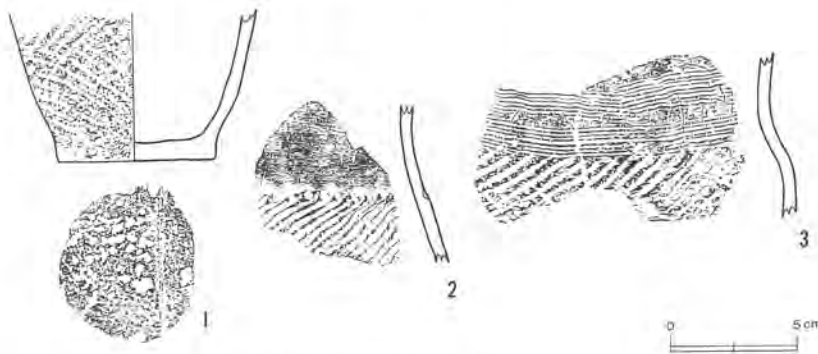
第64図 第64号住居跡実測図

検出されたが、他の床面には焼土や炭化材等がない事から、家屋の焼失による焼土ではなく、炉から掻き出されたものと思われる。また、覆土の上層にも焼土が見られたが、これは後世のものと思われ本跡に伴うものではない。ピットは5か所検出され、ピットと炉の位置から判断してP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が支柱穴である。規模は長径21～26cm・短径19～23cm、深さはそれぞれ36・12・44・30cmである。P<sub>5</sub>は出入口に関するものと思われ、深さは24cmである。炉は、床面の中央から北西側に位置し、平面形は径72×68cmの不整円形で、床面を10cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、赤褐色の焼土ブロックを含む焼土が締まって堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約14㎡である。

覆土は、中央部に多量の焼土が小範囲に堆積しているが、本跡との係りはないと思われる。それを除くと、上層に中量のローム粒子を含む暗褐色土、下層に中量のローム粒子、微量のローム小ブロックを含む褐色土が、それぞれ自然堆積している。

遺物は、炉の東側床面から第65図1の弥生式土器の壺の胴下半部が横位につぶれて出土している。その他、床面直上から弥生式土器片32点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡であると考えられる。



第65図 第64号住居跡出土遺物実測・拓影図

2は頸部を無文とし、胴部に付加条の縄文を施している。3は頸部に櫛描による直線文を横位に、胴部には付加条の縄文を施している。

第65図の2・3は第64号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2・3は頸部から胴部にかけての破片である。

2は頸部を無文

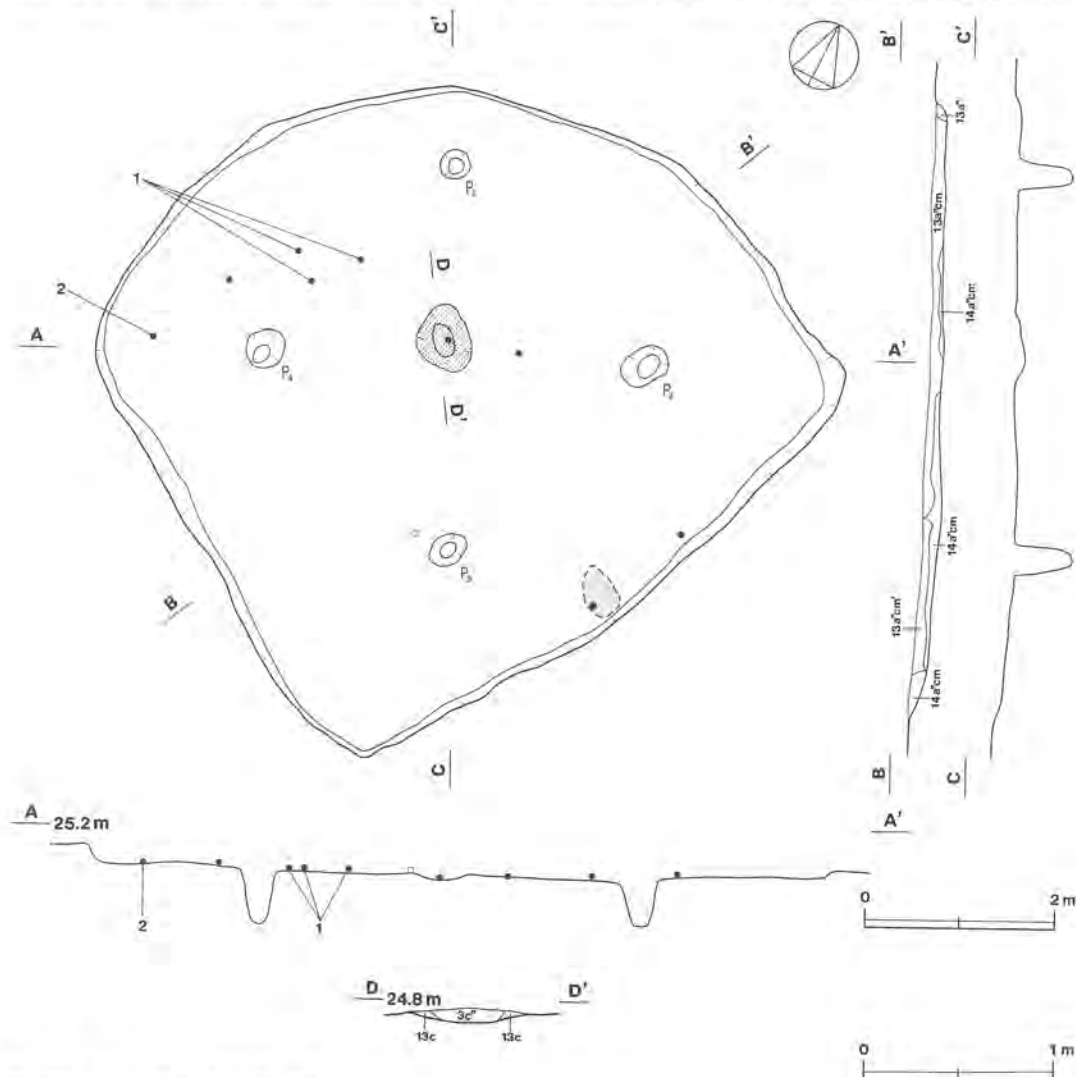
第64号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 1	壺 弥生式土器	B (5.9) C 6.2	底部は平底で小さく、不鮮明な木葉痕がある。胴下半部は底部から器厚をほぼ一定に保ってやや内彎気味に立ち上がっている。外面は付加条の縄文を施し、一部に逆方向からの付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒にふい橙色普通	10% P24

第65号住居跡 (第66図)

本跡は、2次調査区のB10b<sub>9</sub>区を中心に確認され、第70号住居跡の北東側5.5m程に位置している。

平面形は、長軸6.44m・短軸6.30mの不整形方を呈し、長軸方向はN-33°-Eを指している。壁は、北側部が削平されていて不明確な所が多いが、他は床面から外傾して立ち上がっている。壁高は2~13cmである。床面はロームで、壁付近から中央部にかけて浅い皿状に低くなり、締まりが弱い。ピットは4か所検出され、すべて主柱穴である。規模は長径33~51cm・短径31~41cm、深さ49~63cmである。炉は、床面の中央から北西側に位置し、平面形は径70×55cmの不整楕円形で、床面を皿状に6cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、良く締まった赤褐色と暗褐色の焼土が堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤変硬化している。床面積は約34m<sup>2</sup>であ



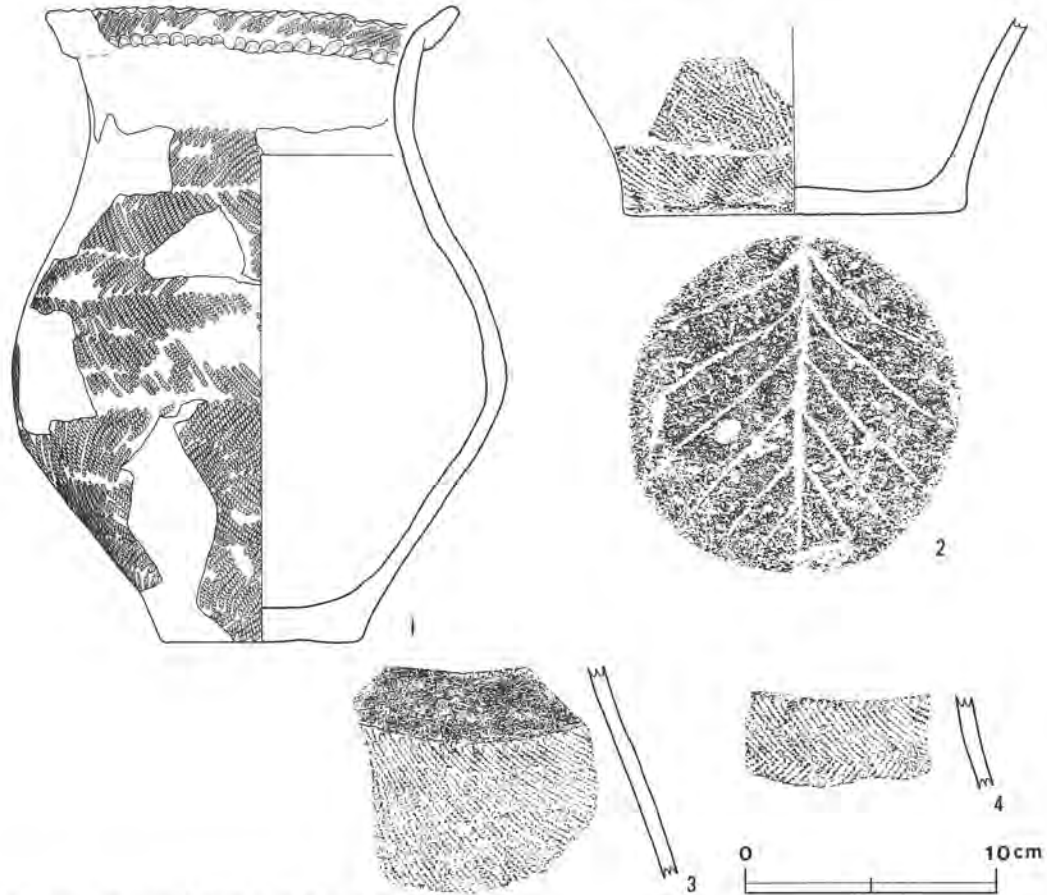
第66図 第65号住居跡実測図

る。

覆土は、上層に多量のローム粒子と少量の焼土粒子・炭化物を含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子、微量の焼土粒子・炭化物を含む褐色土が、それぞれ締まって自然堆積している。

遺物は、弥生式土器片が炉内から2点、炉の西と南西側床面から第67図1の弥生式土器の壺、2の甕の胴下半部のほかに、覆土の上層から土師器片30点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第67図 第65号住居跡出土遺物実測・拓影図

第67図の3・4は第65号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3・4は胴部片である。3は付加条の縄文を施した上位を無文としている。4は付加条の縄文を羽状に施している。

第65号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第67図 1	壺 弥生式土器	A 16.5	底部は平底である。胴部は器厚が一定ではないが、底部から直線的に外傾して開き、胴中央部で最大径を測る。この付近から頸部に向かって内彎している。頸部はほぼ垂直で口縁部で外反している。口縁部は複合口縁である。頸部は無文帯である。胴部外面は羽状縄文を施し、口縁部外面には付加条の縄文を施した後で、下端に縄の端部を連続して押圧している。更に、上端と口唇部に交互に篋状工具で内・外面から小さい押圧をして小波状を作っている。	頸部内・外面は篋ナデ整形後、ナデ整形。口縁部内面はナデ整形。	砂粒 明褐色 普通	50% P25
		B 25.3				
C 8.0						
2	壺 弥生式土器	B (7.5) C 13.6	底部は平底で大きく安定感があり、鮮明な木葉痕がある。胴下半部は器厚を減じながら外反して立ち上がっている。外面は付加条の縄文を施している。	内面には剝離が全面に見られ、整形技法は不明である。	砂粒 橙色 普通	10% P26

第68号住居跡 (第68図)

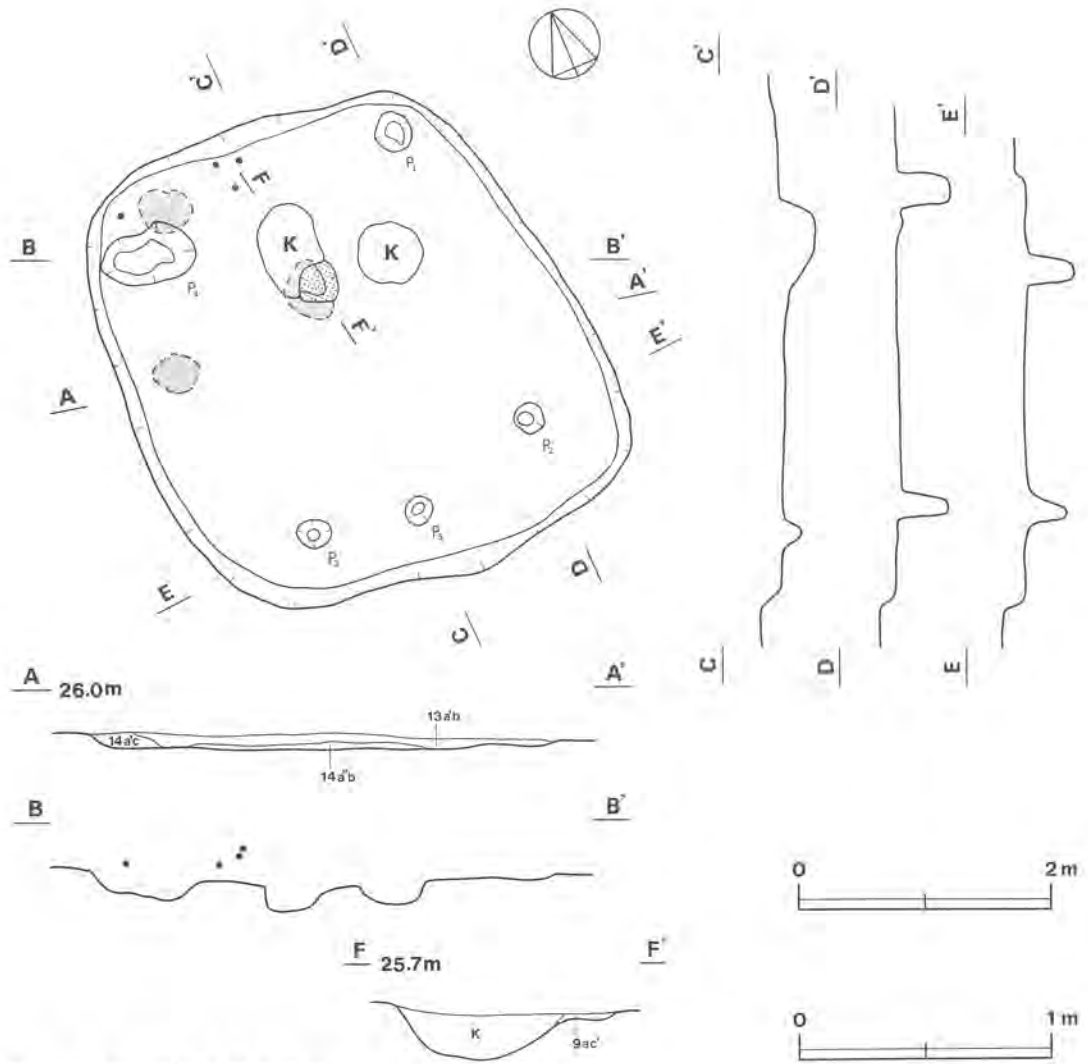
本跡は、2次調査区のB10i<sub>0</sub>区を中心に確認され、第80号住居跡の北東側3m程に位置している。

平面形は、長軸3.94m・短軸3.42mの不整隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-1°-Eを指している。壁は、床面から外傾して立ち上がっている。壁高は7~17cmである。床面はロームで、北側は攪乱を受けているが、その他は壁付近から中央にかけて浅い皿状に低くなり、全体が縮まっている。ピットは5か所検出され、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴である。規模は長径26~76cm・短径22~40cm、深さはそれぞれ45・41・35・22cmである。P<sub>4</sub>の平面形は楕円形で、他より大きいのは上面が攪乱を受けているためである。P<sub>5</sub>は出入口に関するものと思われ、深さ18cmである。炉は、床面の中央から北側に位置し、北側が大きく攪乱を受けているが、平面形は残っている部分から推定すると楕円形で、床面を5cm程掘り凹めた地床炉である。残った炉床は、強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約11.5m<sup>2</sup>である。

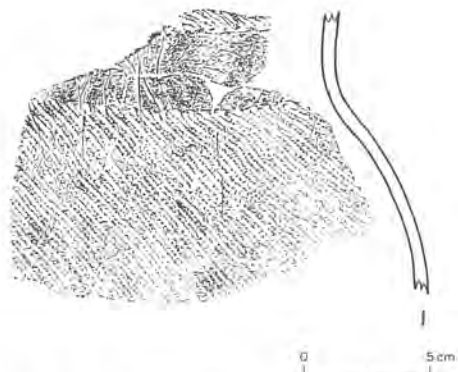
覆土は、上層に中量のローム粒子、微量の焼土粒子を含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子、中量のローム中ブロックを含む褐色土、壁際には中量のローム粒子と微量の焼土粒子を含む褐色土が、それぞれ縮まって堆積している。

遺物は、北西側壁近くの床面から弥生式土器片17点、床面直上から弥生式土器片24点、攪乱を受けている部分から土師器片3点や陶器片1点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



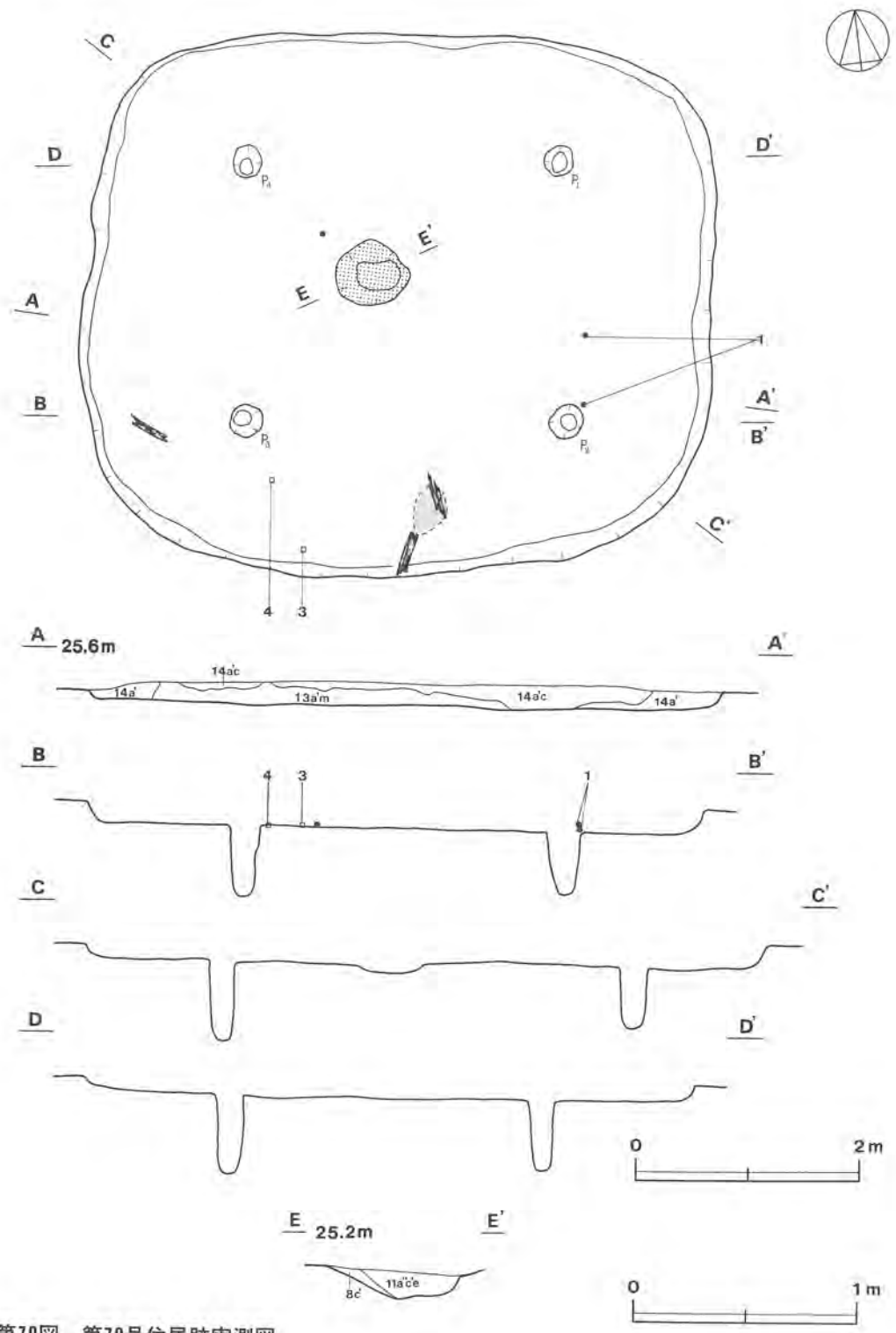
第68図 第68号住居跡実測図



第69図 第68号住居跡出土遺物拓影図

第69図の1は第68号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は頸部から胴部にかけての破片で、頸部は無文であり、胴部には付加条の縄文が施されている。

第70号住居跡 (第70図)

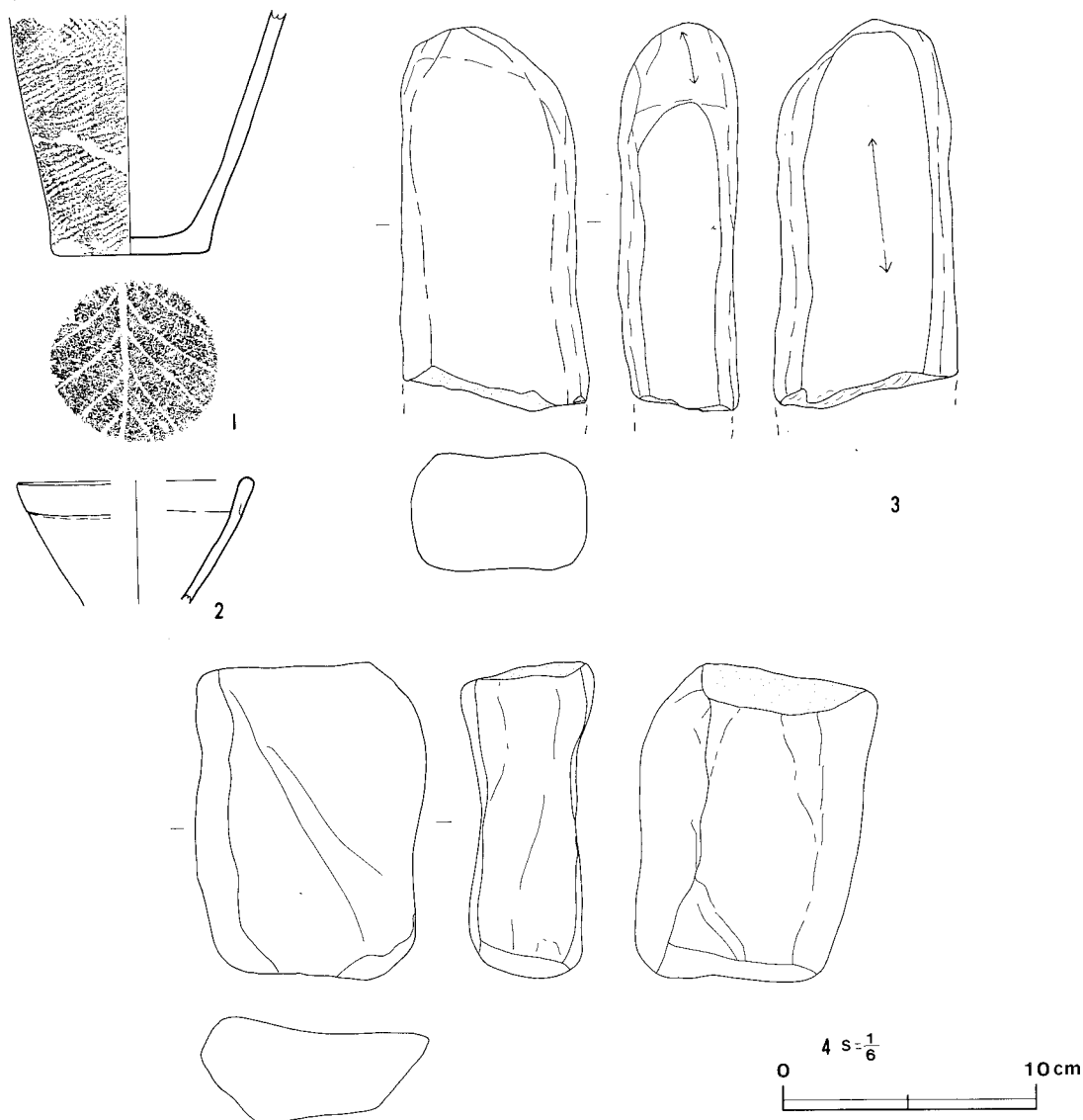


第70図 第70号住居跡実測図



本跡は、2次調査区のB10d<sub>7</sub>区を中心に確認され、第65号住居跡の西南西側5m程に位置している。

平面形は、長軸5.56m・短軸4.96mの隅丸長方形で、長軸方向はN-86°-Wを指している。壁は、床面から外傾して立ち上がっている。壁高は9~22cmである。床面は、全体的に平坦でやや縮まっている。特に、炉の東、西側の狭い範囲は良く縮まっていて硬い。また、南側壁近くの床面からは、多量の焼土と柱状の炭化材を検出したことから、本跡は焼失家屋と考えられる。ピットは4か所検出され、いずれも支柱穴である。規模は長径29~31cm・短径26~28cm、深さはP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の順にそれぞれ67・59・69・80cmである。炉は、床面の中央からやや北西側に位置し、中央部が攪乱を受けている。残った炉床から見て平面形は径68×60cmの楕円形であり、床面を皿状に6cm



第71図 第70号住居跡出土遺物実測・拓影図

程掘り凹めた地床炉であると推定される。炉内には、攪乱を受けた黒褐色土と赤褐色土が柔かく堆積している。炉床の残っている部分は、火熱を受けたロームが赤く焼土化している。床面積は約23.5m<sup>2</sup>である。

覆土は、部分的に攪乱を受けているが、上層に多量のローム粒子、微量の焼土粒子を含む褐色土、下層に中量のローム粒子、少量の炭化物を含む暗褐色土、壁際には中量のローム粒子を含む褐色土が、それぞれ締まって自然堆積している。

遺物は、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>付近のそれぞれの床面から第71図1の弥生式土器の壺の胴部を含む破片20点、4の石皿片1点、3の砥石1点、覆土の上層から2の小形埴を含む弥生式土器片12点、土師器の小片76点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

### 第70号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第71図 1	壺 弥生式土器	B (9.7) C 6.6	底部は平底で小さく、鮮明な木葉痕がある。胴部は底部から器厚を一定に保ちながら直線的に外傾して立ち上がっている。外面は付加条の縄文を施している。	内面は剝離が激しく、整形技法は不明。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P27
2	小形埴 弥生式土器	A「9.6」 B (5.0)	体部は器厚を一定にしてやや内彎気味に開いて口縁部に至る。口縁部は複合口縁である。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	40% P353

### 第73号住居跡（第72図）

本跡は、2次調査区のB10e<sub>1</sub>区を中心に確認され、第70号住居跡の西側15m程に位置している。

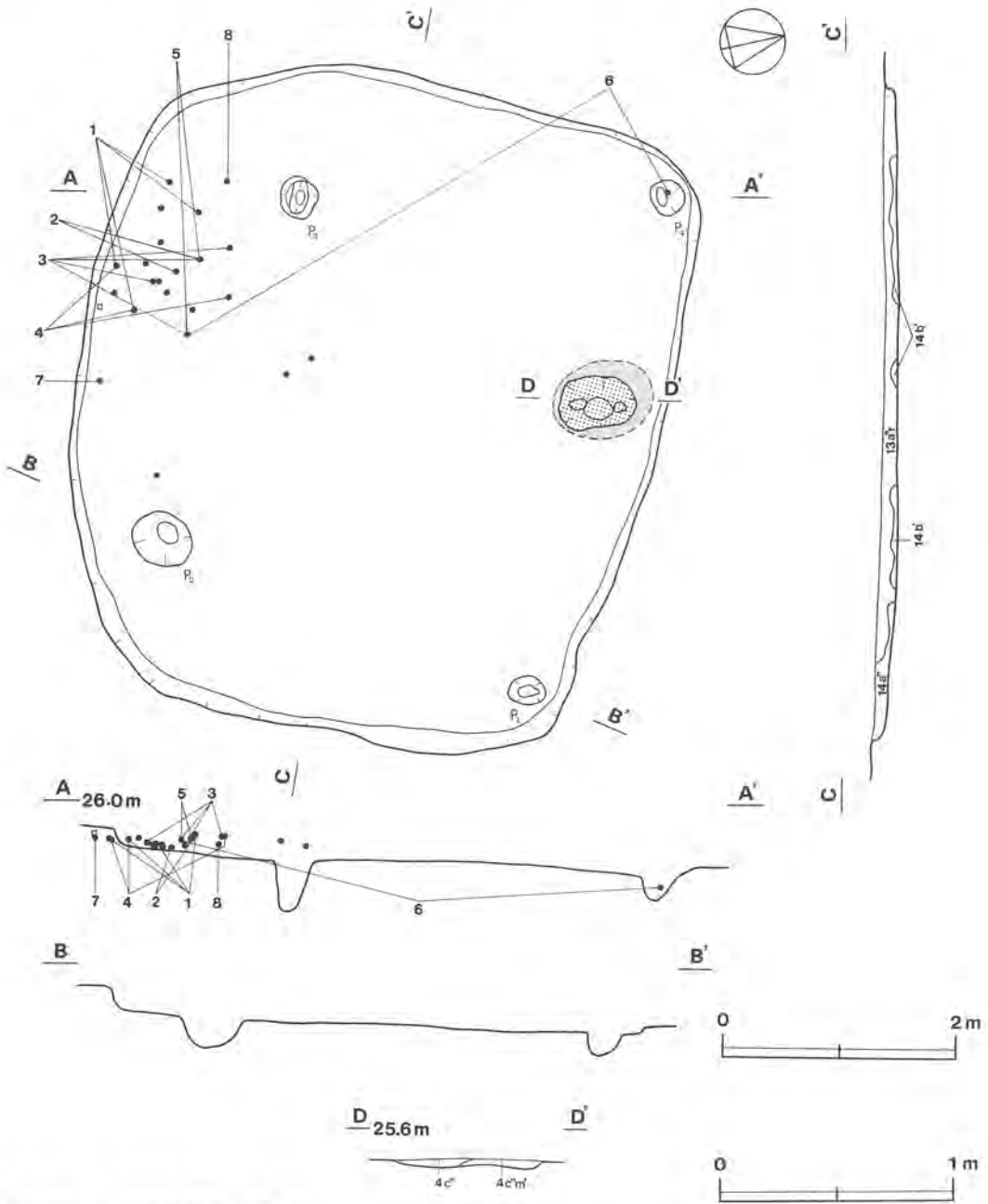
平面形は、長軸5.62m・短軸5.08mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-62°-Wを指している。壁は、東側壁・西側壁の一部が床面から垂直に、その他は床面から外傾して立ち上がっている。壁高は3～22cmである。床面はロームで、全体的に平坦で軟かい。また、南側壁付近から北側壁付近にかけて低く傾斜している。ピットは4か所検出され、いずれも支柱穴である。規模は長径30～52cm・短径22～45cm、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の深さはそれぞれ27・30・50・32cmである。炉は、床面の中央から北側に位置し、平面形は径67×45cmの楕円形で、床面を皿状に3cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、極暗赤褐色の焼土が堆積している。炉床は火熱を受けて、その中央部のロームが赤変焼土化している。床面積は24m<sup>2</sup>である。

覆土は、上層に多量のローム粒子を含む軟かい暗褐色土、下層に中量のローム小ブロックを含む軟かい褐色土、壁際には中量のローム粒子を含む締まった褐色土が、それぞれ堆積している。

遺物は、P<sub>3</sub>の南側床面から第73図1～5の壺の口縁部と胴部、6の甕、第74図7の埴、8の甕

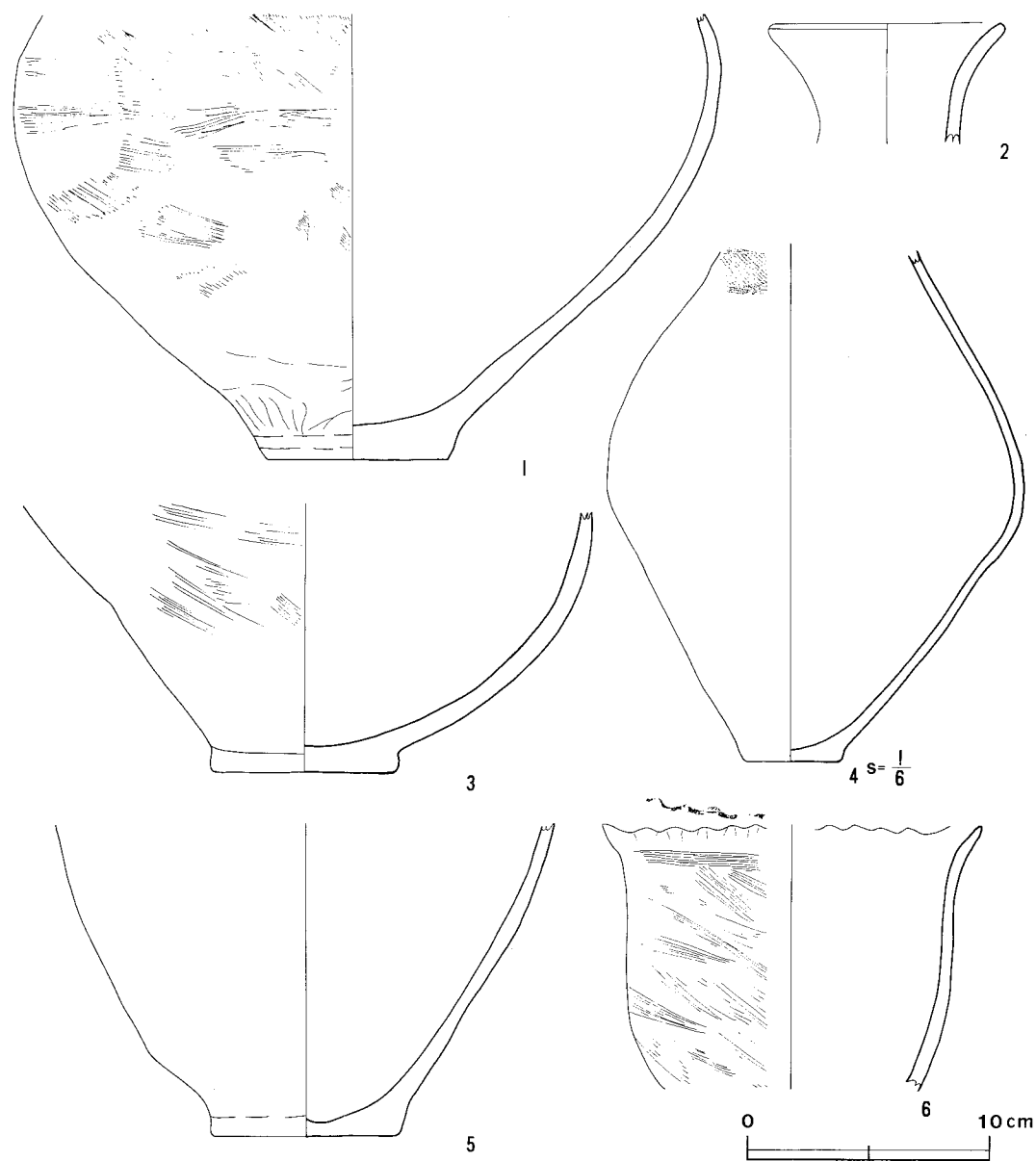
を含む弥生式土器片505点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代中期の住居跡と考えられる。

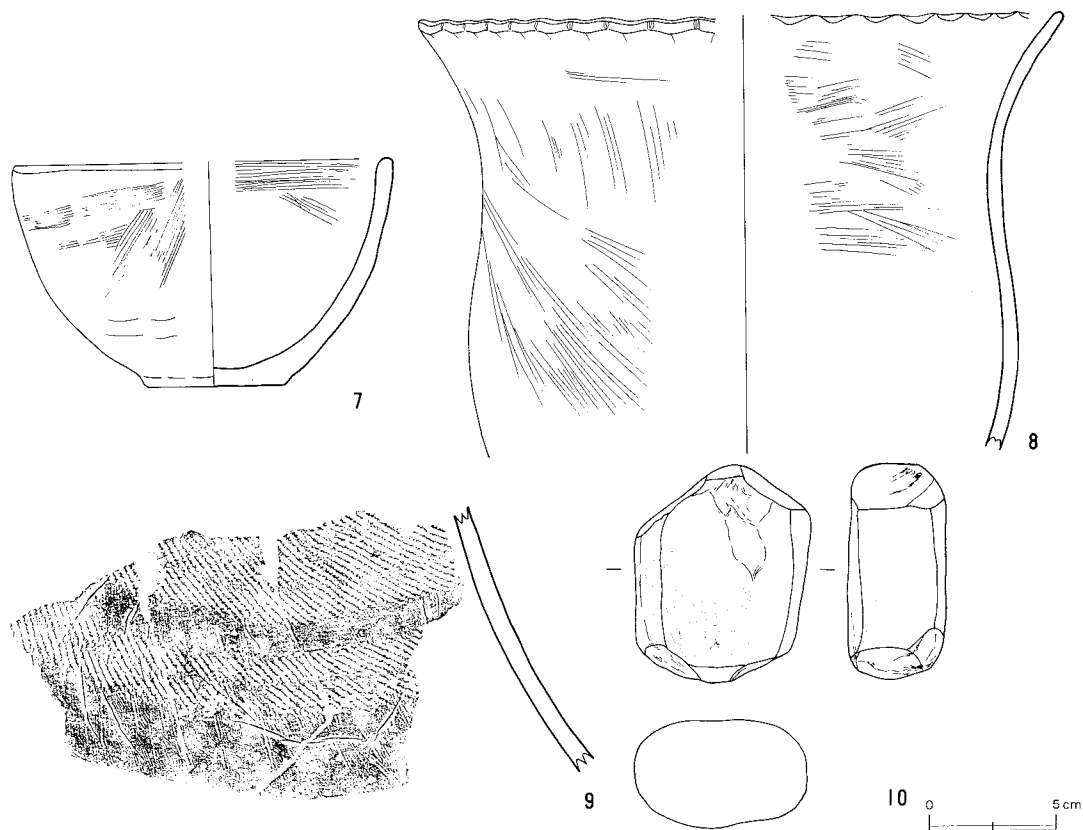


第72図 第73号住居跡実測図

第74図の9は第73号住居跡から出土した弥生式土器片である。9は胴部片で、単節の縄文を施し、一部磨消している。



第73図 第73号住居跡出土遺物実測・拓影図一 1



第74図 第73号住居跡出土遺物実測・拓影図-2

第73号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 1	壺 弥生式土器	B (18.5) C 7.5	底部は平底である。胴部は底部から器厚を減しながら直線的に外傾し、中央部で最大径を測り、そこから内彎して立ち上がっている。	内面は剝離が激しく、整形技法は不明。底部、胴部外面は篋削り整形後、篋磨き整形。	砂粒 橙色 普通	80% P362
2	壺 弥生式土器	A 10.0 B (5.0)	口縁部片で、器厚を一定に保って外反している。口唇部は外側を向いている。	内・外面ともナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	8% P368
3	壺 弥生式土器	B (11.0) C 7.6	底部は平底である。胴部は中央部まで器厚を一定に保って内彎して立ち上がっている。	内面は剝離が激しく、整形技法は不明。底部、胴部外面は篋削り整形。	砂粒 橙色 普通	20% P365
4	壺 弥生式土器	B (42.2) C 8.1	底部は平底で小さい。胴部は器厚を一定に保って底部から胴中央部まで直線的に立ち上がり最大径を測る。胴中位から内彎して頸部へつぼまっている。また、胴部上端に斜縄文を帯状に施している。	底部、胴部内面は篋削り整形。胴部外面は篋削り整形後、篋磨き整形。	砂粒 橙色 普通	70% P361

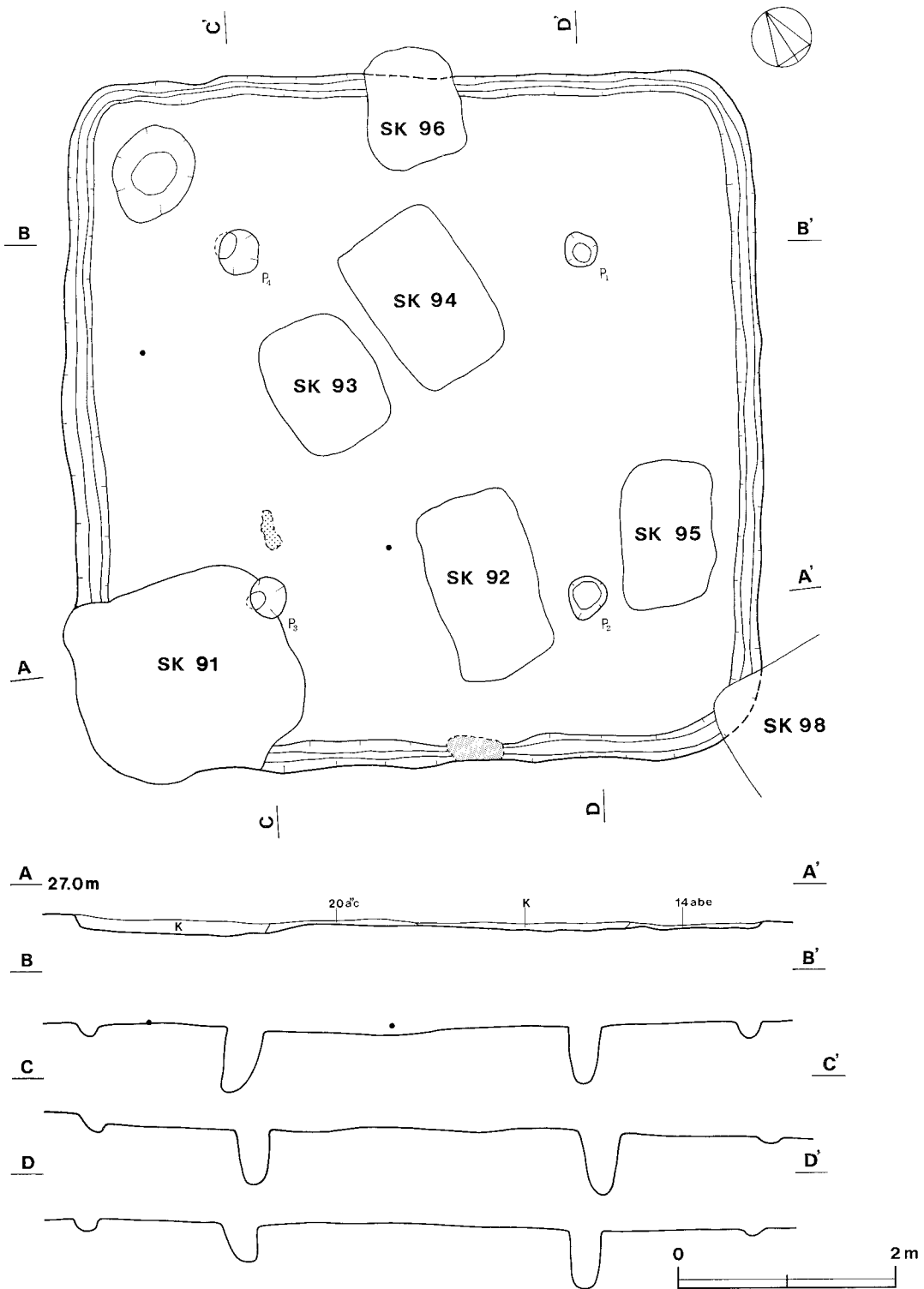
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 5	壺 弥生式土器	B (13.0) C 7.6	底部は平底である。胴部は底部から器厚を一定に保って直線的に外傾し、中央部付近でやや内彎して立ち上がっている。	内面は剝離が激しく、整形技法は不明。底部、胴部外面は篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	30% P364
6	甕 弥生式土器	A「15.8」 B (11.0)	胴下半部から口縁部にかけての土器で、胴下半部から器厚を減じながら頸部まで内彎し、そこから外反して口縁部へ立ち上がっている。口縁部を内・外面から指頭によるつまみを加え小波状を作っている。	内・外面ともハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	50% P366
第74図 7	埴 弥生式土器	A「15.1」 B 9.0 C 5.6	底部は平底で、体部から口縁部にかけて器厚をほぼ一定に保って内彎して立ち上がっている。	底部は篋削り整形。体部、口縁部内・外面とも篋削り整形。	砂粒 橙色 普通	80% P369
8	甕 弥生式土器	A「25.4」 B (17.5)	胴部から口縁部にかけての破片で、器厚を一定に保って胴中央部から内彎し、頸部から口縁部にかけて外反して立ち上がっている。口縁部は2本の指頭による内・外面からのつまみにより小波状を作っている。	内・外面とも篋による整形。胴部外面は篋磨き整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% P367

#### 第74号住居跡（第75図）

本跡は、2次調査区のC10a<sub>1</sub>区を中心に確認され、第76号住居跡の北西側1m程に位置している。また、本跡の床や壁が第91～96・98号土坑に切られている。

平面形は、推定長軸6.48m・推定短軸6.46mの隅丸方形を呈するものと思われ、長軸方向はN-36°-Eを指している。壁は削平されて不明である。壁溝は、第91号土坑に切られている部分は不明であるが、そのほかはU字状を呈して幅21～23cm、深さ5～16cmで周回している。床面はロームで、全体的にゆるい起伏を示し、南側から北側にかけて低く傾斜している。炉の西側と南側の一部は良く締まっているが、他は攪乱を受けていて軟かい。また、床面には多量の柱状の炭化材が床面の中央部から外側に向かって放射状に、少量の焼土が南側壁溝上に検出された。このことから、本跡は焼失家屋と思われる。なお、床面を第91～96号土坑が切っている。ピットは4か所検出され、いずれも支柱穴である。規模は長径32～43cm・短径30～36cm、深さは、それぞれP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の順に54・38・50・65cmである。炉は、床面の中央から南西側に位置し、径38×14cm程の不定形で、床面を掘り込まずに使用した地床炉である。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。貯蔵穴は、北側壁コーナー部に位置し、平面形は径91×75cmの楕円形で、床面を鍋状に28cm程掘り凹めている。床面積は約38m<sup>2</sup>である。

覆土は、攪乱を受けている部分以外には炭化材・焼土が露呈し、その間にローム粒子を含む褐色土が見られる。



第75图 第74号住居迹实测图

遺物は、貯蔵穴の南側床面と炉の南側床面から弥生式土器片10点、その他流れ込みと思われる土師器片74点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

#### 第76号住居跡（第76図）

本跡は、2次調査区のC10b<sub>3</sub>区を中心に確認され、第74号住居跡の南東側1m程に位置している。

平面形は、長軸6.48m・短軸5.18mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-72°-Wを指している。壁は、南東側の一部が攪乱を受けているが、北側は床面からほぼ垂直に、その他は外傾して立ち上がっている。壁高は5~15cmである。床面はロームで、全体的に平坦で良く締まっている。特に、炉の周囲と炉からP<sub>5</sub>の間は硬い。また、床面のいたる所に柱状の炭化材と焼土が検出された。このことから、本跡は焼失家屋と思われる。ピットは5か所検出され、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴である。規模は長径36~48cm・短径31~40cm、深さは73~86cmである。P<sub>5</sub>は深さ34cmで、その位置と西側の床面が硬く締まっている様子から、出入口に関する柱穴と思われる。炉は、床面の中央から西側に位置し、平面形は径94×58cmの楕円形で、床面を皿状に7cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には炭化材や炭化粒子を含む極暗赤褐色と暗赤褐色の焼土が締まって堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。また、P<sub>5</sub>の南東側で壁に接している凹みは、平面形が径50cm程の円形を呈し、深さ11cm程で、その位置と状態から貯蔵穴ではないかと思われる。床面積は約29.5m<sup>2</sup>である。

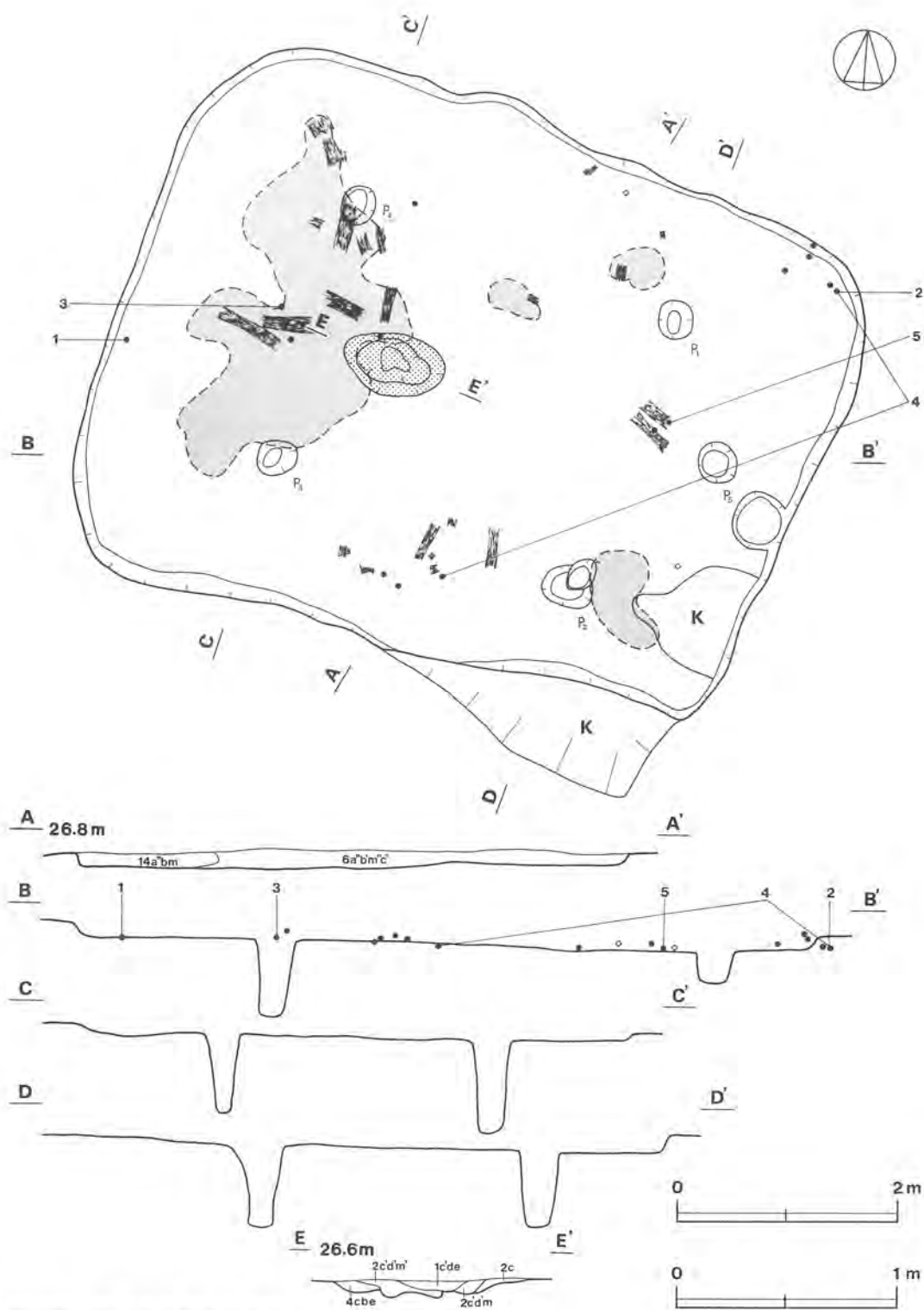
覆土は、多量のローム粒子・炭化材、中量のローム小ブロック、少量の焼土を含む極暗褐色土と中量のローム粒子、極少量のローム中ブロックを含む褐色土が、それぞれ締まって堆積している。

遺物は、炭化材や焼土に混じって第77図1~5の弥生式土器の壺とその口縁部から頸部、及び底部を含む破片が158点、その他覆土の上層から土師器片56点、内耳土器片3点、11の土製品1点が出土している。

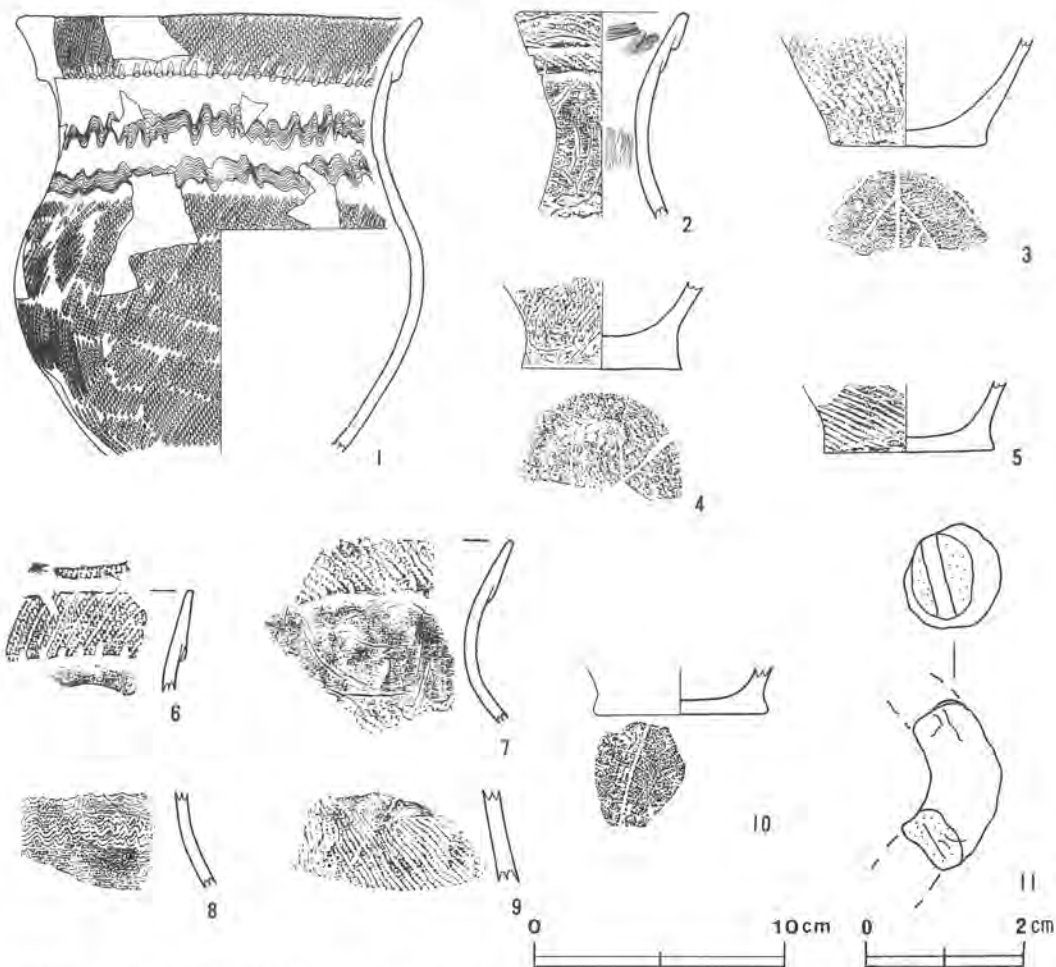
遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

第77図の6~10は第76号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。6・7は折返した口縁部に付加条の縄文を施し、下端に棒状工具による押圧を加えている。6の口唇部には縄文が施されている。8は頸部片で、櫛描による波状文を横位に施している。9は胴部片で、付加条の縄文を施している。10は木葉痕を持つ底部片である。





第76图 第76号住居跡実測图



第77図 第76号住居跡出土遺物実測・拓影図

第76号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 1	壺 弥生式土器	A 16.2 B (15.7)	胴下半部から口縁部にかけての土器で、器厚を一定に保っている。胴部中位に最大径を持ち、上部の開いた緩いS字状を呈している。口縁部は複合口縁である。外面の口縁部、胴部には付加糸の縄文を施している。頸部は楯描による波状文を2本廻らしている。口縁部下端には竹管状工具による刻み目を連続して施している。	内面・頸部外面はナデ整形。	砂粒にふい褐色普通	50% P28

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 2	壺 弥生式土器	A 7.0	胴上半部から口縁部にかけての破片である。胴上半部から頸部にかけては器厚を一定に保って弓なりに外反し、口縁部に至って器厚を減じている。口縁部は二段作出の複合口縁である。外面は胴上半部、口縁部、口唇部に付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒 明褐色 普通	5% P29
		B (8.2)				
3	壺 弥生式土器	B (4.3)	底部は平底で小さく、鮮明な木葉痕がある。胴部は底部から器厚を減じながら直線的に外傾している。外面は付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒 赤色 普通	10% P30 底部内面にモミ痕が1か所
		C 6.2				
4	壺 弥生式土器	B (3.5)	底部は平底で小さいが厚く安定感があり、木葉痕も見られる。胴部は底部から器厚を一定に保って直線的に外傾している。外面は付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	5% P31
		C 6.3				
5	壺 弥生式土器	B (2.7)	底部は平底で小さい。胴部は底部から器厚を一定に保って外傾している。外面は付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	5% P32
		C 6.6				

#### 第79号住居跡（第78図）

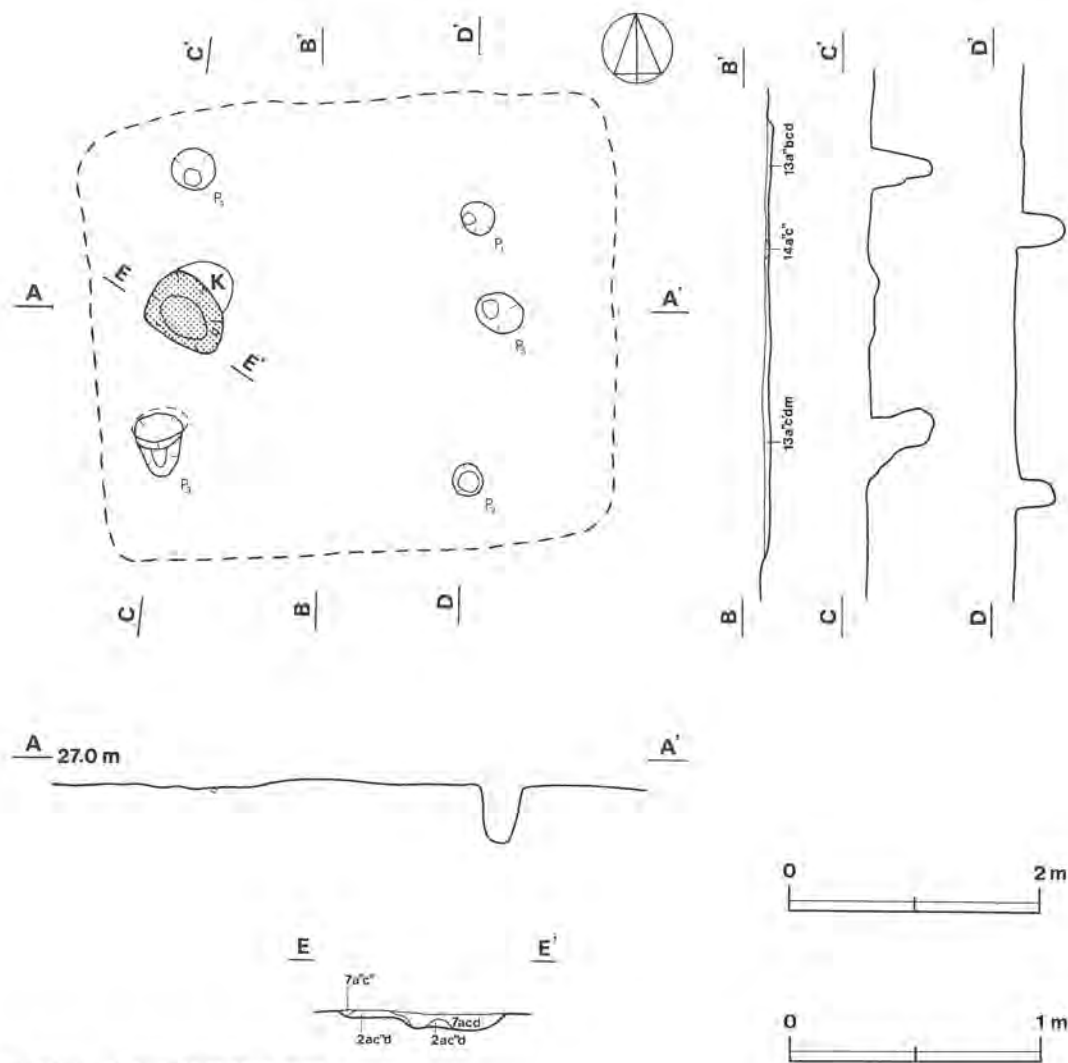
本跡は、2次調査区のC10f<sub>3</sub>区を中心に確認され、第76号住居跡の南側9m程に位置している。

平面形・規模・壁高・床面積等は、削平と攪乱を受けているために不明である。床面はロームで、ゆるい起伏を示して締まっている。ピットは5か所検出され、壁等が不明であるために不確実ではあるが、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴で、P<sub>5</sub>は出入口に関するものと思われる。規模は長径26~50cm・短径24~38cm、P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>の深さはそれぞれ38・35・52・46・44cmである。炉はP<sub>4</sub>の南側で、P<sub>5</sub>の西側に位置し、平面形は径69×50cmの楕円形で、床面を皿状に5cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、ローム粒子を含む暗赤褐色の焼土が堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。

覆土は、多量のローム粒子、中量の焼土小ブロック・炭化物を含む暗褐色土が、締まって堆積している。なお、覆土中に焼土や炭化物が比較的多いことから、焼失家屋の可能性が高いと考えられる。

遺物は、炉内と炉の付近の床面から弥生式土器片11点、攪乱を受けている覆土中から土師器片60点が出土している。

遺物とその出土状況、ピットの配列等を考慮すると、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第78図 第79号住居跡実測図

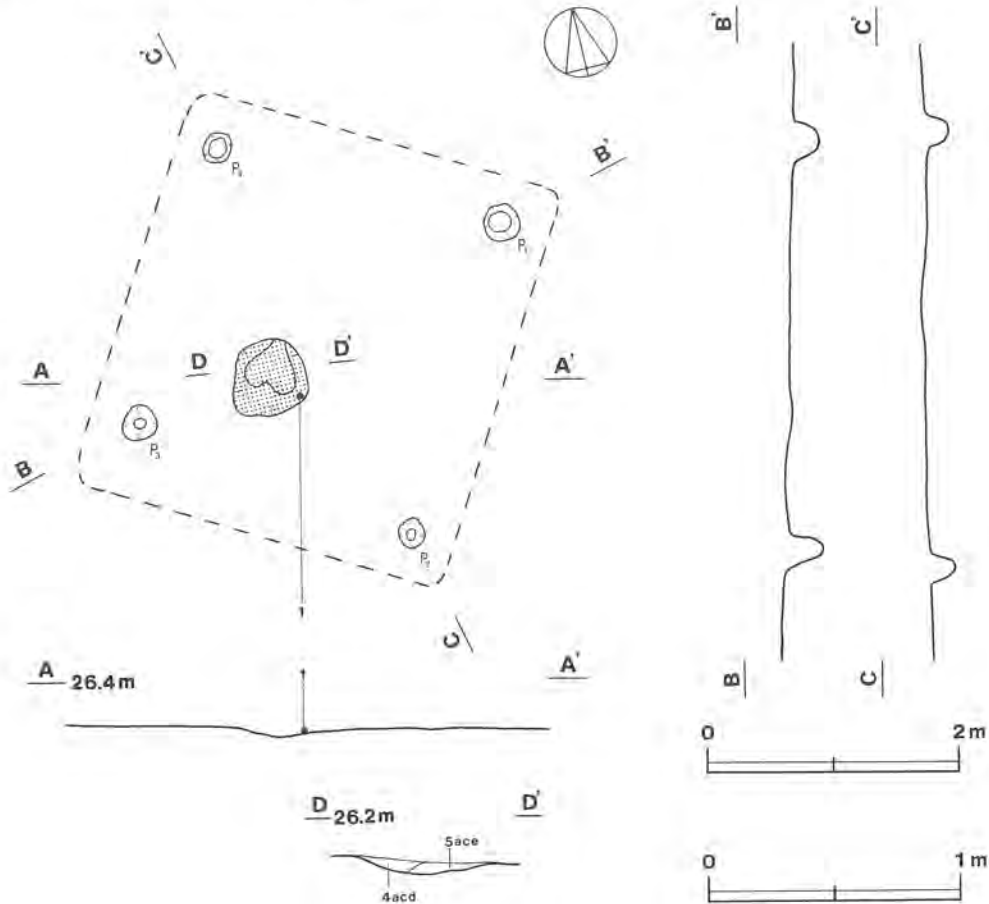


第79図 第79号住居跡出土遺物拓影図

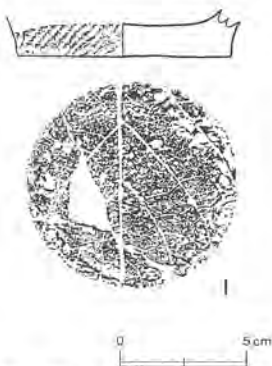
第79図の1～4は第79号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は折返した口縁部が無文で、下端に棒状工具による押圧を加えている。口唇部には同施文具による押圧を施している。2・3は頸部片である。2は櫛描による直線文を横位・縦位に施し、3は篋描による格子文を施している。4は胴部片で、篋描による沈線を鋸歯状に施している。

第80号住居跡（第80図）

本跡は、2次調査区のB10j<sub>a</sub>区を中心に確認され、第62号住居跡の北東側5.5m程に位置している。平面形・規模・壁高・床面積・覆土等は、削平されているために不明である。床面は削平されている部分が大部分であるが、炉の周囲はロームが良く締まって残っている。この床面に密着し



第80図 第80号住居跡実測図



第81図 第80号住居跡出土  
遺物実測・拓影図

て弥生式土器の木葉痕を付けた底部が出土している。ピットは4か所検出され、いずれも支柱穴である。規模は長径24~31cm・短径21~28cm、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の深さはそれぞれ20・20・33・20cmである。炉はP<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>の間のP<sub>3</sub>寄りに位置し、平面形は径66×59cmの不整楕円形で、床面を皿状に4cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、焼土粒子や焼土ブロックを含む黒褐色土と極暗赤褐色土が締まって堆積している。炉床は南西側の一部が攪乱を受けているが、強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。

遺物は、炉の東側から出土した第81図1の弥生式土器の壺の底部1点だけであるが、付近の住居跡との関連から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

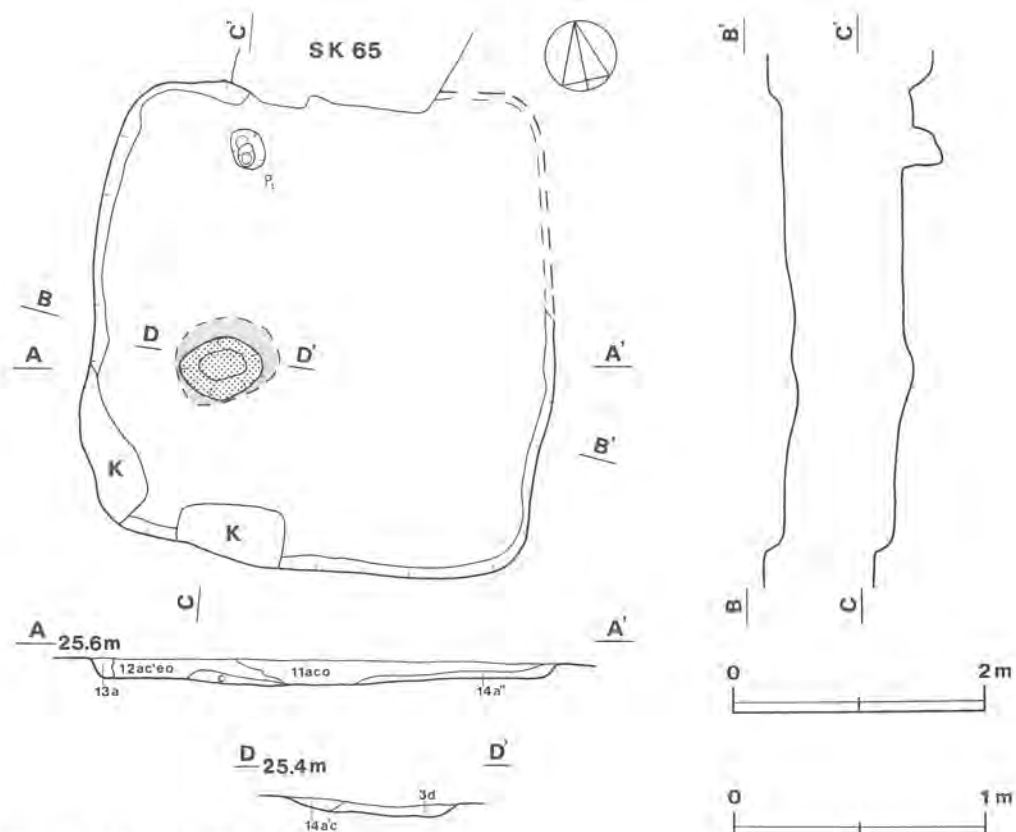
第80号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 1	壺 弥生式土器	B (1.4) C 8.4	底部は平底で、鮮明な木葉痕がある。胴下半部は底部からやや立ち上がっている。外面は付加条の縄文を施している。	底部はナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	5% P33

第81号住居跡 (第82図)

本跡は、2次調査区のC11a<sub>4</sub>区を中心に確認され、第61号住居跡の南東側3.5m程に位置している。また、本跡の北側が第65号土坑に切られている。

平面形は、長軸3.70m・短軸3.64mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-74°-Wを指している。壁は、攪乱を受けている部分と土坑に切られている部分を除いて、床面から外傾して立ち上がっ



第82図 第81号住居跡実測図

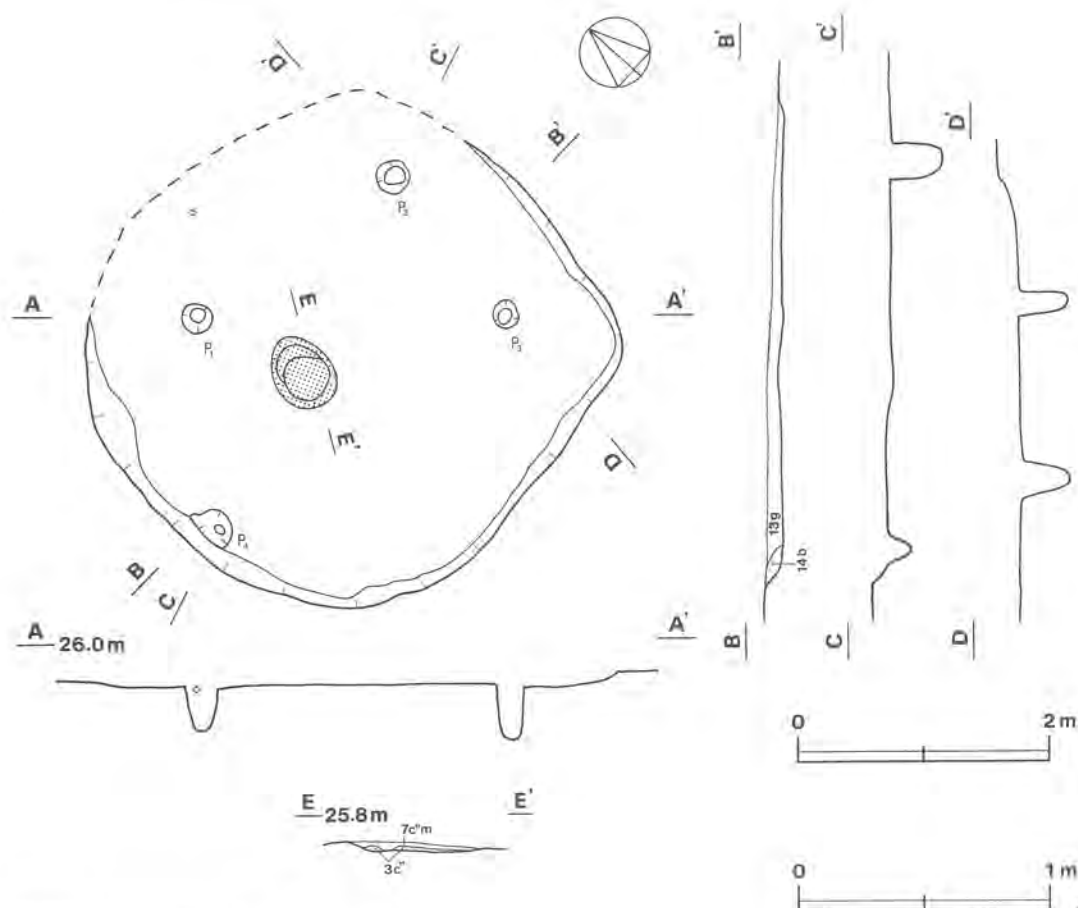
ている。壁の残存高は12～15cmである。床面はロームで、全体的に平坦で軟かい。ピットは北西壁近くに1か所検出され、規模は長径32cm・短径25cm・深さ33cmである。炉は、床面の中央から南南西側に位置し、平面形は径69×49cmの楕円形で、床面を皿状に深さ7cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には極暗赤褐色の焼土が堆積している。炉床は火熱を受けて、ロームが赤変焼土化している。床面積は約12㎡である。

覆土は、上層に少量のローム粒子・焼土粒子・砂を含む黒褐色土や極暗褐色土、下層に多量のローム粒子を含む褐色土が、それぞれ自然堆積している。

遺物は、炉内から弥生式土器片2点、床面直上から弥生式土器片3点、覆土中から土師器片20点が出土している。

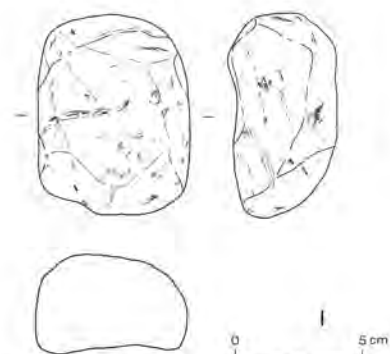
炉内の出土遺物から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

### 第83号住居跡（第83図）



第83図 第83号住居跡実測図

本跡は、2次調査区のC11d<sub>4</sub>区を中心に確認され、第84号住居跡の北側3m程に位置している。平面形は、長軸3.84m・推定短軸3.80mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-86°-Wを指している。壁は、北側が削平されていて不明である。他は床面からゆるやかに外傾して立ち上がっている。壁の残存高は8~15cmである。床面はロームで、良く締まっている。特に炉の周囲は硬い。また、西側壁付近から東側壁にかけて低く傾斜している。ピットは4か所で、P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>が支柱穴である。規模は長径22~28cm・短径22~26cm、深さはそれぞれ36・39・44cmである。P<sub>4</sub>は長径36cm・短径32cm、深さ23cmである。炉は床面の中央から西側に位置し、平面形は径61×47cmの楕円形で、床面を皿状に5cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には暗赤褐色の焼土が締まって堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約12m<sup>2</sup>と推定される。



第84図 第83号住居跡出土遺物実測図

覆土は、少量のローム粒子、微量の焼土粒子を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は、床面直上から弥生式土器片8点、第84図1の浮子1点が出土している。

遺物とやや胴張りした丸味のあるブランから、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

#### 第84号住居跡（第85図）

本跡は、2次調査区のC11e<sub>4</sub>区を中心に確認され、第83号住居跡の南側3m程に位置している。平面形は、長軸4.58m・短軸4.18mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-39°-Wを指している。壁は、床面から垂直に近い角度で外傾して立ち上がっている。壁高は15~35cmである。床面はロームで、全体的に平坦で良く締まっている。特に、炉の西側は硬い。また、南側壁コーナー付近の床面には多量の焼土が炭化材を含んで堆積している。このことから、本跡は焼失家屋と思われる。ピットは4か所で、すべて支柱穴である。規模は長径23~30cm・短径19~24cm、深さは35~42cmである。炉は、床面の中央から北西側に位置し、平面形は径70×56cmの不整楕円形で、床面を皿状に4cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、赤褐色の焼土が堆積している。炉床は強い火熱を受け、凹んだ底部が赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約16.5m<sup>2</sup>である。

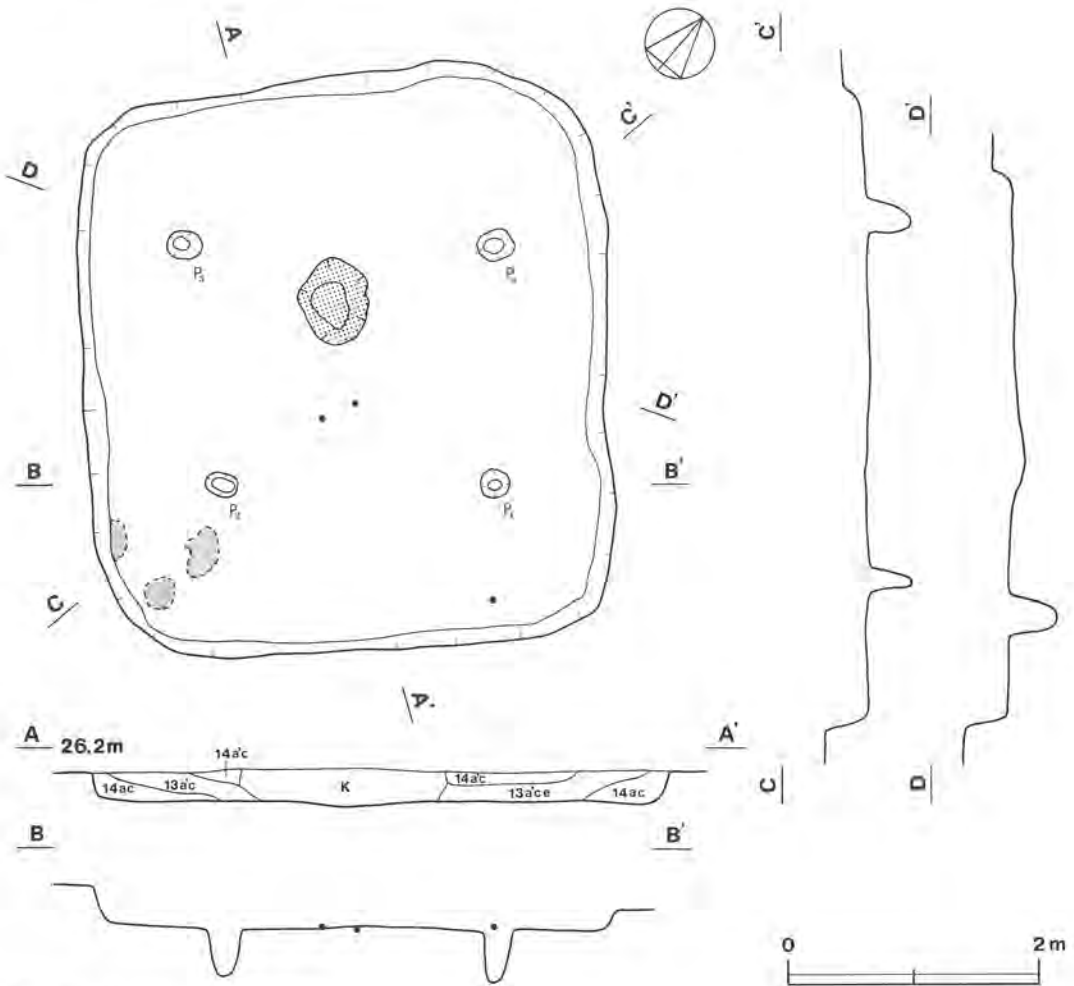
覆土は、中央部が大きく攪乱を受けている部分を除くと、上層に中量のローム粒子、微量の焼土粒子を含む褐色土、下層に中量のローム粒子、微量の焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土、壁



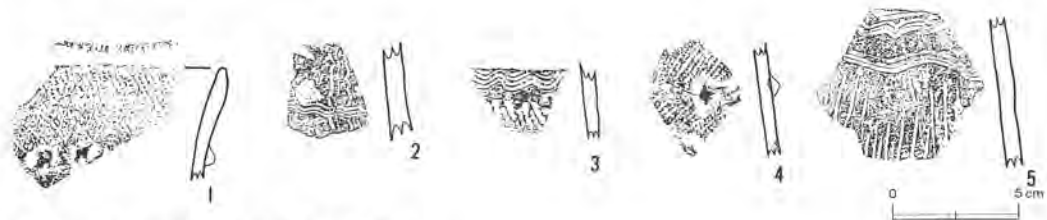
際には少量のローム粒子、微量の焼土粒子を含む褐色土が、それぞれ締まって自然堆積している。

遺物は、炉の南東側床面から弥生式土器片が3点、床面直上から弥生式土器片33点、覆土の上層から土師器片50点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第85図 第84号住居跡実測図



第86図 第84号住居跡出土遺物拓影図

第86図の1～5は第84号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は口縁部片で、

口唇部と口縁部に付加条の縄文を施している。口縁部には2個の瘤を貼付している。2～4は頸部片である。2は櫛描による波状文を横位・縦位に、3は同文を横位に施している。4は付加条の縄文を施した上へ2個の瘤を貼付している。5は胴部片で、櫛描による横位の波状文と竹管による縦位の沈線を施している。

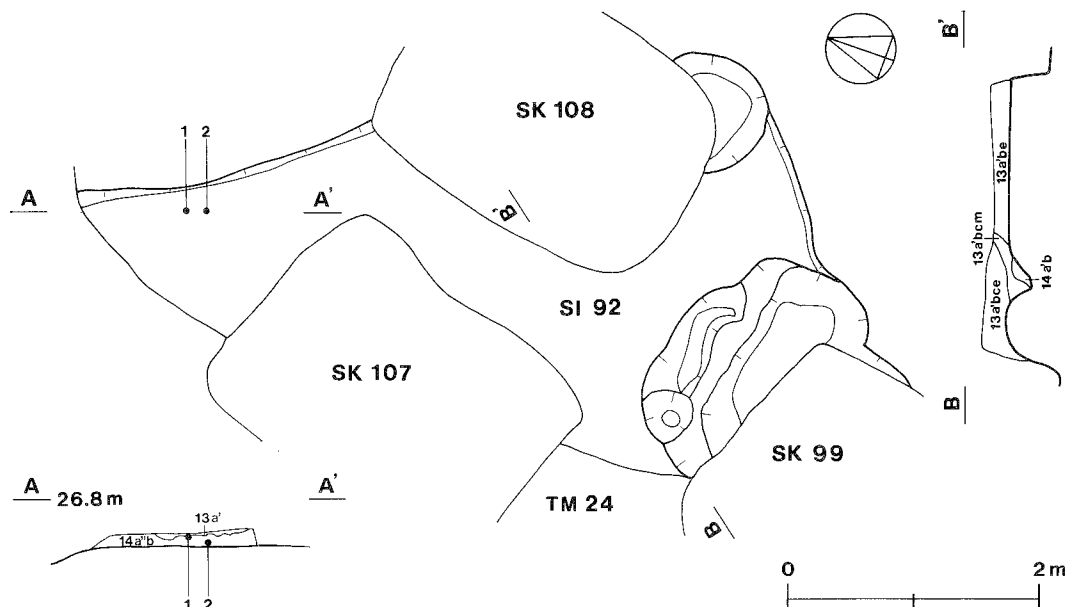
### 第92号住居跡（第87図）

本跡は、2次調査区のC10e<sub>8</sub>区を中心に確認され、第79号住居跡の東側14m程に位置している。また、本跡は第24号古墳の西側部周溝、第99・107・108号土坑に切られている。

平面形・規模・ピット・炉・床面積等は、古墳の周溝と土坑に切られているために不明である。壁の残存高は10cm程である。残された壁は、床面から3cm程で外傾して立ち上がっている。また、残された床面はロームで、第99号土坑と第108号土坑の間の床面は、良く締まっている。その他は軟かい。

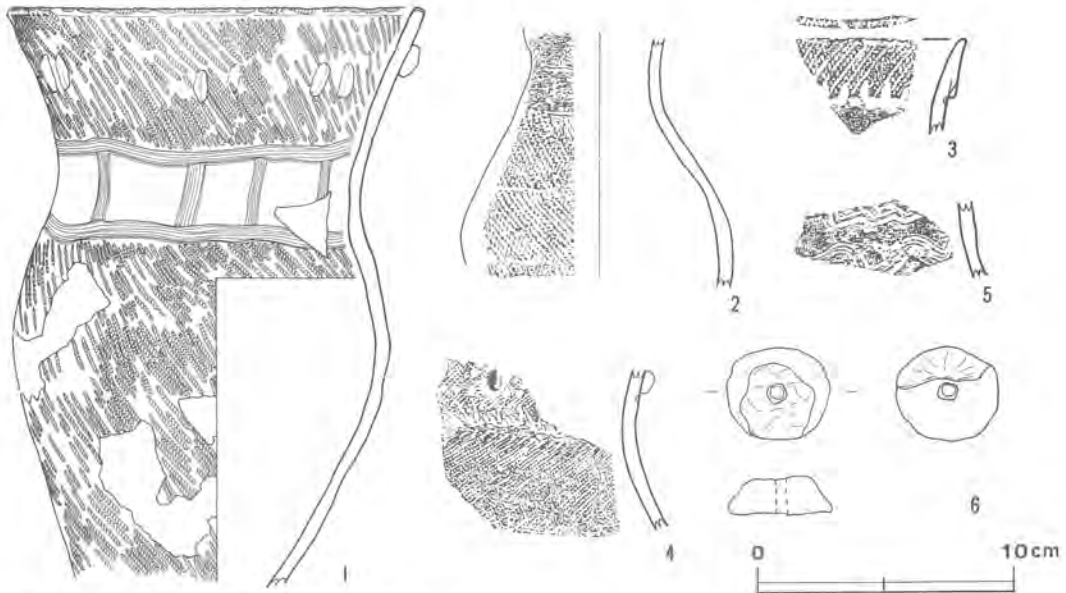
覆土は、第24号古墳の周溝を調査中に発見された住居跡のため、周溝の一部として掘り進んでしまい、急遽土層観察用ベルトを任意に設定し調査した。そのために第99号土坑・第108号土坑間のベルト、第107号土坑の北東側の遺物包含の土層だけが残っただけである。それによると、14cm程の覆土は、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子等を含む暗褐色土や褐色土が、それぞれ締まって堆積している。

遺物は、第107号土坑の北東側の床面から横位の状態で第88図1の弥生式土器の壺、覆土中から2の壺の胴部の他に弥生式土器片141点、6の石製紡錘車、土師器片16点が出土している。



第87図 第92号住居跡実測図

不明な点が多いが、本跡は遺物とその出土状況から、弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第88図 第92号住居跡出土遺物実測・拓影図

第92号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第88図 1	壺 弥生式土器	A 16.6 B (23.1)	底部が欠損する土器である。胴下半部から口縁部にかけて器厚をほぼ一定に保って、全体的に上部が開いた緩いS字状を呈している。口唇部、口縁部、胴部に付加条の縄文を施している。頸部の上・下端には櫛描による直線文を廻らし、その間に櫛描きによる直線文を12本縦位に施して区画している。口縁部には2個1単位の瘤を6か所貼付している。	内面はナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	90% P35
2	壺 弥生式土器	B (9.7)	胴上半部から頸部までの破片である。胴上半部から器厚をほぼ一定に保って内彎し、頸部ではほぼ垂直に立ち上がっている。頸部は無文である。胴上半部に付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒・石英 橙色 普通	25% P36

第88図3～5は第92号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は折返した口縁部に付加条の縄文を施し、下端に棒状工具による押圧を加えている。口唇部には縄文を施している。4は頸部片で、付加条の縄文を施した上に、刺突文を上・下2段に廻らし、その間に瘤を貼付している。5は櫛描による波状文を横位に施した頸部片である。

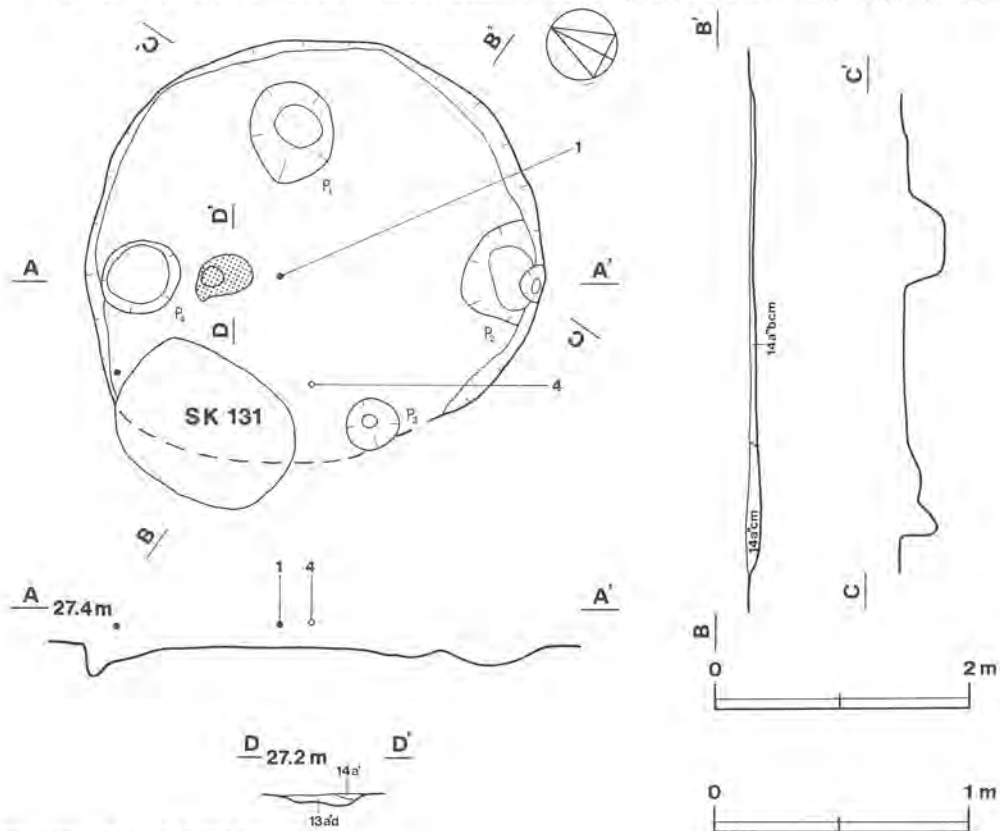
第98号住居跡 (第89図)

本跡は、2次調査区のD10b<sub>1</sub>区を中心に確認され、第101号住居跡の西側5m程に位置している。また、本跡の西側は第131号土坑に切られている。

平面形は、長径3.64m・短径3.40mの円形を呈すると思われ、長径方向はN-42°-Wを指している。壁は、西部で土坑に切られている他は床面からゆるやかに立ち上がっている。また、壁とピットが接している部分は、ピットと壁が一体になって、垂直に立ち上がっている。壁の残存高は3~9cmである。床面はロームで、全体的に平坦で良く締まり、特に、炉の南東側は硬い。ピットは4か所である。規模は長径42~81cm・短径40~66cm、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の深さは、それぞれ35・16・20・10cmである。炉は、P<sub>4</sub>の南東側寄り、床面の中央から北西側に位置している。平面形は径58×31cmの不整楕円形で、床面を皿状に5cm程掘り凹めている。炉内には、中量のローム粒子等を含む褐色土と暗褐色土が締まって堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化し、小さい凹凸を示している。

覆土は、所々に攪乱があるが、多量のローム粒子、少量のローム小ブロック・焼土粒子・炭化物を含む褐色土と暗褐色土が締まって堆積している。

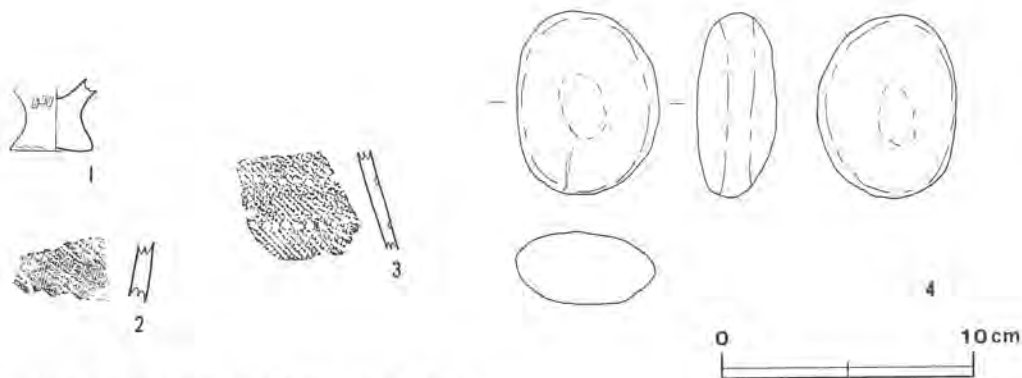
遺物は、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の中間付近の床面から底部に木葉痕を付けた弥生式土器片1点、炉の南側床面



第89図 第98号住居跡実測図

から弥生式土器片6点、4の敲石1点、攪乱を受けている覆土中から弥生式土器片8点、第90図1のミニチュア土器を含む土師器片31点が出土している。

床面出土の遺物から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第90図 第98号住居跡出土遺物実測・拓影図

#### 第98号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 1	ミニチュア 土器 土師器	B (2.5) C 「3.3」	器台形の土器で、脚部にあたる所は大きく開いている。器受部も直線的に開いている。	器受部内・外面、脚部とも篋状工具によるナデ整形がなされている。	砂粒にぶい橙色普通	80% P113

第90図の2・3は第98号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2・3は付加条の縄文を施した胴部片で、3はその上に刺突を上・下2段に加えている。

#### 第101号住居跡 (第91図)

本跡は、2次調査区のD10c<sub>0</sub>区を中心に確認され、第98号住居跡の東側5m程に位置している。

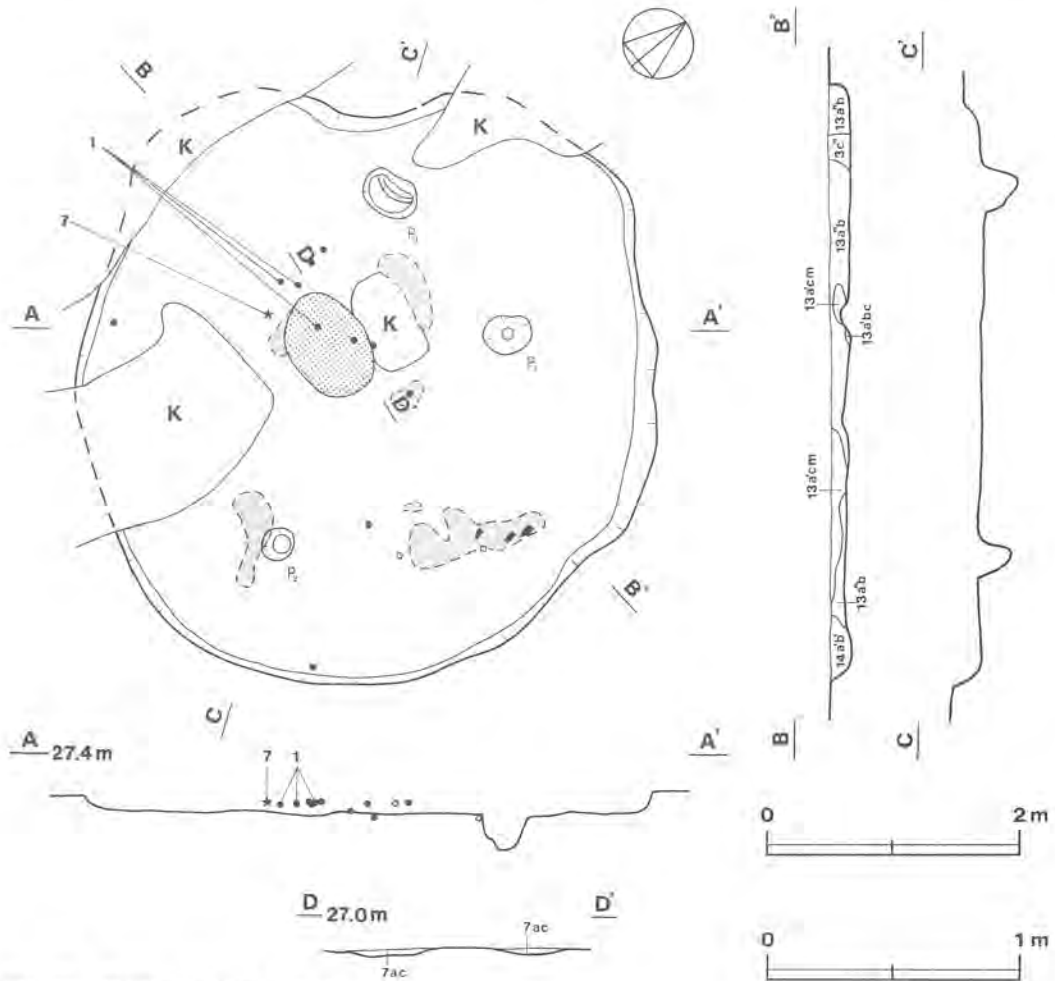
平面形は、長径4.56m・短径4.48mの不整形円形を呈し、長径方向はN-44°-Wを指している。壁は北・南・西側で3か所攪乱を受けているが、その他は床面から内彎した後で外傾して立ち上がっている。壁の残存高は9~22cmである。床面はロームで、全体的に凹凸を示して良く締まっている。特に、東側床面は硬い。ピットは3か所で、すべて支柱穴である。規模は長径28~46cm・短径26~31cm、深さは28~33cmである。炉は、床面のほぼ中央部に位置し、平面形は径87×61cmの楕円形で、床面を掘り込まずに使用した地床炉である。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化し、ガリガリして凹凸している。その凹んだ部分は床面から2cm程である。床面積は約16.5m<sup>2</sup>である。

覆土は、部分的に攪乱を受けているが、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土・炭化物を含んだ暗褐色土が締まって堆積している。なお、覆土上層には部分的に多量の焼土が堆積していたが、

流れ込みと思われ、本跡とは無関係と思われる。

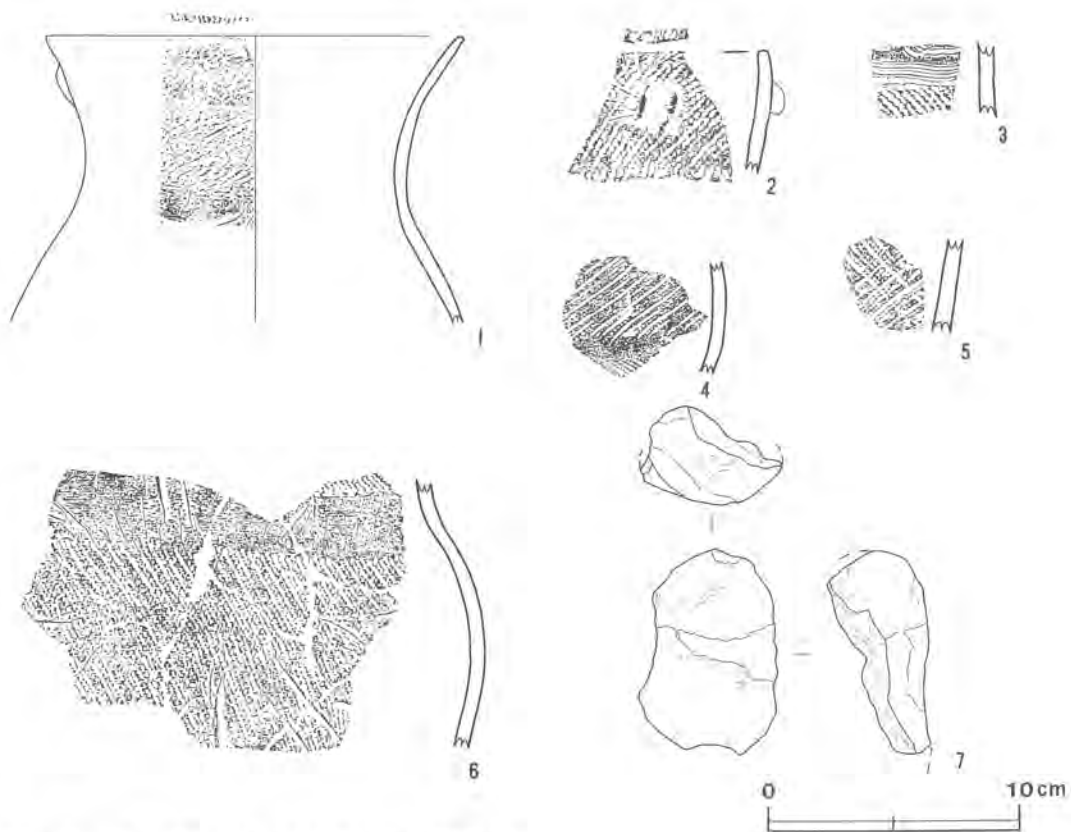
遺物は、南西側床面から弥生式土器片 4 点、床面直上から第92図 1 の弥生式土器の壺の胴上半部から口縁部にかけての他に破片92点、7 の支脚 1 点、攪乱を受けている覆土の上層から土師器片72点、陶器片 3 点が出土している。

床面出土遺物と床面直上の遺物から判断して、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第91図 第101号住居跡実測図

第92図の 2～6 は第101号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2 は口縁部片で付加条の縄文が施され、その上に瘤を貼付している。口唇部には縄文を施している。3～5 は胴部片である。3 は櫛描による横位の波状文と付加条の縄文を、4 は付加条の縄文を羽状に、5 は付加条の縄文を施している。6 は頸部から胴部にかけての破片で、頸部は無文であり、胴部に付加条の縄文を施している。



第92図 第101号住居跡出土遺物実測・拓影図

第101号住居跡出土土器観察表

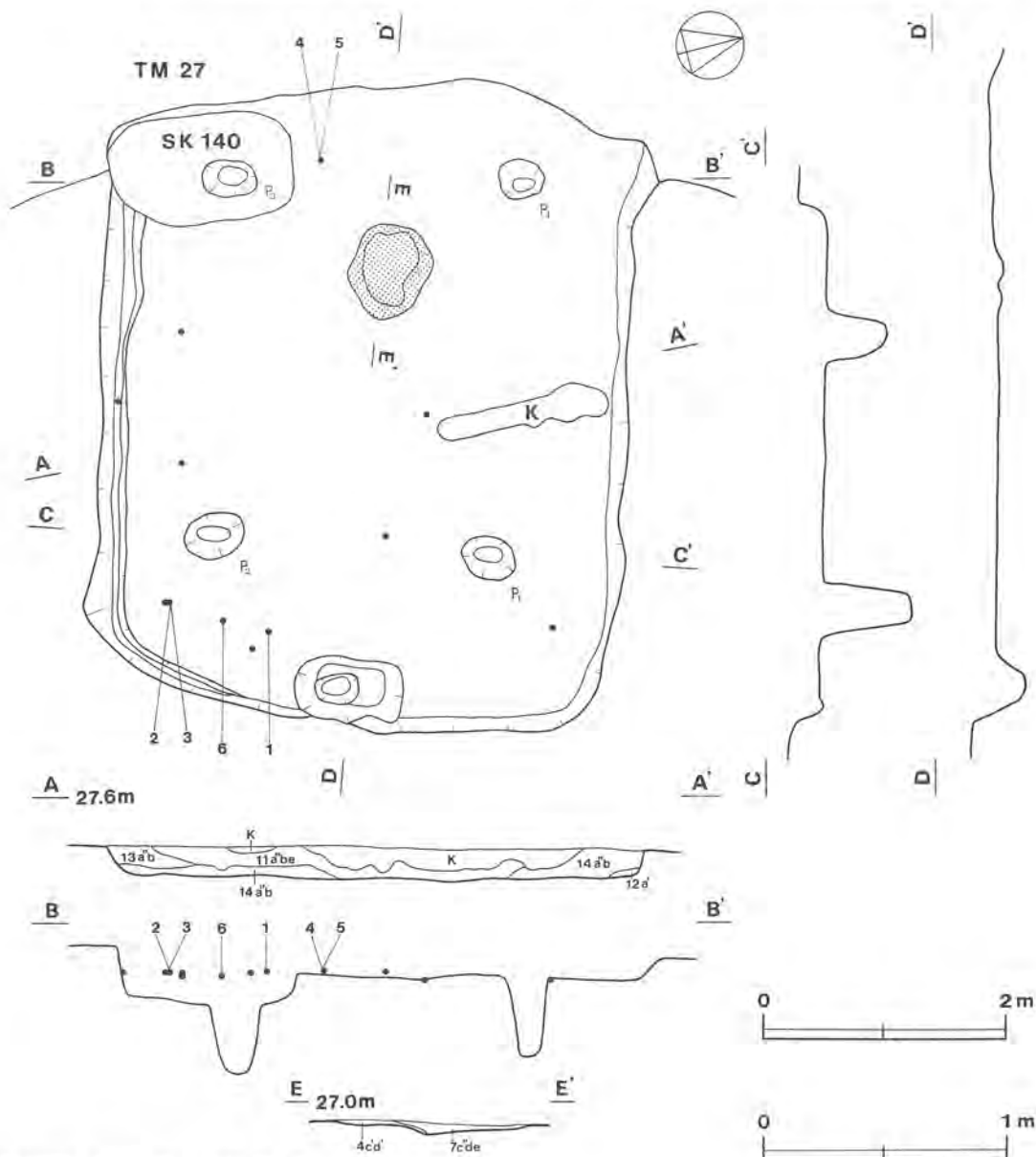
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第92図 1	壺 弥生式土器	A 16.6 B (11.4)	胴部から口縁部にかけての破片である。頸部から器厚をほぼ一定に保って弓なりに外反し、口唇部付近で器厚を減じている。頸部の下側と頸部の上側から口縁部にかけて、付加条の縄文を施し、頸部の中央部を無文帯としている。また、頸部の上側に瘤を1個貼付している。	内面はナデ整形。	砂粒・石英 にふい橙色 普通	30% P37

第102号住居跡（第93図）

本跡は、2次調査区のD10d<sub>9</sub>区を中心に確認され、第101号住居跡の東南東側9m程に位置している。また、本跡の西側が第27号古墳の周溝に、さらに南西壁が第140号土坑に切られている。

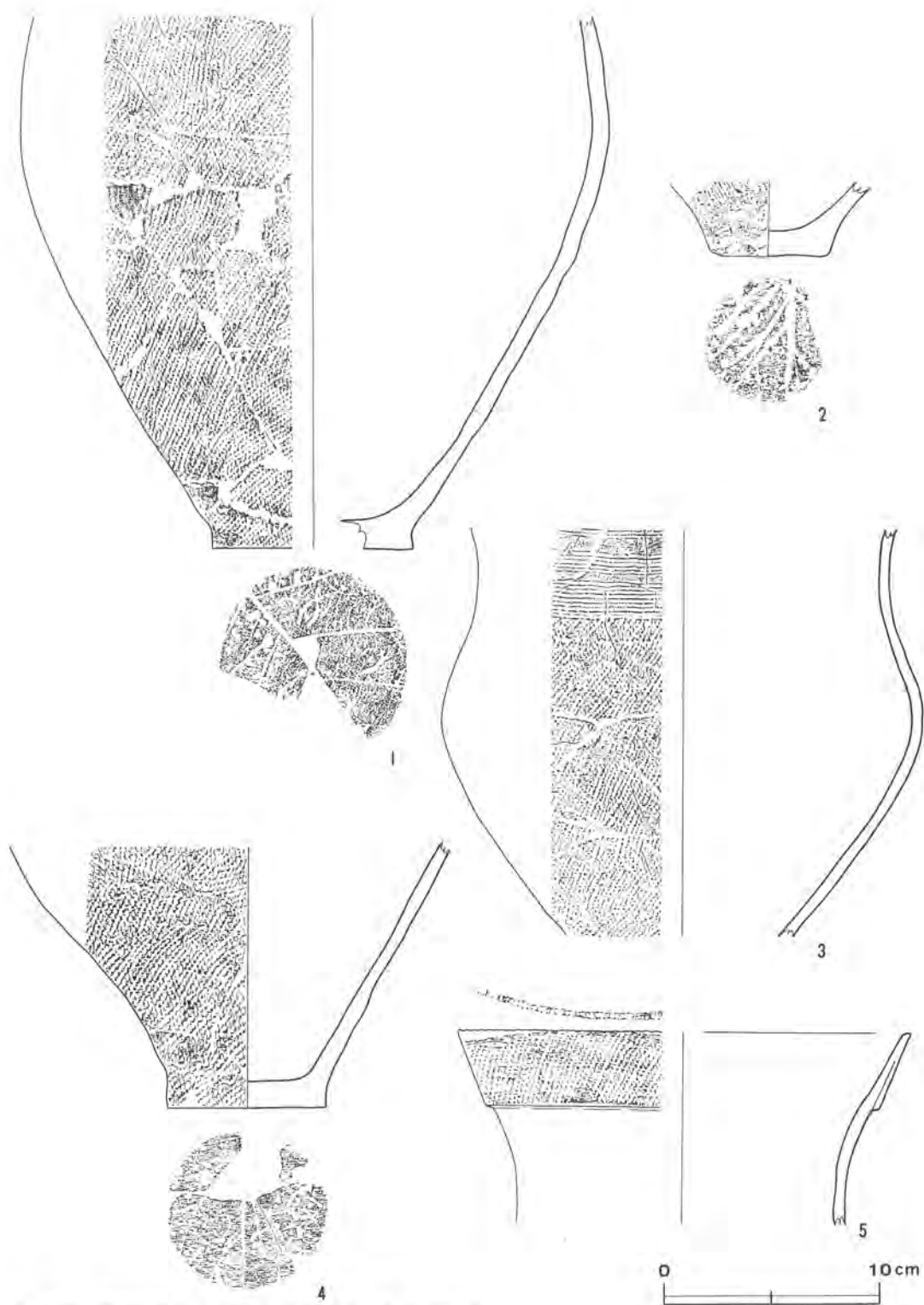
平面形は、長軸5.34m・短軸4.36mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-71°-Wを指している。壁は、西側が床面の一部とともに古墳の周溝と土坑に切られている。その他は床面と一部に廻る

壁溝底から外傾して立ち上がっている。壁の残存高は6~23cmである。壁溝は、貯蔵穴付近から土坑までの南側床面の外側を、断面U字状を呈して幅18~35cm、深さ1~6cmで壁下に廻っている。床面はロームで、炉の東側がやや低くなるが、全体としては平坦で良く締まっている。また、北側床面には南~北に走る細長い溝状の攪乱が認められるが、4か所の柱穴の内側は特に硬い。ピットは4か所で、いずれも支柱穴である。規模は長径39~51cm・短径30~37cm、 $P_1$ ~ $P_4$ の深さはそれぞれ53・76・58・66cmである。なお、 $P_3$ は土坑の下から検出された。炉は、床面の中央から西側に位置し、平面形は径81×61cmの不整楕円形で、床面を5cm程掘り凹めた地床炉である。

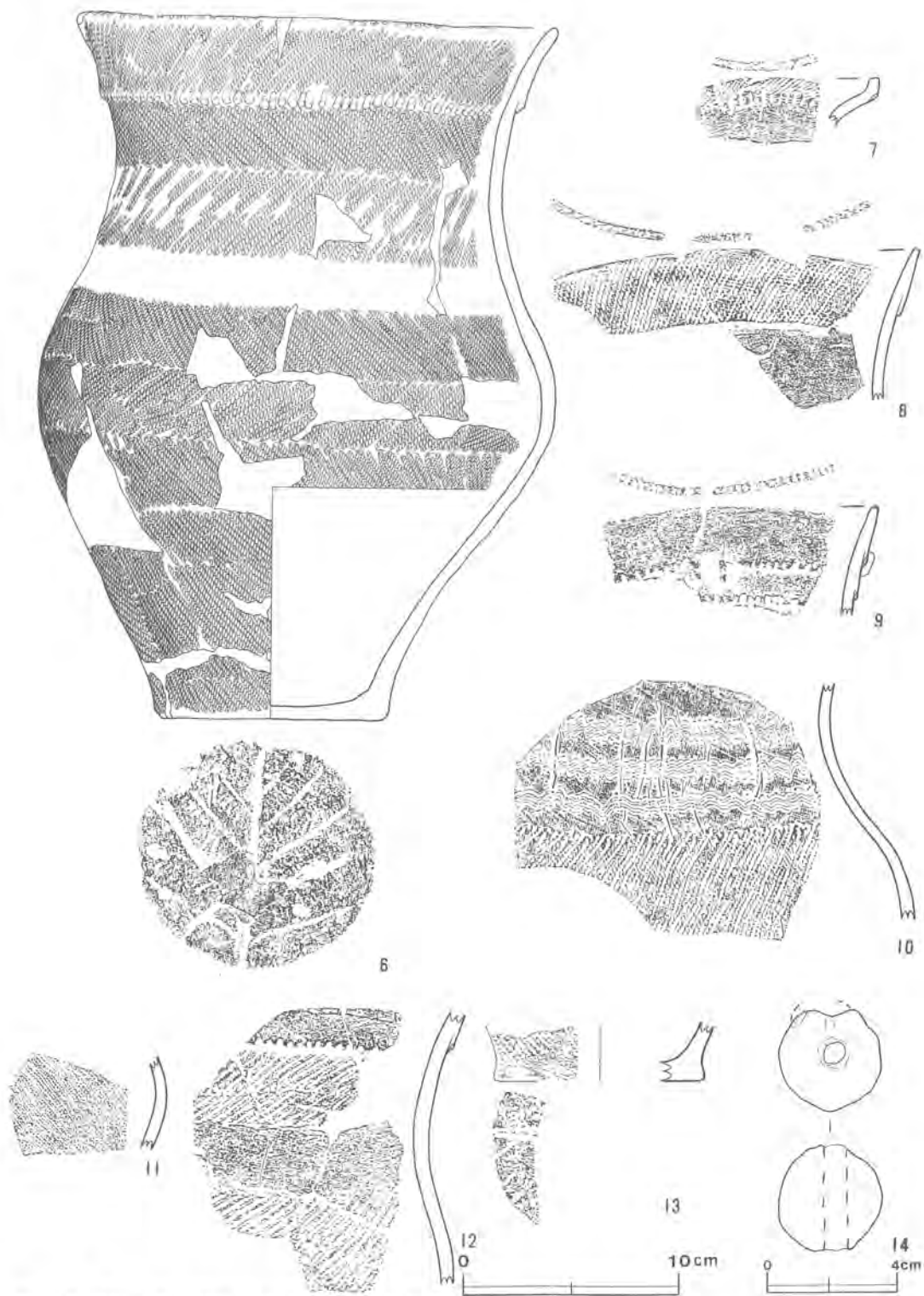


第93図 第102号住居跡実測図





第94图 第102号住居跡出土遺物実測・拓影图-1



第95图 第102号住居跡出土遺物実測・拓影图-2

炉内には暗赤褐色の焼土が締まって堆積している。炉床は火熱を受けて、ロームが赤変焼土化している。貯蔵穴は、東壁に接して位置し、平面形は径90×55cmの隅丸長方形を呈し、床面を鍋状に24cm程掘り凹めている。床面積は約21m<sup>2</sup>である。

覆土は、上層は大きく攪乱を受けているが、多量のローム粒子、少量のローム小ブロック・炭化粒子等を含む黒褐色土、下層に多量のローム粒子、少量のローム小ブロックを含む褐色土、壁際には多量のローム粒子、少量のローム小ブロックを含む暗褐色土が、それぞれ締まって堆積している。

遺物は、P<sub>2</sub>と貯蔵穴の間、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間、P<sub>2</sub>の西側、炉の西側等の床面から第94・95図1～6の弥生式土器の壺とその胴部、底部、頸部から口縁部にかけての破片が、また、床面直上から弥生式土器片163点、14の球状土錘1点、覆土の上層から土師器片79点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

第102号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図 1	壺 弥生式土器	B (25.0) C 「9.4」	底部から胴上半部にかけての破片である。底部は平底で木葉痕が見られる。胴部は底部から器厚をほぼ一定に保って直線的に外傾して立ち上がり、胴中位で内彎している。外面は全体に付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒・石英 橙色 普通	20% P39
2	壺 弥生式土器	B (3.6) C 5.8	底部は平底で小さく、木葉痕が見られる。胴部は外傾している。外面は付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒 橙色 普通	5% P42
3	壺 弥生式土器	B (19.0)	胴下半部から頸部にかけての破片である。胴下半部は器厚を一定に保って直線的に外傾して立ち上がり、胴中央部よりやや上位に最大径を持ち、そこから内彎して頸部に至る。頸部はやや外反気味に立ち上がっている。胴部外面には付加条の縄文を施し、頸部には幅広の櫛による直線文を3条廻らしている。	内面はナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	25% P40
4	壺 弥生式土器	B (12.2) C 7.4	底部から胴中央部にかけての破片で、底部は平底で厚く、鮮明な木葉痕がある。胴部は器厚をほぼ一定に保って底部から直線的に外傾して立ち上がっている。外面は付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒・石英 橙色 普通	45% P41

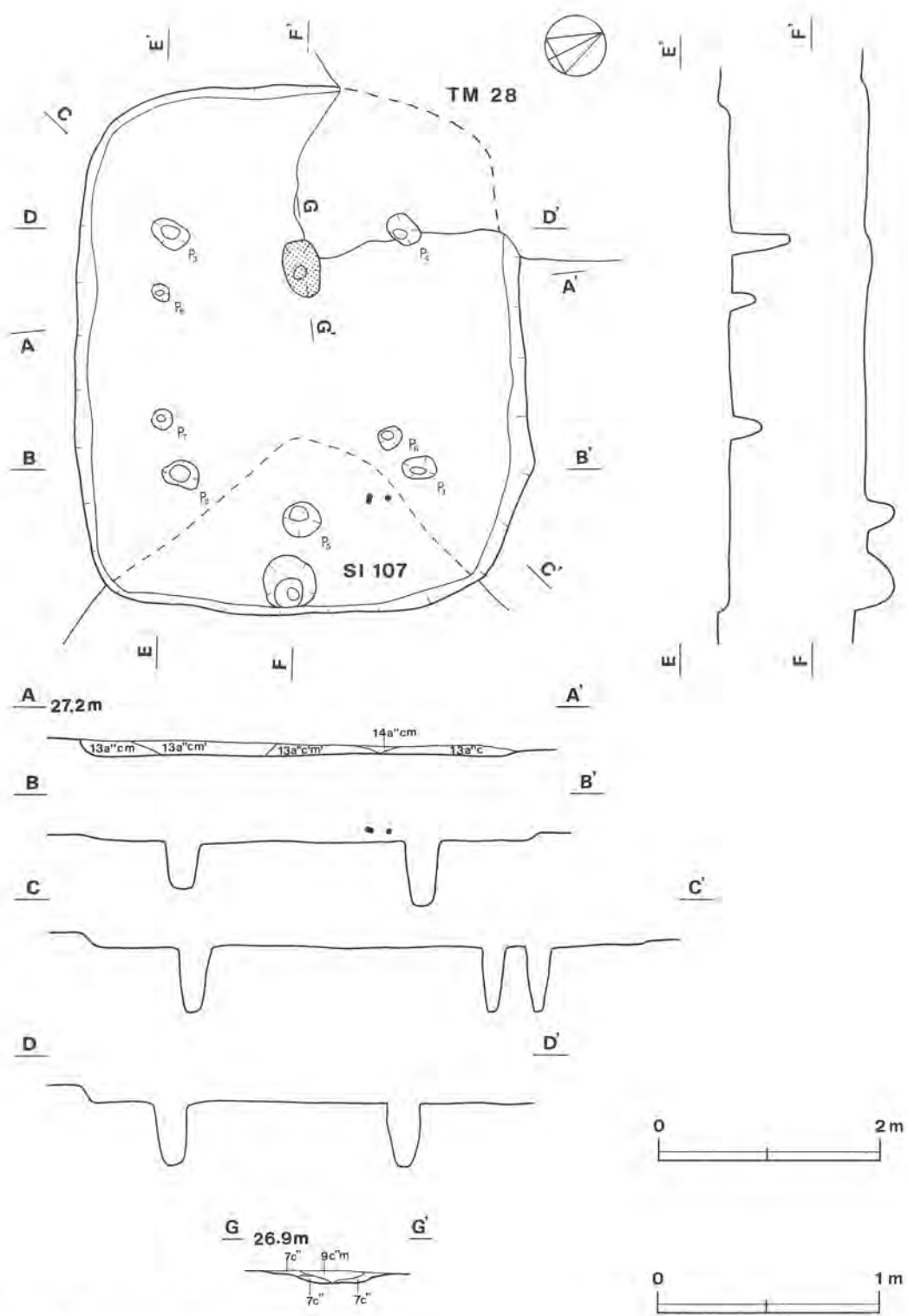
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図 5	壺 弥生式土器	A「21.2」 B (9.0)	頸部から口縁部にかけての破片で、頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は頸部からほぼ直線的に外傾している。口縁部は複合口縁である。頸部は無文である。外面は口縁部と口唇部に付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	15% P43
第95図 6	壺 弥生式土器	A 22.4 B 33.0 C 11.0	底部は平底で木葉痕がある。胴部は底部から外反気味に開いて立ち上がり、中央部で最大径を測る。胴上半部は緩やかに内彎してつぼまり、頸部から再び外反して口縁部へと立ち上がっている。口縁部は複合口縁である。胴上半部上位を無文帯とし、他は全面に羽状縄文を施している。口唇部は縄文原体を押圧して刻み目を付け、口縁部下端は棒状工具を押圧して刻み目を連続して施している。	内面はナデ整形。	砂粒 黒褐色 普通	90% P38

第95図の7～13は第102号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7～9は口縁部片である。7は口縁部に付加条の縄文を施し、下端に棒状工具による押圧を加えている。口唇部には縄文を施している。8は折返した口縁部に付加条の縄文を、口唇部に縄文を施している。9は口縁部に棒状工具による押圧を上・下2段に加え、間に2個1単位の瘤を貼付けている。口唇部には縄文を施している。10は頸部片で、楯描による波状文を横位に施し、胴部には付加条の縄文を施している。11は付加条の縄文を施した胴部片である。12は口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は無文で、下端に棒状工具による押圧を加えている。頸部上半と胴部に付加条の縄文が施され、頸部下半は無文である。13は木葉痕をもつ底部片で、胴部下端に付加条の縄文を施している。

#### 第106号住居跡 (第96図)

本跡は、2次調査区のD11g<sub>4</sub>区を中心に確認され、第113号住居跡の北側8m程に位置している。また、本跡の中央部は第28号古墳の西側の周溝に切られ、さらに、東側で第107号住居跡と重複している。

平面形は、長軸4.88m・短軸4.06mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-63°-Wを指している。壁は、床面から内彎した後外傾して立ち上がっている。壁の残存高は3～16cmである。床面はロームで、全体的に良く締まっている。特にP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の内側は硬い。なお、本跡の床面は、第107号住居跡に切られている。また、炉の北側部の床面に少量の焼土と炭化材が検出された。これは床面で火を使用した痕跡とは違って、まさしく焼失家屋の様相を示すものであった。ピットは8か所で、



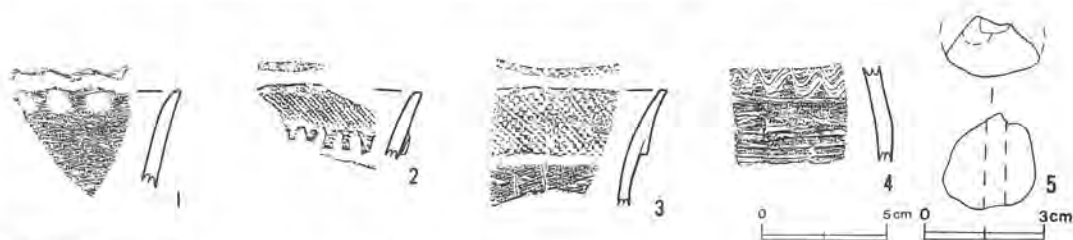
第96图 第106号住居跡実測图

支柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本である。規模は長径31～36cm・短径20～24cm、P<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>の深さは、それぞれ62・44・59・62・30・62・30・25cmである。また、P<sub>6</sub>はP<sub>1</sub>の、P<sub>7</sub>はP<sub>2</sub>の、P<sub>8</sub>はP<sub>3</sub>のそれぞれ補助柱穴と思われる。なお、P<sub>5</sub>は壁と貯蔵穴との位置関係や、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の中間部の硬い床面等から判断して、出入口部に係わる柱穴と思われる。炉は、床面の中央部から北西側に位置し、平面形は径55×33cmの楕円形で、床面を皿状に6cm程掘り凹めている。炉内には少量の暗赤褐色の焼土が堆積している。炉床は火熱を受けて、ロームが赤変焼土化している。貯蔵穴は、南東壁の中央部に接し、平面形が径47cm程のほぼ円形で、床面を楯鉢状に22cm程掘り凹めている。床面積は約17m<sup>2</sup>である。

覆土は、中央部に多量のローム粒子と少量・中量の焼土粒子・炭化物を含む暗褐色土、壁際には多量のローム粒子、少量の焼土粒子・炭化粒子を含む褐色土が、それぞれ締まって堆積している。

遺物は、弥生式土器片が炉内から5点、床面から4点、覆土中から18点、第97図5の球状土錘1点、古墳の周溝に切られている西側の覆土の上層から土師器の小片106点が出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



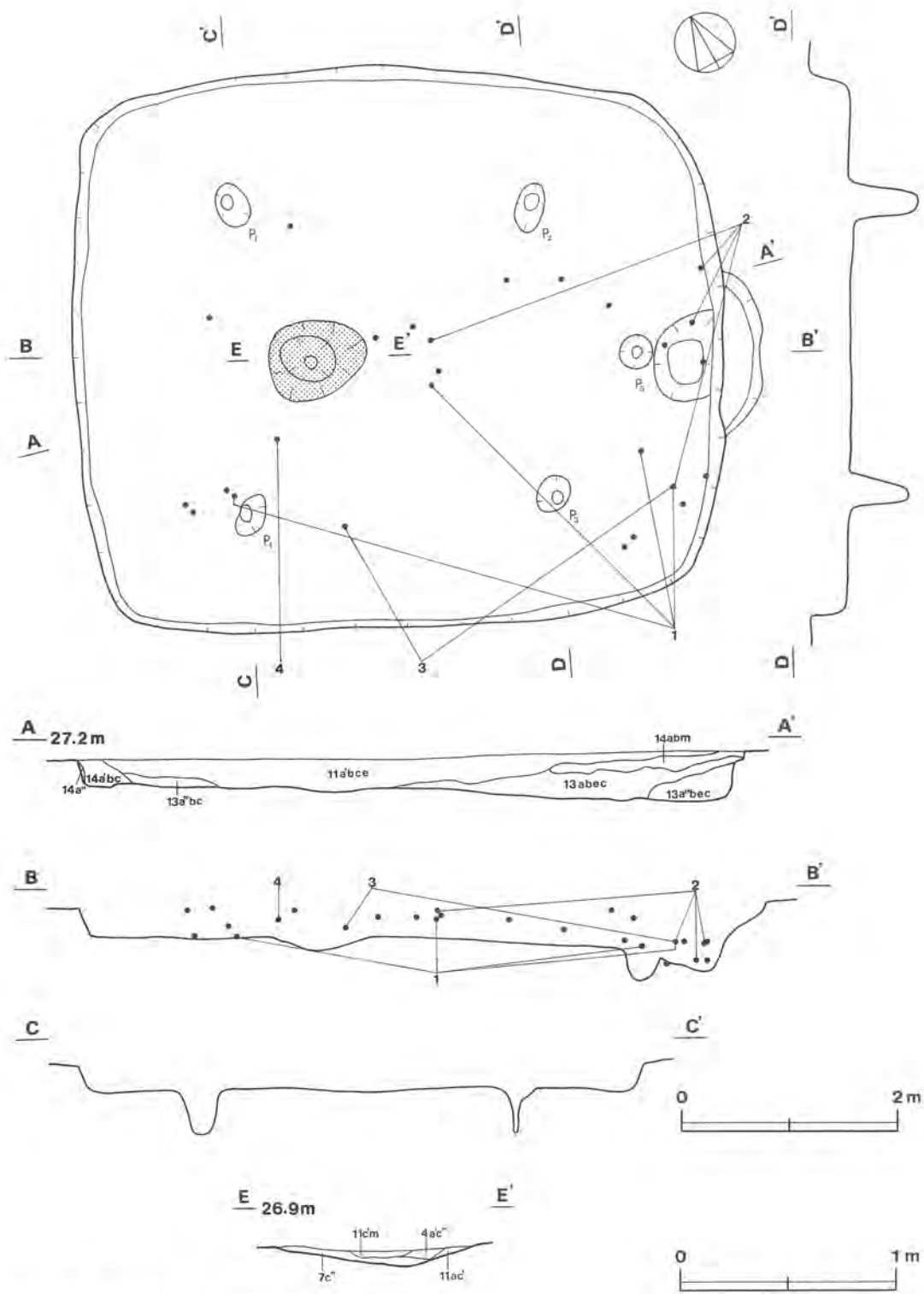
第97図 第106号住居跡出土遺物実測・拓影図

第97図の1～4は第106号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1～3は口縁部片である。1は口唇部を指頭によって押圧し小波状を呈する。2は口縁部に付加条の縄文を施し、下端に棒状工具による押圧を加えている。また、口唇部に縄文を施している。3は折返した口縁部に付加条の縄文を、口唇部に縄文を施している。4は胴部片で、櫛描による波状文を横位に施している。

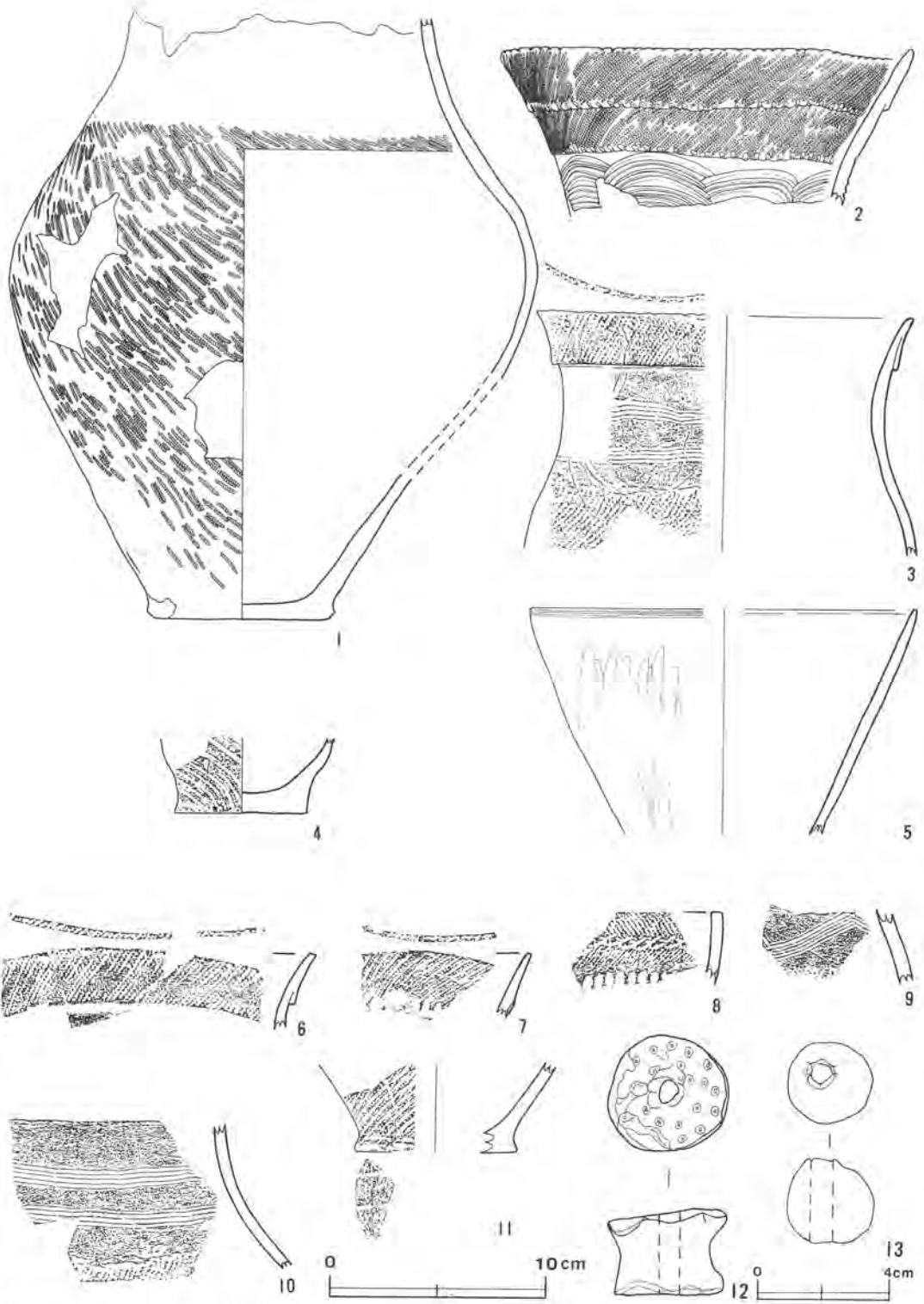
#### 第113号住居跡 (第98図)

本跡は、2次調査区のD11j<sub>1</sub>区を中心に確認され、第106号住居跡の南側8m程に位置している。

平面形は、長軸6.38m・短軸5.24mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-63°-Wを指している。壁は、北側がほぼ垂直、他は垂直に近い角度で外傾して床面から立ち上がっている。壁高は29～37cmである。床面はロームで、全体的に平坦で良く締まっている。特に各ピットに囲まれた内側は硬い。また、床面の西側壁付近には柱状の炭化材と厚く堆積した焼土が検出され、焼失家屋の様相を呈している。ピットは5か所で、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が支柱穴である。規模は長径36～46cm・短径24～29



第98图 第113号住居跡実測図



第99图 第113号住居跡出土遺物実測・拓影図



cm, P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>の深さは、それぞれ46・61・55・41・30cmである。炉は、床面の中央から西側に位置し、平面形は径92×75cmの楕円形で、床面を皿状に11.5cm程掘り凹めている。炉内には、極暗赤褐色や暗赤褐色の焼土が締まって堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。貯蔵穴は、P<sub>5</sub>と東側壁に接して位置し、平面形は径85×55cmの不整楕円形で、床面を浅い鍋状に16cm程掘り凹めている。床面積は27.5m<sup>2</sup>である。

覆土は、レンズ状に自然堆積している。上層に中量のローム粒子、少量のローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土、その下側は、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子等を含む褐色土、壁際にはローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土や褐色土が、それぞれ締まって堆積している。

遺物は、床面と床面直上から第99図1~4の弥生式土器の壺の口縁部、胴上半部から口縁部にかけて、及び底部やその他の破片が81点、12の紡錘車1点等が出土している。また、覆土中から13の球状土錘1点、弥生式土器片11点、5の埴形土器を含む土師器片45点も出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。

第113号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 1	壺 弥生式土器	B(28.1) C 8.7	口縁部欠損の土器である。底部は平底である。胴部は器厚を減じながら底部から直線的に外傾して立ち上がり、胴上半部付近から内彎して頸部でつぼまっている。最大径を胴上半部に持つ。外面は胴部に右捻りの付加条縄文を施している。	内面はナデ整形。頸部外面は横位のナデ整形。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	80% P46
2	壺 弥生式土器	A 19.7 B (7.4)	頸部から口縁部にかけての破片で、器厚をほぼ一定に保って外反して開いている。口縁部は二段に作出した複合口縁である。口縁部と口唇部には付加条の縄文を施している。口縁部は二段になっており、各下端へ棒状工具で連続して刺突し、刻み目を廻らしている。頸部は波状文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒・雲母 褐色 普通	30% P48
3	壺 弥生式土器	A「17.6」 B(11.0)	胴上半部から口縁部にかけての破片である。胴上半部は内彎している。頸部は外反して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。胴上半部、口縁部、口唇部に付加条の縄文を施している。頸部は櫛描による直線文を廻らしている。	内面はナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	5% P47

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 4	壺 弥生式土器	B (2.5) C 6.1	底部から胴下半部にかけての破片である。底部は平底で小さいが厚い。胴下半部は底部から器厚を減じて内彎している。外面は付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒・石英 橙色 普通	5% P49
5	埴形土器 土師器	A「18.0」 B(10.4)	大形の口縁部片であり、器厚を一定に保って直線的に大きく開いている。口唇部でやや薄くなる。	内面はナデ整形。外面寛ナデ後、口唇部付近をナデ整形。	砂粒 橙色 普通	30% P465

第99図の6～11は第113号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。6～8は口縁部片である。6は折返した口縁部に付加条の縄文を、口唇部に縄文を施している。7は付加条の縄文を施した口縁の下端に棒状工具による押圧を施し、口唇部に縄文を施している。8は口縁部に付加条の縄文とS字状結節文を施し、下端に棒状工具による押圧を加えている。9・10は頸部片で、9は櫛描の鋸歯状文、10は櫛描きの直線文が施されている。11は木葉痕をもつ底部片で、胴部下端に付加条の縄文を施している。

#### 第116号住居跡（第100図）

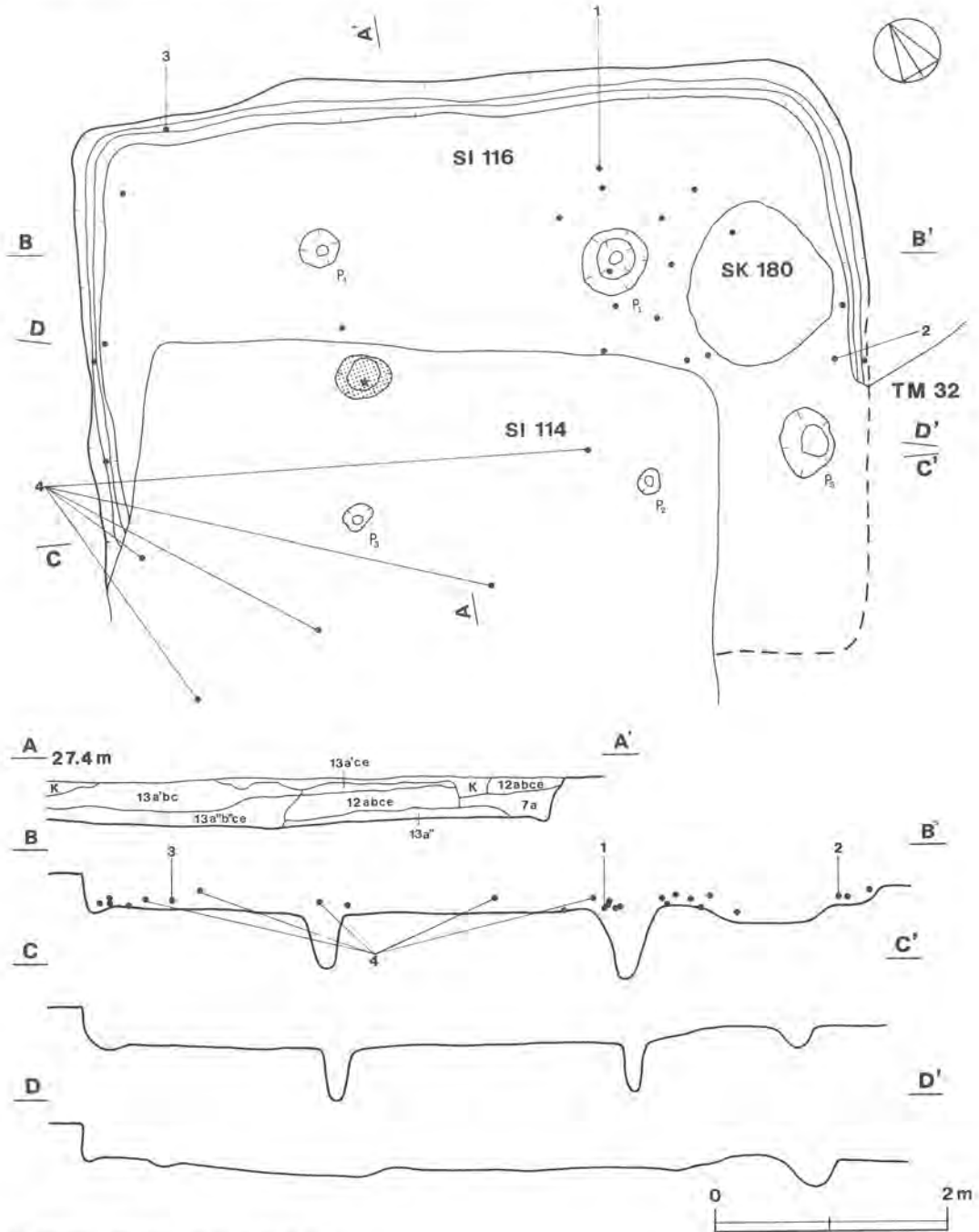
本跡は、2次調査区のD11i<sub>1</sub>区を中心に確認され、第113号住居跡の北西側8mに位置している。また、本跡の南側は第32号古墳の北側部周溝に、さらに南西部で第114号住居跡、東側床面は第180号土坑に切られている。

平面形は、長軸6.84m、その他は攪乱を受けているために推定であるが、短軸5.32mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-57°-Wを指していると思われる。壁は、南西部が床面とともに周溝と他の住居跡や土坑に切られていて不明である。残っている部分は、床面から続く壁溝と一体になり、壁溝底から垂直に立ち上がっている。壁の残存高は13～30cmである。壁溝は、一部が不明であるが床面の外側を断面U字状を呈して幅12～38cm、深さ6～8cmで壁下を全周していたと思われる。床面はロームで、土坑の南側の一部が良く締まっている。その他はやや締まっている。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の5か所で、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が主柱穴である。規模は長径23～61cm・短径19～54cm、P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の深さはそれぞれ66・48・48・49・28cmである。炉は、床面の中央部から北西側と推定される部分に位置し、平面形は径58×39cmの楕円形で、床面を皿状に6cm程掘り凹めている。この炉は上部が削平されているので、本来はもう少し深めの炉であったと思われる。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約33m<sup>2</sup>である。

覆土は、第114号住居跡に切られている所や部分的に攪乱を受けている場所が見られる。上層に多量のローム粒子、少量の焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土、中層に少量のローム粒子、極少量のローム小ブロック、微量の焼土粒子・炭化粒子を含む極暗褐色土、下層には中量のローム粒

子を含む極暗褐色土が、それぞれ締まって堆積している。

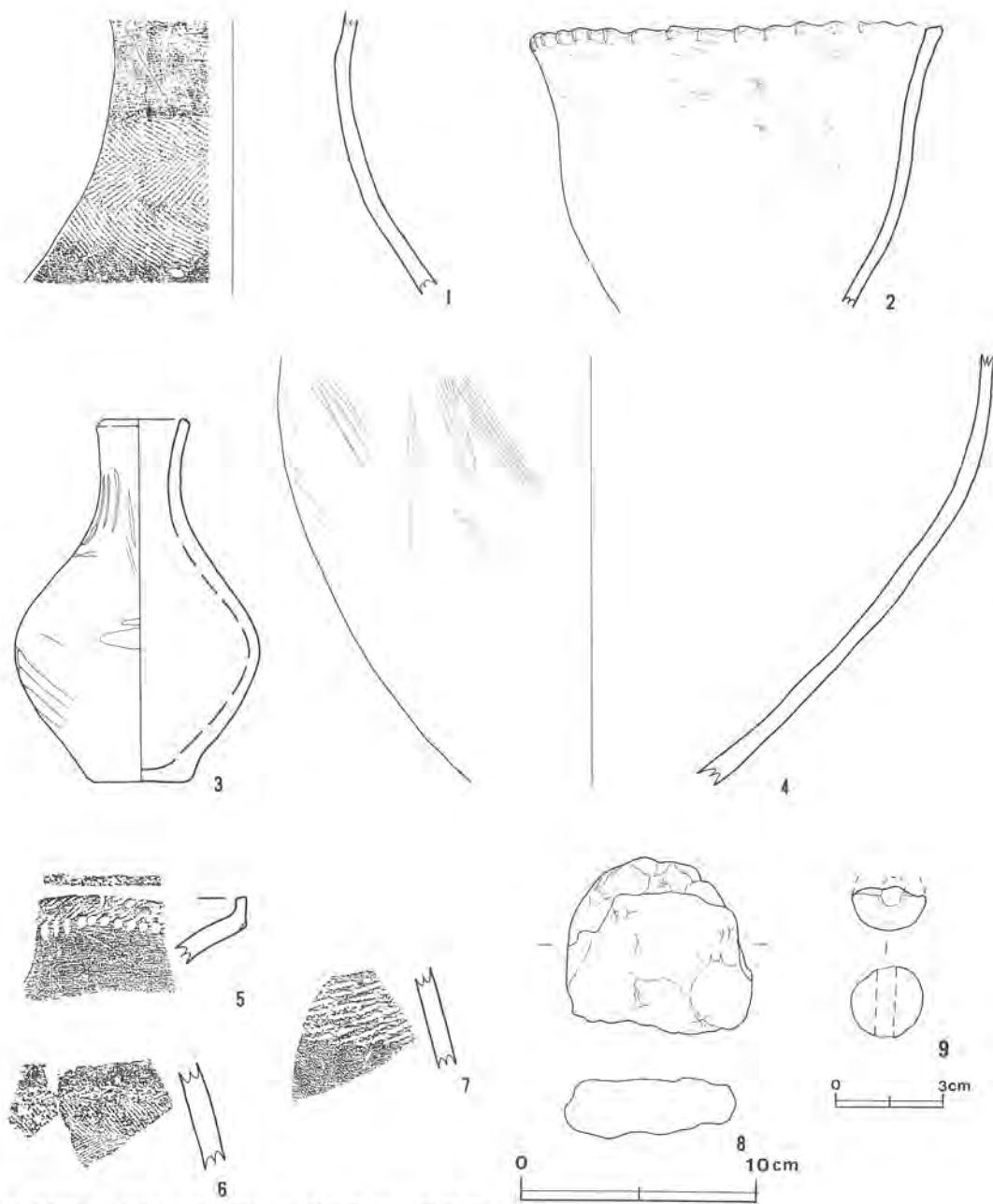
遺物は、北東側床面直上から第101図1の弥生式土器の壺の頸部、北西側床面直上から3の壺、2の甕やその他の弥生式土器片35点、8の翼状土器製品1点、9の球状土錘1点、攪乱を受けている覆土中から4の甕形土器を含む土師器片144点が出土している。



第100図 第116号住居跡実測図

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代中期の住居跡と考えられる。

第101図の5～7は第116号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5は口縁部片で単節の縄文を施し、下端に棒状工具による押圧を加えている。口唇部には縄文を施している。6は胴部片で単節縄文を羽状に施すほかに、S字状結節文が見られる。7は付加条の縄文を施した胴部片である。



第101図 第116号住居跡出土遺物実測・拓影図

第116号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第101図 1	壺 弥生式土器	B (11.8)	胴上半部から頸部にかけての破片である。器厚を一定に保ち頸部はつぼまり弓なりに外反している。頸部は無文である。胴上半部は羽状縄文を施している。	内面は斜位のナデ整形。頸部外面は縦位のナデ整形。	砂粒・石英 橙色 普通	30% P51
2	壺 弥生式土器	A 17.4 B (12.1)	胴部から口縁部の破片である。器厚をほぼ一定に保って胴下半部から内彎して胴上半部に至り、そこから外傾して口縁部に至る。口縁部上端は2本の指頭によって内・外からはさまれ、外側にややつまみ出されて小波状を呈する。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	30% P52
3	壺 弥生式土器	A 4.0 B 15.6 C 4.4	底部は平底である。底部から内彎して胴中央部に至り、最大径を測る。頸部から外側にやや開いて口縁部に至る。	頸部と口縁部内面はナデ整形。外面は篋ナデ整形。	砂粒 明褐色 普通	99% P50
4	壺形土器 土師器	B (18.3)	胴下半部片で、器厚を一定に保って内彎し、弓状に膨れている。	内面ナデ整形。外面篋状工具で整形後、ナデを施している。	砂粒 橙色 普通	40% P473

第119号住居跡 (第102図)

本跡は、2次調査区のE10a7区を中心に確認され、第120号住居跡の北西側11m程に位置している。また、本跡の北東壁は第167号土坑に、炉の北側の床面は第175号土坑に切られている。

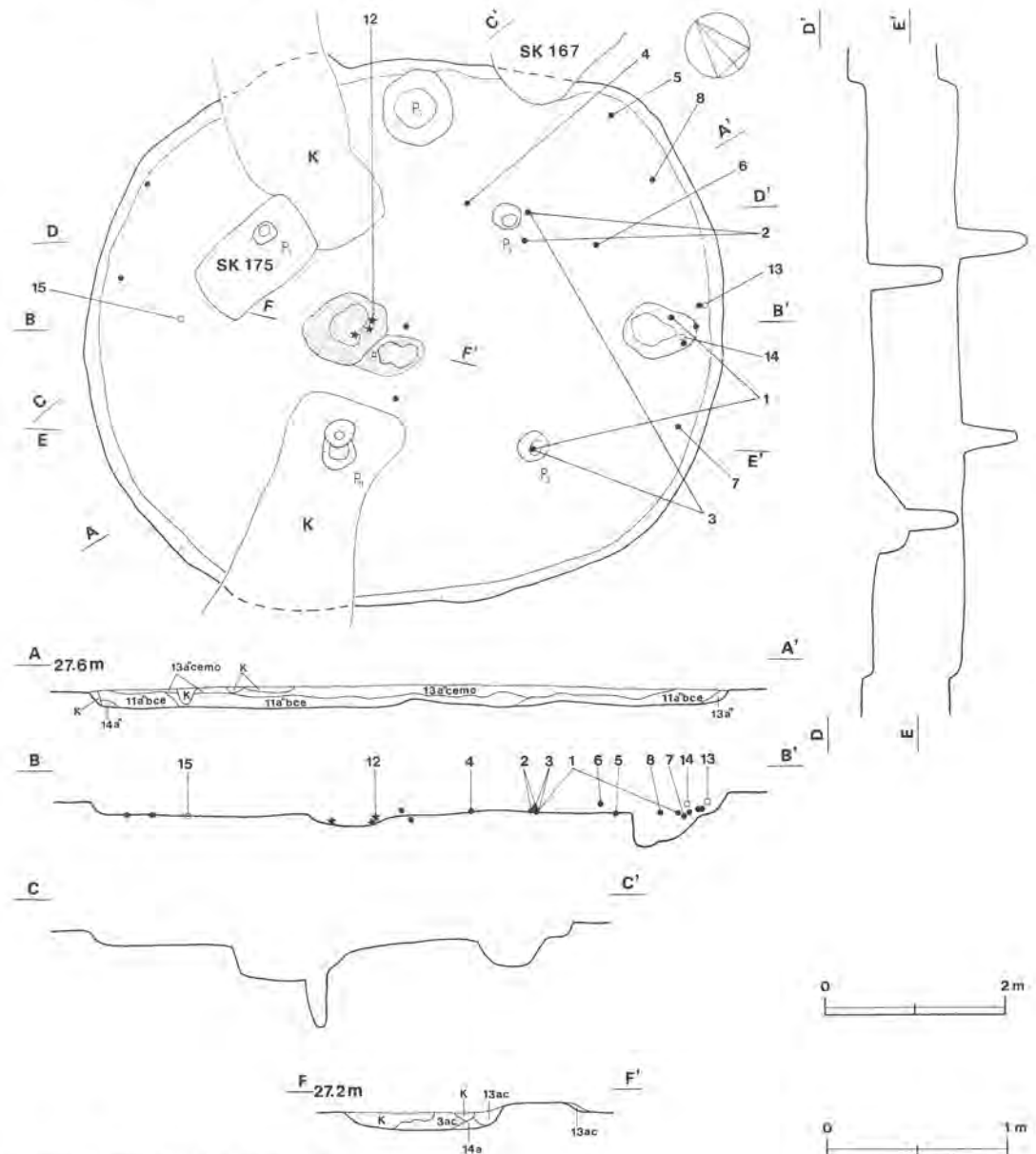
平面形は、長径7.12m・短径6.00mの楕円形を呈し、長径方向はN-49°-Wを指している。壁は、床面から内彎した後外傾して立ち上がっている。壁の残存高は13~22cmである。床面はロームで、全体的にゆるい起伏を示して良く締まっている。特に、炉の周囲がやや低くなっていて硬い。ピットは5か所で、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が支柱穴である。規模は長径32~56cm・短径22~35cm、深さはそれぞれ82・82・63・95cmである。P<sub>5</sub>の深さは34cmである。炉は、床面の中央から北西側に位置し、平面形は径96×80cmの楕円形で、床面を皿状に14cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、中量のローム粒子・焼土粒子を含んだ締まった赤褐色の焼土が堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。また、炉に接する南側床面の径63×40cmの楕円形の範囲は、炉内の焼土を一時的にかき出して置いたり、或いは、この上でも火を使用したらしく、ほぼ平らなロームが赤変硬化してガリガリしている。貯蔵穴は、南東側壁に接近して位置し、平面形は径84×60cmの楕円形を呈し、床面を鍋状に28cm程掘り凹めている。床面積は約33.5m<sup>2</sup>である。

覆土は、上層は一部分に攪乱があるものの、多量のローム粒子、少量の焼土粒子・炭化粒子等を含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子、少量のローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子等を

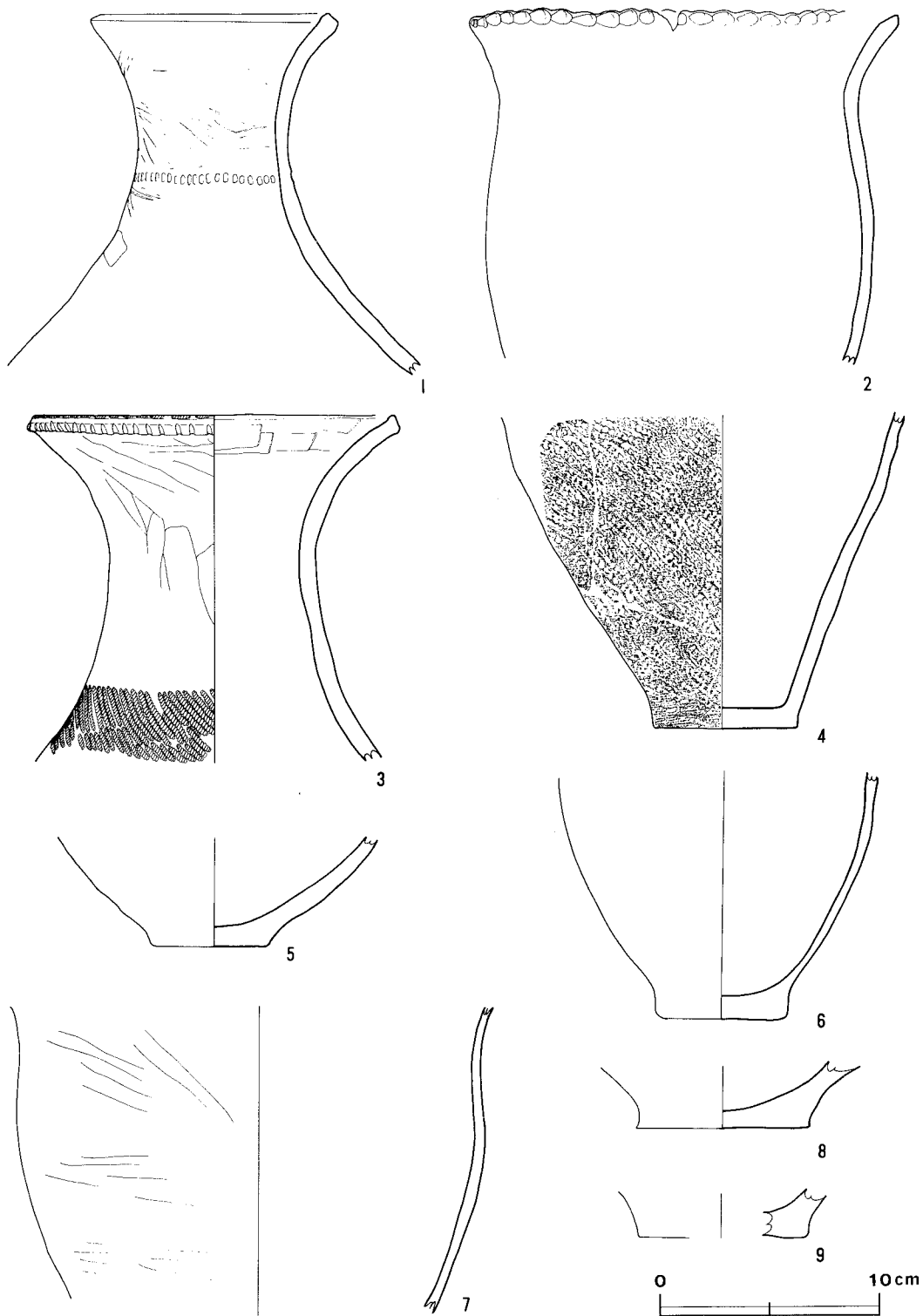
含む黒褐色土が、それぞれ締まって堆積している。

遺物は、主に東側床面から第103図1・3～6・8・9の弥生式土器の壺の頸部から口縁部、胴部や胴下半部、底部や底部片、2・7の甕とその胴部、覆土中から弥生式土器片85点、土師器片429点、第104図12の翼状形土製品1点、13・14の砥石、15の磨石が出土している。

遺物は、弥生時代中期末のものと思われる土器片から流れ込みと思われる古墳時代前期の土器片まで出土しているが、床面から出土した弥生式土器片が比較的多いことを重視して、本跡は弥生時代中期の住居跡と考えたい。

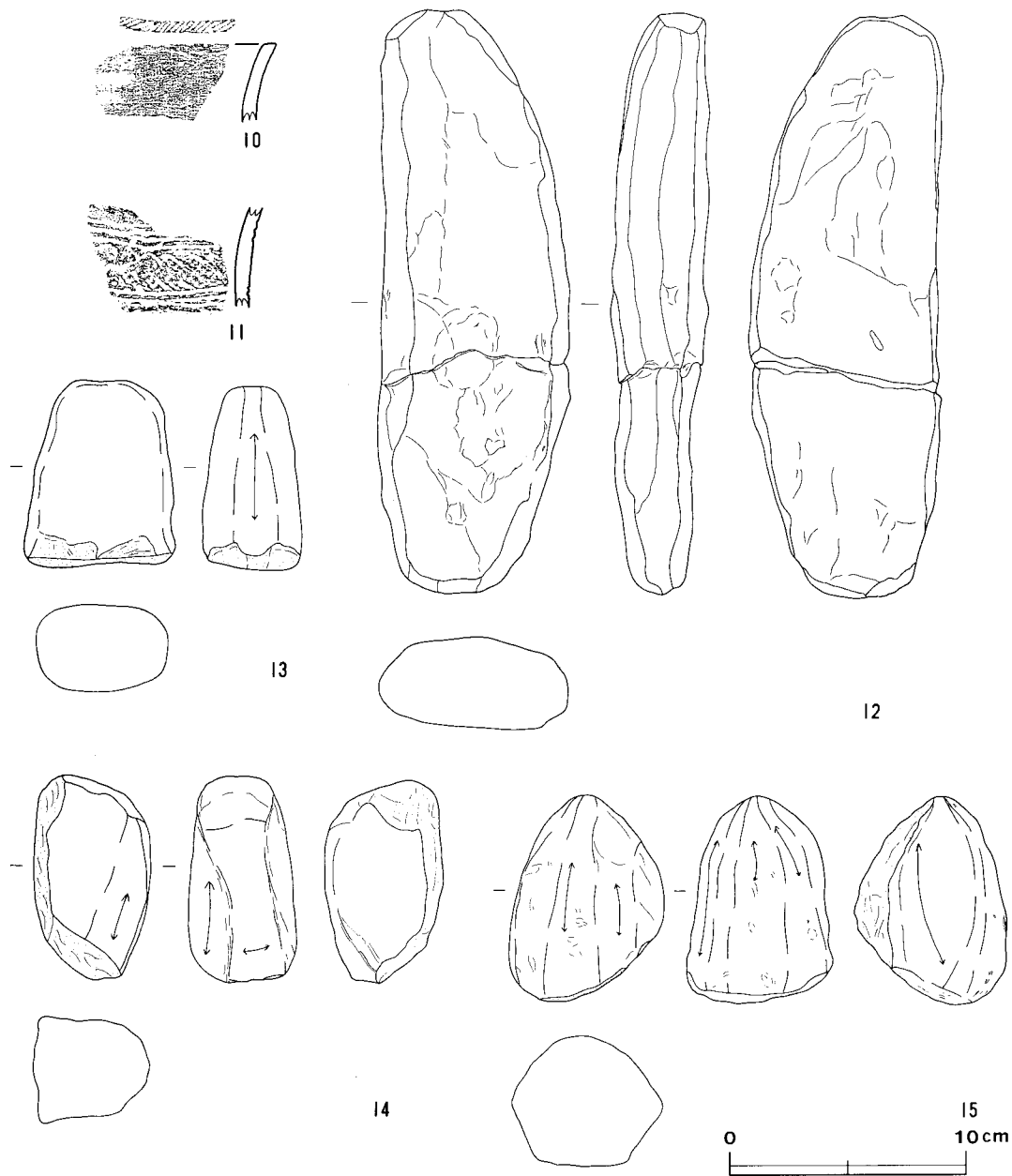


第102図 第119号住居跡実測図



第103图 第119号住居跡出土遺物実測・拓影図-1

第104図10・11は第119号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。10は口縁部片で無文であり、口唇部に縄文を施している。11は頸部片で、沈線文を横位に施している。



第104図 第119号住居跡出土遺物実測・拓影図-2



第119号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103 1	壺 弥生式土器	A 11.2	胴上半部から口縁部にかけての破片である。胴上半部から頸部にかけて内彎し、頸部から口縁部にかけて外反して開いている。また、頸部には棒状工具による連続刺突を1条廻らせている。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒 にふい褐色 普通	30% P53
		B (16.2)				
2	甕 弥生式土器	A 19.5	胴上半部から口縁部にかけての破片である。胴部は器厚をほぼ一定に保って内彎している。口縁部は外傾している。口縁部上端は2本の指頭によってつまみ出され小波状を呈している。	内・外面ともナデ整形。	砂粒 褐色 普通	70% P56
		B (16.1)				
3	壺 弥生式土器	A 17.0	胴上半部から口縁部にかけての破片であり、器厚をほぼ一定に保って外反している。外面の胴上半部へ付加条の縄文を施している。口唇部の内側へ縄文を、外側へ棒状工具による連続した刻み目を廻らしている。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・雲母 にふい褐色 普通	30% P54
		B (16.0)				
4	壺 弥生式土器	B (14.3)	底部から胴中央部にかけての破片で、底部は平底である。胴部は底部からほぼ直線的に外傾して立ち上がっている。器厚は胴中央部がやや薄くなる。外面は付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形。	砂粒・石英 明褐色 普通	45% P55
		C 6.4				
5	壺 弥生式土器	B (5.0)	底部は平底で小さい。胴下半部は器厚をほぼ一定に保って内彎して立ち上がる。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒 灰褐色 普通	7% P57
		C 5.4				
6	壺 弥生式土器	B (11.4)	底部は平底で小さいが厚く、安定感がある。胴部は器厚が薄いがほぼ一定に保って内彎して立ち上がっている。	内・外面とも丁寧なナデ整形。	砂粒 にふい橙色 普通	10% P59
		C 6.0				
7	甕 弥生式土器	B (14.0)	胴部片で、器厚は非常に薄く、ほぼ一定に保って胴下半部から胴上半部へ膨らみ、そこからやや内傾した後、再び開いている。	内面はナデ整形。外面は篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	60% P477
8	壺 弥生式土器	B (2.8)	底部は平底である。胴下半部は底部から外傾している。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・石英 にふい橙色 普通	5% P58
		C 6.8				
9	壺 弥生式土器	B (2.0)	底部は平底である。胴下半部は底部から外傾している。	内・外面とも磨滅が著しく、整形技法は不明。	砂粒 灰白色 不良	4% P60
		C 「7.6」				

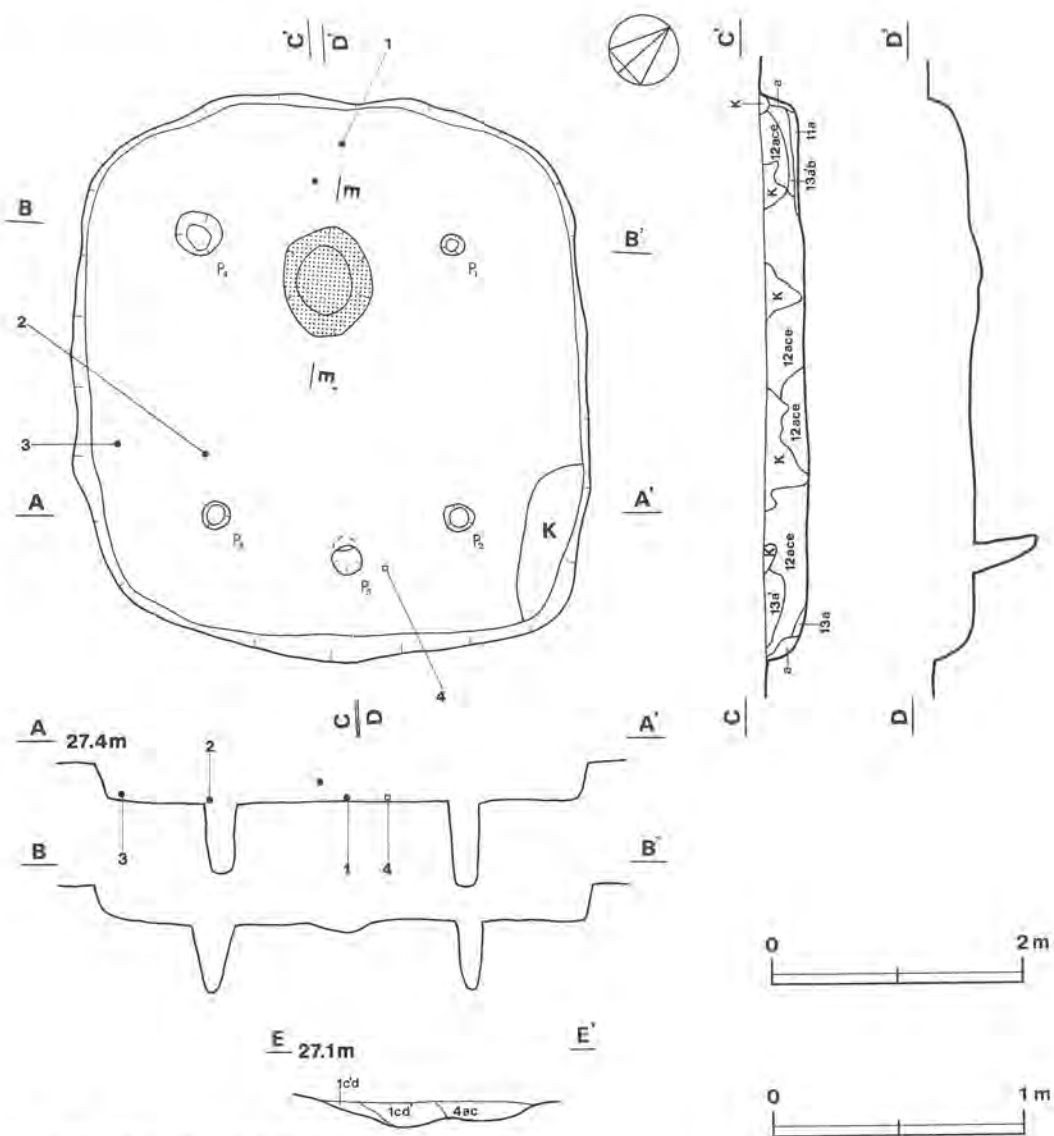
第120号住居跡 (第105図)

本跡は、2次調査区のE11c<sub>1</sub>区を中心に確認され、第119号住居跡の南東側11m程に位置している。また、本跡は第32号古墳と重複しているが、本跡の方が古い。

平面形は、長軸4.50m・短軸4.00mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-50°-Wを指している。

壁は、垂直に近い角度で床面から外傾して立ち上がっている。壁高は18~30cmである。床面はロームで、全体的に平坦であり、良く締まっていて硬い。ピットは5か所で、支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4本である。規模は長径20~37cm・短径17~34cm, P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の深さは58~59cmである。P<sub>5</sub>はその位置から判断して出入口に関するものと思われる。深さは50cmで、底部から上部にかけては壁方向に傾斜して掘ってある。炉は、床面の中央から北西側に位置し、床面を皿状に9cm程掘り凹めた地床炉である。炉内には、少量のローム粒子を含む極暗赤褐色の焼土が締まって堆積している。炉床は強い火熱を受けて、ロームが赤レンガ状に赤変硬化している。床面積は約15m<sup>2</sup>である。

覆土は、大部分が攪乱を受けているが、残っているものは、少量の炭化粒子、微量の焼土粒子

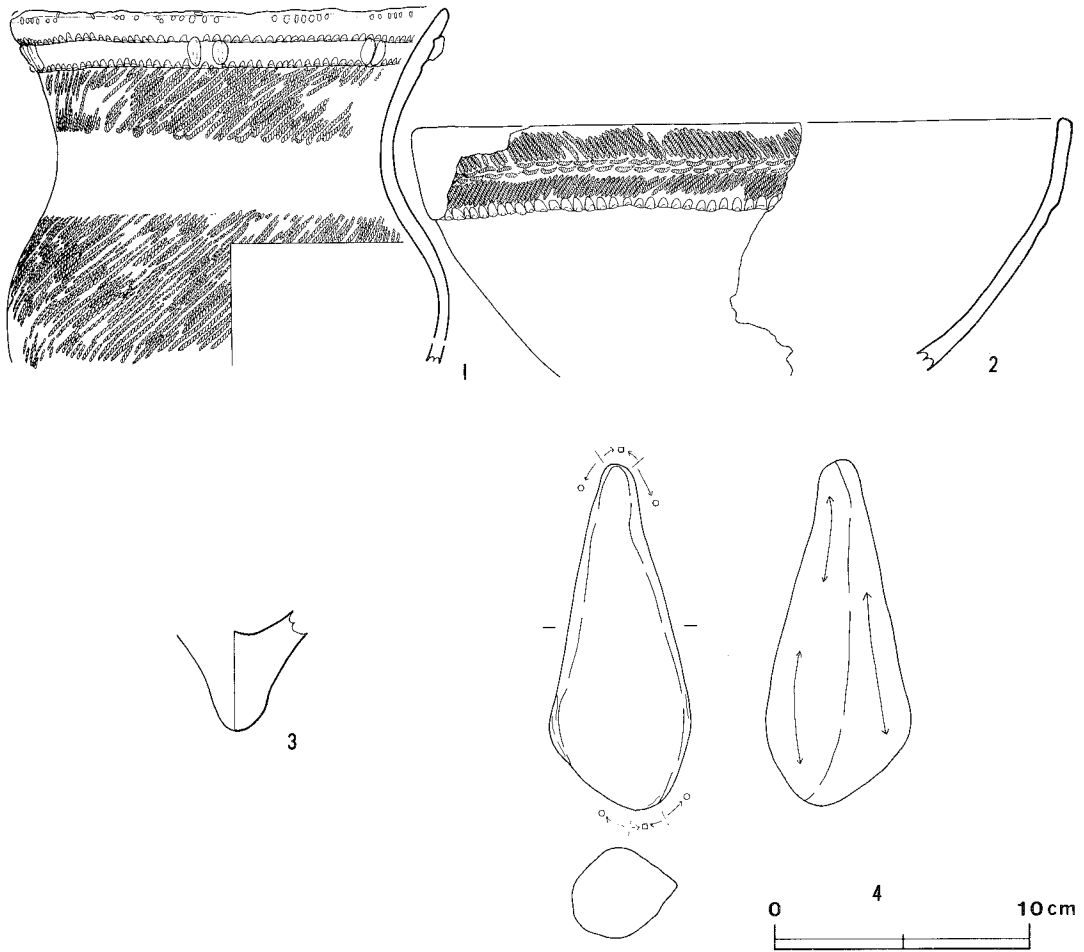


第105図 第120号住居跡実測図

を含む極暗褐色土が、やや締まって堆積している。

遺物は、炉の北西側床面から第106図1の弥生式土器の壺、P<sub>3</sub>の北西側床面から2の鉢、覆土中から弥生式土器片63点や4の敲石1点が出土している。なお、流れ込みと思われる縄文式土器の深鉢と思われる3の尖底部1点も出土している。

遺物とその出土状況から、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第106図 第120号住居跡出土遺物実測・拓影図

第120号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第106図 1	壺 弥生式土器	A 17.4 B (14.3)	胴上半部から口縁部にかけての破片である。胴上半部は内彎して頸部に至り、頸部はくびれて、そこから外反して口縁部に至る。口縁部は二段に作出した複合口縁である。外面の胴部と頸部の上位には付加条縄文を施している。口縁部の各下端へは棒状工具で刻み目を、口唇部外側へは刺突を連続して施している。さらに、口縁部の下段へは2個1単位の瘤を4単位(推定7単位)貼付している。	内面と頸部・口縁部外面はナデ整形。	砂粒・雲母 暗褐色 普通	30% P61
2	鉢 弥生式土器	A 26.3 B (10.0)	胴部から口縁部にかけての破片である。器厚をほぼ一定に保って内彎して立ち上がっている。口縁部は複合口縁である。口縁部外面へは多条のRL縄文を施した後2条のS字状縄文を施し、下端に棒状工具で刻み目を連続して廻らせている。	内・外面とも筥磨き整形後、朱を施している。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% P62
3	尖底土器 縄文式土器	B (3.9)	尖底部である。底部はやや丸味を帯び、胴下半部へ外傾して立ち上がっている。		砂粒 明赤褐色 普通	5% P63

第125号住居跡 (第107図)

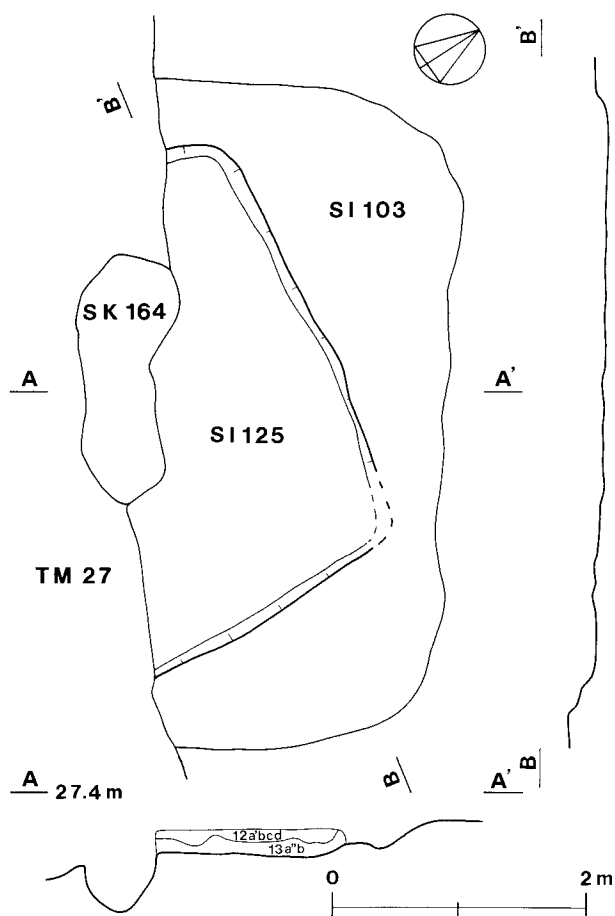
本跡は、2次調査区のD10f<sub>0</sub>区を中心に確認され、第116号住居跡の北側4m程に位置している。また、本跡と本跡より新しい第103号住居跡、第27号古墳、第164号土坑が重複している。なお、本跡は第103号住居跡の下に重複して検出されたものである。

平面形・規模・柱穴・炉・床面積等は、周溝と土坑に切られている部分が多いため不明である。壁は、床面から直線的に外傾して立ち上がっている。壁の残存高は2~16cmである。残っている床面は図化できないほど小さい凹凸が一面に見られるものの、全体的に平坦で硬く締まっている。

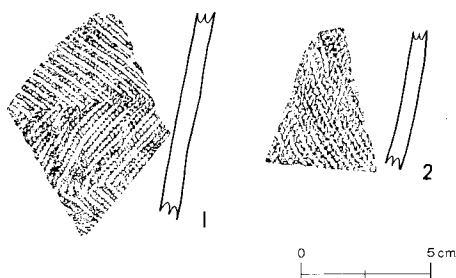
覆土は、上層に多量のローム粒子、中量のローム小ブロック、少量の焼土粒子・炭化粒子を含んだ暗褐色土が、粘性を帯びてきわめて硬く締まっている。下層には中量のローム粒子、少量のローム小ブロック・焼土粒子を含む極暗褐色土が、硬く締まって堆積している。

遺物は、床面から弥生式土器片3点が出土している。

遺物の出土状況だけからしか判断できないが、本跡は弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第107図 第125号住居跡実測図



第108図 第125号住居跡出土遺物  
拓影図

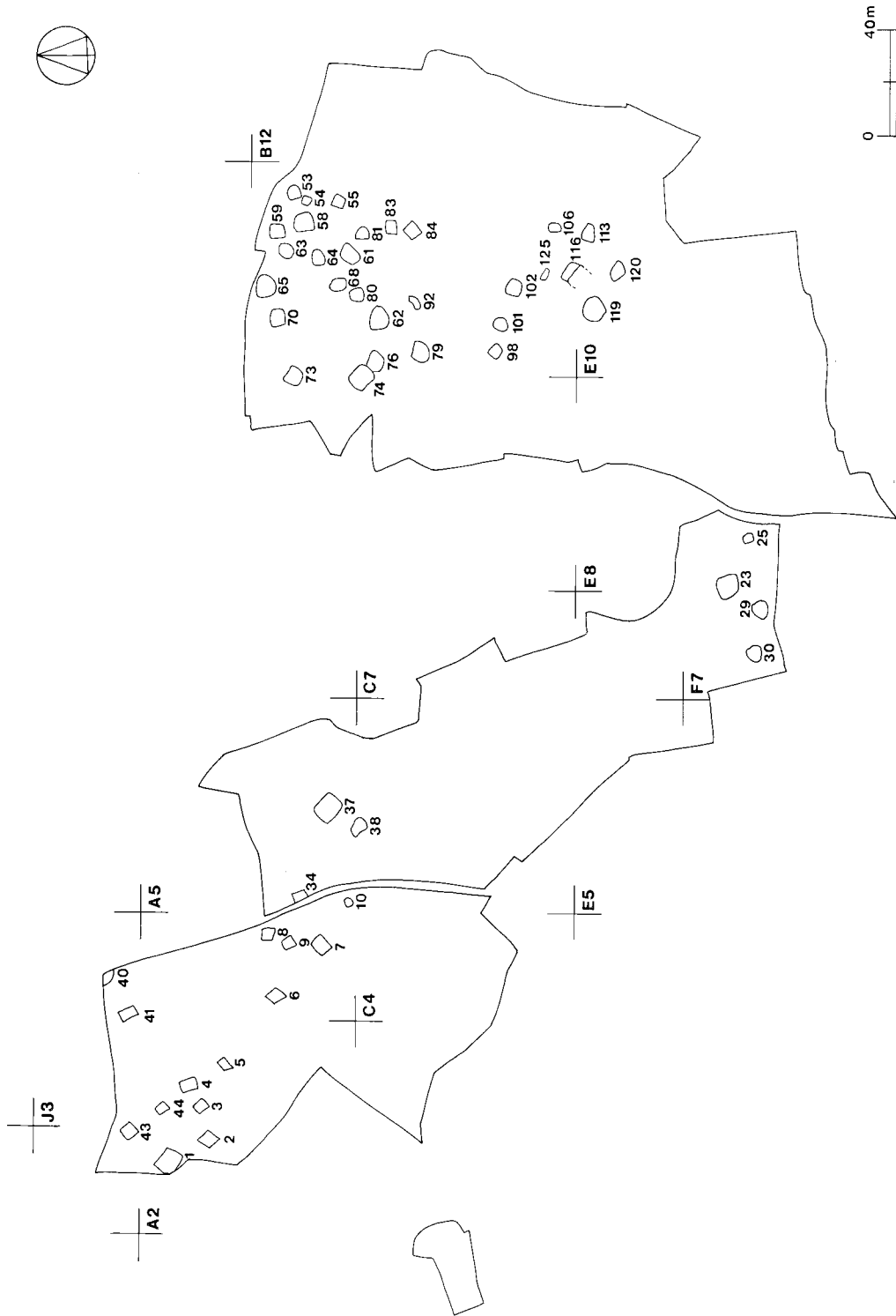
第108図1・2は第125号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、1は付加条の縄文を回転方向を換えて羽状に、2は付加条の縄文を施したものである。

表2 弥生時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模		床面	ピット数	炉	貯蔵穴	床面積(m <sup>2</sup> )	主な出土遺物	備考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)							
1	A2c <sub>7</sub>	N-52°-W	隅丸長方形	(9.30) × 7.78	10~19	平坦	4	1	-	「60.0」	弥生式土器片290点, 石製紡錘車1点, 砥石3点	
2	A2g <sub>9</sub>	N-29°-W	隅丸長方形	5.38 × 4.46	4~11	平坦	5	1	1	「20.5」	弥生式土器片86点	
3	A3f <sub>2</sub>	N-30°-W	隅丸方形	3.82 × (3.78)	10~21	皿状	5	1	1	「12.5」	弥生式土器片27点, 土師器片3点, 陶器片1点	
4	A3e <sub>4</sub>	N-14°-W	隅丸長方形	5.62 × 4.42	12~32	平坦	5	1	1	「23.0」	弥生式土器片33点, 土師器片3点, 陶器片1点	
5	A3i <sub>6</sub>	N-46°-W	隅丸方形	4.28 × 4.10	5~19	平坦	10	1	1	14.0	弥生式土器片100点, 土師器片4点, 土製紡錘車1点	
6	B4b <sub>2</sub>	N-44°-W	隅丸長方形	5.86 × 4.80	20~31	凹凸	5	1	1	23.0	弥生式土器片27点, 須恵器片1点	
7	B4f <sub>7</sub>	N-55°-W	隅丸長方形	6.02 × 5.82	14~25	平坦	5	1	1	30.0	弥生式土器片135点, 管状土錘1点, 砥石1点	
8	B4b <sub>8</sub>	N-18°-E	隅丸長方形	4.14 × 3.68	23~30	平坦(傾斜)	-	1	-	12.5	弥生式土器片19点	
9	B4c <sub>9</sub>	N-32°-W	隅丸方形	3.64 × 3.52	38~53	平坦	3	1	-	9.0	弥生式土器片32点, 土師器片2点, 土製紡錘車1点	

住居跡 番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規 模		床面	ピット 数	炉	貯蔵穴	床面積 (㎡)	主な出土遺物	備 考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)							
10	B5i <sub>2</sub>	N-54°-E	円形	2.98 × 2.90	4~11	平坦	—	—	—	5.5	弥生式土器片13点	
23	F8e <sub>1</sub>	N-54°-W	長方形	7.38 × 5.78	3~17	平坦	4	1	—	39.0	弥生式土器片27点, 土師器片4点	焼失家屋
25	F8g <sub>6</sub>	N-62°-W	隅丸長方形	(5.00) × 3.64	11~28	平坦	9	1	—	「16.5」	弥生式土器片1点	焼失家屋
29	F7h <sub>6</sub>	N-36°-W	隅丸方形	4.92 × 4.58	2~16	平坦	6	1	—	20.5	弥生式土器片5点, 石1点	焼失家屋
30	F7g <sub>5</sub>	N-41°-W	隅丸長方形	4.18 × 3.58	20~38	平坦	5	1	—	「11.0」	弥生式土器片14点	
34	B5e <sub>2</sub>	N-68°-E	隅丸方形	5.84 × 5.22	8~26	皿状	4	1	1	27.5	弥生式土器片37点, 土師器片21点	焼失家屋
37	B5g <sub>6</sub>	N-49°-W	隅丸長方形	9.62 × 8.00	25~50	皿状	5	1	1	71.0	弥生式土器片55点, 砥石2点, 土師器片6点	壁溝有
38	B5j <sub>3</sub>	N-59°-W	隅丸長方形	(7.02) × 4.62	13~18	皿状	4	1	—	「29.0」	弥生式土器片16点	
40	Z4h <sub>1</sub>	N-14°-W	隅丸方形	5.78 × 5.48	46~58	平坦	5	1	1	26.0	弥生式土器片42点, 土師器片211点	
41	Z3i <sub>6</sub>	N-24°-W	隅丸長方形	5.14 × 3.92	13~54	平坦 (傾斜)	4	1	—	15.5	弥生式土器片2点, 土師器片64点, 須惠器片1点	焼失家屋
43	Z2i <sub>6</sub>	N-38°-W	隅丸方形	4.68 × 4.32	32~53	平坦	6	1	—	16.0	弥生式土器2点, 砥石1点, 凹石 1点, 石皿1点	
44	A3b <sub>2</sub>	N-51°-W	隅丸方形	4.02 × 3.64	14~33	平坦	5	1	—	12.0	弥生式土器片50点	
53	B11e <sub>8</sub>	N-54°-W	隅丸方形	4.00 × 3.56	22~32	起伏 (傾斜)	—	—	—	10.5	弥生式土器片75点	焼失家屋
54	B11f <sub>7</sub>	N-29°-E	隅丸長方形	3.40 × 2.90	32~55	(傾斜)	—	1	—	7.5	弥生式土器片24点, 土師器片12点	
55	B11i <sub>7</sub>	N-25°-E	不整円形	3.86 × 3.58	9~28	平坦	—	—	—	11.0	弥生式土器片20点, 土師器片20点	
58	B11f <sub>5</sub>	N-89°-E	隅丸方形	5.48 × 5.02	5~14	皿状	4	1	—	22.0	弥生式土器片42点, 土師器片66点	
59	B11d <sub>1</sub>	N-71°-W	隅丸長方形	4.96 × (4.18)	5~9	傾斜	4	1	—	「15.0」	弥生式土器片45点, 土師器片8点	
61	B11j <sub>2</sub>	N-22°-E	隅丸長方形	5.43 × 4.62	5~12	ゆるい 起伏	4	2	—	「21.5」	弥生式土器片17点, 土師器片35点	
62	C10b <sub>6</sub>	N-6°-W	隅丸方形	5.14 × 4.72	4~18	平坦	4	1	—	23.0	弥生式土器片43点, 土師器片28点, 陶器片3点	
63	B11f <sub>2</sub>	不明	不明	不明	不明	傾斜	5	1	—	—		壁不明
64	B11g <sub>1</sub>	N-84°-E	隅丸方形	4.20 × 3.96	6~17	平坦	5	1	—	14.0	弥生式土器片33点	
65	B10b <sub>9</sub>	N-33°-E	不整形	6.44 × 6.30	2~13	皿状	4	1	—	34.0	弥生式土器片4点, 土師器片30点	
68	B10i <sub>6</sub>	N-1°-E	不整隅丸 長方形	3.94 × 3.42	7~17	平坦	5	1	—	11.5	弥生式土器片41点, 土師器片3点, 陶器片1点	
70	B10d <sub>7</sub>	N-86°-W	隅丸長方形	5.56 × 4.96	9~22	平坦	4	1	—	23.5	弥生式土器片32点, 土師器片76点, 石皿1点, 砥石1点	焼失家屋
73	B10e <sub>1</sub>	N-62°-W	隅丸長方形	5.62 × 5.08	3~22	傾斜	4	1	—	24.0	弥生式土器片505点	
74	C10a <sub>1</sub>	N-36°-E	隅丸方形	(6.48 × 6.46)	不明	傾斜	4	1	1	(38.0)	弥生式土器片10点, 土師器片74点	焼失家屋 壁溝有
76	C10b <sub>3</sub>	N-72°-W	隅丸長方形	6.48 × 5.18	5~15	平坦	5	1	1	29.5	弥生式土器片158点, 土師器片56 点, 土製品1点, 内耳土器片3点	焼失家屋
79	C10f <sub>3</sub>	不明	不明	不明	不明	ゆるい 起伏	5	1	—	—	弥生式土器片11点, 土師器片60点	壁なし (焼失家屋)
80	B10j <sub>9</sub>	不明	不明	不明	不明	平坦	4	1	—	—	弥生式土器片1点	壁不明
81	C11a <sub>4</sub>	N-74°-W	隅丸方形	3.70 × 3.64	12~15	平坦	1	1	—	「12.0」	弥生式土器片5点, 土師器片20点	

住居跡 番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規 模		床面	ピット 数	炉	貯蔵穴	床面積 (m <sup>2</sup> )	主な出土遺物	備 考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)							
83	C11d <sub>4</sub>	N-86°-W	隅丸方形	3.84 × (3.80)	8~15	傾斜	4	1	-	「12.0」	弥生式土器片8点, 浮子1点	
84	C11e <sub>4</sub>	N-39°-W	隅丸方形	4.58 × 4.18	15~35	ゆるい 起伏	4	1	-	16.5	弥生式土器片36点, 土師器片50点	焼失家屋
92	C10e <sub>8</sub>	不明	不明	不明	(10)	平坦	-	-	-	-	弥生式土器片143点, 土師器片16点, 石製紡錘車1点	
98	D10b <sub>4</sub>	N-42°-W	円形	3.64 × 3.40	3~9	平坦	4	1	-	「9.0」	弥生式土器片15点, 土師器片31点, 敲石1点	
101	D10c <sub>6</sub>	N-44°-W	不整円形	4.56 × 4.48	9~22	凹凸	3	1	-	「16.5」	弥生式土器片97点, 土師器片72点, 陶器片3点, 支脚2点	
102	D10d <sub>6</sub>	N-71°-W	隅丸長方形	5.34 × 4.36	6~23	平坦	4	1	1	「21.0」	弥生式土器片169点, 土師器片79点, 球状土錘1点	壁溝一部有 西壁なし
106	D11g <sub>4</sub>	N-63°-W	隅丸長方形	4.88 × 4.06	3~16	平坦	8	1	1	「17.0」	弥生式土器片27点, 土師器片106点, 球状土錘1点	焼失家屋
113	D11j <sub>4</sub>	N-63°-W	隅丸長方形	6.38 × 5.24	29~37	ゆるい 起伏	5	1	1	27.5	弥生式土器片96点, 土師器片45点, 球状土錘1点, 土製紡錘車1点	焼失家屋
116	D11i <sub>1</sub>	(N-57°-W)	(隅丸長方形)	6.84 × (5.32)	13~30	平坦	5	1	-	「33.0」	弥生式土器片38点, 土師器片144点, 球状土錘1点, 炭状形土製品1点	壁溝有
119	E10a <sub>7</sub>	N-49°-W	楕円形	7.12 × 6.00	13~22	ゆるい 起伏	5	1	1	33.5	弥生式土器片94点, 土師器片429点, 算状形土製品1点, 砥石1点, 凹石1点, 石皿1点	
120	E11c <sub>4</sub>	N-50°-W	隅丸長方形	4.50 × 4.00	18~30	平坦	5	1	-	15.0	弥生式土器片65点, 敲石1点, 縄文式土器片1点	
125	D10f <sub>6</sub>	不明	不明	不明	2~16	凹凸	-	-	-	-	弥生式土器片3点	



第109图 弥生時代住居跡位置図

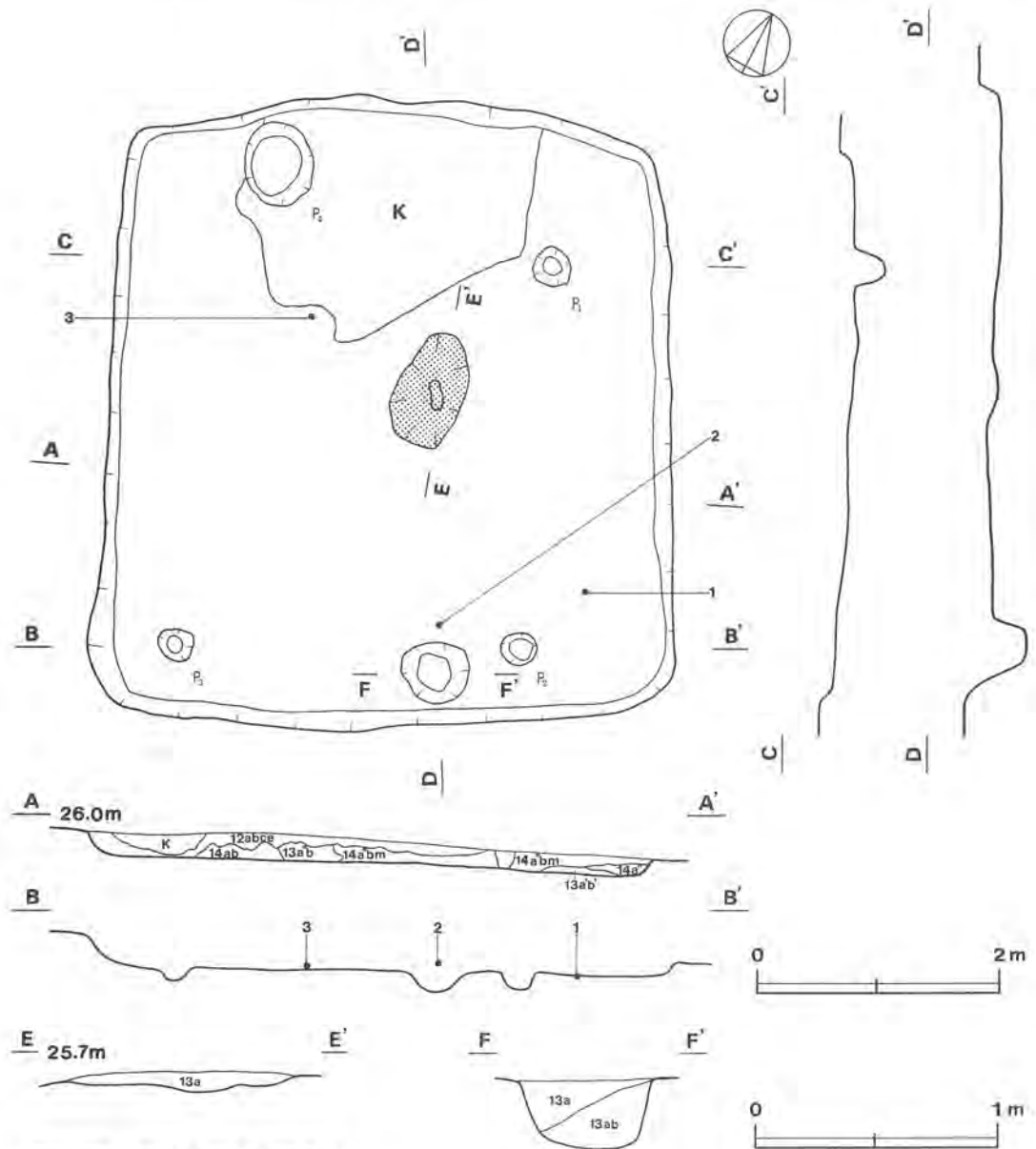


## 2 古墳時代

### 第12号住居跡 (第110図)

本跡は、1次調査区のB6e<sub>4</sub>区を中心に確認された住居跡で、第13号住居跡の北6m、第32号住居跡の東15mに位置している。

平面形は、長軸5.24m・短軸4.66mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-28°-Wを指している。床面積は21.5m<sup>2</sup>である。壁はロームで、50~60度の角度で緩やかに立ち上がっている。壁高は



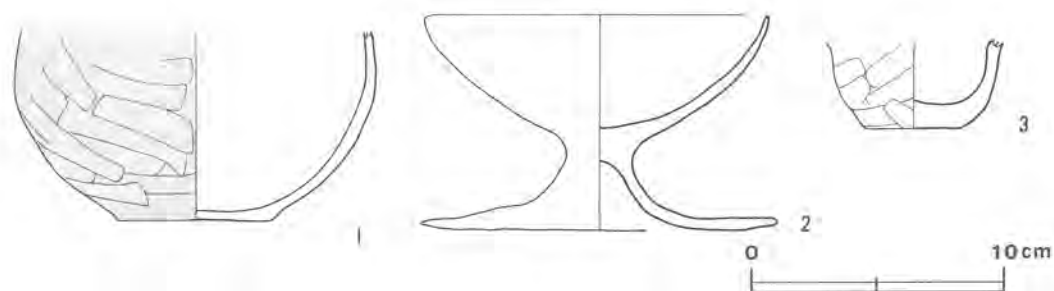
第110図 第12号住居跡実測図

11~20cmであり、北壁中央部は攪乱されている。床面は皿状を呈する軟弱なロームで、北壁中央部付近は大きく攪乱されている。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径30~58cm・深さ10~37cmである。P<sub>4</sub>の平面形がほかのピットに比べて大きいのは、床面の一部が攪乱されているためである。規模的にやや不揃いであるが、方形に配置されていることから、4本とも本跡の支柱穴であると判断した。炉は、床面を5cmほど掘り下げた地床炉で、ほぼ中央に確認された。平面形は、長径95cm・短径56cmの楕円形で、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南壁際に位置する。平面形は、直径55cmの円形で、深さは28cmほどである。貯蔵穴内には、暗褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、上層に多量のローム粒子やローム小ブロックを含む極暗褐色土、下層に中量のローム粒子やローム小ブロックを含む褐色土、壁際には少量のローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。一部攪乱されているがいずれも締まりのある土層であり、自然堆積と思われる。

遺物は、土師器及びその破片10点が出土している。第111図1の壺形土器胴部は東コーナー付近、2の高坏形土器は貯蔵穴の北側の床面から正位の状態で出土している。3のミニチュア土器は炉の西側の床面から出土している。出土状況等から考え、1~3は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第111図 第12号住居跡出土遺物実測図

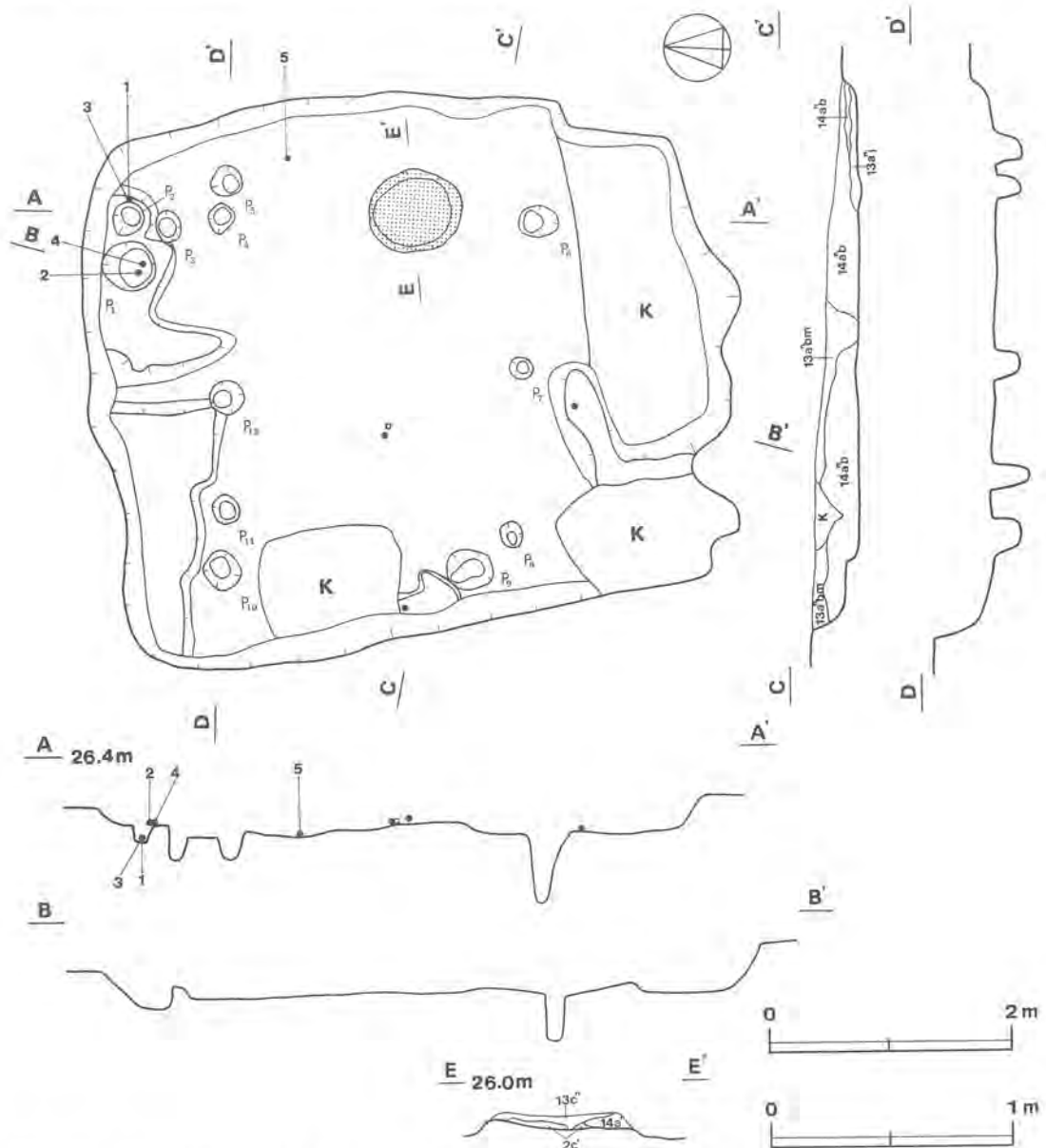
### 第12号出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第111図 1	壺形土器 土師器	B (7.6) C 6.0	平底。胴部は内彎して立ち上がるが、中央部以上を欠損する。	外面は篋ナデ整形後、赤彩。内面は剝離が著しく、整形技法は不明。	砂粒 橙色 普通	40% P159
2	高坏形土器 土師器	A 13.7 B 8.6 D「I4.2」	脚部はラッパ状に開き、裾部で水平に大きく広がる。坏部は内彎して開く。	内・外面ともナデ整形。	砂粒 橙色 普通	90% P160
3	ミニチュア 土器 土師器	B (3.4) C 3.8	平底。体部は内彎して立ち上がるが、口縁部は欠損する。	外面は篋ナデ整形。内面は剝離が著しく、整形技法は不明。	砂粒・スコリア 橙色 普通	60% P161

第13号住居跡 (第112図)

本跡は、1次調査区のB6h<sub>4</sub>区を中心に確認された住居跡で、第12号住居跡の南6m、第14号住居跡の北西4.5mに位置している。

平面形は、長軸4.62m・推定短軸4.22mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-78°-Eを指している。現存床面積は16.4m<sup>2</sup>である。壁はロームで、45~65度の角度で緩やかに立ち上がっている。壁高は8~36cmであるが、南壁は攪乱により湮滅している。床面は皿状を呈するロームで、炉の周囲、北壁や西壁付近に縮まりのある部分がみられるほかは、篠根により攪乱され軟弱である。



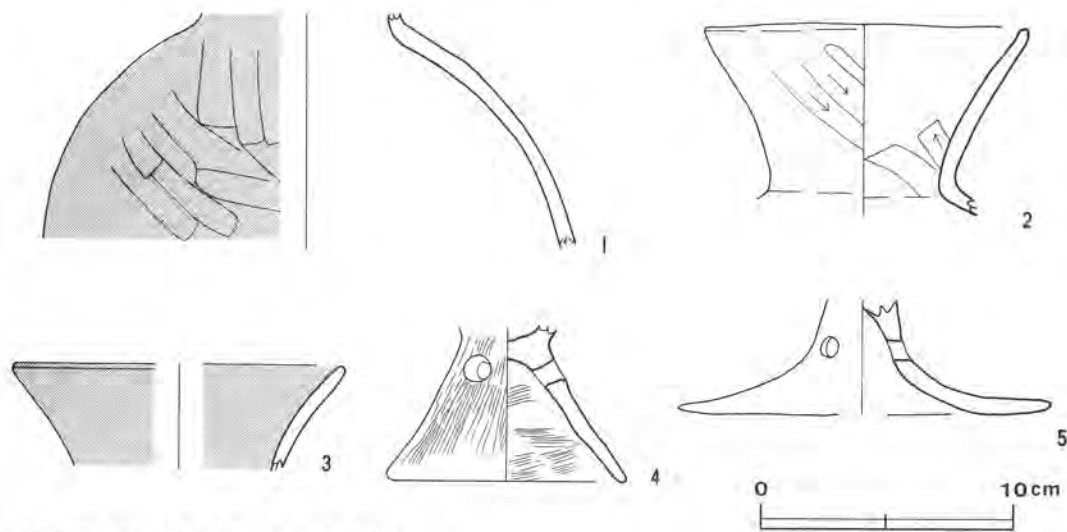
第112図 第13号住居跡実測図

ピットは、12か所検出された。本跡に伴うと思われる支柱穴はP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>11</sub>で、上端長径22～30cm・深さ16～58cmである。ほかのピットの規模は、上端長径16～25cm・深さ15～30cmである。炉は、床面を5cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.4mほど東側に確認された。平面形は、長径82cm・短径74cmの円形である。炉内には、多量の焼土粒子を含む暗褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、一部攪乱されているが、多量のローム粒子、少量のローム小ブロックを含む締まりの軟弱な暗褐色土や褐色土が堆積している。

遺物は、土師器及びその破片33点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片5点が出土している。北東コーナー付近の床面からは、第113図1の壺形土器胴部が正位、2の壺形土器口縁部が倒立、4の高坏形土器脚部が横位の状態で出土している。5の高坏形土器脚部は、東壁付近の床面から正位の状態で出土している。3の壺形土器口縁部は1と同一地点に出土しており、接合・復元はできなかったが同一個体と思われる。出土状況等から考え、1～5は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第113図 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第113図 1	壺形土器 土師器	B (9.3)	胴部片。中央部から上半部にかけて内彎している。	外面は鬘ナデ整形後、赤彩。内面は剥離が著しく、整形技法は不明。	砂粒 橙色 普通	30% P162

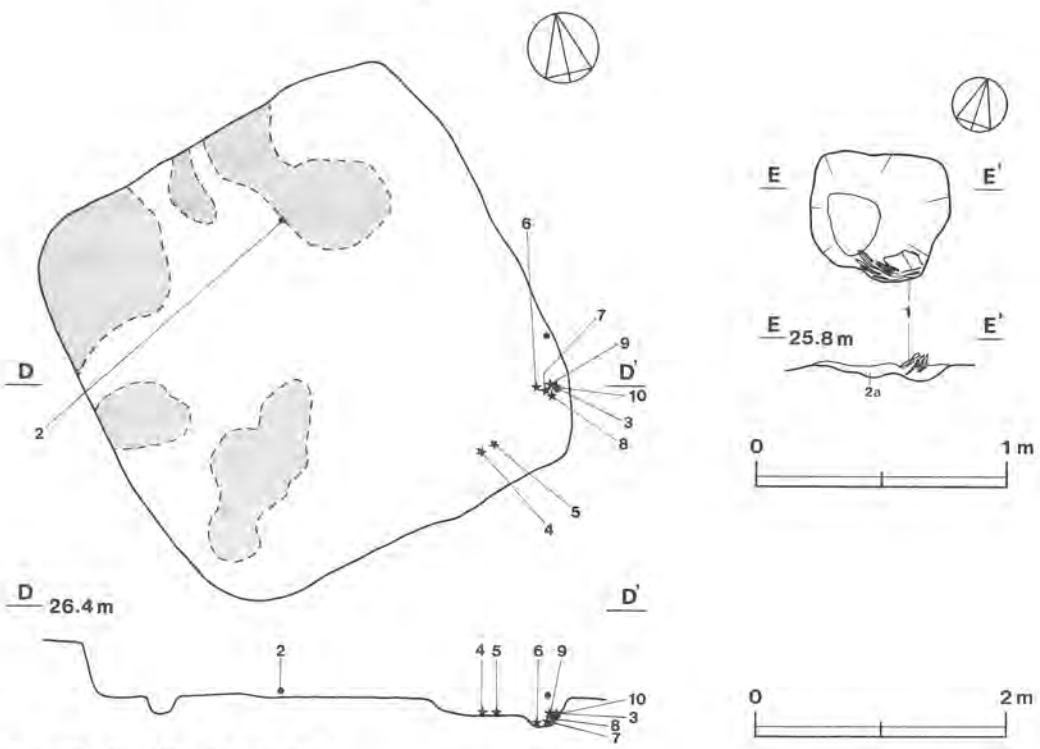
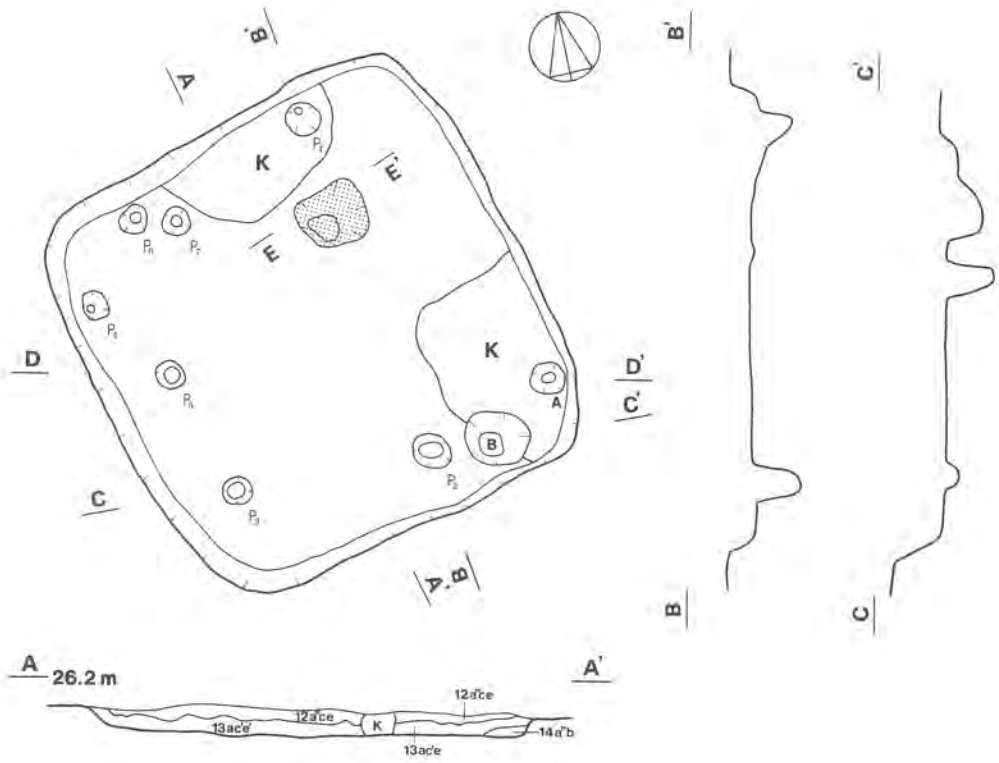
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第113図 2	壺形土器 土師器	A 12.9 B (7.6)	胴部は欠損。口縁部は頸部から外反して開く。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	20% P163
3	壺形土器 土師器	A「13.3」 B (4.2)	口縁部片。口縁部は外反して開く。	内・外面ともナデ整形後、赤彩。	砂粒 赤褐色 普通	10% P166
4	高環形土器 土師器	B (6.1) D 9.5	坏部は欠損。脚部は上位に3孔が穿たれ、「ハ」の字状に開く。	内・外面ともハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	50% P165
5	高環形土器 土師器	B (4.6) D「14.8」	坏部は欠損。脚部は中位に3孔が穿たれ、ラッパ状に開き裾部で水平に大きく広がる。	内・外面ともナデ整形。	砂粒 橙色 普通	30% P164

#### 第14号住居跡（第114図）

本跡は、1次調査区のB6j<sub>s</sub>区を中心に確認された住居跡で、第13号住居跡の南東4.5mに位置している。

平面形は、長軸3.56m・短軸3.52mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-17°-Wを指している。床面積は10.6㎡である。壁はロームで、70～75度の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は11～42cmである。床面は緩い起伏を呈する軟弱なロームで、北壁中央部や南東コーナー付近は攪乱されている。ピットは、7か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>は、上端直径22～23cm・深さ12～25cmで比較的小規模であるが、検出時の覆土の状況や配置等から考えて、いずれも本跡に伴う柱穴と思われる。柱穴の配置から考えると、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>が主柱穴で、P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>は補助的な役割を果たすものと思われる。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.1mほど北側に確認された。平面形は、長軸57cm・短軸50cmの方形状であり、炉の南際には長径60cmほどの範囲で、甕形土器の胴部片が重なった状態で縦位に埋め込まれている。土層に攪乱はなく、出土状態等からも潰れたものとは考えられず、意図的に付設されたものと思われるが使用目的については不明である。炉内には、少～多量の焼土粒子を含む暗褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南東コーナーに2か所（A・B）検出された。Aの平面形は、直径27cmの円形で、深さ11cmと小規模である。底面や底面から6cmほど上位の覆土に、球状土錘3点と管状土錘2点が出土した。Bの平面形は、長径51cm・短径43cmの楕円形で、深さは30cmほどである。底面より7cmほど上位の覆土から、球状土錘1点と管状土錘1点が出土している。

覆土は、上層に中量のローム粒子や少量の焼土粒子等を含む極暗褐色土、下層に中量の焼土粒子や炭化粒子を含む暗褐色土が堆積している。一部攪乱されているが、いずれも締まりのある土層であり、自然堆積と思われる。また、北壁や西壁の壁際や床面に、多量の炭化物や中量の焼土粒子を含む黒褐色土、中量の炭化粒子や焼土粒子を含む暗褐色土が堆積していることから、本跡

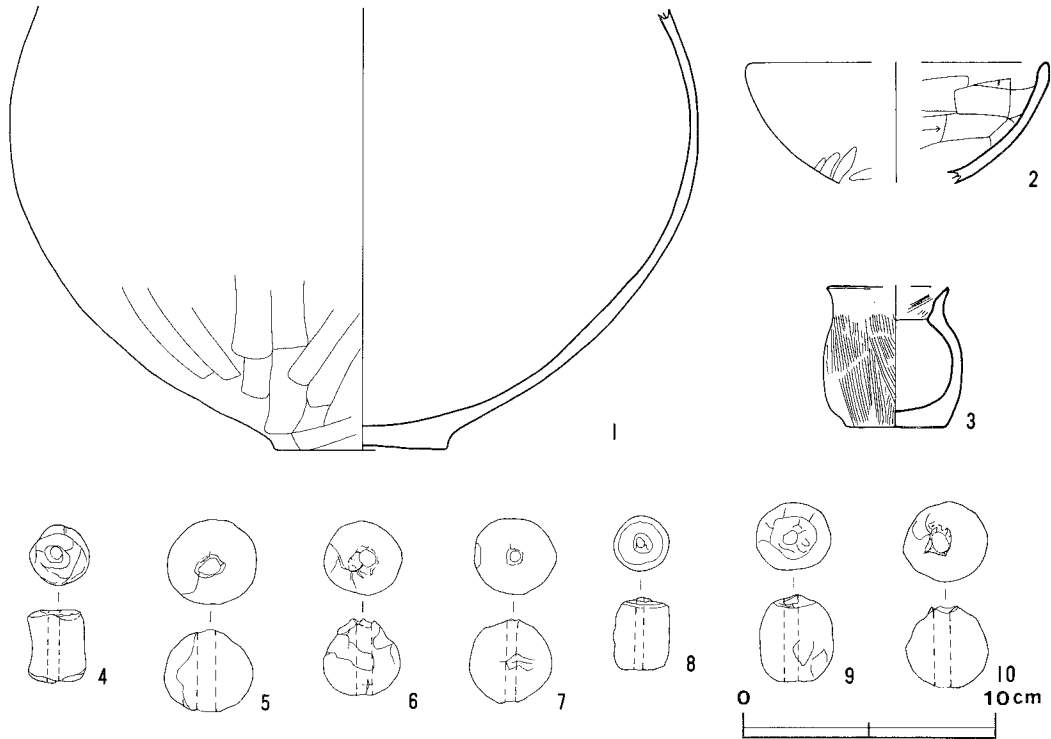


第114图 第14号住居跡実測図

は焼失家屋と判断した。焼失の時期については、覆土下層に焼土粒子や炭化粒子が認められることから、居住期間中、もしくは廃絶後間もないものと思われる。

遺物は、土師器及びその破片67点、球状土錘4点、管状土錘3点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片4点が出土している。第115図1の甕形土器胴部は、炉の南際に縦位の状態で出土した破片を接合したものであり、2の埴形土器は、炉の西側の床面から出土したものである。3のミニチュア土器は、南東壁際の床面から横位の状態で出土したものである。4～10の球状土錘や管状土錘は、貯蔵穴内の底面や底面上の覆土から出土したものである。出土状況等から考え、1～10は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第115図 第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第115図 1	甕形土器 土師器	B(17.7) C 6.8	突出した平底。胴部は内彎して立ち上がり、球形状を呈するが胴部上半以上は欠損する。	外面はハケ目整形後、篋ナデ。内面はナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% P167 胴部外面に煤付着

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第115図 2	壺形土器 土師器	A「12.0」 B (4.8)	底部は欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立気味に開く。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	20% P168
3	ミニチュア 土器 土師器	A「4.9」 B 5.7 C 4.0	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	外面は口縁部が横ナデ、胴部はハゲ目整形。内面は口縁部がハゲ目、胴部は篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	90% P169

### 第15号住居跡（第116図）

本跡は、1次調査区のC5d<sub>0</sub>区を中心に確認された住居跡で、第16号住居跡の北西3m、第39号住居跡の南東5.5mに位置している。

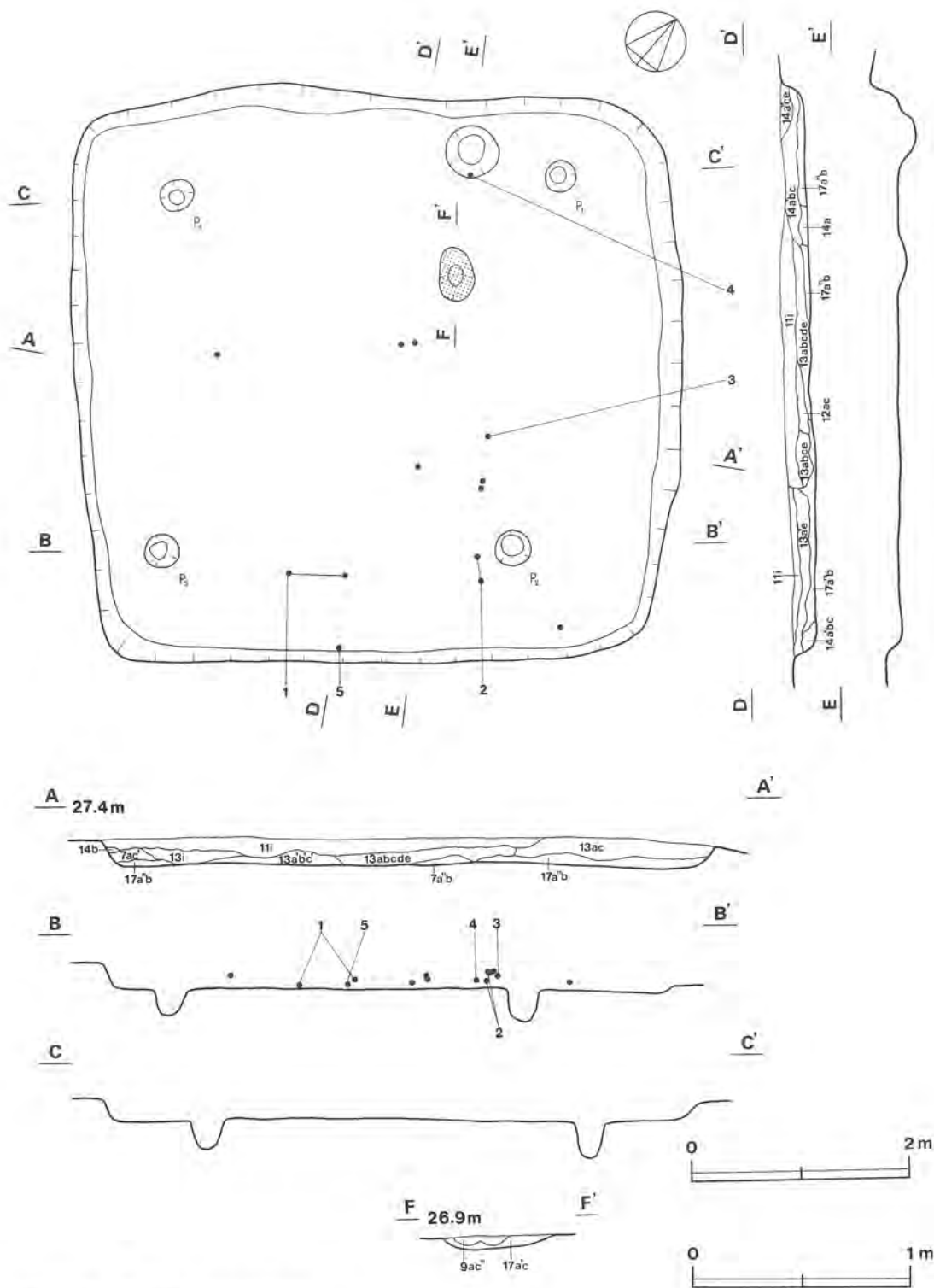
平面形は、長軸5.70m・短軸5.36mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-38°-Wを指している。床面積は25.8㎡である。壁はロームで、壁高は8～27cmである。北東壁が45～60度の角度で緩やかに立ち上がるほかは、65～70度の角度で外傾して立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、軟弱なロームである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端直径28～32cm・深さ26～32cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を12cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.3mほど北側に確認され、平面形は、長径52cm・短径33cmの楕円形である。炉内には、少～多量の焼土を含むにぶい赤褐色土や明褐色土が堆積しているが、炉床はあまり焼き締まっていない。貯蔵穴は、北コーナー付近に位置している。平面形は、直径50cmの円形で、深さは16cmほどである。

覆土は、上層に極少量のローム粒子や焼土粒子を含む黒褐色土、下層に中量のローム粒子、少量の焼土粒子や炭化粒子を含む極暗褐色土、壁際に中量のローム粒子を含む褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、自然堆積と思われる。

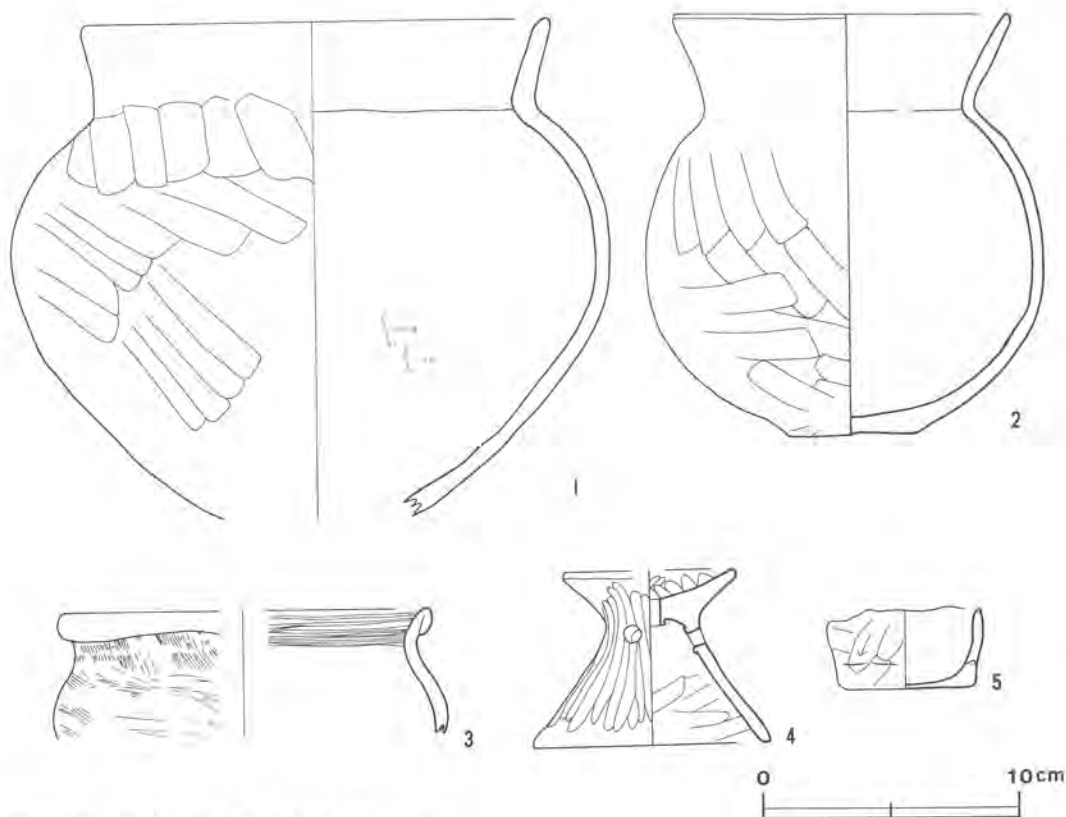
遺物は、土師器及びその破片138点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片4点が出土している。第117図1の甕形土器は、南部の床面から潰れた状態で、2の甕形土器は、東コーナー付近の床面から出土した破片を接合したものである。5のミニチュア土器は、南壁際の床面から正位の状態で出土したものである。4の器台形土器は、北部の床面から11cmほど上位に倒立の状態で出土したものである。3の甕形土器口縁部は、中央部の覆土下層から出土したものである。出土状況等から考え、1・2・4・5は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。





第116图 第15号住居跡実測图

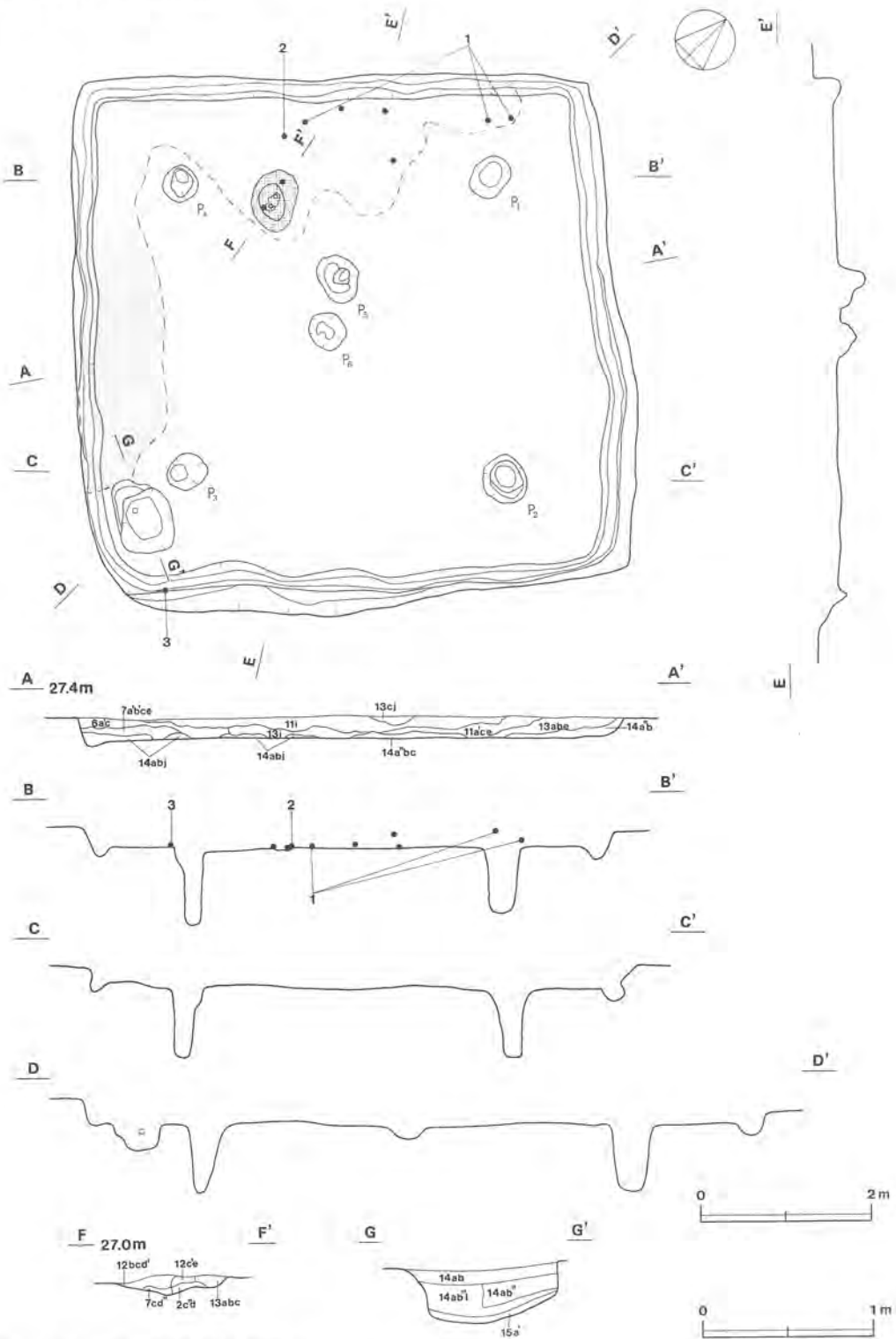


第117図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第117図 1	壺形土器 土師器	A 18.5 B (19.8)	底部は欠損。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は頸部から外傾して開く。	内・外面とも口縁部はナデ、胴部は篋ナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	60% P170 胴部外面に煤付着
2	壺形土器 土師器	A 13.2 B 17.0 C 5.1	平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	外面は口縁部がナデ、胴部は篋ナデ整形。内面は口縁部がナデ整形であるが、胴部は剥離が著しく整形技法は不明。	砂粒・長石 橙色 普通	90% P171 胴部外面に煤付着
3	壺形土器 土師器	A「15.0」 B (5.0)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は複合口縁で、外反して開く。	外面は口縁部がナデ、胴部はハケ目整形。内面は口縁部がハケ目、胴部はナデ整形。	砂粒 明褐色 普通	10% P528
4	器台形土器 土師器	A「6.9」 B 7.0 D 9.5	脚部は上位に3孔が穿たれ、「ハ」の字状に開く。器受部は外傾して開く。接合部に中央孔を持つ。	器受部の内・外面、脚部外面は篋磨き整形。脚部内面は篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	90% P65
5	ミニチュア 土器 土師器	A 6.0 B 3.3 C 5.0	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に開く。	内・外面とも粗雑な篋ナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	100% P173

第16号住居跡 (第118図)



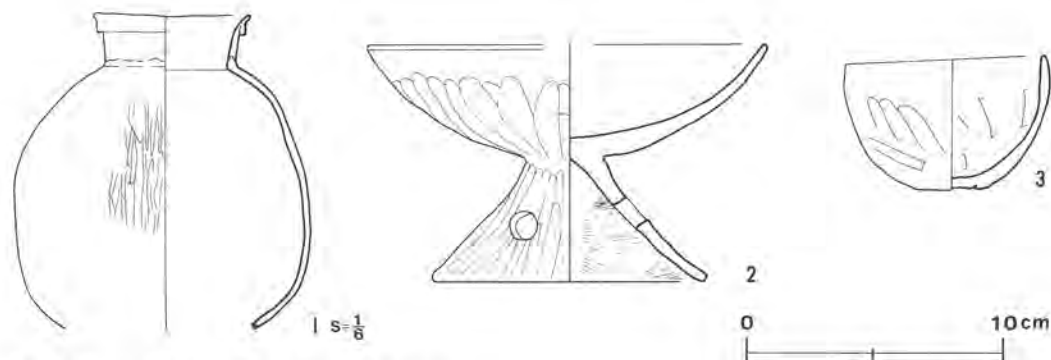
第118図 第16号住居跡実測図

本跡は、1次調査区のC6f<sub>1</sub>区を中心に確認された住居跡で、第17号住居跡の西4m、第15号住居跡の南東3mに位置している。

平面形は、長軸6.62m・短軸6.46mの方形を呈し、主軸方向はN-51°-Wを指している。床面積は35.8m<sup>2</sup>である。壁はロームで、壁高は16~29cmである。北西壁と南東壁はほぼ垂直に、ほかは70~75度の角度で外傾して立ち上がっている。壁直下には、上幅14~28cm・深さ6~12cmの壁溝が全周している。床面は緩やかな起伏を呈する縮まりのあるロームで、炉の付近は硬く踏み固められている。ピットは、6か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>は、上端直径36~54cm・深さ19~90cmであり、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>はほかのピットに比べて浅い掘り込みである。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、形状や規模、方形に配置されていることなどから、本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を7cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.7mほど西側に確認された。平面形は、長径75cm・短径51cmの楕円形であり、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南コーナーに位置している。平面形は、長軸86cm・短軸68cmの長方形状で、深さは30cmほどである。貯蔵穴内には、ローム粒子、ローム小ブロック等を含む褐色土や灰褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、上層に少量のローム粒子や焼土粒子等を含む黒褐色土、下層に中量のローム粒子等を含む黒褐色土や暗褐色土、褐色土が堆積している。一部攪乱されているがいずれも縮まりのある土層であり、自然堆積と思われる。また、北西壁や南西壁の壁際から床面にかけて、多量の焼土粒子や少量の炭化粒子を含む暗赤褐色土が堆積していることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、焼土を含む層の下に褐色土が堆積していることから、住居廃絶後であると思われる。

遺物は、土師器及びその破片151点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片10点が出土している。第119図1の壺形土器は、北西壁際の付近の床面から出土した破片を接合したものである。2の高环形土器は、炉から30cmほど北側の床面に潰れた状態で出土したものである。3の塊形土器は、南コーナー付近の床面から正位の状態で出土したものである。出土状況等から考え、1~3



第119図 第16号住居跡出土遺物実測図

は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

### 第16号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 1	壺形土器 土師器	A 12.4	底部は欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位よりやや下に持つ。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は外傾して開き複合口縁となる。	外面は口縁部及び頸部はナデ、胴部は篋磨き整形。内面はナデ整形。	砂粒 にぶい 橙色 普通	40% P175
		B (25.2)				
2	高坏形土器 土師器	A「16.0」	脚部は中位に3孔が穿たれ、「ハ」の字状に開く。坏部は内彎気味に大きく開く。	坏部は外面が篋ナデ、内面はナデ整形。脚部は外面が篋磨き、内面はハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	70% P176
		B 9.5				
		D 10.8				
3	坩形土器 土師器	A 7.6	平底。体部は大きく内彎して立ち上がり、口縁部に開く。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒 浅黄色 普通	100% P177
		B 5.4				
		C 2.7				

### 第17号住居跡（第120図）

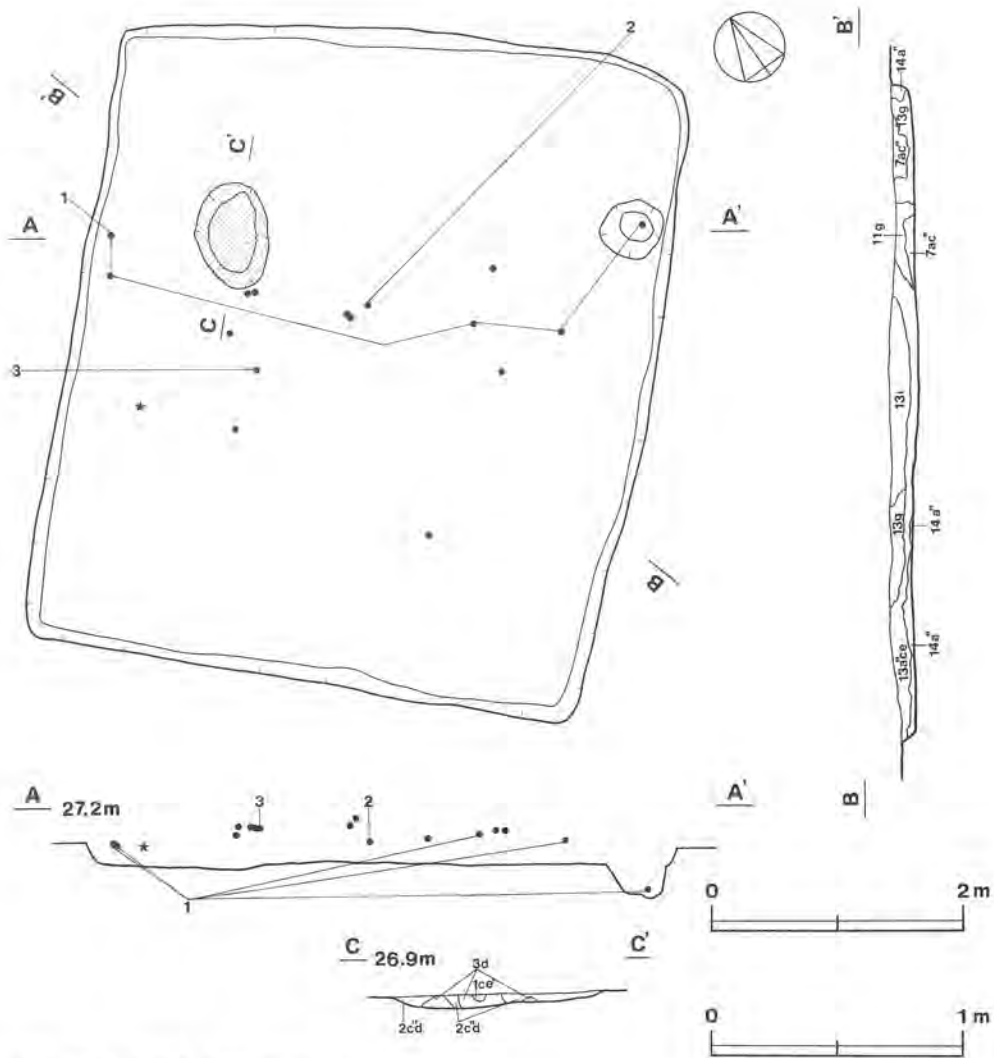
本跡は、1次調査区のC6f<sub>3</sub>区を中心に確認された住居跡で、第16号住居跡の東4mに位置している。

平面形は、長軸5.38m・短軸4.76mの長方形を呈し、主軸方向はN-45°-Wを指している。床面積は22.3m<sup>2</sup>である。壁はロームで、壁高は11~27cmである。北東壁と南東壁が65~70度の角度で外傾するほかは、ほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、締まりのあるロームである。ピットは検出されなかった。炉は、床面を4cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.3mほど北側に確認され、平面形は、長径85cm・短径59cmの楕円形である。炉内には、焼土粒子、焼土小ブロックを含む暗赤褐色土や赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、東コーナー付近に位置している。平面形は、直径52cmほどの円形で、深さは27cmほどである。

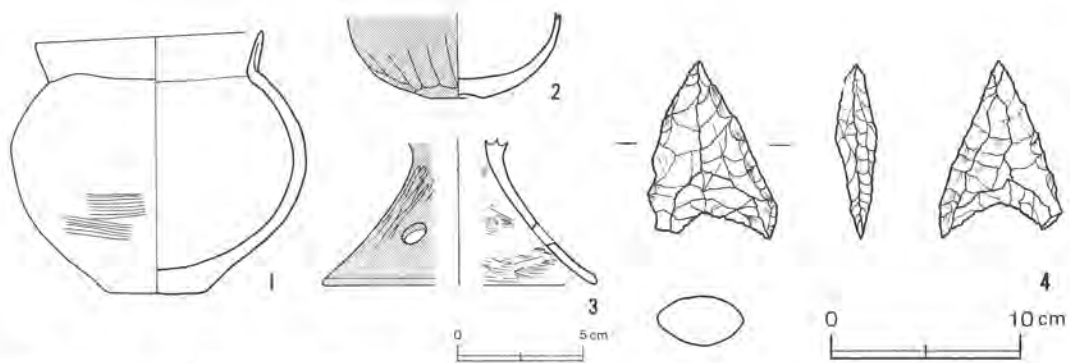
覆土は、上層に少量のローム粒子等を含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子を含む暗褐色土、壁際に多量のローム粒子を含む褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

遺物は、土師器及びその破片134点、石鏃1点が出土している。第121図1の小形甕形土器は、貯蔵穴内の底面から横位の状態で出土した大破片と覆土中出土の破片が接合したものであり、本跡に伴う遺物と思われる。2の埴形土器胴部や3の器台形土器脚部片は床面の中央部、4の石鏃は東部の覆土中から出土したものであるが、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第120图 第17号住居跡実測図



第121图 第17号住居跡出土遺物実測図

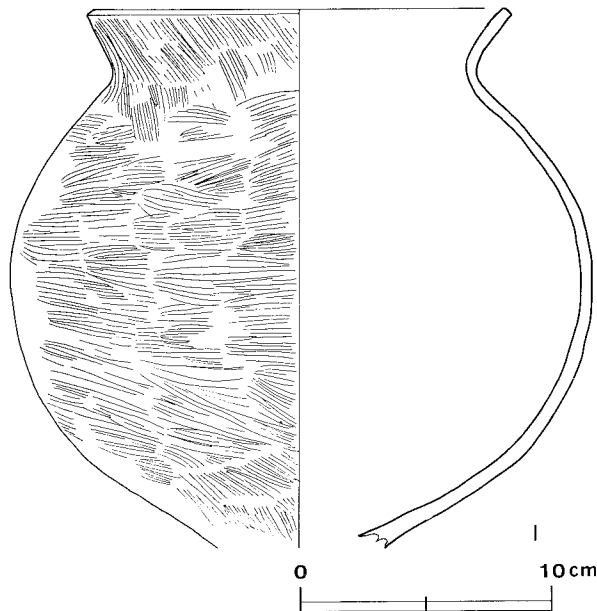
第17号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 1	小形甕形土器 土師器	A 8.8 B 10.5 C 4.0	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は複合口縁で頸部から「く」の字状に外傾して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。胴部外面はハケ目整形後、ナデ。ハケ目痕が部分的に残る。	砂粒 橙色 普通	90% P178
2	埴形土器 土師器	B (3.4) C 2.0	上げ底。胴部は内彎して立ち上がるが、中央部以上は欠損する。	外面は篋ナデ整形後、赤彩。内面は剝離が著しく、整形技法は不明。	砂粒 にぶい赤橙色 普通	10% P179
3	器台形土器 土師器	B (5.9) D「10.9」	脚部片。脚部は下位に孔が穿たれ、「ハ」の字状に開く。接合部に中央孔を持つ。	外面は篋磨き整形後、赤彩。内面はハケ目整形。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	10% P180

第18号住居跡（第123図）

本跡は、1次調査区のC5f7区を中心に確認された住居跡で、第15号住居跡の南西9.5m、第19号住居跡の北西6mに位置している。

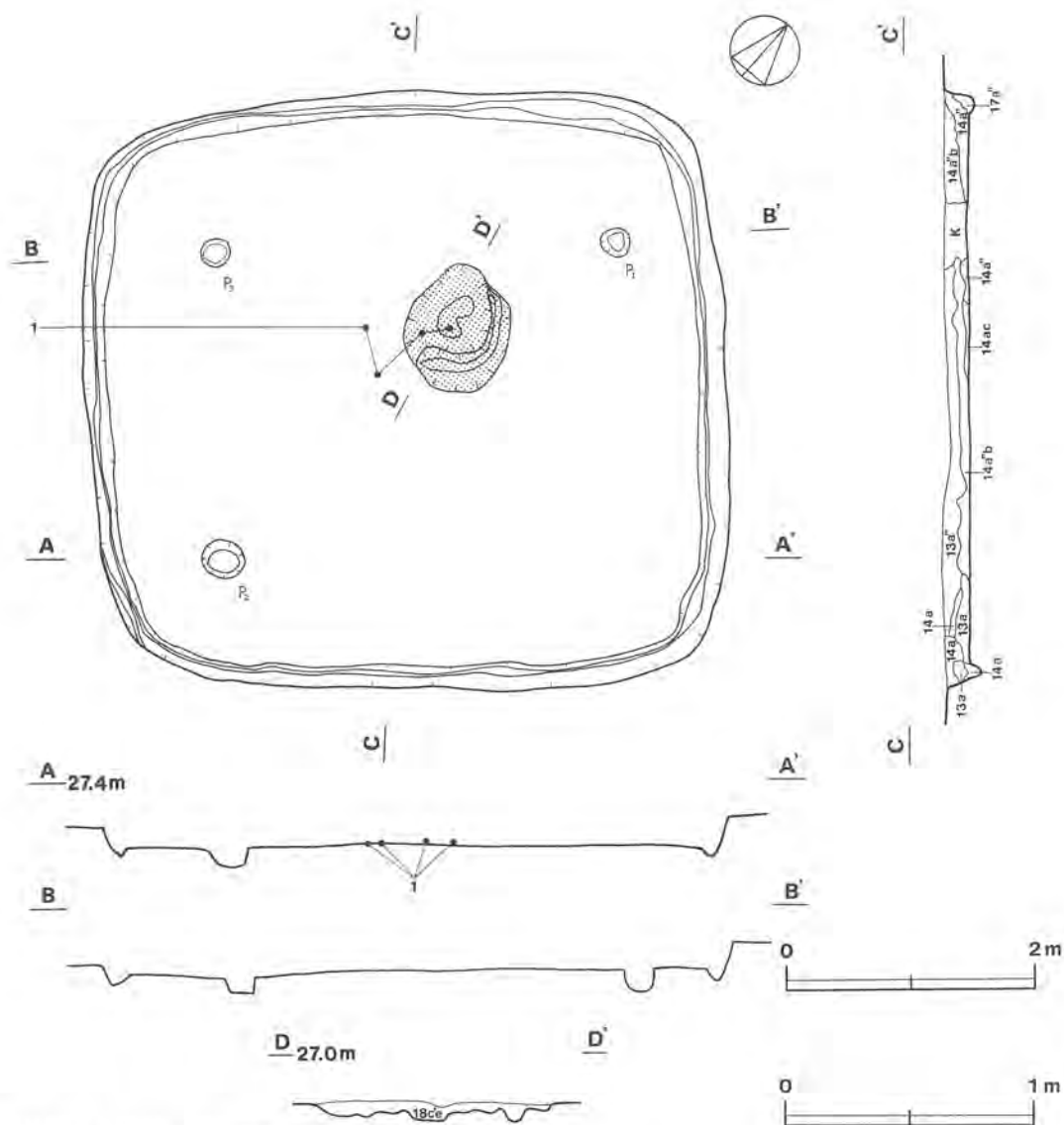
平面形は、長軸5.16m・短軸4.86mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-50°-Eを指している。床面積は21.5㎡である。壁はロームで、65~80度の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は8~25cmである。壁直下には、上幅10~18cm・深さ8~10cmの壁溝が全周している。床面は平坦で、硬く踏み固められたロームである。ピットは、3か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は、上端直径24~32cm・深さ14~20cmである。比較的小規模ではあるが、形状や規模から本跡に伴う主柱穴と判断した。



炉は、床面を14cmほど掘り下げた地床炉で、中央から70cmほど北側に確認され、平面形は、長径105cm・短径84cmの楕円形である。炉内には、中量の焼土粒子を含んだ赤褐色土が堆積しており、炉床は凹凸が激しくレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、上層に多量のローム粒子を含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含む褐色土が堆積している。一部攪乱されているがいずれも締まりのある土層であり、自然堆積と思われる。

第122図 第18号住居跡出土遺物実測図



第123図 第18号住居跡実測図

遺物は、土師器及びその破片3点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。第122図1の台付甕形土器は、中央部の床面から出土した破片を接合したものであり、本跡に伴う遺物と考えられる。

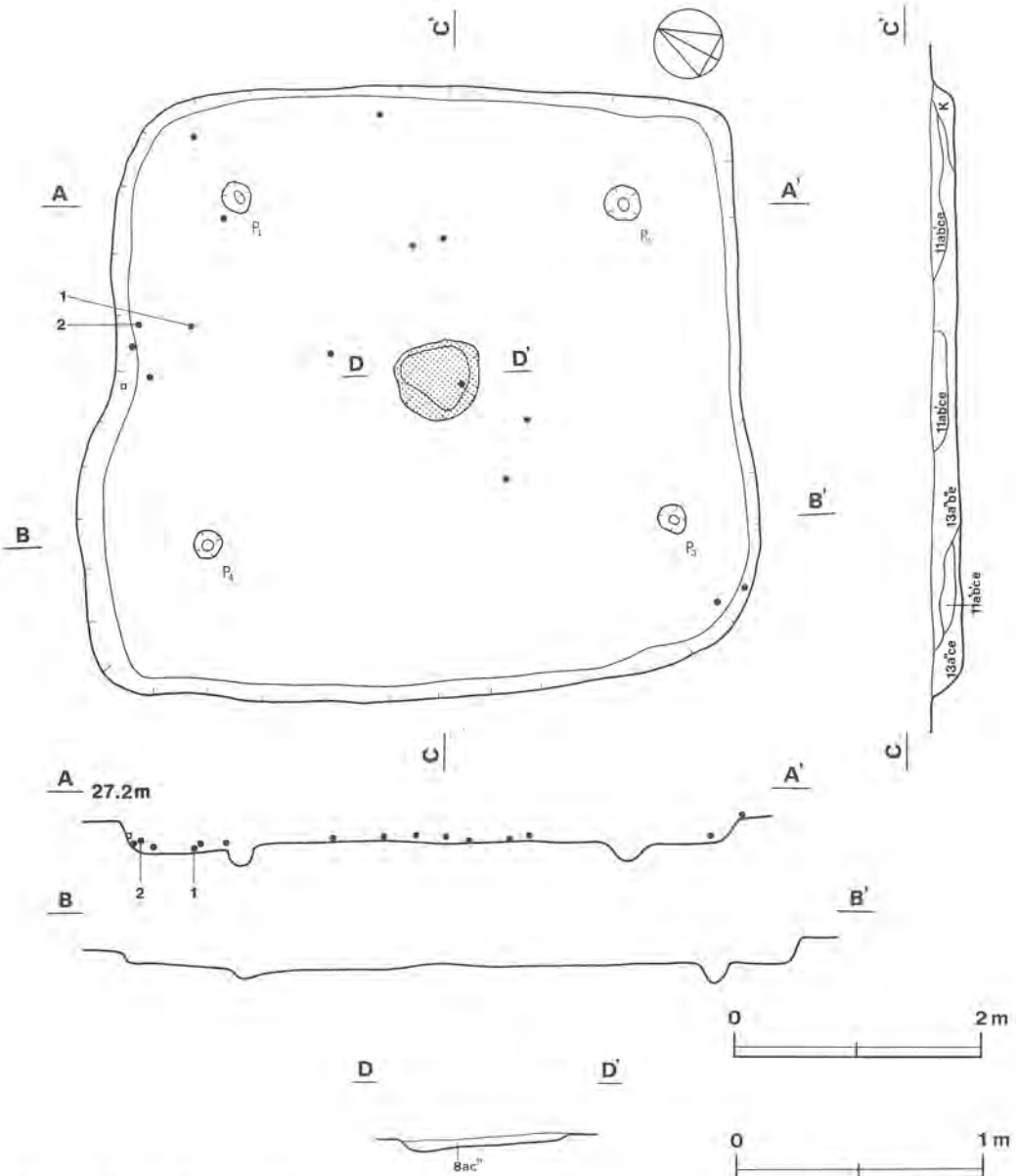
本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第18号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第122図 1	台付 甕形 土 器 土 師 器	A 16.9 B (21.6)	脚台部は欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	外面は荒いハケ目整形。内面はナデ整形。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	70% P181 胴部外面に煤付着

第19号住居跡 (第124図)



第124図 第19号住居跡実測図

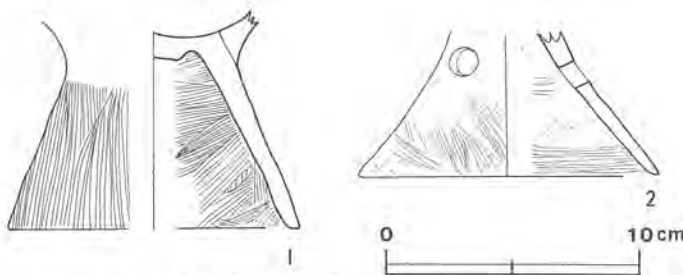
本跡は、1次調査区のC5g<sub>9</sub>区を中心に確認された住居跡で、第16号住居跡の南西3m、第18号住居跡の南東6mに位置している。

平面形は、長軸5.10m・短軸5.06mの不整隅丸方形を呈し、主軸方向はN-30°-Wを指している。床面積は22.8㎡である。壁はロームで、壁高は10~25cmである。北壁が50度の角度で立ち上がるほかは、70~80度の角度で外傾して立ち上がっている。床面は平坦なロームで、炉の周囲は硬く踏み固められている。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径22~30cm・深さ9~19cmである。比較的小規模ではあるが、形状や方形に配置されていることから、本跡に伴う主柱穴と判断した。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、ほぼ中央に確認され、平面形は、長径73cm・短径66cmの円形状である。炉内には、多量の焼土粒子を含む赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、上層に中量のローム小ブロックや少量の焼土粒子等を含む黒褐色土、下層に多量のローム粒子を含む暗褐色土、壁際に多量のローム粒子を含む暗褐色土や中量のローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

遺物は、土師器及びその破片75点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。第125図1の台付甕形土器脚台部は北壁中央部の床面から正位、2の高坏形土器脚部は北壁中央部の壁際の床面から横位の状態で出土したものである。出土状況等から考えて、1・2は本跡に伴うと考えられる遺物である。このほかに、甕形土器の口縁部片、胴部片、底部片等が出土しているが、出土層位が上層であることから、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第125図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第125図 1	台付甕形 土器 土師器	B(8.7) D「6.8」	脚台部片。脚台部は「ハ」の字状に開く。	内・外面ともハケ目整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	10% P183

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第125図 2	高坏形土器 土師器	B (5.7) D 12.0	坏部は欠損。脚部は3孔が穿たれ、「ハ」の字状に開く。	外面はハケ目整形後、篋ナデ。ハケ目痕が部分的に残る。内面はハケ目整形。	砂粒にふい橙色普通	40% P184

## 第20号住居跡（第126図）

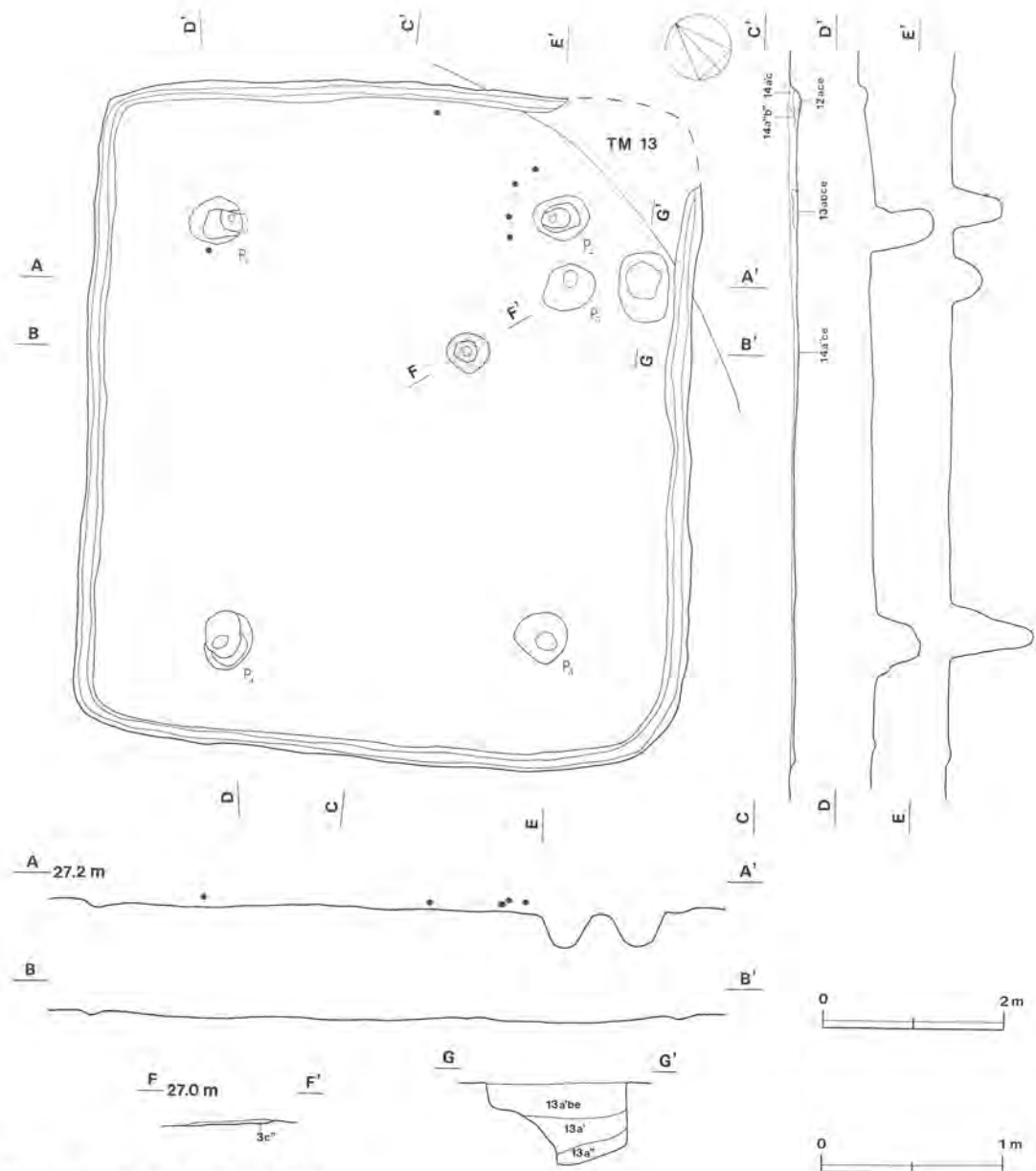
本跡は、1次調査区のC5j<sub>5</sub>区を中心に確認された住居跡で、第19号住居跡の南西13.5mに位置している。本跡は東側で第13号古墳と重複しているが、床面を切られていることから、本跡の方が古い時期の遺構と思われる。

平面形は、長軸7.48m・短軸6.66mの長方形を呈し、主軸方向はN-46°-Eを指している。床面積は40.7㎡である。本跡の上面は以前砕石置場となっており、覆土が極めて浅く、遺構確認時において床の一部が露呈している状態であった。壁はロームで、38～55度の角度で緩やかに立ち上がり、壁高は3cmである。壁直下には、上幅18～24cm・深さ3～5cmの壁溝が、東コーナー付近を除いて全周している。床面は平坦で、締まりのあるロームである。ピットは、5か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>は、上端直径44～58cm・深さ39～92cmである。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、形状や規模、方形に配置されていることなどから、本跡に伴う主柱穴と判断した。炉は、中央から1.1mほど東側に確認され、平面形は、長径48cm・短径43cmの楕円形である。床面をそのまま使用した地床炉と思われ、炉床がレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、東コーナー付近の壁際に位置している。平面形は、長軸79cm・短軸55cmの隅丸長方形で、深さは34cmほどである。

覆土は、極めて浅く、中央部に多量のローム小ブロックを含む褐色土、壁際に中・多量のローム粒子とローム小ブロックを含む褐色土や暗褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層である。

遺物は、土師器及びその破片54点のほか、流れ込みと考えられる須恵器片1点が出土している。床面出土の土師器片は、ハケ目が施された甕形土器の口縁部片や赤彩が施された器台形土器の器受部片等であるが、いずれも小破片であり図示することができなかった。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第126図 第20号住居跡実測図

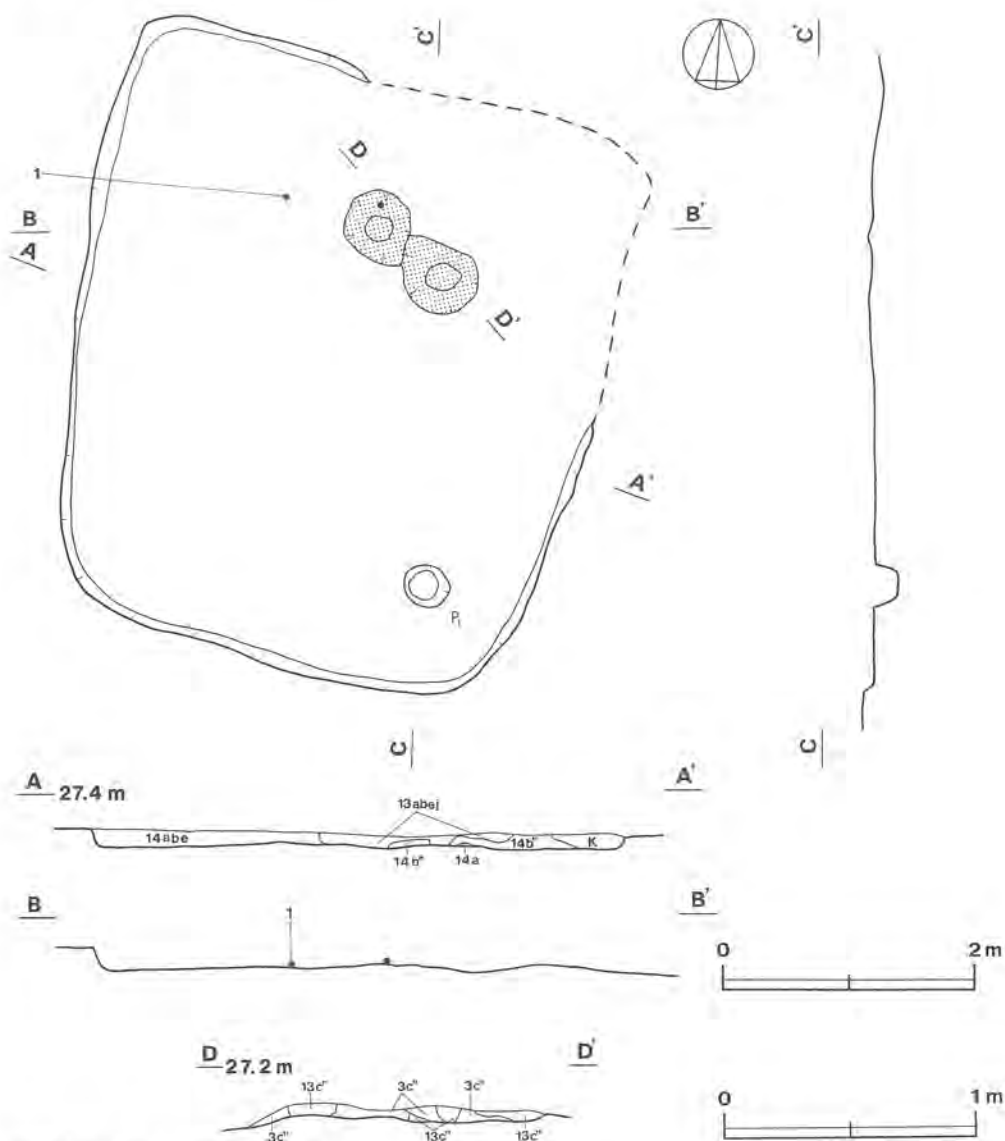
第21号住居跡 (第127図)

本跡は、1次調査区のD6a<sub>1</sub>区を中心に確認された住居跡で、第28号住居跡の西19mに位置している。

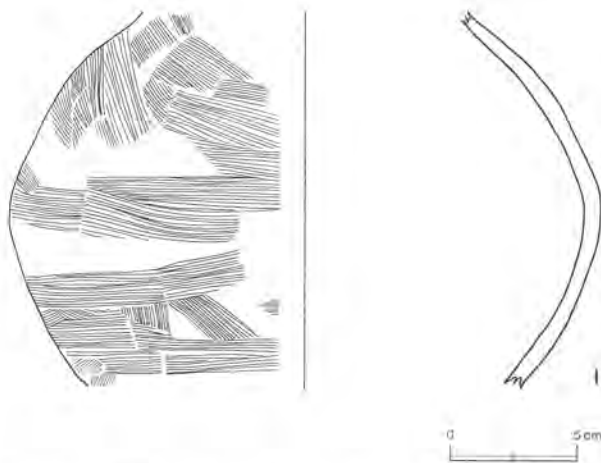
平面形は、長軸4.74m・短軸4.18mの不整隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-15°-Eを指して

いる。床面積は18㎡と推定される。壁はロームで、壁高は11～15cmである。削平により北東コーナーは湮滅しているが、ほかは65～75度の角度で外傾して立ち上がっている。床面は緩やかな起伏を呈し、締めりのあるロームである。ピットは、1か所検出された。規模は、上端直径33cm・深さ22cmで、南東コーナーから60cmほど内側に位置している。規模や位置から、本跡に伴う柱穴と思われる。炉は、中央から1.3mほど北側に確認され、平面形は、長径124cm・短径56cmの瓢箪形である。床面をそのまま利用した地床炉と思われ、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、中央部に少～多量のローム小ブロック等を含む褐色土、壁際に少～多量のローム粒子を含む褐色土が堆積している。



第127図 第21号住居跡実測図



遺物は、土師器片19点が出土している。第128図1の甕形土器胴部は、北西部の床面から4cmほど上に潰れた状態で出土したものであり、本跡に伴う遺物と考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

第128図 第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 1	甕形土器 土師器	B(15.0)	胴部片。胴部は球形状を呈するものと思われる。	外面はハケ目整形。内面は剥離が著しく、整形技法不明。	砂粒 橙色 普通	20% P185 胴部外面に煤付着

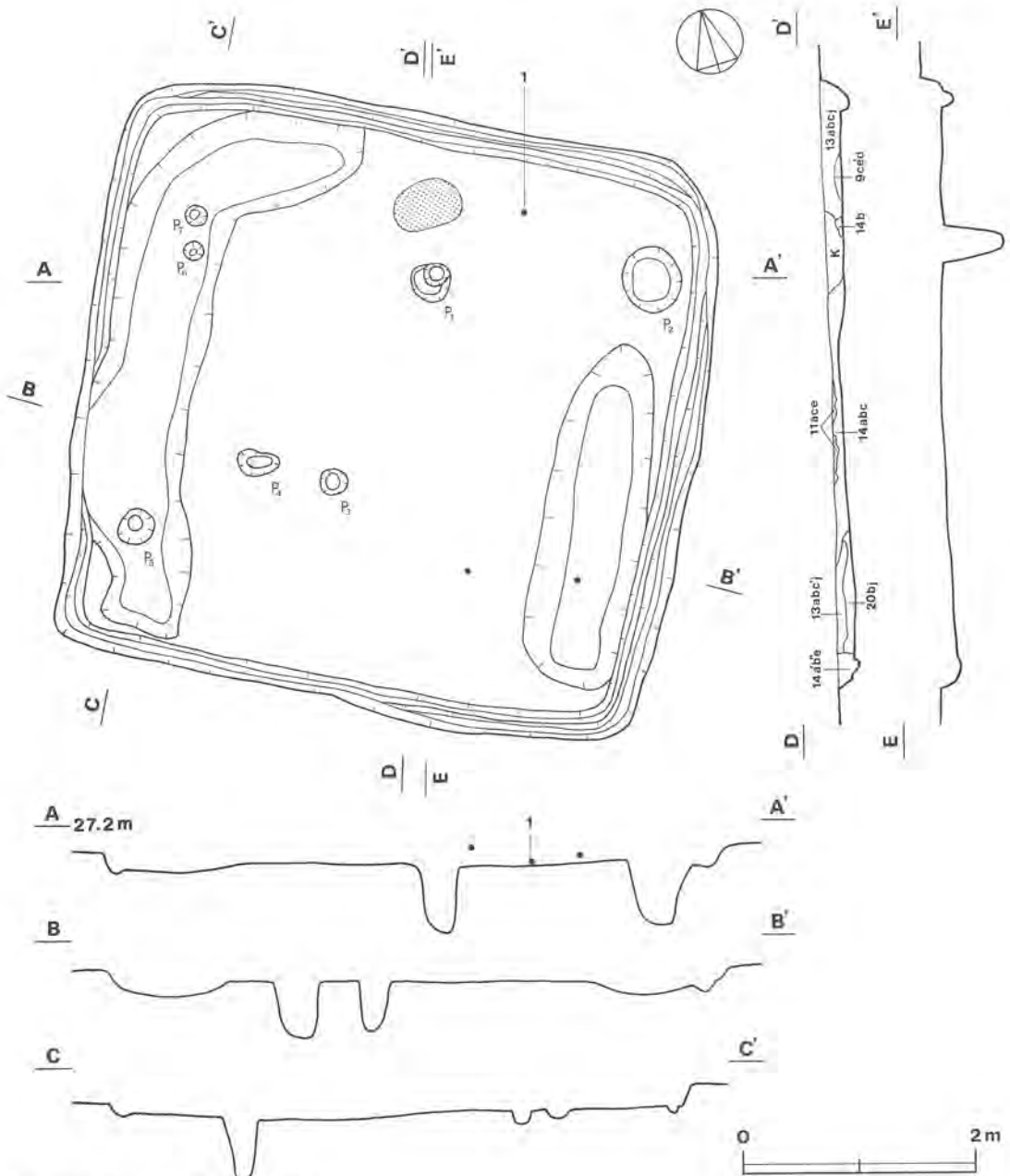
### 第22号住居跡（第129図）

本跡は、1次調査区のD5c<sub>3</sub>区を中心に確認された住居跡で、第21号住居跡の南西9.5mに位置している。

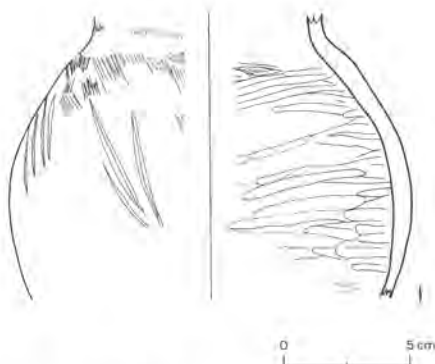
平面形は、長軸5.30m・短軸5.12mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-32°-Eを指している。床面積は25.2㎡である。壁はロームで、壁高は9~20cmである。各壁ともほぼ垂直に立ち上がっているが、北壁や東壁の一部は攪乱されている。壁直下には、上幅21~26cm・深さ6cmの壁溝が、西壁下の一部を除いて全周している。床面は締まりのあるロームで、北西コーナー付近と西壁の壁下は上幅66~90cm・深さ8~10cmの規模を有する帯状の凹地に切られている。ピットは、6か所検出された。P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>~P<sub>7</sub>は、上端直径18~36cm・深さ8~61cmである。6本とも本跡に伴う柱穴と思われるが、規模や配置が不規則であり支柱穴と判断することはできなかった。炉は、中央から1.8mほど北側に確認され、平面形は、長径60cm・短径42cmの楕円形である。床面をそのまま利用した地床炉と思われ、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。P<sub>2</sub>は貯蔵穴とみられ、東コーナー付近の壁際に位置している。平面形は、長径58cm・短径52cmの楕円形で、深さは50cmほどである。

覆土は、一部攪乱されているが、中央部に少量のローム粒子やローム小ブロックを含む褐色土、壁際に少量のローム粒子や黒色土粒子を含む暗褐色土、褐色土が堆積している。いずれも締めりのある土層である。

遺物は、土師器片9点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片1点が出土している。第130図Iの壺形土器胴部片は、北東部の床面から横位の状態で出土したものであり、本跡に伴う遺



第129図 第22号住居跡実測図



第130図 第22号住居跡出土遺物実測図

物と考えられる。このほかには、ハケ目が施された台付甕形土器の胴部片が出土しているが、小破片であり図示することはできなかった。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

#### 第22号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図 1	壺形土器 土節器	B(11.4)	胴部片。胴部は球形状を呈するものと思われる。外面に縦刻条の跡が見られる。	外面はハケ目整形後、ナデ。ハケ目痕が部分的に残る。内面は寛唇き整形。	砂粒 橙色 普通	10% P186 2次利用(砥石)

#### 第24号住居跡(第131図)

本跡は、1次調査区のE7b<sub>3</sub>区を中心に確認された住居跡で、第26号住居跡の南東39mに位置している。本跡は東側で第11号溝と重複しているが、土層から判断すると本跡の方が古い時期の遺構と思われる。

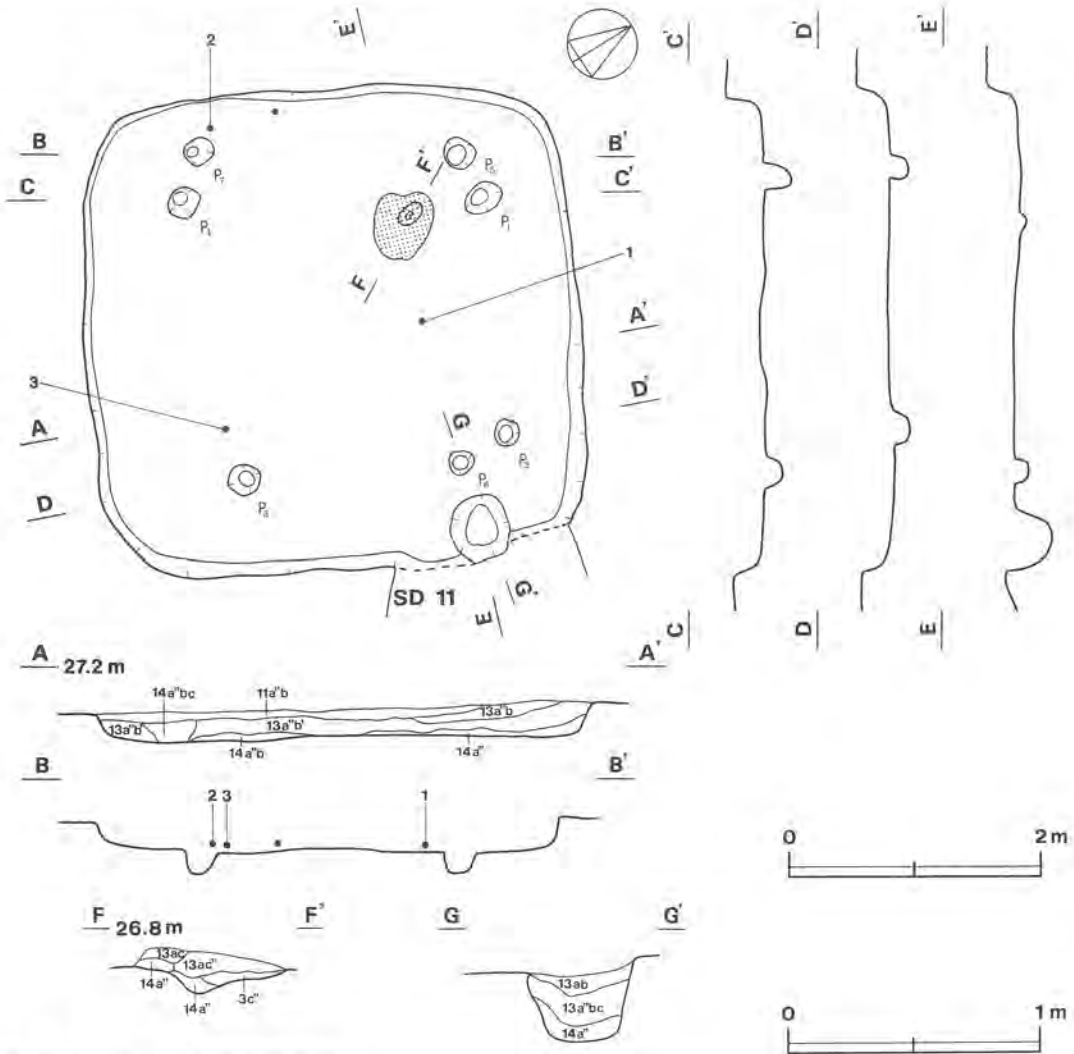
平面形は、長軸3.92m・短軸3.86mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-58°-Wを指している。床面積は13.1㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は15~26cmである。床面は緩い起伏を呈するロームで、中央部は硬く踏み固められている。ピットは、7か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>は、上端直径20~25cm・深さ12~25cmである。7本とも本跡に伴う柱穴であり、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、形状や規模、方形に配置されていることなどから、支柱穴と判断した。P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は補助的な役割を果たす柱穴と思われる。炉は、床面を3cmほど掘り下げた浅い地床炉で、中央から1mほど北西側に確認された。平面形は、長径60cm・短径47cmの楕円形状で、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、東壁際に位置している。平面形は、長径54cm・短径47cmの楕円形で、深さは33cmほどである。貯蔵穴内には、少量のローム粒子を含む暗褐色土、多量のローム粒子等を含む暗褐色土や褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、上層に中量のローム粒子を含む黒褐色土、下層に多量のローム粒子等を含む暗褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。



遺物は、土師器及びその破片9点が出土している。第132図1の台付甕形土器は、中央部の床面に潰れた状態で出土したものである。2の甕形土器は西コーナー付近の床面から、3の埴形土器は南部の床面上8cmほどに横位の状態で出土したものである。出土状況等から考え、1～3は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

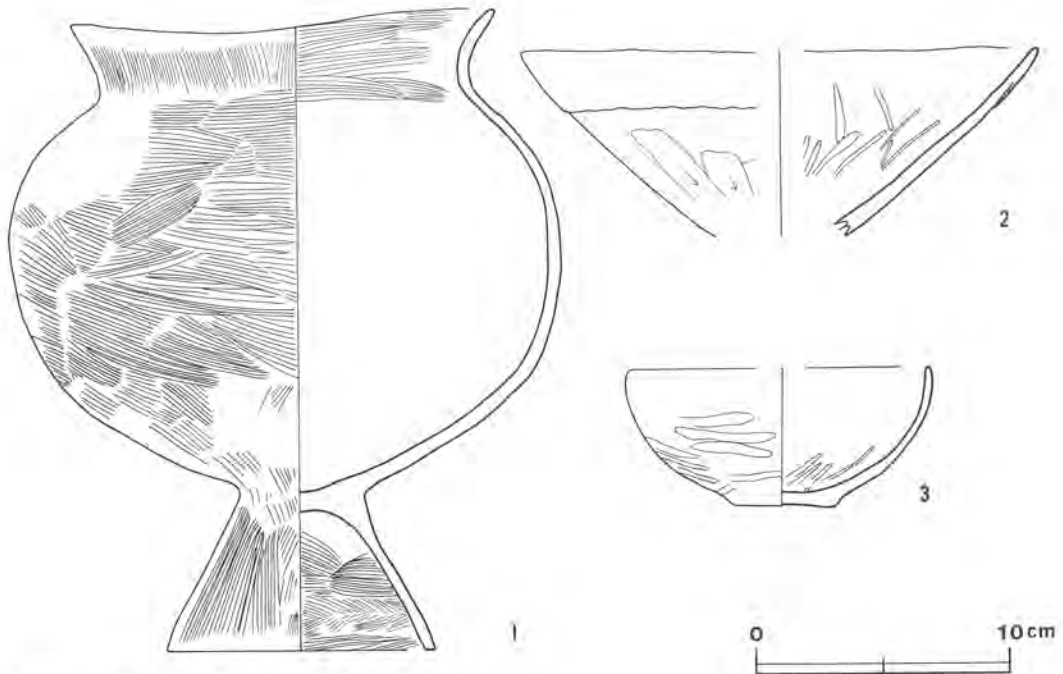


第131図 第24号住居跡実測図

第24号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第132図 1	台付甕形 土器 土師器	A 16.9 B 25.6 D 9.6	脚台部は「ハ」の字状に開く。 胴部は球形状を呈し、最大径を 中位に持つ。口縁部は頸部から 外反して開く。	外面はハケ目整形。内面は口縁 部・脚台部がハケ目、胴部はナ デ整形。	砂粒・スコリア にふい赤褐色 普通	90% P187 胴部外面に爆付 着

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第132図 2	甔形土器 土師器	A「20.6」 B (7.6)	底部は欠損。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は折り返されて複合口縁となる。器形は鉢形を呈するものと思われる。	口縁部は内・外面ともナデ整形。胴部外面は篋ナデ整形、内面は篋磨き整形。	砂粒 にふい橙色 普通	20% P189
3	埴形土器 土師器	A「11.9」 B 5.6 C 4.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に開く。	内・外面とも口縁部はナデ、体部は篋磨き整形。	砂粒・スコリア にふい褐色 普通	30% P188



第132図 第24号住居跡出土遺物実測図

### 第26号住居跡 (第133図)

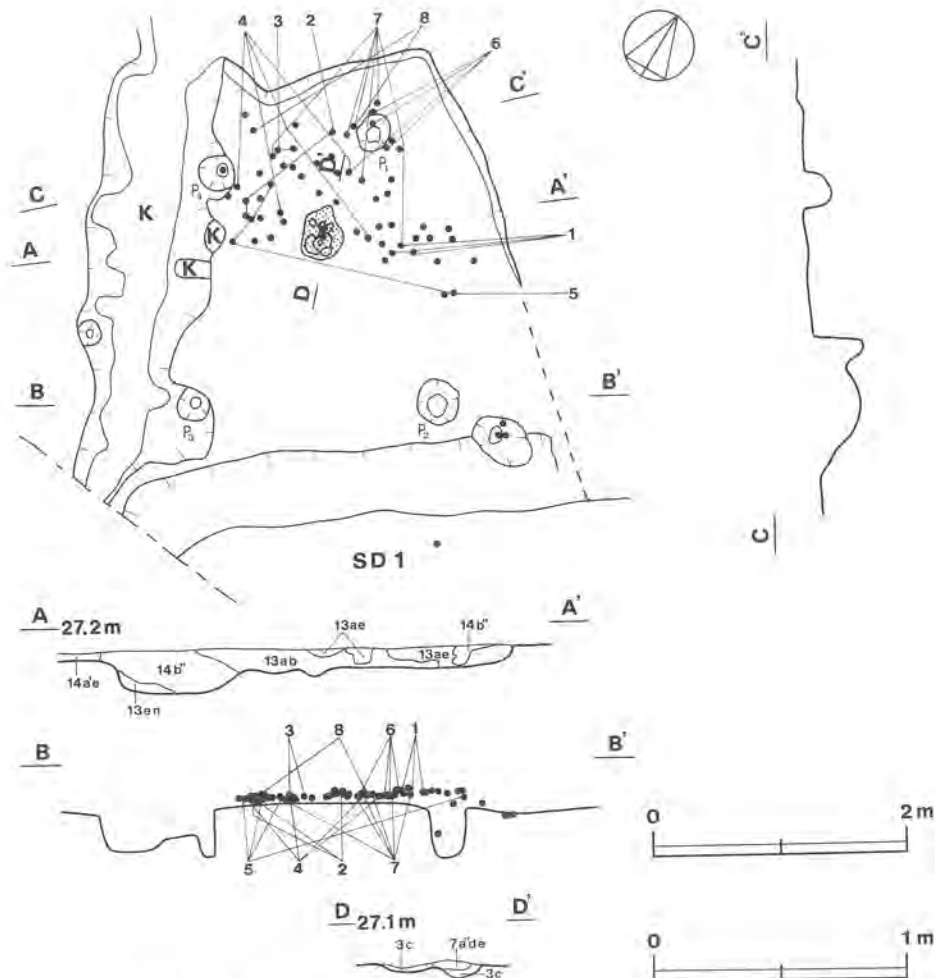
本跡は、1次調査区のD6g<sub>4</sub>区を中心に確認された住居跡で、第22号住居跡の南東22mに位置している。本跡は南側で第1号溝と重複しているが、床面を第1号溝に切られていることから、本跡の方が古い時期の遺構と思われる。

本跡は、削平や攪乱により平面形や規模等の詳細は不明であるが、壁残存部、柱穴や貯蔵穴の位置などから推定すると、長軸3.8m・短軸3.3mほどの長方形で、主軸方向はN-46°-Wを指さすものと思われる。現存床面積は10.9㎡である。壁はロームで、残存する北コーナー付近の壁はほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は5cmほどである。床面は、緩やかな起伏を呈するロームである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径22~30cm・深さ23~48cmである。やや不揃いに配置されているが、形状や規模から本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を6cmほ

ど掘り下げた地床炉で、P<sub>1</sub>から90cmほど南側に確認され、平面形は、長径43cm・短径34cmの不整楕円形状である。炉内には、多量の焼土粒子を含む暗赤褐色土や赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、P<sub>2</sub>の東側に位置しているが、第1号溝に切られている部分が多く、本来の形状や規模などについては不明である。

覆土は、極めて浅く、中・多量のローム粒子等を含む褐色土、少量のローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。

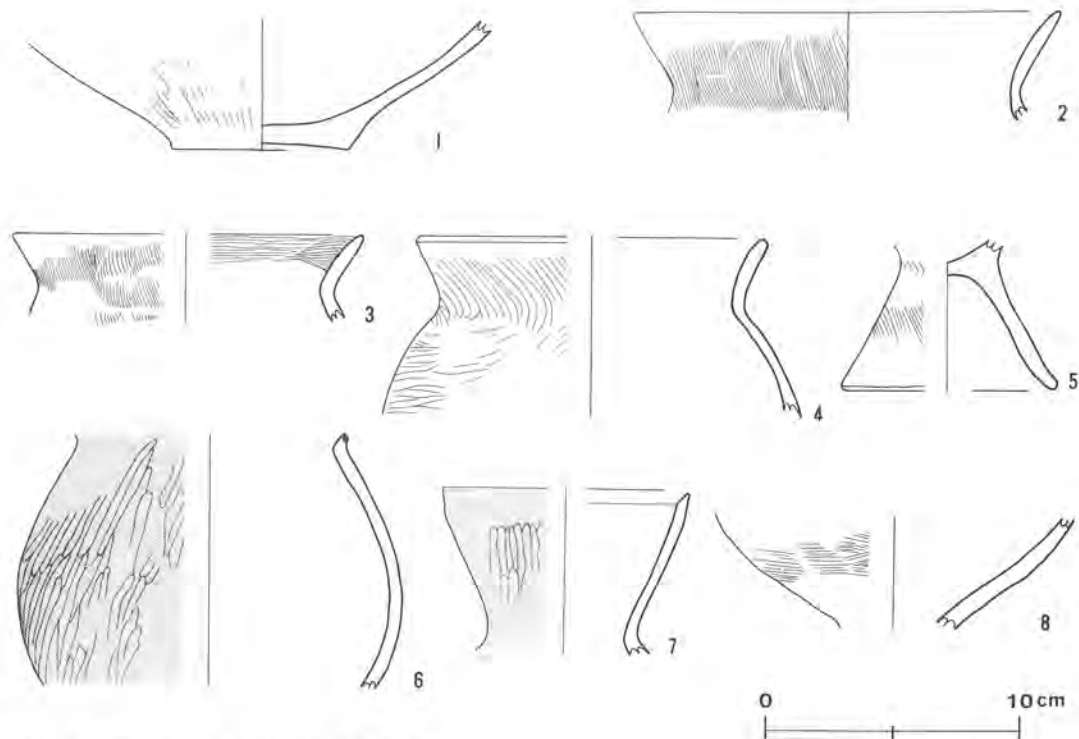
遺物は、土師器及びその破片305点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、炉の周囲から北コーナー付近にかけての床面や覆土下層に集中して出土している。第134図1の甕形土器底部、2～4の甕形土器口縁部、5の台付甕形土器脚台部、6の壺形土器胴部、7の埴形土器口縁部、8の高坏形土器坏部はまとまった状態で出土しており、本跡に伴うものと考えられる。このほかに、赤彩が施された埴形土器の口縁部片、



第133図 第26号住居跡実測図

器台形土器の脚部片、ハケ目が施された甕形土器口縁部片等が出土しているが、いずれも小破片であり図示することはできなかった。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第134図 第26号住居跡出土遺物実測図

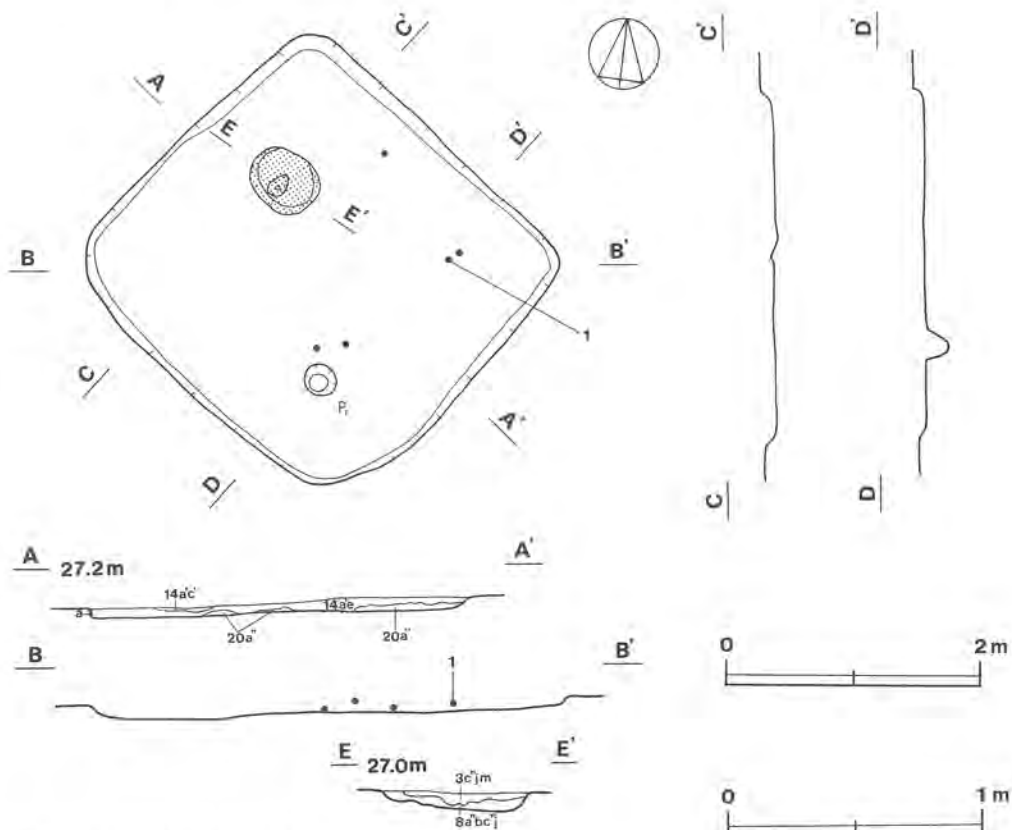
第26号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第134図 1	甕形土器 土節器	B (5.2) C 7.0	上げ底。胴部は内彎して立ち上がるが、中央部以上は欠損する。	外面はハケ目整形後、ナデ。内面は剥離が著しく、整形技法不明。	砂粒にふい赤褐色普通	10% P190
2	甕形土器 土節器	A 17.0 B (4.3)	口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は頸部から外傾して開く。	外面はハケ目整形。内面はナデ整形。	砂粒 橙褐色 普通	10% P193
3	甕形土器 土節器	A「14.0」 B (3.5)	口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	内・外面ともハケ目整形。	砂粒 橙褐色 普通	10% P194
4	甕形土器 土節器	A「14.0」 B (7.2)	口縁部から胴上半部にかけての破片。口縁部は頸部から外反して開く。	外面は荒いハケ目整形。内面はナデ整形。	砂粒 橙褐色 普通	10% P533

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第134図 5	台付甕形土器 土師器	B (6.0) D 「8.6」	脚台部片。脚台部は「ハ」の字状に開く。	外面はハケ目整形。内面はナデ整形。	砂粒 橙色 普通	10% P529
6	壺形土器 土師器	B (10.0)	胴部片。胴部は球形状を呈するものと思われる。	内・外面とも露ナデ整形。外面は赤彩。	砂粒・バミス 暗赤褐色 普通	20% P530
7	埴形土器 土師器	A 「9.9」 B (6.6)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は内彎気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反して開く。口唇部内面は内削ぎを呈する。	内・外面とも露磨き整形で、外面は赤彩。	砂粒 橙色 普通	10% P531
8	高坏形土器 土師器	B (4.4)	坏部片。坏部は内彎して立ち上がるが、上位は欠損する。	外面はハケ目整形後、ナデ。ハケ目痕が部分的に残る。内面はナデ整形。	砂粒 橙色 普通	10% P532

### 第27号住居跡（第135図）

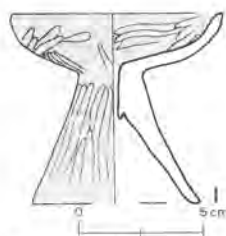
本跡は、1次調査区のD5b7区を中心に確認された住居跡で、第20号住居跡の南東7m、第22号住居跡の北西3.5mに位置している。



第135図 第27号住居跡実測図

平面形は、長軸2.98m・短軸2.82mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-55°-Wを指している。床面積は7.4㎡である。壁はロームで、壁高は6～9cmである。西壁はほぼ垂直に、ほかは55～60度の角度で緩やかに立ち上がっている。床面は、平坦なロームである。ピットは、1か所検出された。規模は、上端直径24cm・深さは17cmであるが、本跡に伴う支柱穴と思われる。炉は、床面を5cmほど掘り下げた地床炉であり、中央から70cmほど北西側に確認された。平面形は、長径58cm・短径45cmの楕円形である。炉内には、多量の焼土粒子等を含む赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、極めて浅く、中量のローム粒子や焼土粒子等を含む褐色土が堆積している。



第136図 第27号住居跡  
出土遺物実測図

遺物は、土師器及びその破片11点が出土している。第136図1の器台形土器は、東コーナー付近の床面に横位の状態で出土したもので、本跡に伴うものと考えられる。このほかに甕形土器の胴部片等が出土しているが、いずれも小破片であり図示することはできなかった。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

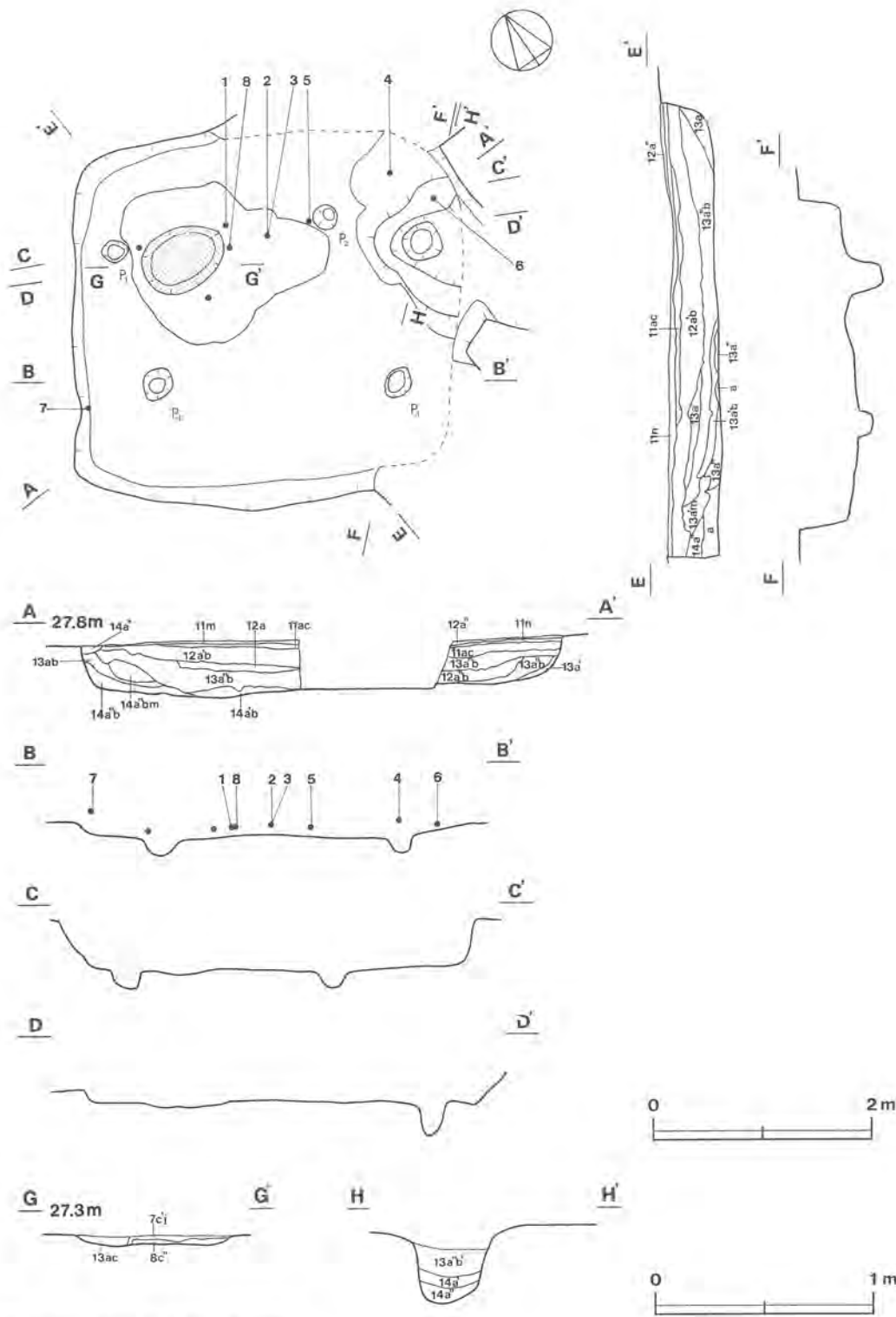
#### 第27号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図 1	器台形土器 土師器	A 8.6 B 7.6 D 「6.8」	脚部は「ハ」の字状に開く。器受部は外傾して立ち上がり、口縁部で内彎して開く。接合部に中央孔を持つ。	外面は篋磨き整形後、赤彩。内面は器受部が篋磨き整形後に赤彩、脚部はナデ整形。	砂粒 赤色 普通	70% P195

#### 第28号住居跡（第137図）

本跡は、1次調査区のC6j,区を中心に確認された住居跡で、第21号住居跡の東19mに位置している。

平面形は、推定長軸3.50m・短軸3.48mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-58°-Wを指している。床面積は10.3㎡前後と思われる。壁はロームで、第1号古墳調査用のトレンチに切られている北東壁、及び南壁の一部を除いてほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は31～53cmである。床面は緩い起伏を呈する縮まりのあるロームで、炉の周囲が硬く踏み固められている。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端直径22～30cm・深さ15～18cmである。不揃いに配置されているが、形状や規模から4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を7cmほど掘り下げた地

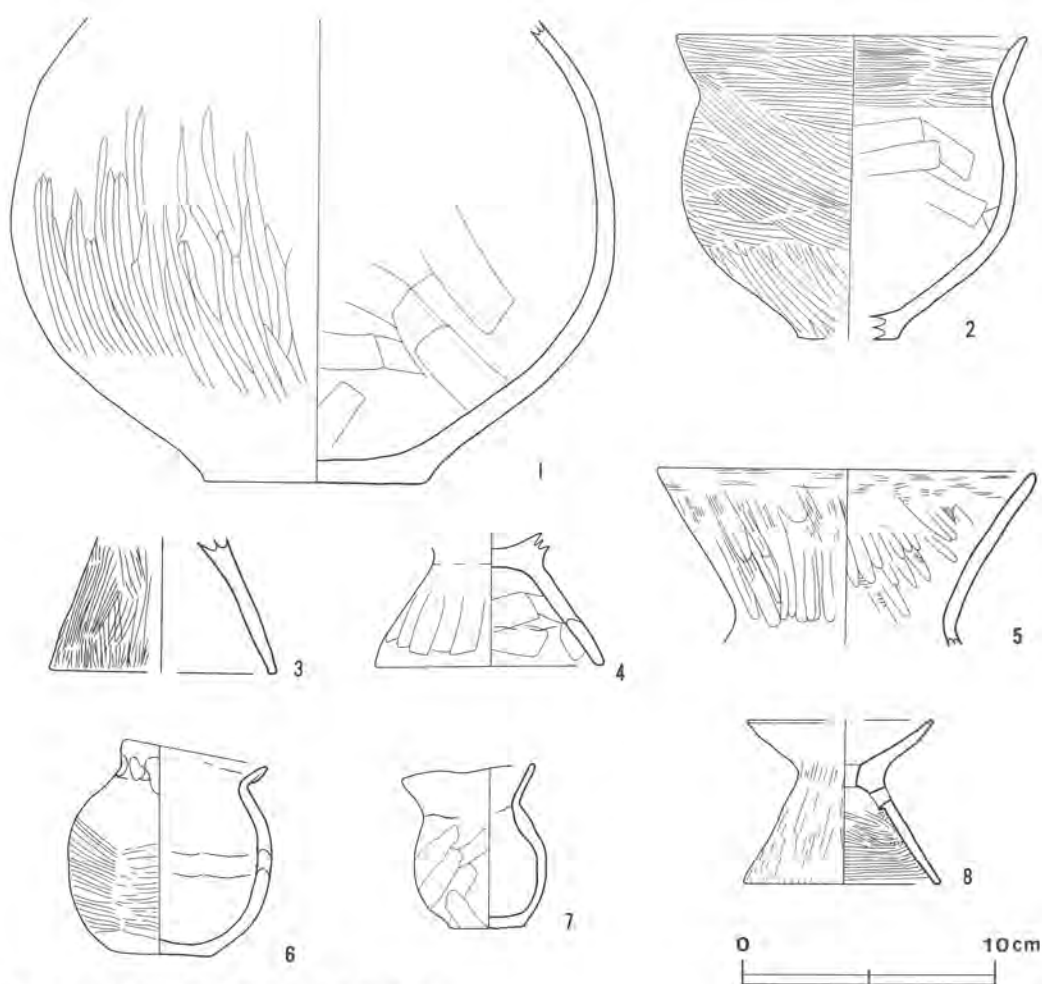


第137图 第28号住居跡実測图

床炉で、中央から1mほど北西側に確認され、平面形は、長径78cm・短径58cmの楕円形である。炉内には、多量の焼土粒子を含む赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、東コーナー付近に位置している。平面形は、直径38cmほどの円形で、深さは33cmほどである。貯蔵穴内には、多量のローム粒子を含む暗褐色土や褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、上層に少量のローム粒子や薄い帯状の灰層を含む黒褐色土、中層に少・中量のローム粒子を含む暗褐色土や極暗褐色土、下層に中・多量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含む暗褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

遺物は、土師器及びその破片45点が出土している。第138図1の壺形土器は炉の東際の床面から出土した破片を、2の小形甕形土器や3の台付甕形土器脚台部は北部の床面から出土した破片を



第138図 第28号住居跡出土遺物実測図



接合したものである。5の壺形土器口縁部は北東部の床面から倒立の状態で、6のミニチュア土器は東コーナー付近の床面から出土したものである。7のミニチュア土器は、西コーナー付近の壁際の床面から横位の状態で出土したもので、8の器台形土器は炉の東際床面から出土したものである。また、4の台付甕形土器脚台部は、東コーナー付近の床面に倒立の状態で出土したものである。出土状況等から考え、1～8は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

第28号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	壺形土器 土師器	B(18.5) C 8.8	平底。胴部は内彎して立ち上がり、球形状を呈する。頸部以上は欠損する。	外面は篋磨き整形。内面は篋ナデ整形。	砂粒 暗褐色 普通	40% P196
2	小形甕形 土師器	A 14.0 B 12.1 C「4.1」	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	外面は荒いハケ目整形。内面は口縁部が荒いハケ目、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	70% P197
3	台付甕形 土師器	B(5.4) D「9.0」	脚台部片。脚台部は「ハ」の字状に開く。	外面はハケ目整形。内面はナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	10% P199
4	台付甕形 土師器	B(5.3) D 9.2	脚台部片。脚台部は「ハ」の字状に開き、裾部でわずかに内彎する。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	10% P203
5	壺形土器 土師器	A 15.0 B(7.0)	口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は頸部から外反して開く。	内・外面とも篋磨き整形で、ハケ目痕が部分的に残る。	砂粒 橙色 普通	20% P198
6	ミニチュア 土器 土師器	A 5.6 B 8.7 C 4.0	平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は、複合口縁で、頸部から外傾して開く。	外面は荒いハケ目整形後にナデ。頸部には指頭痕が残る。内面は剝離が著しく整形技法は不明。	砂粒 橙色 普通	70% P200
7	ミニチュア 土器 土師器	A 5.3 B 6.6 C 2.9	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は、頸部から「く」の字状に外傾して開く。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	100% P201
8	器台形土器 土師器	A「7.3」 B 6.6 D 7.3	脚部は上位に2孔が穿たれ、「ハ」の字状に開く。器受部は外傾して開く。接合部に中央孔を持つ。	外面は粗雑なナデ整形で、ハケ目痕が強く残る。脚部内面はハケ目整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	90% P202

### 第31号住居跡（第139図）

本跡は、2次調査区のB6b<sub>1</sub>区を中心に確認された住居跡で、第32号住居跡の北東10mに位置している。

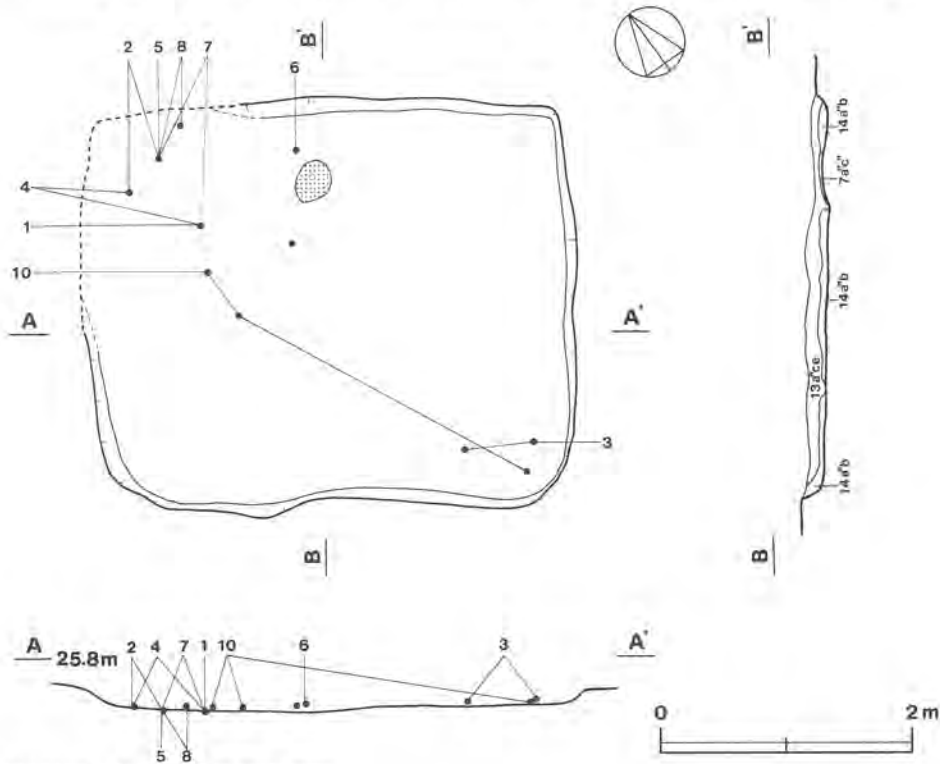
平面形は、長軸3.94m・短軸3.22mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-55°-Eを指している。床面積は11.4㎡である。壁はロームで、壁高は5～15cmである。北コーナー付近は篠根により攪

乱されているが、ほかは60～75度の角度で外傾して立ち上がっている。床面は平坦で、締まりのあるロームである。ピットは、検出されなかった。炉は、中央から1mほど北東側に確認された地床炉である。平面形は、長径36cm・短径29cmの楕円形であり、床面をそのまま利用したものと思われる。炉内には、多量の焼土粒子、中量の焼土ブロックを含む赤褐色土や暗赤褐色土が堆積しているが、炉床はあまり焼き締まっていない。

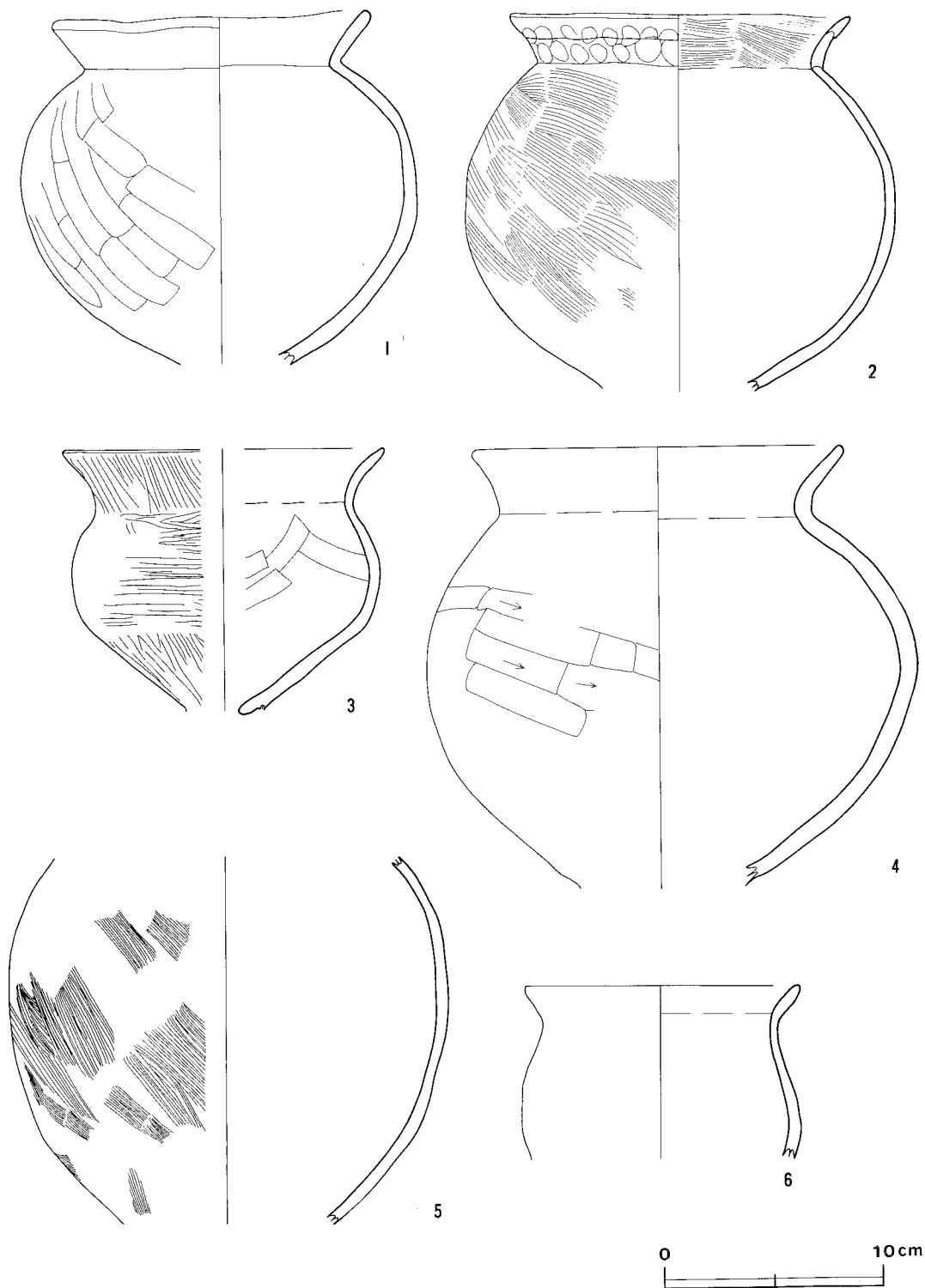
覆土は、上層に多量のローム粒子や少量の焼土粒子等を含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子等を含む褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層である。

遺物は、土師器及びその破片123点、浮子1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、北コーナー付近の床面や覆土下層に集中して出土している。これらの破片は原形に近い状態にまで復元できるものが多いことから、第140・141図1～3の台付甕形土器、4～7の甕形土器や小形甕形土器、8の壺形土器、9の高坏形土器、10の器台形土器、11の浮子はいずれも本跡に伴う遺物と思われる。

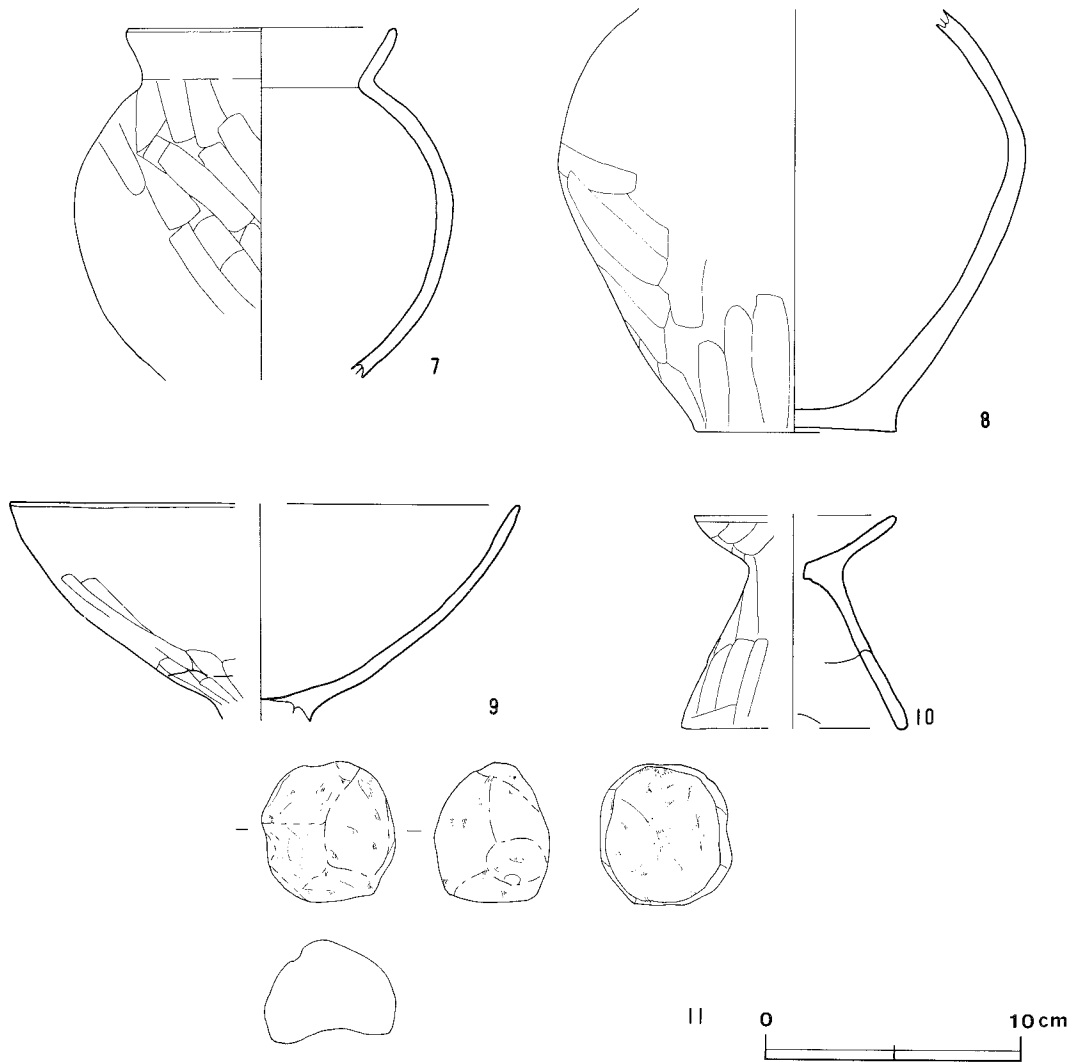
本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第139図 第31号住居跡実測図



第140图 第31号住居跡出土遺物実測図—1



第141図 第31号住居跡出土遺物実測図－2

第31号住居跡出土土器観察表

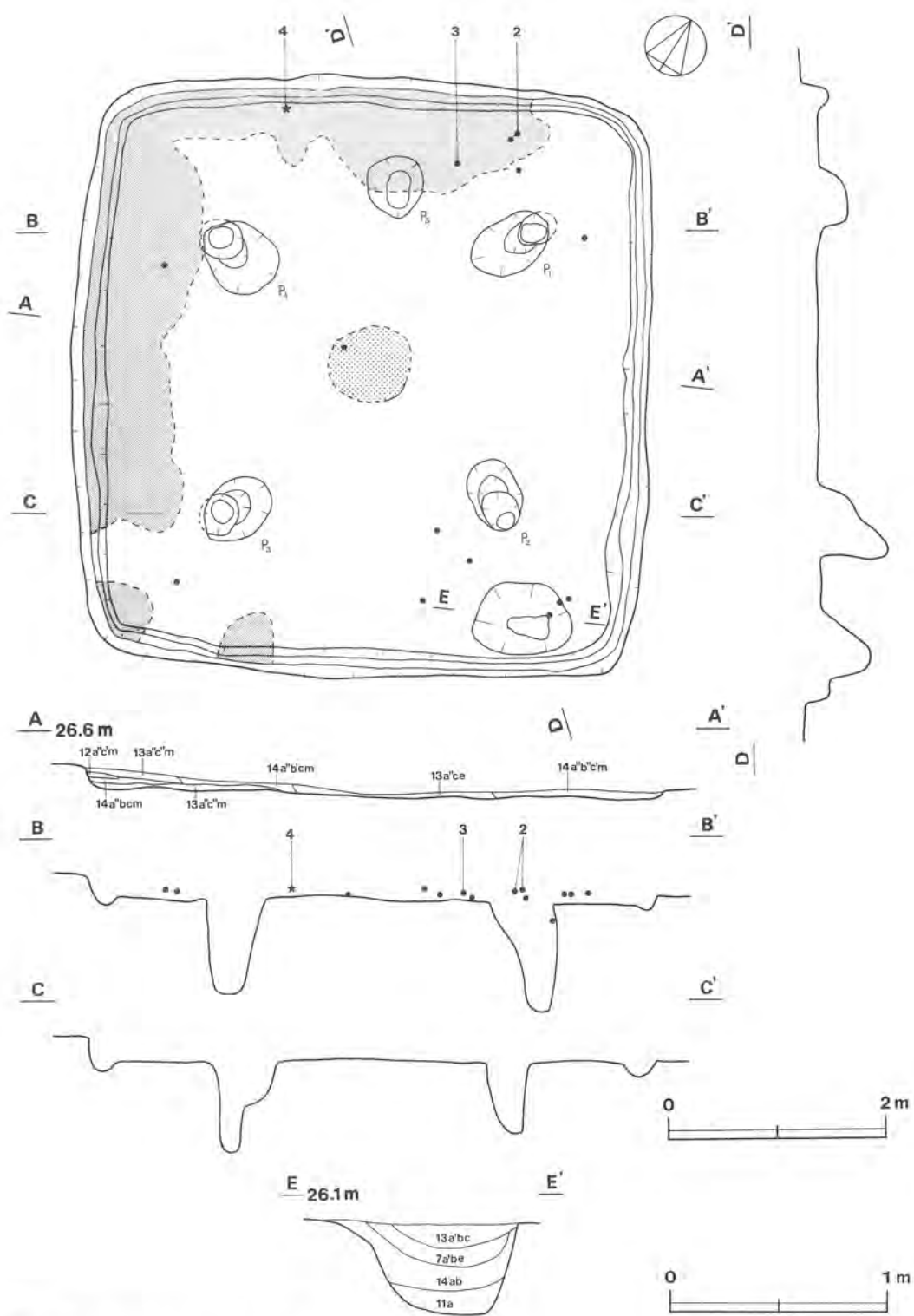
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第140図 1	台付甕形 土器 土師器	A 14.7 B (16.5)	脚台部は欠損。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	外面は口縁部がナデ、胴部は筥ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	70% P205
2	台付甕形 土器 土師器	A 15.7 B (17.4)	脚台部は欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部には輪積痕を残し、頸部から外反して開く。	口縁部は外面が横ナデ、内面はハケ目整形で、外面には指頭痕が残る。胴部外面は荒いハケ目整形。	砂粒・スコリア 灰褐色 普通	90% P206

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第140図 3	台付甕形 土 器 土 師 器	A「15.0」 B(12.2)	脚台部は欠損。胴部は外傾して立ち上がり、中央部から内彎する。口縁部は頸部から外反して開く。	外面は荒いハケ目整形。内面は口縁部がナデ、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	40% P208 胴部外面に煤付着
4	甕形土器 土 師 器	A 17.1 B(20.6)	底部は欠損。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外反して開く。	口縁部は内・外面ともナデ整形。胴部は外面が篋ナデ整形、内面は剝離が著しく整形技法不明。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	60% P204
5	甕形土器 土 師 器	B(17.1)	胴部片。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	外面はハケ目整形。内面はナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	20% P207
6	小形甕形 土 器 土 師 器	A 12.9 B( 8.1)	口縁部から胴中央部にかけての破片。口縁部は頸部から外反して開く。	外面はナデ整形。内面は口縁部がナデ整形であるが、胴部は剝離が著しく整形技法不明。	砂粒 明赤褐色 普通	20% P209
第141図 7	小形甕形 土 器 土 師 器	A 10.8 B(14.1)	底部は欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	口縁部は内・外面ともナデ整形。胴部外面は篋ナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	60% P210
8	壺形土器 土 師 器	B(16.9) C 8.0	上げ底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位よりやや上に持つ。頸部以上は欠損する。	内・外面とも粗雑な篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	60% P211
9	高坏形土器 土 師 器	A「20.3」 B( 8.7)	脚部は欠損。坏部は内彎しながら大きく開く。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	30% P213
10	器台形土器 土 師 器	A「8.0」 B 8.5 D「9.0」	脚部は「ハ」の字状に開く。器受部は内彎気味に開く。接合部に中央孔を持つ。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒 明赤褐色 普通	60% P214

### 第32号住居跡（第142図）

本跡は、2次調査区のB5e<sub>9</sub>区を中心に確認された住居跡で、第31号住居跡の南西10mに位置している。

平面形は、長軸5.56m・短軸5.32mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-31°-Wを指している。床面積は26.4m<sup>2</sup>である。壁はロームで、壁高は8～22cmである。削平により湮滅状態の東壁を除いて、67～75度の角度で外傾して立ち上がっている。壁直下には、上幅16～35cm・深さ5～13cmの壁溝が全周している。床面は緩い起伏を呈し、締まりのあるロームである。ピットは、5か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端長径70～76cm・深さ66～101cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、本跡に伴う主柱穴と判断した。P<sub>5</sub>は補助的な機能を有する柱穴と思われる、規模は上端長径56cm・深さ30cmである。炉は、中央に確認された地床炉であるが大きく攪乱されており、東側にレンガ状の硬く焼き締まった部分が検出されただけである。貯蔵穴は、東コーナーの壁際に位置している。平面形は、長軸90cm・短軸70cmの不整長方形で、深さは42cmほどであ



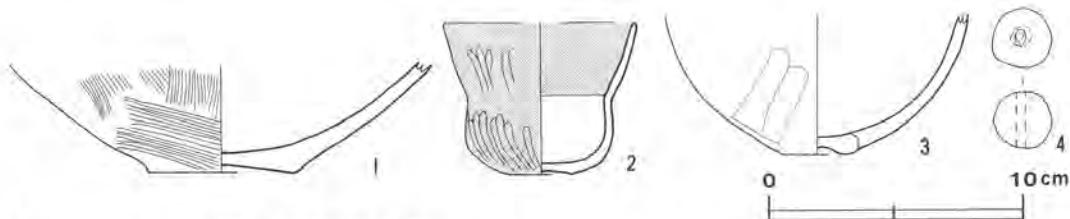
第142图 第32号住居跡実測図

る。貯蔵穴内には、少・中量のローム粒子、少量の焼土粒子を含む暗褐色土や暗赤褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、極めて浅いが、多量のローム粒子、中量の焼土粒子や炭化粒子を含む暗褐色土を主体とした締まりのある土層である。また、北西壁や南西壁の壁際から床面にかけて、多量の焼土粒子を含む暗赤褐色土、多量の焼土ブロックや中量の焼土粒子を含む極暗赤褐色土が堆積していることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、焼土を含む層の下に褐色土が堆積していることから、本跡廃絶後と思われる。

遺物は、土師器及びその破片124点、球状土錘1点が出土している。第143図2や3の埴形土器とその底部片は、北コーナー付近の焼土層中から出土したものである。1の甕形土器底部は西部の覆土から出土した破片を接合したものであり、4の球状土錘は北西部の覆土上層から出土したものである。このほかに、ハケ目が施された口縁部片及び胴部片が出土しているが、小破片であり図示することはできなかった。出土状況等から考えて、1～3が本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



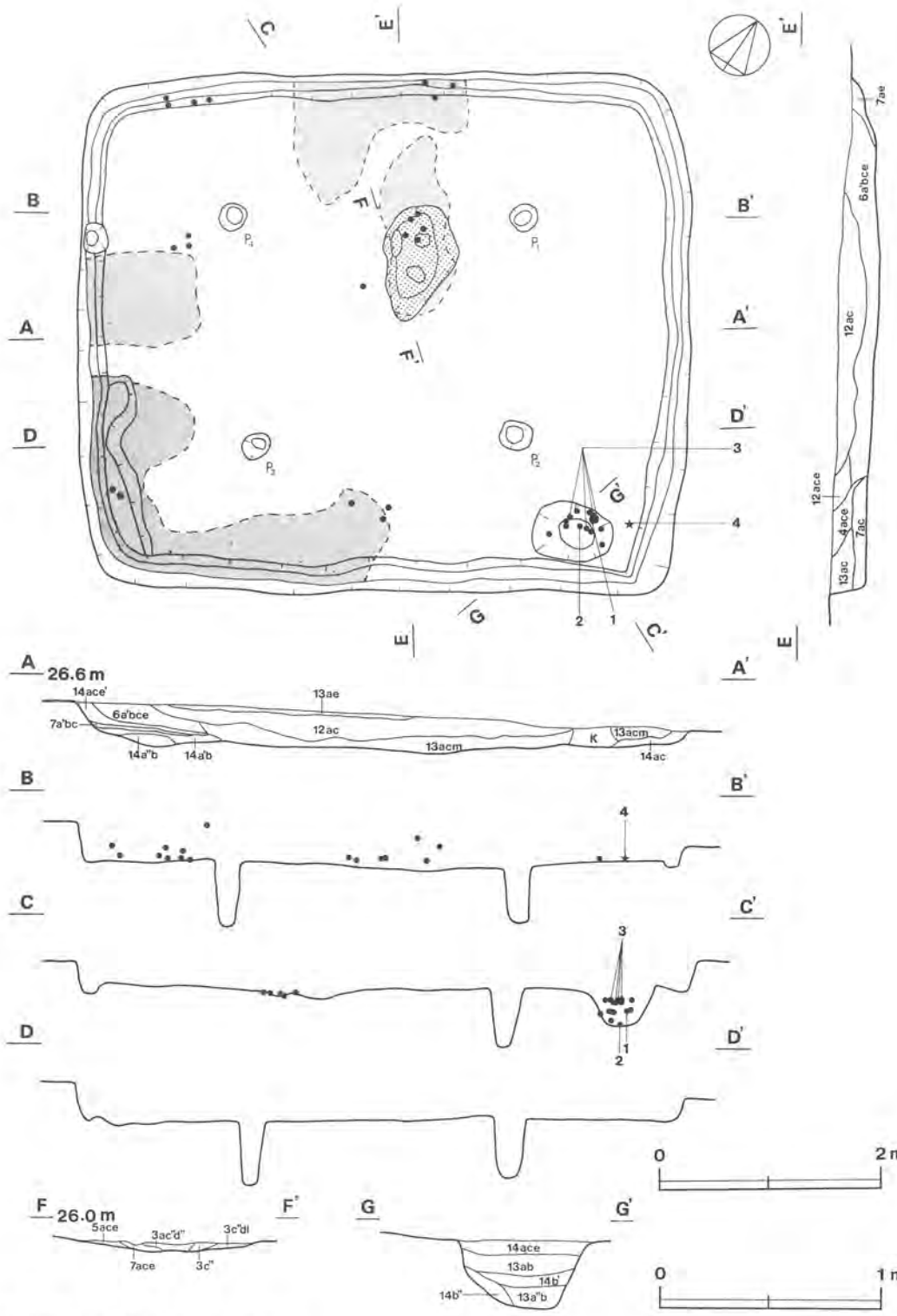
第143図 第32号住居跡出土遺物実測図

### 第32号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第143図 1	甕形土器 土師器	B (4.3) C 5.9	上げ底。胴部は内彎して立ち上がるが、中央部以上は欠損する。	外面はハケ目整形。内面は篋ナデ整形。	砂粒・バミス 灰褐色 普通	10% P218
2	埴形土器 土師器	A 「7.6」 B 6.1 C 2.5	上げ底。胴部は強く内彎して立ち上がり、口縁部は内面に稜を持つ頸部から、内彎気味に開く。	外面は篋磨き整形後、赤彩。内面は口縁部が横ナデ、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・バミス 橙色 普通	60% P216
3	埴形土器 土師器	B (5.6) C 2.6	上げ底。胴部は内彎して立ち上がるが、上半部以上は欠損する。	外面は篋ナデ整形。内面は剥離が著しく、整形技法不明。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P217

### 第33号住居跡 (第144図)

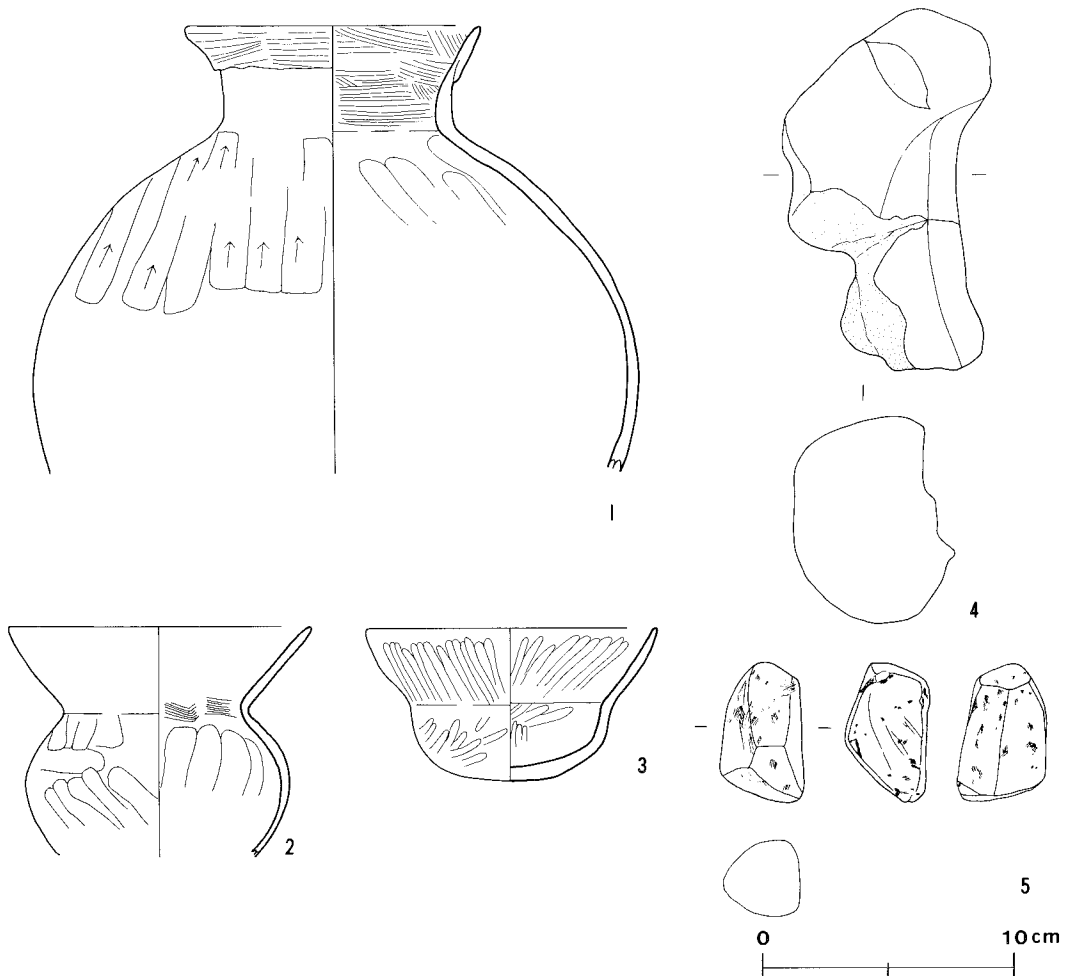
本跡は、2次調査区のB5d<sub>5</sub>区を中心に確認された住居跡で、第35号住居跡の北5m、第36号住居跡の北東10mに位置している。



第144图 第33号住居跡実測図



平面形は、長軸5.60m・短軸4.80mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-36°-Wを指している。床面積は24.3㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は9~36cmであるが、東壁はやや低くなっている。壁直下には、上幅14~22cm・深さ3~20cmの壁溝が全周している。床面は皿状を呈し、締まりのあるロームである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径26~32cm・深さ53~61cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を9cmほど掘り下げた地床炉で、中央から90cmほど北側に確認され、平面形は、長径109cm・短径70cmの楕円形状である。炉内には、多量の焼土粒子を含む赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、東コーナー付近の壁際に位置している。平面形は、長軸75cm・短軸55cmの長形状で、深さは34cmほどである。貯蔵穴内には、少量のローム粒子、少・中量のローム小ブロック等を含む褐色土や暗褐色土がレンズ状に堆積している。



第145図 第33号住居跡出土遺物実測図

覆土は、上層に少量のローム粒子を含む極暗褐色土、下層に少量のローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。また、北西壁や南西壁、及び南コーナー付近の壁際から床面にかけて、焼土ブロック、多量の焼土粒子、少量の炭化材を含む暗赤褐色土が堆積していることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、焼土を含む層の下に褐色土が堆積していることから、本跡廃絶後と思われる。

遺物は、土師器及びその破片218点、土製支脚1点、浮子1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片5点が出土している。第145図1の壺形土器は東コーナー付近の貯蔵穴の上層に潰れた状態で、2の埴形土器は貯蔵穴の底面より出土したものである。3の埴形土器は貯蔵穴の上層から出土した破片を接合したもので、4の支脚は1の出土地点に近接した床面から出土したものである。また、5の浮子は南部の覆土から出土したもので、本跡との関係は不明である。このほかに、炉内から赤彩が施された小破片、貯蔵穴内からハケ目の施された口縁部片や胴部片が出土しているが、小破片であり図示することはできなかった。出土状況等から考えて、1～4が本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

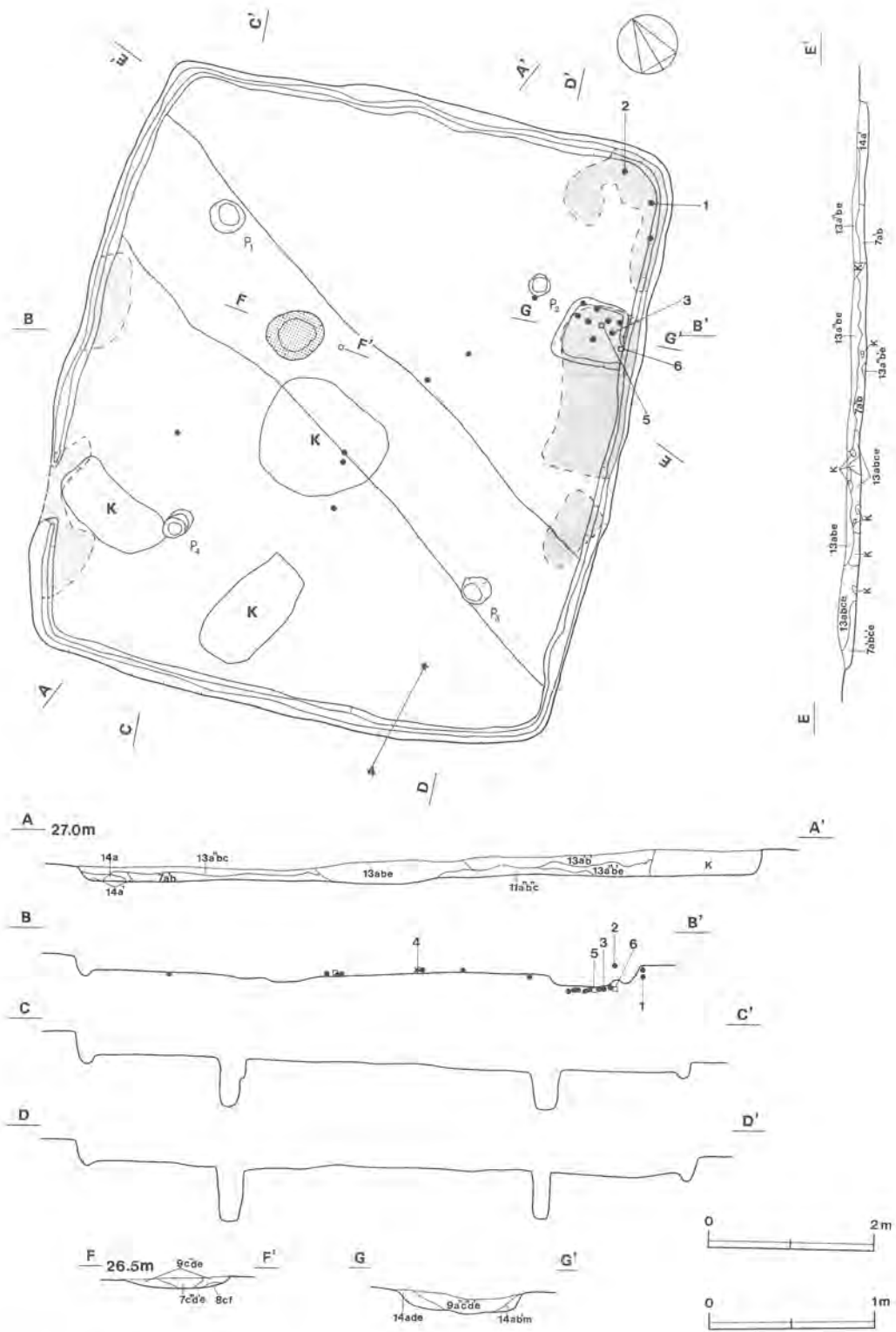
第33号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第145図 1	壺形土器 土師器	A 11.8 B (18.0)	胴下半部以下は欠損。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は外傾して開き複合口縁となる。	外面は口縁部がハケ目、頸部及び胴部は篋ナデ整形。内面は口頸部がハケ目、胴部は粗雑な篋ナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	50% P219
2	埴形土器 土師器	A 12.0 B (9.2)	底部は欠損。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	内・外面とも口縁部は横ナデ、以下は篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	60% P220
3	埴形土器 土師器	A 11.7 B 6.1	丸底。胴部は底部と共に内彎して立ち上がる。口縁部は頸部から内彎して開く。	内・外面とも丁寧な篋磨き整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	75% P221

### 第36号住居跡（第146図）

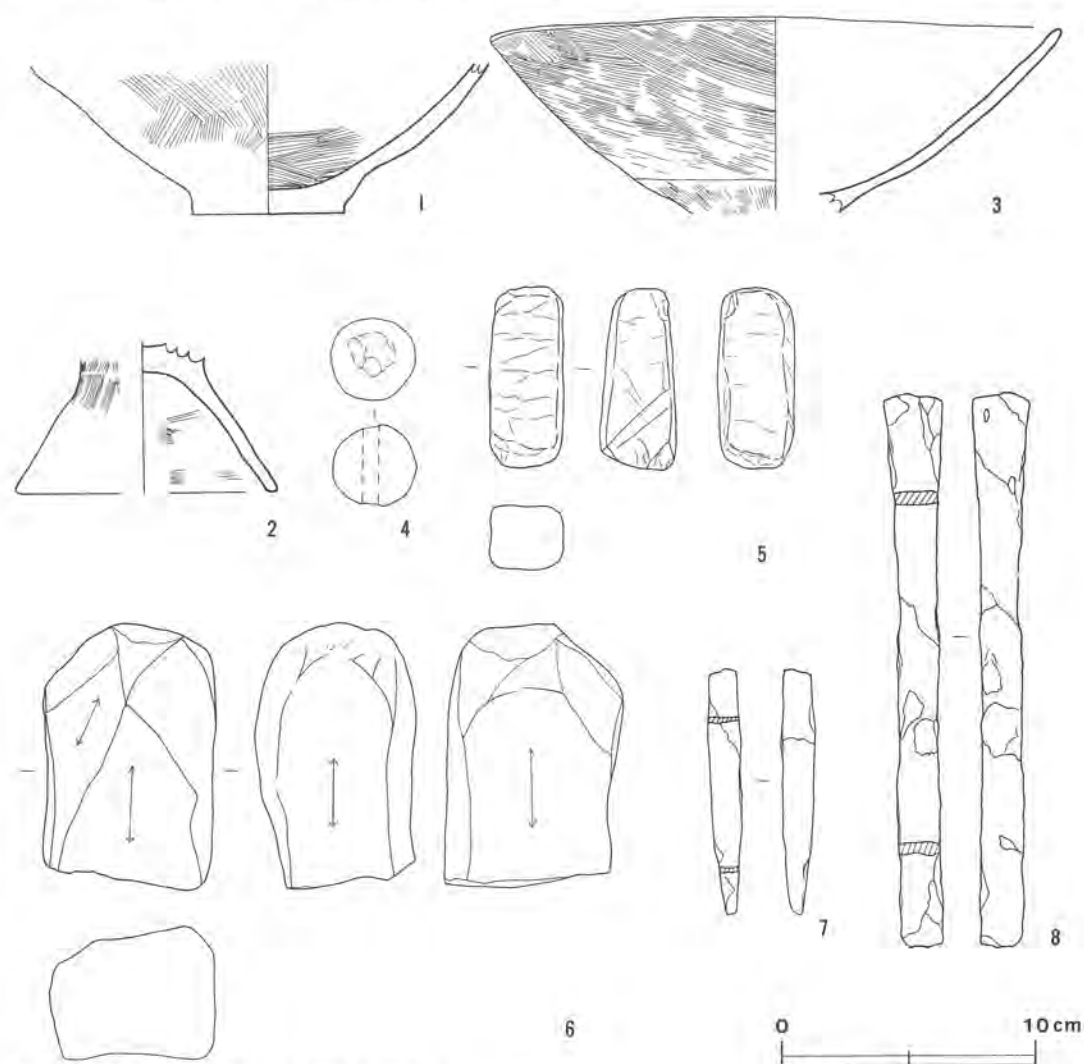
本跡は、2次調査区のB5g<sub>3</sub>区を中心に確認された住居跡で、第33号住居跡の南西10mに位置している。

平面形は、長軸7.66m・短軸6.66mの長方形を呈し、主軸方向はN-44°-Wを指している。床面積は47.3㎡である。壁はロームで、壁高は8～32cmである。南西壁はほぼ垂直に、ほかは60～80度の角度で外傾して立ち上がっている。壁直下には、上幅13～22cm・深さ6～10cmの壁溝が、西壁下で60cmほど切れるほかは全周している。床面は緩やかな起伏を呈する締まりのあるロームで



第146图 第36号住居跡実測図

あるが、本跡内を南北方向に走る道路状遺構に切られている。道路状遺構は、上幅102cm・深さ5cmほどの皿状を呈するものであり、底面は非常に硬く締まっている。時期的には、本跡より新しい時期のものである。ピットは、4本検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径28~40cm・深さ48~67cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を6cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.1mほど北側に確認され、平面形は、長径69cm・短径57cmの楕円形である。炉内には、多量の焼土粒子、小・中量の焼土ブロックを含む暗赤褐色土や赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、東壁際に位置している。平面形は、長軸80cm・短軸77cmの方形状で、深さは16cmほどである。貯蔵穴内には、多量の焼土粒子や中量のローム小・中ブロック等を含むにぶい赤褐色土、小・中量のロームブロック等を含む褐色土が堆積している。



第147図 第36号住居跡出土遺物実測図

覆土は、攪乱されている部分も一部にみられるが上層に少～多量のローム粒子やローム小ブロックを含む暗褐色土、下層に少～多量のローム粒子やローム小ブロック等を含む暗赤褐色土、黒褐色土が堆積している。また、南東壁や東コーナー、及び西コーナーの壁際から床面にかけて、中・多量の焼土粒子や焼土ブロックを含む暗赤褐色土、極暗赤褐色土が堆積していることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は不明である。

遺物は、土師器及びその破片129点、球状土錘1点、砥石2点、鉄製品2点が出土している。第147図3の高坏形土器坏部は、貯蔵穴の底面に正位の状態出土したものである。1の甕形土器胴下半部は東コーナー付近の床面から出土した破片を接合したものであり、2の台付甕形土器脚台部は1と近接した位置の床面から出土したものである。4の球状土錘は南部の床面から、5と6の砥石は貯蔵穴から出土したものである。7と8の鉄製品は西部の覆土から出土したもので、本跡との関係は不明である。出土状況から考えて、1～6が本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

第36号住居跡出土土器観察表

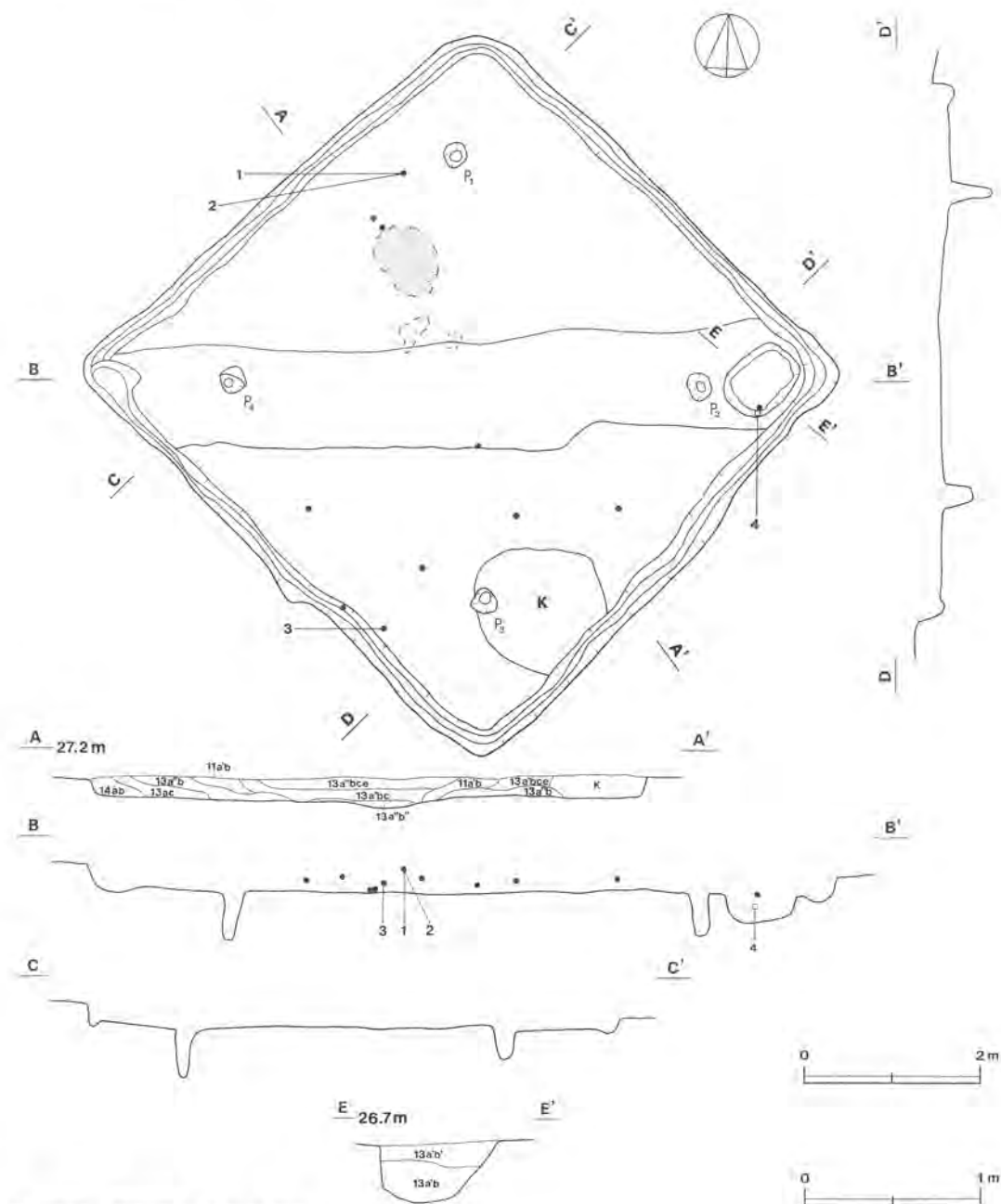
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第147図 1	甕形土器 土師器	B (6.0) C 6.0	突出した平底。胴部は内彎して立ち上がるが、中央部以上は欠損する。	内・外面ともハケ目整形。	砂粒・パミス 褐色 普通	10% P229
2	台付甕形土器 土師器	B (6.1) D「10.5」	脚台部片。脚台部は「ハ」の字状に開く。	外面はハケ目整形。内面はナデ整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	10% P230
3	高坏形土器 土師器	A 22.8 B (7.7)	脚部は欠損。坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾して大きく開く。	外面はハケ目整形後、部分的にナデ。内面は筥ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	50% P228

### 第39号住居跡（第148図）

本跡は、2次調査区のC5b<sub>8</sub>区を中心に確認された住居跡で、第15号住居跡の北西5.5mに位置している。

平面形は、長軸6.30m・短軸6.20mの方形を呈し、主軸方向はN-46°-Wを指している。床面積は36.2㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は5～28cmである。壁直下には、上幅14～30cm・深さ5～8cmの壁溝が全周している。床面は、平坦で締まりのあるロームであるが、南コーナー付近は攪乱されている。また、本跡内を東西方向に走る道路状遺構に切られている。道路状遺構は、上幅104～130cm・深さ5cmほどの皿状を呈するもので、底面は非常に硬く締まっている。第36号住居跡内に検出されたものと形状や規模の点で極めて共通性が高く、

時的には本跡より新しい時期のものである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端直径25～28cm・深さ35～56cmの円筒形で、底面は平坦である。形状や規模、方形に配置されていることなどから、本跡に伴う主柱穴と判断した。炉と推定される焼土範囲は、中央から1.5mほど北西側に確認され、床面に部分的な焼土ブロックが認められるほどである。貯蔵穴は、東コーナーの壁際に位置している。平面形は、長軸89cm・短軸56cmの隅丸方形で、深さは33cmほどである。

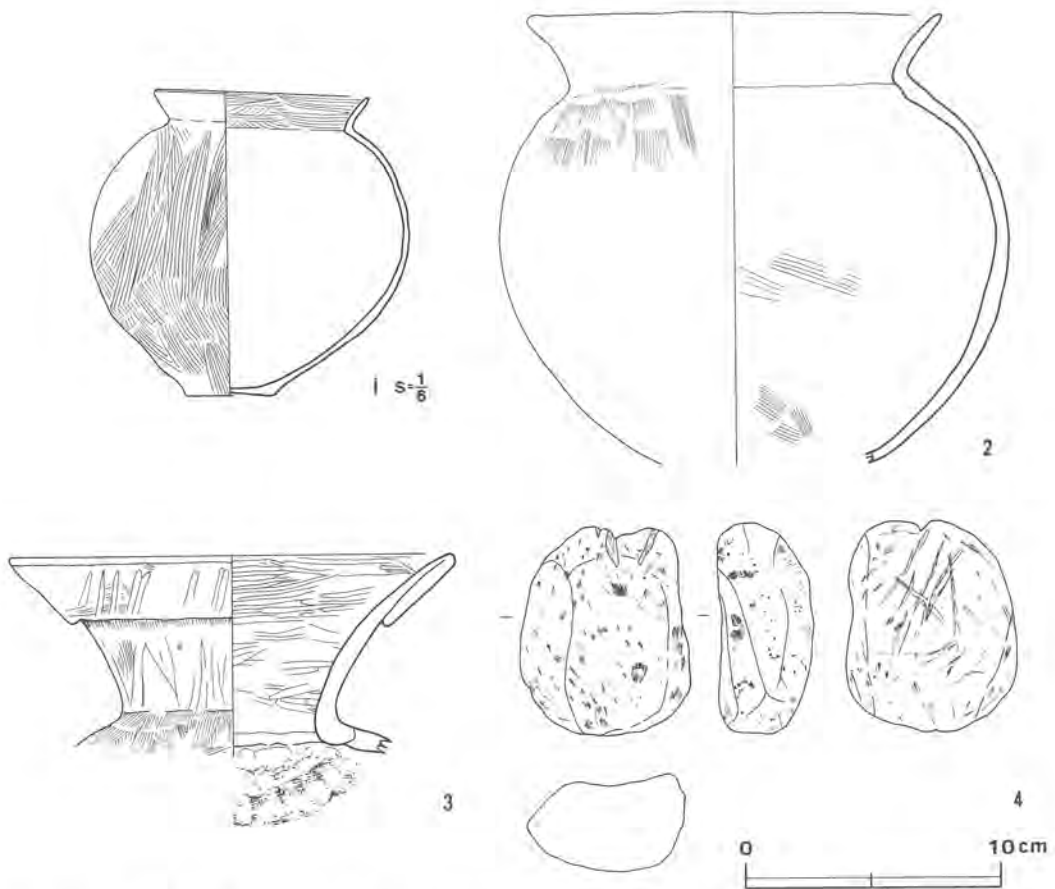


第148図 第39号住居跡実測図

覆土は、上層に多量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含む暗褐色土、下層に少～多量のローム粒子やローム小ブロックを含む暗褐色土、壁際に中・多量のローム粒子を含む褐色土が堆積している。一部攪乱されているがいずれも締まりのある土層であり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

遺物は、土師器及びその破片231点、浮子1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片3点が出土している。第149図1や2の甕形土器は、北西部の床面に潰れた状態で出土した破片を接合したものである。3の壺形土器口頸部は、南コーナー付近の壁際の床面から出土したものである。4の浮子は貯蔵穴の覆土上層から出土したものである。出土状況等から考え、1～4が本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

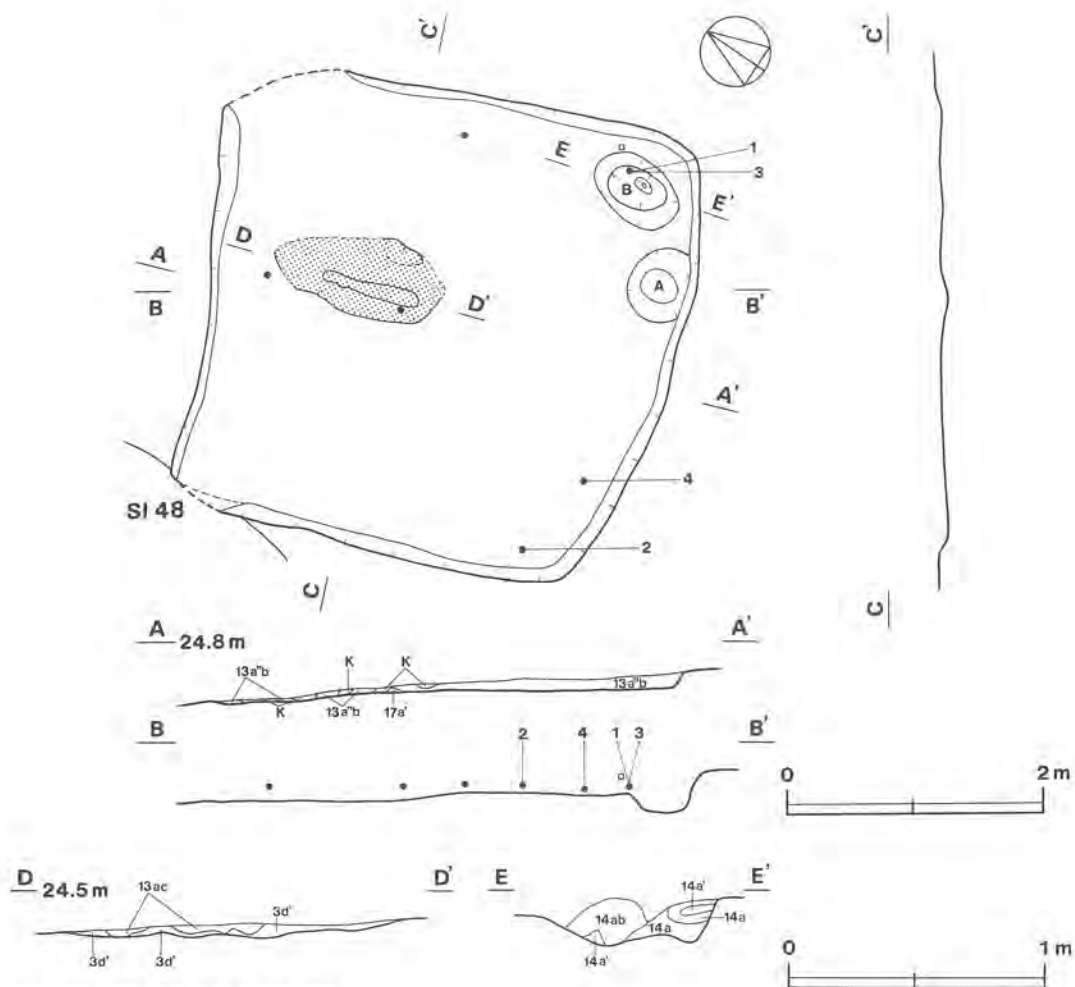


第149図 第39号住居跡出土遺物実測・拓影図

第39号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第149図 1	甕形土器 土師器	A 17.2 B 24.6 C 7.1	上げ底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	外面はハケ目整形。内面は口縁部がハケ目、胴部はナデ整形。	砂粒・パミス 褐灰色 普通	50% P240
2	甕形土器 土師器	A 16.6 B (18.1)	底部は欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外反して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。胴部は内外面ともハケ目整形後にナデ。	砂粒・スコリア 褐灰色 普通	60% P241
3	壺形土器 土師器	A 17.8 B (8.0)	胴部は欠損。口縁部は複合口縁で、頸部から強く外反して開く。	内・外面とも篋磨き整形であるが、ハケ目痕が部分的に残る。	砂粒 にふい橙色 普通	20% P242

第46号住居跡 (第150図)

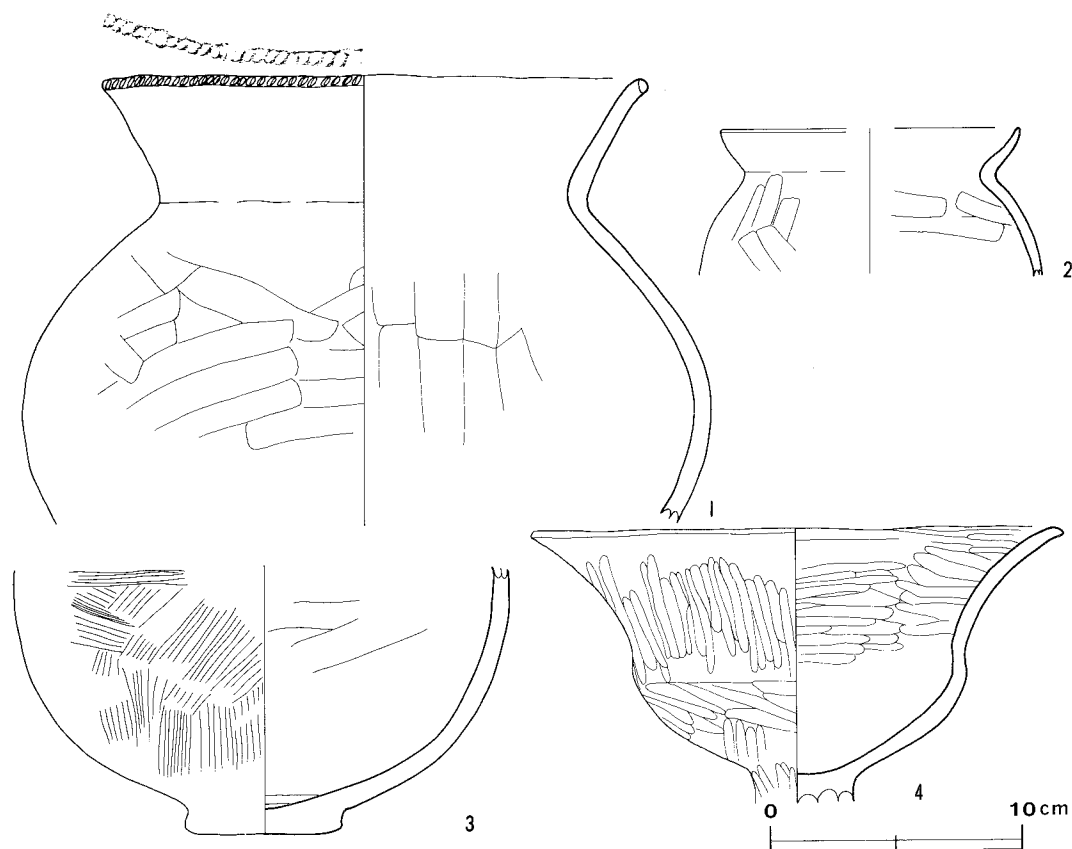


第150図 第46号住居跡実測図



本跡は、2次調査区のB12i<sub>9</sub>区を中心に確認された住居跡で、第75号住居跡の北東10.5m、第47号住居跡の西11.5mに位置している。本跡は北西コーナーで第48号住居跡と重複しているが、壁が切られていることや出土遺物などから、本跡の方が古い時期の遺構と思われる。

平面形は、長軸3.82m・短軸3.70mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-25°-Wを指している。床面積は12.3㎡である。壁はロームで、壁高は2~12cmである。北西や北東コーナーは、重複や削平により湮滅しているが、ほかは65度前後の角度で緩やかに立ち上がっている。床面は緩やかな起伏を呈する締まりのあるロームで、炉と貯蔵穴の間は硬く踏み固められている。ピットは検出されなかった。炉は、床面を6cmほど掘り下げた地床炉で、中央から70cmほど北側に確認され、平面形は、長径136cm・短径64cmの楕円形状である。炉内には、多量の焼土粒子を含む赤褐色土が堆積しており、炉床もレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南東コーナー付近に2か所（A・B）検出された。Aの平面形は、長径59cm・短径50cmの楕円形で、内部に暗褐色土や褐色土がレンズ状に堆積している。Bの平面形は、長径73cm・短径41cmの楕円形で、内部に第151図1の甕形土器が正位の状態で検出された。土層観察から、褐色土と暗褐色土が交互に堆積していることが確認されており、胴下半部の欠損している甕形土器を埋設して使用したものと思われる。



第151図 第46号住居跡出土遺物実測・拓影図

覆土は、単一層で、多量のローム粒子や少量のロームブロックを含む暗褐色土が堆積しているが、一部攪乱されている。

遺物は、土師器及びその破片37点が出土している。第151図1と3の甕形土器は貯蔵穴内に正位の状態で出土したものであり、2の甕形土器口縁部や4の高環形土器は、南西コーナー付近の床面に横位の状態で出土したものである。出土状況等から考え、1～4は本跡に伴う遺物と思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

第46号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第151図 1	甕形土器 土師器	A 21.6 B (18.0)	胴下半部以下は欠損。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	内・外面とも口縁部はナデ、胴部は篋ナデ整形。口唇部に刻目が施されている。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	40% P286 胴部外面に煤付着
2	甕形土器 土師器	A 12.0 B (5.8)	口縁部から胴上半部にかけての破片。口縁部は頸部から内彎して開く。	内・外面とも口縁部はナデ、胴部は篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	10% P287
3	甕形土器 土師器	B (10.6) C 6.3	突出した平底。胴部は内彎して立ち上がるが、上半部以上は欠損する。	外面はハケ目整形。内面は篋ナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	20% P288
4	高環形土器 土師器	A 21.3 B (11.0)	脚部は欠損。坏部は内彎して立ち上がり、中位から強く外反して開く。	内・外面とも丁寧な篋磨き整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	60% P289

#### 第47号住居跡（第152図）

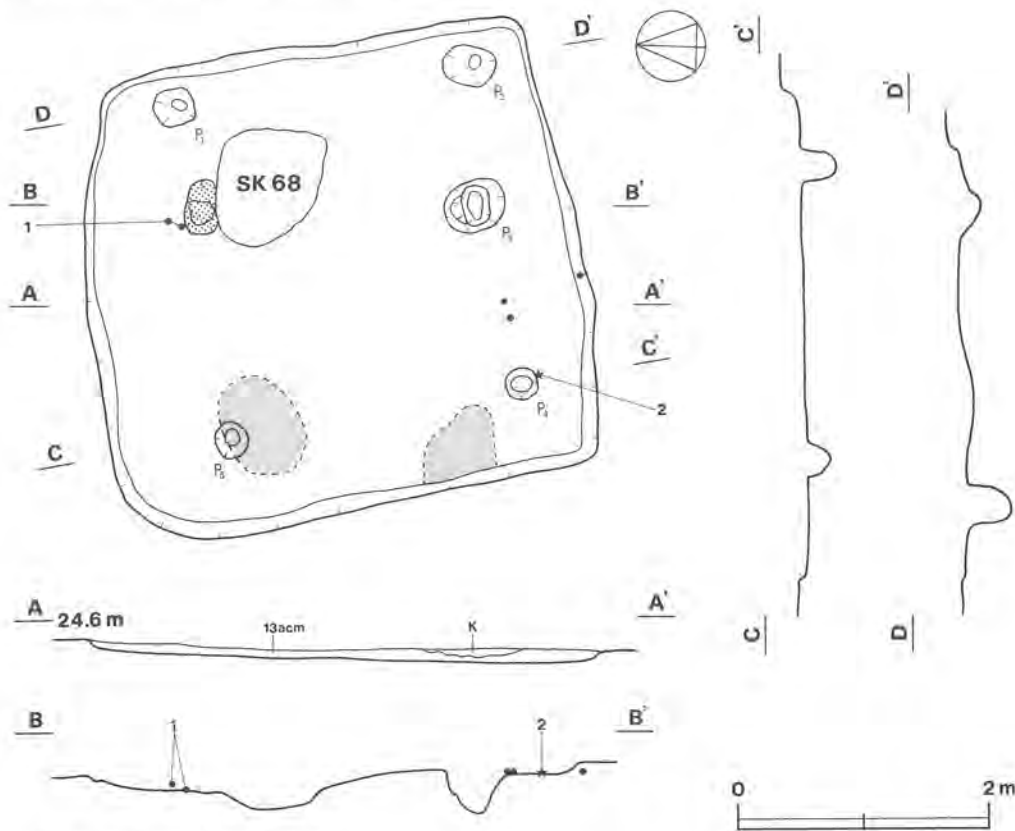
本跡は、2次調査区のB12i<sub>8</sub>区を中心に確認された住居跡で、第46号住居跡の東11.5mに位置している。本跡は北東側で第68号土坑と重複しているが、床面を切られていることから、本跡の方が古い時代の遺構と思われる。

平面形は、長軸3.94m・短軸3.76mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-11°-Wを指している。床面積は12.7m<sup>2</sup>である。壁はロームで、50度前後の角度で立ち上がっており、壁高は4～11cmである。床面は締まりのある平坦なロームで、中央部は硬く踏み固められている。ピットは、5か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>は、上端直径26～48cm・深さ22～34cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、5本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を4cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.1mほど北東側に確認された。平面形は、長径37cm・短径25cmの楕円形状で、炉床はレンガ状に焼き締まっている。

覆土は、一部攪乱されているが単一層であり、少量のローム粒子や焼土粒子を含む締まりのあ

る暗褐色土が堆積している。また、北西部の床面や南西壁際に多量の焼土粒子を含む暗褐色土が堆積していることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、焼土を含む層の下に中量のローム粒子等を含む暗褐色土が堆積していることから、本跡廃絶後と思われる。

遺物は、土師器及びその破片10点、用途不明の土製品1点が出土している。第153図1の壺形土器口頸部は、炉の北際の床面から出土した破片を接合したものである。2の土製品は楕円形状を呈するもので、南西コーナー付近の床面から出土したものである。出土状況等から考えて、1・2は本跡に伴うものと思われる。このほかに、ハケ目が施された甕形土器の胴部片が床面から出土しているが、小破片であり図示することができなかった。



第152図 第47号住居跡実測図

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第153図 第47号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第153図 1	壺形土器 土師器	A「12.6」 B (8.7)	胴部は欠損。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は外傾して開き複合口縁となる。	内・外面ともハケ目整形後、ナデ。	砂粒・パミス 橙色 普通	15% P290

第50号住居跡 (第154図)

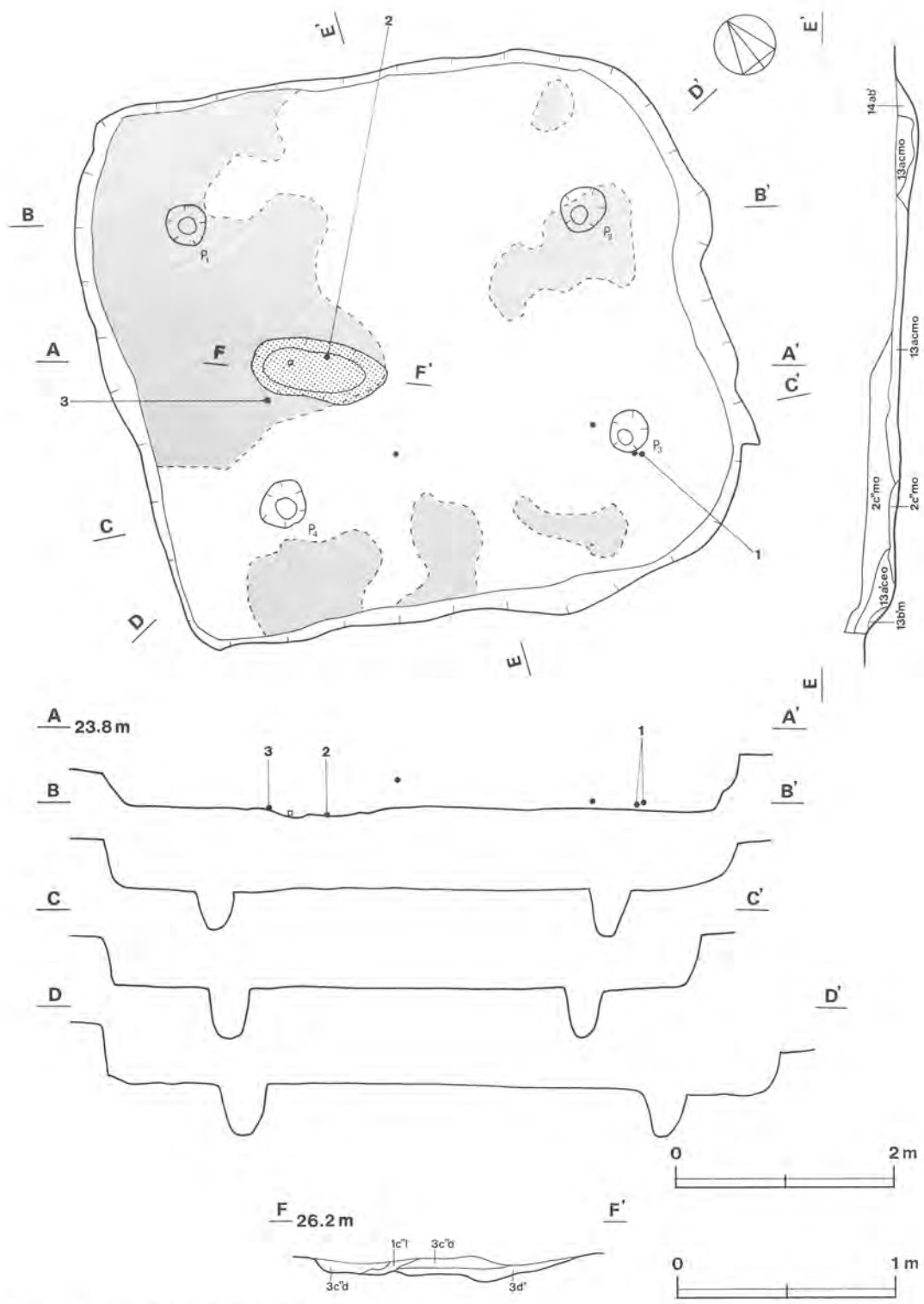
本跡は、2次調査区のB11e<sub>0</sub>区を中心に確認された住居跡で、第56号住居跡の北東13mに位置している。

平面形は、長軸5.58m・短軸5.16mの不整隅丸方形を呈し、主軸方向はN-63°-Wを指している。床面積は24.9m<sup>2</sup>である。壁はロームで、壁高は29~54cmである。南壁と北壁は30~40度の角度で緩やかに、ほかは70度前後の角度で外傾して立ち上がっている。床面は締まりのある平坦なロームで、中央部は硬く踏み固められている。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径36~41cm・深さ30~45cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を6cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.1mほど北西側に確認され、平面形は、長径126cm・短径58cmの楕円形状である。炉内には、中量の焼土ブロックや多量の焼土粒子を含む赤褐色土、多量の焼土粒子を含む極暗赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締められている。

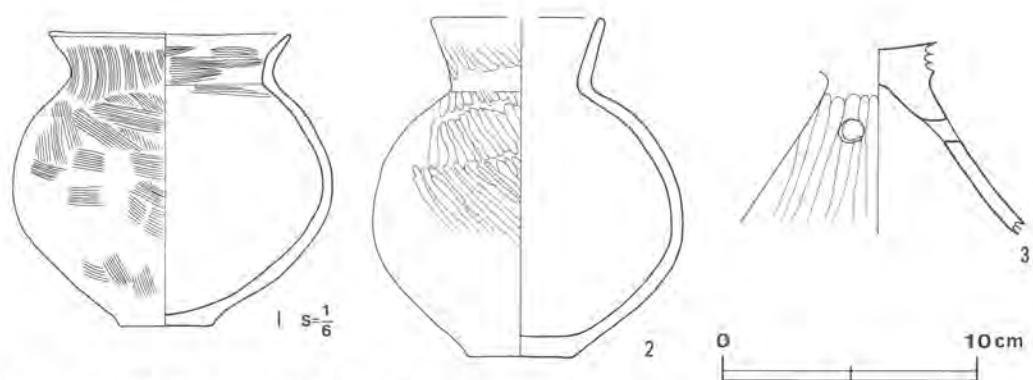
覆土は、上層に少量のローム粒子等を含む黒褐色土、下層に少量のローム粒子や焼土粒子等を含む暗褐色土、少量の炭化材や多量の焼土粒子を含む暗赤褐色土が堆積している。また、床面のほぼ全体に、多量の焼土粒子を含む赤褐色土や極暗赤褐色土が堆積しているほか、炭化材が検出されていることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、焼土を含む層の下に褐色土層がみられることから、本跡の廃絶後と思われる。

遺物は、土師器及びその破片40点が出土している。第155図1の甕形土器は、南東コーナー付近の床面に潰れた状態で出土した破片を接合したものである。2の小形壺形土器や3の高環形土器は、中央部の床面から出土したものである。出土状況等から考え、1~3は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第154图 第50号住居跡実測図



第155図 第50号住居跡出土遺物実測図

第50号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第155図 1	甕形土器 土師器	A 19.4 B 23.5 C 7.3	突出した平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	外面はハケ目整形。内面は口縁部がハケ目整形であるが、胴部は剣離が著しく、整形技法不明。	砂粒・バミス 黒褐色 普通	80% P317
2	小形壺形 土器 土師器	A 「6.9」 B 13.6 C 4.2	平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	外面は口縁部が横ナデ、頸部及び胴部は篋磨き整形。内面は口縁部が横ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	95% P318
3	高坏形土器 土師器	B (7.7)	脚部片。脚部は上位に3孔が穿たれ、「ハ」の字状に開くが裾部は欠損する。	外面は篋磨き整形。内面はナデ整形。	砂粒・バミス 明褐色 普通	30% P320

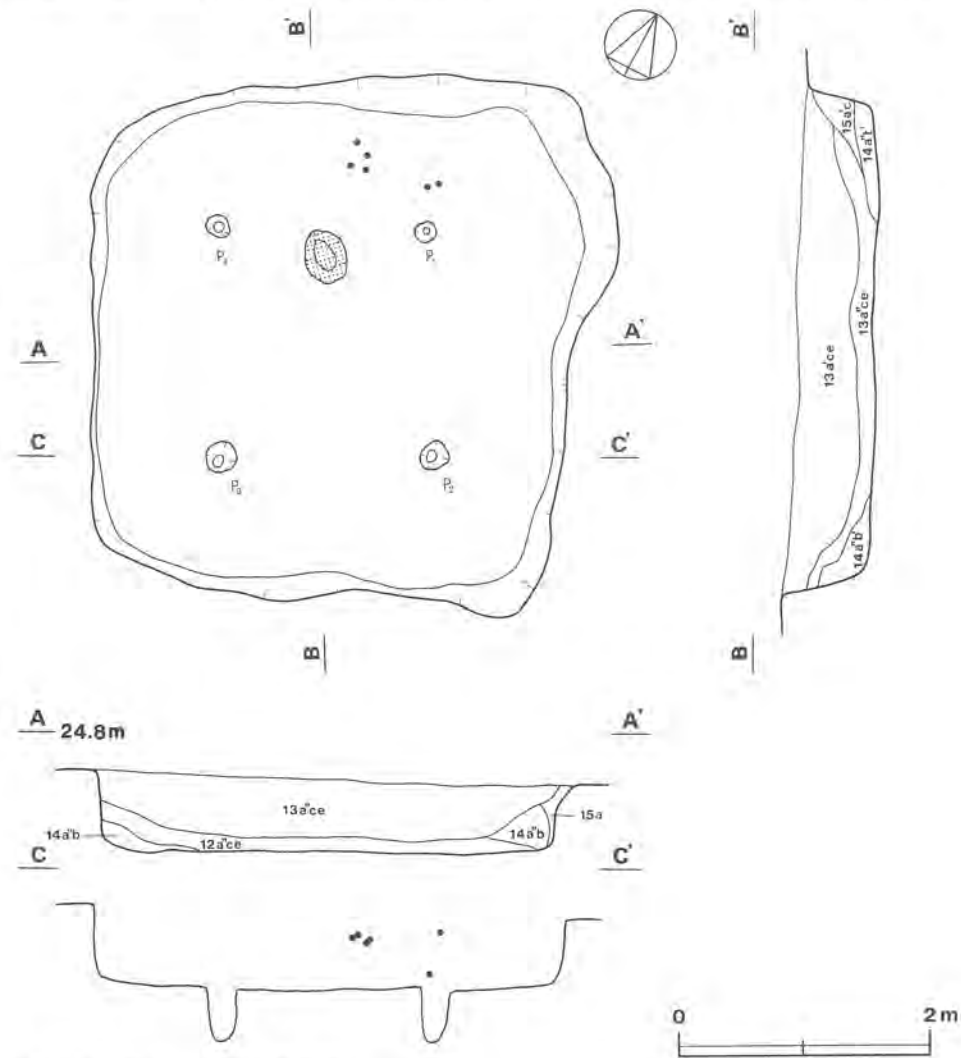
### 第52号住居跡（第156図）

本跡は、2次調査区のB11h<sub>9</sub>区を中心に確認された住居跡である。

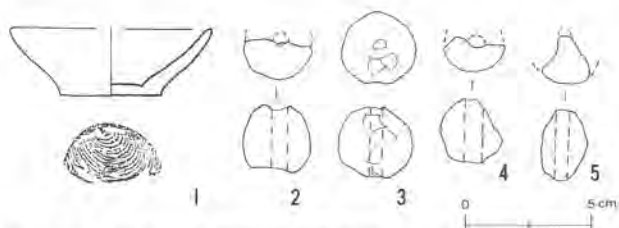
平面形は、長軸4.08m・短軸3.80mの不整隅丸方形を呈し、主軸方向はN-26°-Wを指している。床面積は13.2㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は23~59cmである。床面はほぼ平坦なロームで、全体的に硬く踏み固められている。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径18~26cm・深さ34~44cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を5cmほど掘り下げた地床炉で、中央から90cmほど北西側に確認された。平面形は、長径45cm・短径33cmの楕円形で、炉床はあまり硬く焼き締まっていない。

覆土は、上層に多量のローム粒子等を含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子等を含む極暗褐色土、壁際に多量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含む褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層で、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

遺物は、土師器片65点、球状土錘4点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片3点、土師質土器1点が出土している。第157図1の土師質土器(皿)や2~5の球状土錘は覆土からの出土であり、本跡との関係は不明である。このほかに、古墳時代前期と考えられるハケ目の施された甕形土器の胴部片や同中期と考えられる高環形土器の脚部片等が出土しているが、覆土中から



第156図 第52号住居跡実測図



第157図 第52号住居跡出土遺物実測・拓影図

であり本跡の時期を決定する手掛りとはならない。

本跡は、遺物の出土状況等から正確な時期は不明であるが、炉が中央よりやや北西側に寄って位置するなど遺構の形態が当遺跡における古墳時代前期

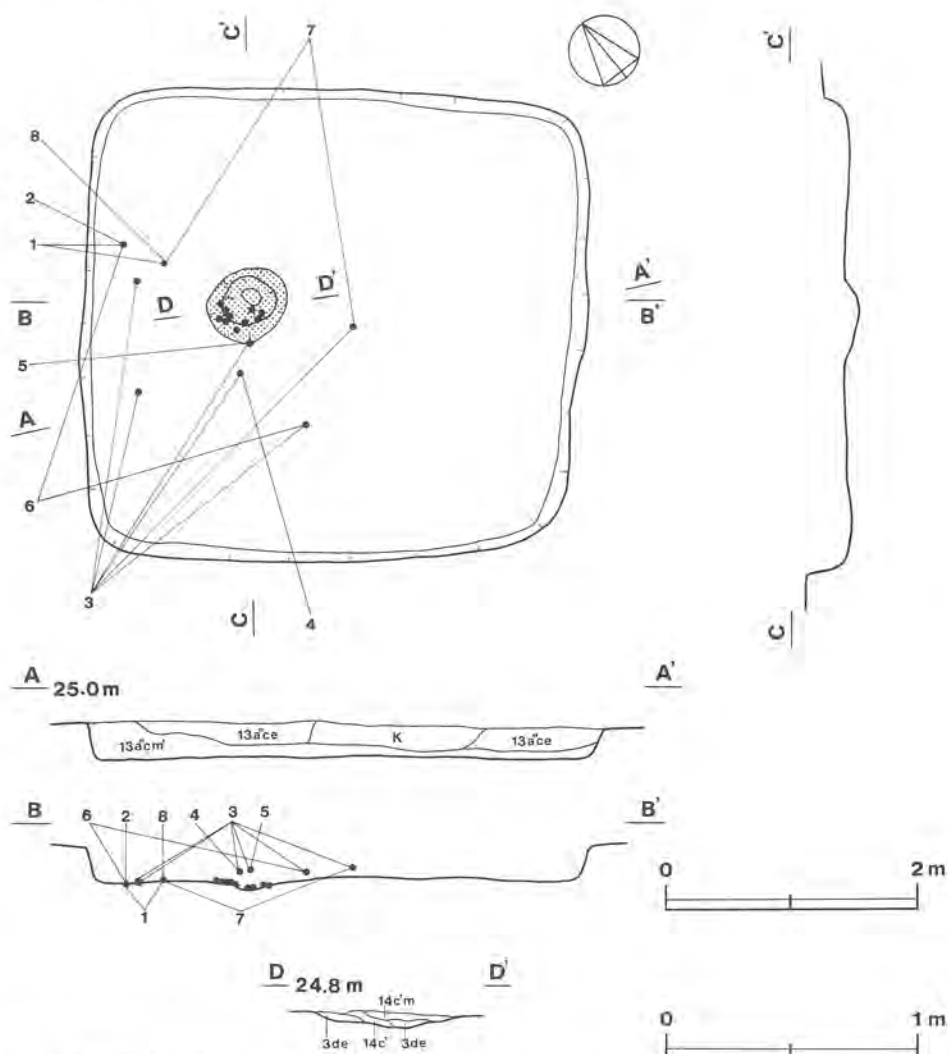
の一般的な特徴を示していることから、古墳時代前期の住居跡と推定される。

### 第52号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第157図 1	皿 土師質土器	A「8.0」 B「2.7」 C「4.0」	平底。体部は器厚を減しながら内彎気味に開く。口唇部は丸みを帯びている。	水挽き成形。内・外面とも横ナデ整形。底部は回転糸切り。	細砂 橙色 普通	30% P340

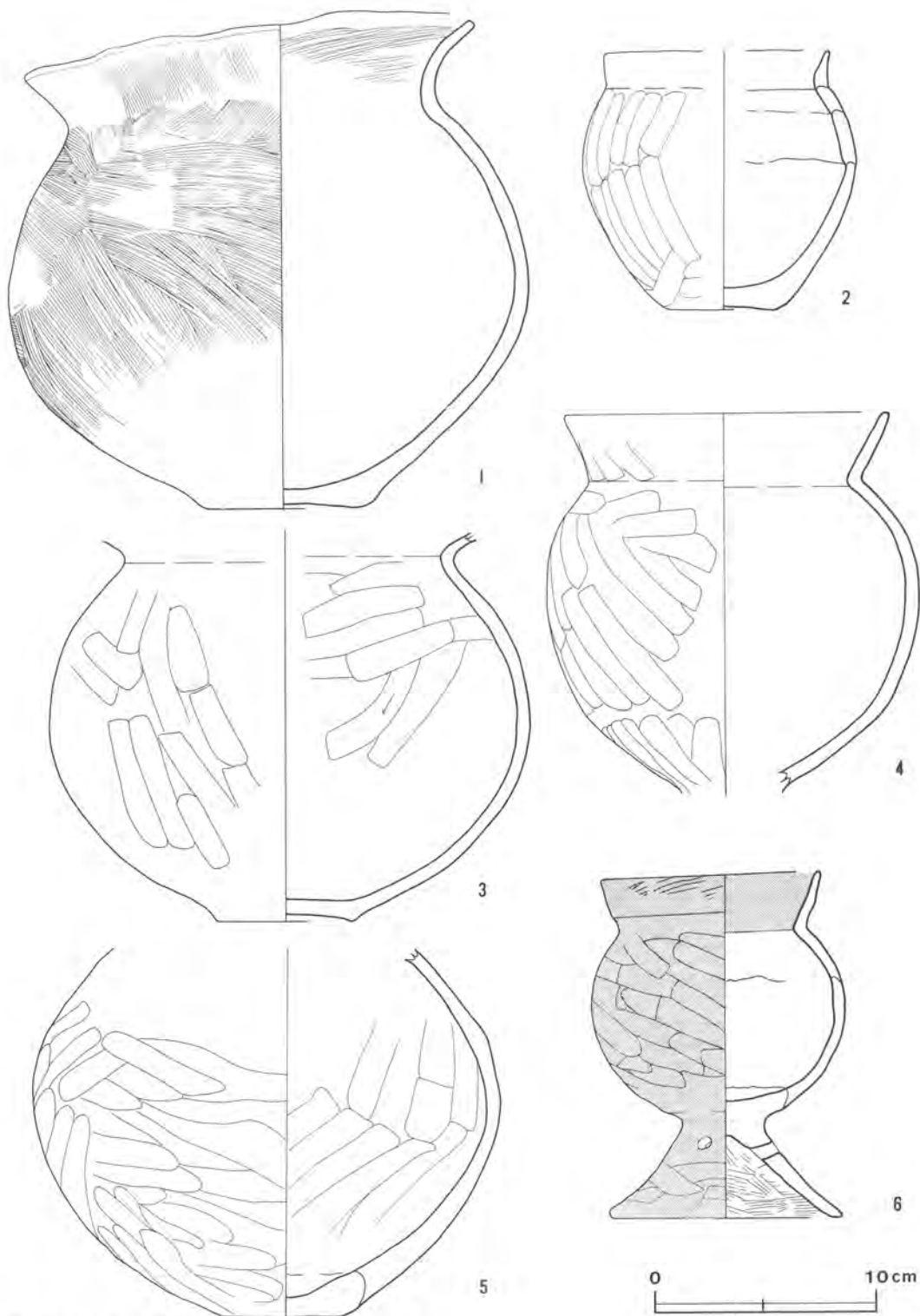
### 第56号住居跡 (第158図)

本跡は、2次調査区のB11h<sub>0</sub>区を中心に確認された住居跡で、第50号住居跡の南西13mに位置している。



第158図 第56号住居跡実測図





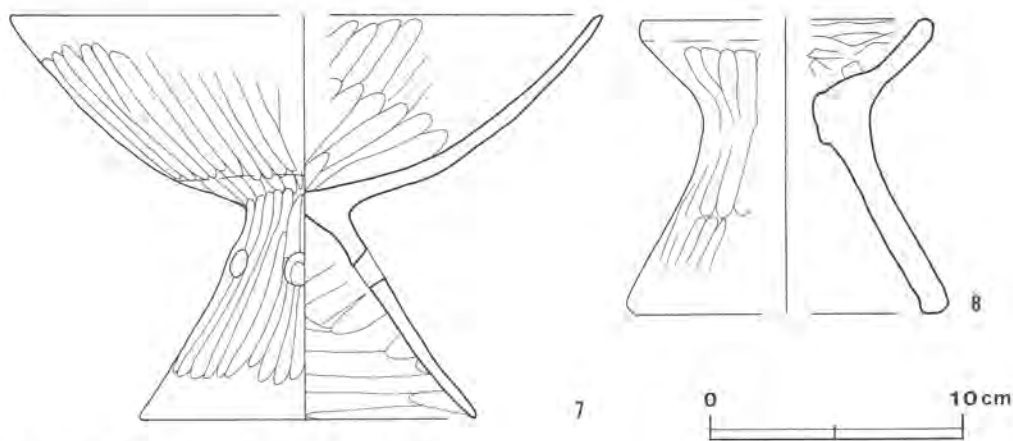
第159図 第56号住居跡出土遺物実測図-1

平面形は、長軸4.02m・短軸3.78mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-47°-Wを指している。床面積は13.2㎡である。壁はロームで、70度前後の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は16~32cmである。床面は緩やかな起伏を呈するロームで、全体的に硬く踏み固められている。ピットは、検出されなかった。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、中央から80cmほど北西側に確認され、平面形は、長径65cm・短径56cmの楕円形である。炉内には、中量の焼土粒子を含む褐色土や多量の焼土粒子を含む赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、一部攪乱されているが暗褐色土層であり、上層に多量のローム粒子、下層に多量のローム粒子や炭化材を含んでいる。覆土下層に多量の炭化材を含んでいることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、床面に多量の炭化材や焼土が検出されていることから、居住期間中と考えられる。

遺物は、土師器及びその破片8点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片4点が出土している。第159・160図1の甕形土器や2の小形甕形土器は北西壁付近の床面から出土した破片を、3の甕形土器や7の高坏形土器は中央部と北西壁付近の床面から出土した破片を接合したものである。4の台付甕形土器や5の壺形土器は中央部の床面に正位・横位の状態で、6の脚付壺形土器は横位の状態で出土したものである。8の器台形土器は、北西壁付近の床面から潰れた状態で出土した破片を接合したものである。出土状況等から考えて、1~8は本跡に伴う遺物と思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第160図 第56号住居跡出土遺物実測図-2

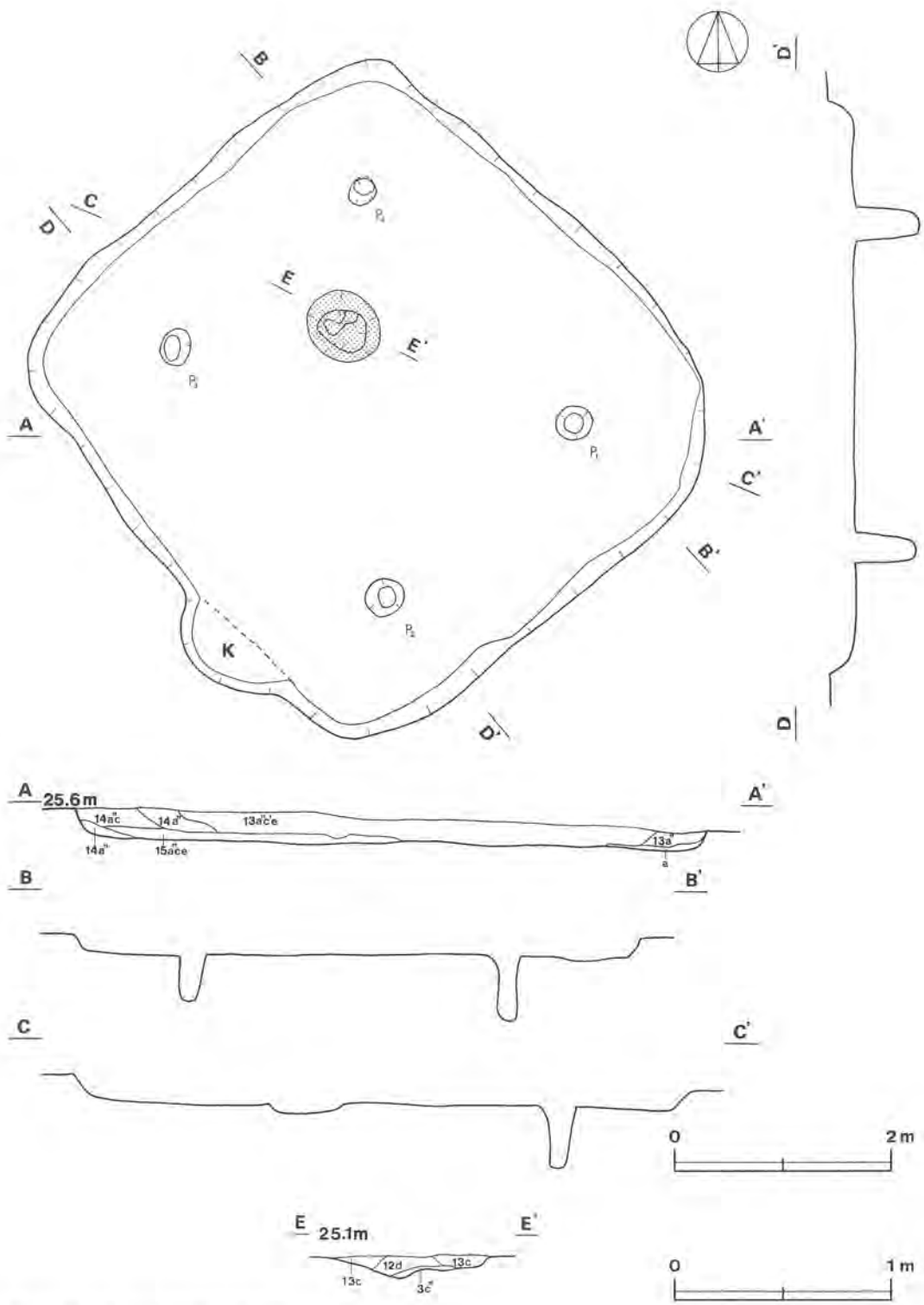
### 第56号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第159図 1	甕形土器 土師器	A 20.6	上げ底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	外面はハケ目整形。内面は口縁部がハケ目、胴部はナデ整形。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	60% P341
		B 22.5				
		C 7.5				
2	小形甕形土器 土師器	A「10.4」	上げ底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は頸部から直立気味に開く。	口縁部は内・外面ともナデ整形。胴部は外面が篋ナデ整形であるが、内面は剝離が著しく整形技法不明。	砂粒・バミス 明赤褐色 普通	50% P344
		B 12.0				
		C 5.0				
3	甕形土器 土師器	B (17.9)	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に立ち上がるが、上位は欠損する。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・スコリア 褐色 普通	40% P342
		C 6.5				
4	台付甕形土器 土師器	A 14.9	脚台部は欠損。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	60% P346 胴部外面に煤付着
		B (17.4)				
5	壺形土器 土師器	B (17.0)	平底。胴部は内彎して立ち上がり、球形状を呈する。頸部以上は欠損する。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	70% P343
		C 6.0				
6	脚付壺形土器 土師器	A 10.1	脚部は上位に3孔が穿たれ、「ハ」の字状に開く。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	外面は口縁部及び胴部がハケ目整形後にナデ、脚部は篋ナデ整形。内面は口縁部及び胴部がナデ、脚部はハケ目整形。外面及び口縁部内面は赤彩。	砂粒・バミス 赤色 普通	90% P345
		B 16.0				
		D 10.7				
第160図 7	高坏形土器 土師器	A「23.6」	脚部は上位に4孔が穿たれ、「ハ」の字状に開く。坏部は下位に弱い稜を持ち、内彎気味に大きく開く。口唇部は内削ぎを呈する。	外面は篋磨き整形。内面は坏部が篋磨き、脚部は篋ナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	70% P347
		B 16.2				
		D 13.4				
8	器台形土器 土師器	A「11.7」	脚部は「ハ」の字状に開くが、裾部末端で内傾する。器受部は内彎気味に開く。接合部に中央孔を持つ。	器受部は内・外面とも篋ナデ整形。脚部は外面が篋ナデ整形、内面は剝離が著しく整形技法不明。	砂粒・バミス 褐色 普通	40% P348
		B 11.8				
		D「12.6」				

### 第66号住居跡（第161図）

本跡は、2次調査区のB10d<sub>3</sub>区を中心に確認された住居跡で、第67号住居跡の北西1.5m、第69号住居跡の南東9.5mに位置している。

平面形は、長軸5.24m・短軸4.86mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-40°-Wを指している。床面積は22.3㎡である。壁はロームで、60～70度の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は15～23cmである。床面は締まりのある平坦なロームで、炉の周囲を中心とした中央部は硬く踏み固められている。ピットは、4本検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端直径24～32cm・深さ43～62cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、中央から70cmほど北側に確認され、平面形は、長径

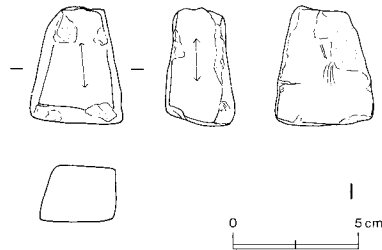


第161图 第66号住居跡実測図

72cm・短径64cmの楕円形である。炉内には、少量の焼土粒子を含む暗褐色土、中量の焼土粒子や少量の焼土ブロックを含む極暗褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、中央部に多量のローム粒子や少・中量の焼土粒子等を含んだ暗褐色土、壁際に多量のローム粒子を含む褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、自然堆積と考えられる。

遺物は、土師器片237点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点、砥石1点（第162図1）が出土している。本跡に伴うと思われる遺物はハケ目が施された甕形土器の口縁部や胴部片であるが、小破片であり図示することはできなかった。



第162図 第66号住居跡出土遺物  
実測図

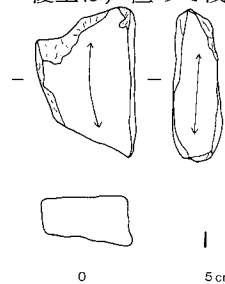
本跡は、出土遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の住居跡と推定される。

#### 第67号住居跡（第164図）

本跡は、2次調査区のB10f<sub>9</sub>区を中心に確認された住居跡で、第66号住居跡の南東1.5mに位置している。

平面形は、長軸5.50m・短軸4.68mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-16°-Eを指すと思われる。床面積は23.4㎡である。壁はロームで、西壁が削平により湮滅しているほかは緩やかな立ち上がりで、壁高は4～6cmである。床面はロームで中央部が硬く踏み固められているが、北側に向かって緩く傾斜している。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端直径22～32cm・深さ16～23cmである。やや小規模ではあるが、方形に配置されていることから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉や貯蔵穴は、検出されなかった。

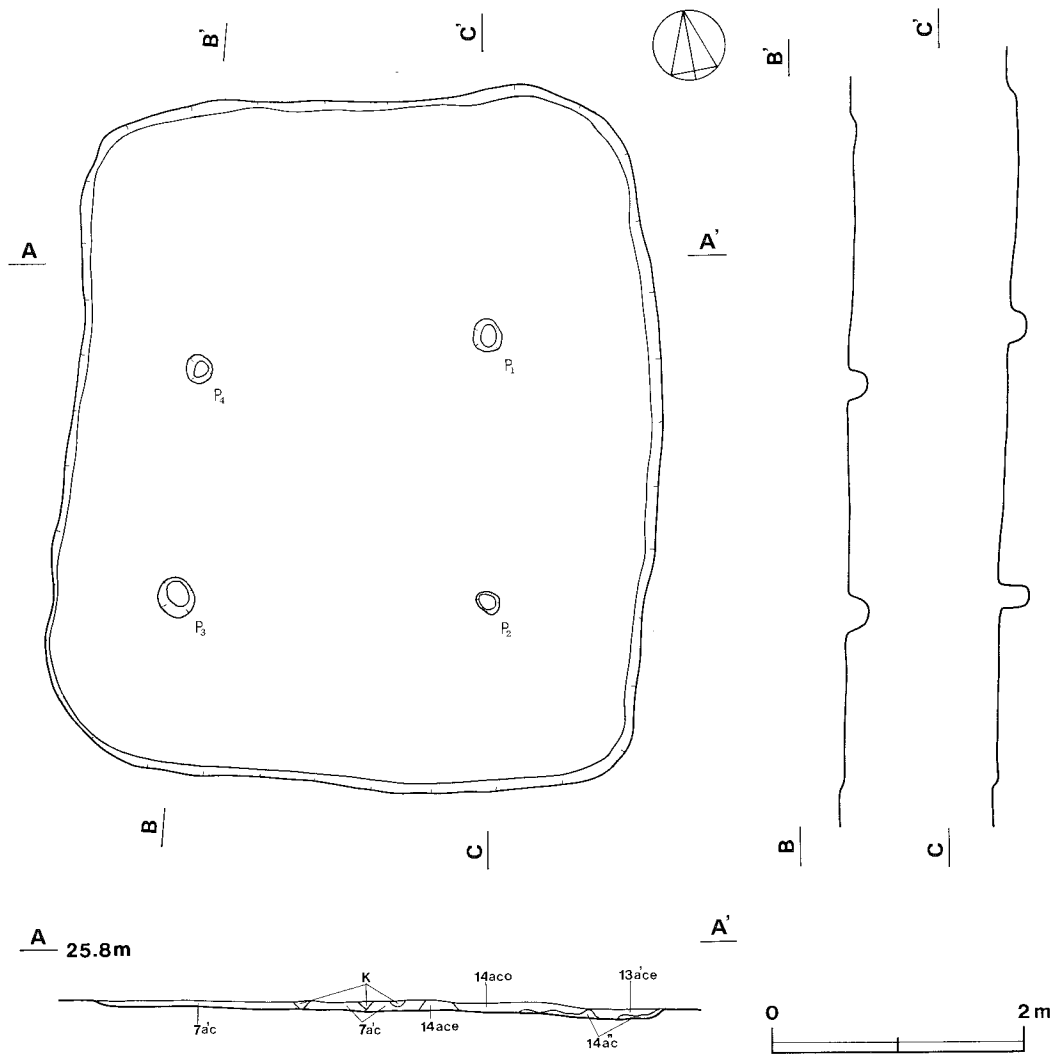
覆土は、極めて浅く、少～多量のローム粒子等を含む褐色土が堆積しているが、大きく攪乱されている。



第163図 第67号住居跡  
出土遺物実測図

遺物は、土師器片36点、砥石1点が出土している。本跡に伴うと思われる遺物は、篋磨きが施された壺形土器の胴部片や第163図1の砥石である。

本跡は、炉をもたないことから住居跡以外の性格も考えられるが、出土遺物や遺構の形態等から古墳時代前期の住居跡と推定される。



第164図 第67号住居跡実測図

第69号住居跡 (第165図)

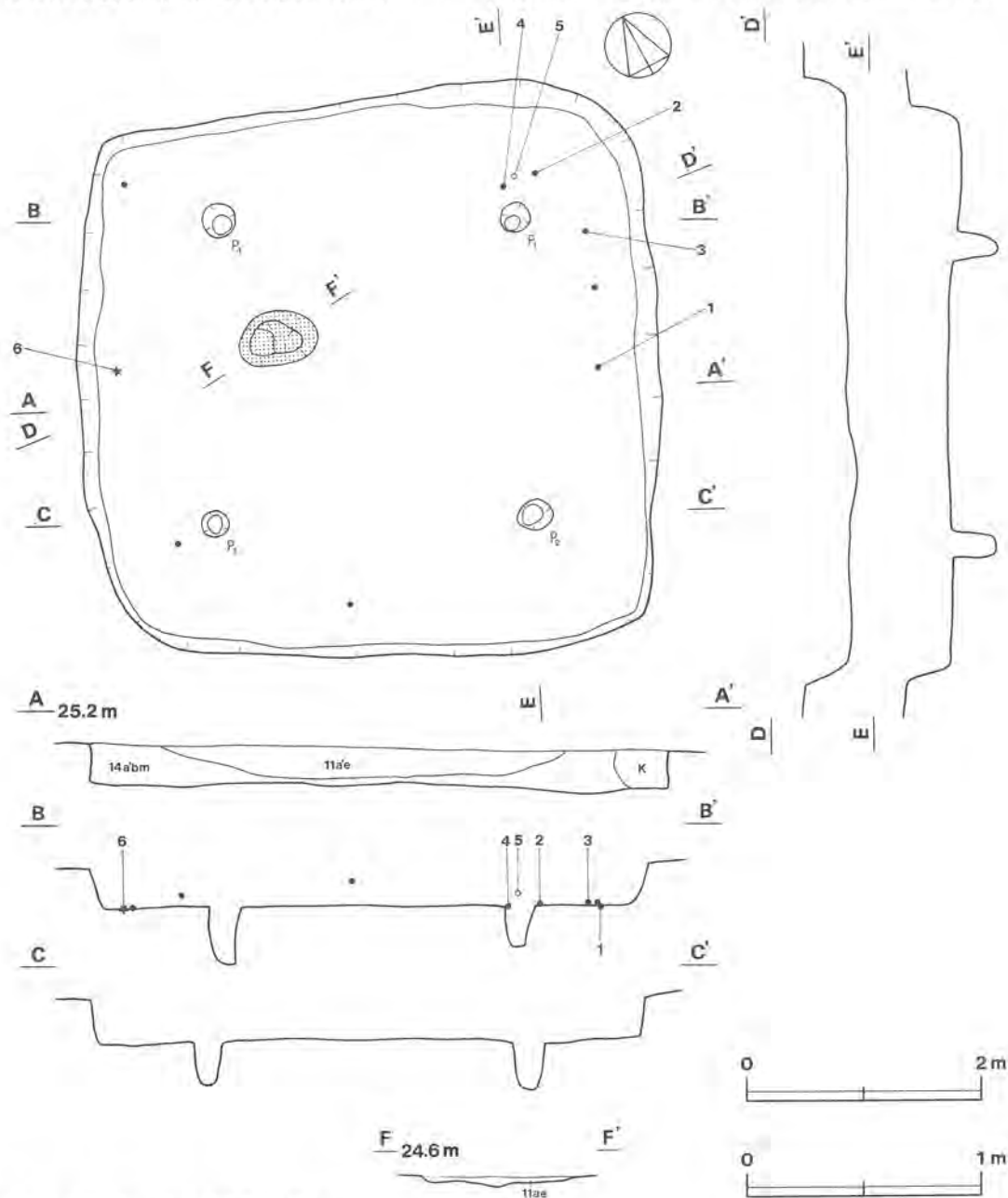
本跡は、2次調査区のB10a<sub>6</sub>区を中心に確認された住居跡で、第66号住居跡の北西9.5m、第71号住居跡の北東6.5mに位置している。

平面形は、長軸4.96m・短軸4.70mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-60°-Wを指している。床面積は20.2m<sup>2</sup>である。壁はロームで、75度前後の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は35~40cmである。床面は締まりのある平坦なロームで、中央部は硬く踏み固められている。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径26~30cm・深さ36~49cmである。形状や規模、方形に配置されていることから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を6cmほど掘り下げた地床炉で、中央から90cmほど北西側に確認された。平面形は、長径68cm・短径46cmの楕

円形で、炉床はあまり硬く焼き縮まっていない。

覆土は、北壁際に上面からの攪乱を受けているが、上層に中量のローム粒子や少量の炭化物を含む黒褐色土、下層に中量のローム粒子、少量のローム小ブロックや炭化物を含む褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、自然堆積と思われる。

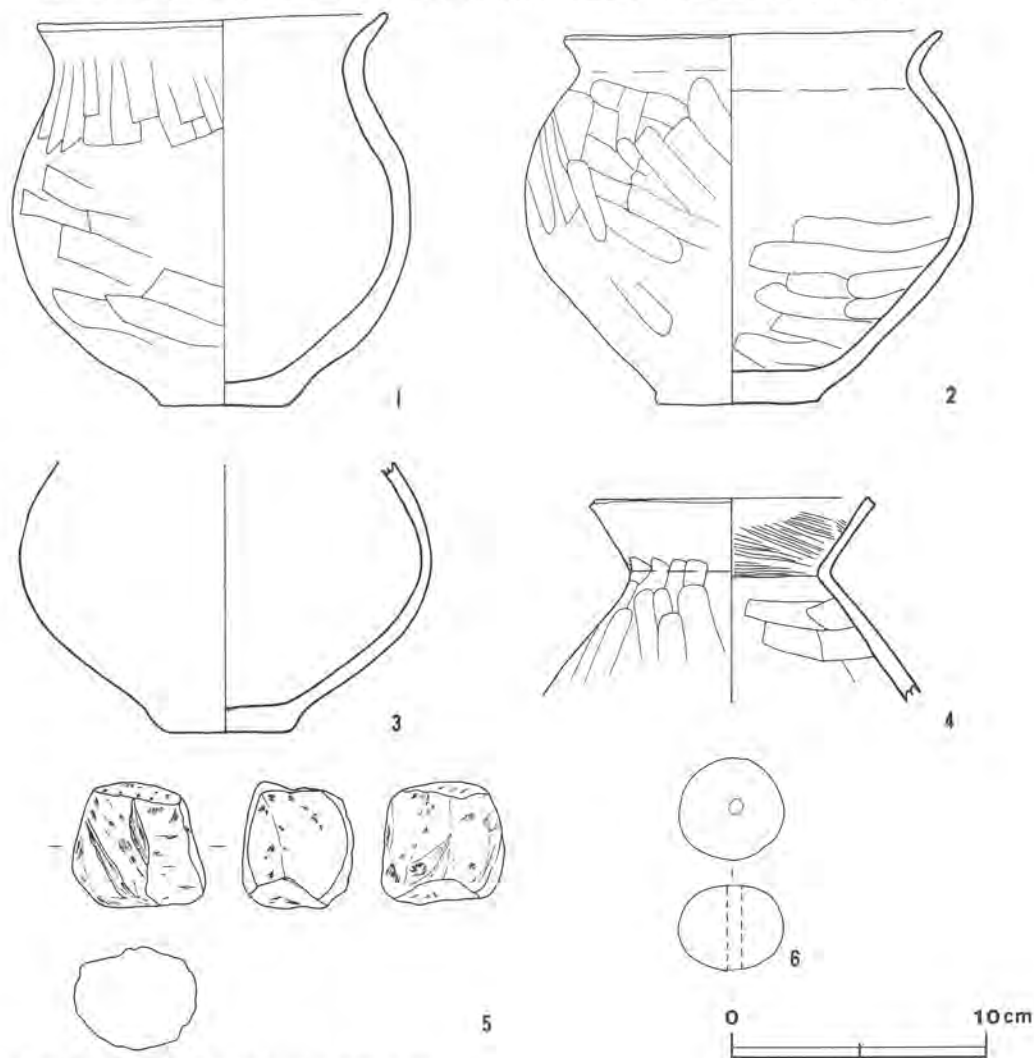
遺物は、土師器及びその破片39点、球状土錘1点、浮子1点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、東壁中央部から北東コーナー付近にかけての床面から出土している。東壁中央



第165図 第69号住居跡実測図

部の床面からは第166図1の甕形土器が正位、北東コーナー付近の床面からは2の甕形土器が斜位、3の甕形土器胴部が正位の状態出土しているほかに、4の壺形土器が倒立の状態出土している。5の石製の浮子は北東コーナー付近の覆土下層から、6の球状土錘は西壁中央部の床面から出土したものである。出土状況等から考えて、1～6は本跡に伴う遺物と思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第166図 第69号住居跡出土遺物実測図

第69号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第166図 1	甕形土器	A 14.2 B 15.7 C 5.2	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。胴部は外面が匏ナデ整形、内面は剝離が著しく整形技法不明。	砂粒・バミス 明赤褐色 普通	100% P349 胴部外面に煤付着

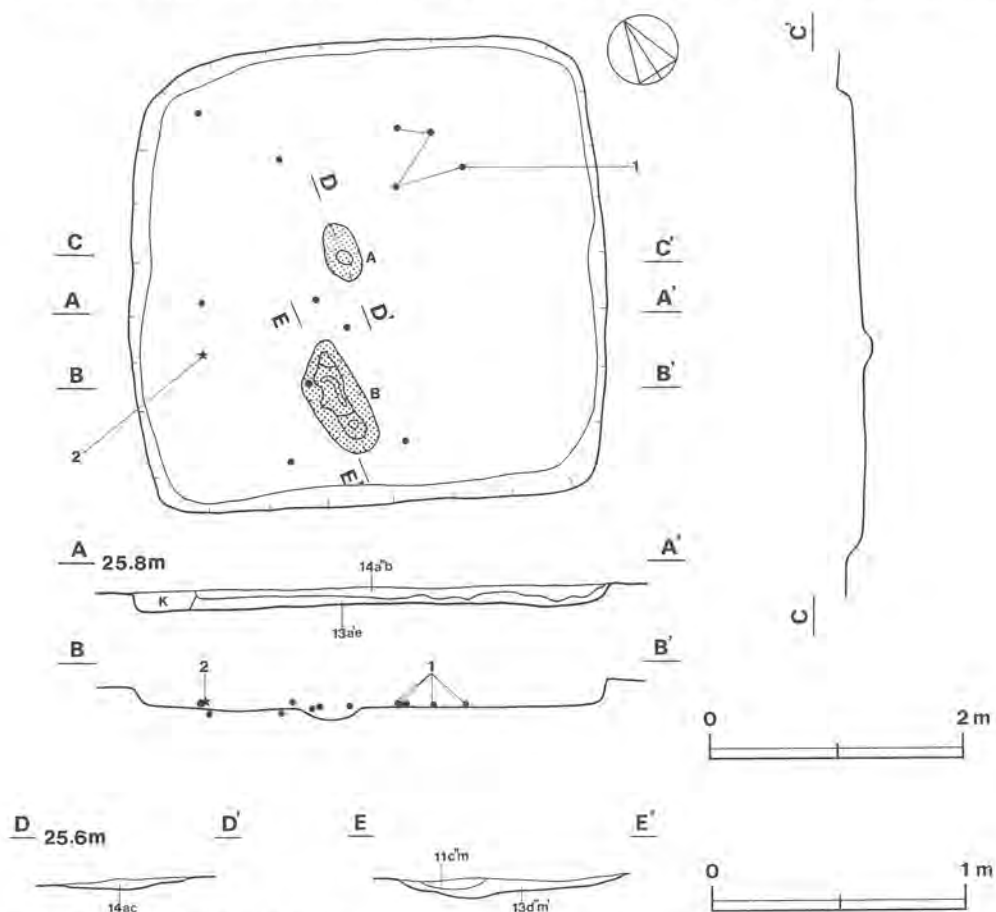


図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第166図 2	甕形土器 土師器	A 15.0 B 14.9 C 6.5	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	内・外面とも口縁部はナデ、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	90% P350
3	甕形土器 土師器	B (10.8) C 5.4	平底。胴部は内彎して立ち上がり、球形状を呈するものと思われるが、上半部以上は欠損する。	外面はナデ整形。内面は剝離が著しく、整形技法不明。	砂粒・スコリア 橙色 普通	40% P352
4	壺形土器 土師器	A 11.3 B (8.0)	胴中央部以下は欠損。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	口縁部は外面がナデ、内面はハケ目整形。胴部は内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	20% P351

### 第72号住居跡（第167図）

本跡は、2次調査区のB10e区を中心に確認された住居跡で、第78号住居跡の北2m、第71号住居跡の南東6mに位置している。

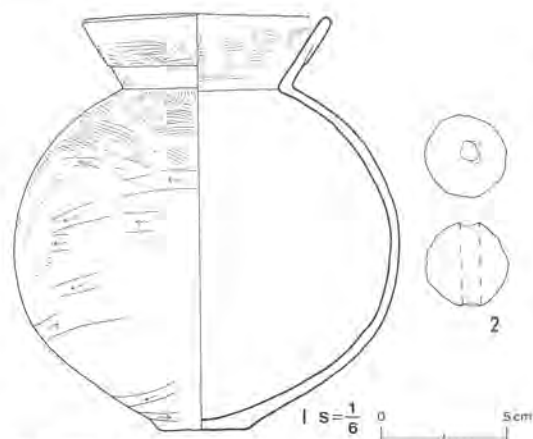
平面形は、長軸3.76m・短軸3.72mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-62°-Wを指している。



第167図 第72号住居跡実測図

床面積は11.8㎡である。壁はロームで、壁高は11～20cmである。西壁の一部に攪乱を受けているほかは、70度前後の角度で外傾して立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、締まりのやや弱いロームである。ピットは検出されなかった。炉は、2か所（A・B）確認された。Aは、ほぼ中央に位置している。床面を3cmほど掘り下げた地床炉で、平面形は、長径49cm・短径28cmの楕円形である。炉内には、少量の焼土粒子を含む褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。Bは南側に位置している。床面を9cmほど掘り下げた地床炉で、平面形は、長径95cm・短径41cmの楕円形状である。炉内には、多量の焼土粒子や焼土小ブロック、少・中量の炭化材を含む黒褐色土や暗褐色土が堆積しているが、炉床はあまり硬く焼き締まっていない。

覆土は、北西壁際が上位から攪乱されているが、上層は少量のローム粒子を含む褐色土、下層は多量のローム粒子等を含む褐色土である。いずれも締まりのある土層であり、自然堆積と思われる。



第168図 第72号住居跡出土遺物実測図

遺物は、土師器及びその破片96点、球状土錘1点が出土している。第168図1の壺形土師器は、北東部の床面に潰れた状態で出土した破片を接合したものである。西壁中央部の床面からは2の球状土錘が床面上約5cmから出土している。出土状況等から考え、1・2は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物・遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

第72号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第168図 1	壺形土師器	A 19.9 B 33.3 C 7.2	平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は複合口縁で、頸部から「く」の字状に外傾して開く。	外面は胴上半部以上がハケ目、以下は篋ナデ整形。内面は口縁部がハケ目、以下は篋ナデ整形。	砂粒・スコリアにふい褐色 普通	60% P359

第75号住居跡（第169図）

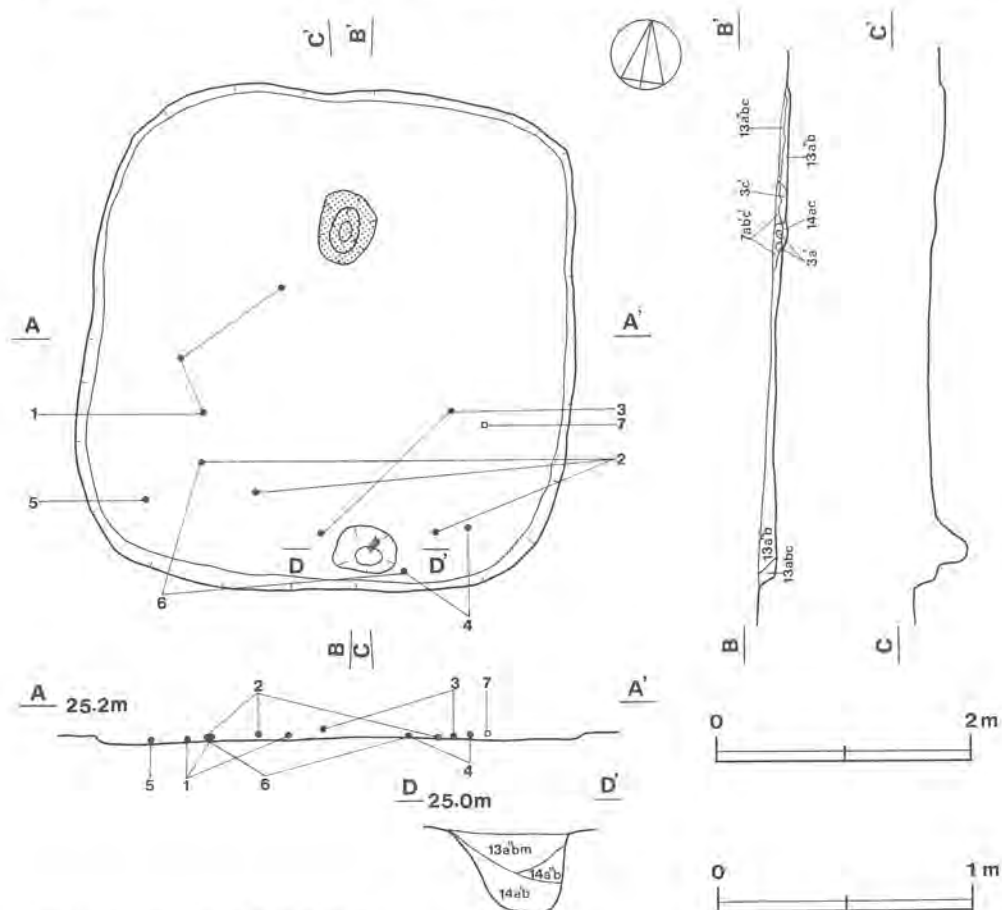
本跡は、2次調査区のC12b<sub>2</sub>区を中心に確認された住居跡で、第46号住居跡の南西10.5mに位置している。

平面形は、長軸4.02m・短軸3.86mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-4°-Wを指している。

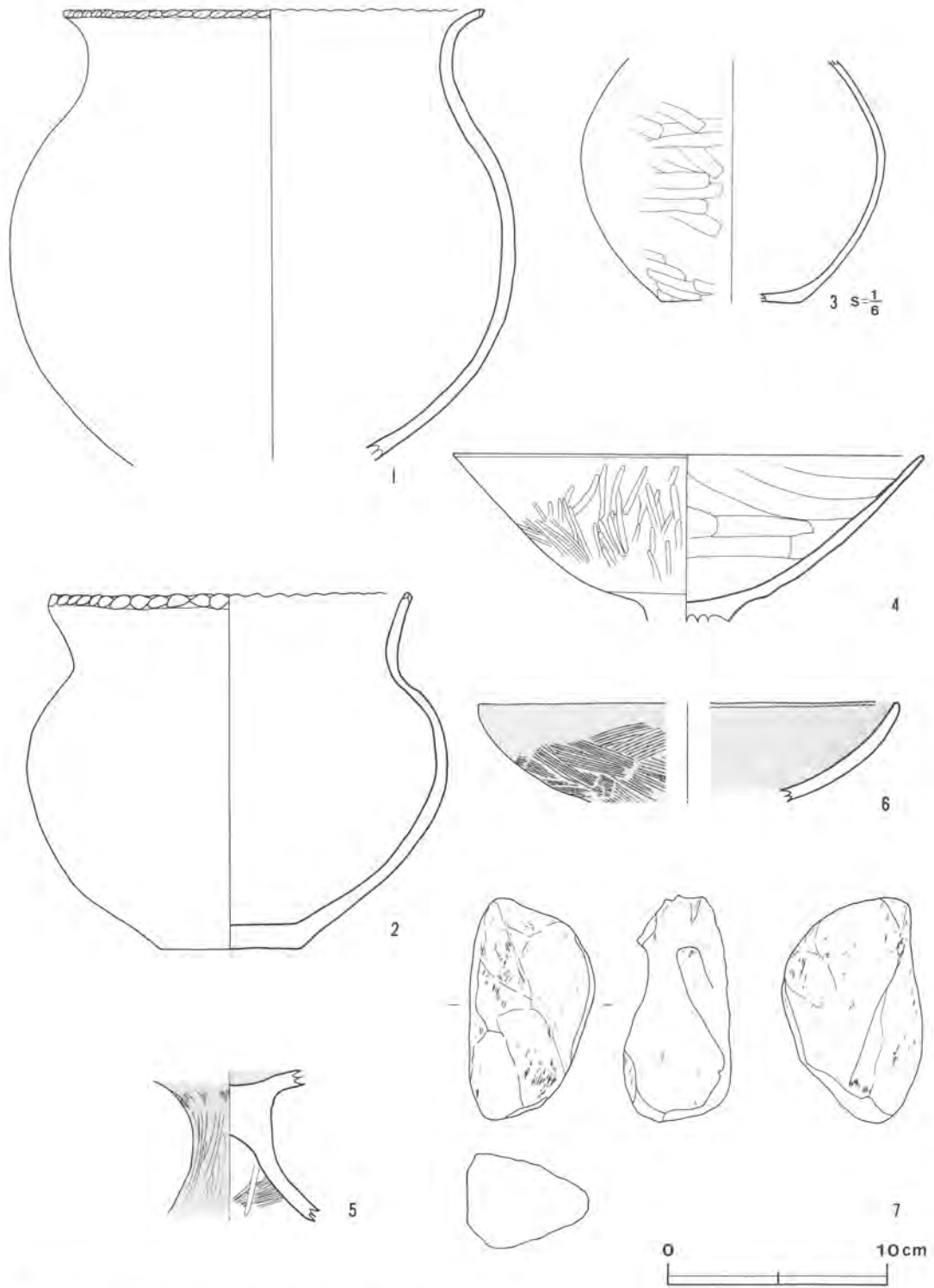
床面積は13.1㎡である。壁はロームで、壁高は5～15cmである。南壁が70度の角度で外傾するほかは、緩やかに立ち上がっている。床面は平坦なロームで、硬く踏み固められている。ピットは、検出されなかった。炉は床面を4cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1mほど北側に確認され、平面形は、長径59cm・短径44cmの楕円形である。炉内には、中量の焼土粒子や焼土ブロックを含む暗赤褐色土、赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南壁中央部の壁際に位置している。平面形は、長径48cm・短径39cmの楕円形で、深さは36cmほどである。貯蔵穴内には、多量のローム粒子、少量のローム小ブロックを含む暗褐色土や褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、極めて浅く、多量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含む粘性のある褐色土が堆積している。

遺物は、土師器及びその破片110点、浮子1点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、南東や南西のコーナー付近に集中して出土している。第170図1の甕形土器や6の高環形土器坏部は、南東と南西のコーナー付近の床面から出土した破片を接合したものである。3の甕形土器や



第169図 第75号住居跡実測図



第170图 第75号住居跡出土遺物実測図

4の高环形土器坏部は、南東コーナー付近の床面に潰れた状態で出土したものであり、7の石製の浮子も付近から出土している。南西コーナー付近の床面からは、2の甕形土器や5の高环形土器が出土している。出土状況から考えて、1～6は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物の出土状況等から考えて古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

### 第75号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第170図 1	甕形土器 土師器	A 19.4 B (20.9)	底部は欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部で強く外反して開く。	口唇部には刻目が施されている。内・外面ともナデ整形。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	50% P371
2	甕形土器 土師器	A 16.6 B 16.6 C 6.6	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	口唇部は内・外から押圧が施され、小波状を呈する。外面は口縁部がナデ、胴部は篋ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	80% P370
3	甕形土器 土師器	B (22.4) C「13.0」	胴部片。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。頸部以上は欠損する。	外面は篋ナデ整形。内面は剝離が著しく、整形技法不明。	砂粒・パミス 明褐色 普通	20% P372
4	高环形土器 土師器	A 21.8 B (7.7)	脚部は欠損。坏部は下位に弱い稜を持ち、内彎気味に大きく開く。	外面は篋磨き整形。内面は篋ナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	40% P373
5	高环形土器 土師器	B (7.0)	坏底部から脚部にかけての破片。脚部はラッパ状に開くが裾部は欠損する。	坏底部は外面が篋ナデ整形後に赤彩、内面にも赤彩痕が残る。脚部は外面が篋ナデ、内面はハケ目整形。	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	20% P375
6	高环形土器 土師器	A「19.4」 B (4.6)	坏部片。坏部は内彎して開く。	外面はハケ目整形後にナデ。内面はナデ整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	20% P374

### 第78号住居跡（第171図）

本跡は、2次調査区のB10g<sub>4</sub>区を中心に確認された住居跡で、第72号住居跡の南2mに位置している。

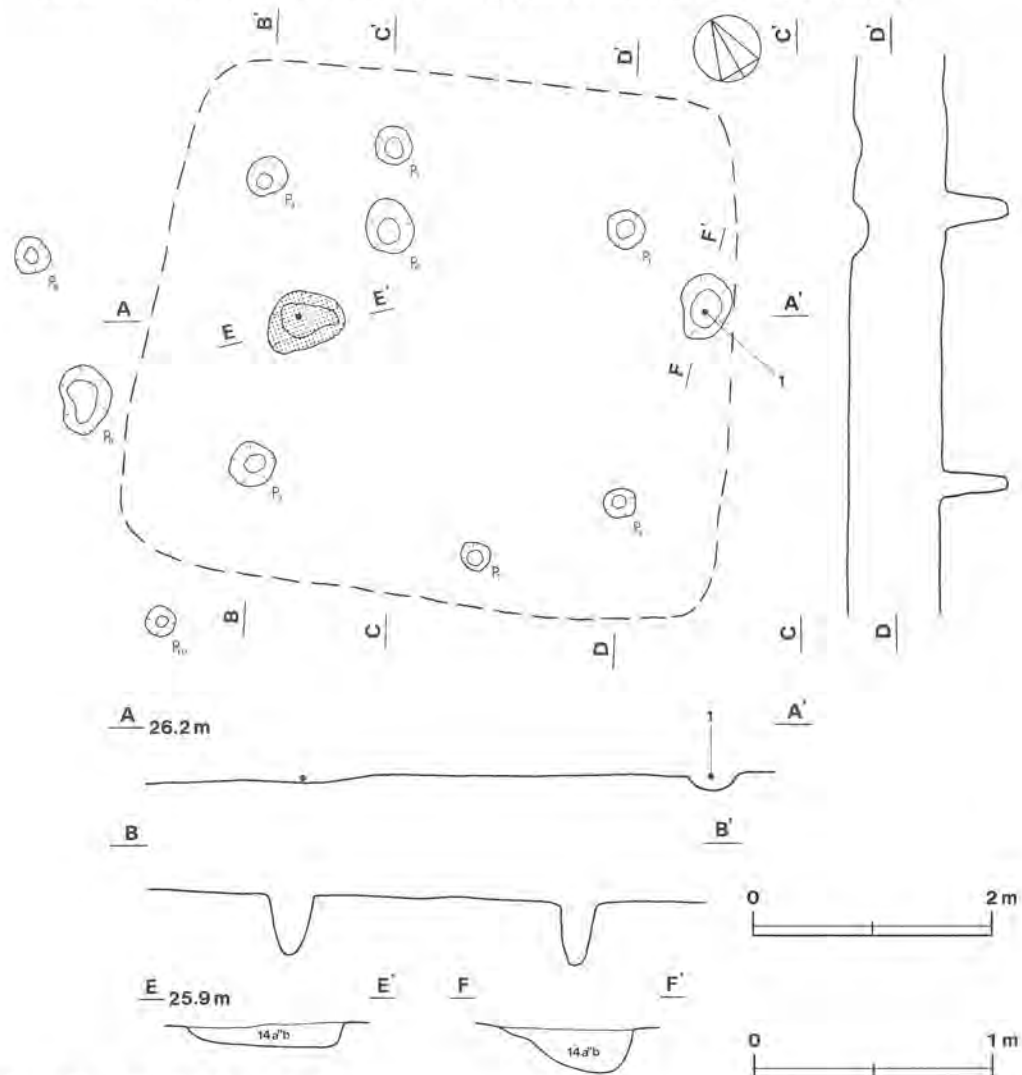
本跡は、削平のため平面形や規模等の詳細は不明であるが、柱穴や炉の配置等から長方形を呈し、主軸方向はN-52°-Wを指すものと思われる。床面が露出して検出されたため、壁の立ち上がりは認められない。床面はロームで、炉の南側やP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の間に硬く踏み固められた部分が検出されただけである。ピットは、10か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端直径25～41cm・深さ51～58cmであり、P<sub>6</sub>～P<sub>10</sub>は、上端直径26～52cm・深さ7～24cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が本跡に伴う主柱穴と判断した。P<sub>6</sub>～P<sub>10</sub>と本跡との関係は不明である。炉は床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、P<sub>3</sub>から1.2mほど北東側に確認され、平面形は、長径66

cm・短径50cmの楕円形である。炉内には、多量のローム粒子等を含む褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、P<sub>2</sub>より1.8mほど北東側に位置している。平面形は、長径56cm・短径42cmの楕円形で、深さは19cmである。

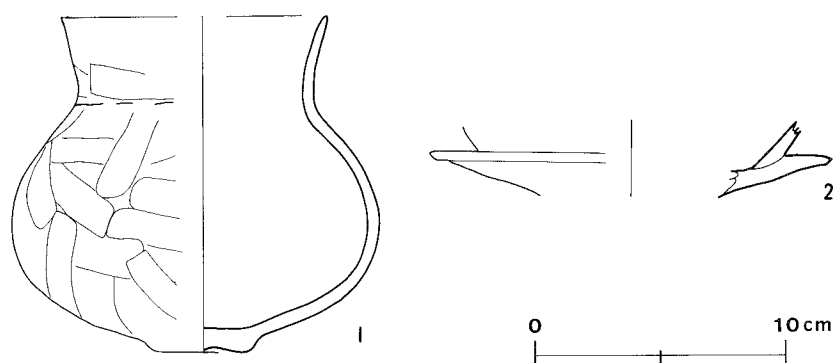
本跡は、遺構確認時において床面が露呈している状態であったため、土層観察用ベルトを設定することができず、覆土の堆積状況については不明である。

遺物は、土師器及びその破片98点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、貯蔵穴内に潰れた状態で出土した第172図1の小形壺形土器である。2の装飾器台形土器の器受部片は覆土からの出土で、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第171図 第78号住居跡実測図



第172図 第78号住居跡出土遺物実測図

第78号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第172図 1	小形壺形 土器 土師器	A 10.7 B 13.5 C 4.2	上げ底。胸部はやや扁平な球形状で、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外反気味に開く。	外面は篋ナデ整形。内面は剥離が著しく、整形技法不明。	砂粒・スコリアにふい赤褐色普通	70% P379
2	装飾器台形 土器 土師器	B (3.1)	器受部片。器受部は装飾用の段を持ち、外傾して立ち上がる。	内・外面ともナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	10% P380

第82号住居跡 (第173図)

本跡は、2次調査区のC11b<sub>9</sub>区を中心に確認された住居跡で、第75号住居跡の西8mに位置している。

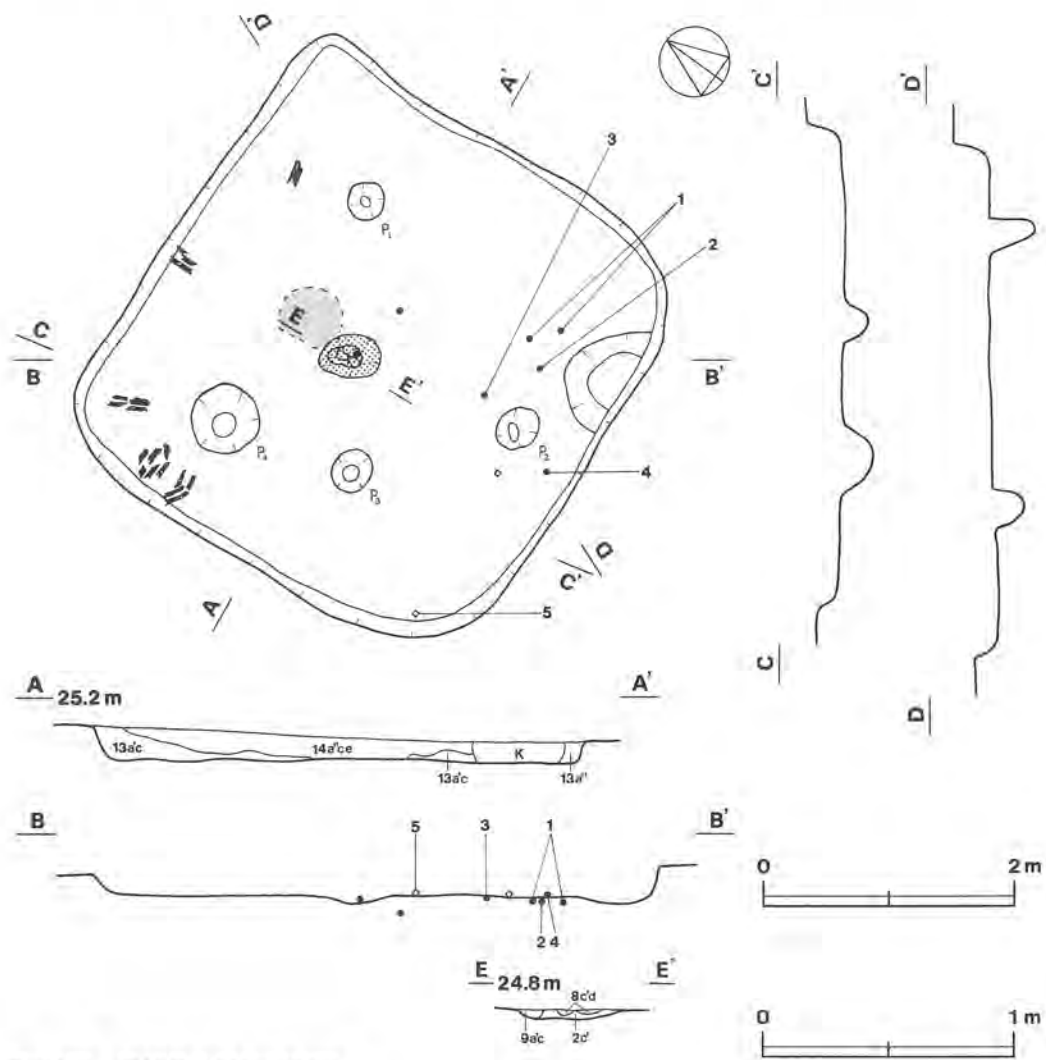
平面形は、長軸3.92m・短軸3.80mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-3°-Wを指している。床面積は13.0m<sup>2</sup>である。壁はロームで、北壁が60度の角度で外傾するほかはほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は12~30cmである。床面は緩い起伏を呈する締まりのあるロームで、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>の周囲は硬く踏み固められている。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径30~52cm・深さ19~38cmである。配置にやや乱れはあるが、形状や規模から、4本とも本跡に伴う支柱穴であると判断した。炉は、床面を7cmほど掘り下げた地床炉でほぼ中央に確認され、平面形は、長径50cm・短径35cmの楕円形である。炉内には、中量の焼土小ブロック等を含む赤褐色土や中量の焼土粒子を含む暗褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南壁際に位置している。平面形は、長径90cmの半円形状で、深さは10cmほどである。

覆土は、上層が多量のローム粒子等を含む褐色土、下層が中量のローム粒子を含む暗褐色土である。一部攪乱されているがいずれも締まりのある土層であり、自然堆積と思われる。また、北壁中央部や北西コーナーの床面に、炭化材や焼土を多量に含む層の範囲が検出されていることか

ら、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、多量の焼土粒子や焼土小ブロックを含む暗赤褐色土、極暗褐色土層が床面より上位に検出されたことから、本跡の廃絶後と思われる。

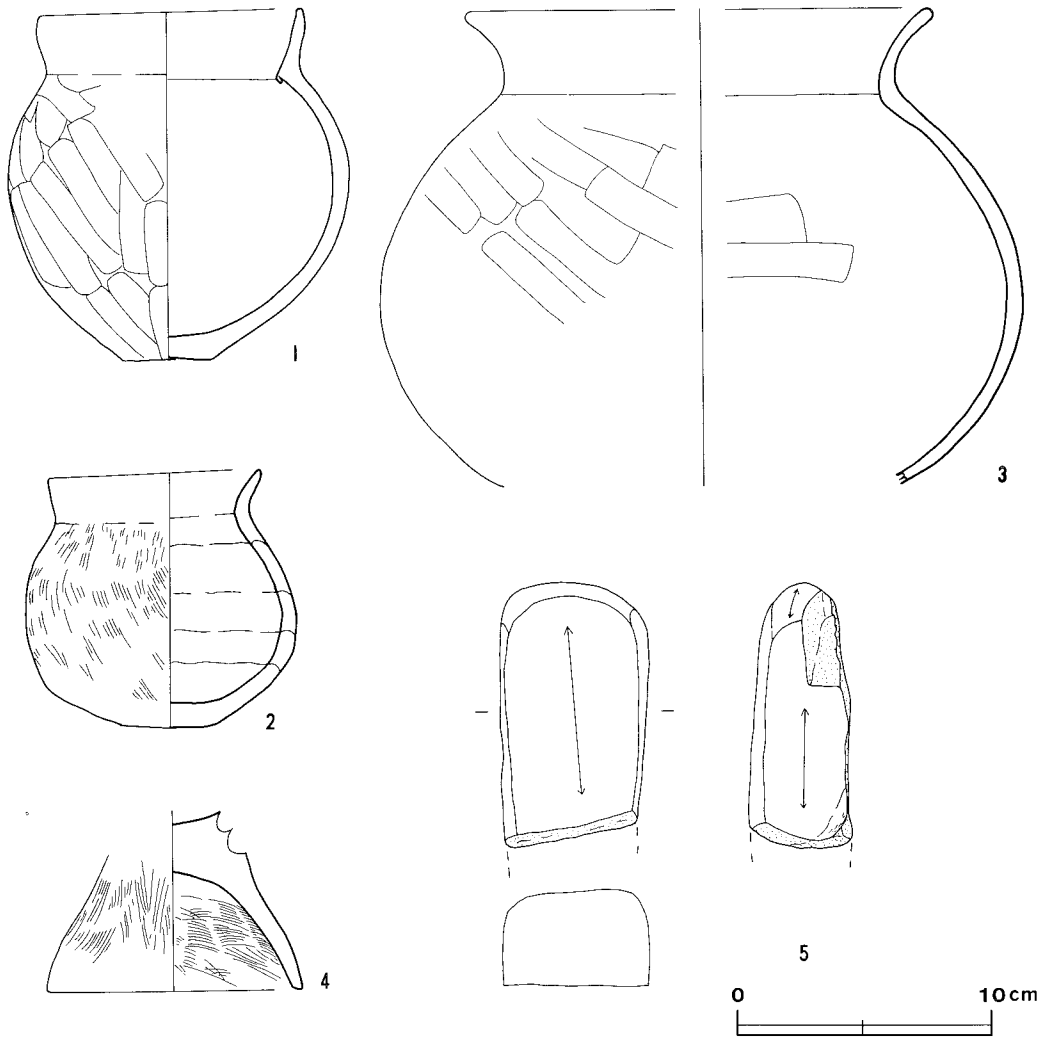
遺物は、土師器及びその破片5点、砥石1点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、主に南部の床面から出土しており、第174図1の小形甕形土器は潰れた状態で、2の小形甕形土器は正位の状態、3の甕形土器は潰れた状態で出土しているほか、4の台付甕形土器脚台部が横位の状態出土している。5の砥石は南西コーナーの壁際の床面から出土したものである。出土状況等から考えて、1～5は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第173図 第82号住居跡実測図





第174図 第82号住居跡出土遺物実測図

第82号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第174図 1	小形甕形 土器 土師器	A 10.6 B 14.0 C 3.7	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から内彎気味に開く。	口縁部は内・外面ともナデ整形。胴部は外面が篦ナデ、内面はナデ整形。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	70% P381
2	小形甕形 土器 土師器	A 8.5 B 10.3 C 4.0	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を下位に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部は内・外面ともナデ整形。胴部は外面がハケ目整形、内面は剝離が著しく整形技法不明。	砂粒・バミス 橙色 普通	100% P382
3	甕形土器 土師器	A「18.6」 B(19.0)	胴下半部以下は欠損。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	内・外面とも口縁部はナデ、胴部は篦ナデ整形。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	15% P383 胴部外面に髹附着

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第174図 4	台付甕形 土器 土師器	B (7.2) D 10.2	脚台部。脚台部は「ハ」の字状に開き、裾部でわずかに内彎する。	内・外面ともハケ目整形。	砂粒・バミス 明赤褐色 普通	10% P385 内面に煤付着

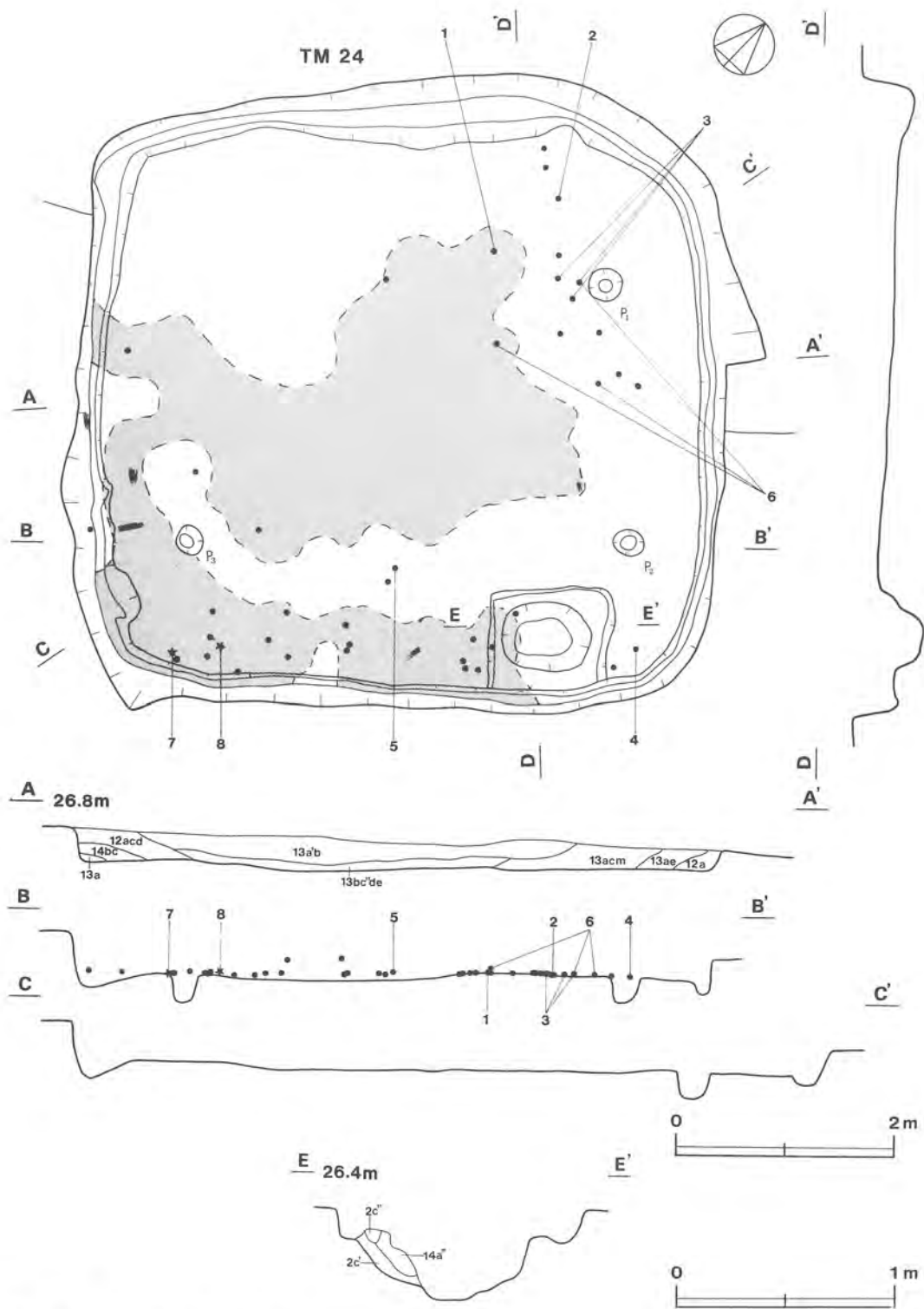
### 第85号住居跡 (第175・176図)

本跡は、2次調査区のC11g<sub>1</sub>区を中心に確認された住居跡で、第86号住居跡の北西1m、第93号住居跡の北10mに位置している。本跡は北西側で第24号古墳と重複しているが、土層から判断すると本跡の方が古い時期の遺構と思われる。

平面形は、長軸5.94m・短軸5.80mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-41°-Wを指している。床面積は29.3m<sup>2</sup>である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は18~37cmである。壁直下には、上幅14~52cm・深さ11~19cmの壁溝が全周している。床面は緩やかな起伏を呈する締まりのあるロームで、南西壁付近や貯蔵穴の周囲が硬く踏み固められている。また中央部から南西部にかけての床面は、炉床と同じように硬く焼き締まった状態で検出された。ピットは、3か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は、上端直径28~32cm・深さ25~27cmである。形状や規模から、3本とも本跡に伴う支柱穴であると判断した。貯蔵穴は、東コーナー付近の壁際に位置している。平面形は、長軸116cm・短軸104cmの長形状である。深さは41cmほどであるが、二段に掘り込まれており、底面も長形状で平坦である。貯蔵穴内には、中量の焼土粒子等を含む暗褐色土や極少量の焼土粒子等を含む褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、上層に中量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含む暗褐色土、下層に中量の焼土粒子や少量の焼土ブロック等を含む暗褐色土、壁際には少量のローム粒子を含む極暗褐色土、少量の焼土粒子やローム粒子を含む暗褐色土がレンズ状に堆積している。いずれも締まりのある土層であり、自然堆積と考えられる。また、中央部や南コーナー付近の床面に、多量の焼土粒子や中量の焼土ブロック等を含む暗褐色土、中量の焼土粒子等を含むにぶい赤褐色土や極暗赤褐色土等が堆積していることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、床面に多量の焼土や炭化材が散乱していること、床面が広範囲に焼き締まっていることなどから、本跡の居住期間中と思われる。

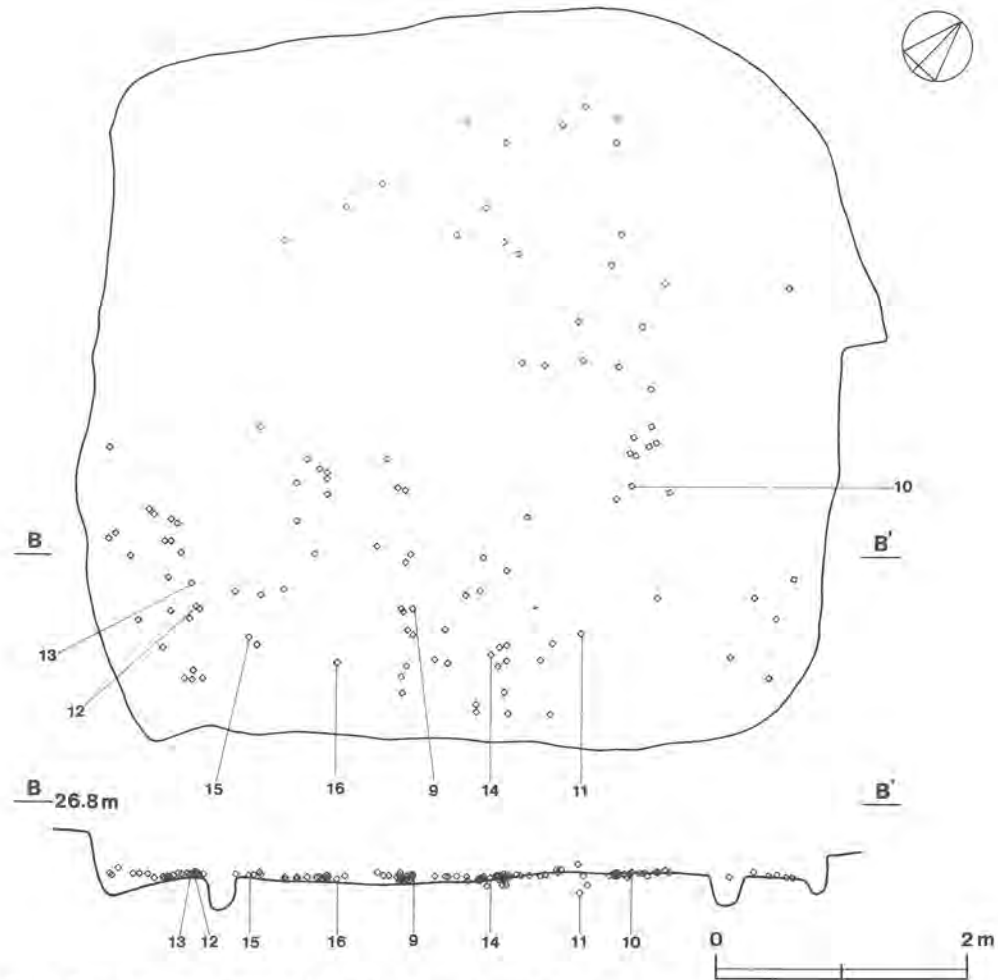
遺物は、土師器及びその破片404点、球状土錘2点、管玉及びその未製品5点、石製勾玉2点、有孔円板の未製品1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、北部の床面や東及び南コーナーの壁付近の床面から出土している。北部の床面からは、第177図・第178図1と2の甕形土器が斜位・正位の状態で、3の甕形土器が潰れた状態で出土している。4の小形甕形土器は東コーナー付近の床面に斜位の状態で、南東部の床面からは5の埴形土器が斜位の状態で出土している。6の高环形土器坏部は、中央部と北東



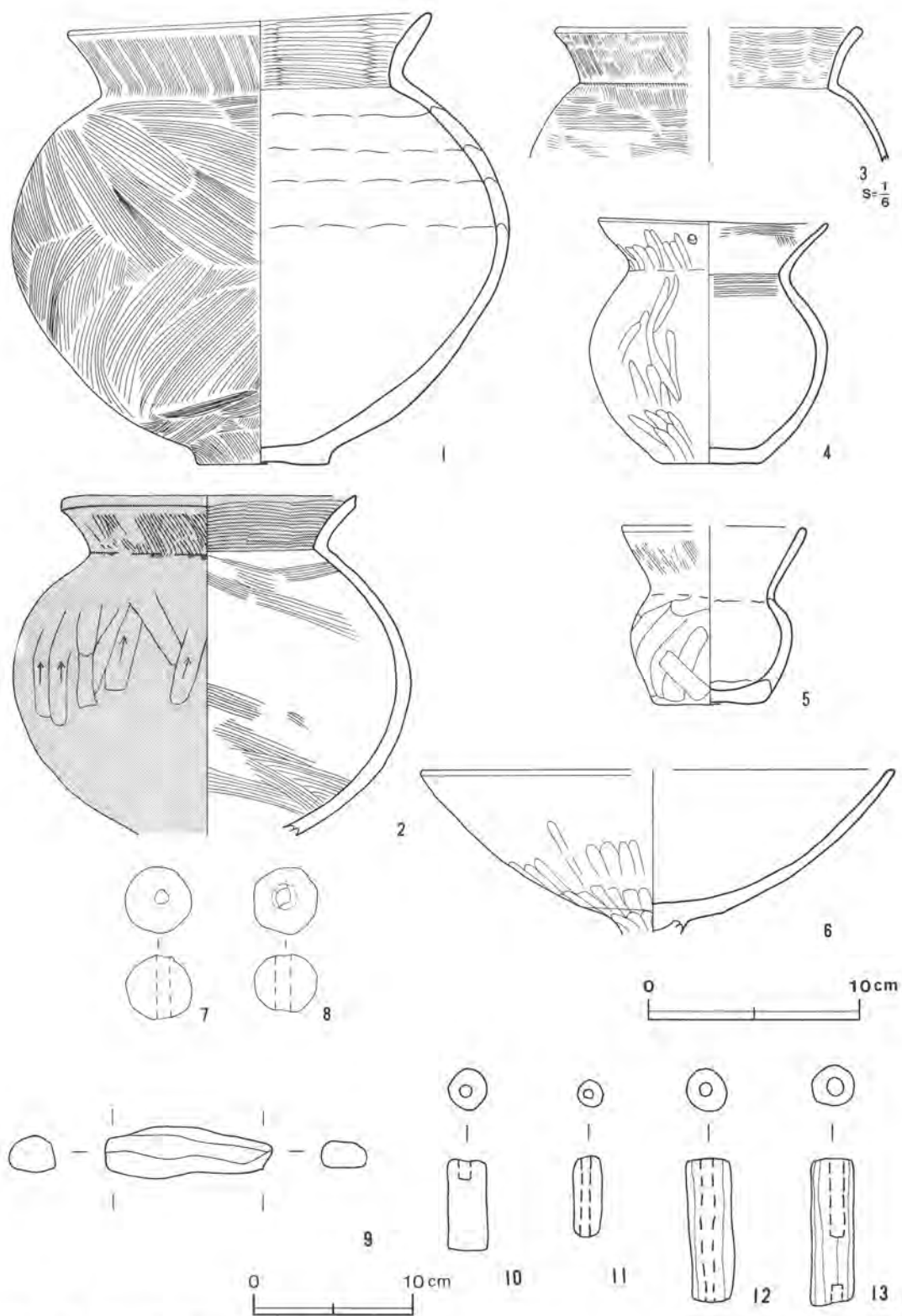
第175图 第85号住居迹实测图

部の床面から出土した破片を接合したものである。7と8の球状土錘、12と13の管玉、15の石製勾玉は南コーナー付近、9～11の管玉とその未製品、14の有孔円板の未製品、16の石製勾玉は南コーナー付近の床面から出土したものである。出土状況等から考えて、1～16は本跡に伴うものと思われる。

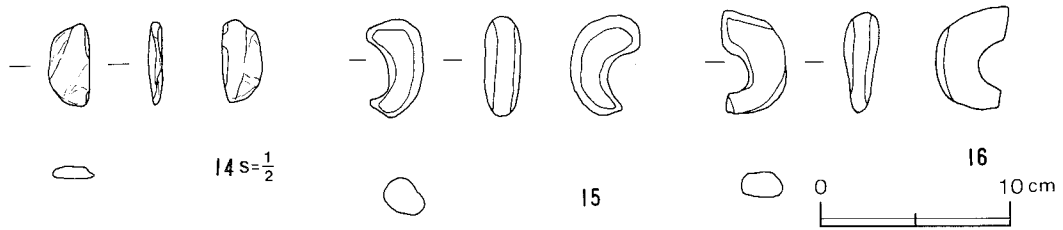
本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われるが、注目すべき点は、勾玉や管玉などの完成品のほかに未製品の管玉や有孔円板、及び多量の剥片が出土したことである。(第176図) このように剥片が多量に出土したのは本跡だけであり、他の住居跡とは性格を異にするものと考えられ、単なる住居跡ではなく、石製品の製作跡であった可能性が高いものと思われる。



第176図 第85号住居跡石製品・未成品・剥片出土位置図



第177图 第85号住居跡出土遺物実測図-1



第178図 第85号住居跡出土遺物実測図-2

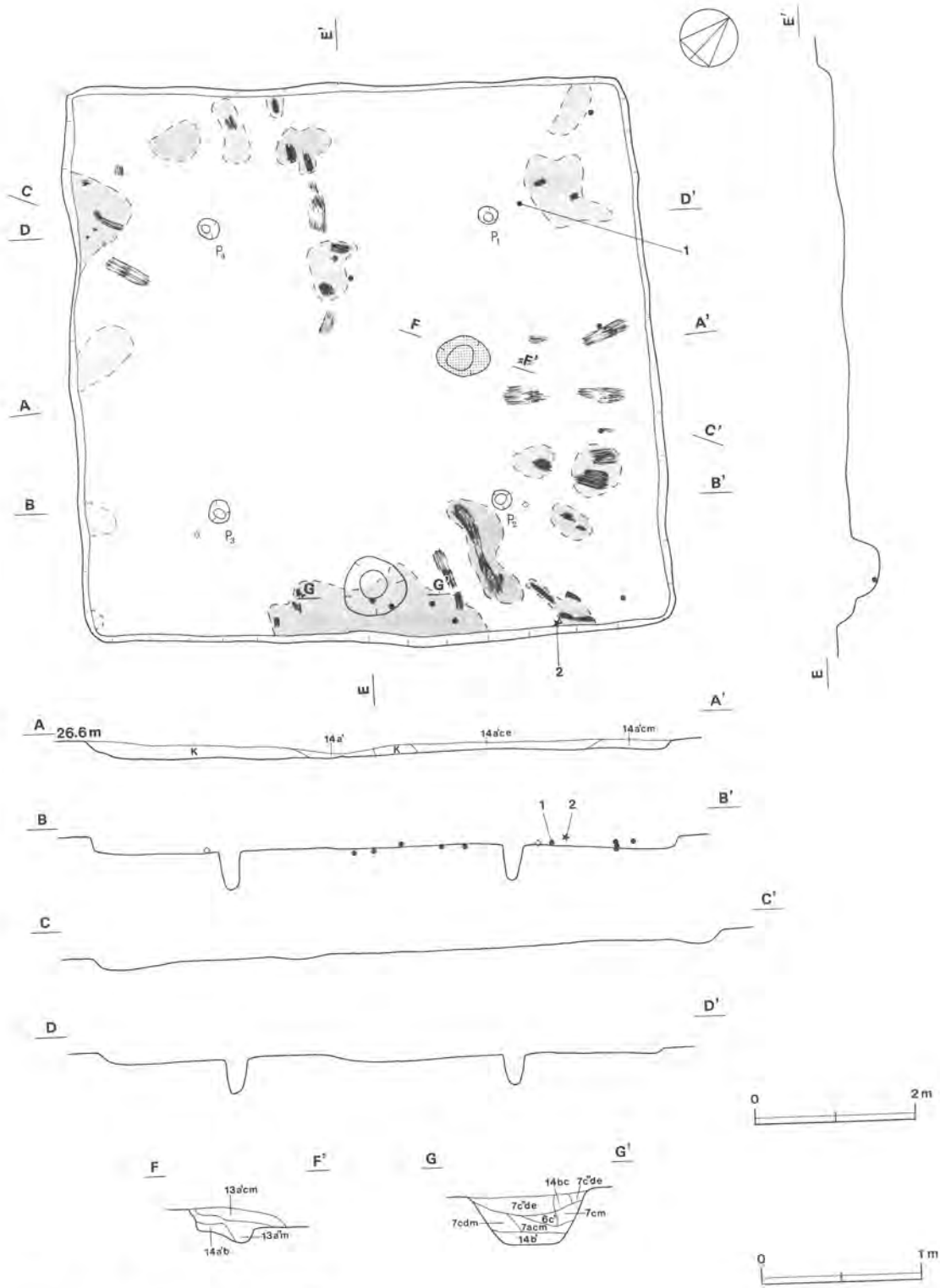
第85号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第177図 1	甕形土器 土師器	A 17.3 B 22.5 C 6.3	突出した平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	外面はハケ目整形。内面は口縁部がハケ目、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	95% P386
2	甕形土器 土師器	A 14.1 B (16.1)	底部は欠損。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外反して開く。	口縁部は内・外面ともハケ目整形。胴部は外面が丁寧な篋ナデ整形後に赤彩、内面はハケ目整形。	砂粒・バミス 赤褐色 普通	80% P387 胴部外面に煤付着
3	甕形土器 土師器	A「29.6」 B(12.8)	口縁部から胴上半部にかけての破片。口縁部は頸部から「く」の字状に外反して開く。	外面はハケ目整形。内面は口縁部がハケ目、胴部はナデ整形。	砂粒・バミス 明赤褐色 普通	10% P388
4	小形甕形 土器 土師器	A 10.0 B 10.5 C 5.0	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外反して開く。口縁部外面には補修孔が穿たれている。	外面は篋磨き整形。内面はハケ目整形後、ナデ。	砂粒 橙色 普通	95% P389
5	埴形土器 土師器	A「8.8」 B 8.4 C 5.4	上げ底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は頸部から外傾して開く。	口縁部は外面がハケ目整形後にナデ、内面はナデ整形。胴部は外面が篋ナデ整形であるが、内面は剝離が著しく整形技法不明。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	90% P390
6	高環形土器 土師器	A「22.6」 B (7.8)	脚部は欠損。坏部は下位に弱い稜を持ち、内彎して大きく開く。	外面は丁寧な篋磨き整形。内面はナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	30% P391

第86号住居跡 (第179図)

本跡は、2次調査区のC11h<sub>3</sub>区を中心に確認された住居跡で、第85号住居跡の南東1m、第94号住居跡の北東9.5mに位置している。

平面形は、長軸7.30m・短軸6.98mの方形を呈し、主軸方向はN-48°-Eを指している。床面積は43.1㎡である。壁はロームで、南西壁の一部が攪乱されているが70度前後の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は5~24cmである。床面は緩やかな起伏を呈するロームで、炉の周囲やP<sub>2</sub>の西側、及びP<sub>3</sub>の北側は硬く踏み固められている。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、

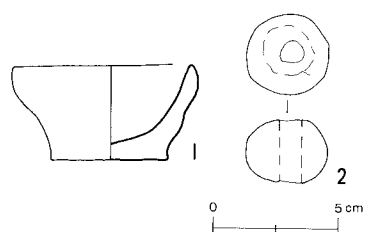


第179图 第86号住居跡実測図

上端直径26～28cm・深さ40～47cmである。遺構の規模に比べて小規模ではあるが、形状や方形に配置されていることから、4本とも本跡に伴う主柱穴と判断した。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.3mほど北東側に確認され、平面形は長径66cm・短径51cmの楕円形である。炉内には、少量の焼土粒子や焼土小ブロックを含むふい赤褐色土、中・多量の焼土粒子や焼土小ブロックを含む暗赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南東壁中央部の壁際に位置している。平面形は、直径80cmほどの円形で、深さは35cmほどである。貯蔵穴内には、少～多量の焼土粒子や少量の焼土小ブロックを含む暗赤褐色土、中量の焼土粒子を含む極暗赤褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、極めて浅く、上面から一部攪乱されているが、中央部に多量の焼土粒子を含む暗赤褐色土、壁際に中量の焼土中ブロック等を含む暗褐色土、中量のローム粒子や炭化材、焼土粒子を含む褐色土が堆積している。堆積状況からは自然堆積と思われる。また、床面全体に多量の炭化材や焼土を含む層が検出されたことから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、焼土を含む層の下に褐色土層がみられることや出土遺物が極めて少量であることから、本跡の廃絶後と思われる。

遺物は、土師器及びその破片259点、球状土錘1点のほかに、流れ込みと思われる弥生式土器片4点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、北コーナー付近の床面から正位の状態で出土した第180図1のミニチュア土器や東コーナー付近の壁際の床面から出土した2の球状土錘である。この他に、赤彩が施された埴形土器底部片やハケ目が施された甕形土器胴部片が床面から出土しているが、いずれも小破片であり図示することはできなかった。



本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

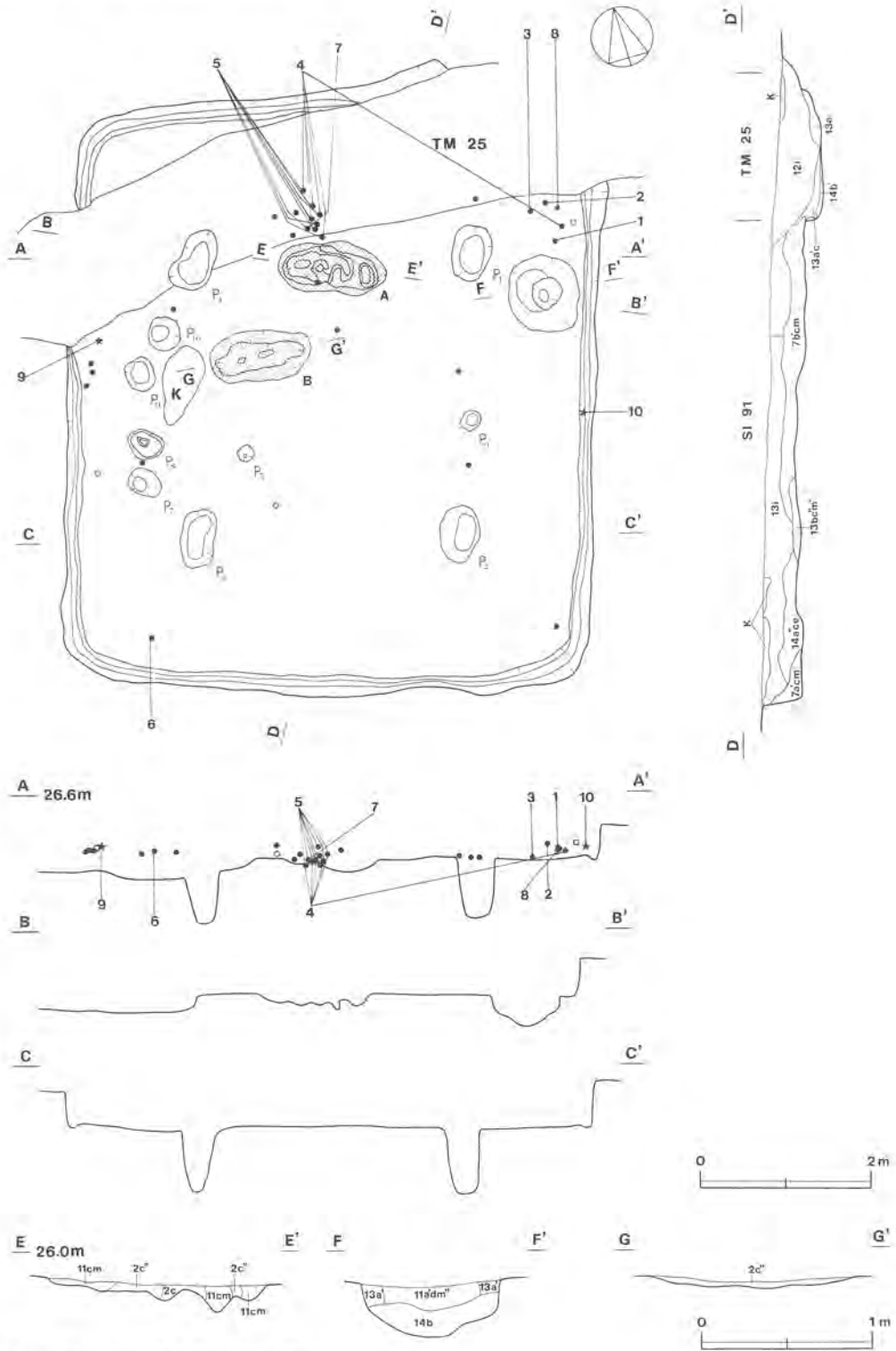
第180図 第86号住居跡  
出土遺物実測図

第86号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第180図 1	ミニチュア 土器 土師器	A 6.8 B 3.8 C 4.6	平底。体部は外反して立ち上がり、口縁部で内彎して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。体部は内・外面ともナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	100% P392



第91号住居跡 (第181・182図)



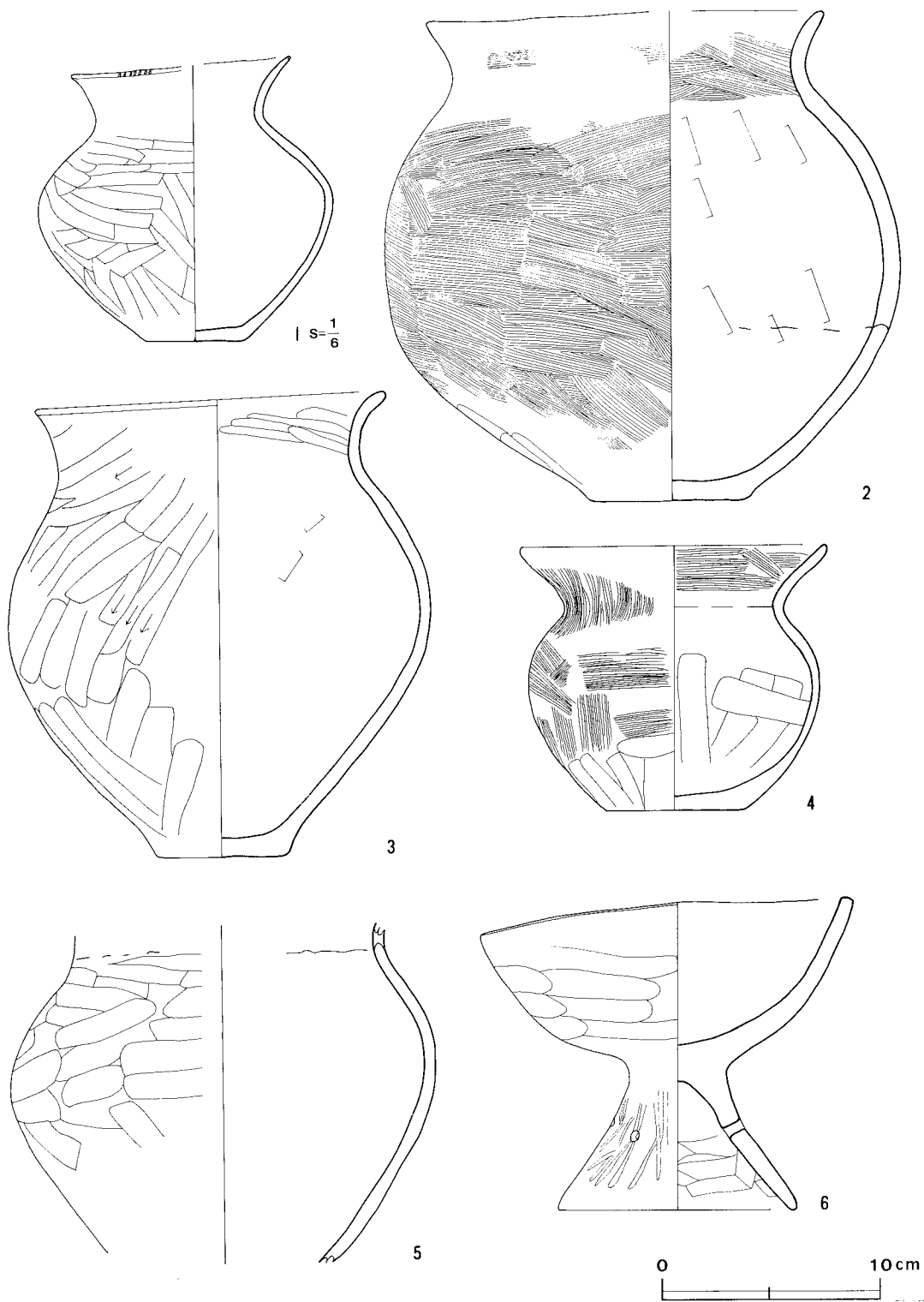
第181图 第91号住居跡实测图

本跡は、2次調査区のC11h<sub>6</sub>区を中心に確認された住居跡で、第95号住居跡の西5mに位置している。本跡は北側で第25号古墳と重複しているが、土層から判断すると本跡の方が古い時期の遺構と思われる。

平面形は、長軸7.20m・短軸6.26mの長方形を呈し、主軸方向はN-22°-Eを指している。床面積は41.2m<sup>2</sup>である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は17~53cmである。壁直下には、上端14~27cm・深さ5~7cmの壁溝が全周していたと考えられるが、第25号古墳と重複する北東コーナーや北西壁下には検出されなかった。床面は平坦で、全体的に硬く踏み締められたロームである。ピットは、10か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>10</sub>は、上端直径24~70cm・深さ24~80cmである。このうちP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径66~70cm・深さ60~80cmで円筒形状に掘られており、方形に配置されていることから、本跡の支柱穴と判断した。炉は、2か所(A・B)検出された。Aは、



第182図 第91号住居跡炭化材・焼土位置図



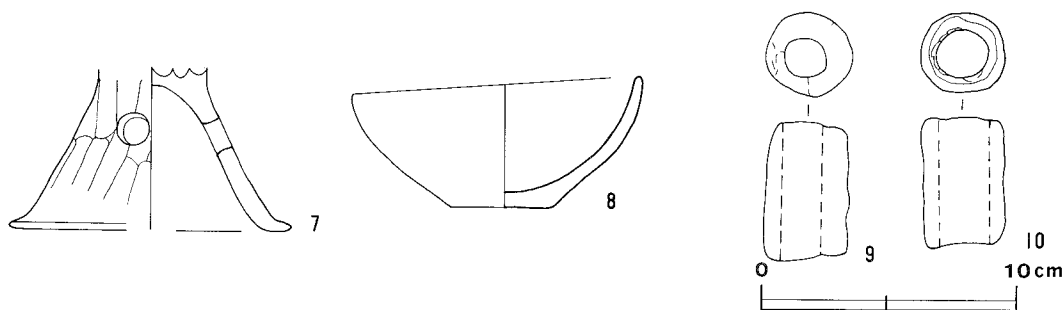
第183图 第91号住居跡出土遺物実測図一

床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.6mほど北側に位置する。平面形は、長径126cm・短径59cmの楕円形である。炉内には、少～多量の焼土粒子を含む黒褐色土や暗赤褐色土が堆積しており、炉床は起伏が激しくレンガ状に硬く焼き締まっている。Bは、床面を5cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1mほど北西側に位置する。平面形は、長径120cm・短径62cmの楕円形である。炉内には、多量の焼土粒子を含む暗赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、東壁際に位置している。平面形は、直径98cmほどの円形で、深さは34cmほどである。貯蔵穴内には、少・中量のローム粒子等を含む黒褐色土や暗褐色土、及び褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、上層に少量のローム粒子等を含む暗褐色土、下層に少量の焼土粒子や炭化材等を含む暗赤褐色土、多量の焼土粒子や中量の炭化材等を含む暗褐色土が堆積している。いずれも縮まりのある土層であり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。また、床面全体に焼土を含む層や炭化材が検出されていることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、多量の炭化材や焼土が床面に散在していることから、本跡の居住期間中と思われる。

遺物は、土師器及びその破片338点、管状土錘2点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片3点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、北東部や北部の床面に集中して出土している。北東部の床面からは、第183図・第184図1や3の甕形土器が正位・横位の状態、2の甕形土器が斜位の状態、8の埴形土器が横位の状態で出土している。4の小形甕形土器は北東部と北部の床面から出土した破片を、5の甕形土器や7の高環形土器脚部は北部の床面から出土した破片を接合したものである。6の高環形土器は南西コーナー付近の床面に横位の状態で出土したものである。また、9と10の管状土錘は西壁際や東壁際の床面から出土したものである。出土状況から考えて、1～10は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から、古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第184図 第91号住居跡出土遺物実測図－2

### 第91号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第183図 1	甕形土器 土師器	A「20.5」	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	口唇部に刻目が施されている。口縁部は内・外面とも横ナデ整形。胴部は外面が篋ナデ整形、内面は剝離が著しく整形技法不明。	砂粒・バミス 橙色 普通	90% P408
		B 26.7				
C 9.1						
2	甕形土器 土師器	A「18.6」	平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	外面はハケ目整形。内面は口縁部がハケ目、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	80% P409
		B 23.0				
		C 7.5				
3	甕形土器 土師器	A 16.4	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	外面は篋ナデ整形。内面は口縁部が篋磨き、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・バミス 赤褐色 普通	90% P410 胴部外面に煤付着
		B 21.7				
		C 6.3				
4	小形甕形土器 土師器	A 14.2	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外反して開く。	外面はハケ目整形。内面は口縁部がハケ目整形、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・バミス 明褐色 普通	90% P411 胴部外面に煤付着
		B 12.4				
		C 6.5				
5	甕形土器 土師器	B (15.8)	底部は欠損。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位よりやや上に持つ。頸部以上は欠損する。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒・バミス 赤色 普通	70% P412
6	高坏形土器 土師器	A 17.4	脚部は中位に4孔が穿たれ、「ハ」の字状に開く。坏部は内彎して開く。	外面は篋ナデ整形。内面は坏部の剝離が著しく整形技法は不明であるが、脚部は篋ナデ整形。	砂粒・バミス にぶい赤褐色 普通	100% P413
		B 14.6				
		D 11.3				
第184図 7	高坏形土器 土師器	B (6.5)	坏部は欠損。脚部は上位に3孔が穿たれ、「ハ」の字状に開くが裾部でわずかに外反する。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・バミス にぶい赤褐色 普通	35% P539
		D「11.4」				
8	埵形土器 土師器	A 11.5	平底。体部は内彎して開く。	内・外面とも口縁部は横ナデ、体部はナデ整形。	砂粒・バミス 赤褐色 普通	90% P414
		B 5.3				
		C 4.1				

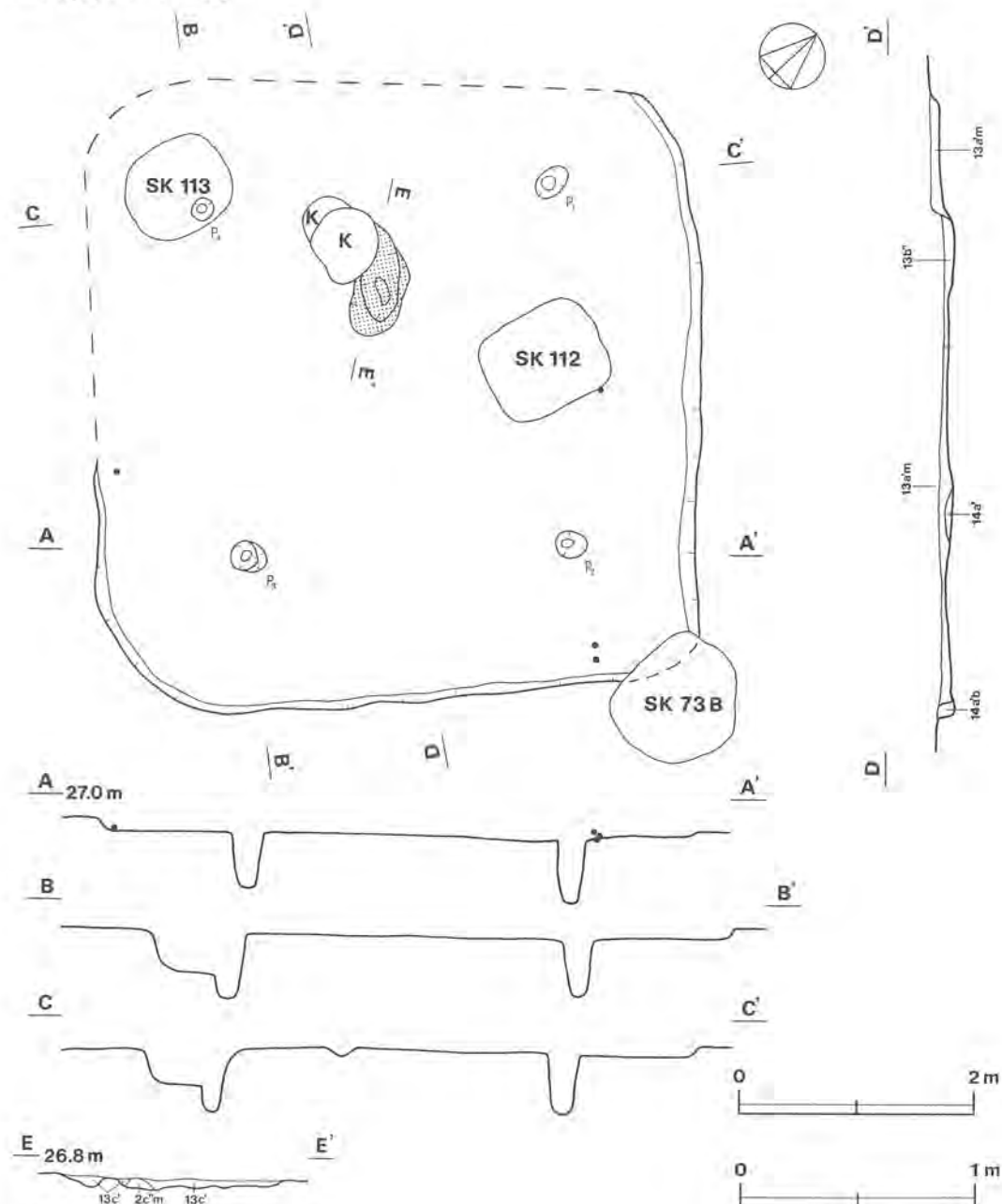
### 第93号住居跡（第185図）

本跡は、2次調査区のD11a<sub>1</sub>区を中心に確認された住居跡で、第94号住居跡の南東1mに位置している。本跡は東側で第73B号土坑と、北東側で第112号土坑と、西側で第113号土坑と重複している。本跡の床面が3基の土坑に切られていることから、本跡の方が古い時期の遺構と思われる。

本跡は、北西壁と南西壁が削平により湮滅しているため、形状や規模の詳細は不明であるが、残存する部分から推定すると1辺が5.3mほどの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-48°-Wを指すものと思われる。壁はロームで、緩やかな角度で立ち上がっており、壁高は3～9cmである。床面は平坦なロームで、中央部に硬く踏み固められた部分が検出された。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端直径24～28cm・深さ48～58cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を6cmほど掘り下げた地床炉

で、中央から1mほど北西側に確認された。平面形は、西側が攪乱されているために正確な形状は不明であるが、残存する部分から、長径95cm・短径40cmの楕円形状を呈するものと思われる。炉内には、中・多量の焼土粒子を含む暗褐色土や暗赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、極めて浅い単一層で、中量のローム粒子等を含む締まりのある褐色土であるが、上面から攪乱されている。

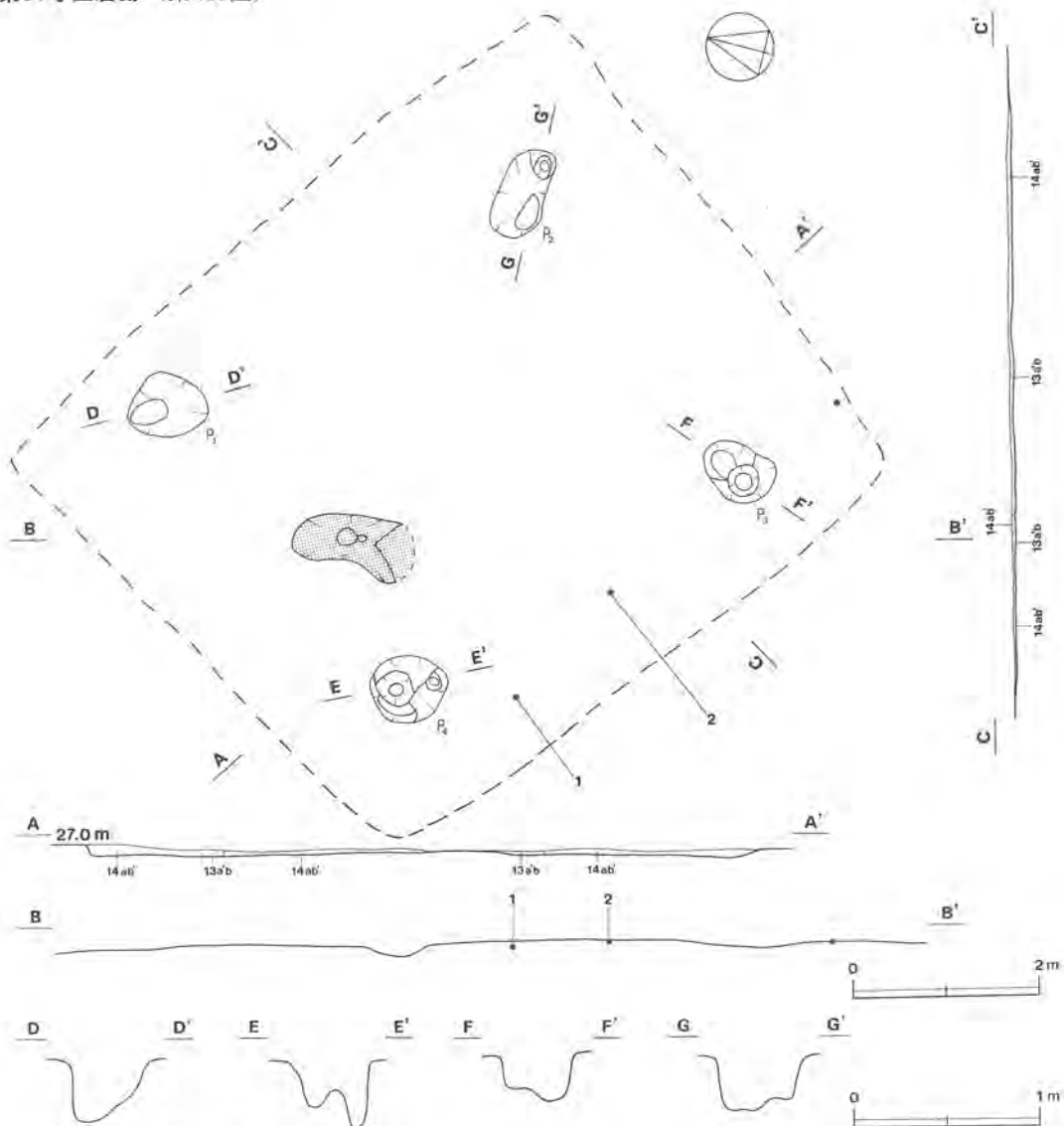


第185図 第93号住居跡実測図

遺物は、土師器片81点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。床面からも4点の土師器片が出土しているが、いずれも小破片であり図示することはできなかった。覆土中からは、埴形土器胴部片やハケ目が施された胴部片等が出土している。

本跡は、遺物から明確に時期を決定することはできないが、遺物がハケ目を有することや、炉が中央からやや北西側に位置するなど当遺跡における一般的な古墳時代前期住居跡の形態の特徴を示していることなどから、同前期の住居跡と推定される。

第94号住居跡 (第186図)



第186図 第94号住居跡実測図

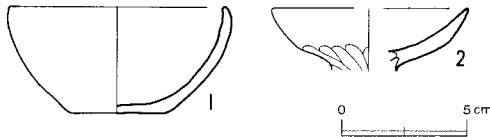
本跡は、2次調査区のC10j<sub>0</sub>区を中心に確認された住居跡で、第93号住居跡の北西1m、第86号住居跡の南西9.5mに位置している。

本跡は、削平のため平面形や規模等の詳細は不明であるが、柱穴の位置から推定すると、長軸7m、短軸6mほどの長方形を呈するものと思われる。床面は緩やかな起伏を呈するロームであるが、攪乱が多く、炉の南側や南東側に硬く踏み固められた部分が検出されただけである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端長径78～90cm・深さ43～77cmであり、4本とも本跡の主柱穴と判断した。断面形が段状を呈していることから、本跡は同一遺構内で建て替えが行われた可能性が考えられる。炉は、床面を4cmほど掘り下げた地床炉で、P<sub>4</sub>から1.7mほど北東側に確認された。平面形は南側が攪乱されているが、推定長径130cm・短径66cmの楕円形状を呈するものと考えられ、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、極めて浅く、中量のローム粒子を含む暗褐色土、中量のローム粒子やローム小ブロックを含む褐色土が堆積している。

遺物は、土師器及びその破片2点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、南西部の床面から出土した第187図1の埴形土器や2の器台形土器器受部である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第187図 第94号住居跡出土遺物実測図

第94号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第187図 1	埴形土器 土師器	A 8.8	平底。体部は内彎して開く。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・バミス 橙色 普通	60% P415
		B 4.3				
		C 4.0				
2	器台形土器 土師器	A 「8.0」 B (2.5)	器受部片。器受部は内彎気味に開く。	外面は篋磨き、内面はナデ整形。	砂粒・バミス 暗赤褐色 普通	20% P416

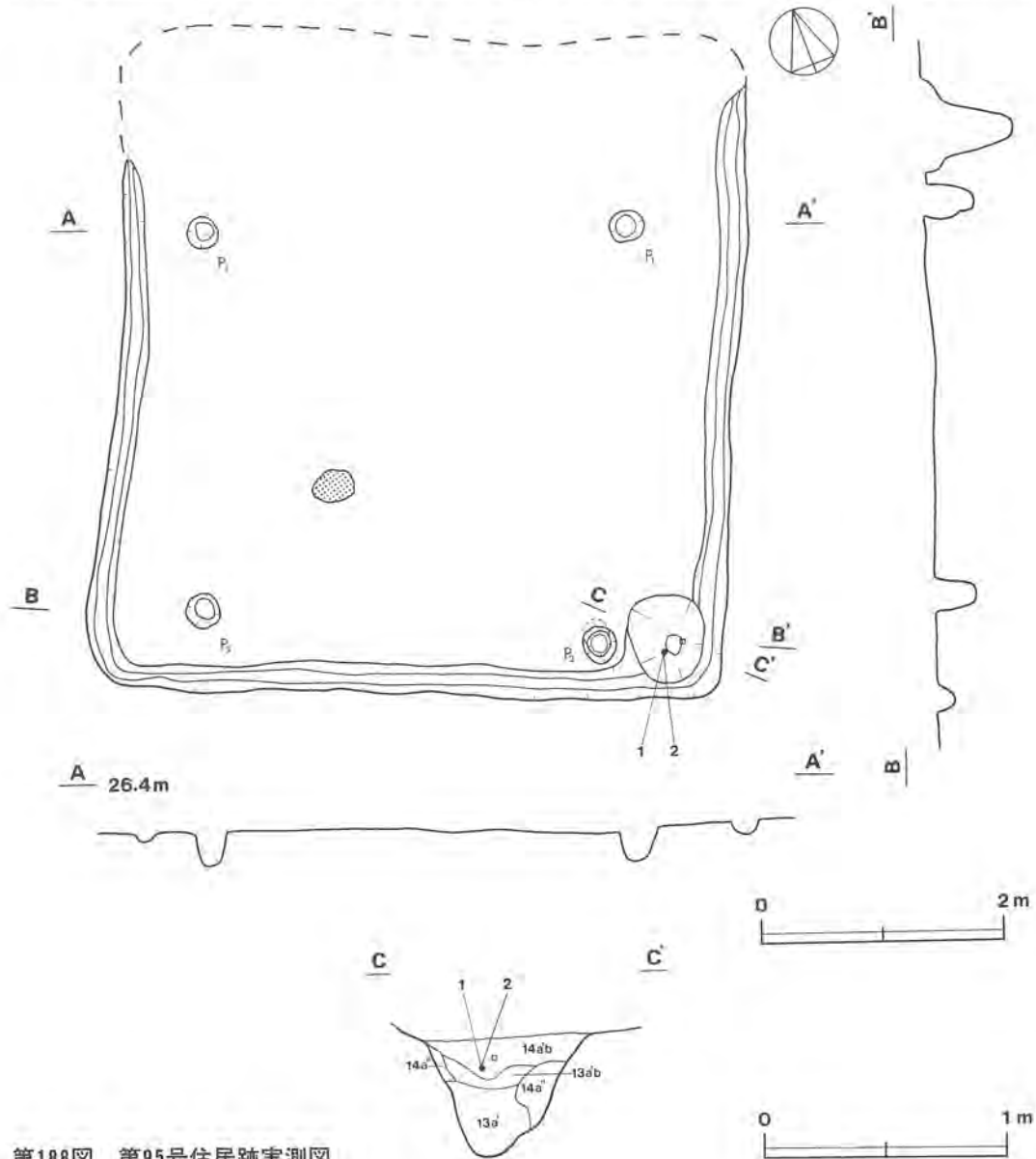
### 第95号住居跡 (第188図)

本跡は、2次調査区のC11g<sub>0</sub>区を中心に確認された住居跡で、第91号住居跡の東5mに位置している。

本跡は、削平のため形状・規模等の詳細は不明であるが、壁溝や柱穴、貯蔵穴の位置から推定



すると、1辺が5mほどの方形で、主軸方向はN-66°-Wを指すものと思われる。壁はロームで、壁高は6~9cmである。南壁や南東コーナー付近の壁は75度前後の角度で立ち上がっているが、北壁や東、及び西コーナー付近は削平により湮滅している。壁溝は、上幅16~26cm・深さ9~16cmで、北部を除いて全周している。床面はロームで、P<sub>3</sub>や貯蔵穴の周囲及び中央部に硬く踏み固められた部分が検出された。ピットは4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径26~28cm・深さ28~40cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面をそのまま利用したと考えられる地床炉で、南西部に確認された。平面形は、長径35cm・短径27cmの楕円形で、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南



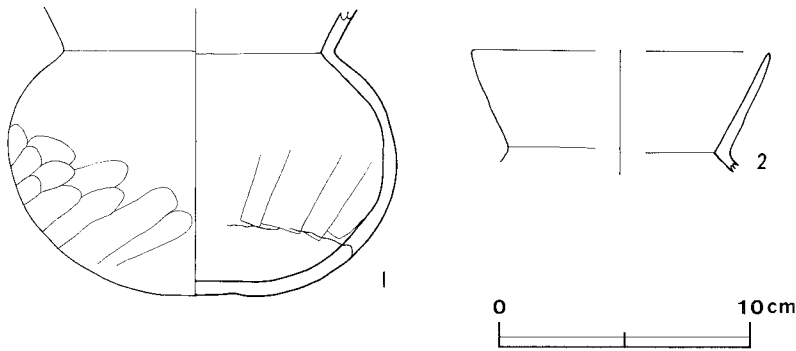
第188図 第95号住居跡実測図

東コーナーの壁際に位置している。平面形は、長径71cm・短径64cmの楕円形で、深さは73cmほどである。貯蔵内には、中・多量のローム粒子等を含む褐色土、少・中量のローム粒子を含む暗褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、削平されており、土層観察用ベルトを設定することができなかった。

遺物は、土師器及びその破片64点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、貯蔵穴内の覆土下層から正位の状態で出土した第189図1・2の小形壺形土器とその口縁部である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第189図 第95号住居跡出土遺物実測図

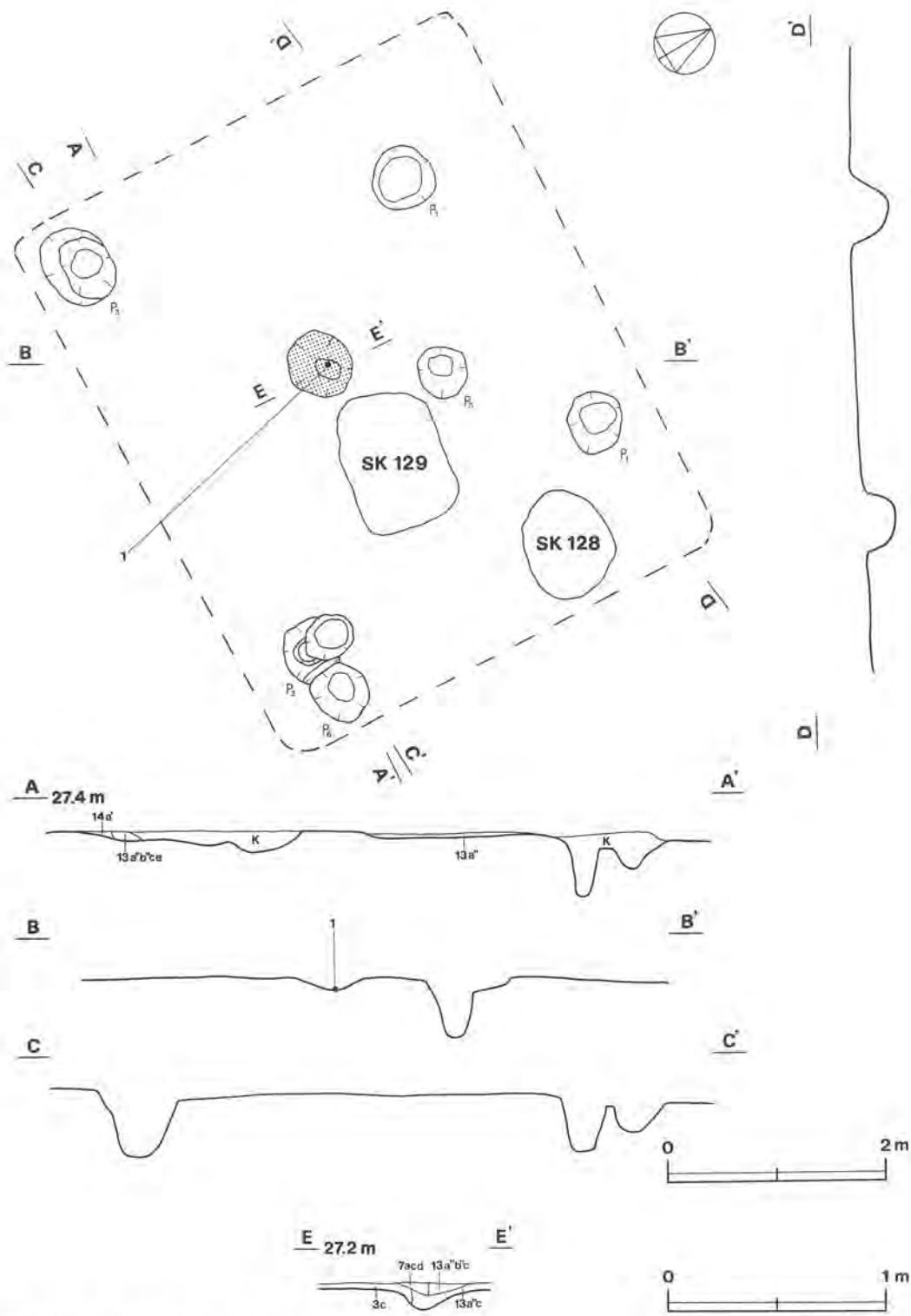
第95号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第189図 1	小形壺形 土器 土師器	B(11.5) C 5.3	平底。胴部は扁平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。頸部は「く」の字状に立ち上がるが、口縁部は欠損する。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	75% P417
2	小形壺形 土器 土師器	A「12.0」 B (4.9)	口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は、内面に稜を持つ頸部から「く」の字状に外傾して開く。	内・外面ともナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	10% P418

第97号住居跡（第190図）

本跡は、2次調査区のC10j<sub>4</sub>区を中心に確認された住居跡で、第100号住居跡の北8.5mに位置している。本跡は北東側で第128号土坑、中央部で第129号土坑と重複しているが、本跡の床面が2基の土坑に切られていることから、本跡は第128・129号土坑より古い時期の遺構と思われる。

本跡は、削平のため形状や規模等の詳細は不明であり、床面が露出して検出されたため、壁の立ち上がりは認められない。床面はロームで、炉の南東側に硬く踏み固められた部分が検出され

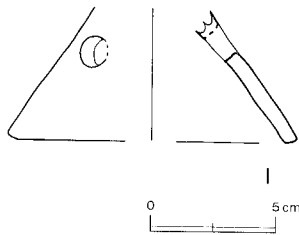


第190图 第97号住居跡実測図

ただけである。ピットは、6か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は、上端長径58～76cm・深さ29～63cmである。形状や規模に不揃いの感はあるが、配置からP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は本跡に伴う主柱穴であり、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は補助的な機能を有する柱穴と思われる。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、中央部に確認され、平面形は、長径64cm・短径56cmの楕円形である。炉内には、多量の焼土粒子や焼土小・中ブロック等を含む暗褐色土、暗赤褐色土、及び赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、削平されており、多量のローム粒子等を含む暗褐色土の堆積が部分的に観察されただけである。

遺物は、炉内から土師器1点が出土しただけである。第191図1の高坏形土器脚部は炉床から正位の状態で出土したものであり、出土状況等から、本跡に伴うものと思われる。



本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

第191図 第97号住居跡  
出土遺物実測図

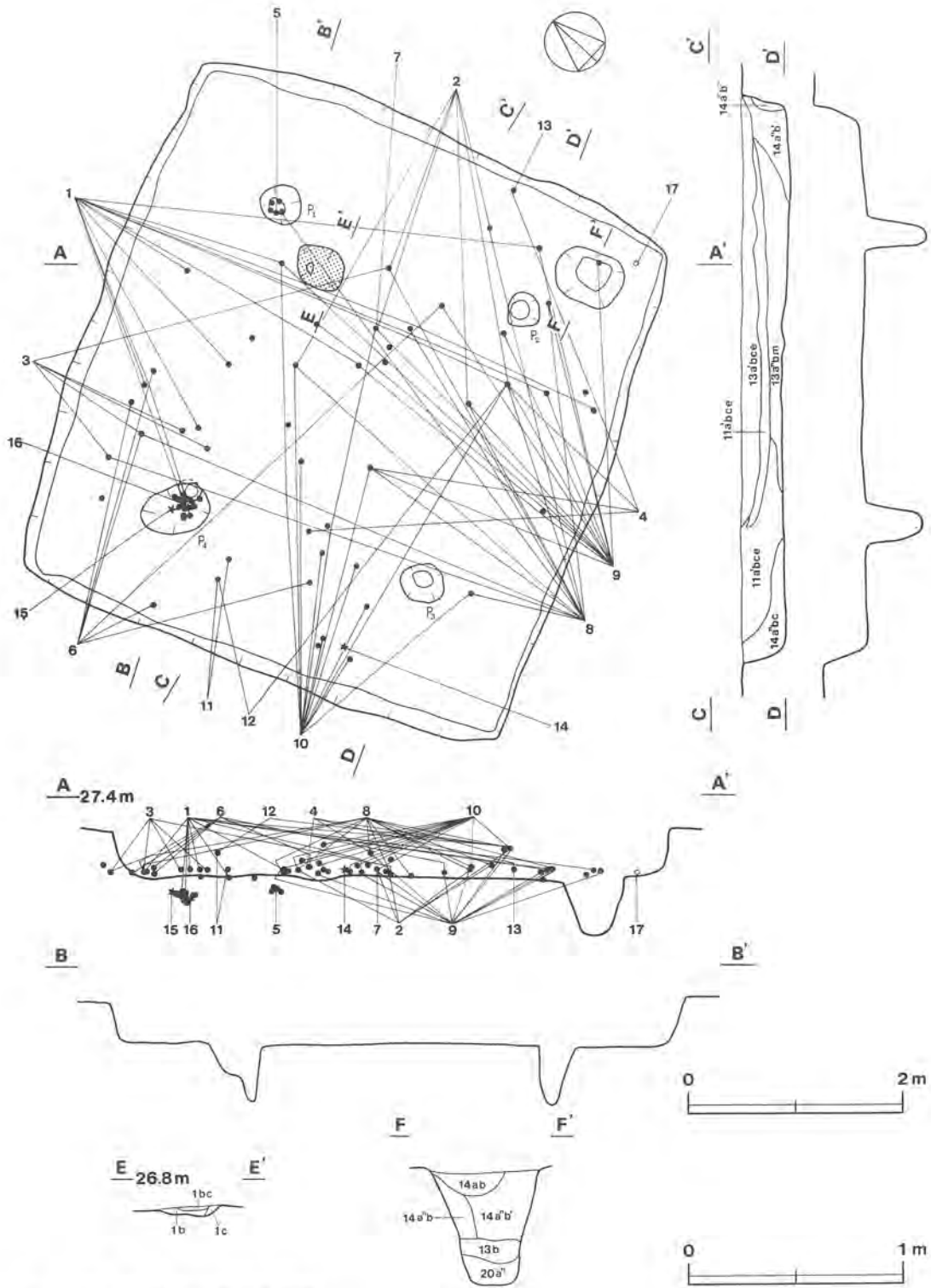
#### 第97号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図 1	高坏形土器 土師器	B (5.3) D「11.6」	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。 孔が穿たれている。	内・外面ともナデ整形。	砂粒・バミス 赤褐色 普通	20% P420

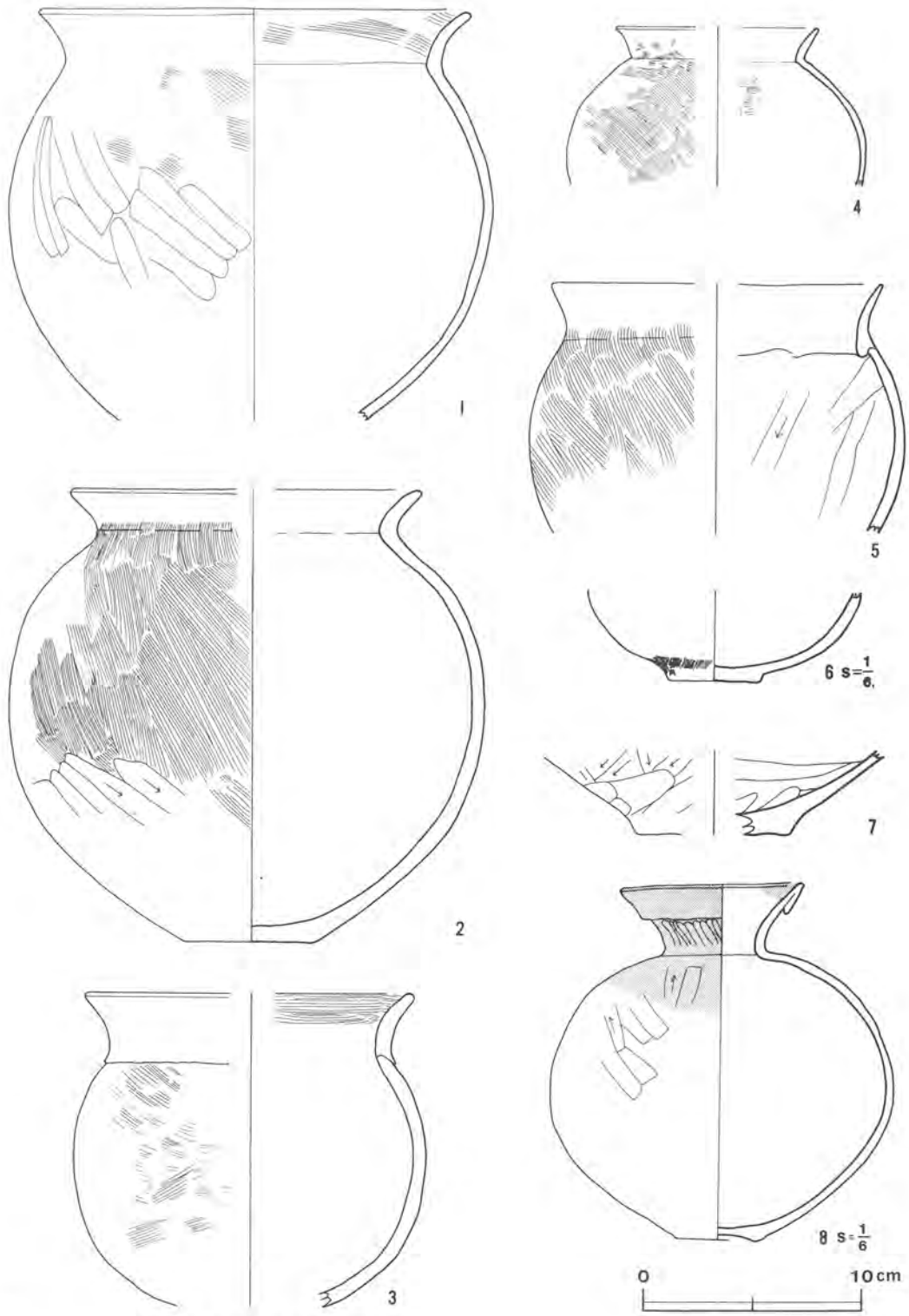
#### 第100号住居 (第192図)

本跡は、2次調査区のD10d<sub>3</sub>区を中心に確認された住居跡で、第97号住居跡の南8.5mに位置している。

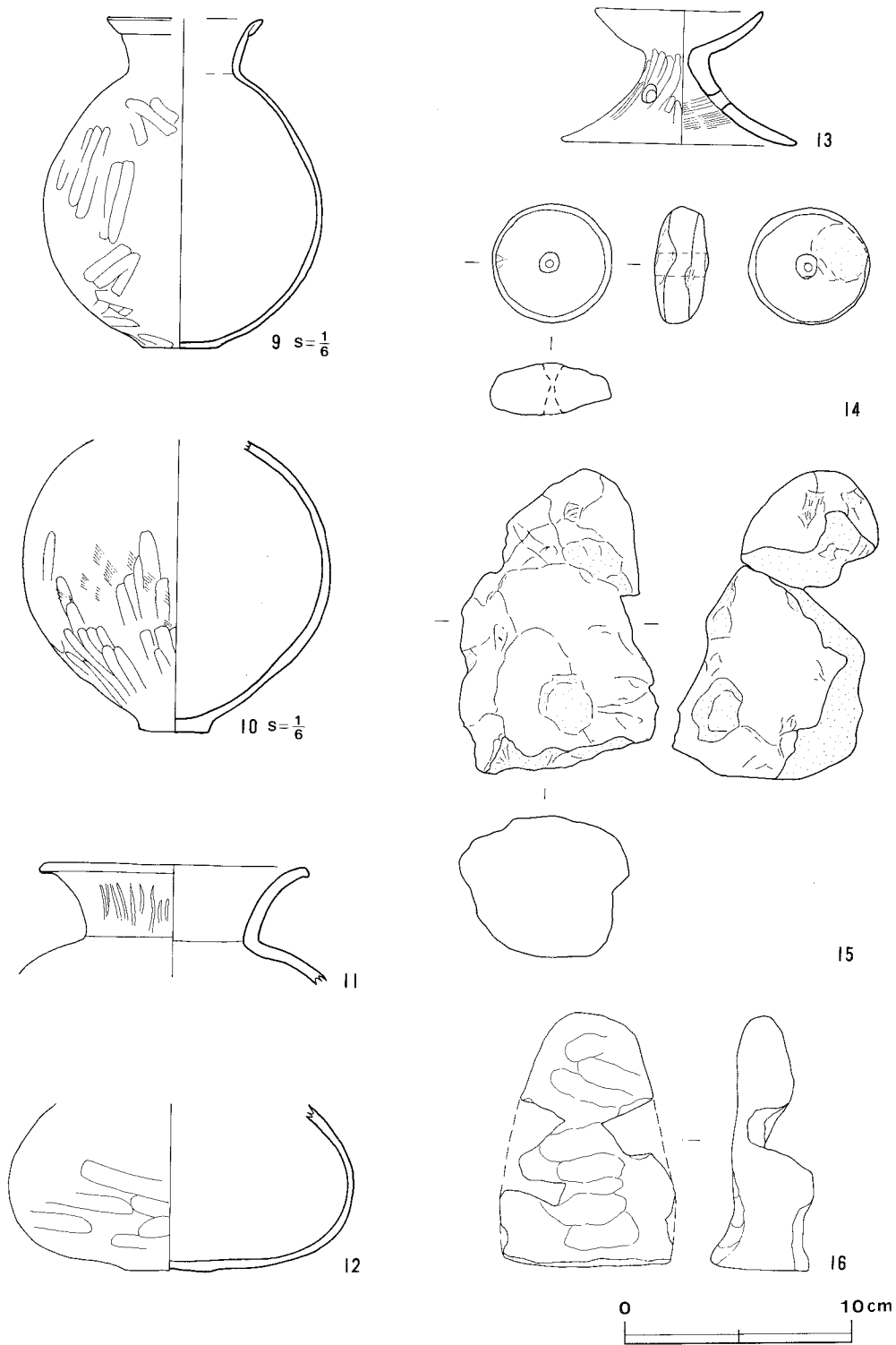
平面形は、長軸5.38m・短軸5.00mの方形を呈し、主軸方向はN-67°-Eを指している。床面積は23.5㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に近い角度で立ち上がっており、壁高は34～48cmである。床面はほぼ平坦で、締まりのあるロームである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端長径33～50cm・深さ52～61cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う主柱穴と判断した。炉は、床面を4cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.4mほど北東側に確認され、平面形は、長径52cm・短径39cmの楕円形である。炉内には、少量の焼土粒子や焼土小ブロックを含む極暗赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締められ



第192图 第100号住居跡実測图



第193图 第100号住居跡出土遺物実測図-1



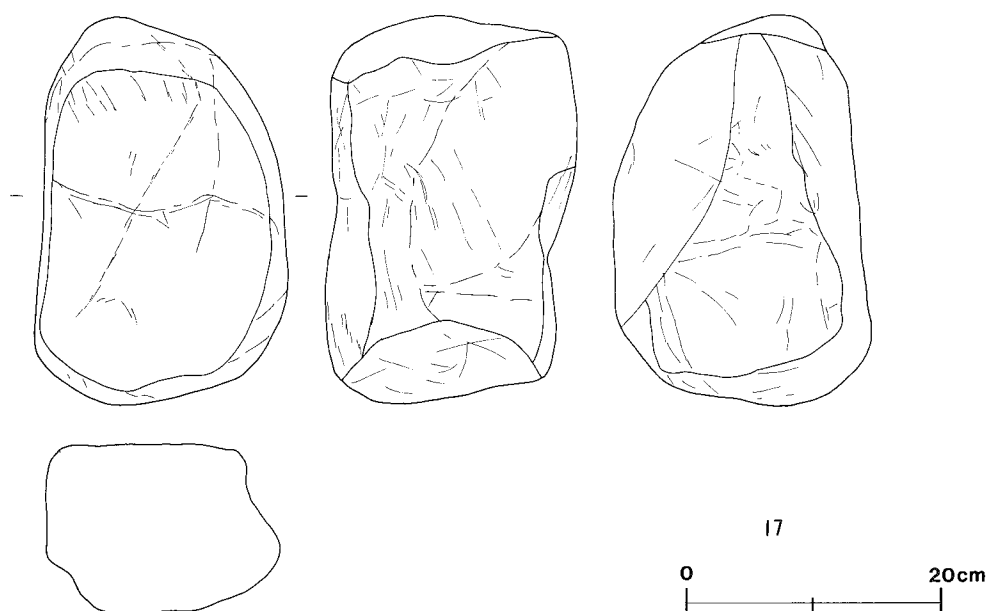
第194图 第100号住居跡出土遺物実測図-2

ている。貯蔵穴は、南東コーナーに位置している。平面形は、直径54cmほどの円形で、深さは52cmほどである。貯蔵穴内には、少量のローム粒子や少・中量のロームブロックを含む褐色土、極少量のロームブロックを含む暗褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、上層に中量のローム粒子、少量の炭化粒子や焼土粒子等を含む暗褐色土、黒褐色土、下層に多量のローム粒子や少量のローム小ブロック等を含む暗褐色土、壁際には多量のローム粒子や少・中量のローム小ブロックを含む褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層でレンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

遺物は、土師器及びその破片739点、土製の支脚2点、土製紡錘車1点、砥石1点のほかに流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、床面全体から出土している。第193図・第194図・第195図3の甕形土器が北西コーナー付近、7の甕形土器底部が中央部、13の器台形土器が東壁中央部付近にまとまって出土している。1・2・4・5の甕形土器や6の甕形土器底部、8～12の壺形土器とその口縁部は広い範囲にわたって接合関係を示している。出土層位が床面から覆土上層、ピット内にまで及んでいることから、攪乱の影響を受けているものと思われる。14の土製紡錘車は西壁付近、15と16の支脚はP<sub>4</sub>の底面、17の砥石は南東コーナー付近の床面から出土したものである。出土状況等から考えて、1～17は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第195図 第100号住居跡出土遺物実測図-3



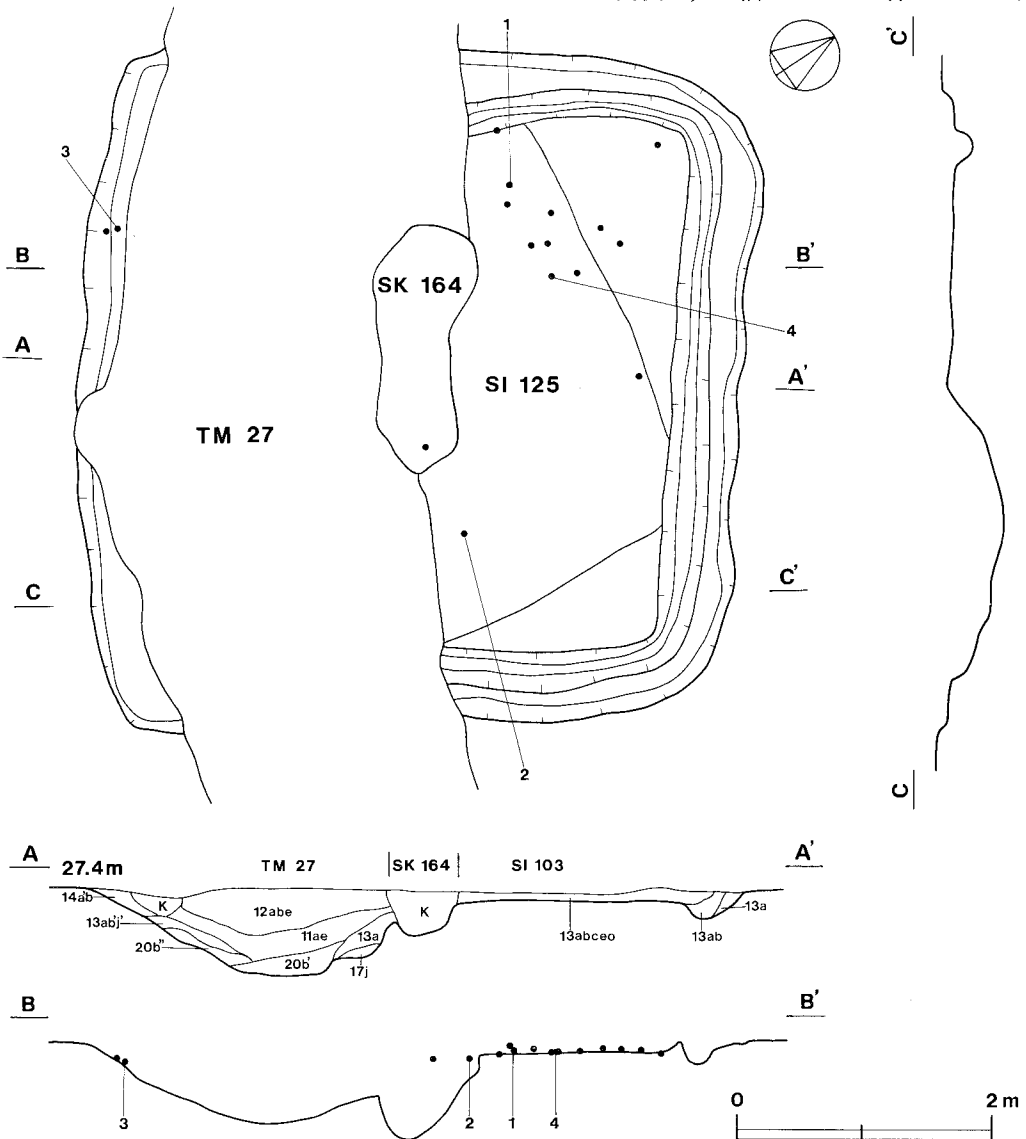
第100号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第193図 1	甕形土器 土師器	A 19.9	胴下半部以下は欠損。胴部は球形形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	外面は口縁部が横ナデ、胴部は篋ナデ整形であるがハケ目痕が部分的に残る。内面は口縁部がハケ目、胴部はナデ整形。	砂粒・パミス に ぶ い 黄 褐色 普通	75% P 423 胴部外面に煤付着
		B (19.0)				
2	甕形土器 土師器	A「16.2」	平底。胴部は球形形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から強く外反して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。胴部は、外面が上半部から中央部にかけてハケ目、下半部は篋ナデ整形、内面はナデ整形。	砂粒・パミス 褐色 普通	30% P 424
		B 20.9				
		C 6.2				
3	甕形土器 土師器	A「15.2」	底部は欠損。胴部は球形形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は、外面に接合痕を残す頸部から外反して開く。	外面は口縁部が横ナデ、胴部はハケ目整形。内面は口縁部がハケ目、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	40% P 425
		B (14.5)				
4	甕形土器 土師器	A「18.6」	口縁部から胴中央部にかけての破片。口縁部は、内面に稜をもつ頸部から「く」の字状に外反して開く。	口縁部は内・外面ともハケ目整形。胴部は外面がハケ目、内面は篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	25% P 426
		B (14.6)				
5	甕形土器 土師器	A「15.2」	口縁部から胴中央部にかけての破片。口縁部は、内面に接合痕を残す頸部から外反して開く。	口縁部は内・外面ともナデ整形。胴部は外面がハケ目、内面は篋ナデ整形。	砂粒・パミス に ぶ い 赤 褐色 普通	30% P 427
		B (11.5)				
6	甕形土器 土師器	B (8.2)	突出した平底。胴部は内彎して立ち上がるが、中央部以上は欠損する。	外面はナデ整形。内面はハケ目整形後、ナデ。	砂粒・パミス に ぶ い 褐色 普通	15% P 428
		C 8.5				
7	甕形土器 土師器	B (3.9)	突出した平底。胴部は内彎して立ち上がる。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・パミス に ぶ い 褐色 普通	5% P 429
		C 「7.0」				
8	壺形土器 土師器	A 17.0	上げ底。胴部は球形形状を呈し、最大径を中立に持つ。口縁部は複合口縁で、頸部から外反して開く。	外面は口縁部がナデ、頸部及び胴部は篋ナデ整形。口縁部と頸部には赤彩痕が残る。内面は口縁部がナデ整形。	砂粒・パミス に ぶ い 橙色 普通	80% P 430
		B 32.8				
		C 8.1				
第194図 9	壺形土器 土師器	A「13.8」	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。頸部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反気味に開く複合口縁である。	外面は口縁部が横ナデ、頸部はナデ、胴部は篋ナデ整形。内面は口縁部が横ナデ、頸部から胴部はナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	50% P 431
		B 29.5				
		C 6.6				
10	壺形土器 土師器	B (26.1)	頸部以上は欠損。突出した平底。胴部は内彎して立ち上がり、球形形状を呈し、最大径を中位に持つ。	外面は篋ナデ整形で、ハケ目痕が部分的に残る。内面は、剥落が著しく整形技法不明。	砂粒・パミス 赤褐色 普通	60% P 432
		C 6.1				
11	壺形土器 土師器	A 11.6	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反して開く。	外面は口縁部が横ナデ、頸部が篋磨き整形。内面は横ナデ整形。	砂粒・パミス に ぶ い 褐色 普通	10% P 433
		B (5.0)				
12	壺形土器 土師器	B (7.4)	胴上半部以上は欠損。上げ底。胴部は内彎して立ち上がり、扁平な球形形状を呈する。	外面は丁寧な篋ナデ整形。内面はハケ目整形後、ナデ。	砂粒・パミス に ぶ い 褐色 普通	20% P 437
		C 3.6				
13	器台形土器 土師器	A 7.5	脚部は中位に3孔が穿たれ、ラップ状に開く。器受部は内彎して開く。接合部に中央孔を持つ。	器受部は内・外面ともナデ整形。脚部は、外面が篋磨き整形、内面はハケ目整形。	砂粒・スコリア 赤色 普通	90% P 435
		B 6.0				
		D 10.4				

第103号住居跡 (第196図)

本跡は、2次調査区のD10f<sub>0</sub>区を中心に確認された住居跡で、第105号住居跡の西5.5mに位置している。本跡は第125号住居跡の上に貼床をして構築された遺構であり、南側で第27号古墳と、中央部で第164号土坑と重複している。本跡は、出土遺物から第125号住居跡より新しく、土層から判断すると第27号古墳より古い時期の遺構と思われる。また、本跡の床面を第164号土坑が切っていることから土坑より古い時期の遺構であるが、土坑と古墳の新旧関係は不明である。

平面形は、長軸5.32m・短軸5.30mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-54°-Wを指すものと思われる。床面積は25.2㎡である。壁はロームで、50度前後の緩やかな角度で立ち上がっており、壁高は8~13cmである。壁溝は、壁際から10~30cmほど内側に、上幅20~34cm・深さ12~21cmの



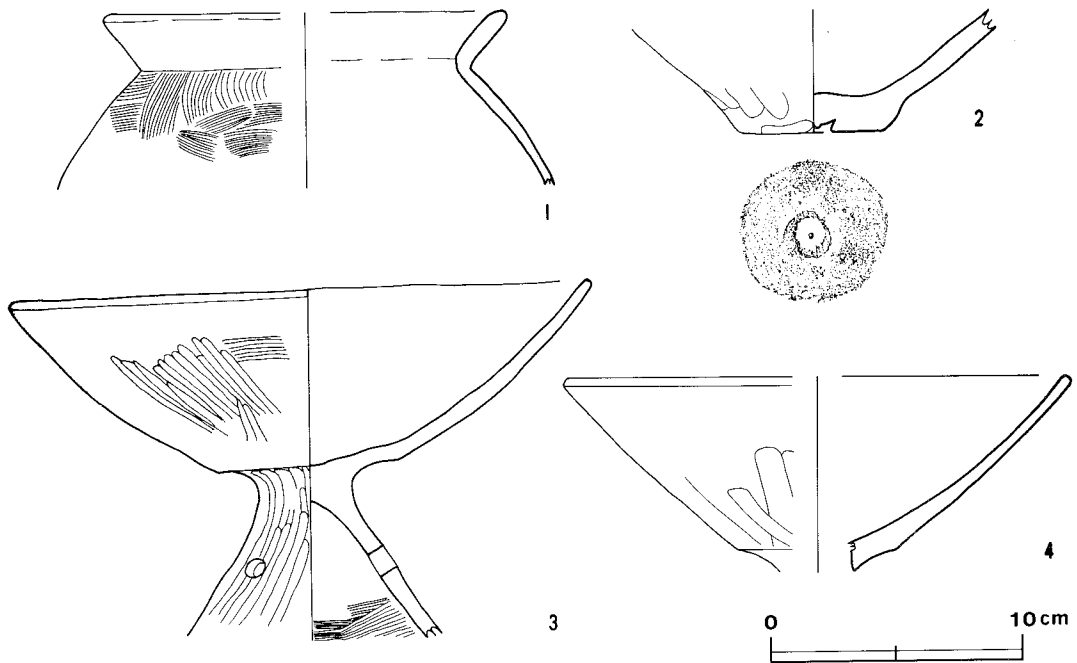
第196図 第103号住居跡実測図

規模で掘られており、重複部を除いて検出された。床面は平坦で、壁溝に囲まれる内側が硬く踏み固められた暗褐色土、外側はロームであることから、本跡は第125号住居跡上に貼床をして構築されたものと判断した。ピットや炉、及び貯蔵穴は検出されなかった。

覆土は、中央部に少量のローム粒子やローム小ブロック等を含む暗褐色土、壁際に少・中量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含む褐色土が堆積している。本跡は、第27号古墳に大きく切られているが、堆積状況から自然堆積と思われる。

遺物は、土師器及びその破片39点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、北部の床面から出土した第197図1の甕形土器や4の高环形土器坏部、東部の床面から出土した2の甕形土器底部、南西壁際の床面に潰れた状態で出土した3の高环形土器である。このほかに、床面からはハケ目が施された甕形土器の胴部片や、折り返しをもつ壺形土器口縁部片等が出土しているが、小破片であり図示することはできなかった。出土状況等から考えて、1～4は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第197図 第103号住居跡出土遺物実測・拓影図

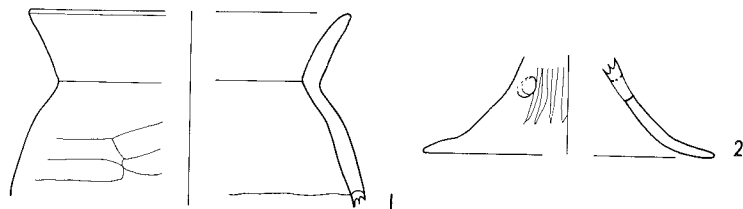
第103号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第197図 1	甕形土器 土師器	A「16.0」 B (7.0)	口縁部から胴上半部にかけての破片。口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。胴部は外面がハケ目整形、内面は剝落が著しく整形技法不明。	砂粒に ぶい褐色 普通	10% P439
2	甕形土器 土師器	B (4.9) C 5.7	平底。胴部は内彎して立ち上がる。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒・バミス 明赤褐色 普通	10% P440
3	高坏形土器 土師器	A 23.3 B (14.0)	脚部は「ハ」の字状に開くが、裾部は欠損する。3孔が穿たれている。坏部は下位に弱い稜を持ち、内彎気味に開く。	坏部は外面が篋磨き、内面はナデ整形。脚部は外面が篋磨き、内面はハケ目整形。	砂粒・バミス ぶい褐色 普通	75% P441
4	高坏形土器 土師器	A「20.1」 B (7.8)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に開く。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形。	小礫 ぶい赤褐色 普通	15% P544

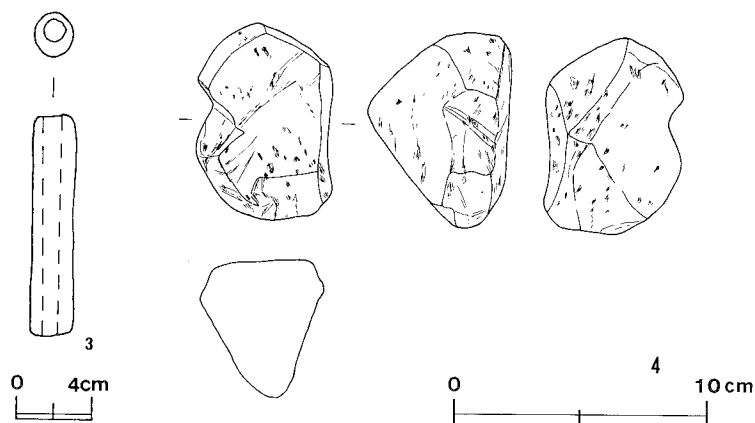
第104号住居跡 (第199図)

本跡は、2次調査区のD11d<sub>7</sub>区を中心に確認された住居跡で、第108号住居跡の北7.5mに位置している。本跡は北東側で第157号土坑と重複しているが、床面を土坑が切っていることから、本跡の方が古い時期の遺構と思われる。

本跡は、削平のために形状や規模等の詳細は不明である。床面が露出して検出されたため、壁



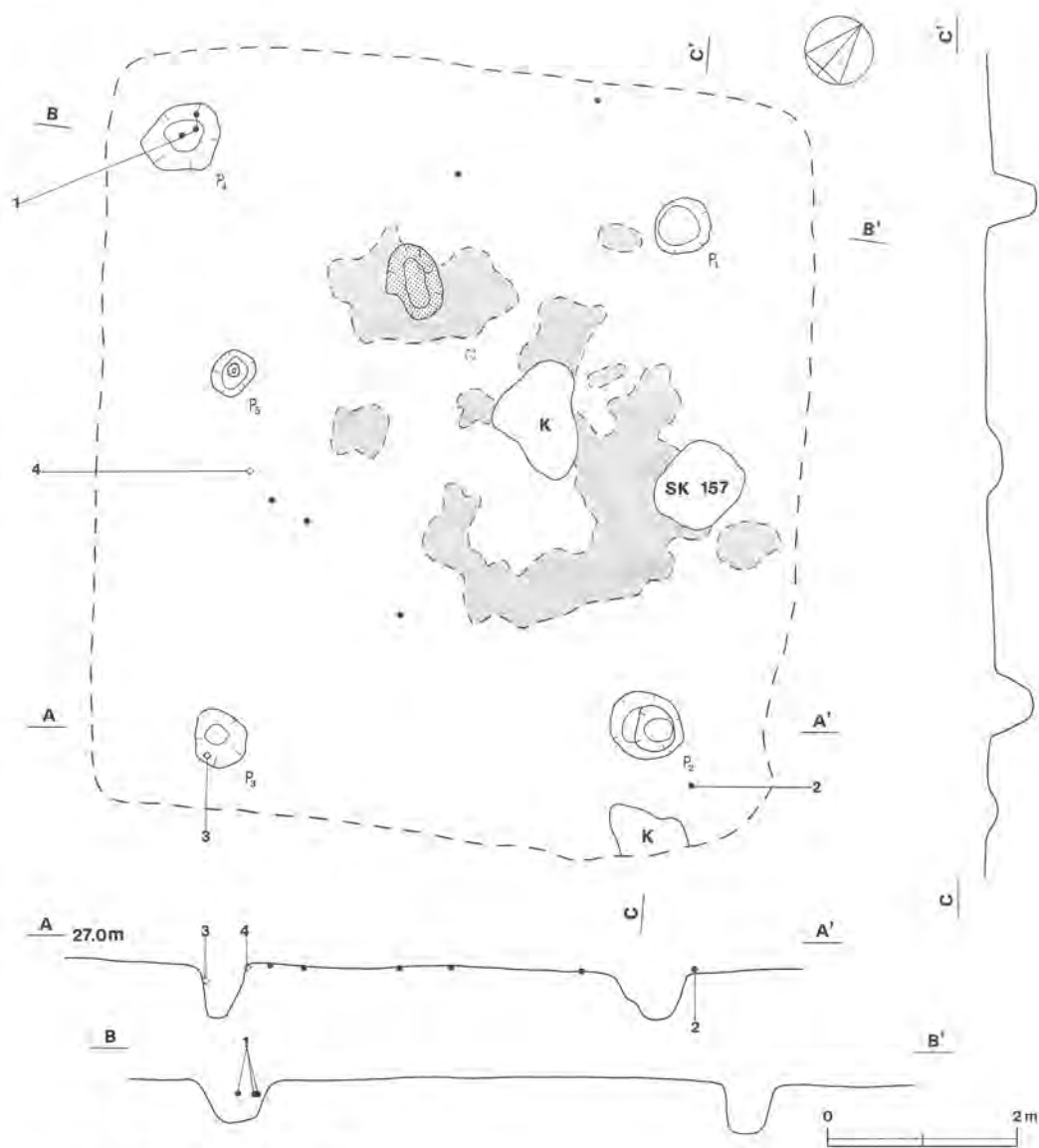
の立ち上がりは認められなかったが、炉や柱穴の配置から長方形を呈するものと思われる。床面は平坦なロームで、炉の周囲に硬く踏み固められた部分が検出されただけである。ピットは、5か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端長径58~80cm・深さ45~62cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、本跡に伴う主柱穴と判断した。P<sub>5</sub>は、上端長径51cm・



第198図 第104号住居跡出土遺物実測図

深さ21cmでP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>に比べて小規模であり、補助的な機能を有する柱穴と思われる。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、中央から2mほど北西側に確認され、平面形は、長径84cm・短径64cmの楕円形状である。炉内には、多量の焼土粒子や少~多量の焼土小ブロック等を含む暗褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は検出されなかった。

覆土は、極めて浅い単一層で、中量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含む暗褐色土が堆積している。また、中央部に炭化物や焼土を含む層が検出されたことから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期については、焼土や炭化材が床面にみられることから、本跡の居住期間中と思われる。



第199図 第104号住居跡実測図

遺物は、土師器及びその破片317点、管玉1点、浮子1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。第198図1の甕形土器は西コーナー付近、2の器台形土器脚部は東コーナー付近の床面から出土したものである。3の管玉はP<sub>3</sub>からの出土である。4の浮子は覆土からの出土であり、本跡との関係は不明である。このほかに、ハケ目が施された甕形土器の口縁部片、胴部片等が出土しているが、小破片であり図示することはできなかった。出土状況等から考えて、1～3の遺物が本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

第104号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第198図 1	甕形土器 土師器	A「12.8」 B (7.8)	口縁部から胴上半部にかけての破片。口縁部は頸部から外反して開く。	内・外面とも口縁部はナデ、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・パミス 明褐色 普通	15% P442
2	器台形土器 土師器	B (3.9) D「11.5」	脚部片。脚部はラッポ状に開き、裾部で緩やかに広がる。孔が穿たれている。	外面は篋磨き整形。内面は篋ナデ整形。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	10% P444

### 第107号住居跡 (第200図)

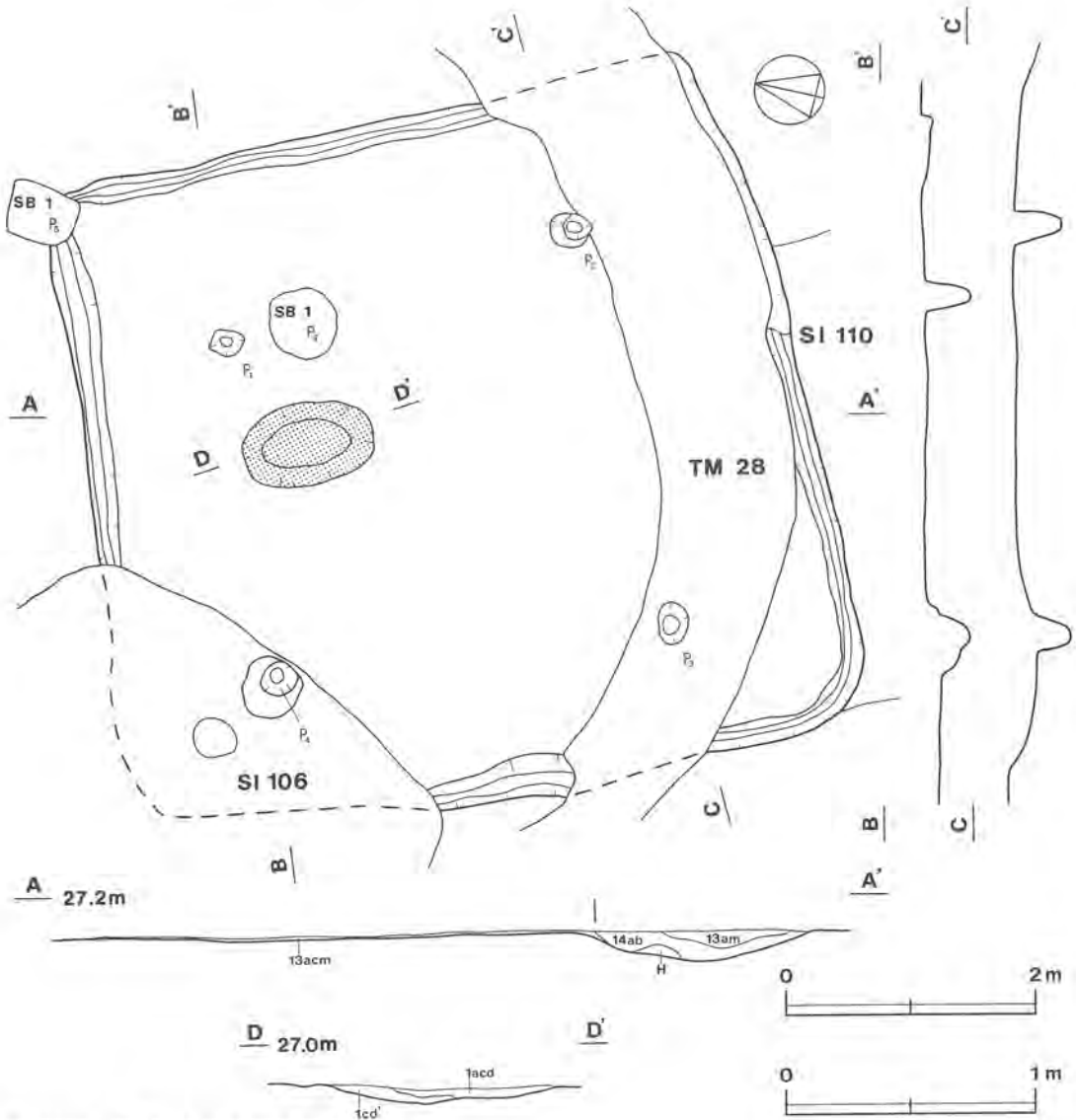
本跡は、2次調査区のD11h<sub>5</sub>区を中心に確認された住居跡で、第108号住居跡の西2mに位置している。本跡は北西側で第106号住居跡、南側で第28号古墳及び第110号住居跡と、北側で第1号掘立柱建物跡と重複している。本跡は、出土遺物から第106号住居跡よりも新しく、土層から判断すると第28号古墳よりも古い時期の遺構と思われるが、第110号住居跡及び第1号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

平面形は、長軸5.78m・推定短軸5.58mの方形を呈し、主軸方向はN-22°-Wを指している。床面積は30㎡と推定される。壁はロームで、壁高は3～5cmである。残存している東壁と北壁は、70～80度の角度で外傾して立ち上がっている。壁溝は、上幅16～35cm・深さ5～6cmで、本来は全周していたと考えられるが、重複している南東コーナーや北西コーナーの付近には検出されなかった。床面は平坦で、硬く踏み締められたロームである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端長径30～36cm・深さ25～39cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡の支柱穴と判断した。炉は、床面を5cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1mほど北側に確認され、平面形は、長径104cm・短径68cmの楕円形である。炉内には、少量の焼土粒子や少・中量の焼土小ブロックを含む極暗赤褐色土が堆積しており、炉床は凹凸を呈しレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、少量のローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土が浅く堆積しているだけである。

遺物は、土師器及びその破片279点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、南西壁際の床面や炉内から出土したハケ目が施された甕形土器の口縁部片や胴部片、埴形土器の口縁部片であるが、いずれも小破片であり図示することはできなかった。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と推定される。



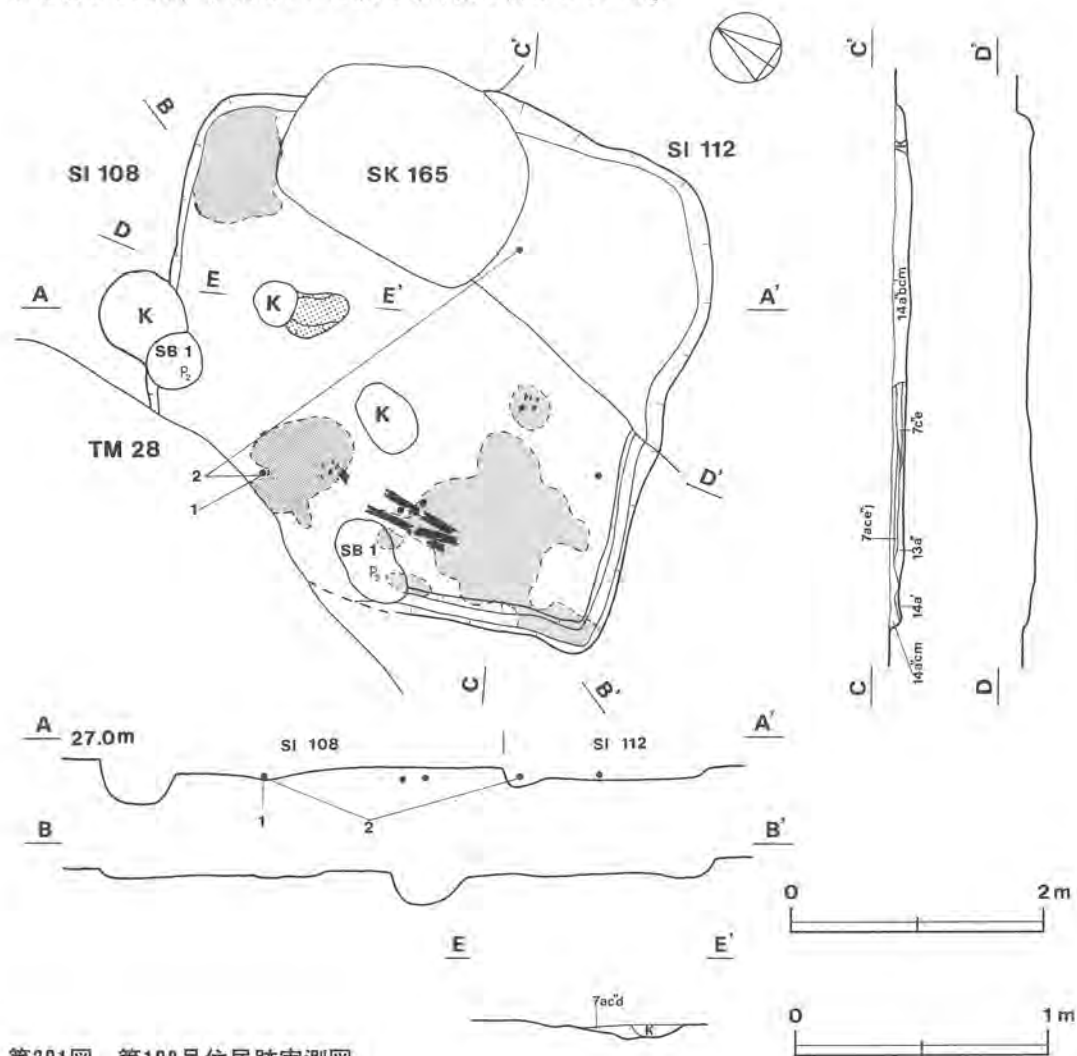
第200図 第107号住居跡実測図

第108号住居跡 (第201図)

本跡は、2次調査区のD11g<sub>7</sub>区を中心に確認された住居跡で、第104号住居跡の南7.5mに位置している。本跡は西側で第28号古墳、北西側で第1号掘立柱建物跡と、南東側で第112号住居跡、東

側で第165号土坑と重複している。本跡は床面が切られていることから、第28号古墳や第112号住居跡、第165号土坑よりも古い時期の遺構と思われるが、第1号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

平面形は、長軸4.22m・短軸4.12mの方形を呈し、主軸方向はN-24°-Wを指している。床面積は14.7㎡と推定される。壁はロームで、50~60度の角度で緩やかに立ち上がっており、壁高は6~10cmである。壁溝は、上幅19~23cm・深さ4cmであり、南西コーナー付近の壁直下に検出された。床面は平坦なロームで、炉の周囲は硬く踏み固められている。ピットは検出されなかった。炉は、床面を7cmほど掘り下げた地床炉で、中央から90cmほど北西側に確認された。平面形は、北側が攪乱されているが、長径60cm・短径35cmほどの楕円形を呈するものと推定される。炉内には、少量の焼土粒子を含む黒褐色土、多量の焼土粒子や少量の焼土小ブロックを含む暗赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。



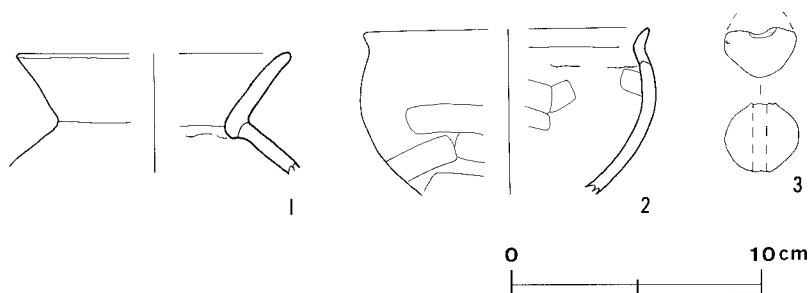
第201図 第108号住居跡実測図



覆土は、多量のローム粒子や中量の焼土粒子等を含む褐色土、多量のローム粒子や炭化物を含む暗褐色土が堆積している。また、北東や南西のコーナー付近、及び北西部の床面に炭化材や焼土を含む層が検出されていることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、多量の焼土粒子や焼土小ブロック等を含む暗赤褐色土、多量の炭化物や少量の焼土粒子を含む黒褐色土層の下に、多量のローム粒子を含む褐色土層がみられることから、本跡の廃絶後と思われる。

遺物は、土師器及びその破片103点、球状土錘1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片1点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、西部の床面から出土した第202図1の甕形土器の口縁部や、東部と西部の床面から出土した破片を接合した2の埴形土器である。3の球状土錘は覆土からの出土であり、本跡との関係は不明である。

本跡は、柱穴や貯蔵穴をもたないことから住居跡以外の性格も考えられるが、炉をもつことから、ここでは住居跡として扱った。出土遺物から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第202図 第108号住居跡出土遺物実測図

第108号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第202図 1	甕形土器 土師器	A「11.0」 B (4.8)	口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は、内面に接合痕を持つ頸部から外傾して開く。	内・外面ともナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	10% P450
2	埴形土器 土師器	A「11.3」 B (6.6)	口縁部から体部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は内面に稜を持つ頸部から外反気味に開く。	内・外面とも口縁部は横ナデ、体部は籠ナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	20% P451

第110号住居跡 (第203図)

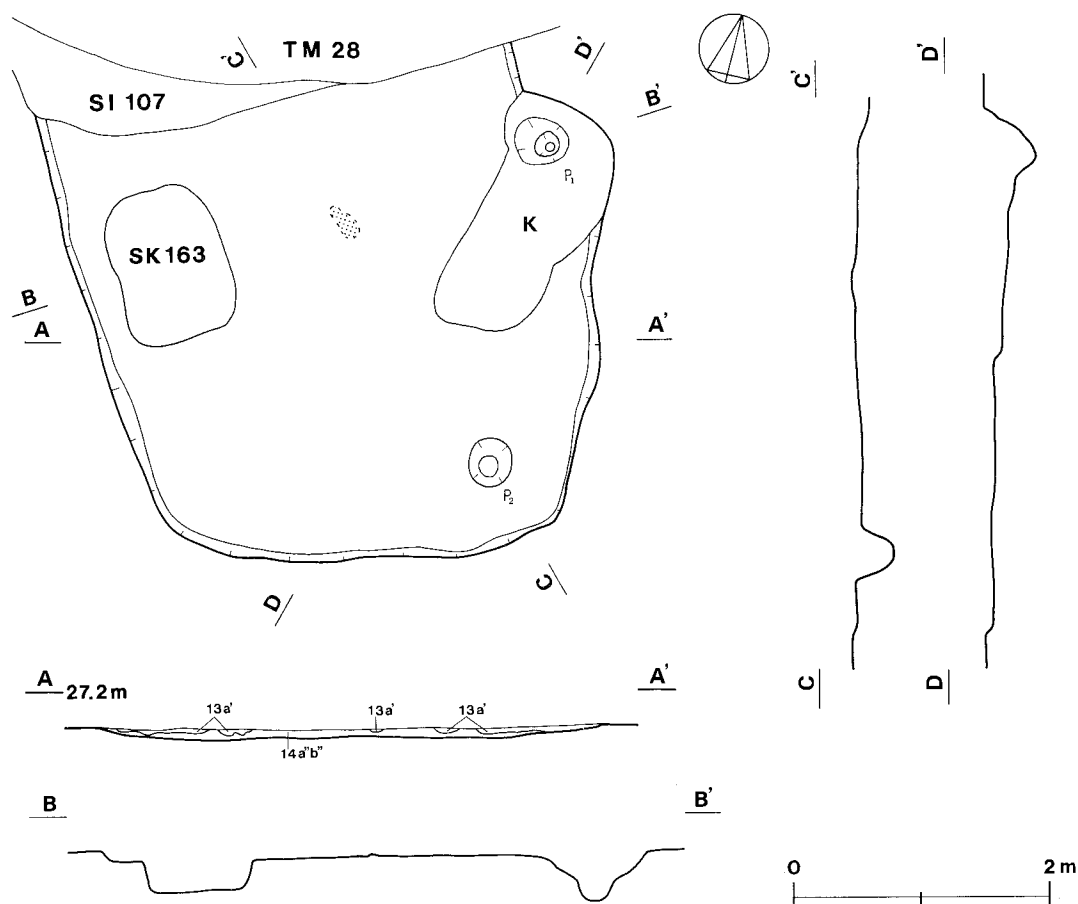
本跡は、2次調査区のD11i<sub>6</sub>区を中心に確認された住居跡で、第123号住居跡の北10.5mに位置している。本跡は北側や北西側で第28号古墳や第107号住居跡と、西側で第163号土坑と重複してい

る。本跡は壁や床面が切られていることから、第28号古墳や第163号土坑より古い時期の遺構と思われるが、第107号住居跡との新旧関係は不明である。

本跡は、重複のため長軸については不明であるが、短軸は3.92mである。残存部からは不整形長方形を呈するものと思われる。壁はロームで、40～60度の角度で緩やかに立ち上がっており、壁高は2～10cmである。床面は平坦で、締まりの弱いロームである。ピットは、2か所検出された。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は、上端直径30～40cm・深さ23～33cmである。P<sub>1</sub>の上面は攪乱を受けているが、形状や規模から、2本とも本跡に伴う柱穴と判断した。炉は、P<sub>1</sub>から1.7mほど南西側に確認された地床炉であるが、長径31cm・短径13cmの範囲で炉床とみられる焼き締まりの弱い部分が検出されただけである。

覆土は、極めて浅く、多量のローム粒子やローム小ブロックを含む褐色土、多量の焼土粒子やローム粒子等を含む暗赤褐色土が堆積している。

遺物は、土師器片30点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土しているが、床面からの出土はなかった。ハケ目が施された甕形土器の口縁部片や胴部片が出土しているが、



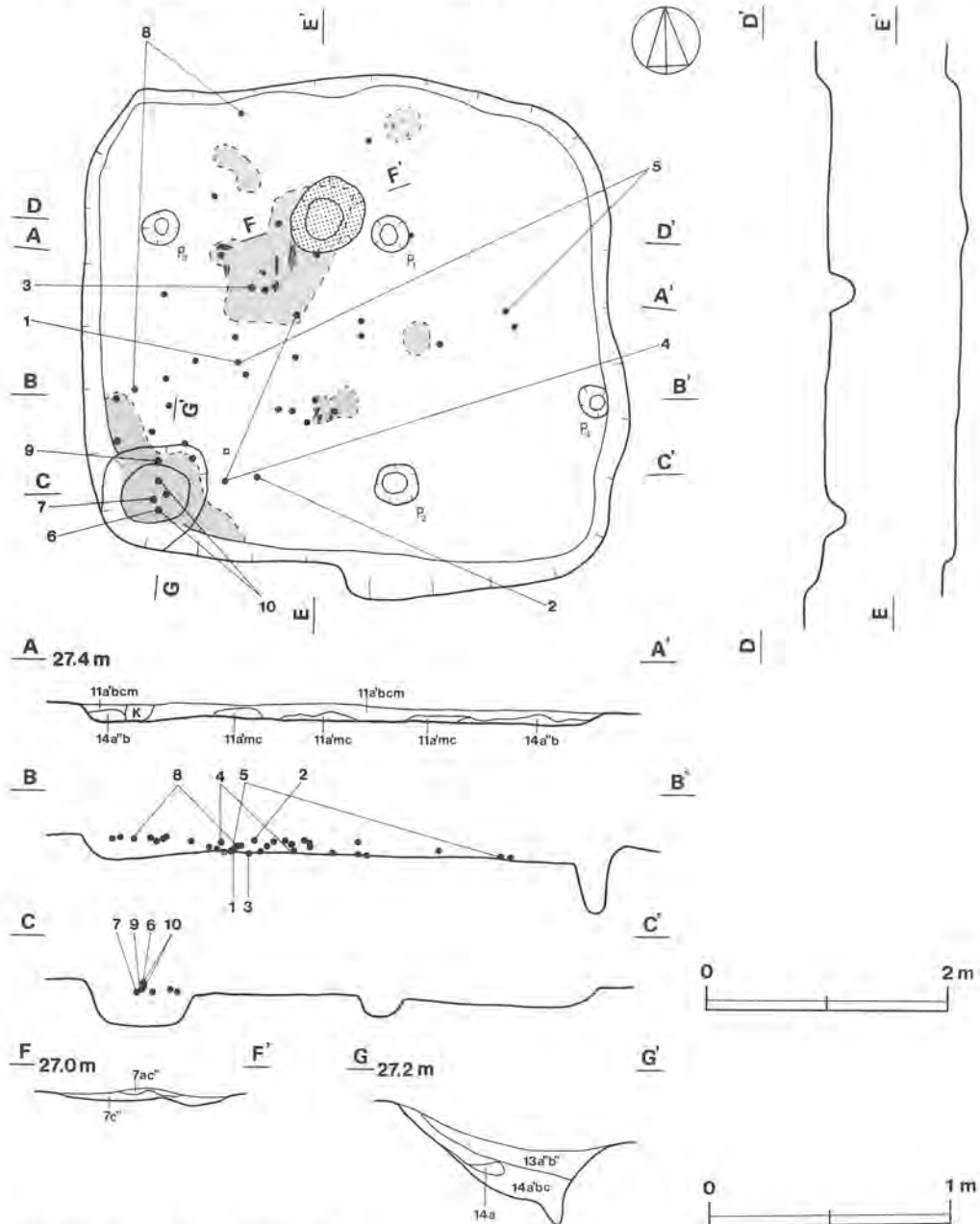
第203図 第110号住居跡実測図

小破片であり図示することはできなかった。

本跡は、遺物から正確な時期を決定することはできないが、出土遺物にハケ目を有することから、古墳時代前期の住居跡と推定される。

第111号住居跡 (第204図)

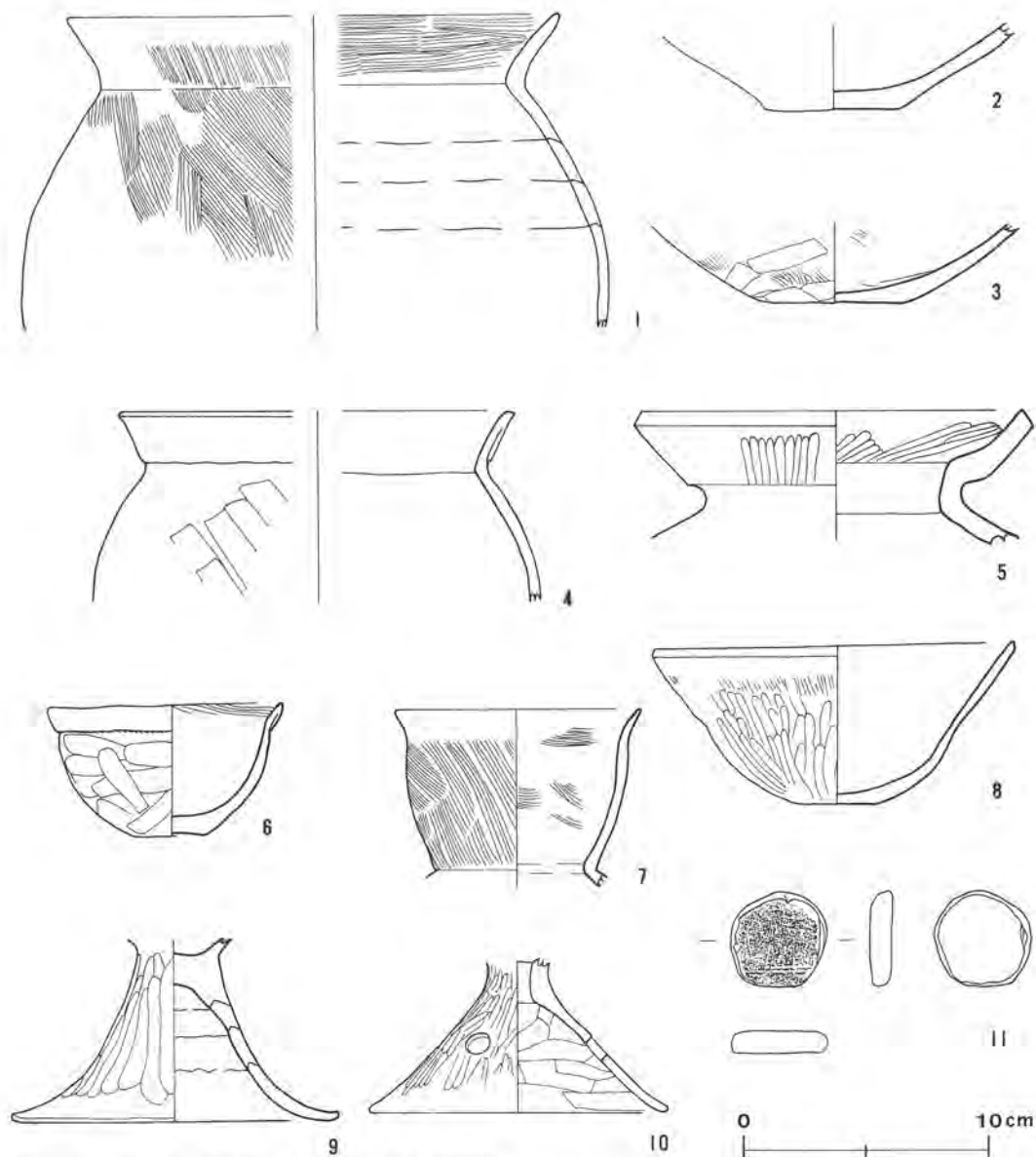
本跡は、2次調査区のD11h<sub>3</sub>区を中心に確認された住居跡で、第107号住居跡の西3.5mに位置し



第204図 第111号住居跡実測図

ている。

平面形は、長軸4.32m・短軸4.04mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-4°-Eを指している。床面積は、14.7㎡である。壁はロームで、壁高は8~20cmである。北壁がほぼ垂直に立ち上がるほかは、40~50度の角度で緩やかに立ち上がっている。床面は緩やかな起状を呈する締まりのあるロームで、中央部は硬く踏み固められている。ピットは、4本検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径30~36cm・深さ15~46cmである。配置は不揃いであるが、形状や規模から4本とも本跡に伴う柱穴と判断した。炉は、床面を7cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1mほど北側に確認され、



第205図 第111号住居跡出土遺物実測・拓影図

平面形は、長径70cm・短径58cmの楕円形である。炉内には、多量の焼土粒子を含むにぶい赤褐色土や暗赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南西コーナーの壁際に位置している。平面形は、直径86cmほどの円形状である。貯蔵穴内には、多量のローム粒子等を含む暗褐色土や褐色土、ブロック状の焼土や中量のローム粒子、少量の焼土粒子を含む褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、黒褐色土を主体とし、上層は中量のローム粒子、少量の炭化粒子や焼土粒子等を含み、下層は中量の焼土粒子や少量の炭化粒子やローム粒子を含み、壁際には多量のローム粒子や少・中量のローム小ブロック等を含む褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、堆積状況から、自然堆積と考えられる。また、中央部や南西コーナー付近に炭化材や焼土を含む層が検出されていることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、覆土下層や貯蔵穴内に焼土が認められることから本跡の居住期間中と考えられる。

遺物は、土師器及びその破片559点、土製の円板1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、中央部から南西コーナーにかけて集中的に出土している。中央部の床面からは第205図1や3の甕形土器口縁部や底部が出土している。5の壺形土器口縁部は中央部と東部の床面から出土した破片を接合したものである。南西コーナー付近の床面からは、7の埴形土器口縁部や9の高坏形土器脚部、10の器台形土器脚部が出土している。4の甕形土器は中央部と南西コーナー付近の床面から出土した破片を、8の埴形土器は南壁付近と北壁付近の床面から出土した破片を接合したものである。6の埴形土器は南西コーナー付近の床面から出土したものである。出土状況等から考えて、1・3～10は本跡に伴うものと思われる。このほかに、2の甕形土器底部や11の土製の円板が覆土中から出土しているが、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

第111号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第205図 1	甕形土器 土師器	A「20.2」 B(12.9)	口縁部から胴中央部にかけての破片。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	口縁部は内・外面ともハケ目整形。胴部は外面がハケ目整形、内面はナデ整形であるが、輪積痕が残る。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	15% P452 胴部外面に煤付着
2	甕形土器 土師器	B(3.5) C 5.6	平底。胴部は内彎して立ち上がる。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒・パミス 赤褐色 普通	5% P454
3	甕形土器 土師器	B(3.3) C 5.4	平底。胴部は内彎して立ち上がる。	外面は篋ナデ整形であるが、ハケ目痕が残る。内面は篋ナデ痕が残る。	砂粒・パミス 橙色 普通	5% P547

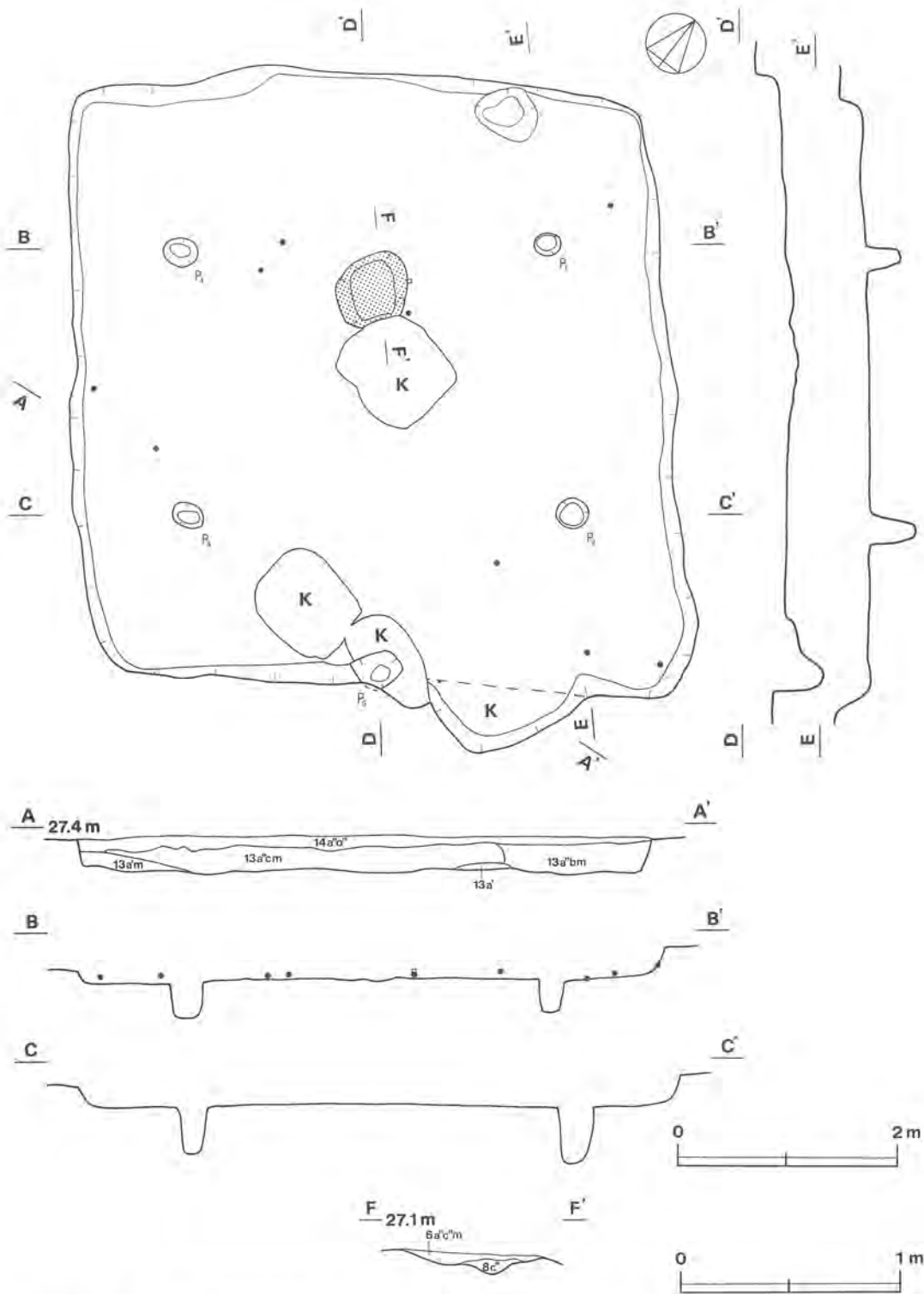
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第205 4	壺形土器 土師器	A「16.2」 B (7.8)	口縁部から胴上半部にかけての破片。口縁部は複合口縁で、頸部から「く」の字状に開く。	外面は口縁部がナデ、胴部は篋ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	10% P458
5	壺形土器 土師器	A「15.6」 B (5.5)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は垂直に立ち上がるが口頸部の中位で段をつくり、口縁部は外傾して開く。	内・外面とも篋磨き整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	10% P453
6	壺形土器 土師器	A 9.7 B 5.5 C 3.1	上げ底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は複合口縁で、わずかに外反して開く。	外面は篋ナデ整形。内面は口縁部がハケ目、体部はナデ整形。	砂粒・パミス 浅黄橙色 普通	100% P455
7	壺形土器 土師器	A 10.0 B (7.3)	胴部以下は欠損。頸部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反して開く。	内・外面ともハケ目整形。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	25% P456
8	壺形土器 土師器	A 14.8 B 6.7 C 3.3	平底。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は頸部から外傾して開く。	外面は篋磨き整形で、部分的に篋ナデ痕が残る。内面はナデ整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	60% P457
9	高環形土器 土師器	B (7.5) D 13.4	環部は欠損。脚部はラッパ状に開き、裾部で緩やかに広がり、末端は水平になる。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形で輪積痕が残る。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	45% P458
10	器台形土器 土師器	B (6.4) D 12.2	器受部は欠損。脚部は中位に3孔が穿たれ、「ハ」の字状に開く。	外面は篋磨き整形。内面は篋ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい黄褐色 普通	50% P459 裾部内面に襷付着

### 第115号住居跡（第206図）

本跡は、2次調査区のD10h<sub>8</sub>区を中心に確認された住居跡で、第114号住居跡の北西4.5mに位置している。

平面形は、長軸5.68m・短軸5.48mの方形を呈し、主軸方向はN-38°-Wを指している。床面積は29.1m<sup>2</sup>である。壁はロームで、壁高は10~30cmである。南東壁の一部が攪乱されているが65~75度の角度で外傾して立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、一部攪乱されているが締まりのあるロームである。ピットは、5か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>は、上端直径26~36cm・深さ34~46cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、5本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を9cmほど掘り下げた地床炉で、中央から90cmほど北西側に確認された。平面形は、南東側の一部に攪乱を受けているが、長径76cm・短径63cmの楕円形状を呈するものと推定される。炉内には、多量の焼土粒子やローム粒子を含む極暗赤褐色土、多量の焼土粒子を含む赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締められている。貯蔵穴は、北コーナー付近に位置している。平面形は、長径59cm・短径44cmの楕円形で、深さは28cmほどである。

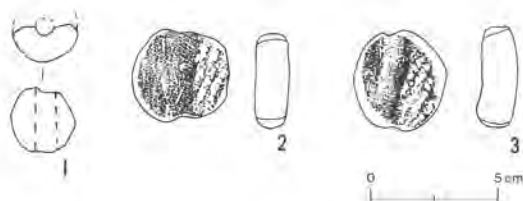
覆土は、上層に多量のローム粒子や砂粒を含む褐色土、下層に多量のローム粒子や少量の炭化物を含む暗褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、自然堆積と思われる。



第206图 第115号住居跡実測图

遺物は、土師器片50点、第207図1の球状土錘1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片3点と2・3の土器片錘2点が出土している。床面からは、ハケ目が施された甕形土器の胴部片や底部片、高坏形土器の脚部片が出土しているが、いずれも小破片であり図示することはできなかった。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と推定される。



第207図 第115号住居跡出土遺物実測・拓影図

#### 第118号住居跡（第208図）

本跡は、2次調査区のE10a<sub>0</sub>区を中心に確認された住居跡で、第114号住居跡の南西0.5mに位置している。本跡は北東側から南側にかけて第32号古墳と重複しているが、土層から判断すると本跡の方が古い時期の遺構と思われる。

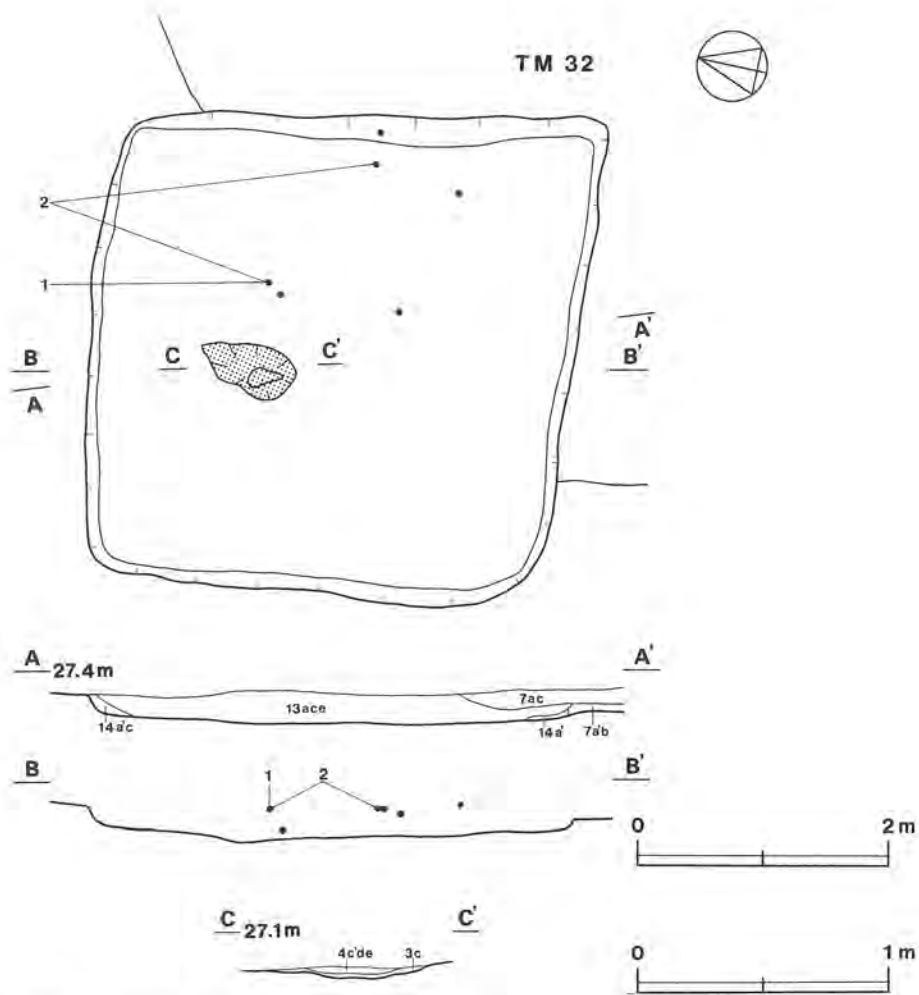
平面形は、長軸3.84m・短軸3.78mの方形を呈し、主軸方向はN-11°-Wを指すものと思われる。床面積は13.0㎡である。壁はロームで、70度前後の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は7～12cmである。床面は皿状を呈する締まりのあるロームで、炉の南西側に硬く踏み固められた部分が検出された。ピットは検出されなかった。炉は、床面を6cmほど掘り下げた地床炉であり、中央から70cmほど北側に確認された。炉内には、中量の焼土粒子や少量の焼土小ブロック等を含む極暗赤褐色土、多量の焼土粒子を含む赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、少量のローム粒子や焼土粒子を含んだ暗褐色土を主体とし、壁際には、中量のローム粒子を含む褐色土が堆積している。締まりのある土層であり、堆積状況から自然堆積と思われる。

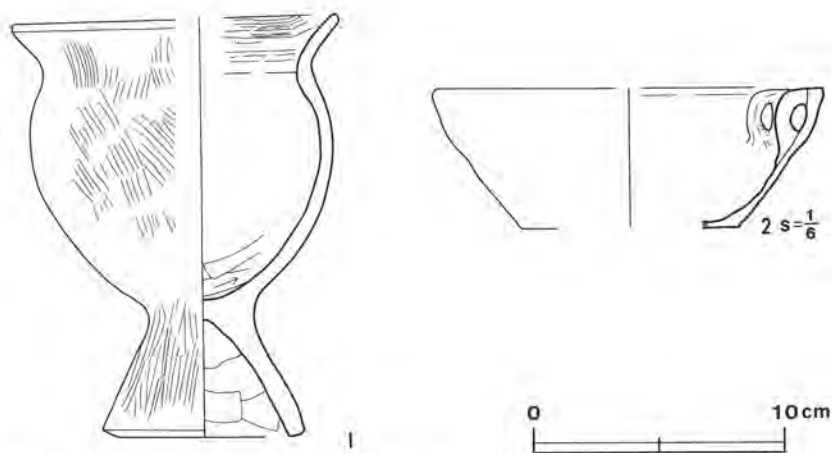
遺物は、土師器片1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点や内耳土器1点が出土している。実測可能なまでに接合・復元できたものは、第209図1の小形台付甕形土器や2の内耳土器である。これらは覆土上層からの出土であり、2は流れ込みによるものと考えられる。1の小形台付甕形土器が本跡に伴うか否かは不明であるが、第32号古墳の周溝に切られていることや出土レベルから考えて本跡との時間差は少ないものと考えられる。

本跡は、小規模で柱穴もないが、炉をもつことから住居跡であると判断した。時期を明確にすることはできないが、古墳時代前期の住居跡と推定される。





第208图 第118号住居跡実測図



第209图 第118号住居跡出土遺物実測図

第118号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第209図 1	小形台付 甕形土器 土師器	A「13.1」 B 16.9 D 8.1	脚台部は「ハ」の字状に開き、裾部でわずかに内彎する。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	外面はハケ目整形。内面は口縁部がハケ目、胴部及び脚台部は篋ナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	50% P475
2	内耳土器	A 31.2 B 11.2 C「17.4」	平底。体部は内彎気味に開く。口唇部はナデ整形により中央部が凹む。耳接合部の外面は膨らむ。耳は2か所残存。	口唇部は横ナデ、ほかはナデ整形。 耳接合	砂粒・雲母多量 にぶい赤褐色 普通	50% P476 体部外面に鍋墨 付着

第121号住居跡 (第210図)

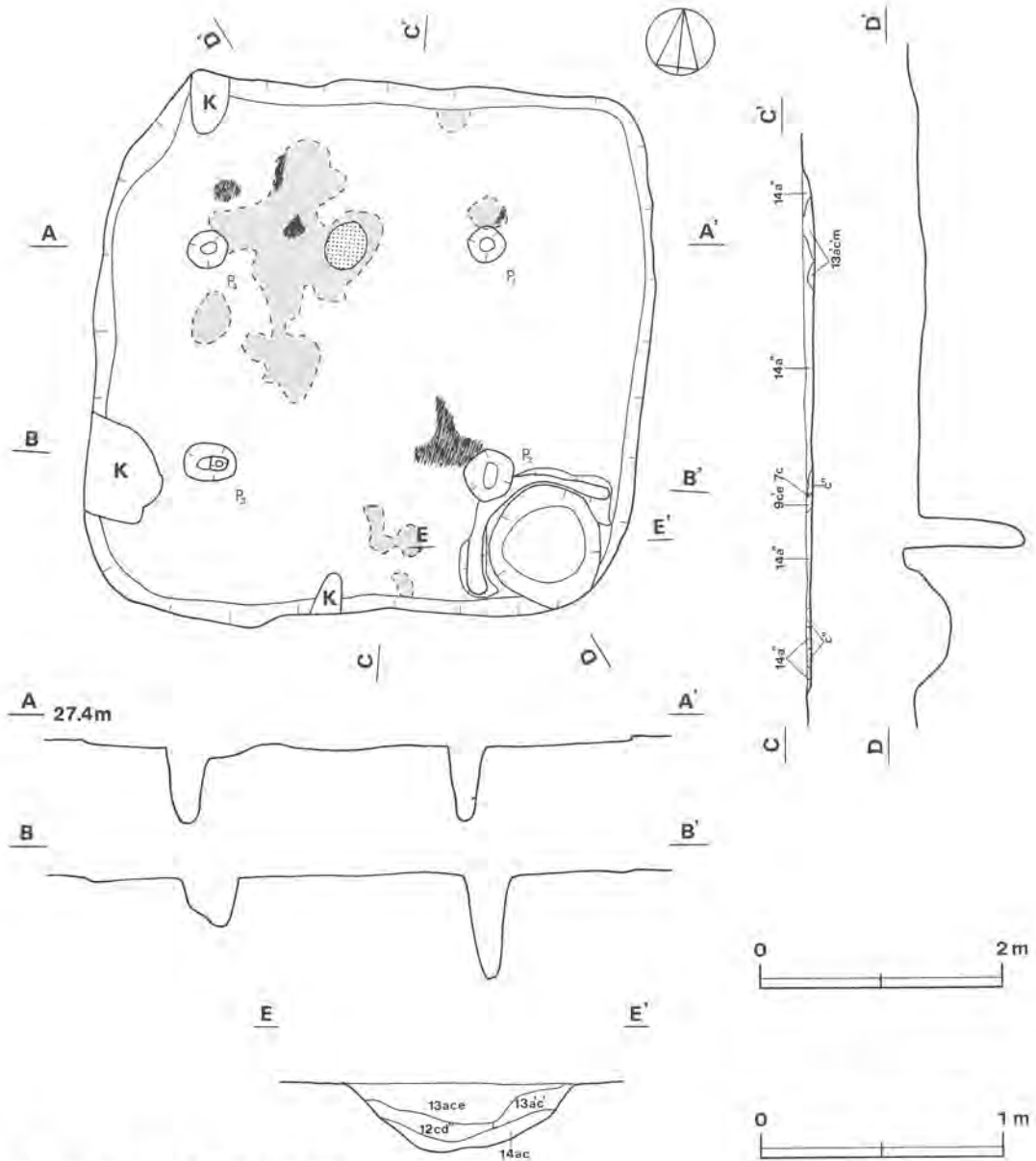
本跡は、2次調査区のE10e<sub>3</sub>区を中心に確認された住居跡で、第124号住居跡の西24mに位置している。

平面形は、長軸4.58m・短軸4.48mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-3°-Wを指している。床面積は17.3m<sup>2</sup>である。壁はロームで、壁高は4~7cmである。東壁を除いた各壁の一部は攪乱されているが、30~50度の角度で緩やかに立ち上がっている。床面は緩やかな起伏を呈するロームで、中央部に硬く踏み固められた部分が検出された。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端長径32~44cm・深さ42~91cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う主柱穴と判断した。炉は、床面を5cmほど掘り下げた地床炉で、中央から80cmほど北側に確認されたが、長径44cm・短径33cmの楕円形を呈する硬く焼き締まった炉床が検出されただけである。貯蔵穴は、南東コーナーの壁際に位置しており、周囲には周堤状のロームの高まりが「鍵の手」状に廻っている。平面形は、直径100cmほどの円形で、深さは28cmほどである。貯蔵穴内には、少・中量のローム粒子や中量の焼土粒子を含む暗褐色土、多量の焼土粒子や焼土ブロックを含む極暗褐色土、少量の焼土粒子やローム粒子を含む褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、極めて浅く、多量のローム粒子を含む褐色土、中量の焼土粒子や炭化物、及びローム粒子を含む暗褐色土、多量の焼土粒子を含む暗赤褐色土が堆積している。また、中央部や北西部、及び南部の床面に炭化材や焼土を含む層が検出されていることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、炭化材が床面に検出されたことや貯蔵穴内の覆土各層に焼土が含まれていることから、本跡の居住期間中と考えられる。

遺物は、土師器片48点が出土している。いずれも小破片であり、図示できるものはなかった。

本跡は、時期を明確に決定することはできないが、ハケ目を施された甕形土器の口縁部の出土や遺構の形態等から、古墳時代前期の住居跡と推定される。



第210図 第121号住居跡実測図

第123号住居跡 (第211図)

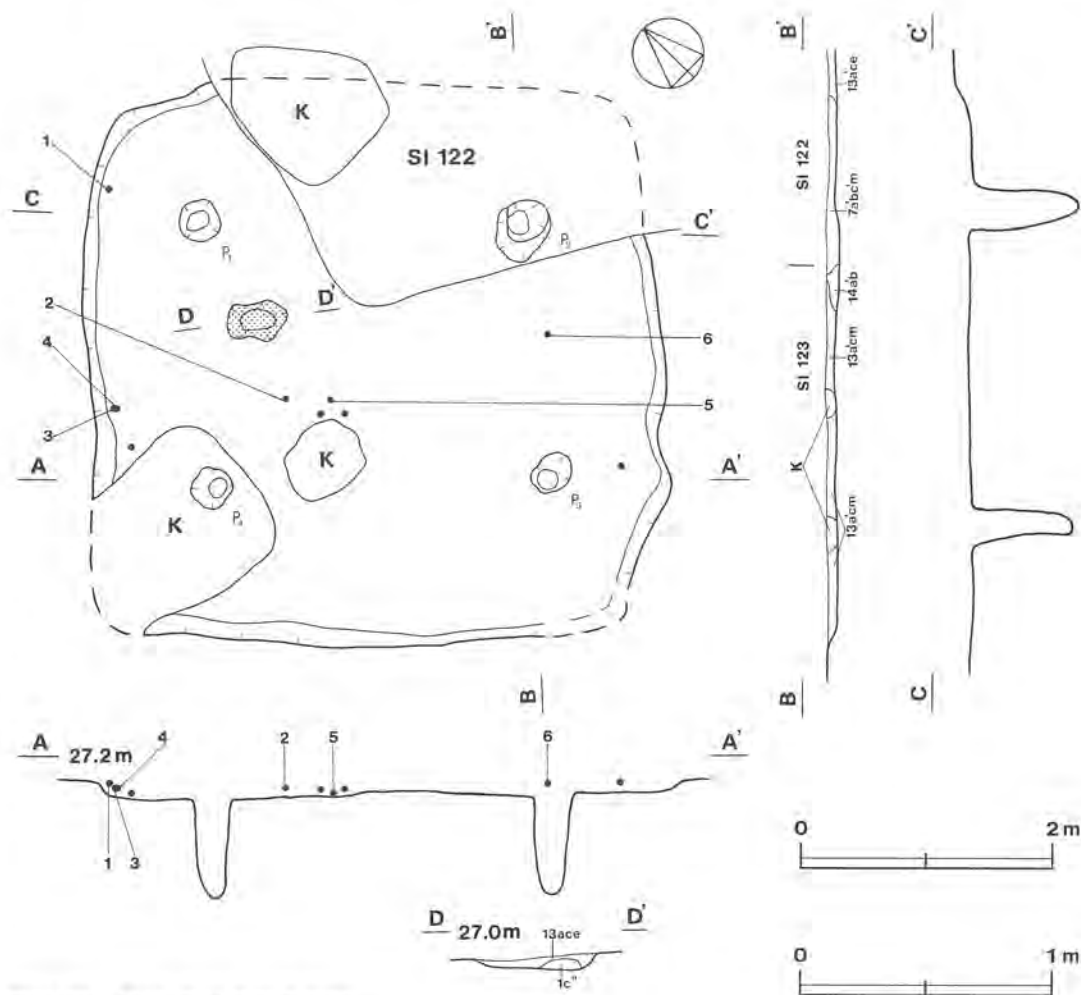
本跡は、2次調査区のE11c<sub>6</sub>区を中心に確認された住居跡で、第124号住居跡の北4mに位置している。本跡は東側で第122号住居跡と重複しているが、土層から判断すると本跡の方が新しい時期の遺構と思われる。

平面形は、長軸4.52m・短軸4.28mの方形を呈し、主軸方向はN-44°-Wを指している。床面積は17㎡と推定される。壁はロームで、南東壁や南西壁は40~50度の角度で緩やかに、北西壁は

60～70度の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は2～14cmである。床面はほぼ平坦で、一部に攪乱を受けているが縮まりのあるロームである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端長径30～44cm・深さ79～87cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を6cmほど掘り下げた地床炉で、中央部から80cmほど北側に確認され、平面形は、長径48cm・短径43cmの楕円形である。炉内には、少量のローム粒子を含む暗褐色土、多量の焼土粒子を含む極暗赤褐色土が堆積しているが、炉床はあまり硬く焼き締まっていない。

覆土は、全体的に浅い単一層で、中量のローム粒子や少量の炭化材を含む暗褐色土が堆積しているが、攪乱が一部にみられる。

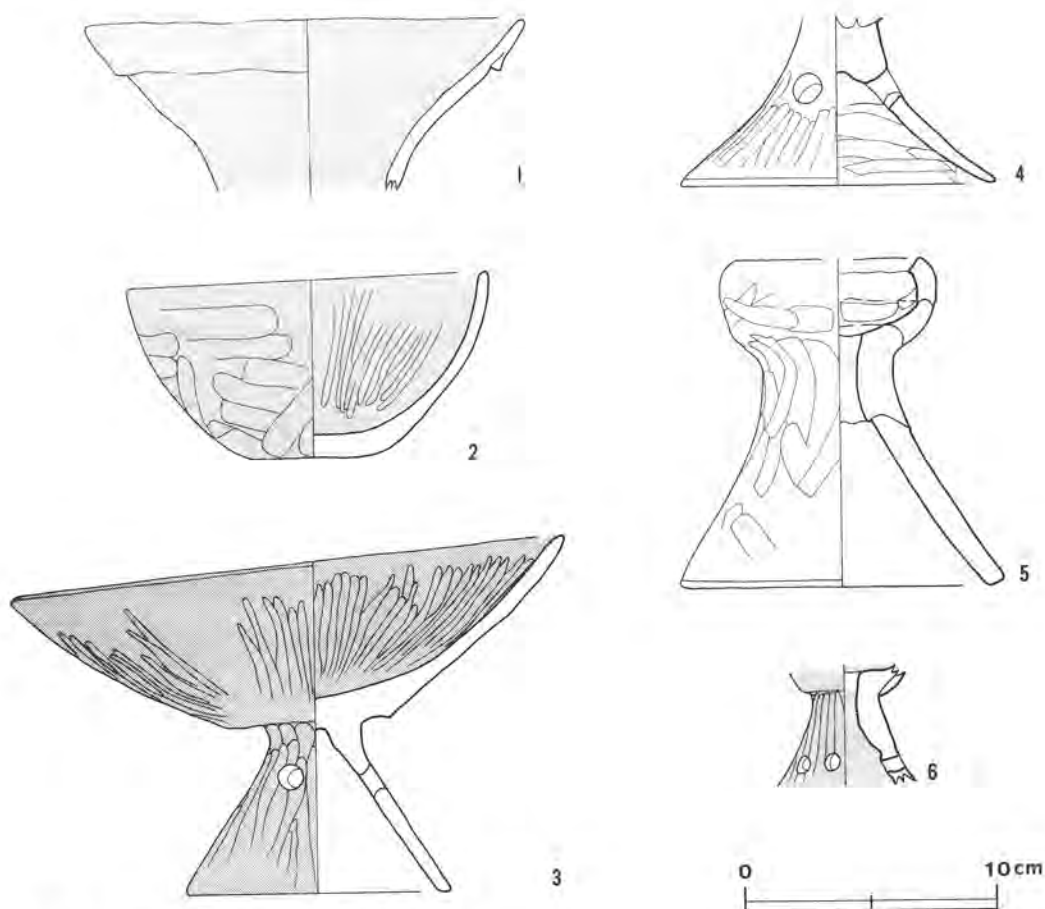
遺物は、土師器及びその破片57点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、北西壁中央部や北コーナー付近の壁際、及び中央部から出土している。北コーナー付近の床面には第212図



第211図 第123号住居跡実測図

1の壺形土器口縁部が倒立の状態、中央部の床面には2の埴形土器や5の炉器台形土器が倒立・横位の状態で出土している。3の高坏形土器は、北西壁中央部の壁際に斜位の状態で出土した坏部と正位の状態で出土した脚部が接合したものであり、坏部の下に4の高坏形土器脚部が出土している。6の器台形土器は南東部の床面から横位の状態で出土したものである。出土状況等から考えて、1～6は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。



第212図 第123号住居跡出土遺物実測図

第123号住居跡出土土器観察表

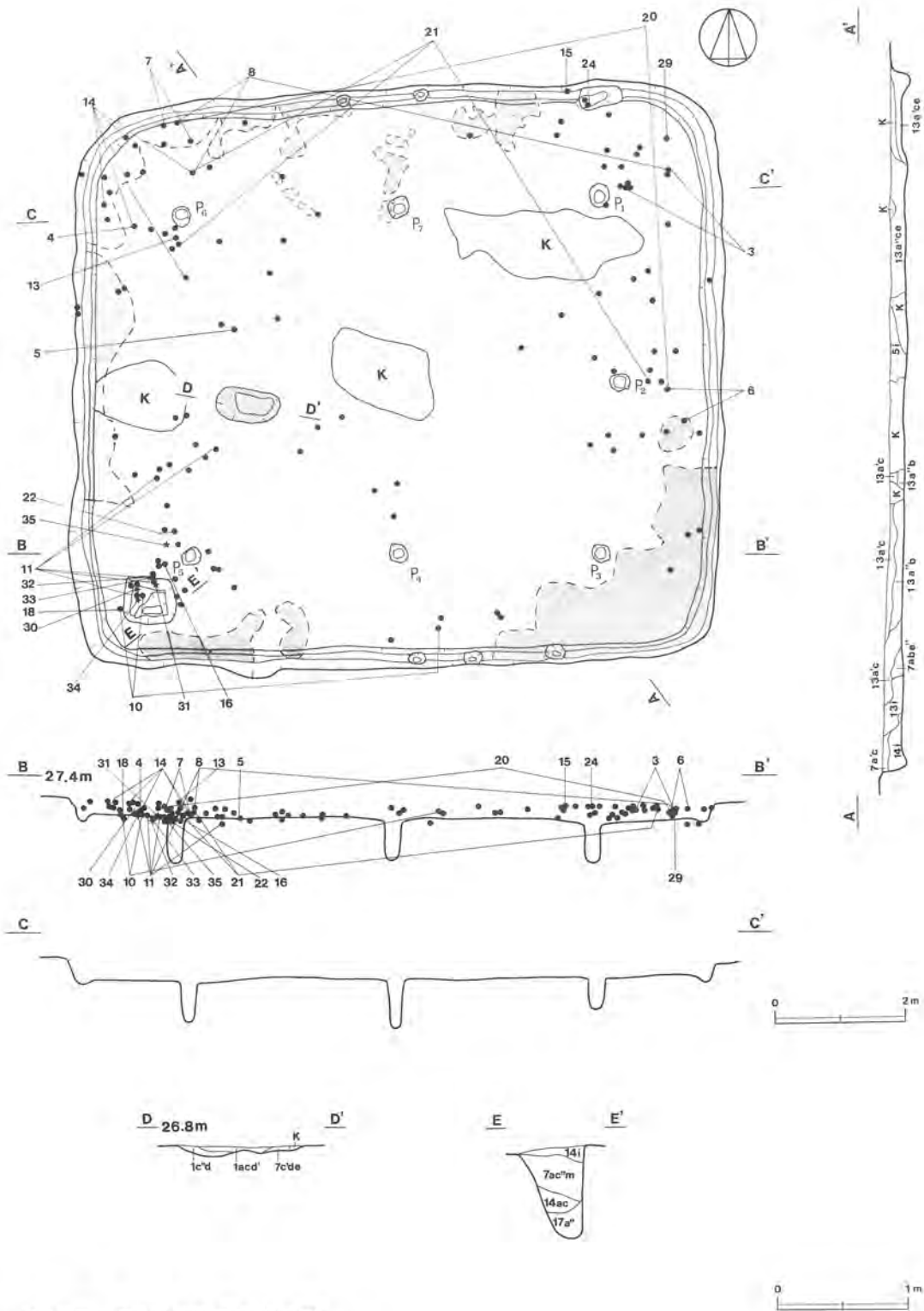
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第212図 1	壺形土器 土師器	A 17.8 B (7.0)	胴部以下は欠損。頸部は外反して立ち上がり、口縁部はわずかに内彎して開き複合口縁となる。	内・外面ともナデ整形後、赤彩。	砂粒・パミス 赤色 普通	30% P482

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第212図 2	埴形土器 土師器	A 14.5	平底。体部は内彎して開く。	外面は丁寧な篋ナデ整形。内面は篋磨き整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・バミス 灰白色 普通	90% P 483
		B 7.3				
		C 5.3				
3	高坏形土器 土師器	A 22.4	脚部は上位に3孔が穿たれ、「ハ」の字状に開く。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に大きく開く。	坏部は内・外面とも篋磨き整形後、赤彩。脚部は外面が篋削り整形後に赤彩、内面は篋ナデ整形。	砂粒・バミス 橙色 普通	100% P 484
		B 14.2				
		D 10.8				
4	高坏形土器 土師器	B (6.7)	坏部は欠損。脚部は上位に3孔が穿たれ、ラッパ状に開く。	外面は篋磨き整形。内面は篋ナデ整形。	砂粒・バミス 明赤褐色 普通	50% P 485
		D 12.6				
5	炉器台形土器 土師器	A 「7.4」	脚部は「ハ」の字状に開く。器受部は強く内彎して開く。	外面は篋ナデ整形。内面は器受部が篋ナデ、脚部はナデ整形。	砂粒・バミス にぶい赤褐色 普通	80% P 486
		B 13.1				
		D 13.0				
6	器台形土器 土師器	B (4.8)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開き5孔が穿たれている。接合部に中央孔を持つ。	外面は篋磨き整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・バミス 赤色 普通	25% P 556

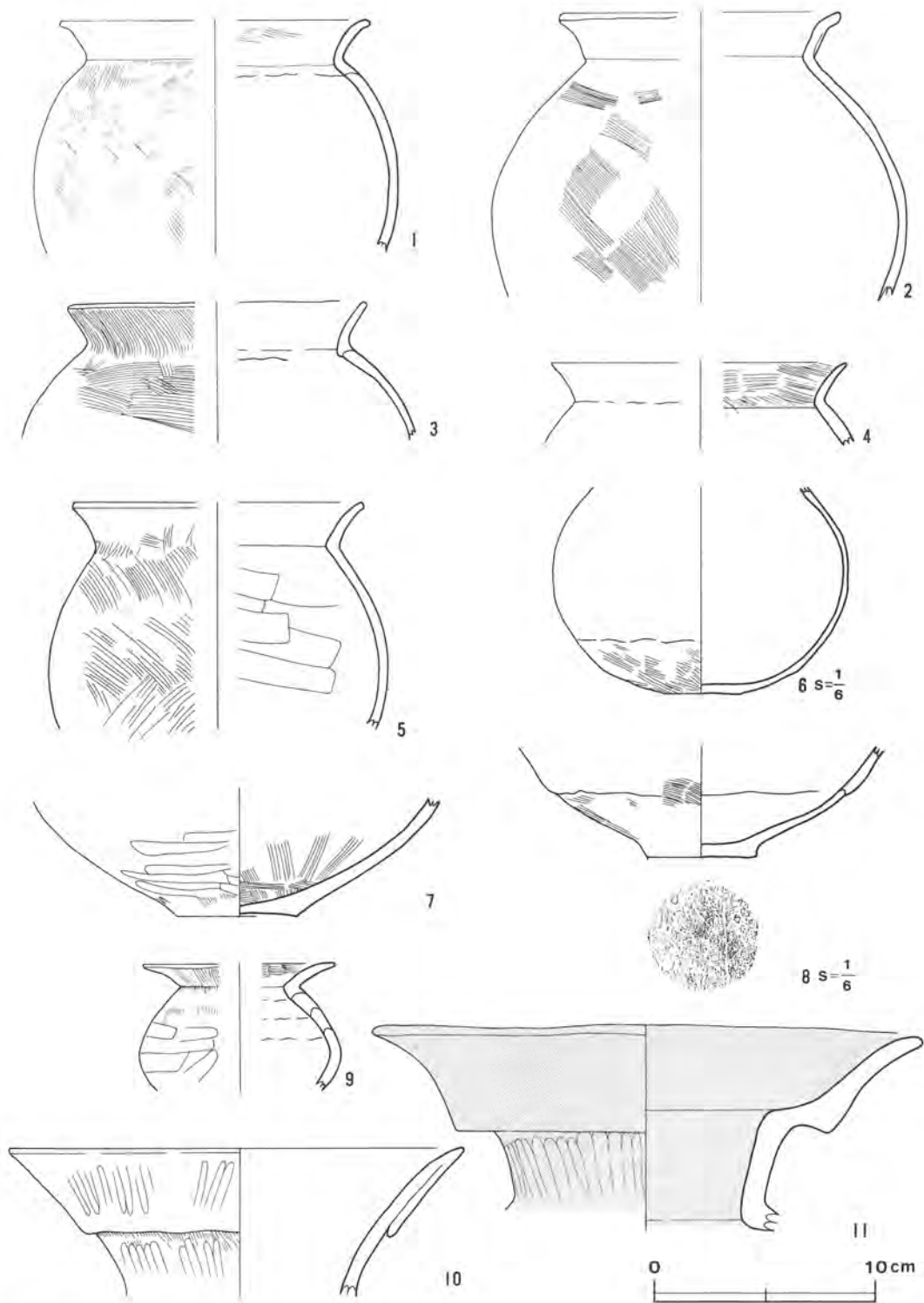
#### 第124号住居跡 (第213図)

本跡は、2次調査区のE11f<sub>5</sub>区を中心に確認された大型の住居跡で、第123号住居跡の南4mに位置している。

平面形は、長軸9.92m・短軸9.12mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-87°-Wを指している。床面積は81.1m<sup>2</sup>で、当遺跡では最大の住居跡である。壁はロームで、南壁がほぼ垂直に近い角度で、ほかの壁は65～80度の角度で外傾して立ち上がり、壁高は17～35cmである。壁直下には、上幅25～40cm・深さ8～13cmの幅広の壁溝が全周している。床面は緩やかな起伏を呈する締まりのあるロームであるが、中央部や西壁中央部、及び北東部は部分的に攪乱されている。ピットは、7か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>は、上端直径24～30cm・深さ47～89cmである。北側のP<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>1</sub>、南側のP<sub>5</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>3</sub>は直線上に、東側のP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は、P<sub>2</sub>がP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>を結ぶ直線より東側に14cm寄っているがほぼ直線上と考えられる。ピットの間は、2.4～3.0mと規則的であり、P<sub>2</sub>と対になるピットが西側床面に予想されたが、攪乱を受けているため検出できなかった。7本のピットは、コの字形をつくる直線上に配置されており、本跡の上屋を支えるのに十分な配置であることから、いずれも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を8cmほど掘り下げた地床炉で、中央から2.3mほど西側に確認され、平面形は、長径95cm・短径52cmの楕円形である。炉内には、中・多量の焼土粒子や少・中量の焼土小ブロックを含む極暗赤褐色土、中量の焼土粒子や焼土中ブロックを含む暗赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南西コーナーに位置している。平面形は、長軸79cm・短軸73cmの方形である。深さは77cmほどで、西壁から北壁にかけての上部は段状に掘り込まれている。貯蔵穴内には、少量のローム粒子を含む褐色土、多量の焼土粒子や中量の焼土小ブロック等を含む暗赤褐色土、中量のローム粒子を含む明褐色土

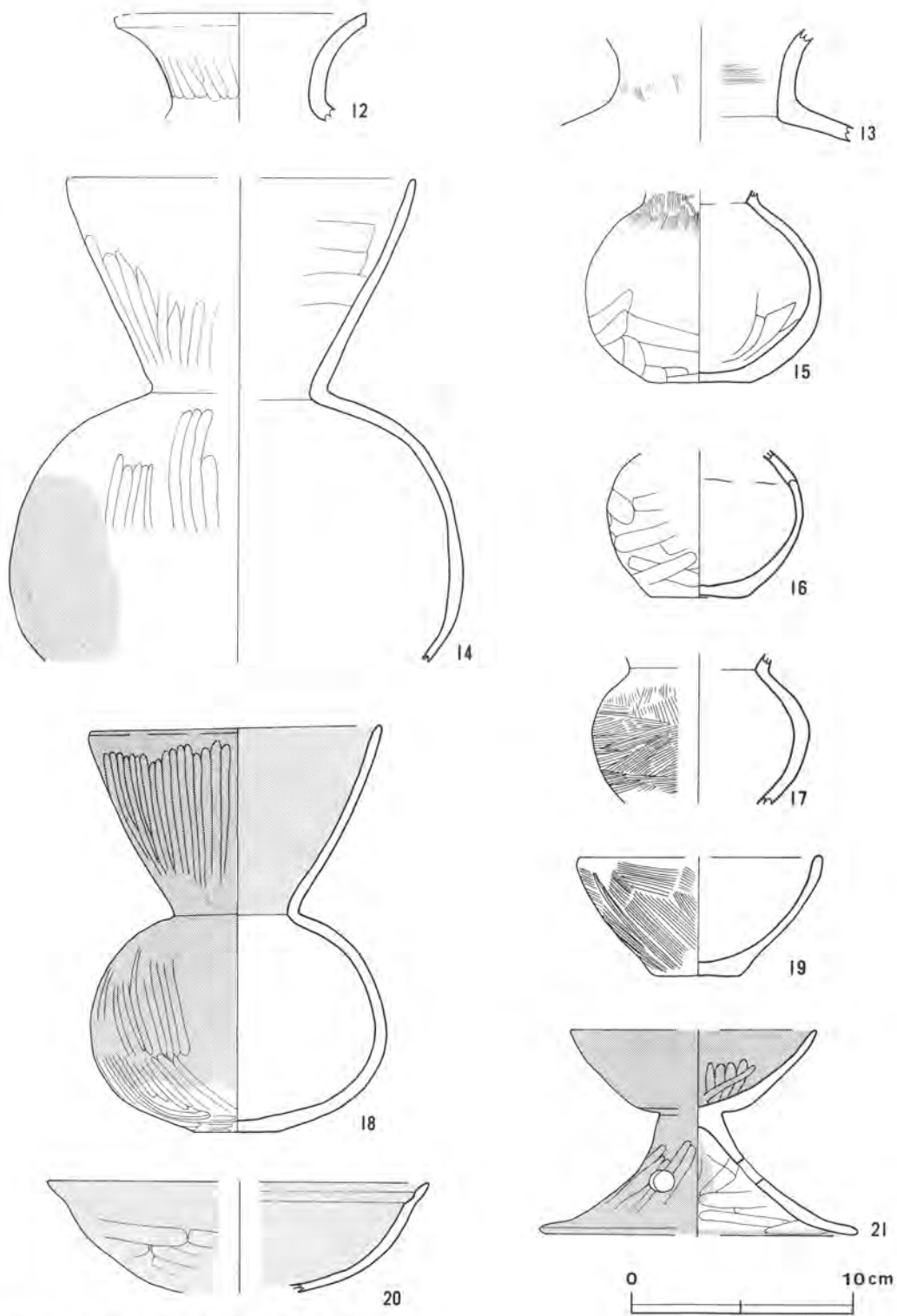


第213图 第124号住居跡実測図

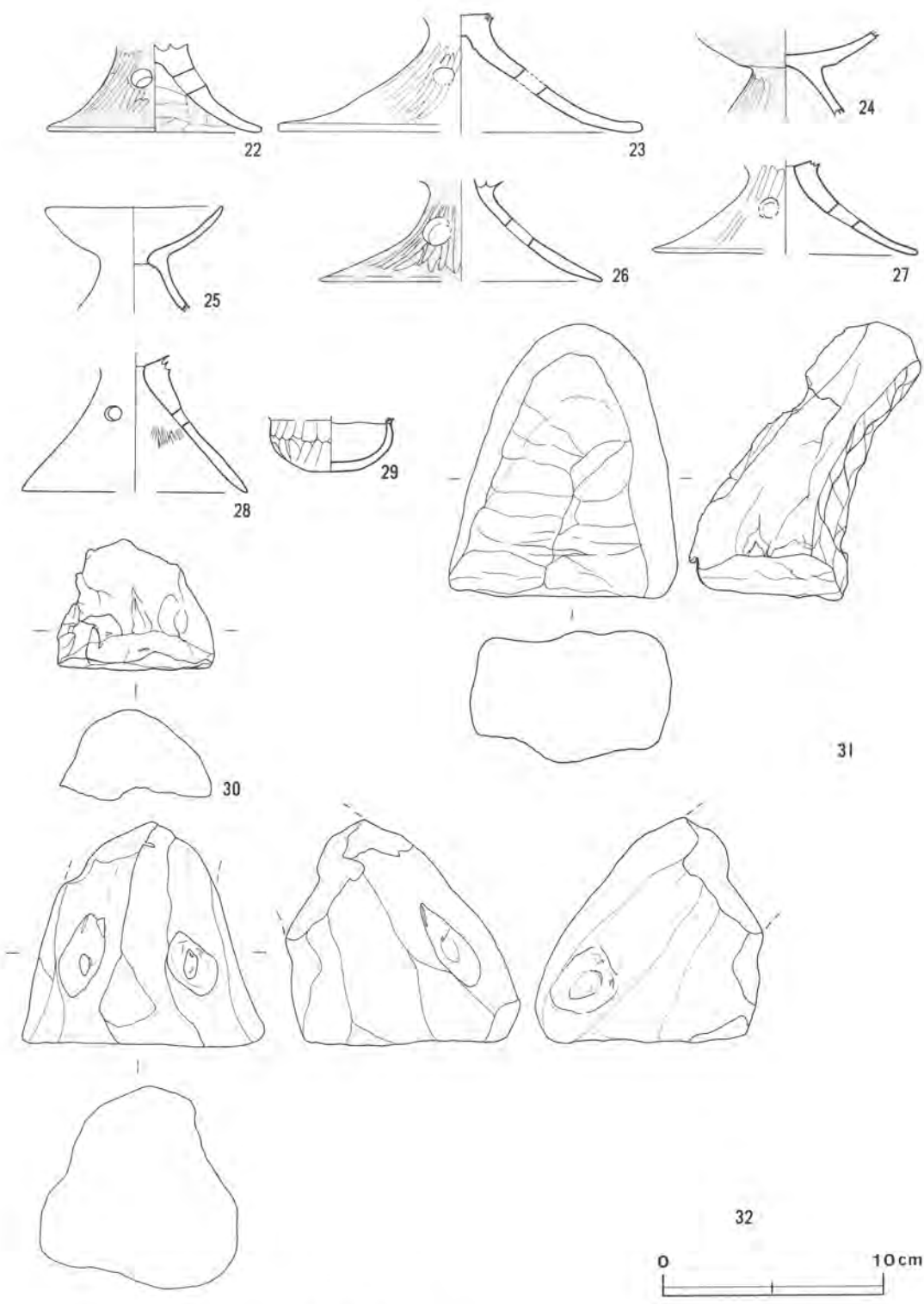


第214图 第124号住居跡出土遺物実測・拓影図-1

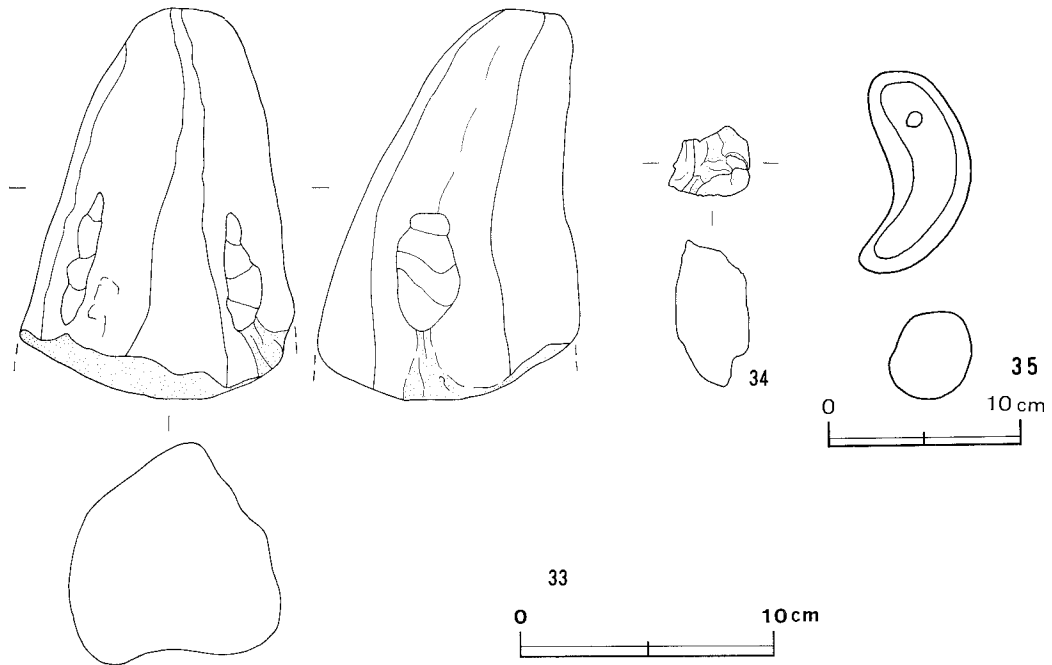




第215图 第124号住居跡出土遺物実測図-2



第216图 第124号住居跡出土遺物実測図—3



第217図 第124号住居跡出土遺物実測図-4

がレンズ状に堆積している。

覆土は、中央部や壁際に部分的な攪乱がみられるが暗褐色を主体とする土層で、それぞれ少～多量のローム粒子や少量の焼土粒子等を含んでおり、壁際には少量のローム粒子や焼土粒子、及び炭化粒子を含む暗赤褐色土が堆積している。堆積状況から、自然堆積と思われる。また、北壁や西壁、及び南東コーナーの壁際に焼土を含む層が検出されていることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、多量の焼土粒子を含む赤褐色土や極暗赤褐色土層の下に、少量のローム粒子を含む暗褐色土層が存在することや、貯蔵穴内の上層観察からも、多量の焼土粒子、中量の焼土小ブロックや炭化材を含む暗赤褐色土層が覆土の中位以上であることから、本跡の廃絶後と思われる。

遺物は、土師器及びその破片3,456点、土製の支脚5点、土製勾玉1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片5点と古銭1点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、床面全体から出土している。北西コーナー付近からは第214図・第215図・第216図・第217図4・7の甕形土器の口縁部や胴部、13の壺形土器の口縁部、14の埴形土器が出土している。南西コーナー付近からは、11の壺形土器口縁部、16の埴形土器胴部、18の埴形土器、22の高环形土器脚部が出土している。北東コーナー付近からは、3の甕形土器、15の埴形土器胴部、24の高环形土器、29のミニチュア土器が出土している。西部からは5の甕形土器、東壁中央部からは6の甕形土器、南西コーナー付近からは10の壺形土器が出土している。8の甕形土器や20の环形土器、及び21の高

坏形土器は、北東と北西コーナー付近の破片を接合したものである。また、覆土からではあるが、1・2の甕形土器とその底部、9の小形甕形土器、12の小形壺形土器口縁部、17の埴形土器や19の埴形土器、23の高坏形土器脚部、25～28の器台形土器とその脚部が出土している。このほかに、貯蔵穴内からは30・31・33・34の土製の支脚、南西コーナー付近からは32の土製の支脚や35の土製勾玉が出土している。これらの遺物の出土層位は、床面から覆土上層にかけての広範囲にわたっているが、土器の形態に時期差が認められないことから、1～35は本跡に伴う遺物と考えられる。本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代前期に比定される住居跡と思われる。

第124号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第214図 1	甕形土器	A「14.2」	口縁部から胴中央部にかけての破片。口縁部は、内面に稜を持つ頸部から外反して開く。	外面は口縁部が横ナデ、胴部はハケ目整形。内面は口縁部がハケ目、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・パミスにぶい橙色普通	15% P487
	土師器	B(10.8)				
2	甕形土器	A「12.8」	口縁部から胴中央部にかけての破片。頸部は外傾して立ち上がり、口縁部で外反して開く。	口縁部は内・外面ともナデ整形。胴部は外面がハケ目、内面は篋ナデ整形。	砂粒・パミスにぶい橙色普通	20% P488
	土師器	B(13.3)				
3	甕形土器	A「13.8」	口縁部から胴上半部にかけての破片。口縁部は、内面に接合痕を持つ頸部から外反して開く。	外面はハケ目整形。内面はハケ目整形後、ナデ。	砂粒・パミス灰褐色普通	10% P489
	土師器	B(6.4)				
4	甕形土器	A「13.4」	口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部は外面が横ナデ、内面はハケ目整形。	砂粒・スコリアにぶい橙色普通	5% P490
	土師器	B(3.9)				
5	甕形土器	A「13.4」	口縁部から胴中央部にかけての破片。口縁部は頸部から「く」の字状に外反して開く。	口縁部は内・外面ともナデ整形。胴部は外面がハケ目、内面は篋ナデ整形。	砂粒にぶい橙色普通	10% P494
	土師器	B(10.4)				
6	甕形土器	B(19.0)	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。頸部以上は欠損する。	外面は胴中央部以上がナデ、以下はハケ目整形。内面は剝落が著しく整形技法は不明。	砂粒・パミスにぶい橙色普通	35% P492
	土師器	C 7.0				
7	甕形土器	B(5.4)	上げ底。胴部は内彎して立ち上がるが、中央部以上は欠損する。	外面は篋ナデ整形。内面はハケ目整形。	砂粒・パミスにぶい橙色普通	10% P494
	土師器	C 5.4				
8	甕形土器	B(10.3)	平底で木葉痕を持つ。胴部は下半部に段を持つが、内彎して立ち上がる。	外面はハケ目整形後、ナデ。内面は剝離が著しく、整形技法不明。	砂粒・スコリアにぶい橙色普通	15% P495
	土師器	C 10.0				
9	小形甕形土器	A「8.8」	胴下半部以下は欠損。口縁部は頸部から「く」の字状に強く外反して開く。	外面は口縁部から胴上半部にかけてハケ目、以下は篋ナデ整形。内面は口縁部がハケ目、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・パミスにぶい橙色普通	25% P497
	土師器	B(5.9)				
10	壺形土器	A 21.0	口頸部片。口縁部は複合口縁で、外反して開く。	外面は篋磨き整形であるが、ハケ目痕が残る。内面はナデ整形。	砂粒・パミスにぶい橙色普通	5% P64
	土師器	B(6.9)				

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第214図 11	壺形土器 土師器	A 25.2 B (9.5)	有段口縁。頸部は外傾して立ち上がるが口頸部の中位で段をつくり、口縁部は外反して開く。	外面は口縁部がナデ、頸部は篋磨き整形。内面はナデ整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	20% P500
第215図 12	小形壺形土器 土師器	A 11.6 B (5.0)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は垂直気味に立ち上がり、口縁部は外反して開く。	外面は口縁部が横ナデ、頸部は篋磨き整形。内面は横ナデ整形。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	10% P501
13	壺形土器 土師器	B (5.3)	頸部片。頸部は垂直に立ち上がる。	内・外面ともナデ整形であるが、ハケ目痕が部分的に残る。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	10% P502
14	埴形土器 土師器	A「16.0」 B(22.3)	胴下半部以下は欠損。胴部は内彎している。頸部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに内彎して開く。	外面は篋磨き整形。内面はナデ整形。外面には赤彩痕が残る。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P504
15	埴形土器 土師器	B (8.9) C 5.0	平底。胴部は扁平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。頸部以上は欠損する。	外面は篋ナデ整形であるが、胴上半部にはハケ目痕が残る。内面には篋ナデ整形痕が残る。	砂粒・バミス 橙色 普通	40% P505
16	埴形土器 土師器	B (6.7) C 4.6	平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。頸部以上は欠損する。	外面は篋ナデ、内面はナデ整形。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	40% P506
17	埴形土器 土師器	B (6.9)	胴部片。胴部は扁平な球形状を呈している。	外面はハケ目整形。内面はナデ整形。	砂粒・バミス 黒褐色 普通	30% P507
18	埴形土器 土師器	A 13.3 B 18.9 C 4.0	平底。胴部は扁平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から内彎気味に立ち上がる。	外面は丁寧な篋磨き整形後、赤彩。内面は丁寧なナデ整形後、赤彩。	砂粒・バミス にぶい褐色 普通	100% P527
19	埴形土器 土師器	A「11.2」 B 5.5 C 2.0	平底。体部は内彎して開く。	外面はハケ目整形。内面は剝離が著しく、整形技法不明。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	40% P503
20	環形土器 土師器	A「17.6」 B (5.1)	体部は内彎して立ち上がる。口縁部は短い有段口縁状を呈する。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・バミス にぶい赤褐色 普通	45% P510
21	高環形土器 土師器	A「11.2」 B 9.5 D「14.6」	脚部は中位に3孔が穿たれ、ラッパ状に開き裾部で緩やかに広がる。坏部は下位に稜を持ち、内彎して開く。	坏部は外面が篋ナデ、内面は篋磨き整形。脚部は外面が篋磨き、内面は篋ナデ整形。坏部内・外面及び脚部外面は赤彩。	砂粒・バミス 赤色 普通	60% P509
第216図 22	高環形土器 土師器	B (4.1) D 10.0	坏部は欠損。脚部は上位に3孔が穿たれ、ラッパ状に開く。	外面は篋磨き整形後、赤彩。内面は篋ナデ整形。	砂粒・バミス 赤褐色 普通	40% P515
23	高環形土器 土師器	B (5.5) D「16.8」	脚部片。脚部はラッパ状に開き、裾部で緩やかに広がり末端は水平になる。	外面は篋磨き整形。内面は剝離が著しく、整形技法不明。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	10% P516
24	高環形土器 土師器	B (4.0)	坏底部から脚部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に開くが上位は欠損する。	外面は坏部が篋ナデ、脚部は篋磨き整形で、いずれも赤彩。	砂粒・バミス 浅黄橙色 普通	10% P518
25	器台形土器 土師器	A 8.4 B (4.9)	脚部は「ハ」の字状に開く。器受部は内彎して開く。接合部に中央孔を持つ。	内・外面ともナデ整形。	砂粒・バミス 橙色 普通	40% P511

図版番号	器 種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第216図 26	器台形土器 土 師 器	B (4.7) D「13.0」	脚部片。脚部は中位に3孔が穿たれ、ラッパ状に開き裾部は緩やかに広がる。接合部に中央孔を持つ。	外面は篋磨き整形後、赤彩。内面は篋ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	30% P512
27	器台形土器 土 師 器	B (4.4) D「12.2」	脚部片。脚部はラッパ状に開き、裾部は緩やかに広がる。中位に孔が穿たれるほか、接合部に中央孔を持つ。	外面は篋磨き整形。内面はナデ整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	25% P513
28	器台形土器 土 師 器	B (6.4) D「10.4」	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。中位に孔が穿たれるほか、接合孔を中央部に持つ。	外面はナデ整形。内面はハケ目整形後、ナデ。	砂粒 橙色 普通	30% P514
29	ミニチュア 土 器 土 師 器	B (2.6) C 1.8	平底。体部は内彎して立ち上がるが、口縁部は欠損する。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	70% P525

表 3 古墳時代前期住居跡一覧表

住居跡 番 号	位 置	主(長)軸方向	平 面 形	規 模		床面	ピット 数	炉	貯蔵穴	床面積 (㎡)	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)							
12	B6e <sub>4</sub>	N-28°-W	隅丸長方形	5.24×4.66	11~20 緩傾	皿状	4	1	1	21.5	土師器片10点	
13	B6h <sub>4</sub>	N-78°-E	隅丸方形	4.62×「4.22」	8~36 緩傾	皿状	12	1	—	[16.4]	土師器片33点, 弥生式 土器片5点	
14	B6j <sub>5</sub>	N-17°-W	隅丸方形	3.56×3.52	11~42 外傾	緩い 起伏	7	1	2	10.6	土師器片67点, 弥生式 土器片4点, 管状土錘 3点, 球状土錘4点	焼失家屋
15	C5d <sub>6</sub>	N-38°-W	隅丸方形	5.70×5.36	8~27 外傾	平坦	4	1	1	25.8	土師器片138点, 弥生式 土器片4点	
16	C6f <sub>1</sub>	N-51°-W	方 形	6.62×6.46	16~29 垂直, 外傾	緩い 起伏	6	1	1	35.8	土師器片151点, 弥生式 土器片10点	焼失家屋
17	C6f <sub>3</sub>	N-45°-W	長 方 形	5.38×4.76	11~27 垂直, 外傾	平坦	—	1	1	22.3	土師器片134点, 石鏝1 点	
18	C5f <sub>7</sub>	N-50°-E	隅丸方形	5.16×4.86	8~25 外傾	平坦	3	1	—	21.5	土師器片3点, 弥生式 土器片2点	
19	C5g <sub>9</sub>	N-30°-W	不整隅丸方形	5.10×5.06	10~25 外傾	平坦	4	1	—	22.8	土師器片75点, 弥生式 土器片2点	
20	C5j <sub>5</sub>	N-46°-E	長 方 形	7.48×6.66	3 緩傾	平坦	5	1	1	40.7	土師器片54点, 須恵器 片1点	
21	D6a <sub>1</sub>	N-15°-E	不整隅丸長方形	4.74×4.18	11~15 外傾	緩い 起伏	1	1	—	「18.0」	土師器片19点	
22	D5c <sub>8</sub>	N-32°-E	隅丸方形	5.30×5.12	9~20 垂直	緩い 起伏	6	1	1	25.2	土師器片9点, 弥生式 土器片1点	
24	E7b <sub>3</sub>	N-58°-W	隅丸方形	3.92×3.86	15~26 垂直	緩い 起伏	7	1	1	13.1	土師器片9点	
26	D6g <sub>4</sub>	「N-46°-W」	「長方形」	「3.8×3.3」	5 垂直	平坦	4	1	1	(10.9)	土師器片305点, 弥生式 土器片2点	
27	D5b <sub>7</sub>	N-55°-W	隅丸方形	2.98×2.82	6~9 垂直, 緩傾	平坦	1	1	—	7.4	土師器片11点	
28	C6j <sub>7</sub>	N-58°-W	隅丸方形	「3.50」×3.48	31~53 垂直	緩い 起伏	4	1	1	「10.3」	土師器片45点	
31	B6b <sub>1</sub>	N-55°-E	隅丸長方形	3.94×3.22	5~15 外傾	平坦	—	1	—	「11.4」	土師器片123点, 弥生式 土器片2点, 浮子1点	
32	B5e <sub>9</sub>	N-31°-W	隅丸方形	5.56×5.32	8~22 外傾	緩い 起伏	5	1	1	26.4	土師器片124点, 球状土 錘1点	焼失家屋
33	B5d <sub>5</sub>	N-36°-W	隅丸長方形	5.60×4.80	9~36 垂直	皿状	4	1	1	24.3	土師器片218点, 弥生式 土器片9点, 支脚1点, 浮子1点	焼失家屋

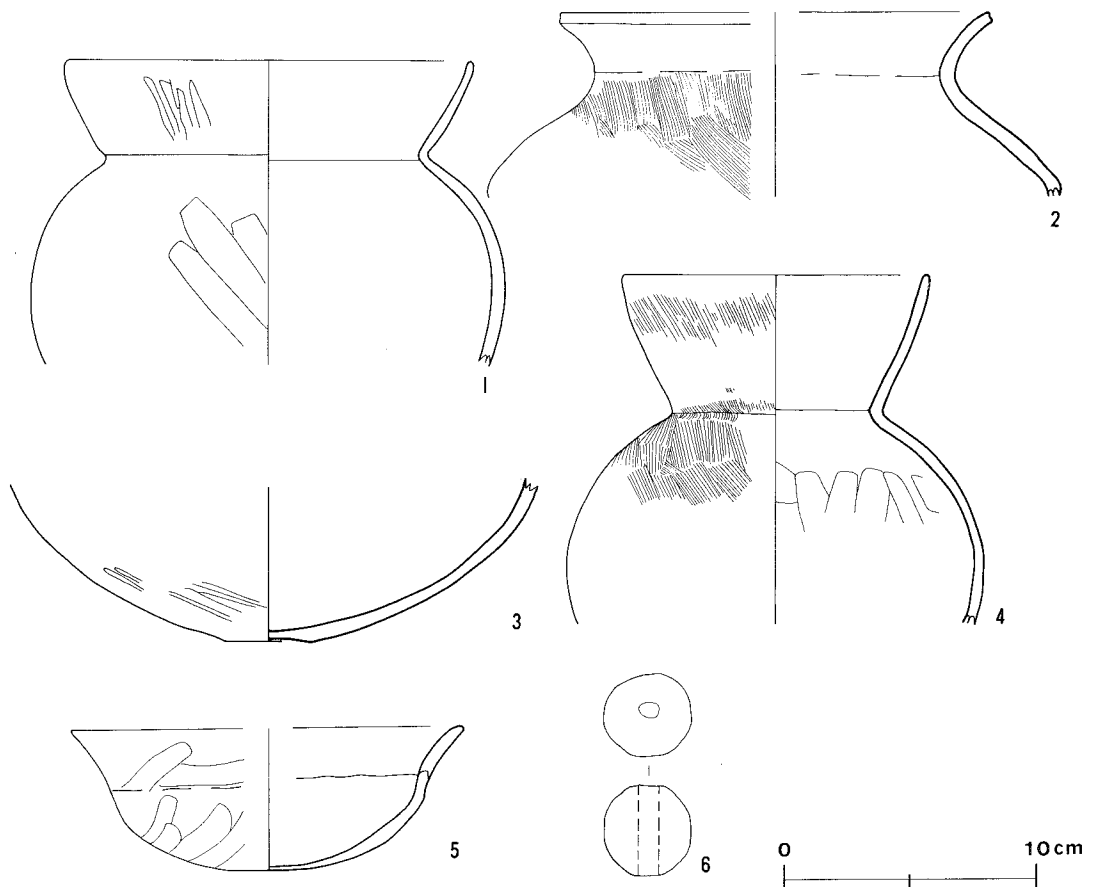
住居跡 番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規 模		床面	ピット 数	炉	貯蔵穴	床面積 (㎡)	主な出土遺物	備 考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)							
36	B5g <sub>3</sub>	N-44°-W	長 方 形	7.66×6.66	8~32 外傾	緩い 起伏	4	1	1	47.3	土師器片129点,球状土 錘1点,砥石2点,鉄 製品2点	焼失家屋
39	C5b <sub>8</sub>	N-46°-W	方 形	6.30×6.20	5~28 垂直	平坦	4	1	1	36.2	土師器片231点,弥生式 土器片3点,浮子1点	
46	B12i <sub>6</sub>	N-25°-W	隅 丸 方 形	3.82×3.70	2~12 緩傾	緩い 起伏	-	1	2	12.3	土師器片37点	
47	B12i <sub>8</sub>	N-11°-W	隅 丸 方 形	3.94×3.76	4~11 緩傾	平坦	5	1	-	12.7	土師器片10点,不明土 製品1点	焼失家屋
50	B11e <sub>9</sub>	N-63°-W	不整隅丸方形	5.58×5.16	29~54 緩傾,外傾	平坦	4	1	-	24.9	土師器片40点	焼失家屋
52	B11h <sub>9</sub>	N-26°-W	不整隅丸方形	4.08×3.80	23~59 垂直	平坦	4	1	-	13.2	土師器片65点,弥生式土 器片3点,球状土錘4点, 土師質土器片1点	
56	B11h <sub>6</sub>	N-47°-W	隅 丸 方 形	4.02×3.78	16~32 外傾	緩い 起伏	-	1	-	13.2	土師器片8点,弥生式 土器片4点	焼失家屋
66	B10d <sub>8</sub>	N-40°-W	隅 丸 方 形	5.24×4.86	15~23 外傾	平坦	4	1	-	22.3	土師器片237点,弥生式 土器片2点,砥石1点	
67	B10f <sub>9</sub>	「N-16°-E」	隅丸長方形	5.50×4.68	4~6 緩傾	(S→N) 傾斜	4	-	-	23.4	土師器片36点,砥石1 点	
69	B10a <sub>6</sub>	N-60°-W	隅 丸 方 形	4.96×4.70	35~40 外傾	平坦	4	1	-	20.2	土師器片39点,球状土 錘1点,浮子1点	
72	B10e <sub>4</sub>	N-62°-W	隅 丸 方 形	3.76×3.72	11~20 外傾	平坦	-	2	-	11.8	土師器片96点,球状土 錘1点	
75	C12b <sub>2</sub>	N-4°-W	隅 丸 方 形	4.02×3.86	5~15 緩傾,外傾	平坦	-	1	1	13.1	土師器片110点,浮子1 点	
78	B10g <sub>4</sub>	「N-52°-W」	「長 方 形」	-	-	平坦	10	1	1	-	土師器片98点,弥生式 土器片2点	
82	C11b <sub>9</sub>	N-3°-W	隅 丸 方 形	3.92×3.80	12~30 垂直,外傾	緩い 起伏	4	1	1	13.0	土師器片5点,砥石1 点	焼失家屋
85	C11g <sub>1</sub>	N-41°-W	隅 丸 方 形	5.94×5.80	18~37 垂直	緩い 起伏	3	-	1	29.3	土師器片404点,管玉5点,弥生 式土器片2点,球状土錘2点,石 製勾玉2点,有孔円板1点	焼失家屋
86	C11h <sub>3</sub>	N-48°-E	方 形	7.30×6.98	5~24 外傾	緩い 起伏	4	1	1	43.1	土師器片259点,弥生式 土器片4点,球状土錘 1点	焼失家屋
91	C11h <sub>6</sub>	N-22°-E	長 方 形	7.20×6.26	17~53 垂直	平坦	10	2	1	41.2	土師器片338点,弥生式 土器片3点,管状土錘 2点	焼失家屋
93	D11a <sub>1</sub>	「N-48°-W」	「隅丸方形」	「5.3×5.3」	3~9 緩傾	平坦	4	1	-	-	土師器片81点,弥生式 土器片2点	
94	C10j <sub>6</sub>	-	「長方形形状」	「7×6」	-	緩い 起伏	4	1	-	-	土師器片2点,弥生式 土器片2点	
95	C11g <sub>9</sub>	「N-66°-W」	「方 形」	「5×5」	6~9 外傾	-	4	1	1	-	土師器片64点	
97	C10j <sub>4</sub>	-	-	-	-	緩い 起伏	6	1	-	-	土師器片1点	
100	D10d <sub>3</sub>	N-67°-E	方 形	5.38×5.00	34~48 垂直	平坦	4	1	1	23.5	土師器片739点,弥生式土 器片2点,支脚2点,土製 紡錘車1点,砥石1点	
103	D10f <sub>9</sub>	「N-54°-W」	隅 丸 方 形	5.32×5.30	8~13 緩傾	平坦	-	-	-	25.2	土師器片39点	
104	D11d <sub>7</sub>	-	-	-	-	平坦	5	1	-	-	土師器片317点,弥生式 土器片2点,管玉1点, 浮子1点	焼失家屋
107	D11h <sub>3</sub>	N-22°-W	方 形	5.78×「5.58」	3~5 外傾	平坦	4	1	-	「30.0」	土師器片279点	
108	D11g <sub>7</sub>	N-24°-W	方 形	4.22×4.12	6~10 緩傾	平坦	-	1	-	「14.7」	土師器片103点,弥生式 土器片1点,球状土錘 1点	焼失家屋
110	D11i <sub>6</sub>	-	「不整長方形形状」	-×3.92	2~10 緩傾	平坦	2	1	-	-	土師器片30点,弥生式 土器片2点	
111	D11h <sub>3</sub>	N-4°-E	隅 丸 方 形	4.32×4.04	8~20 垂直,緩傾	緩い 起伏	4	1	1	14.7	土師器片559点,弥生式 土器片2点,土製円板 1点	焼失家屋
115	D10h <sub>6</sub>	N-38°-W	方 形	5.68×5.48	10~30 外傾	平坦	5	1	1	29.1	土師器片50点,弥生式 土器片3点,球状土錘 1点,土器片錘2点	
118	E10a <sub>9</sub>	「N-11°-W」	方 形	3.84×3.78	7~12 外傾	皿状	-	1	-	13.0	土師器片1点,弥生式 土器片2点,内耳形土 器片1点	

住居跡 番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規 模		床面	ピット 数	炉	貯蔵穴	床面積 (㎡)	主な出土遺物	備 考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)							
121	E10e <sub>s</sub>	N-3°-W	隅丸方形	4.58×4.48	4~7 緩傾	緩い 起伏	4	1	1	17.3	土師器片48点	焼失家屋
123	E11c <sub>s</sub>	N-44°-W	方 形	4.52×4.28	2~14 緩傾,外傾	平坦	4	1	—	「17.0」	土師器片57点	
124	E11f <sub>s</sub>	N-87°-W	隅丸方形	9.92×9.12	17~35 垂直,外傾	緩い 起伏	7	1	1	81.1	土師器片3456点, 弥生式 土師片5点, 支脚5点, 土 製勾玉1点, 古銭1点	焼失家屋

### 第35号住居跡 (第219図)

本跡は、2次調査区のB5g<sub>s</sub>区を中心に確認された住居跡で、第33号住居跡の南5mに位置している。

平面形は、長軸4.86m・短軸4.82mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-27°-Wを指している。床面積は20.7㎡である。壁はロームで、壁高は4~14cmである。削平により北東壁が湮滅しているほかは、65~82度の角度で外傾して立ち上がっている。壁直下には、上幅16~25cm・深さ4~7

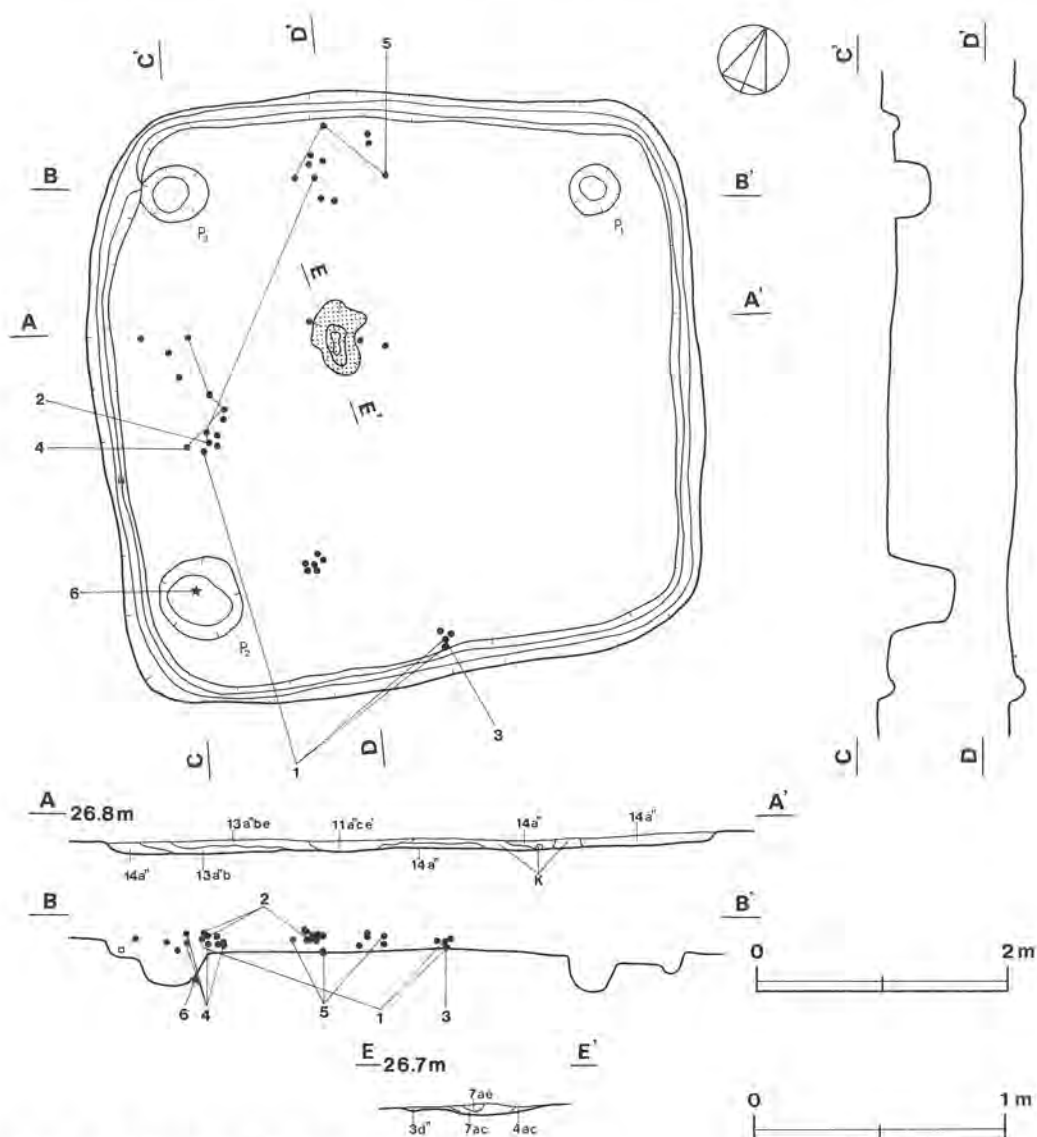


第218図 第35号住居跡出土遺物実測図



cmの壁溝が全周している。床面は緩い起伏を呈する締まりのあるロームで、中央部は硬く踏み固められている。ピットは、3か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は、上端長径40~66cm・深さ28~52cmである。P<sub>2</sub>の平面形が他のピットに比べて大きいのは、床面の一部が攪乱されているためである。いずれも、各コーナーの壁付近に規則的に配置されていることから、本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を5cmほど掘り下げた地床炉で、中央から70cmほど西側に確認された。平面形は、長径61cm・短径44cmの不整楕円形状で、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、極めて浅く、中央部に多量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含む暗褐色土、壁際に中・多量のローム粒子を含む褐色土が堆積している。一部攪乱されているが、いずれも締



第219図 第35号住居跡実測図

まりのある土層であり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

遺物は、土師器及びその破片206点、球状土錘1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片4点が出土している。第218図1の甕形土器口縁部は南東部と南西部の床面近くの破片が、2の甕形土器口縁部は南西部と北西部の床面近くの破片が接合したものである。4の小形壺形土器は南西部の床面近くの破片が、5の坏形土器は北西部の床面近くの破片が接合したものである。3の甕形土器底部は東部の覆土から出土したもので、本跡との関係は不明である。6の球状土錘はP<sub>2</sub>の覆土から出土したものである。出土状況等から考えて、1・2・4～6が本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。

### 第35号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第218図 1	甕形土器 土師器	A 16.4 B (12.2)	口縁部から胴中央部にかけての破片。口縁部は頸部から内彎して開く。	口縁部は外面が篋磨き、内面は横ナデ整形。胴部は内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	10% P 223
2	甕形土器 土師器	A「17.4」 B (7.4)	口縁部から胴上半部にかけての破片。口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。胴部は外面がハケ目整形後、ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	10% P 224
3	甕形土器 土師器	B (6.2) C 3.4	上げ底。胴部は内彎して立ち上がるが、中央部以上は欠損する。	外面は篋磨き整形。内面は剥離が著しく、整形技法不明。	砂粒 灰赤色 普通	10% P 225
4	小形壺形 土器 土師器	A 12.2 B (14.0)	胴下半部以下は欠損。口縁部は頸部から内彎気味に開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。胴部は外面がハケ目、内面は篋ナデ整形。	砂粒 灰褐色 普通	20% P 226
5	坏形土器 土師器	A「15.6」 B 5.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反して開く。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形。口縁部内・外面に赤彩痕が残る。	砂粒 明赤褐色 普通	36% P 227

### 第42号住居跡（第220図）

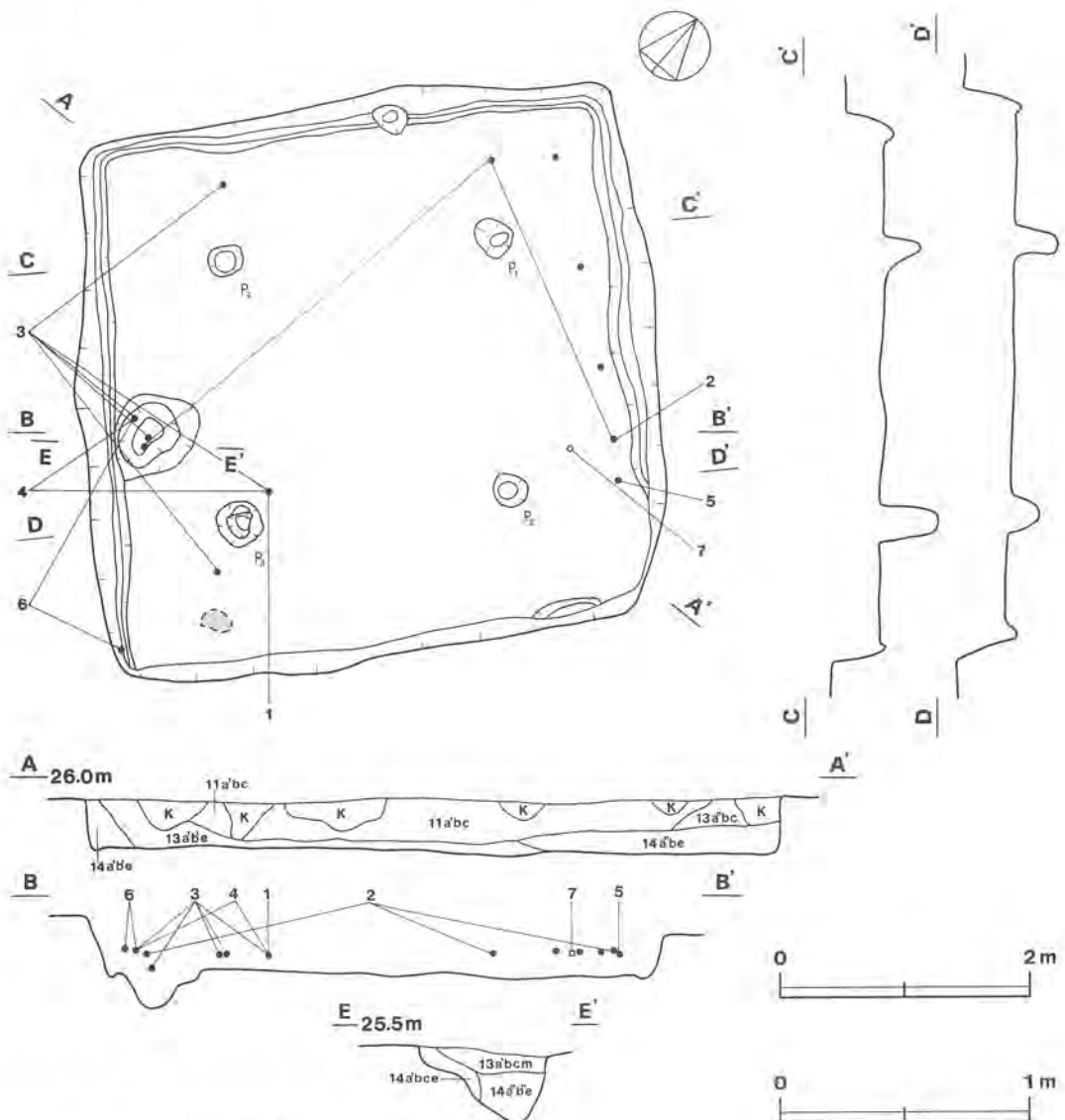
本跡は、2次調査区のZ3j<sub>8</sub>区を中心に確認された住居跡で、第45号住居跡の北西25mに位置している。

平面形は、長軸4.68m・短軸4.50mの方形を呈し、主軸方向はN-44°-Eを指すものと思われる。床面積は17.9m<sup>2</sup>である。壁はロームで、ほぼ垂直に近い角度で立ち上がっており、壁高は28～47cmである。壁直下には、上幅8～16cm・深さ5～10cmの壁溝が、南東壁や東コーナー付近における壁下を除いて全周している。床面は緩い起伏を呈する締まりのあるロームで、貯蔵穴の北側やP<sub>4</sub>の周囲は硬く踏み固められている。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端直径29～34cm・深さ29～50cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴

う支柱穴と判断した。炉は検出されなかった。貯蔵穴は、南西壁際に位置している。平面形は、長径74cm・短径55cmの楕円形で、深さは34cmほどである。貯蔵穴内には、中量のローム粒子やローム中ブロックを含む暗褐色土、多量のローム粒子やローム中ブロックを含む褐色土が堆積している。

覆土は、上層に耕作に伴う攪乱がみられるが中量のローム粒子等を含む黒褐色土、下層に中量のローム粒子や少量のローム小・中ブロック等を含む暗褐色土が堆積している。

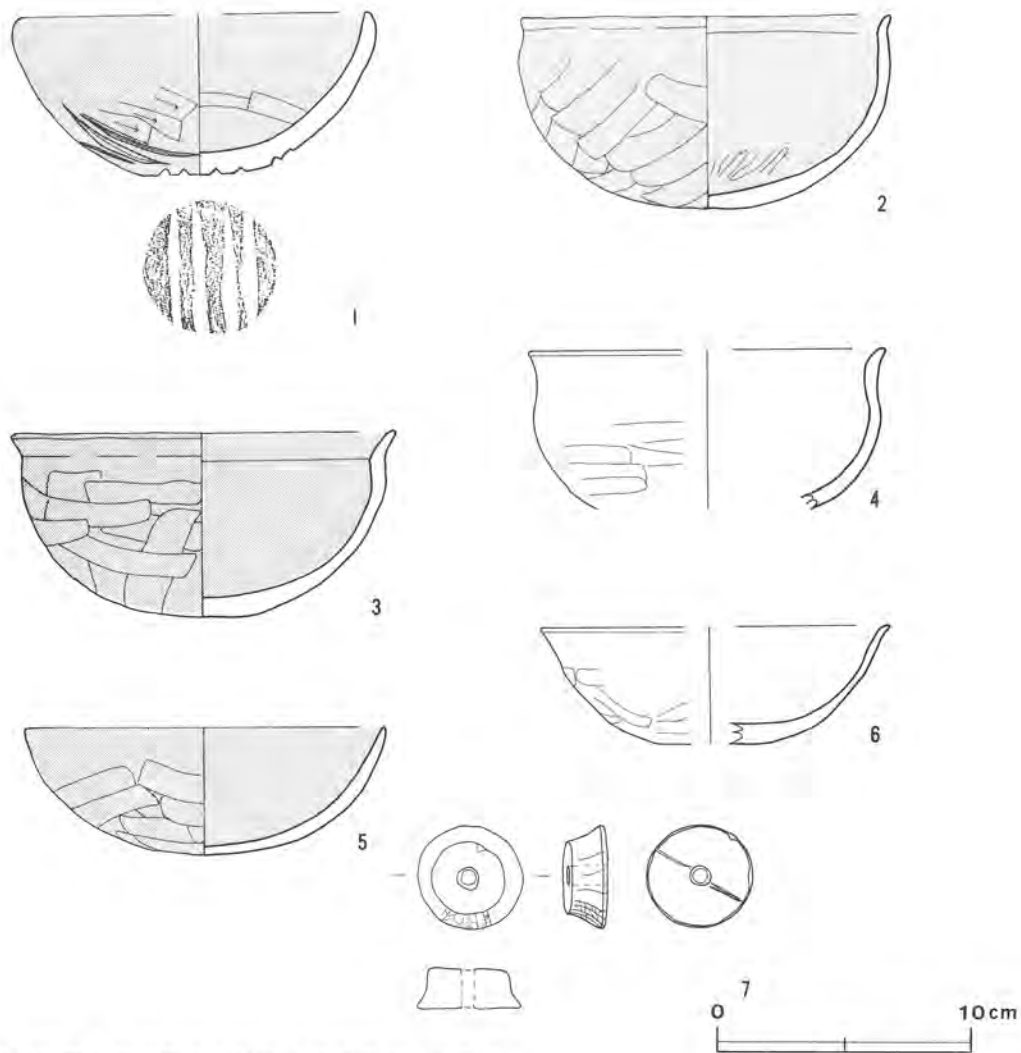
遺物は、土師器及びその破片63点、石製の紡錘車1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。第221図1の環形土器は南部の床面から出土した破片を接合したもの



第220図 第42号住居跡実測図

である。2の埴形土器、5の坏形土器、7の紡錘車は、東コーナー付近の床面から正位の状態で出土したものである。また、3や4の埴形土器は、南西壁際の床面から出土した破片と周囲の床面から出土した破片を接合したものである。また、6の坏形土器は南西壁付近の床面から出土したものである。出土状況等から考えて、1～6は本跡に伴う遺物と思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。



第221図 第42号住居跡出土遺物実測・拓影図

第42号住居跡出土土器観察表

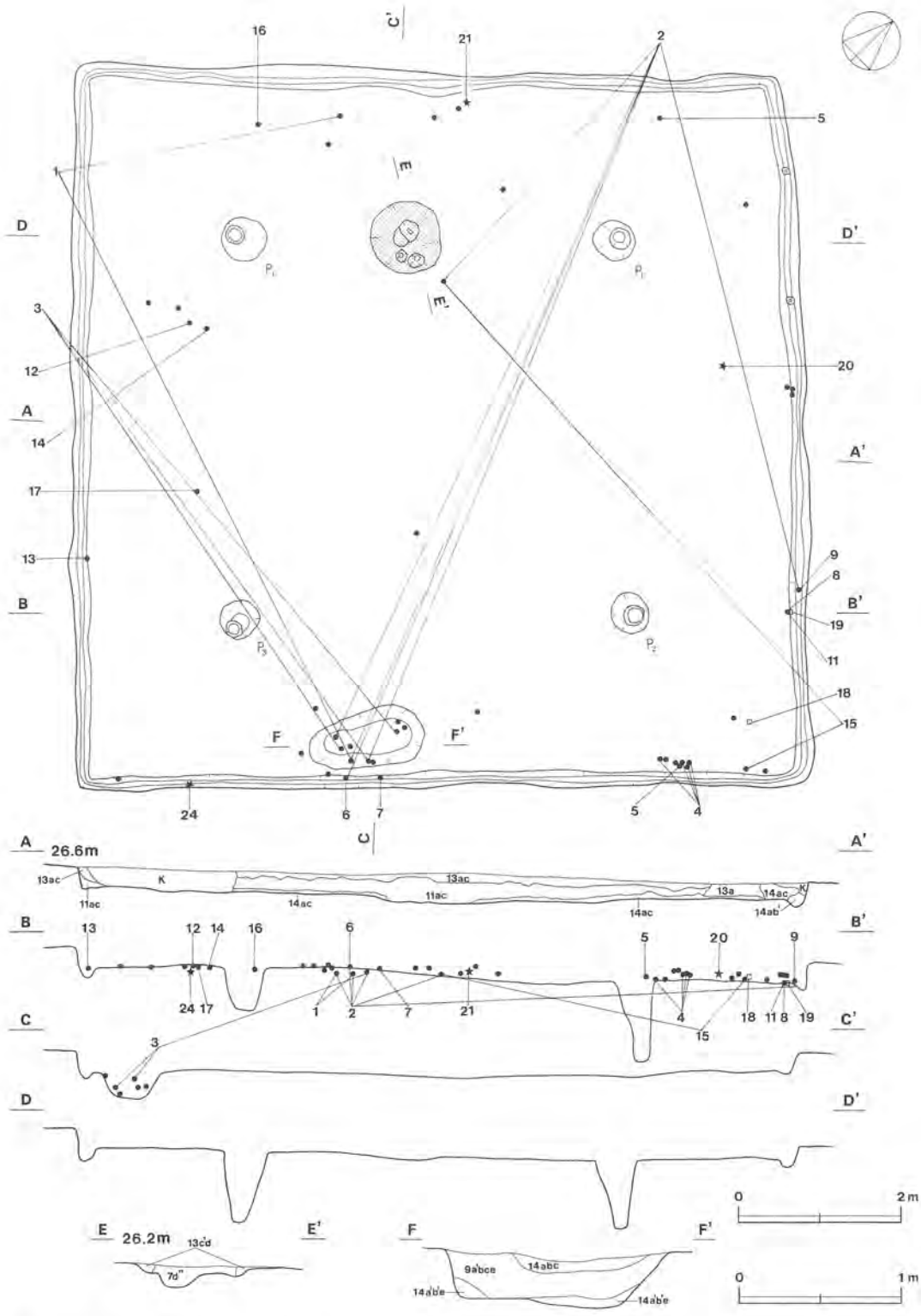
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第221図 1	坏形土器 土師器	A「14.2」	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で強く内彎して開く。体部や底部に線刻状の跡が見られる。	外面が篋削り整形。内面は篋ナデ整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・長石 赤色 普通	50% P225 2次的に砥石として使用したものと思われる。
		B 6.4				
		C 5.2				
2	埴形土器 土師器	A 14.7	丸底。体部は底部と共に内彎して立ち上がる。口縁部は内面に稜を持ち、外傾して短く開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。体部は外面が篋削り整形、内面は篋磨き整形。内・外面とも赤彩。	砂粒 明赤褐色 普通	90% P257
		B 7.7				
3	埴形土器 土師器	A 15.3	丸底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は内面に稜を持ち、外傾して短く開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。体部は外面が篋削り、内面はナデ整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・バミス 赤色 普通	90% P258
		B 7.3				
4	埴形土器 土師器	A「14.2」	底部は欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。体部外面は篋削り整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P259
		B (6.4)				
5	坏形土器 土師器	A 14.3	丸底。体部は大きく内彎して口縁部に開く。	外面は篋削り整形。内面は剝離が著しく整形技法不明。内・外面とも赤彩。	砂粒・バミス 赤色 普通	80% P256
		B 5.1				
6	坏形土器 土師器	A「13.8」	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。体部外面は篋削り整形。	砂粒 灰黄褐色 普通	20% P260
		B 4.8				
		C「4.8」				

第45号住居跡（第222図）

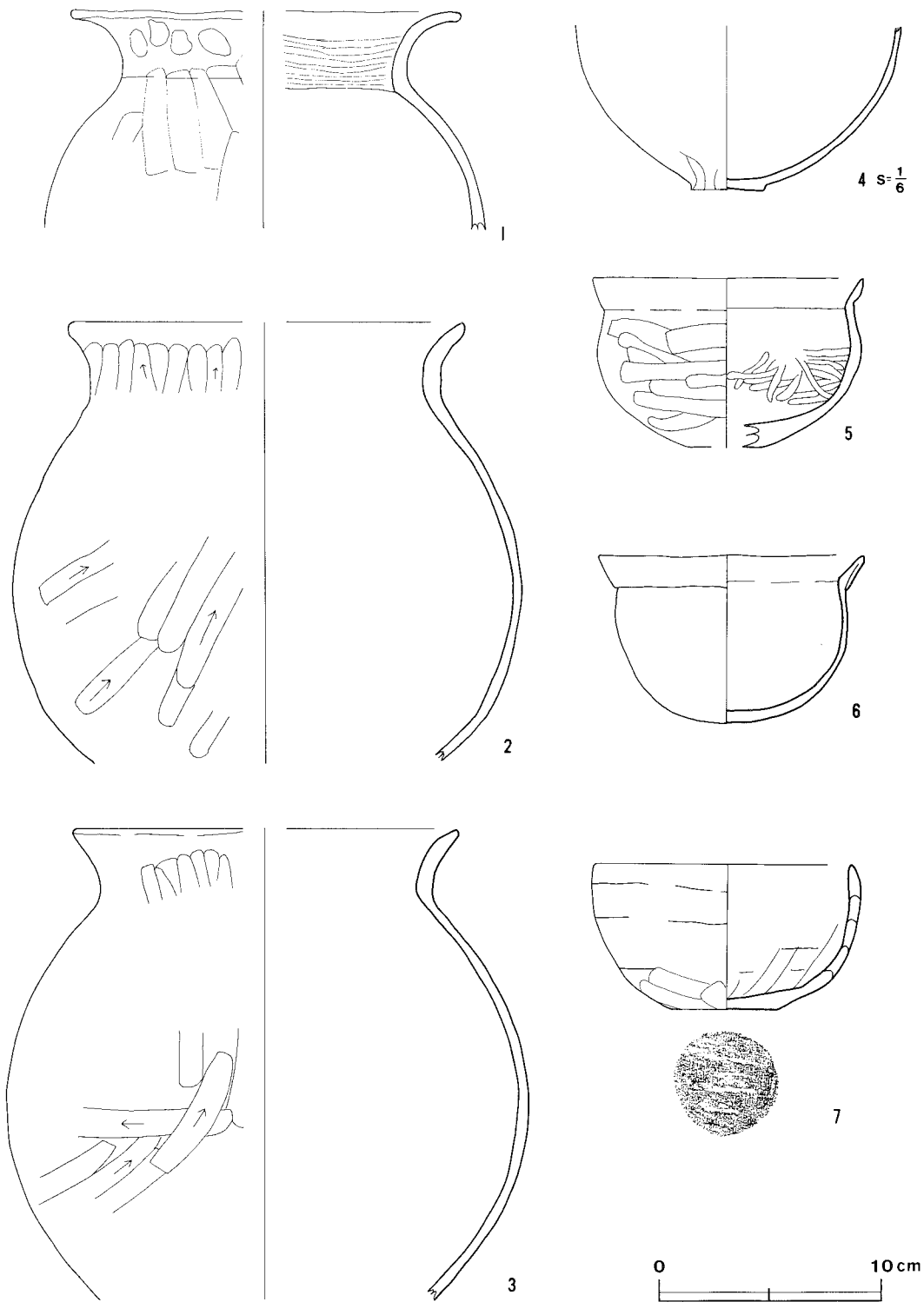
本跡は、2次調査区のA4g<sub>2</sub>区を中心に確認された大型住居跡で、第42号住居跡の南東25mに位置している。

平面形は、長軸9.80m・短軸8.98mの方形を呈し、主軸方向はN-49°-Wを指している。床面積は76.8㎡である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は11~35cmである。壁直下には、上幅15~30cm・深さ5~20cmの壁溝が全周している。床面は締まりのあるロームで、中央部が浅い皿状を呈するほかは平坦である。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径48~52cm・深さ66~99cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を12cmほど掘り下げた地床炉で、中央から2.1mほど北西側に確認され、平面形は、直径89cmほどの円形である。炉内には、多量の焼土粒子を含む暗赤褐色土や中量の焼土粒子を含む暗褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南東壁際に位置している。平面形は、長軸141cm・短軸69cmの隅丸長形状で、深さは29cmほどである。貯蔵穴内には、少量のローム粒子やローム小ブロックを含む褐色土、中量のローム粒子やローム小・中ブロック等を含む鈍い赤褐色土、褐色土が堆積している。

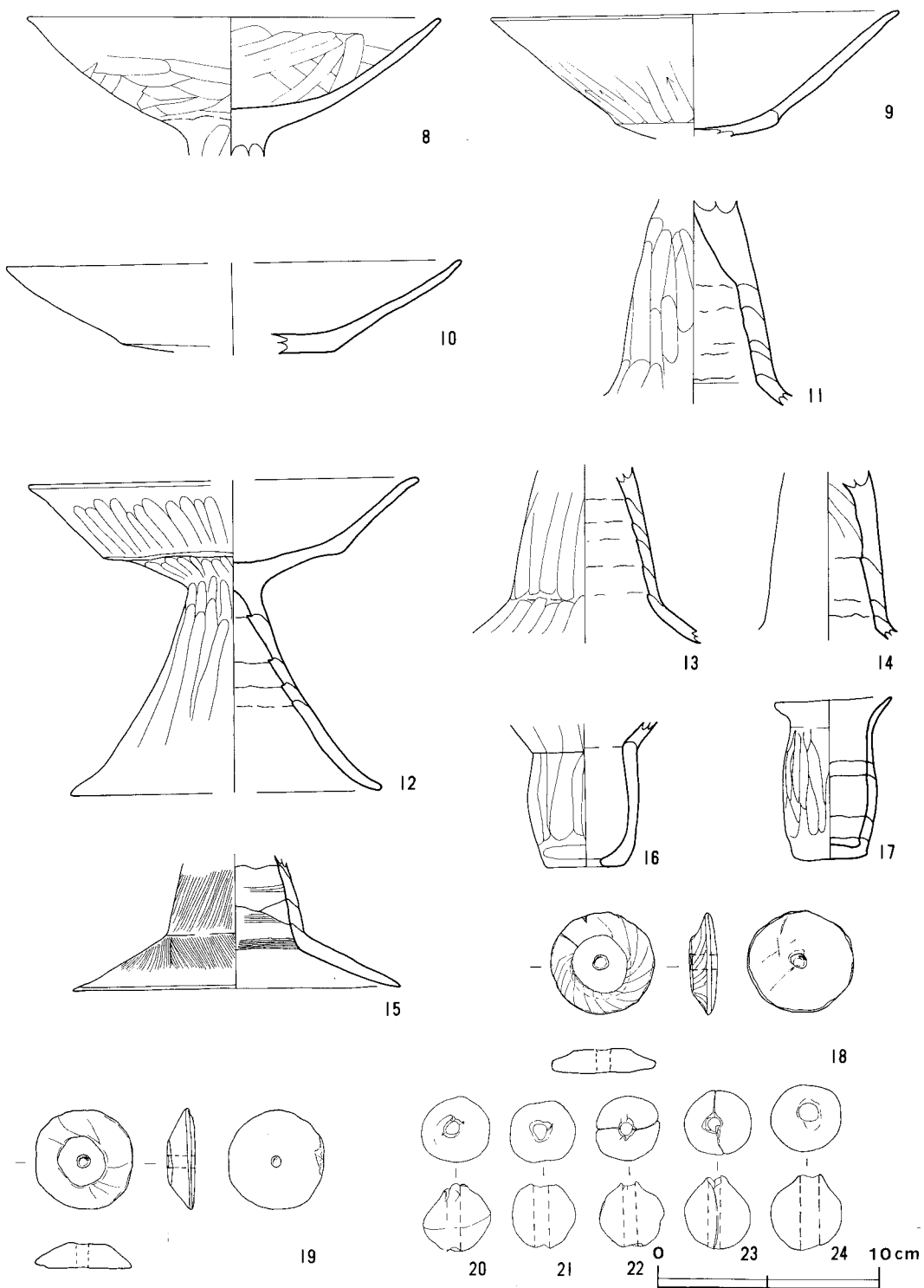
覆土は、上層に少量のローム粒子や焼土粒子等を含む暗褐色土、下層に中量のローム粒子を含



第222图 第45号住居跡実測图



第223图 第45号住居跡出土遺物実測・拓影図-1



第224図 第45号住居跡出土遺物実測図-2



む黒褐色土や褐色土、壁際には中・多量のローム粒子等を含む褐色土が堆積している。一部攪乱されているが、いずれも締まりのある土層であり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

遺物は、土師器及びその破片660点、球状土錘5点、石製の紡錘車2点、用途不明の鉄製品2点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、壁付近に集中して出土している。第223図・第224図2や3の甕形土器、6・7の壙形土器は、南東壁付近の床面から出土した破片を接合したものである。東コーナー付近の床面からは、4の甕形土器胴部や15の高环形土器脚部が潰れた状態で出土したほかに、18と19の石製紡錘車が出土している。このほかに、8～11の高环形土器とその坏部や脚部が床面から正位・横位の状態で出土している。南東壁付近の床面からは1の甕形土器が正位の状態で、北コーナー付近の床面からは5の壙形土器が出土している。また、西部の床面からは、16と17のミニチュア土器が横位の状態で出土しているほかに、12～14の高环形土器とその脚部、南部の壁際からは24の球状土錘が出土している。出土状況等から考え、1～19・24は本跡に伴うものと思われる。20～23の球状土錘は、覆土からの出土であり、本跡との関係は不明である。

本跡は遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。

第45号住居跡出土土器観察表

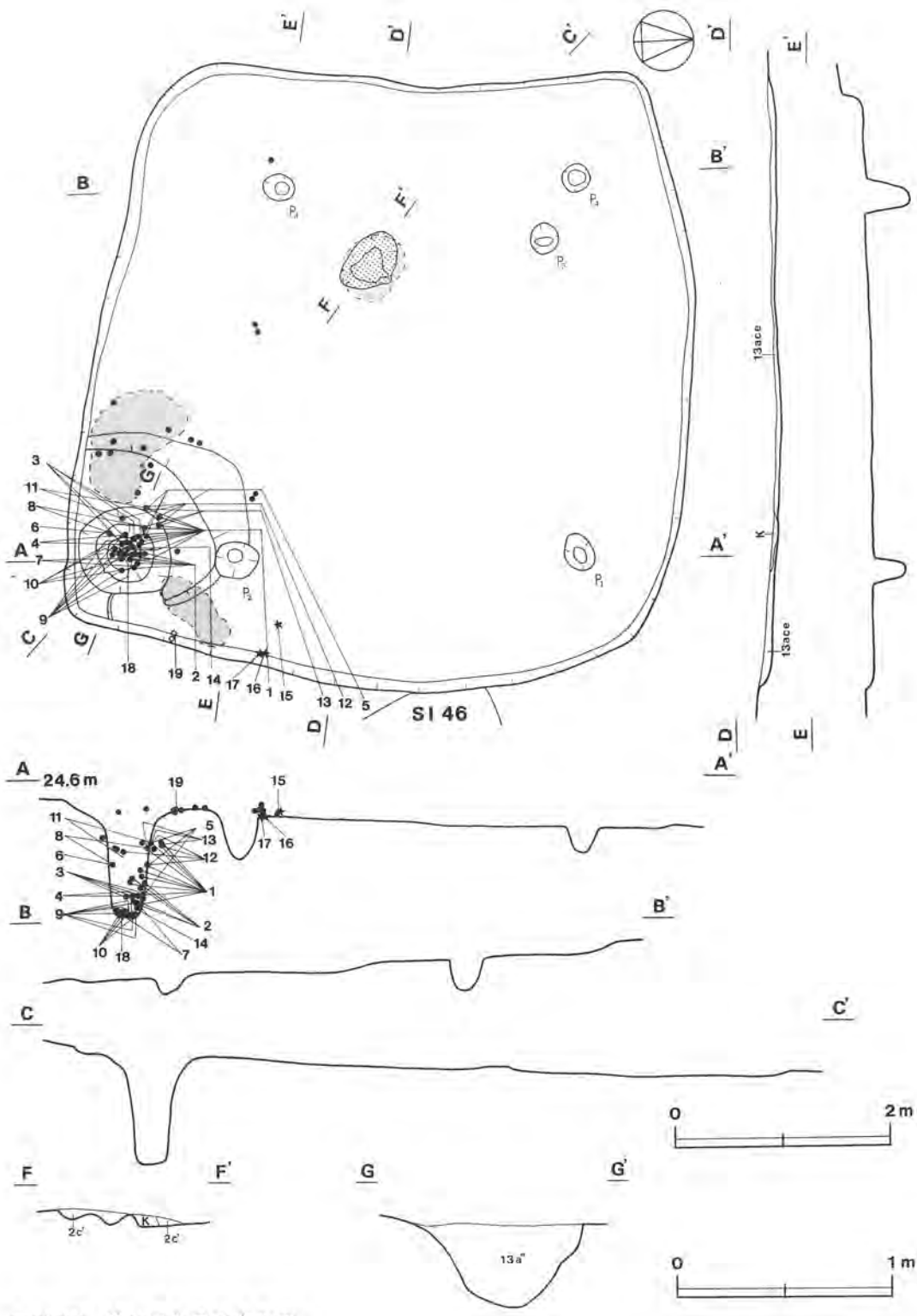
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第223図 1	甕形土器 土師器	A「17.7」 B(10.0)	口縁部から胴上半部にかけての破片。口縁部は頸部から強く外反して開く。	内・外面とも口縁部は横ナデ、胴部は篋ナデ整形。頸部に指頭痕を残す。	砂粒・バミス にぶい褐色 普通	10% P263
2	甕形土器 土師器	A「18.0」 B(20.3)	口縁部から胴下半部にかけての破片。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は外反して開く。	外面は口縁部が横ナデ、頸部及び胴部は篋ナデ整形。内面は口縁部が横ナデ、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・バミス 橙色 普通	25% P261 胴部外面に煤付着
3	甕形土器 土師器	A「17.8」 B(21.8)	口縁部から胴下半部にかけての破片。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外反して開く。	外面は口縁部が横ナデ、頸部及び胴部は篋ナデ整形。内面は口縁部が横ナデ、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・バミス 灰赤色 普通	20% P262 胴部外面に煤付着
4	甕形土器 土師器	B(15.0) C 6.7	胴中央部から底部にかけての破片。突出した平底。胴部は内彎して立ち上がる。	外面はナデ整形、内面は剝離が著しく、整形技法不明。	砂粒・バミス 橙色 普通	20% P266
5	壙形土器 土師器	A 12.4 B 7.8 C「3.6」	平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は内面に稜を持ち、外傾して開く。	外面は口縁部が横ナデ、体部は篋削り整形。内面は篋磨き整形。	砂粒・バミス 橙色 普通	80% P269
6	壙形土器 土師器	A 12.1 B 7.7	丸底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は複合口縁で、内面に稜を持ち外傾して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。体部は外面が篋ナデ整形、内面は剝離が著しく整形技法不明。	砂粒・バミス にぶい赤褐色 普通	60% P268

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第223図 7	埴形土器 土師器	A 11.7	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で強く内彎して開く。底部に線刻状の跡が見られる。	外面は篋ナデ整形であるが、輪積痕を残す。内面はナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	90% P267 2次利用(砥石)
		B 6.7				
		C 4.8				
第224図 8	高坏形土器 土師器	A 19.6	脚部は欠損。坏部は外傾して立ち上がり、大きく開く。坏底部に接合痕を残す。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	60% P271
		B (6.5)				
9	高坏形土器 土師器	A 18.8 B (5.7)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、外傾して開く。	内・外面とも口縁部は横ナデ、以下は篋ナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	30% P272
10	高坏形土器 土師器	A「20.9」 B (4.3)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、外傾して開く。	内・外面ともナデ整形。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	30% P273
11	高坏形土器 土師器	B (9.4)	脚部片。脚部は円筒状を呈するが、裾部は欠損する。	外面は篋削り整形。内面は輪積痕を残す。	砂粒・パミス 橙色 普通	20% P282
12	高坏形土器 土師器	A「18.1」 B 14.5	脚部はラッパ状に開き、裾部で緩やかに広がる。坏部は下位に稜を持ち、外傾して開く。	坏部は外面が篋ナデ、内面はナデ整形。脚部は外面が篋削り整形で、内面に輪積痕を残す。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	40% P274
		D「14.4」				
13	高坏形土器 土師器	B (8.1)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部で外傾して開くが末端は欠損する。	外面は篋削り整形。内面は輪積痕を残す。	砂粒・パミス 橙色 普通	10% P279
14	高坏形土器 土師器	B (7.8)	脚部片。脚部は円筒状を呈するが、裾部は欠損する。	外面は剝離が著しく、整形技法不明。内面は輪積痕を残す。	砂粒・パミス 橙色 普通	20% P281
15	高坏形土器 土師器	B (6.2) D 15.2	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部で外傾して大きく開く。	外面はハケ目整形。内面は輪積痕を残す。	砂粒・パミス 明褐色 普通	20% P278
16	ミニチュア 土器 土師器	B (6.6)	平底で径1.1cmの孔が穿たれる。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は「く」の字状に外傾して立ち上がるが、口縁部は欠損する。	外面は篋削り整形。内面はナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	80% P283
		C 3.7				
17	ミニチュア 土器 土師器	A 5.3	平底。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は頸部から「く」の字状に外反して開く。	口縁部は内・外面ともナデ整形。胴部は外面が篋削り整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	90% P284
		B 7.5				
		C 3.4				

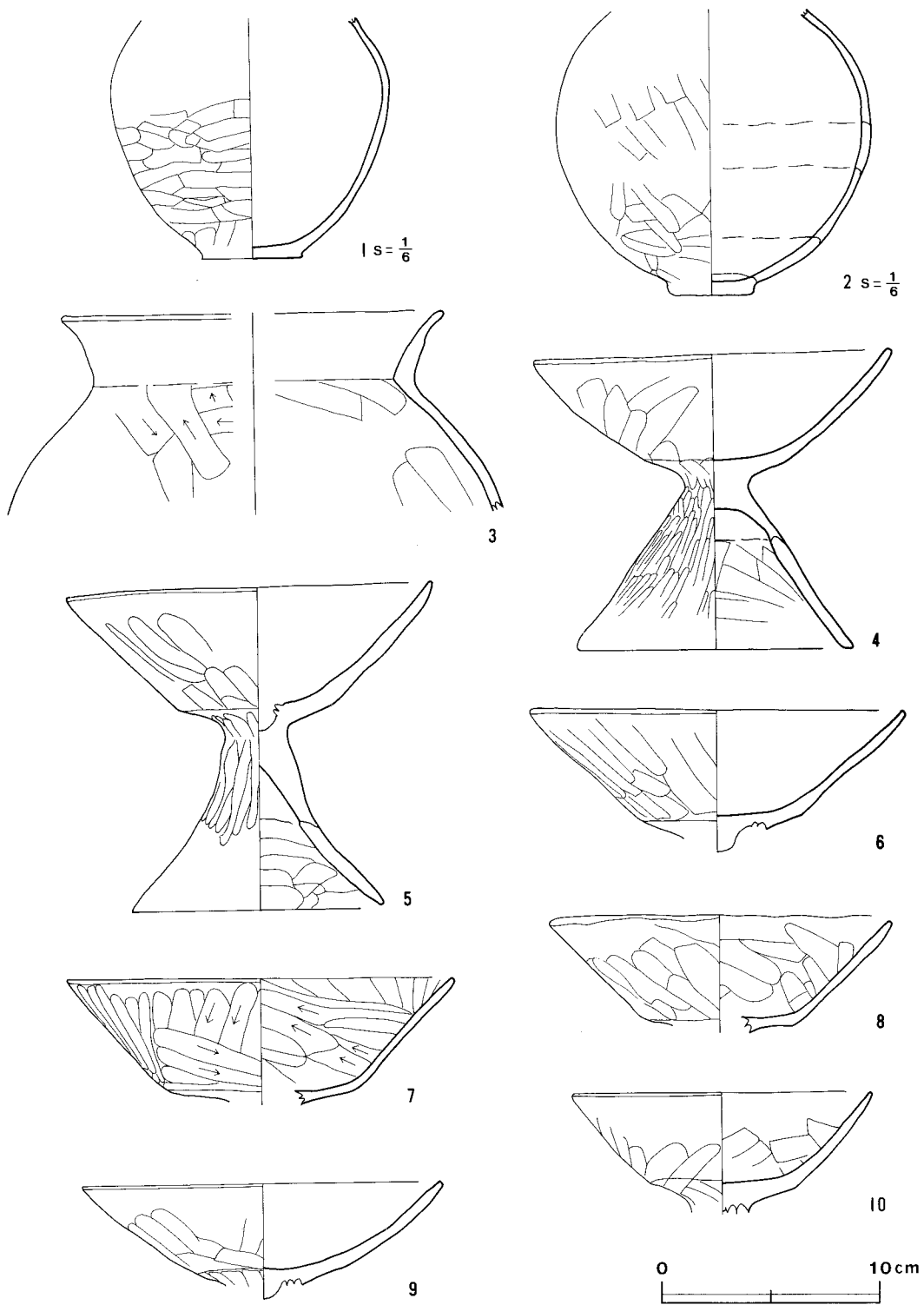
#### 第48号住居跡（第225図）

本跡は、2次調査区のB12i<sub>4</sub>区を中心に確認された住居跡で、第49号住居跡の南東8m、第88号住居跡の北東20mに位置している。本跡は東側で第46号住居跡と重複しているが、第46号住居跡の北西壁を切っていることや出土遺物などから、本跡の方が新しい時期の遺構と思われる。

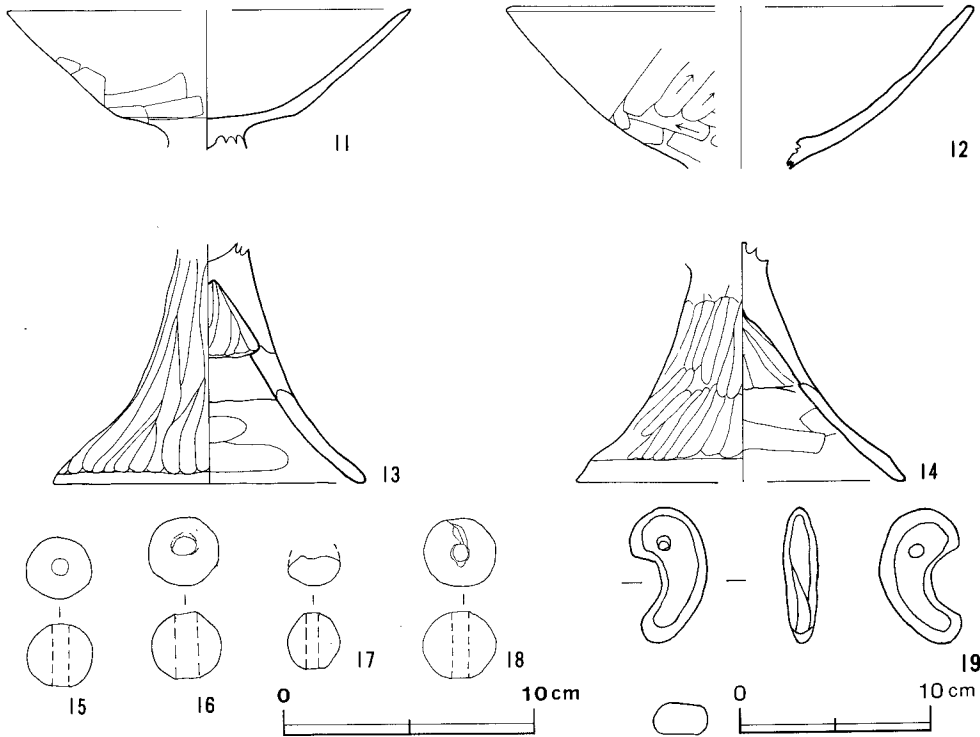
平面形は、長軸5.66m・短軸5.54mの不整隅丸方形を呈し、主軸方向はN-77°-Wを指している。床面積は28.1㎡である。壁はロームで、70～80度の角度で立ち上がっている。壁高は4～18cmであるが、北壁は湮滅に近い状態である。床面は締まりのあるロームで、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>の間は硬く踏



第225图 第48号住居跡実測图



第226图 第48号住居迹出土遗物实测图-1



第227図 第48号住居跡出土遺物実測図-2

み固められている。ピットは、5か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>は、上端長径28~44cm・深さ16~43cmであり、5本とも本跡に伴う柱穴と判断した。主柱穴と考えられるピットは、形状や規模、方形に配置されていることなどからP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>であり、P<sub>5</sub>は補助的な機能を有するものと思われる。炉は、床面をそのまま使用したと思われる地床炉で、中央から60cmほど西側に確認された。平面形は、長径63cm・短径40cmの楕円形状で、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南東コーナーの壁際に位置している。貯蔵穴の周囲は床面より高くなっており、周堤としての機能を有するものと考えられる。平面形は、直径90cmほどの円形で、深さ104cmである。

覆土は、極めて浅い単一層であり、少量のローム粒子や焼土粒子等を含む暗褐色土が堆積している。また、南東コーナー付近の床面に多量の焼土粒子を含む暗赤褐色土や中量の焼土粒子を含む暗褐色土が堆積していることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、焼土を含む層の下に褐色土が堆積していることから、本跡の廃絶後と思われる。

遺物は、土師器及びその破片155点、球状土錘4点、石製勾玉1点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、南東コーナー付近の床面や貯蔵穴内に集中して出土している。第226図・第227図1や2の壺形土器胴部は貯蔵穴の下位に落ち込んだような状態で、4~7・9~11・14の高坏形土器とその坏部や脚部は下位から底面にかけて出土したものであり、このほかに18の球状土錘が出土している。また、3の甕形土器口縁部や8の高坏形土器坏部や12・13の高坏形土器の坏

部や脚部も貯蔵穴内から出土したものである。また、東壁中央部の床面からは、15～17の球状土  
 錘と19の石製勾玉が出土している。出土状況等から考え、1～19は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。

第48号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第226図 1	壺形土器 土師器	B (22.0) C 9.2	頸部以上は欠損。突出した平底。 胴部は内彎して立ち上がり、最 大径を中位よりやや上に持つ。	外面は篋ナデ整形。内面は剝離 が著しく、整形技法不明。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	50% P291
2	壺形土器 土師器	B (26.4) C 7.8	頸部以上は欠損。突出した平底。 胴部は球形状を呈し、最大径を 中位に持つ。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・バミス 橙色 普通	70% P292 胴部外面に煤付 着
3	甕形土器 土師器	A「17.6」 B (9.3)	口縁部から胴上半部にかけての 破片。口縁部は内面に稜を持つ 頸部から、外反して開く。	内・外面とも口縁部は横ナデ、 胴部は篋ナデ整形。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	10% P305
4	高环形土器 土師器	A 16.5 B 13.8 D 12.8	脚部は「ハ」の字状に開く。坏部 は下位に弱い稜を持ち、内彎気 味に開く。	坏部は外面が篋ナデ整形、内面 は剝離が著しく整形技法不明。 脚部は外面が篋磨き、内面は篋 ナデ整形。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	100% P293
5	高环形土器 土師器	A 16.9 B 15.0 D 11.7	脚部はラッパ状を呈し、裾部は 末端でわずかに内彎する。坏部 は下位に稜を持ち、外傾して開 く。	坏部は外面が篋ナデ整形、内面 は剝離が著しく整形技法不明。 脚部は外面が篋削り、内面は篋 ナデ整形。	砂粒・バミス 橙色 普通	90% P294
6	高环形土器 土師器	A 17.5 B (6.6)	脚部は欠損。坏部は下位に稜を 持ち、外傾して開く。	外面は篋ナデ整形。内面は剝離 が著しく、整形技法不明。	砂粒・バミス 褐色 普通	50% P295
7	高环形土器 土師器	A 17.8 B (5.8)	脚部は欠損。坏部は下位に稜を 持ち、外傾して開く。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	40% P296
8	高环形土器 土師器	A 15.9 B (5.4)	脚部は欠損。坏部は下位に稜を 持ち、外傾して開く。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	50% P297
9	高环形土器 土師器	A 16.6 B (5.3)	脚部は欠損。坏部は下位に稜を 持ち、内彎気味に開く。	外面は篋ナデ整形。内面は剝離 が著しく、整形技法不明。	砂粒・バミス 橙色 普通	40% P298
10	高环形土器 土師器	A 14.0 B (5.6)	脚部は欠損。坏部は下位に稜を 持ち、外傾して開く。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・バミス 橙色 普通	30% P299
第227図 11	高环形土器 土師器	A「16.1」 B (5.7)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、 外傾して開く。	外面は篋ナデ整形。内面は剝離 が著しく、整形技法不明。	砂粒・スコリア 橙色 普通	20% P300
12	高环形土器 土師器	A「18.6」 B (6.5)	坏部片。坏部は下位に弱い稜を 持ち、外傾して開く。	外面は篋ナデ整形。内面は剝離 が著しく、整形技法不明。	砂粒・バミス 橙色 普通	20% P301

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第227図 13	高環形土器 土 師 器	B (9.6) D 12.4	坏部は欠損。脚部はラッパ状を呈し、裾部で緩やかに広がる。	外面は篋削り整形。内面は篋ナデ整形であるが、輪積痕を残す。	砂粒・パミス 橙色 普通	30% P302
14	高環形土器 土 師 器	B (9.6) D「13.1」	坏部は欠損。脚部はラッパ状を呈し、裾部で緩やかに広がる。	外面は篋削り整形。内面は篋ナデ整形であるが、輪積痕を残す。	砂粒・パミス 橙色 普通	40% P303

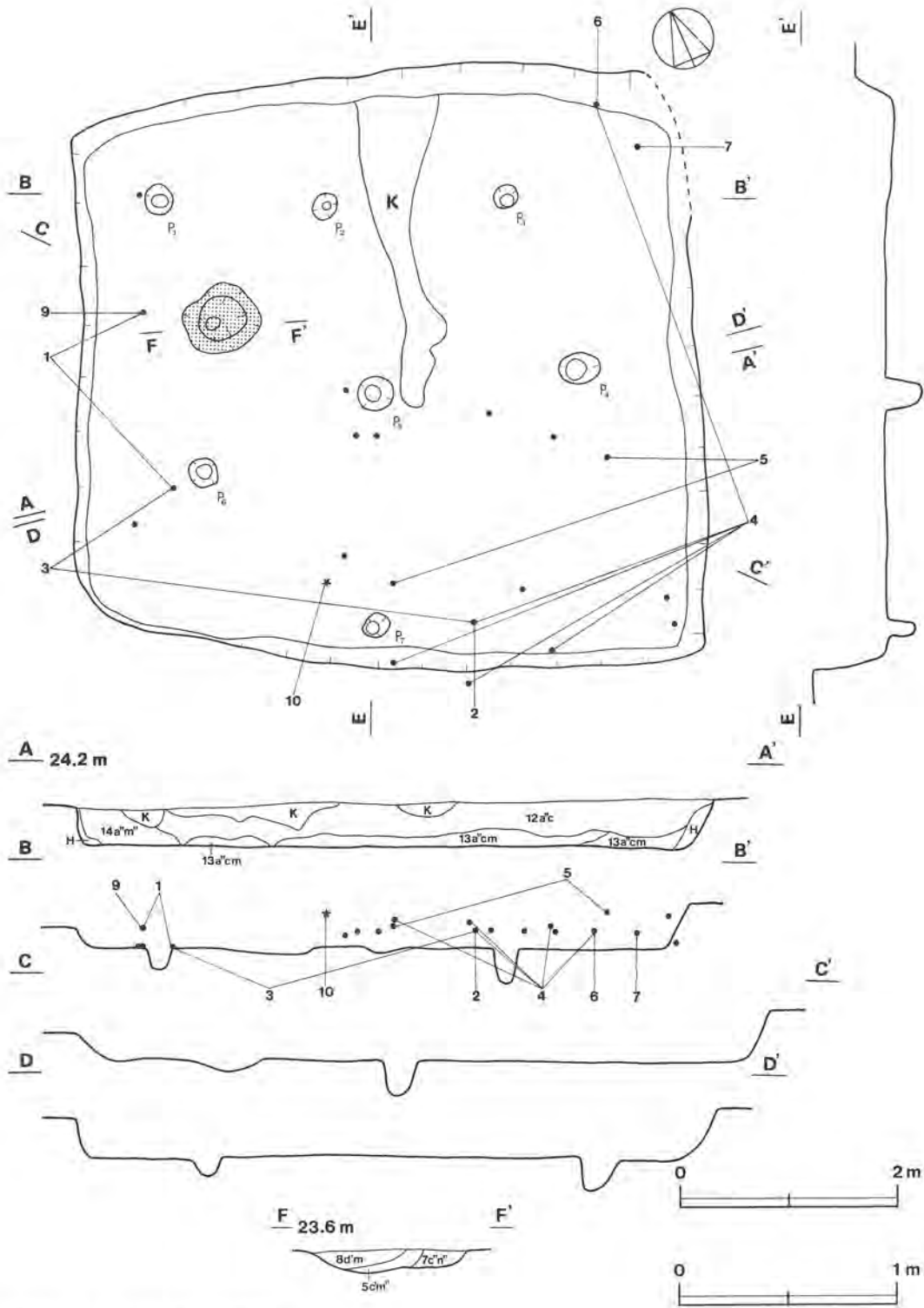
#### 第49号住居跡（第228図）

本跡は、2次調査区のB12h<sub>1</sub>区を中心に確認された住居跡で、第48号住居跡の北西8m、第51号住居跡の東7mに位置している。

平面形は、長軸5.60m・短軸5.46mの方形を呈し、主軸方向はN-66°-Wを指している。床面積は26.7m<sup>2</sup>である。壁はロームで、55～70度の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は18～60cmである。床面は平坦で、硬く踏み固められたロームである。ピットは、7か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>は、上端直径23～35cm・深さ19～37cmであり、配置に乱れがあるがいずれも本跡に伴う柱穴であると考えられる。炉は、床面を13cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.4mほど北西側に確認され、平面形は、直径74cmほどの円形状である。炉内には、多量の焼土粒子を含む赤褐色土、多量の炭化物や焼土粒子を含む黒褐色土、極暗赤褐色土が堆積しているが、炉床はあまり硬く焼き締まっていない。

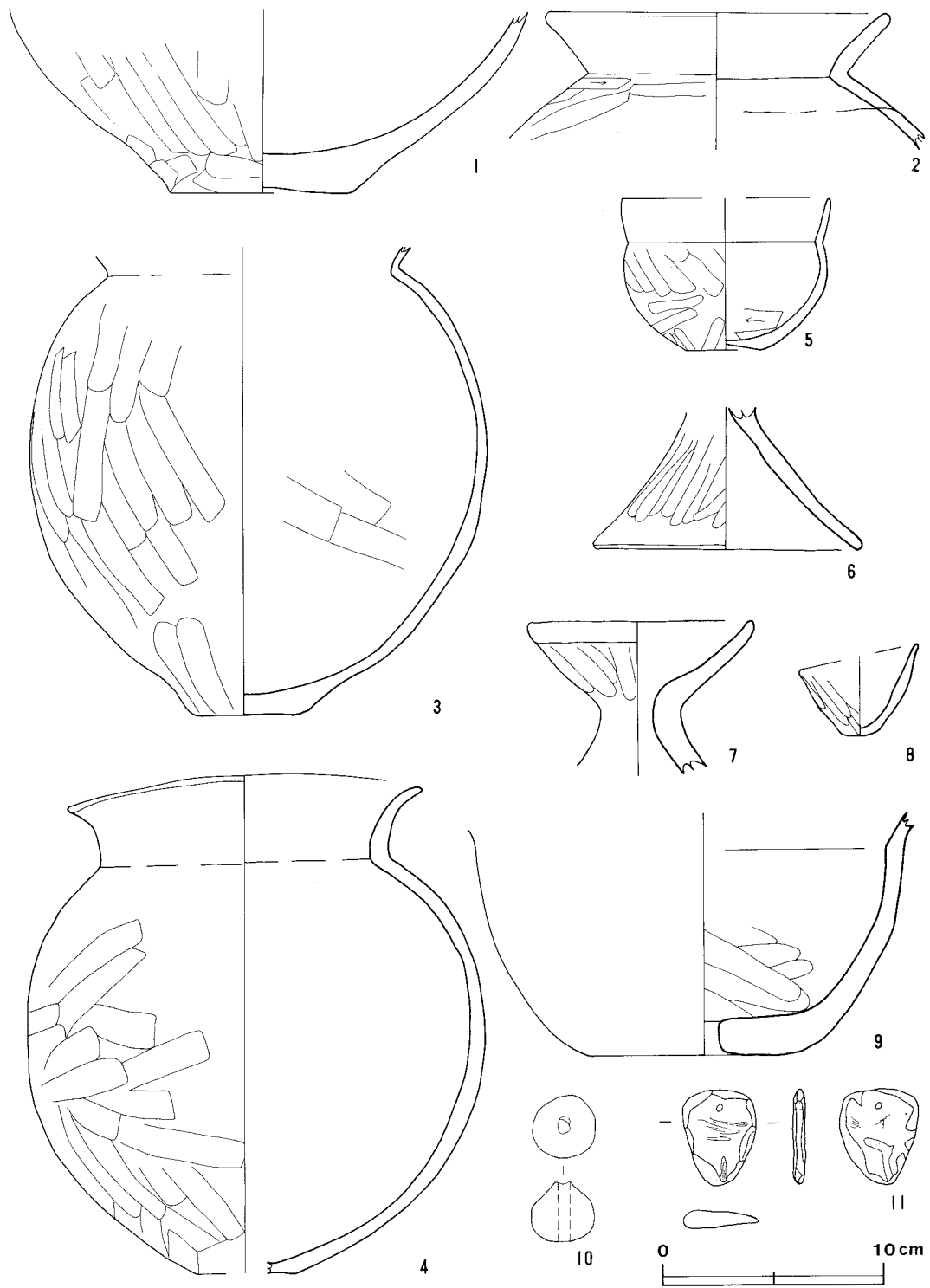
覆土は、上層に中量のローム粒子や多量の砂粒を含む極暗褐色土、下層に少量の炭化物や焼土粒子、及び多量のローム粒子を含む暗褐色土、中量の炭化物や多量のローム粒子等を含む褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、自然堆積と考えられる。また、北壁や南東コーナー付近に、中量の焼土粒子を含む暗褐色土や暗赤褐色土が堆積していることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、壁際に褐色土が堆積し、その内側に焼土を含む層が検出されていることから、本跡の廃絶後と思われる。

遺物は、土師器及びその破片547点、球状土錘1点、石製の剣形模造品1点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、北壁中央部付近を除いた床面や覆土下層から出土している。第229図1の甕形土器胴部や9の甕形土器は西壁付近、2の甕形土器口縁部は南東コーナー付近の床面から出土した破片を接合したものである。6の高環形土器脚部や7の器台形土器は、北東コーナー付近の覆土下層に横位・倒立の状態出土したものである。3の甕形土器は南東及び南西コーナー付近の床面出土の破片を接合したものであり、4の甕形土器は南東及び北東コーナー付近の破片を接合したものである。出土状況等から考え、1～4・6・7・9は本跡に伴うものと思われる。5の塊形土器、10の球状土錘、8のミニチュア土器、11の石製の剣形模造品は、覆土中・上層からの出土であり本跡との関係は不明である。



第228图 第49号住居迹实测图





第229图 第49号住居跡出土遺物実測図

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。

第49号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第229図 1	甕形土器 土師器	B (8.5) C 8.4	上げ底。胴部は内彎して立ち上がるが、中央部以上は欠損する。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒・スコリア 褐色 普通	10% P306
2	甕形土器 土師器	A 15.6 B (6.3)	口縁部から胴上半部にかけての破片。口縁部は内面に稜を持つ頸部から、「く」の字状に外傾して開く。	内・外面とも口縁部は横ナデ、胴部は篋ナデ整形。	砂粒・パミス 褐色 普通	10% P307
3	甕形土器 土師器	B (21.6) C 5.5	口縁部は欠損。突出した平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	40% P309
4	甕形土器 土師器	A 16.4 B 23.2 C 「4.7」	胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は、頸部から垂直に立ち上がった後、外反して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。胴部は外面が丁寧な篋ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	40% P310
5	坑形土器 土師器	A 「8.5」 B 7.0 C 3.5	上げ底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は内面に稜を持ち、内彎気味に開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。体部は外面が篋磨き、内面は篋ナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	45% P311
6	高坏形土器 土師器	B (6.6) D 12.0	坏部は欠損。脚部は「ハ」の字状に開く。	外面は篋磨き整形。内面はナデ整形。	砂粒・パミス 赤色 普通	50% P312
7	器台形土器 土師器	A 10.4 B (7.1)	脚部は大きく欠損。器受部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。接合部に中央孔を持つ。	外面は篋ナデ整形。内面は剝離が著しく、整形技法不明。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	60% P315
8	ミニチュア 土器 土師器	A 「5.6」 B 4.2 C 1.7	平底。体部は内彎気味に開く。	外面は粗雑な篋削り整形。内面は篋ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	50% P314
9	甕形土器 土師器	B (11.2) C 9.6	平底。底部に径2.8cmの孔が穿たれる。胴部は内彎して立ち上がる。頸部は内面に稜を持つが、口縁部は欠損する。	外面は剝離が著しく、整形技法不明。内面は篋磨き整形。	砂粒・スコリア 浅黄褐色 普通	30% P316

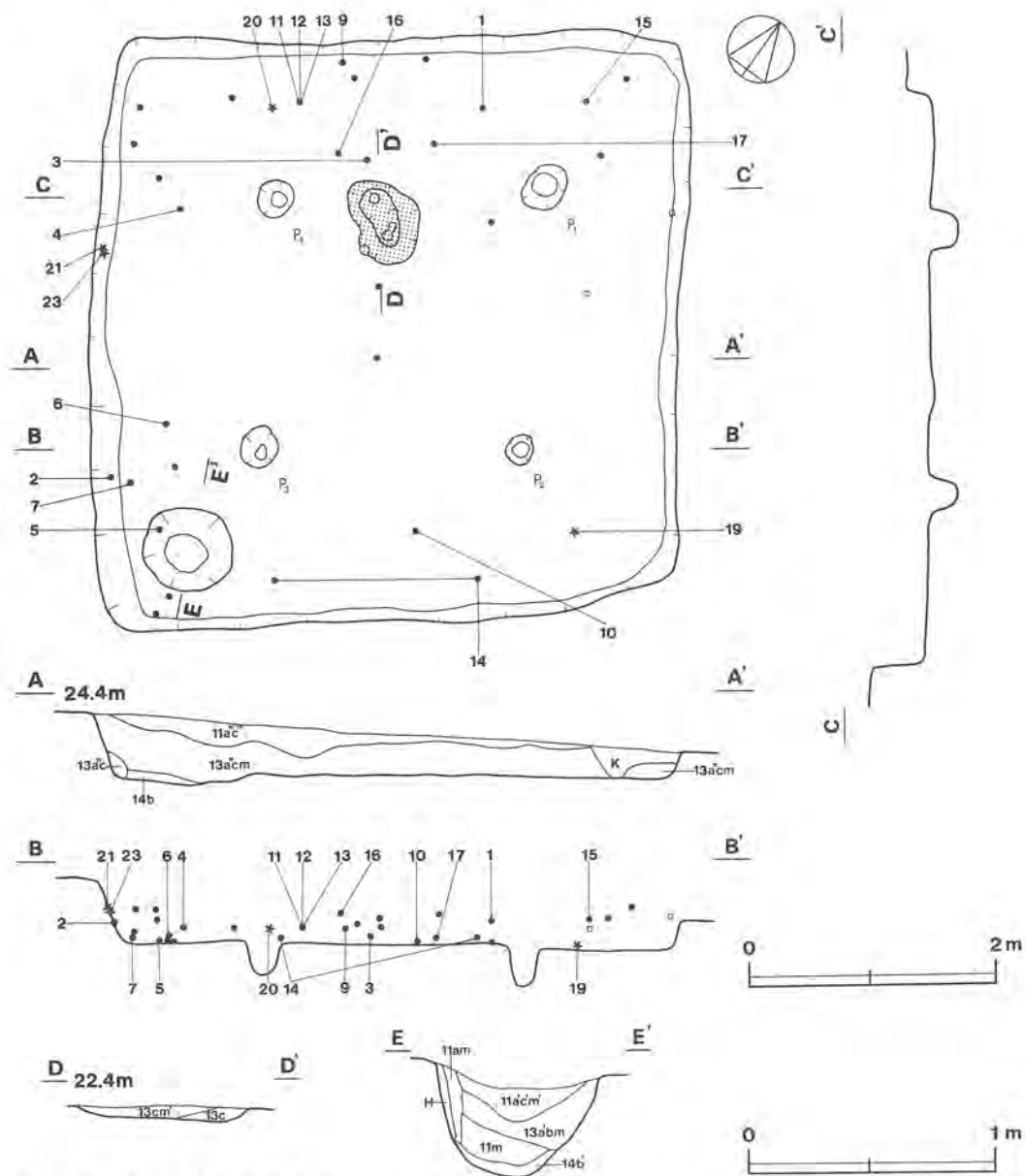
第51号住居跡 (第230図)

本跡は、2次調査区のB11g<sub>7</sub>区を中心に確認された住居跡で、第49号住居跡の西7mに位置している。

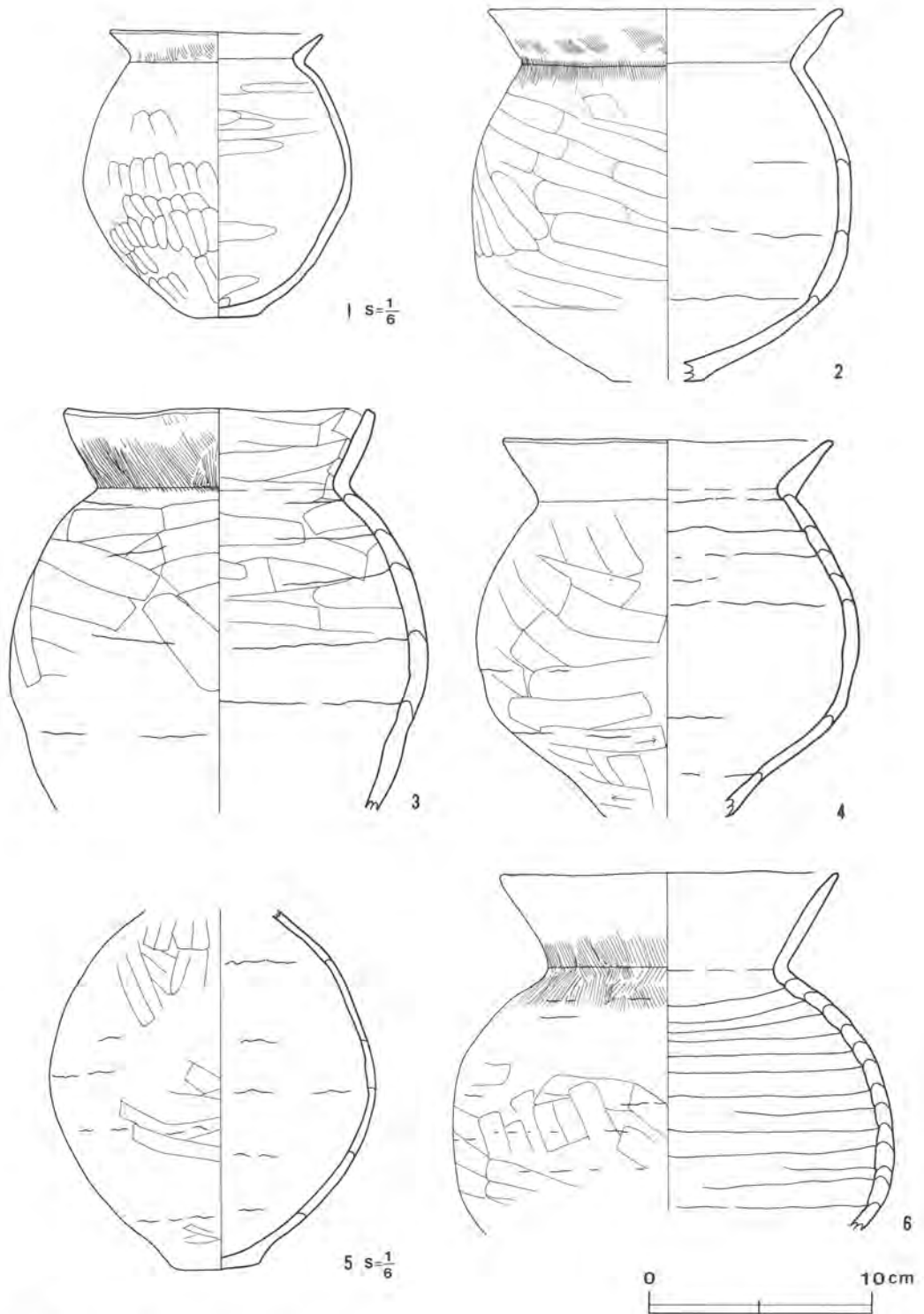
平面形は、長軸4.84m・短軸4.80mの方形を呈し、主軸方向はN-35°-Wを指している。床面積は20.4m<sup>2</sup>である。壁はロームで、ほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は22~54cmである。床面はほぼ平坦なロームで、全体的に硬く踏み固められている。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端長径26~42cm・深さ24~34cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴であると判断した。炉は、床面を6cmほど掘り下げた地床炉で、中央

から90cmほど北西側に確認され、平面形は、長径75cm・短径50cmの楕円形状である。炉内には、多量の焼土粒子や中量の炭化物を含む暗赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南コーナーの壁際に位置している。平面形は、直径78cmほどの円形で、深さは40cmほどである。貯蔵穴内には、中量のローム粒子や炭化物等を含む黒褐色土、暗褐色土、中量のロームブロックを含む褐色土がレンズ状に堆積している。

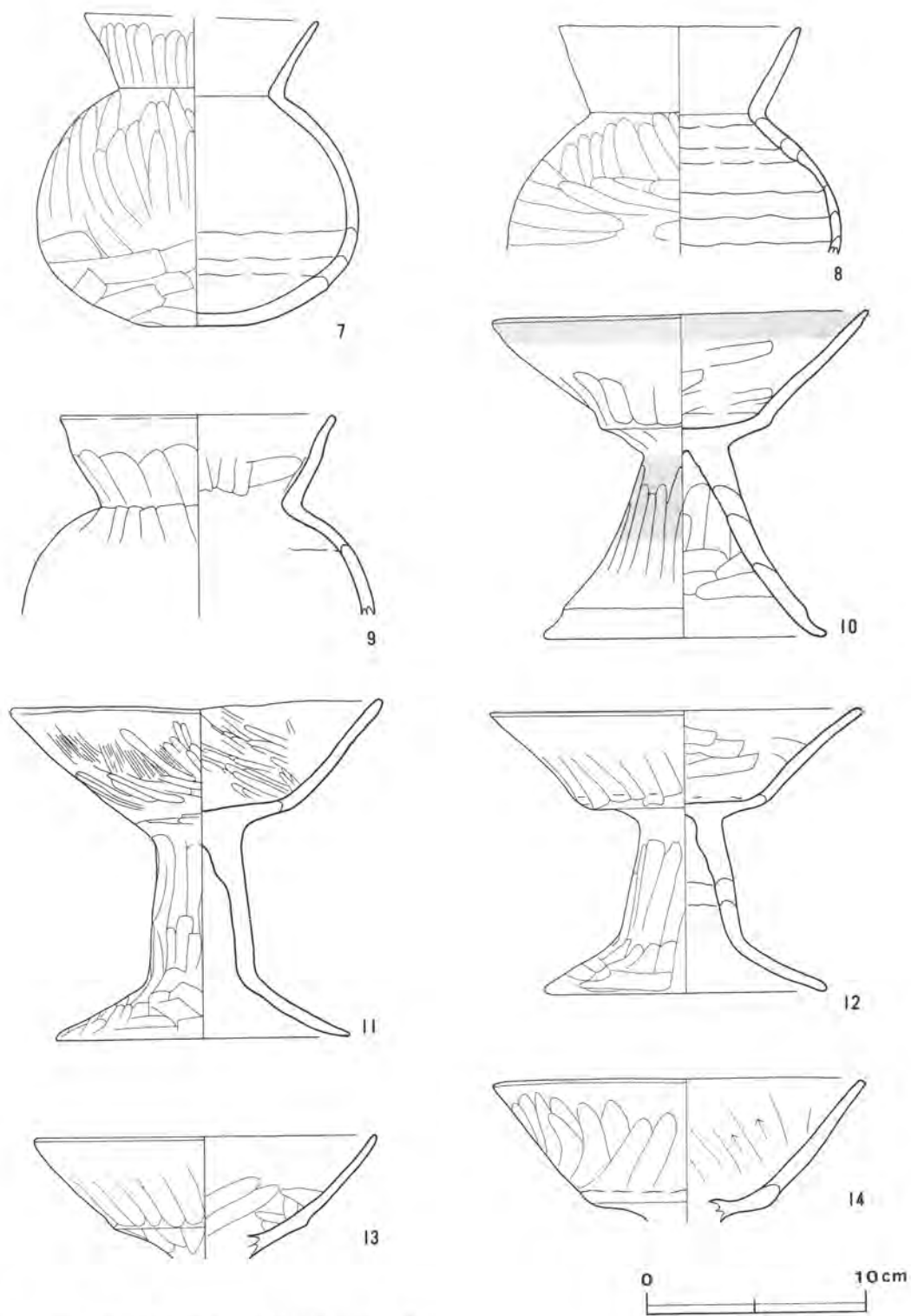
覆土は、上層に多量のローム粒子や中量の焼土粒子を含む黒褐色土、下層に多量のローム粒子や少量の焼土粒子等を含む暗褐色土が堆積している。堆積状況から、自然堆積と思われる。



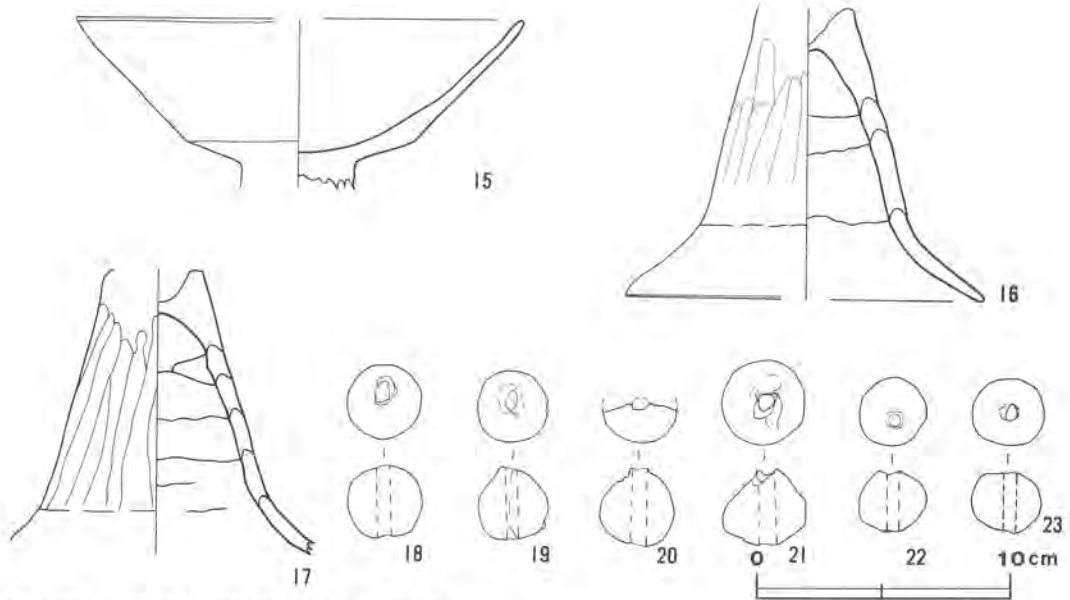
第230図 第51号住居跡実測図



第231图 第51号住居跡出土遺物実測図-1



第232图 第51号住居跡出土遺物実測図-2



第233図 第51号住居跡出土遺物実測図-3

遺物は、土師器及びその破片599点、球状土錘6点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、床面全体に出土しており、接合関係は第230図の通りである。北コーナー付近の床面からは第231図・第232図・第233図15の高坏形土器坏部、北西壁付近の床面からは1と3の甕形土器、9の小形壺形土器、11~13・16・17の高坏形土器とその坏部や脚部が出土している。西コーナー付近の床面からは4の甕形土器が、南コーナー付近の床面や壁際からは2の甕形土器と7の小形壺形土器が重なった状態で出土したほか、5の壺形土器や6の甕形土器が出土している。南東壁付近の床面からは10・14の高坏形土器とその坏部が出土している。また、貯蔵穴からは8の小形壺形土器が正位の状態で出土している。土製品では、P<sub>3</sub>の覆土からは18の球状土錘、東コーナー付近の床面からは19の球状土錘、西コーナー付近の床面からは20・21・23の球状土錘が出土している。出土状況等から考え、1~21・23は本跡に伴うものと考えられる。このほかに、22の球状土錘が出土しているが、覆土中からの出土であり、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。

第51号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第231図 1	甕形土器 土師器	A 19.4 B 26.1 C 7.5	突出した平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外反して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形であるが、外面にはハケ目痕が残る。胴部は内・外面とも縦ナデ整形。	砂粒・バミス 暗褐色 普通	70% P321
2	甕形土器 土師器	A 16.1 B 16.9 C 「4.1」	胴部は内彎して立ち上がり、最大径を下位に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外反して開く。	外面は縦ナデ整形。内面は口縁部が横ナデ、胴部は縦ナデ整形。胴部内面には輪襷痕が残る。	砂粒・バミス 暗赤灰色 普通	70% P322

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第231図 3	甕形土器 土師器	A 14.2 B (18.3)	胴下半部以下は欠損。口縁部は頸部から内彎して開く。	内・外面とも篋ナデ整形であり、内面は輪積痕が残る。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	60% P 323
4	甕形土器 土師器	A 15.1 B (17.1)	胴部は外反気味に立ち上がるが、中央部以上は内彎する。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	内・外面とも口縁部は横ナデ、胴部は篋ナデ整形。胴部内面には輪積痕が残る。	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	50% P 324
5	壺形土器 土師器	B (32.7) C 7.9	突出した平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。頸部以上は欠損する。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	80% P 325 胴部外面に煤付着
6	甕形土器 土師器	A 15.4 B (16.3)	胴下半部以下は欠損。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	外面は口縁部が横ナデ、頸部から胴部にかけて篋ナデ整形。内面は口縁部が横ナデ整形で、胴部内面には輪積痕が残る。	砂粒・パミス 橙色 普通	60% P 326
第232図 7	小形壺形土器 土師器	A「10.8」 B 14.5 C 4.8	平底。胴部は扁平な球形状を呈し、最大径を中位よりやや下に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	内・外面とも篋ナデ整形で、胴部内面には輪積痕が残る。	砂粒・パミス 橙色 普通	90% P 327 胴部外面に煤付着
8	小形壺形土器 土師器	A 11.2 B (10.5)	胴中央部以下は欠損。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。胴部は外面が篋ナデ整形、内面には輪積痕が残る。	砂粒・パミス 橙色 普通	50% P 328
9	小形壺形土器 土師器	A 12.7 B (9.3)	胴中央部以下は欠損。頸部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反して開く。	内・外面とも口縁部は横ナデ、頸部から胴部にかけて篋ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	30% P 329
10	高坏形土器 土師器	A 17.3 B 15.1 D 13.1	脚部ラッパ状に開く。坏部は下位に膨みを持ち、外傾して開く。	坏部は内・外面とも、口縁部が横ナデ整形後に赤彩、以下篋ナデ整形。脚部は外面が篋削り、内面は篋ナデ整形。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	90% P 330
11	高坏形土器 土師器	A 17.1 B 15.5 D 13.5	脚部は円筒状を呈し、裾部で外傾して開く。坏部は外傾して開く。	坏部は内・外面とも篋ナデ整形。脚部は外面が篋削り、内面は篋ナデ整形。	砂粒・パミス 灰褐色 普通	90% P 331
12	高坏形土器 土師器	A 17.2 B 13.0 D 13.1	脚部は円筒状を呈し、裾部で外傾して開く。坏部は下位に稜を持ち、外反気味に開く。	坏部は内・外面とも篋ナデ整形。脚部は外面が篋削り、内面はナデ整形で輪積痕が残る。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	90% P 332
13	高坏形土器 土師器	A 15.9 B (5.6)	脚部は欠損。坏部は下位に膨みを持ち、内彎気味に立ち上がり口縁部に開く。	内・外面とも口縁部が横ナデ、以下は丁寧な篋ナデ整形。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	40% P 333
14	高坏形土器 土師器	A 17.1 B (6.6)	脚部は欠損。坏部は下位に稜を持ち、外傾して口縁部に開く。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	30% P 334
第233図 15	高坏形土器 土師器	A「17.8」 B (6.7)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に口縁部に開く。	外面はナデ整形。内面は剝離が著しく整形技法不明。	砂粒 赤色 普通	20% P 335
16	高坏形土器 土師器	B (11.7) D「14.3」	坏部は欠損。脚部は円筒状を呈し、裾部で外反して開く。	外面は篋削り整形。内面は輪積痕が残る。	砂粒・パミス 橙色 普通	30% P 336

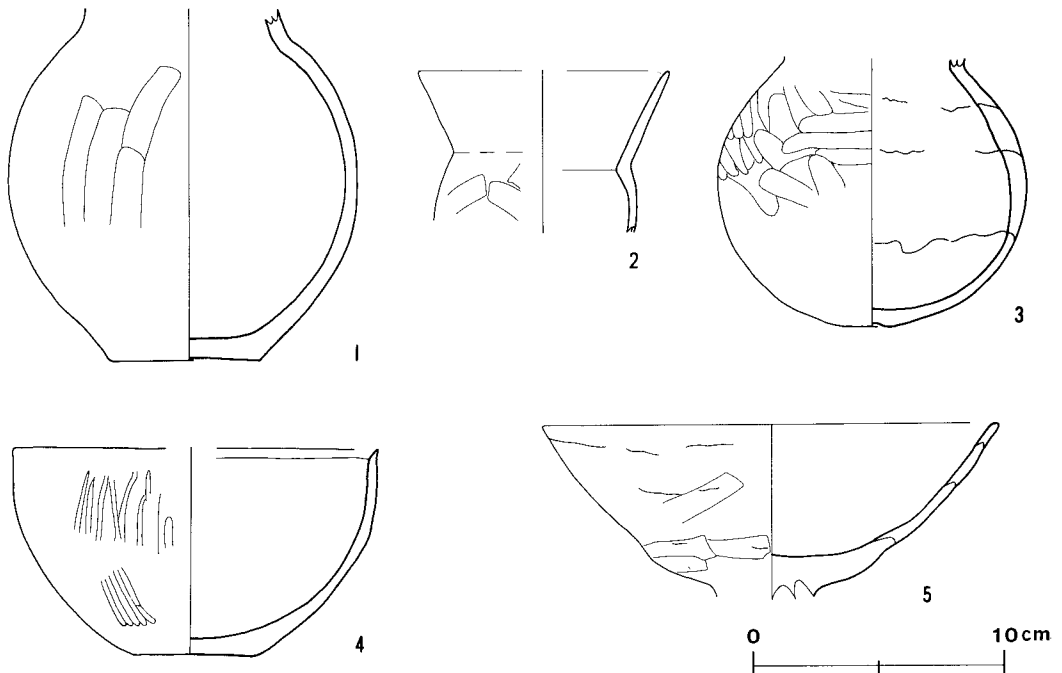
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第233図 17	高環形土器 土師器	B(11.4)	脚部片。脚部は円筒状を呈するが、裾部は欠損する。	外面は篋削り整形。内面は輪積痕が残る。	砂粒・バミス 橙色 普通	30% P337

### 第71号住居跡（第235図）

本跡は、2次調査区のB10c<sub>4</sub>区を中心に確認された住居跡で、第69号住居跡の南西6.5mに位置している。

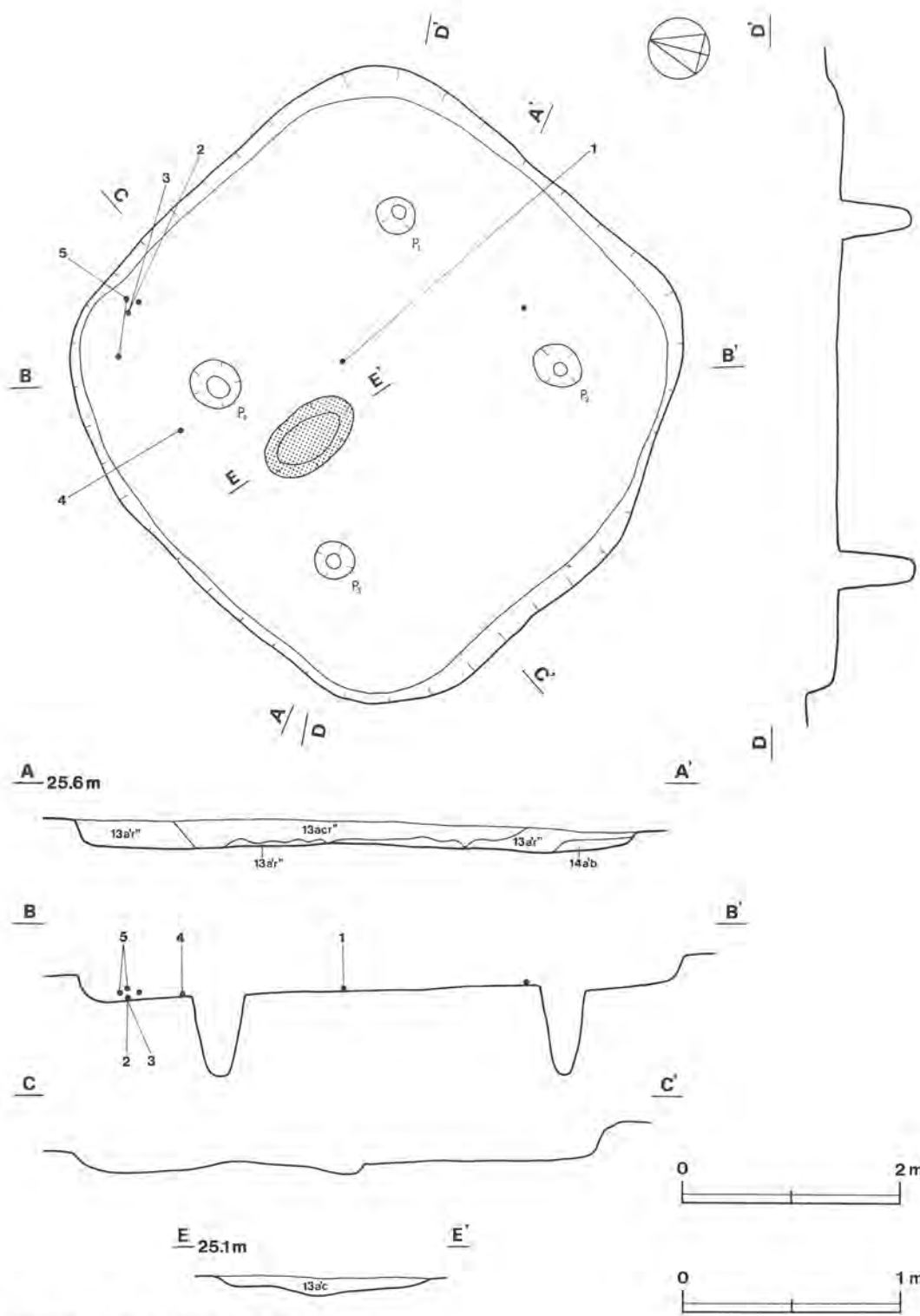
平面形は、長軸5.00m・短軸4.98mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-58°-Wを指している。床面積は20.1m<sup>2</sup>である。壁はロームで、壁高は12~30cmである。西壁が70度前後の角度で外傾するほかは、55~60度の角度で緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、締まりのやや弱いロームである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径36~44cm・深さ68~82cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を7cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.2mほど北西側に確認され、平面形は、長径94cm・短径54cmの楕円形である。炉内には、少量の焼土粒子を含む暗褐色土が堆積しているが、炉床はあまり硬く焼き締まっていない。

覆土は、上層に少量のローム粒子を含む暗褐色土、下層と壁際には中量のローム粒子を含む褐色土や暗褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、自然堆積と思われる。



第234図 第71号住居跡出土遺物実測図





第235图 第71号住居跡実測図

遺物は、土師器及びその破片197点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片1点が出土している。第234図1の小形壺形土器は、中央部に潰れた状態で出土したものである。2や3の埴形土器は北コーナー付近の床面上に出土した破片を、4の埴形土器はP<sub>4</sub>の西側の床面出土の破片を接合したものである。また、5の高坏形土器坏部は覆土下層と上層出土の破片が接合したものであり、本跡との関係は不明である。出土状況等から考えて、1～4の土器が本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。

第71号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第234図 1	小形壺形土師器	B (14.1) C 6.0	平底。胴部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。頸部以上は欠損する。	外面は篋ナデ整形。内面は剝離が著しく、整形技法不明。	砂粒・バミスにぶい橙色普通	50% P 354
2	埴形土師器	A「10.0」 B (6.5)	胴中央部以下は欠損。口縁部は頸部から外傾して開く。	口縁部は内・外面ともナデ整形。胴部は外面が篋ナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色普通	35% P 355
3	埴形土師器	B (10.8) C 2.0	上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。頸部以上は欠損する。	外面は篋ナデ整形。内面は輪積痕が残る。	砂粒・スコリア 淡赤橙色普通	60% P 356
4	埴形土師器	A「14.9」 B 8.3 C 4.9	平底。体部は大きく内彎して立ち上がる。口縁部はつまみ上げられて直立し、口唇部は内削ぎ。	口縁部は内・外面ともナデ整形。体部は外面が篋磨き、内面はナデ整形。	砂粒・スコリア 明赤褐色普通	30% P 357
5	高坏形土師器	A 18.3 B (6.8)	脚部は欠損。坏部は下位に膨みを持ち、内彎して開く。	内・外面ともナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色普通	30% P 358

### 第77号住居跡（第236図）

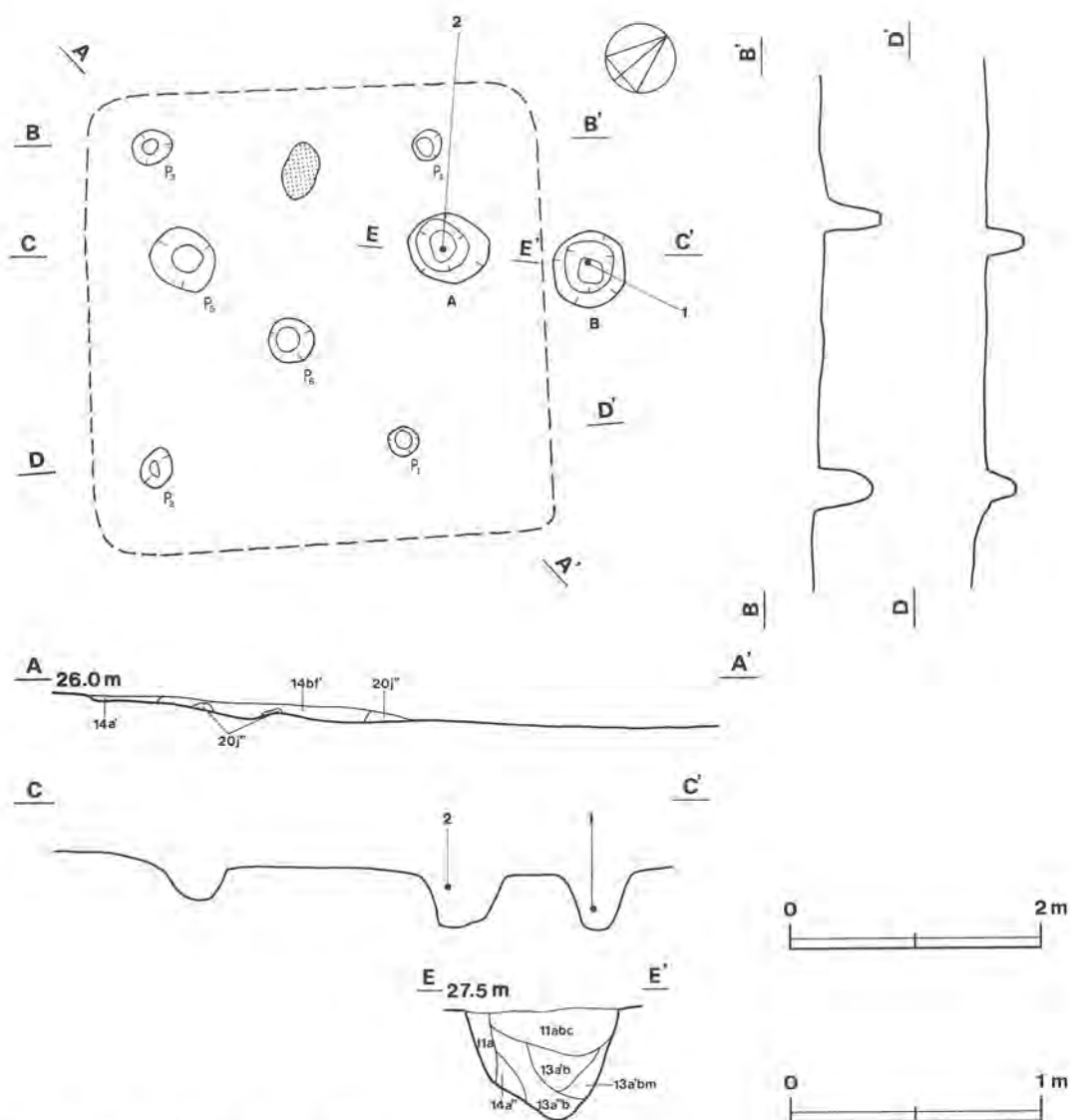
本跡は、2次調査区のCl0a<sub>0</sub>区を中心に確認された住居跡で、第51号住居跡の南西20mに位置している。

本跡は、削平のため平面形・規模等の詳細は不明であり、床面が露出して検出されたため、壁の立ち上がりは認められない。床面は縮まりのあるロームで、大きな起伏を呈している。ピットは、6か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は、上端直径25～52cm・深さ25～48cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が本跡に伴う主柱穴と判断した。炉は削平を受けており、レンガ状に硬く焼き締まった凹凸の激しい炉床が検出されたただけである。貯蔵穴は、2か所(A・B)検出された。Aは、P<sub>5</sub>の北東側2.2mほどに位置している。平面形は、長径72cm・短径59cmの楕円形で、深さは45cmほどである。内部には、少量のローム粒子やローム小ブロックを含む黒褐色土、多量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含む暗褐色土がレンズ状に堆積している。

Bは、P<sub>5</sub>の北東側3.1mに位置している。平面形は、直径65cmほどの円形で、深さは47cmほどであるが、本跡との関係は明確でない。

覆土は、大きく削平されており、中量の粘土大ブロックや少量のローム中ブロックを含む褐色土、少・中量のローム粒子を含む褐色土が浅く堆積している。

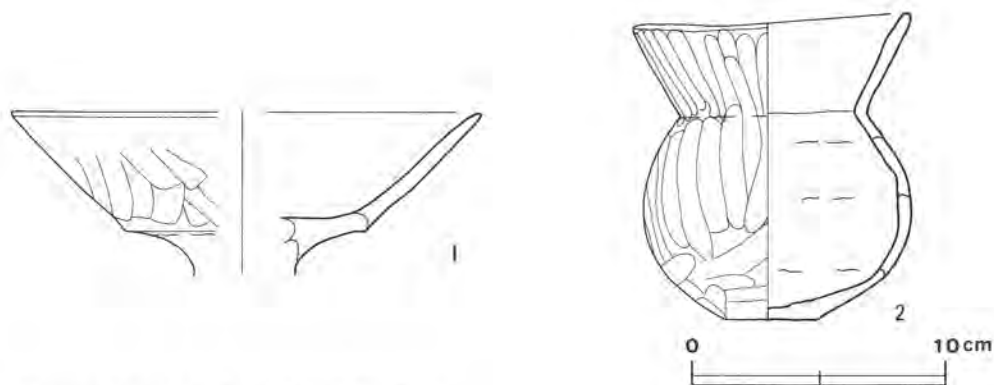
遺物は、土師器及びその破片92点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。第237図2の小形壺形土器は貯蔵穴Aの覆土中層に正位の状態で、1の高坏形土器坏部は貯蔵穴Bの覆土下層に正位の状態で出土したものである。出土状況等から考えて、2は本跡に伴うものと思われる。



第236図 第77号住居跡実測図

本跡は、柱穴と貯蔵穴の位置や数から住居跡の重複も考えられたので、ほかの柱穴や炉、壁溝等の精査を行ったが検出されなかったため、ここでは単一の住居跡として扱った。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。



第237図 第77号住居跡出土遺物実測図

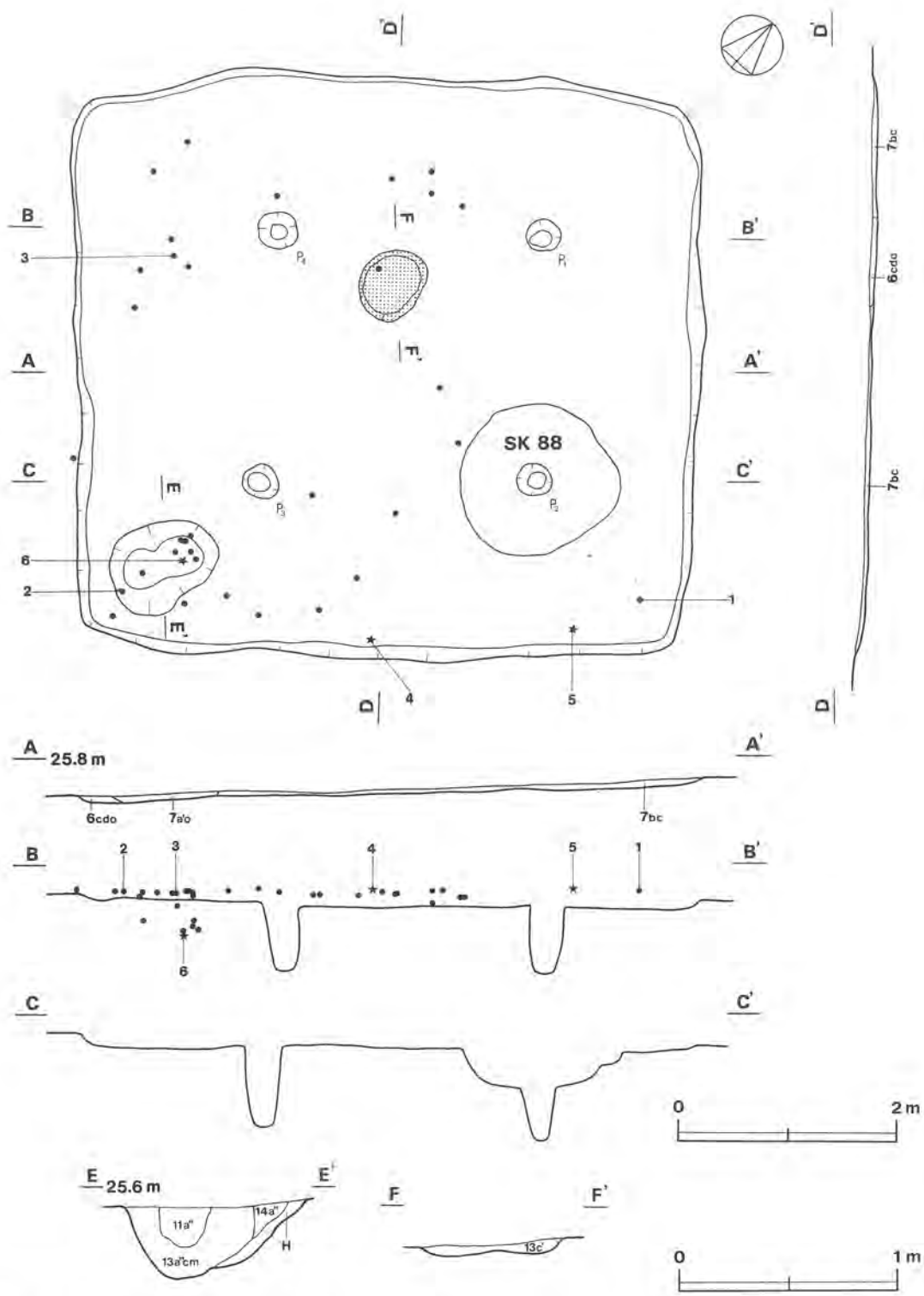
#### 第77号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第237図 1	高環形土器 土 甌 器	A「18.7」 B (6.5)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、外傾して開く。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒・バミス 橙色 普通	20% P378
2	小形壺形 土 器 土 甌 器	A 11.0 B 12.3 C 3.7	平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開く。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・バミス 橙色 普通	90% P377

#### 第88号住居跡 (第238図)

本跡は、2次調査区のC12e<sub>1</sub>区を中心に確認された住居跡で、第48号住居跡の南西20mに位置している。本跡は東側で第88号土坑と重複しているが、床面が切られていることから本跡の方が古い時期の遺構と思われる。

平面形は、長軸5.80m・短軸5.44mの方形を呈し、主軸方向はN-42°-Wを指している。床面積は28.9m<sup>2</sup>である。壁はロームで、上部は削平されているが、50~60度の角度で緩やかに立ち上がっており、壁高は3~11cmである。床面は緩やかな起伏を呈する締まりのあるロームで、中央部は硬く踏み固められている。ピットは、4カ所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径32~36cm・深さ51~77cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う主柱穴と判断した。炉は、床面を8cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1mほど北西側に確認され、平面形は、直径68cmほどの円形状である。炉内には、中量の焼土粒子を含んだ暗褐色土が堆積し



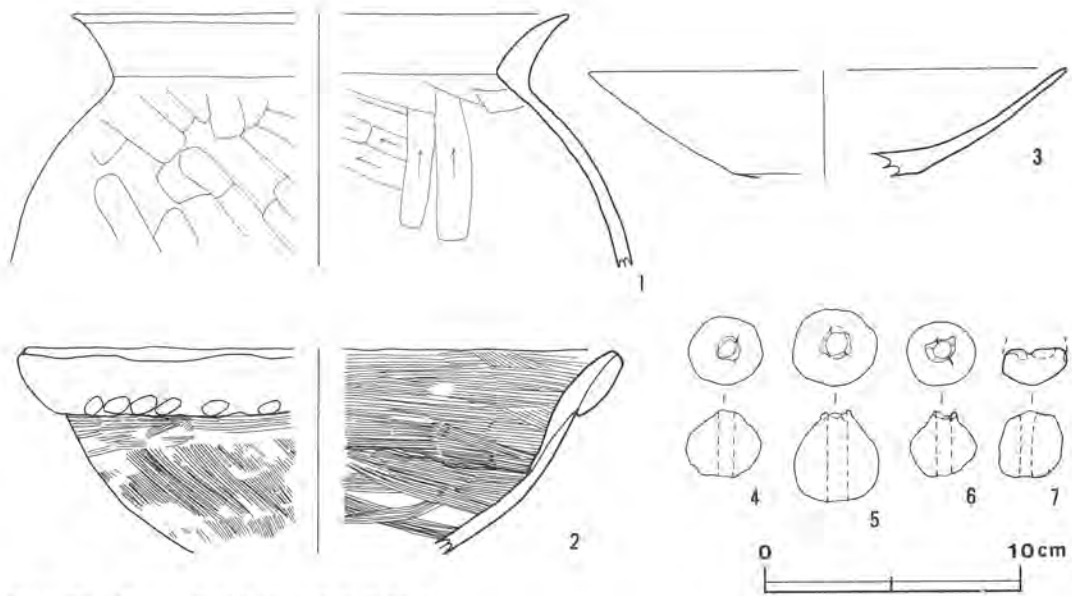
第238图 第88号住居跡実測图

ており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南コーナーの壁際に位置している。平面形は、長径103cm・短径74cmの不整楕円形状で、深さは45cmほどである。貯蔵穴内には、多量のローム粒子を含む暗褐色土や黒褐色土が堆積している。

覆土は、削平により極めて浅く、少量のロームブロックを含む暗赤褐色土が堆積しているが、一部攪乱されている。

遺物は、土師器及びその破片160点、球状土錘3点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。東コーナー付近の床面からは第239図1の甕形土器や5の球状土錘、南東壁際の床面からは4の球状土錘、南コーナー付近の床面からは2の甕形土器、西コーナー付近の床面からは3の高坏形土器坏部が出土している。また、貯蔵穴の底面からは6の球状土錘が出土している。出土状況から考えて、1～6は本跡に伴う遺物と思われる。7の球状土錘は覆土からの出土であり、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。



第239図 第88号住居跡出土遺物実測図

第88号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第239図 1	甕形土器 土師器	A「19.8」 B(10.0)	口縁部から胴上半部にかけての破片。口縁部は、内面に稜を持つ頸部から「く」の字状に外反して開く。	内・外面とも口縁部は横ナデ、胴部は寛ナデ整形。	砂粒・バミス に濃い褐色 普通	5% P534

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第239図 2	甌形土器 土師器	A「24.4」 B (8.2)	胴下半部は欠損。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は複合口縁で、外反して開く。	外面は口縁部がナデ整形で、下端に指頭痕が残り、胴部はハケ目整形。内面はハケ目整形。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	15% P401
3	高環形土器 土師器	A「19.0」 B (4.2)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、外傾して開く。	内・外面ともナデ整形。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	10% P535

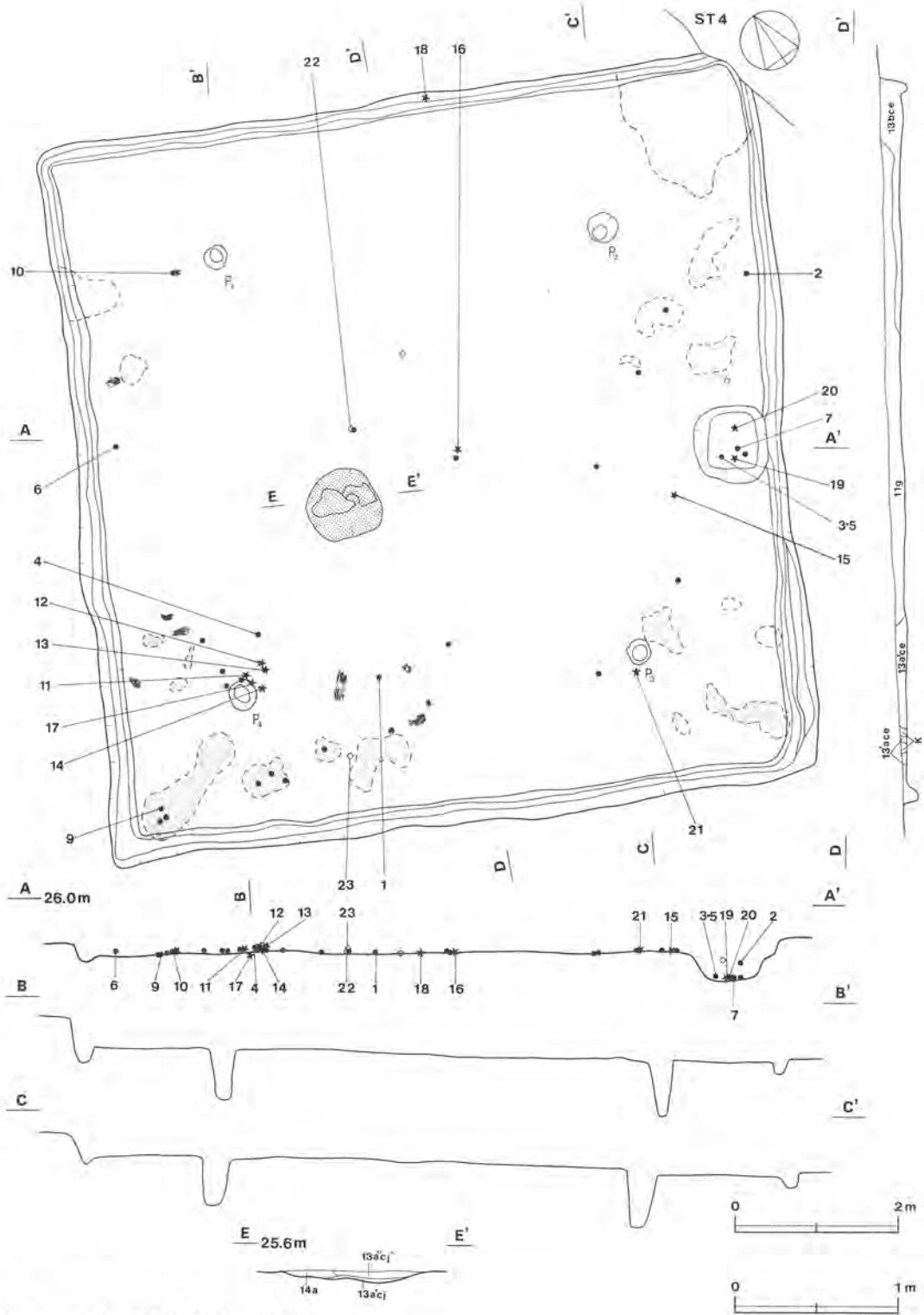
### 第90号住居跡 (第240図)

本跡は、2次調査区のC11e<sub>7</sub>区を中心に確認された大型住居跡である。本跡は北東コーナーの一部で第4号堅穴遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。

平面形は、長軸8.90m・短軸8.66mの方形を呈し、主軸方向はN-63°-Wを指している。床面積は73.8m<sup>2</sup>である。壁はロームで、65～75度の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は3～34cmである。壁直下には、上幅15～37cm・深さ6～20cmの壁溝が全周している。床面はほぼ平坦なロームで、貯蔵穴の北側や南側は硬く踏み固められている。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端直径26～38cm・深さ62～72cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、床面を10cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.2mほど西側に確認され、平面形は直径88cmほどの楕円形状である。炉床は硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、東壁中央部の壁際に位置している。平面形は、長軸94cm・短軸89cmの方形状で、深さは32cmほどである。貯蔵穴内には、中量の炭化粒子や少～多量の焼土粒子等を含む暗赤褐色土がレンズ状に堆積している。

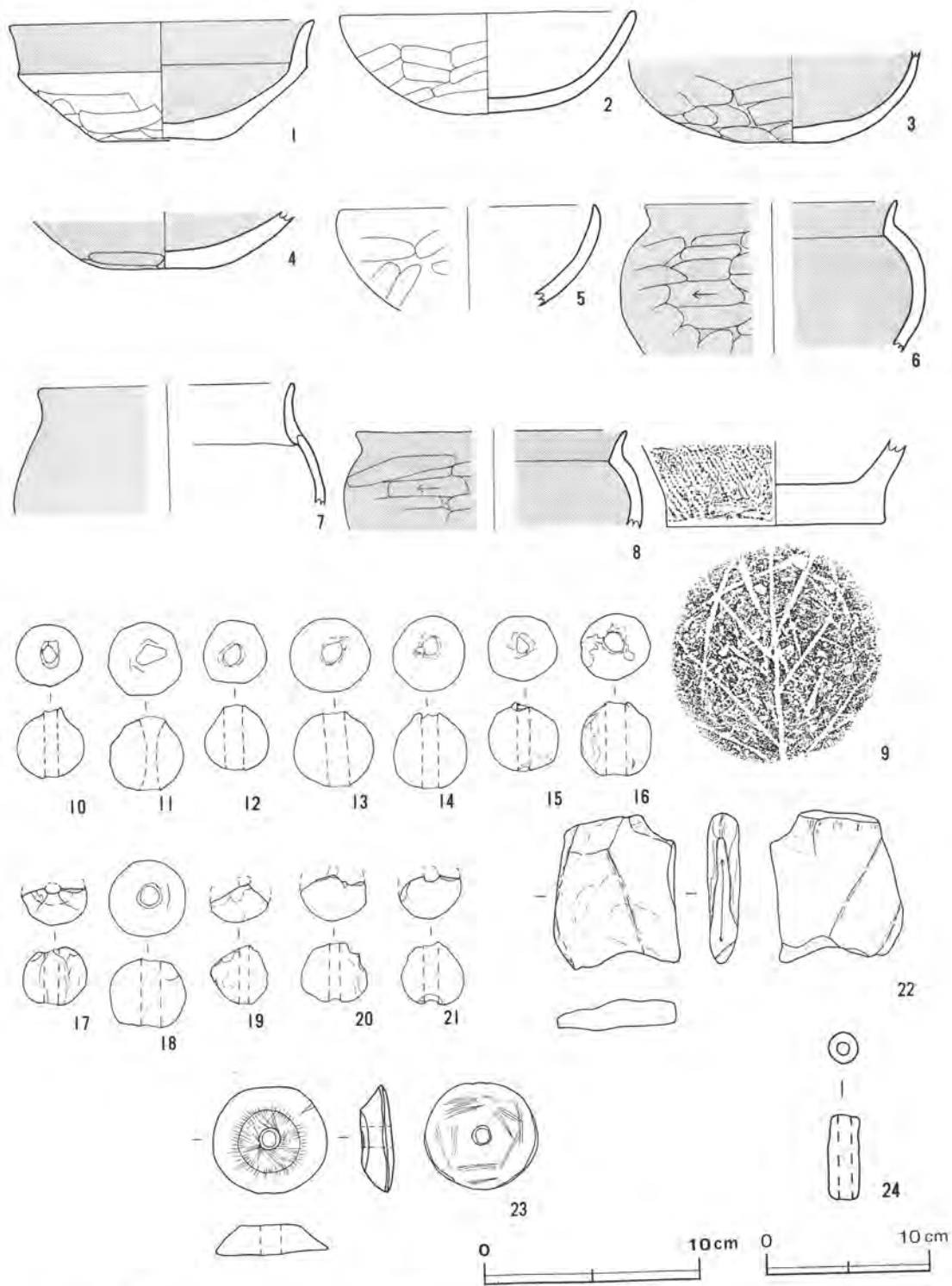
覆土は、上層に少量のローム粒子を含む黒褐色土、下層に少量の焼土粒子や炭化粒子を含む暗赤褐色土が堆積している。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。また、中央部を除いた全域に、多量の炭化材や焼土を含む層が検出されていることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、壁溝埋没後に多量の焼土粒子、少量の炭化材を含む極暗赤褐色土や暗赤褐色土が堆積していることから、本跡の廃絶後と思われる。

遺物は、土師器及びその破片245点、球状土錘12点、石製紡錘車1点、管玉1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片3点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、床面全体に出土しており、特に南西部に集中している。第241図1や2の坏形土器は南西部や東壁中央部の床面に正位の状態が出土したものである。4の坏形土器や6の埴形土器は、南西部や北西部の床面出土の破片と覆土中の破片を接合したものである。貯蔵穴からは、3と5の坏形土器や7の埴形土器が底面から出土している。このほかに、南西部の床面には5点の球状土錘(11～14・17)、23の紡錘車、貯蔵穴内や周りから3点の球状土錘(15・19・20)、南部の床面からは21の球状土錘が出土している。また、北壁や北西部及び中央部からは、10・16・18の球状土錘や22の砥石が床



第240图 第90号住居跡実測图





第241图 第90号住居跡出土遺物実測・拓影図

面から出土している。8の埴形土器や9の弥生式土器底部、24の管玉は覆土からの出土であり、本跡との関係は不明である。このほかに、床面からは赤彩が施された坏形土器の口縁部や底部片が出土しているが、小破片であり図示することができなかった。出土状況等から考えて、1～7・10～23は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。

第90号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第241図 1	坏形土器	A 14.2	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は直立気味に外反して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形後、赤彩。体部は外面が篋削り、内面はナデ整形後に赤彩。	砂粒 明赤褐色 普通	85% P402
	土師器	B 5.5				
		C 5.5				
2	坏形土器	A 13.8	丸底。体部は内彎して開く。	外面は篋削り整形。内面は剝離が著しく、整形技法不明。	砂粒・バミス 明赤褐色 普通	85% P403
	土師器	B 4.7				
3	坏形土器 土師器	B (4.0)	丸底。体部は内彎して立ち上がるが口縁部は欠損する。	外面は篋削り整形。内面はナデ整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・バミス 赤色 普通	50% P404
4	坏形土器	B (2.7)	平底。体部は内彎気味に立ち上がるが、中位以上は欠損する。	外面は篋削り整形。内面はナデ整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・バミス 赤褐色 普通	20% P405
	土師器	C 3.6				
5	坏形土器	A「12.0」	口縁部から体部下半にかけての破片。体部は内彎して開く。	外面は口縁部が横ナデ、体部は篋削り整形。内面は剝離が著しく、整形技法不明。	砂粒・バミス 赤色 普通	10% P542
	土師器	B (4.7)				
6	埴形土器	A「11.8」	底部は欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外傾して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。体部は外面が篋削り、内面はナデ整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・バミス 赤褐色 普通	20% P406
	土師器	B (7.0)				
7	埴形土器	A「12.0」	口縁部から体部上半にかけての破片。口縁部は外傾して開く。	外面は口縁部が横ナデ、体部は丁寧な篋ナデ整形で赤彩。内面は口縁部が横ナデ整形。	砂粒・バミス 赤褐色 普通	10% P541
	土師器	B (5.8)				
8	埴形土器	A「12.6」	口縁部から体部上半にかけての破片。口縁部は内面に稜を持ち、短く外傾して開く。	口縁部は内・外面とも横ナデ整形。体部は外面が篋削り、内面はナデ整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・バミス 赤色 普通	10% P407
	土師器	B (4.6)				
9	壺	B (3.9)	平底で鮮明な木葉痕を持つ。外面には付加条縄文が施されている。	内面はナデ整形。	砂粒 橙色 普通	10% P34
	弥生式土器	C「10.0」				

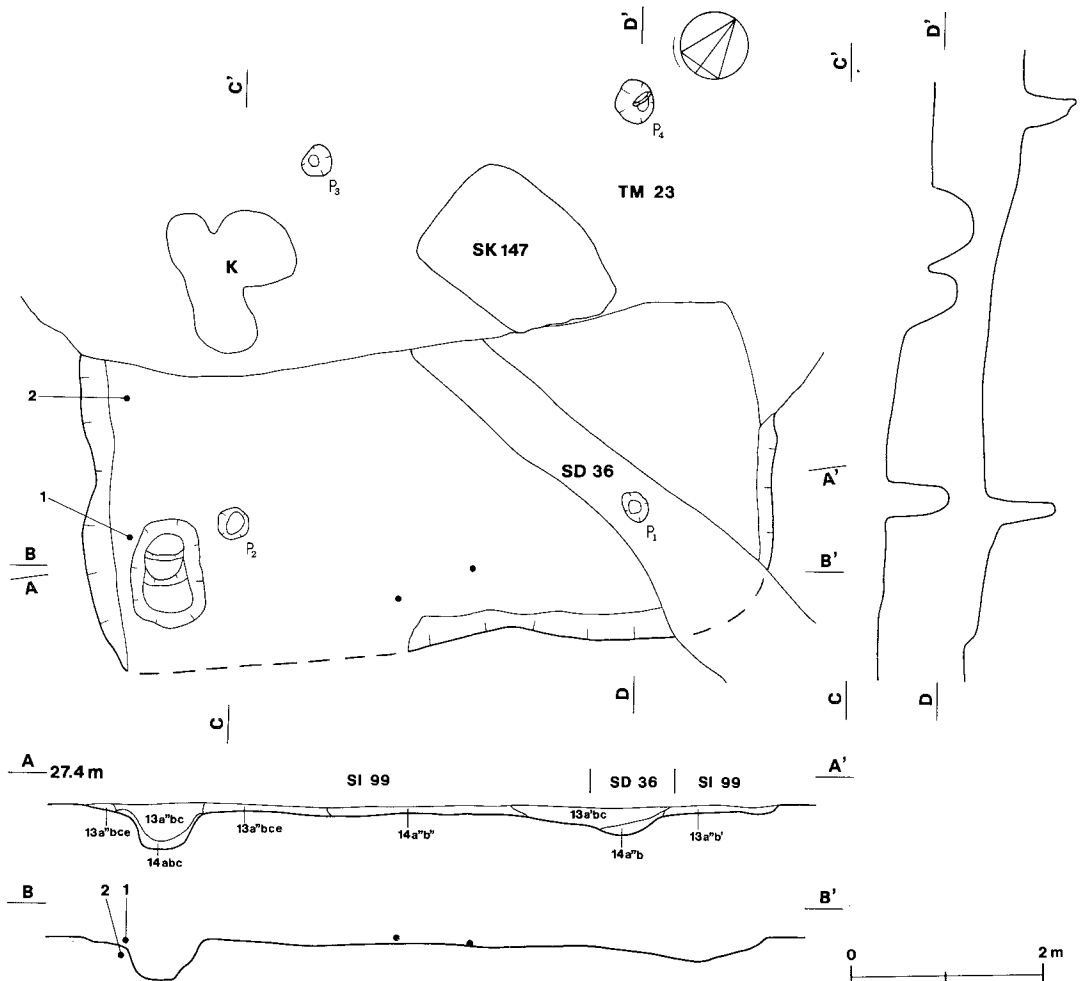
第99号住居跡 (第242図)

本跡は、2次調査区のD10b<sub>2</sub>区を中心に確認された住居跡である。本跡は北側から西側にかけて第23号古墳・第147号土坑、東側で第36号溝と重複している。土層から判断すると、本跡は第23号古墳、第36号溝及び第147号土坑より古い時期の遺構と思われるが、第23号古墳と第36号溝の新旧関係は不明である。

本跡は、重複のために形状や規模等の詳細は不明である。壁はロームで、残存部は50～60度の角度で緩やかに立ち上がっており、壁高は4～10cmである。床面は緩やかな起伏を呈するロームで、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間に硬く踏み固められた部分が検出されただけである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端直径32～46cm・深さ27～77cmである。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の深さがP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>に比べて浅いのは、第23号古墳の周溝により上部が切られているためである。形状や方形に配置されていることから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は検出されなかった。貯蔵穴は、南コーナーに位置している。平面形は、長軸78cm・短軸68cmの隅丸長方形で、深さは40cmほどである。

覆土は、極めて浅く、多量のローム粒子やローム小ブロックを含む褐色土、暗褐色土が堆積している。

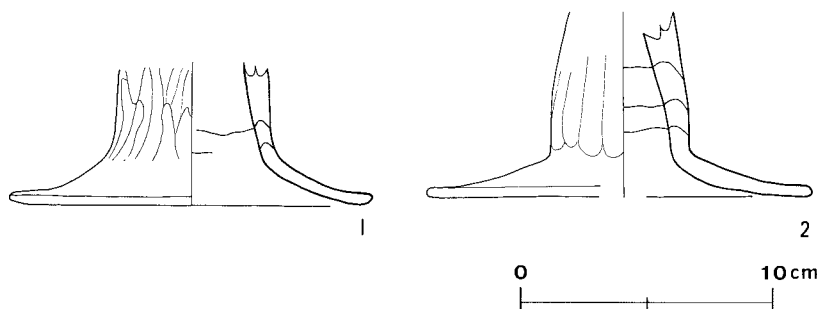
遺物は、土師器及びその破片12点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片1点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、第243図1の貯蔵穴の西際から出土した高环形土器脚部



第242図 第99号住居跡実測図

である。2の高环形土器脚部は第23号古墳の周溝との境付近に出土したものであり、時期的には古墳時代中期に位置づけられるものであるが、本跡に伴うかどうかは不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。



第243図 第99号住居跡出土遺物実測図

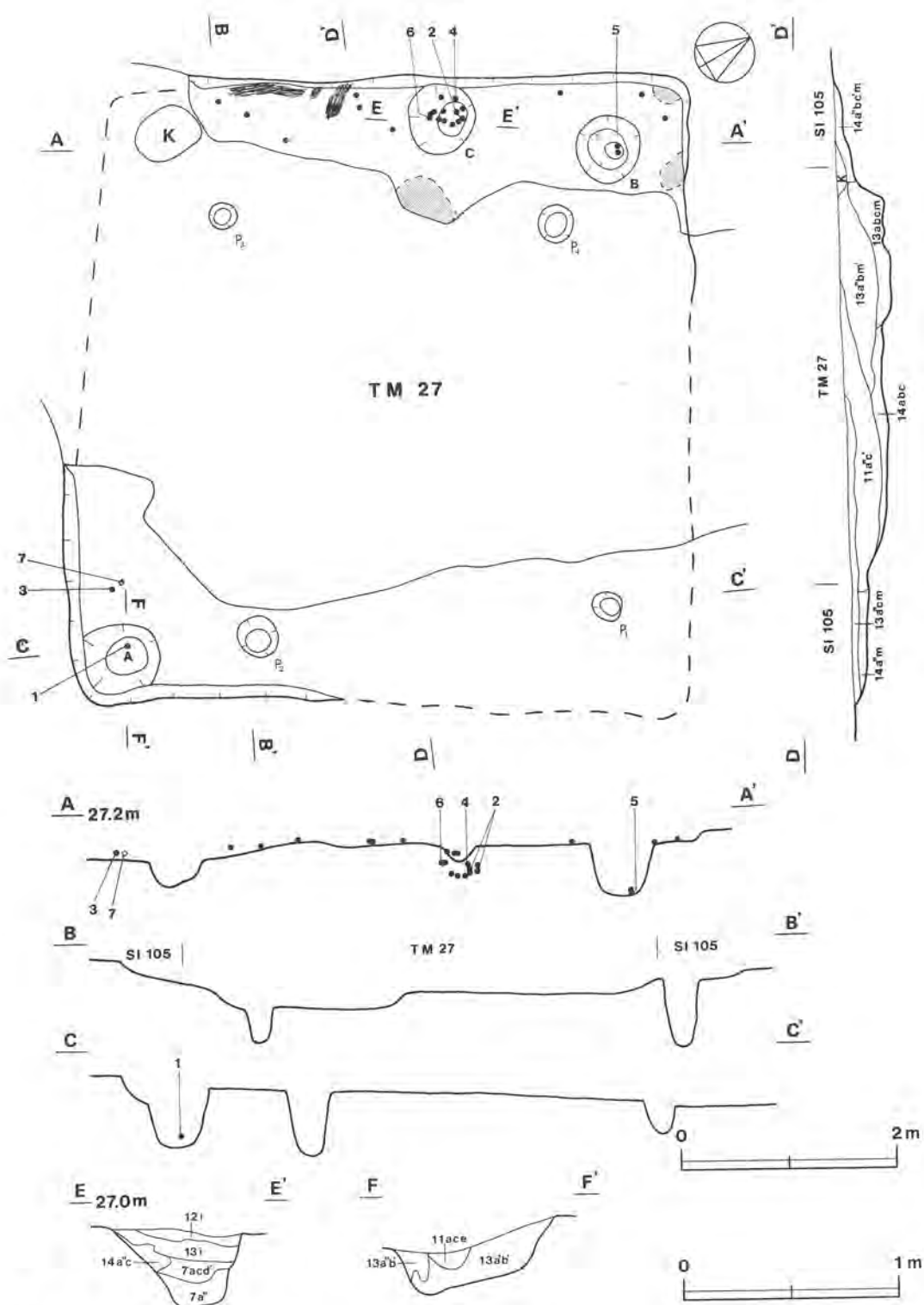
#### 第99号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第243図 1	高环形土器 土師器	B (5.7) D 14.4	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部で外反して開く。	外面は篋削り整形。内面は輪積痕を残す。	砂粒・バミス にぶい赤褐色 普通	30% P421
2	高环形土器 土師器	B (7.4) D「15.4」	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部で外反して開く。	外面は篋削り整形。内面は輪積痕を残す。	砂粒・バミス 橙色 普通	20% P422

#### 第105号住居跡 (第244図)

本跡は、2次調査区のD11g<sub>3</sub>区を中心に確認された住居跡で、第103号住居跡の東5.5mに位置している。本跡は北壁や東壁、及び南西壁で第27号古墳と重複しているが、土層から判断すると本跡の方が古い時期の遺構と思われる。

本跡は、第27号古墳に切られているために、規模・平面形の詳細は不明であるが、残存部からは1辺が5.8mほどの方形を呈するもので、主軸方向はN-57°-Wを指すものと推定される。床面積は30m<sup>2</sup>前後と思われる。壁はロームで、50~60度の角度で緩やかに立ち上がっており、壁高は4~18cmである。床面は平坦で、硬く踏み固められたロームである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径26~32cm・深さ28~64cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は検出されなかった。貯蔵穴は、3か所(A・B・C)検出された。Aは、南コーナーに位置している。平面形は、長軸72cm・短軸62cmの隅丸長方形で、深さは56cmほどである。貯蔵穴内には、中量の焼土粒子や少量のローム粒子を含む極暗褐色土、中量のローム粒子を含む暗褐色土、多量のロームブロックを含む褐色土が堆積

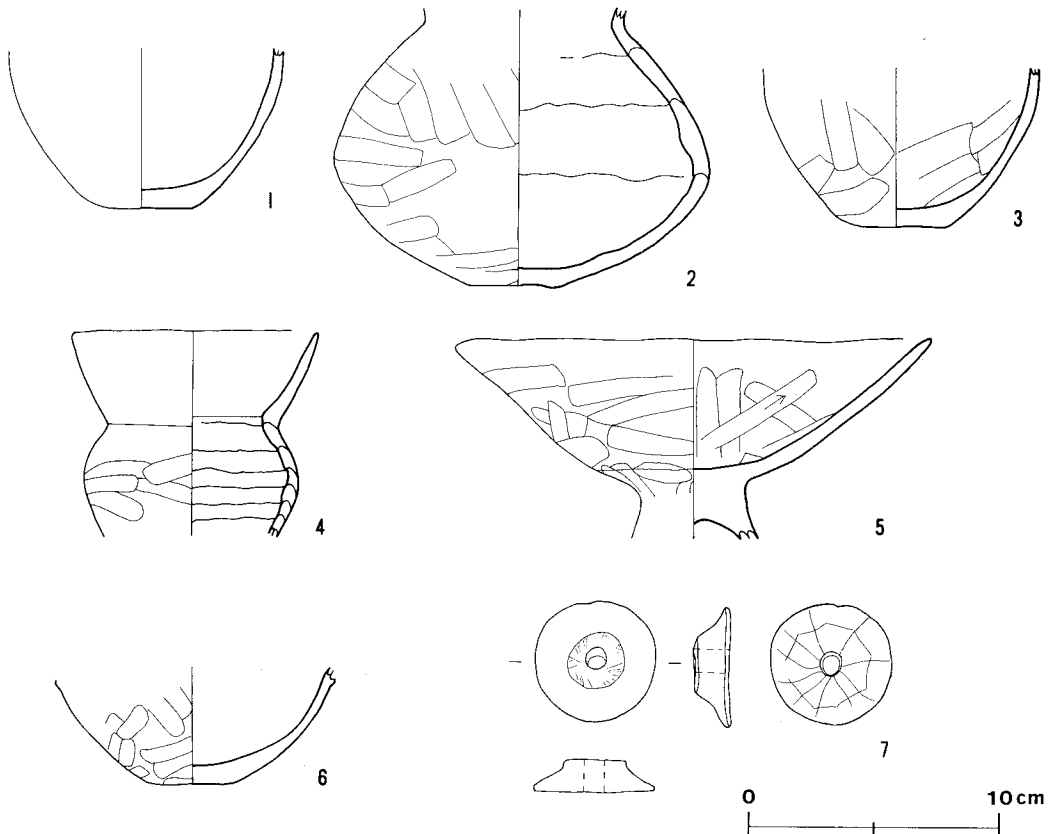


第244图 第105号住居跡実測图

している。Bは、北コーナーに位置している。平面形は、長径65cm・短径59cmの楕円形で、深さは50cmほどである。貯蔵穴内には、少量のローム粒子を含む極暗褐色土、少量のローム粒子や炭化粒子及び焼土粒子を含む暗褐色土、少～多量のローム粒子、中量の焼土粒子や焼土小ブロックを含む暗赤褐色土がレンズ状に堆積している。Cは、北西壁に位置している。平面形は、直径68cmほどの円形で、深さは37cmほどである。貯蔵穴内には、中・多量のローム粒子や中量のローム小ブロックを含む暗褐色土、少量のローム粒子を含む黒褐色土が堆積している。

覆土は、北西壁際に多量のローム粒子や炭化物、中量の焼土粒子等を含む褐色土が堆積しているだけである。また、北西の壁際や床面に炭化材や焼土を含む層が検出されていることから、本跡は焼失家屋と判断した。焼失の時期は、炭化材が床面に散在していることから、本跡の居住期間中と思われる。

遺物は、土師器及びその破片283点、石製紡錘車1点が出土している。第245図3の埴形土器胴部は南コーナー付近の床面から出土したものである。1の埴形土器胴部は貯蔵穴Aの覆土下層、5の高坏形土器坏部は貯蔵穴Bの底面に正位の状態で出土したものである。2の埴形土器胴部や4の埴形土器、6の埴形土器は貯蔵穴Cの底面から出土したものである。7の石製紡錘車は南コー



第245図 第105号住居跡出土遺物実測図

ナー付近の床面上から出土したものである。出土状況等から考えて、1～7は本跡に伴うものと思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。

第105号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第245図 1	埴形土器 土師器	B (6.4) C 4.5	平底。胴部は内彎して立ち上がるが、中央部以上は欠損する。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・バミス 明褐色 普通	20% P445
2	埴形土器 土師器	B (11.2) C 3.5	頸部以上は欠損。上げ底。胴部は扁平な球形状を呈し、最大径を中位よりやや下に持つ。	外面は篋ナデ整形。内面は輪積痕を残す。	砂粒・バミス にぶい赤褐色 普通	80% P448
3	埴形土器 土師器	B (5.5) C 4.0	平底。胴部は内彎して立ち上がるが、上半部以上は欠損する。	外面は篋ナデ整形。内面は剝離が著しく、整形技法不明。	砂粒・バミス 橙色 普通	20% P545
4	埴形土器 土師器	A 9.9 B (8.3)	胴下半部以下は欠損。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は、内面に稜を持つ頸部から内彎気味に開く。	口縁部は内・外面ともナデ整形。胴部は外面が篋ナデ整形、内面は輪積痕を残す。	砂粒・バミス 橙色 普通	70% P449
5	高坏形土器 土師器	A 19.1 B (8.0)	脚部は欠損。坏部は下位に弱い稜を持ち、外傾して開く。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・バミス にぶい橙色 普通	65% P447
6	埴形土器 土師器	B (4.7) C 3.4	平底。体部は内彎して立ち上がるが、口縁部は欠損する。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒・バミス 橙色 普通	30% P446

### 第112号住居跡（第246図）

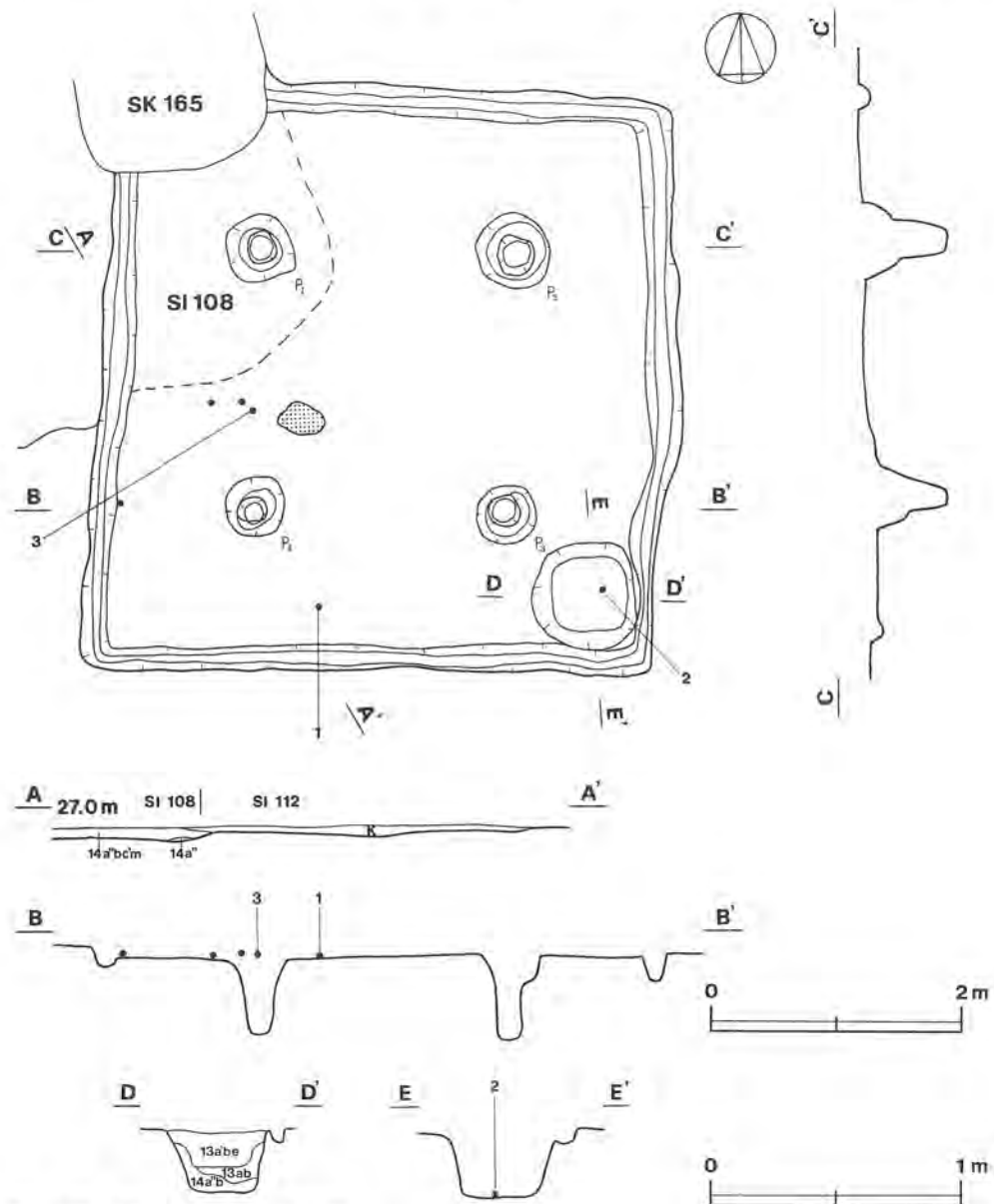
本跡は、2次調査区のD11h<sub>8</sub>区を中心に確認された住居跡で、第117号住居跡の北4mに位置している。本跡は北西側で第108号住居跡や第165号土坑と重複しているが、本跡は第108号住居跡の壁や床面を切っており、第165号土坑に壁と床面の一部を切られていることから、第108号住居跡より新しく、第165号土坑より古い時期の遺構と思われる。

平面形は、長軸4.72m・短軸4.68mの方形を呈し、主軸方向はN-83°-Wを指している。床面積は20.3㎡である。壁はロームで、70～80度の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は5～9cmである。壁溝は、上幅17～29cm・深さ4～20cmであり、北西コーナーを除いて検出された。床面はほぼ平坦で、締まりのあるロームである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、上端直径48～60cm・深さ56～68cmであり、段状に掘り込まれている。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉は、中央から80cmほど南西側に確認された。長径40cm・短径26cmの楕円形を呈する炉床が検出されたが、あまり硬く焼き締まっては

いない。貯蔵穴は、南東コーナーの壁際に位置している。平面形は、1辺が84cmほどの隅丸方形で、深さは50cmほどである。貯蔵穴内には、少・中量のローム粒子を含む暗褐色土、多量のローム粒子や中量のローム小ブロックを含む褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、極めて浅く、全体が攪乱されている土層である。

遺物は、土師器及びその破片100点のほかに、流れ込みと考えられる土師質土器1点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、貯蔵穴の底面から横位の状態で出土した第247図2の高坏形土器の完形品である。1の甕形土器口縁部や3の土師質土器(Ⅲ)は攪乱層と考えられる覆土

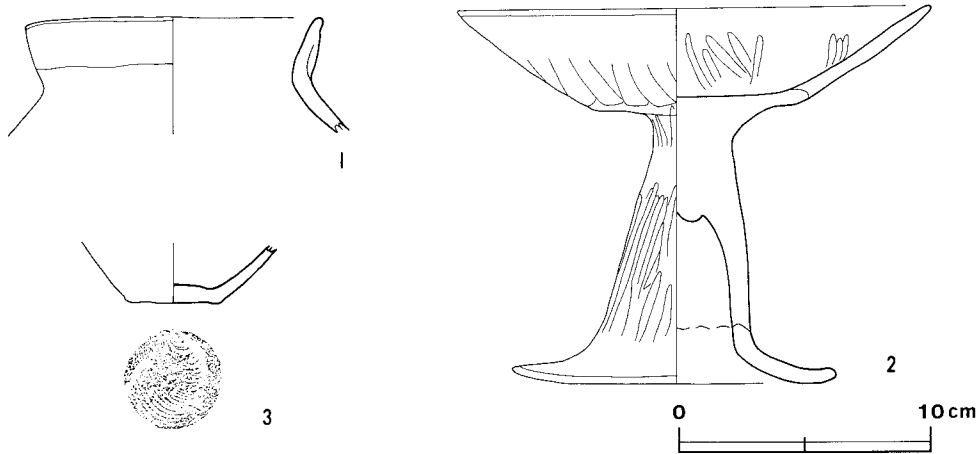


第246図 第112号住居跡実測図



からの出土であり、本跡との関係は不明である。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。



第247図 第112号住居跡出土遺物実測・拓影図

### 第112号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第247図 1	甕形土器	A 12.0	口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は複合口縁で、頸部から内彎気味に開く。	内・外面とも横ナデ整形。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	5% P460
	土師器	B (4.7)				
2	高坏形土器	A 19.0	脚部は円筒状を呈し、裾部で強く外反し末端は水平になる。坏部は下位に稜を持ち、外傾して開く。	坏部は外面が篋ナデ、内面は篋磨き整形。脚部は外面が篋削り、内面は篋ナデ整形で輪積痕が残る。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	100% P462
		B 15.1				
		D 13.0				
3	皿 土師質土器	B (2.4)	平底。体部はわずかに内彎しながら立ち上がるが、上位は欠損する。	内・外面とも横ナデ整形。底部回転糸切り。	細砂 にぶい橙色 普通	60% P461 体部の内・外面に煤付着
		C 4.0				

### 第114号住居跡 (第248図)

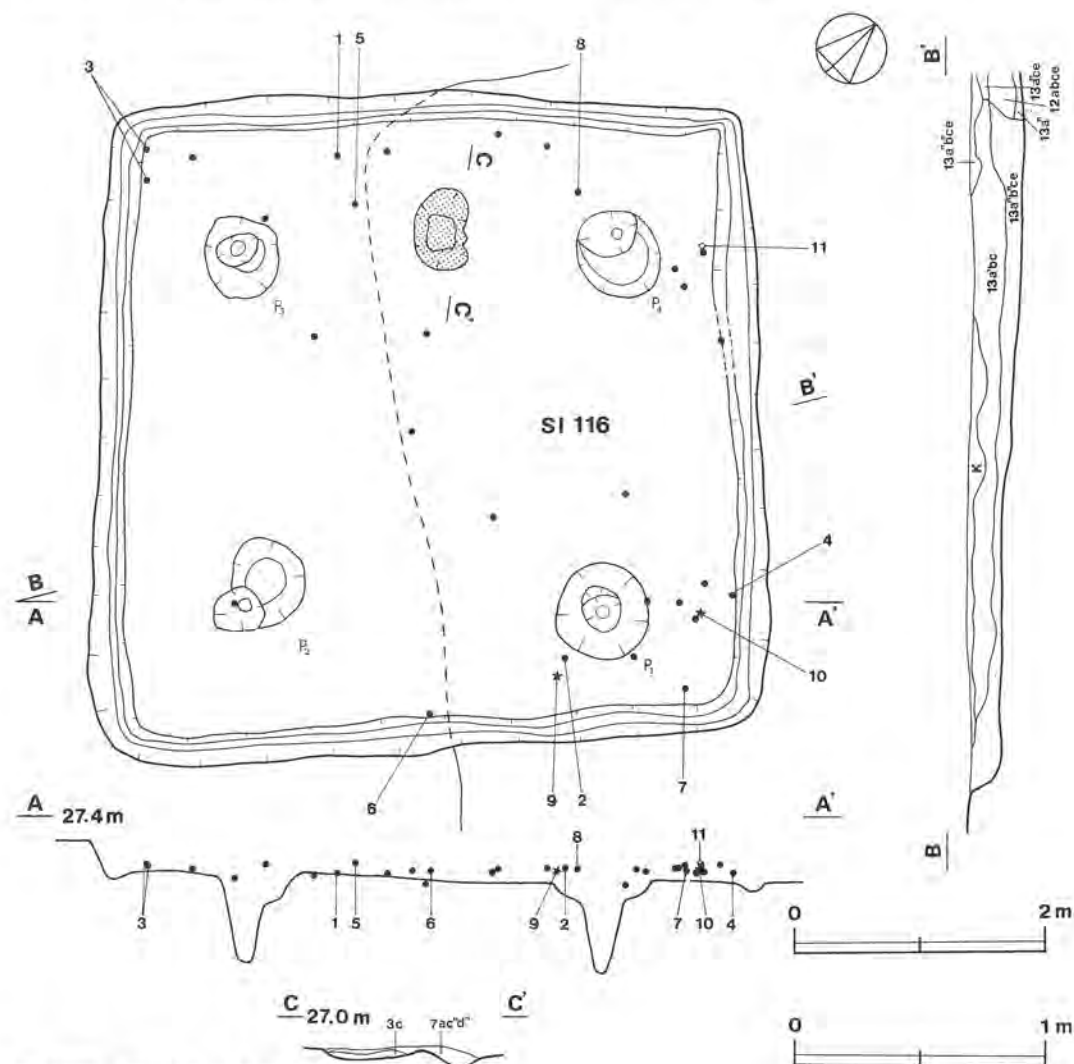
本跡は、2次調査区のD10i<sub>0</sub>区を中心に確認された住居跡で、第115号住居跡の南東4.5mに位置している。本跡は2分の1ほどが第116号住居跡と重複しているが、出土遺物や土層から判断すると本跡の方が新しい時期の遺構と思われる。

平面形は、長軸5.34m・短軸5.26mの方形を呈し、主軸方向はN-45°-Wを指している。床面積は24.9m<sup>2</sup>である。壁はロームで、75~80度の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は19~35cmである。壁溝は、上幅14~30cm・深さ4~10cmであり、全周している。床面は皿状を呈し、締まりのあるロームである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端長径60~76cm・深さ68~87

cmで段状を呈している。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う主柱穴と判断した。炉は、床面を9cmほど掘り下げた地床炉で、1.4mほど北西側に確認され、平面形は、長径65cm・短径40cmの楕円形である。炉内には、多量の焼土粒子や焼土小ブロックを含む暗赤褐色土、赤褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。

覆土は、暗褐色土を主体とした土層で、上層は中量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含み、下層は多量のローム粒子や中量のローム小ブロックを含んでいる。上部に攪乱がみられるが、堆積状況から自然堆積と考えられる。

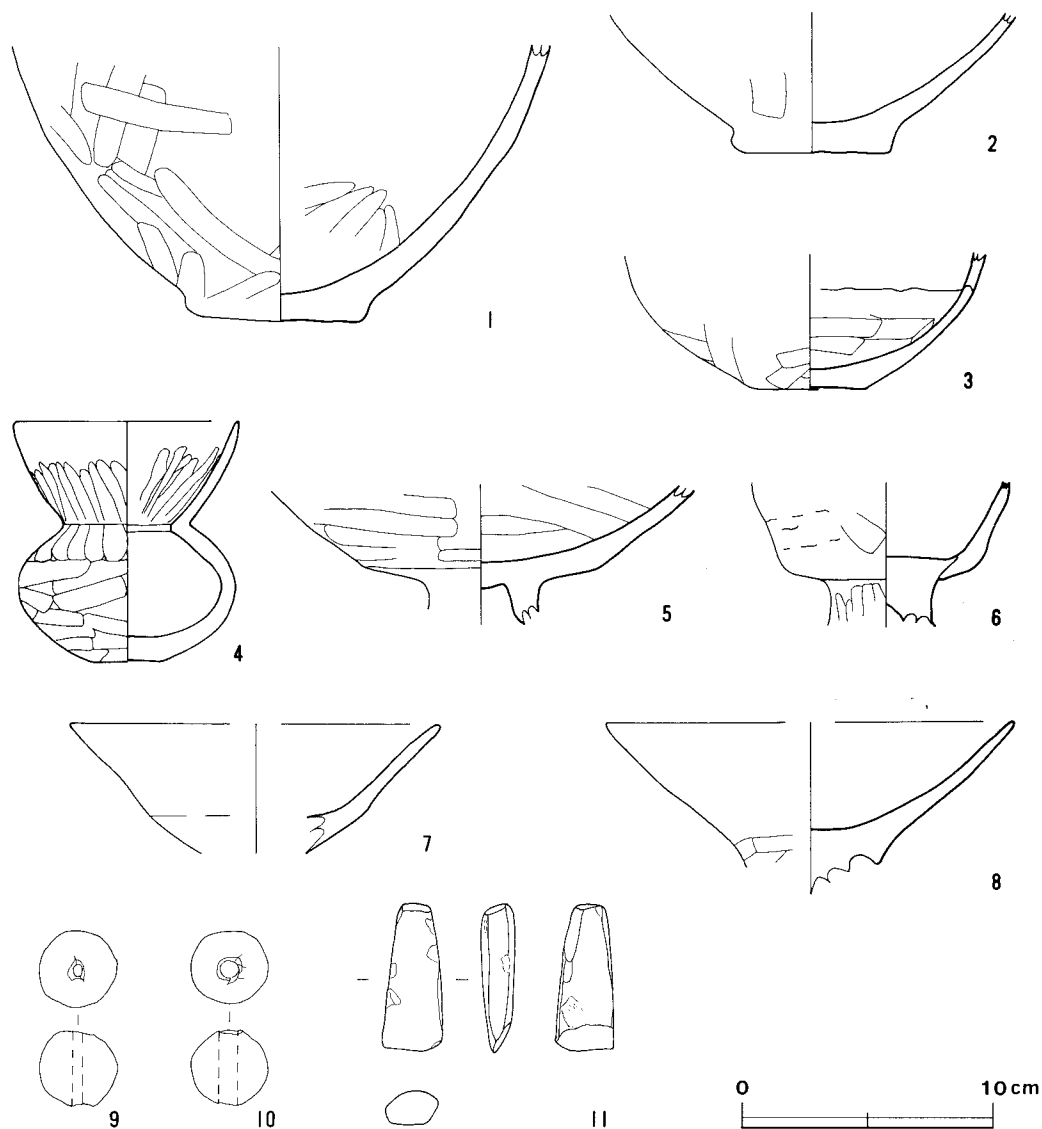
遺物は、土師器及びその破片1750点、球状土錘2点、鑿形の石製模造品1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片4点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は、床面全体から出土している。北西壁中央部の床面や覆土下層からは第249図1の甕形土器底部と5の高坏形土



第248図 第114号住居跡実測図

器坏部が、北コーナー付近からは8の高坏形土器坏部が出土している。東コーナー付近の床面や覆土下層からは2の甕形土器底部と7の高坏形土器坏部のほかに、4の埴形土器の完形品が正位の状態出土している。西コーナー付近の覆土下層からは3の小形壺形土器胴部、南東壁中央部の覆土下層からは6の高坏形土器坏部が出土している。このほかに、東・北コーナーの覆土下層からは9と10の球状土錘、11の鑿形の石製模造品が出土している。出土状況等から考えて、1～11は本跡に伴う遺物と思われる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。



第249図 第114号住居跡出土遺物実測図

第114号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第249図 1	甕形土器 土師器	B (11.1) C 7.2	胴中央部から底部にかけての破片。突出した平底。胴部は内彎して立ち上がる。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	30% P466
2	甕形土器 土師器	B (5.7) C 6.4	突出した平底。胴部は内彎して立ち上がる。	外面は篋ナデ整形。内面はナデ整形。	砂粒・パミス にぶい褐色 普通	10% P467
3	小形壺形 土器 土師器	B (5.4) C 4.6	胴中央部から底部にかけての破片。平底。胴部は内彎して立ち上がる。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	30% P468
4	埴形土器 土師器	A 9.0 B 9.6 C 1.8	平底。胴部は扁平な球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から内彎気味に開く。口縁部径と胴部径はほぼ同じである。	口縁部は内・外面とも篋磨き整形。胴部外面は篋削り整形。	砂粒 橙色 普通	100% P472
5	高坏形土器 土師器	B (5.6)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、外傾して立ち上がるが、上位は欠損する。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・パミス 黄橙色 普通	20% P469
6	高坏形土器 土師器	B (5.8)	坏部片。坏部は外反気味に立ち上がるが、上位は欠損する。内・外面に接合痕が残る。	外面は篋ナデ整形。内面は剝落が著しく整形技法は不明。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	20% P470
7	高坏形土器 土師器	A「14.8」 B (5.3)	坏部片。坏部は下位に弱い稜を持ち、外反気味に開く。	内・外面ともナデ整形。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	20% P550
8	高坏形土器 土師器	A「16.4」 B (6.9)	坏部片。坏部は内彎して開く。	内・外面ともナデ整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	20% P551

第117号住居跡 (第250図)

本跡は、2次調査区のD11j<sub>8</sub>区を中心に確認された大型住居跡で、第122号住居跡の北3.5mに位置している。本跡は北東コーナーで第30号古墳と重複しているが、壁及び床面を切られていることから、本跡の方が古い時期の遺構と思われる。

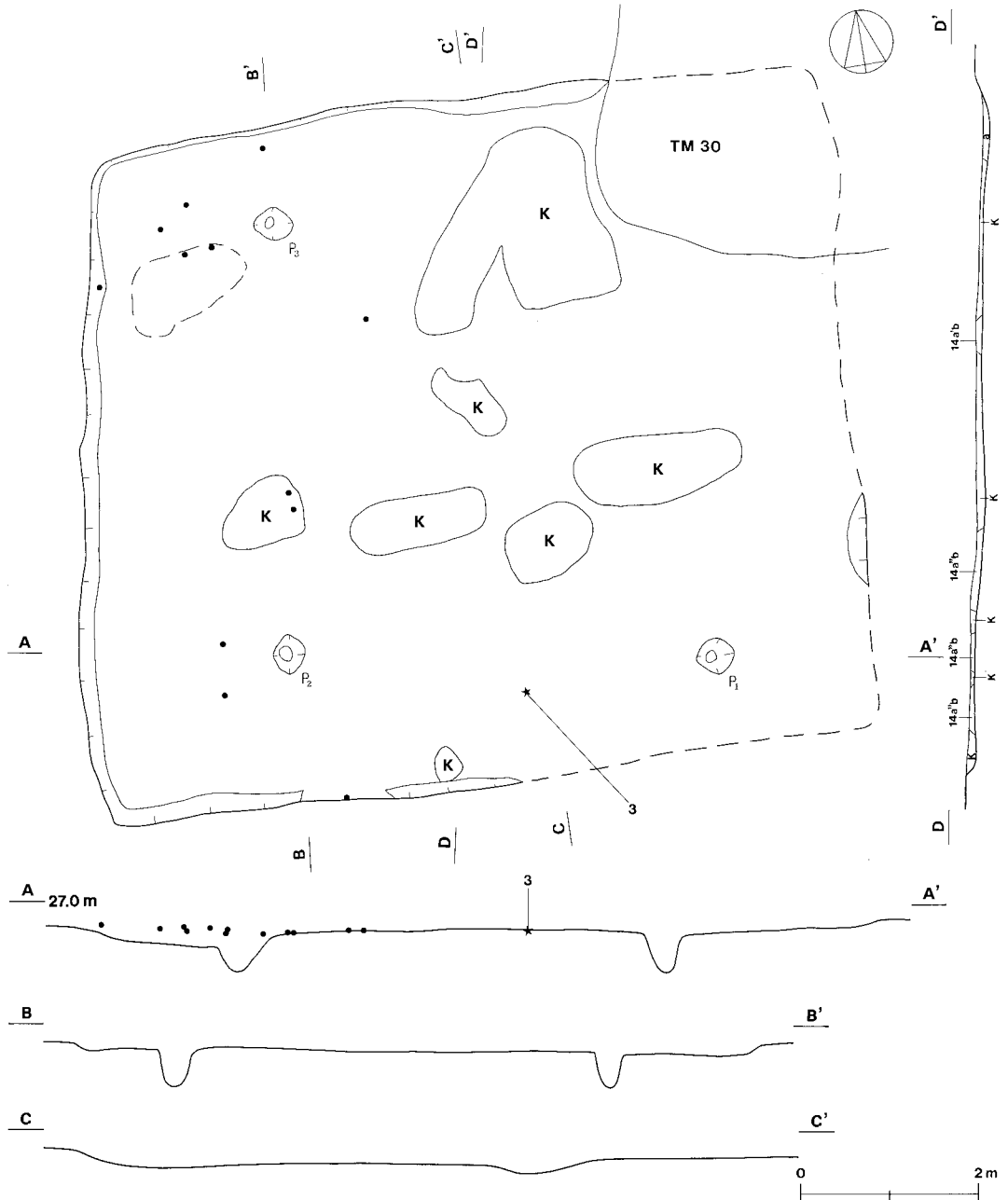
平面形は、推定長軸8.84m・短軸7.90mの方形を呈し、残存部から主軸方向はN-82°-Wを指すものと思われる。床面積は64m<sup>2</sup>と推定される。壁はロームで、20～60度の角度で緩やかに立ち上がっており、壁高は7～10cmである。床面は平坦なロームである。ピットは、3か所検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は、上端長径38～44cm・深さ34～48cmである。形状や規模から、3本とも本跡に伴う支柱穴と判断した。炉や貯蔵穴は検出されなかった。

覆土は、全体的に浅い単一層で、多量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含む締まりのある褐色土が堆積している。

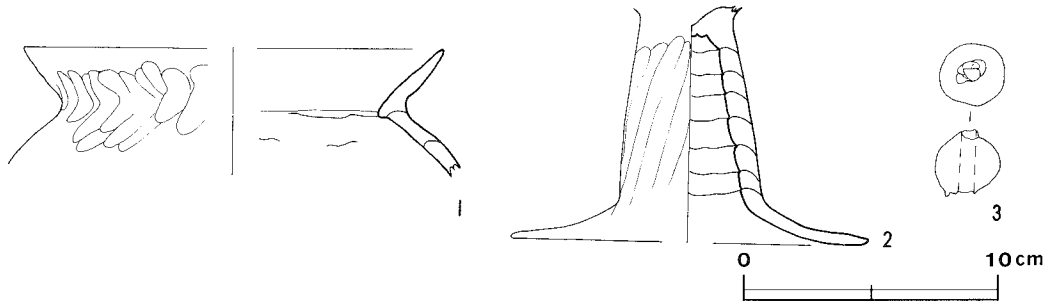
遺物は、土師器及びその破片197点、球状土錘1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器

片2点が出土している。本跡は覆土が極めて浅いうえに、上面から大きく攪乱されている遺構であり、床面出土の遺物も小破片である。第251図1の甕形土器口縁部はP<sub>3</sub>の覆土、2の高环形土器脚部はP<sub>1</sub>の南の攪乱部からの出土である。3の球状土錘は南壁中央部の床面からの出土であり、本跡に伴う可能性が高い。

本跡は、時期を明確にできないが、1の甕形土器口縁部や2の高环形土器脚部の特徴や遺構の形態等から、古墳時代中期の住居跡と推定される。



第250図 第117号住居跡実測図



第251図 第117号住居跡出土遺物実測図

第117号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第251図 1	甕形土器 土師器	A「16.8」 B (5.1)	口縁部から胴上半部にかけての破片。口縁部は、内面に接合痕を持つ頸部から内彎気味に開く。	内・外面とも口縁部は横ナデ、頸・胴部は篋ナデ整形。	砂粒・バミス 褐色 普通	5% P552
2	高坏形土器 土師器	B (9.5) D「14.2」	坏部は欠損。脚部は円筒状を呈し、裾部で外反して開き末端は水平である。	外面は篋削り整形。内面は輪積痕が残る。	砂粒・バミス 橙色 普通	30% P474

第122号住居跡 (第252図)

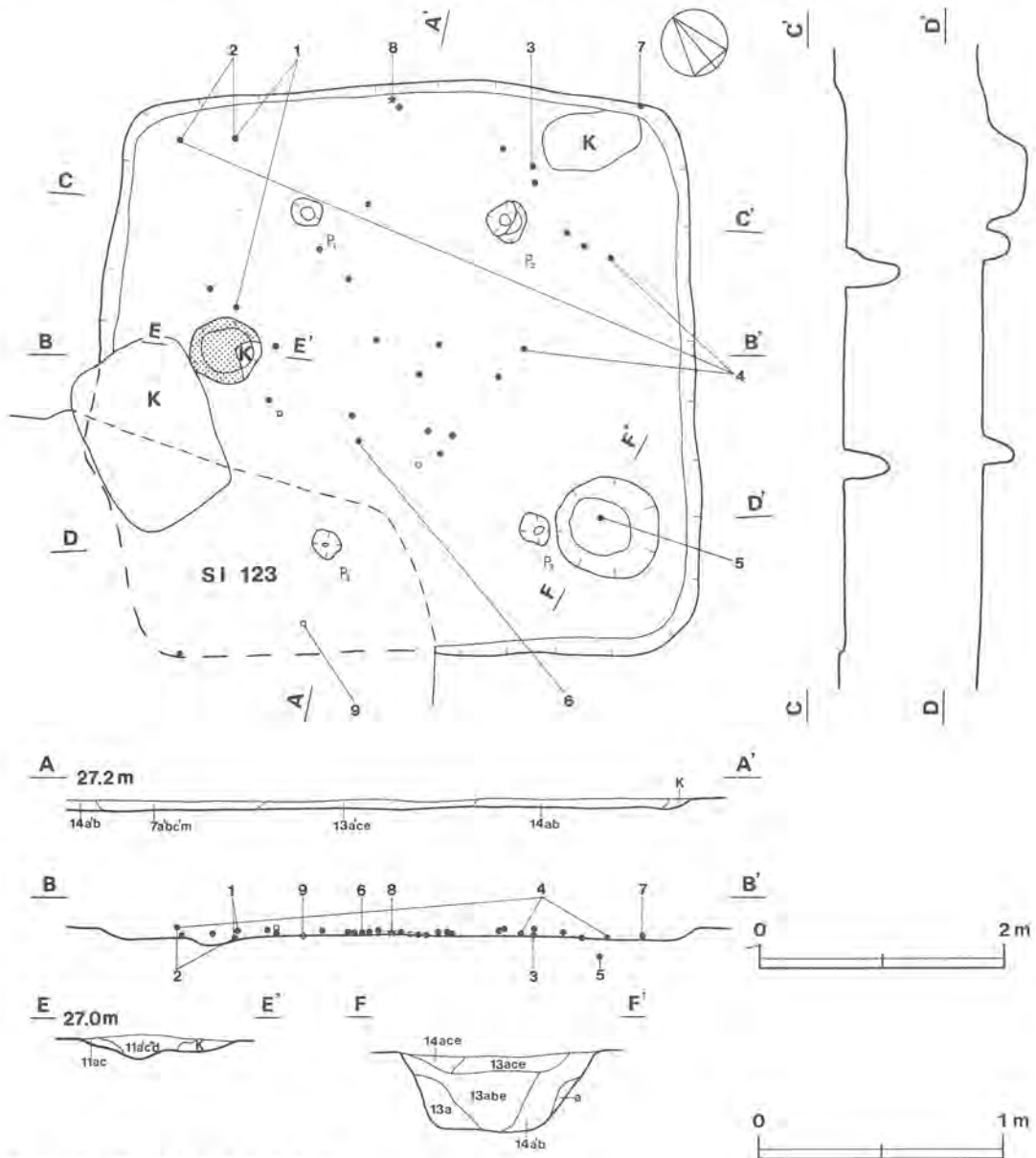
本跡は、2次調査区のE11c<sub>7</sub>区を中心に確認された住居跡で、第117号住居跡の南西3mに位置している。本跡は西側で第123号住居跡と重複しているが、土層から判断すると本跡の方が新しい時期の遺構と思われる。

平面形は、長軸4.94m・短軸4.80mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-44°-Wを指している。床面積は21.1m<sup>2</sup>である。壁はロームで、40~60度の角度で緩やかに立ち上がっており、壁高は4~11cmである。床面はほぼ平坦で、一部攪乱されているが締まりのあるロームである。ピットは、4か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、上端直径22~23cm・深さ24~45cmである。形状や規模、方形に配置されていることなどから、4本とも本跡に伴う主柱穴と判断した。炉は、床面を6cmほど掘り下げた地床炉で、中央から1.5mほど北西側に確認され、平面形は、直径59cmほどの円形である。炉内には、多量の焼土粒子等を含む極暗赤褐色土や少量の焼土粒子を含む褐色土が堆積しており、炉床はレンガ状に硬く焼き締まっている。貯蔵穴は、南コーナーに位置している。平面形は、直径89cmほどの円形で、深さは34cmほどである。貯蔵穴内には、少量のローム粒子や焼土粒子を含む褐色土、少量のローム粒子やローム小ブロックを含む暗褐色土、中量のローム粒子や少量のローム小ブロックを含む褐色土がレンズ状に堆積している。

覆土は、中量のローム粒子や焼土粒子、少量のローム小ブロックや炭化材を含む暗赤褐色土、

中量のローム粒子を含む暗褐色土，少量のローム粒子を含む褐色土が堆積しているが，全体的に浅く一部攪乱されている。

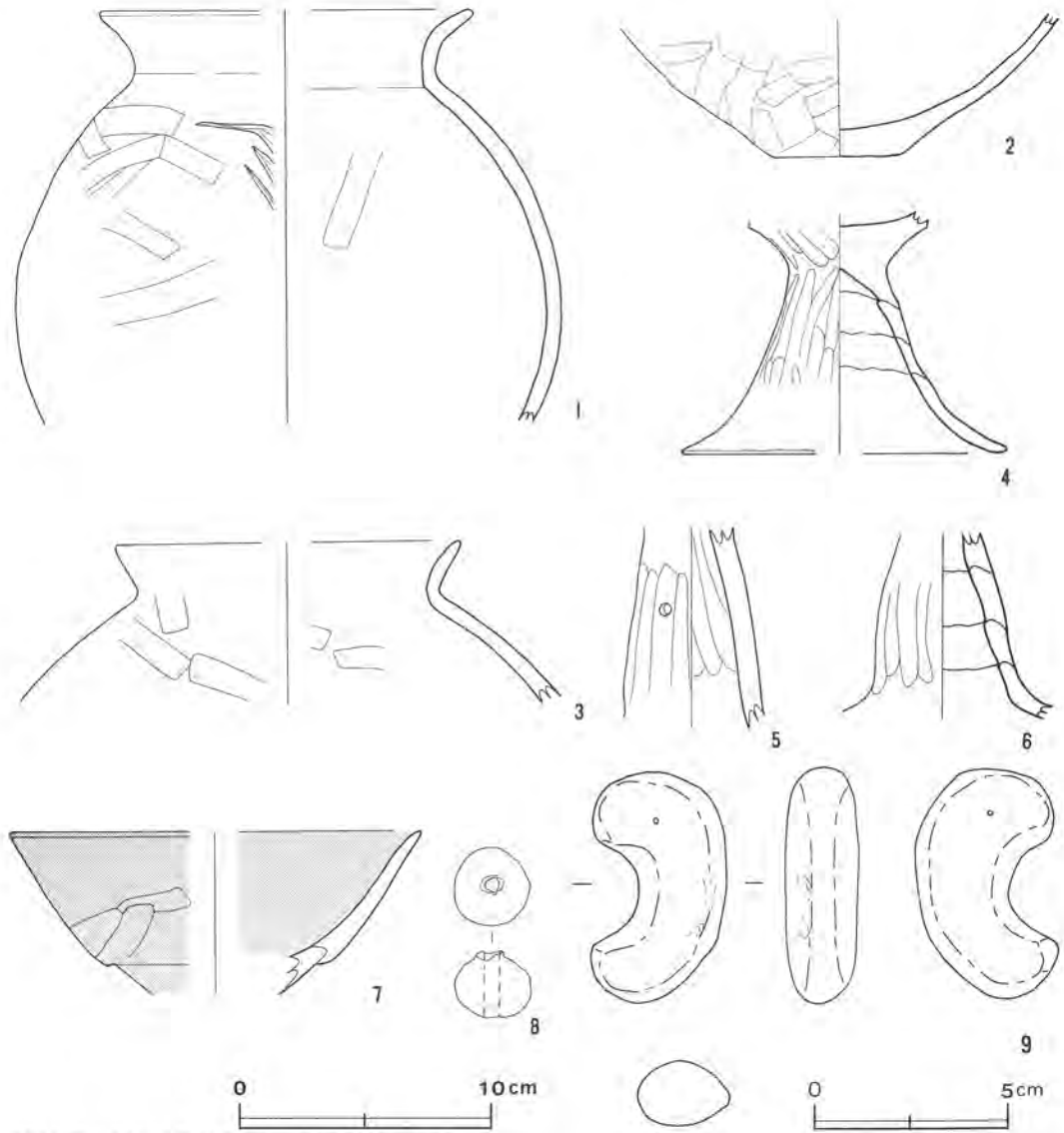
遺物は，土師器及びその破片424点，球状土錘1点，石製勾玉1点が出土している。本跡に伴うと考えられる遺物は，中央部や北西部，及び北コーナー付近から出土している。第253図1の甕形土器は北コーナー付近の床面と北西部の床面から出土した破片を，2の甕形土器底部は北コーナー付近の床面から出土した破片を接合したものである。4の高環形土器脚部は中央部の床面と東部の床面から出土したものを接合したものであり，中央部からは6の高環形土器脚部が出土し



第252図 第122号住居跡実測図

ている。5の高坏形土器脚部は貯蔵穴の下位から横位の状態で出土したものであり、3の甕形土器は北東部の床面、7の高坏形土器坏部は東コーナーの床面から出土したものである。このほかに、北東壁中央部の床面に8の球状土錘、南西壁際の床面に9の石製勾玉が出土している。出土状況等から考えて、1～9は本跡に伴うものと考えられる。

本跡は、遺物や遺構の形態等から古墳時代中期に比定される住居跡と思われる。



第253図 第122号住居跡出土遺物実測図



第122号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第253図 1	甕形土器	A「15.0」	口縁部から胴中央部にかけての破片。胴部は内彎して頸部に至る。口縁部は、頸部から垂直に立ち上がった後、外反して開く。	内・外面とも口縁部は横ナデ、胴部は筥ナデ整形。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	25% P478 2次的に砥石として使用したものとと思われる。
	土師器	B(16.6)				
2	甕形土器	B(5.6)	平底。胴部は内彎して立ち上がるが、中央部以上は欠損する。	内・外面とも筥ナデ整形。	砂粒・スコリア 暗赤褐色 普通	15% P479
	土師器	C 5.0				
3	甕形土器	A「13.8」	口縁部から胴上半部にかけての破片。口縁部は頸部から外反して開く。	内・外面とも口縁部は横ナデ、胴部は筥ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい褐色 普通	10% P555
	土師器	B(6.5)				
4	高環形土器	B(9.7)	坏底部以上は欠損。脚部はラッパ状を呈し緩やかに広がる。	外面は筥削り整形。内面は筥ナデ整形であるが、輪積痕が残る。	砂粒・パミス にぶい褐色 普通	25% P480
	土師器	D「12.9」				
5	高環形土器	B(8.0)	脚部片。脚部は円筒状を呈するが、裾部を欠損する。上位に孔が穿たれている。	外面は筥削り整形。内面は筥ナデ整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	25% P481
	土師器					
6	高環形土器	B(7.5)	脚部片。脚部は円筒状を呈し、裾部で外反して開くが末端は欠損する。	外面は筥削り整形。内面は輪積痕が残る。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	20% P553
	土師器					
7	高環形土器	A「16.6」	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に開く。	外面は筥ナデ整形。内面はナデ整形。内・外面とも赤彩。	砂粒・パミス 赤褐色 普通	5% P554
	土師器	B(6.5)				

表4 古墳時代中期住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模		床面	ピット数	炉	貯蔵穴	床面積(m <sup>2</sup> )	主な出土遺物	備考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)							
35	B5g <sub>s</sub>	N-27°-W	隅丸方形	4.86×4.82	4~14 外傾	緩い起伏	3	1	-	20.7	土師器片206点, 球状土錘1点, 弥生式土器片4点	
42	Z3j <sub>s</sub>	「N-44°-E」	方形	4.68×4.50	28~47 垂直	緩い起伏	4	-	1	17.9	土師器片63点, 弥生式土器片2点, 石製紡錘車1点	
45	A4g <sub>2</sub>	N-49°-W	方形	9.80×8.98	11~35 垂直	平坦	4	1	1	76.8	土師器片660点, 球状土錘5点, 鉄製品2点, 石製紡錘車2点	
48	B12i <sub>s</sub>	N-77°-W	不整隅丸方形	5.66×5.54	4~18 外傾	平坦	5	1	1	28.1	土師器片155点, 球状土錘4点, 石製勾玉1点	焼失家屋
49	B12h <sub>1</sub>	N-66°-W	方形	5.60×5.46	18~60 外傾	平坦	7	1	-	26.7	土師器片547点, 球状土錘1点, 剣形模造品1点	焼失家屋
51	B11g <sub>7</sub>	N-35°-W	方形	4.84×4.80	22~54 垂直	平坦	4	1	1	20.4	土師器片599点, 球状土錘6点	
71	B10c <sub>4</sub>	N-58°-W	隅丸方形	5.00×4.98	12~30 外傾・緩傾	平坦	4	1	-	20.1	土師器片197点, 弥生式土器片1点	
77	C10a <sub>0</sub>	-	-	-	-	緩傾 大きな起伏	6	1	2	-	土師器片92点, 弥生式土器片2点	
88	C12e <sub>1</sub>	N-42°-W	方形	5.80×5.44	3~11 緩傾	緩い起伏	4	1	1	28.9	土師器片160点, 弥生式土器片2点, 球状土錘3点	
90	C11e <sub>7</sub>	N-63°-W	方形	8.90×8.66	3~34 外傾	平坦	4	1	1	73.8	土師器片245点, 弥生式土器片3点, 球状土錘12点, 石製紡錘車1点, 管玉1点	焼失家屋
99	D10b <sub>2</sub>	-	-	-	-	緩い起伏	4	-	1	-	土師器片12点, 弥生式土器片1点	

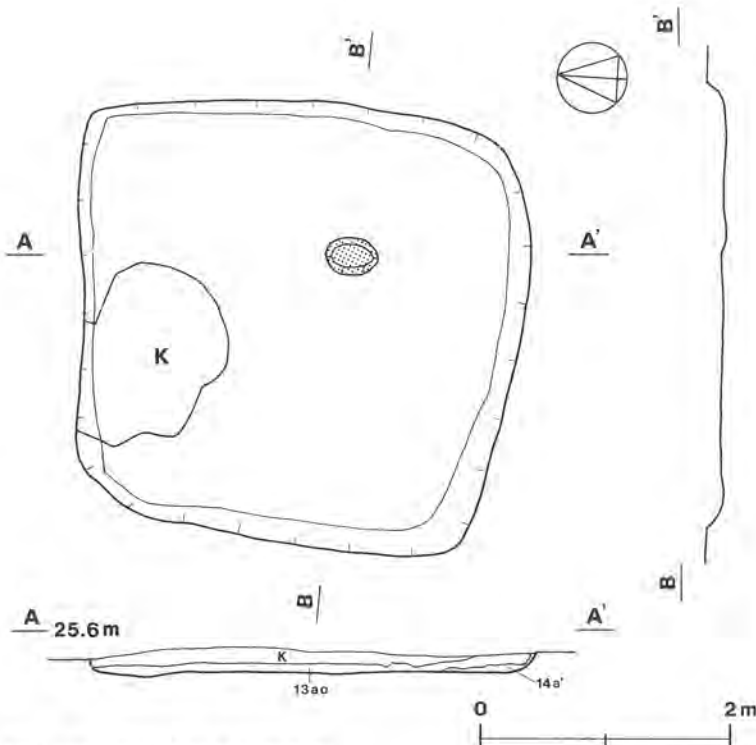
住居跡 番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模		床面	ピット 数	炉	貯蔵穴	床面積 (㎡)	主な出土遺物	備考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)							
105	D11g <sub>3</sub>	「N-57°-W」	「方 形」	「5.80×5.80」	4~18 緩傾	平坦	4	—	3	「30.0」	土師器片283点,石製紡 錘車1点	焼失家屋
112	D11h <sub>6</sub>	N-83°-W	方 形	4.72×4.68	5~9 外傾	平坦	4	1	1	20.3	土師器片100点,土師質 土器1点	
114	D10i <sub>6</sub>	N-45°-W	方 形	5.34×5.26	19~25 外傾	皿状	4	1	—	24.9	土師器片1750点,弥生式 土器片4点,球状土錘2 点,石製模造品1点	
117	D11j <sub>6</sub>	「N-82°-W」	方 形	「8.84」×7.90	7~10 緩傾	平坦	3	—	—	「64.0」	土師器片197点,弥生式 土器片2点,球状土錘 1点	
122	E11c <sub>7</sub>	N-44°-W	隅丸方形	4.94×4.80	4~11 緩傾	平坦	4	1	1	「21.1」	土師器片424点,球状土 錘1点,石製勾玉1点	

### 3 時期不明

#### 第11号住居跡 (第254図)

本跡は、1次調査区のB6c<sub>4</sub>区を中心に確認された住居跡である。

平面形は、長軸3.72m・短軸3.54mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-5°-Wを指している。床面積は9.9㎡である。壁はロームで、壁高は5~15cmである。南壁が65度の角度で、ほかは56~60度の角度で緩やかに立ち上がっている。床面は平坦で、全体的に軟弱なロームであり、北壁中央部は篠根によって攪乱されている。ピットは検出されなかった。炉は、床面を5cmほど掘り下げた地床炉で、中央から90cmほど南東側に確認された。平面形は、長径41cm・短径32cmの楕円形で、



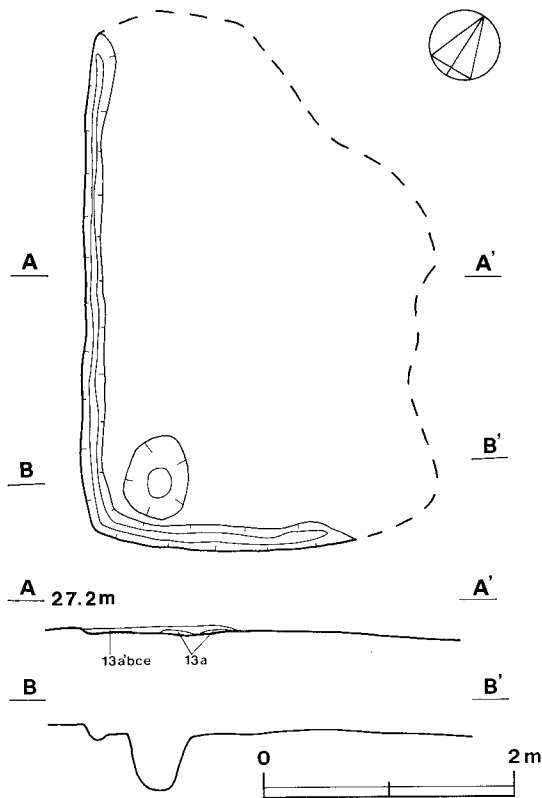
炉床もあまり焼き締ま  
てはいない。

覆土は、上層が攪乱層  
であり、下層に少量の  
ローム粒子を含む褐色土  
が堆積している。

本跡は、小規模で柱穴  
もなく床面も軟弱である  
が、炉が検出されている  
ことから住居跡と判断し  
た。出土遺物がなく時期  
を明確にすることはでき  
ない。

第254図 第11号住居跡実測図

第96号住居跡 (第255図)



第255図 第96号住居跡実測図

本跡は、出土遺物がなく時期を明確にすることはできない。

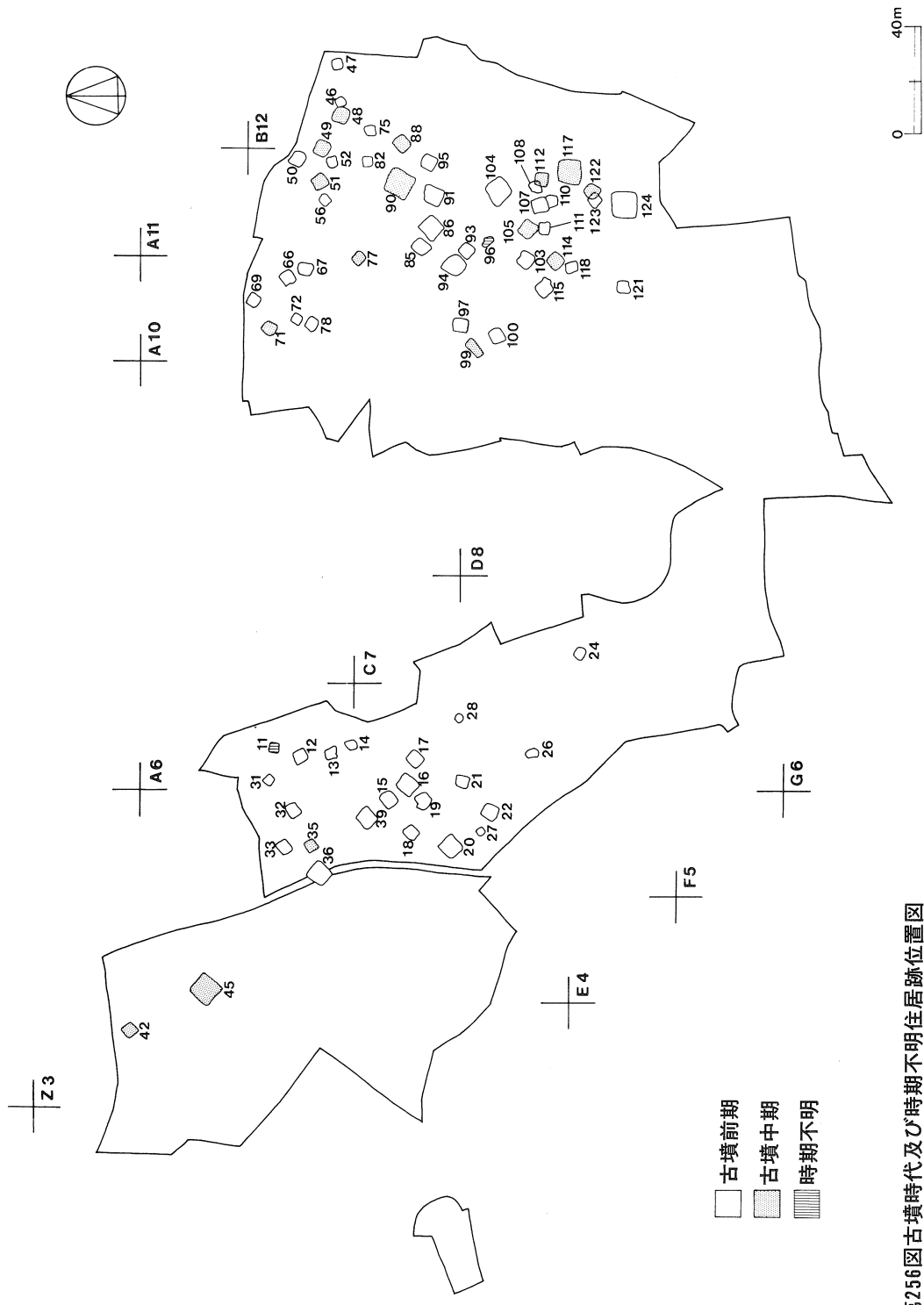
表5 時期不明住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模		床面	ピット数	炉	貯蔵穴	床面積(m <sup>2</sup> )	主な出土遺物	備考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)							
11	B6c <sub>4</sub>	N→5°→W	隅丸方形	3.72×3.54	5~15 緩傾	平坦	-	1	-	9.9	-	
96	D11c <sub>2</sub>	-	-	-	9 外傾	平坦	-	-	1	-	-	

本跡は、2次調査区のD11c<sub>2</sub>区を中心に確認された住居跡である。

本跡は、削平のために形状や規模等の詳細は不明である。壁はロームで、壁高は9cmである。南壁や西壁の一部が、70~80度の角度で立ち上がるほかは湮滅している。壁溝は、上幅14~21cm・深さ2~5cmで、南コーナーを中心とする壁直下に検出されたが、ほかは削平により湮滅したものと思われる。床面は締まりのあるロームで、貯蔵穴の周囲は硬く踏み固められている。ピットや炉は検出されなかった。貯蔵穴は、南コーナーの壁際に位置している。平面形は、長径68cm・短径46cmの楕円形で、深さは47cmほどである。

覆土は、壁際に中量のローム粒子、少量のローム小ブロックや炭化粒子を含む暗褐色土層が検出されただけである。



第256図 古墳時代及び時期不明住居跡位置図

### 第3節 竪穴遺構と出土遺物

#### 第1号竪穴遺構 (第257図)

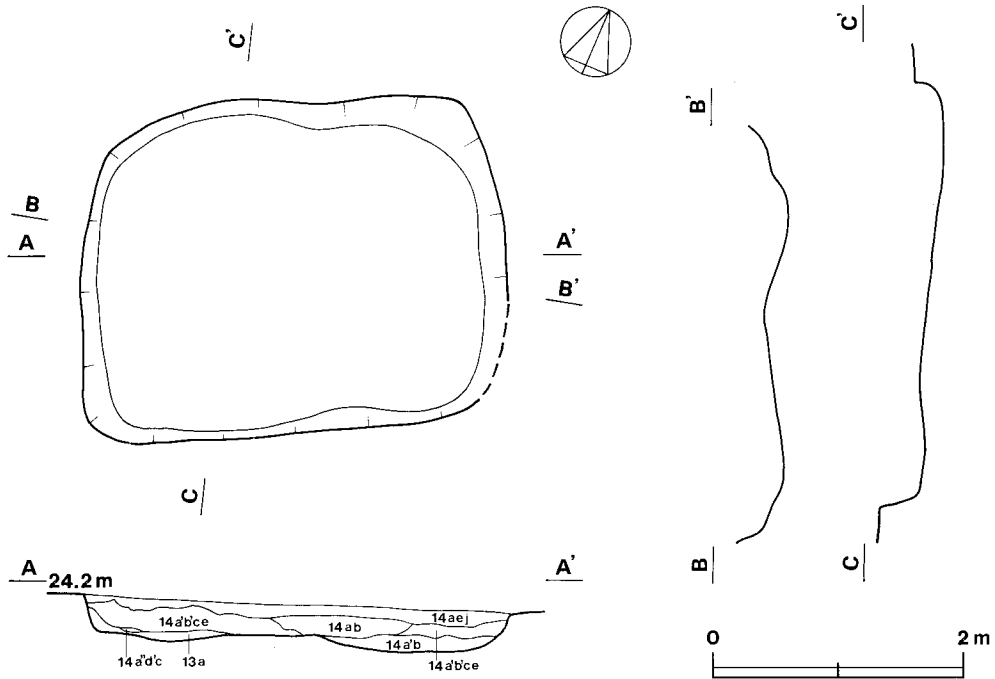
本跡は、2次調査区のB11d<sub>6</sub>区を中心に確認された遺構である。

平面形は、推定長軸3.40m・短軸2.64mの隅丸長方形形状を呈し、長軸方向はN-62°-Eを指すものと思われる。床面積は6.8m<sup>2</sup>である。壁はロームで、60~70度の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は21~23cmである。床面はロームで、平坦な中央部を除いて大きな起伏を呈している。ピットや炉、貯蔵穴は検出されなかった。

覆土は、上層に少量のローム粒子等を含む褐色土、下層に中量のローム粒子やロームブロック等を含む褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、自然堆積と考えられる。

遺物は、土師器片7点、弥生式土器片2点が出土しているが、いずれも小破片で図示することはできなかった。

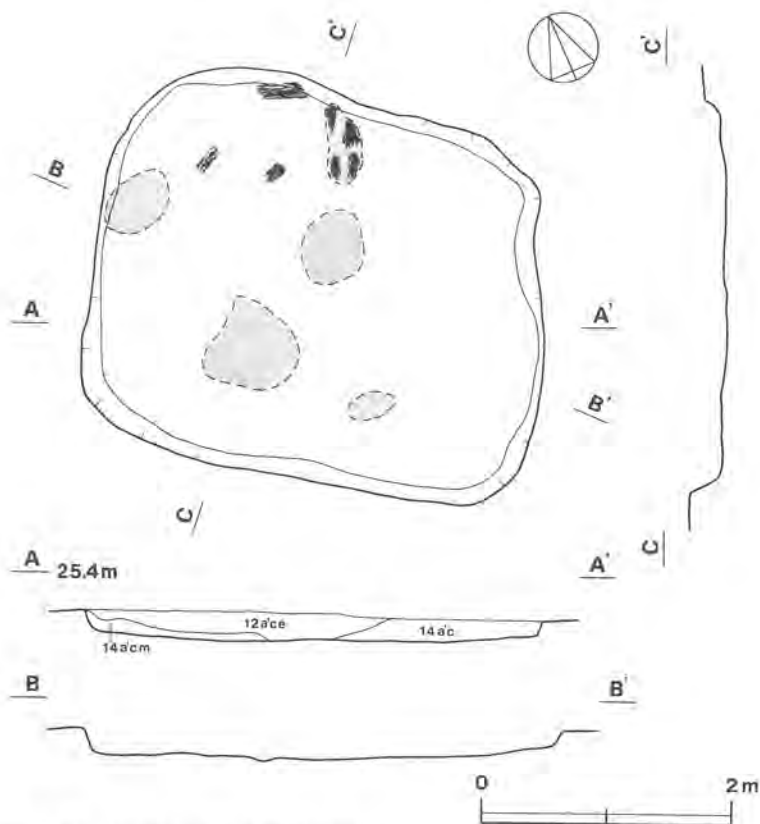
本跡は、炉や貯蔵穴、ピット等をもたず、居住施設としての住居跡とは考えられないことから竪穴遺構として扱った。時期は不明である。



第257図 第1号竪穴遺構実測図

#### 第2号竪穴遺構 (第258図)

本跡は、2次調査区のB11j<sub>4</sub>区を中心に確認された遺構である。



第258図 第2号竪穴遺構実測図

色土を主体とし、壁際に中量の焼土粒子や少量の炭化材を含む褐色土が堆積している。また、床面に多量の炭化材や焼土を含む層が確認されていることから、本跡は焼失遺構と判断した。焼失の時期については、本跡廃絶後と考えられる。

遺物は土師器片8点、弥生式土器片2点が出土している。土師器は、高坏形土器の脚部片や埴形土器の口縁部片が出土しているが、小破片であり図示することはできなかった。すべて覆土からの出土であり、本跡の時期を決定する手掛かりとはならない。

本跡は、小規模で炉や貯蔵穴、柱穴もなく、居住施設としての住居跡とは考えられないことから竪穴遺構として扱った。時期は不明である。

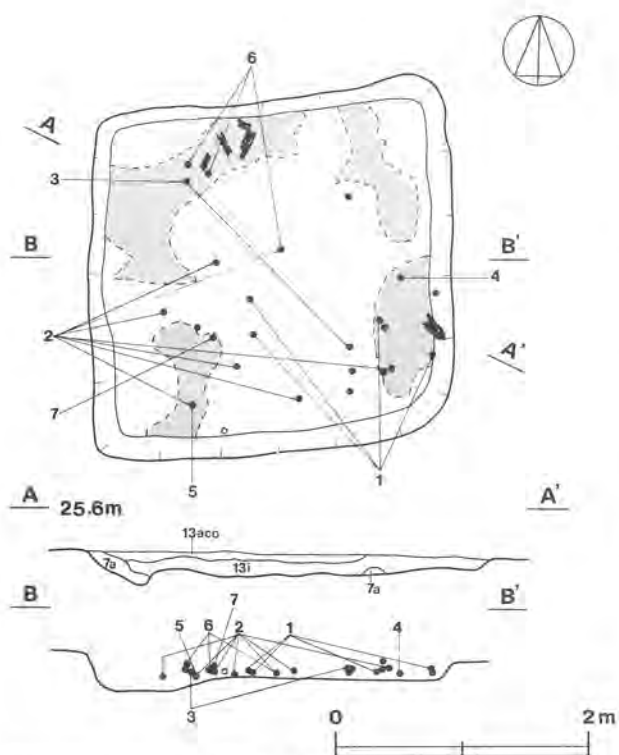
### 第3号竪穴遺構（第259図）

本跡は、2次調査区のC11b<sub>7</sub>区を中心に確認された遺構である。

平面形は、長軸2.90m・短軸2.80mの方形を呈し、長軸方向はN-82°-Eを指している。床面積は6.4m<sup>2</sup>である。壁はロームで、65°前後の角度で緩やかに立ち上がっており、壁高は12~29cmである。床面は全体的に硬く踏み固められたロームで、ほぼ平坦であるが、西側は凹地となってい

平面形は、長軸3.66m・短軸3.20mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-55°-Wを指している。床面積は9.2m<sup>2</sup>である。壁はロームで、70度前後の角度で外傾して立ち上がっており、壁高は13~24cmである。床面は浅い皿状を呈し、締まりのあるロームである。ピットや炉、貯蔵穴は検出されなかった。

覆土は、自然堆積をしており、中量のローム粒子や炭化材、及び焼土粒子を含む極暗褐色土を主体とし、壁際に中量の焼土粒子や少量の炭化材を含む褐色土が堆積している。また、床面に多量の炭化材や焼土を含む層が確認されていることから、本跡は焼失遺構と判断した。焼失の時期については、本跡廃絶後と考えられる。



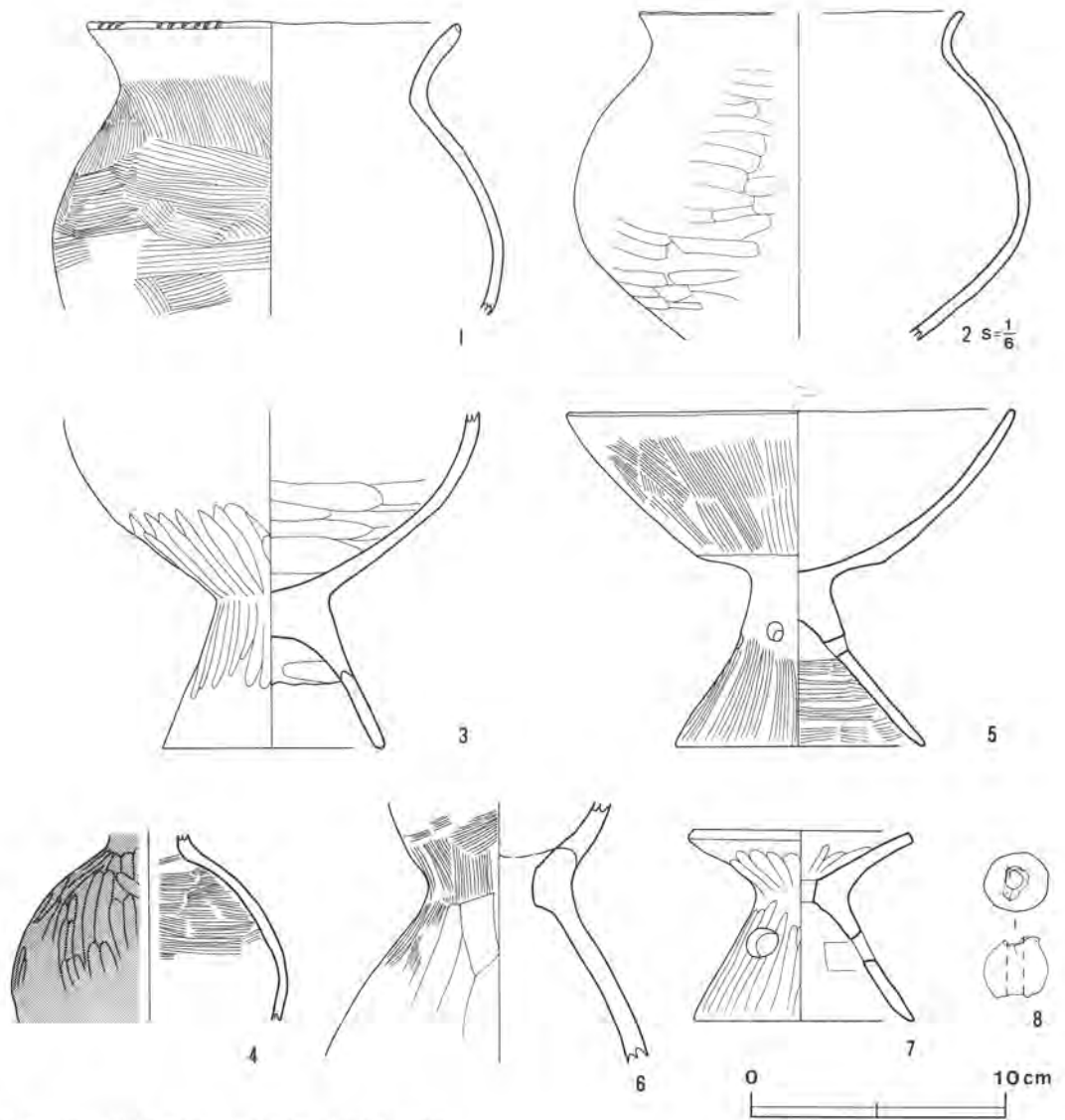
第259図 第3号竪穴遺構実測図

遺物は、土師器及びその破片30点、球状土錘1点のほかに、流れ込みと考えられる弥生式土器片2点が出土している。本跡に伴うと思われる遺物は床面全体から出土しており、広い接合関係を示している。第260図1や2の甕形土器は中央部と南東部や南西部、4の小形壺形土器は東部の床面から出土した破片を接合したものである。5の高坏形土器は南西コーナー付近の床面に潰れた状態で、中央部の床面からは7の器台形土器が出土している。6の炉器台形土器は北西部の床面に横位の状態で出土したものである。3の台付甕形土器は、北西部と南東部の床面から出土した破片を接合したものである。8の球状土錘は南東部の覆土からの出土であり、本跡との関係は不明である。出土状況等から考えて、1～7の遺物が本跡に伴うものと思われる。

本跡は、小規模で炉や柱穴もなく、居住施設とは考えられないことから、古墳時代前期の竪穴遺構として扱った。

る。ピットや炉、貯蔵穴は検出されなかった。

覆土は、上層に少量のローム粒子を含む暗褐色土、下層に中量の焼土粒子や少量の炭化粒子等を含む暗褐色土が堆積している。また、床面には焼土を含む層や炭化材が検出されていることから、本跡は焼失遺構と判断した。焼失の時期は、中・多量の焼土粒子等を含む暗赤褐色土や黒褐色土、炭化材の下に中・多量のローム粒子を含む褐色土や黒褐色土が堆積していることから、本跡の廃絶後と思われる。



第260図 第3号竖穴遺構出土遺物実測図

第3号竖穴遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第260図 1	甕形土器 土師器	A 15.0 B (11.8)	胴中央部以下は欠損。口縁部は頸部から外反して開く。	口唇部には刻目が施されている。外面はハケ目整形, 内面はナデ整形。	砂粒・バミス 橙色 普通	35% P393
2	甕形土器 土師器	A「26.0」 B (20.5)	口縁部から胴下半部にかけての破片。口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部は外面がナデ, 内面は横ナデ整形。胴部は内・外面とも、籠ナデ整形。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	20% P394



図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第260図 3	台付甕形 土 器 土 師 器	B (13.5) D 9.0	脚台部は「ハ」の字状に開く。胴部は内彎して立ち上がるが、中央部以上は欠損する。	内・外面とも篋ナデ整形。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	20% P398
4	小形壺形 土 器 土 師 器	B (7.5)	頸部から胴中央部にかけての破片。	外面は丁寧な篋磨き整形後、赤彩。内面はハケ目整形。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	20% P395
5	高環形土器 土 師 器	A 18.0 B 13.6 D 10.0	脚部は中位よりやや上に4孔が穿たれ、「ハ」の字状に開く。坏部は下位に稜を持ち、内彎気味に開く。	外面はハケ目整形。内面は坏部の剝離が著しく整形技法は不明であるが、脚部はハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	95% P396
6	炉器台形 土 器 土 師 器	B (10.2)	脚部は「ハ」の字状に開くが、握部は欠損する。器受部は内彎気味に開くが、上位は欠損する。接合部に中央孔を持つ。	器受部は外面がハケ目、内面はナデ整形。脚部は外面が篋ナデ整形で、ハケ目痕が部分的に残る。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	60% P399
7	器台形土器 土 師 器	A 8.6 B 7.6 D 8.9	脚部は中位に3孔が穿たれ、「ハ」の字状に開く。器受部は外傾して開く。接合部に中央孔を持つ。	外面は篋磨き整形。内面は器受部が篋磨き、脚部は篋ナデ整形。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	100% P400

#### 第4号竪穴遺構 (第261図)

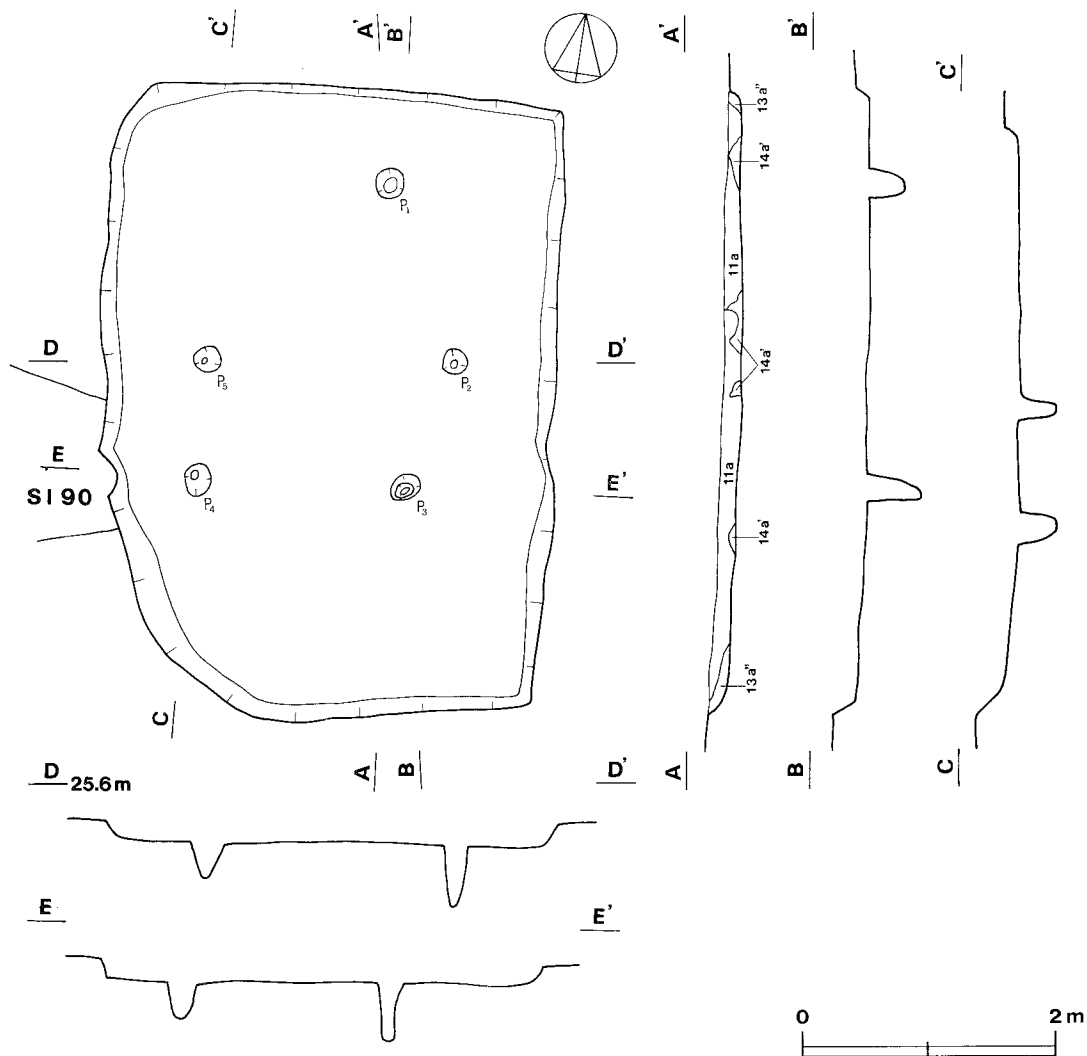
本跡は、2次調査区のC11d<sub>9</sub>区を中心に確認された遺構である。

平面形は、長軸5.08m・短軸3.56mの長形状を呈し、長軸方向はN-5°-Wを指している。床面積は15.2m<sup>2</sup>である。壁はロームで、60度の角度で緩やかに立ち上がっており、壁高は10~20cmである。床面はほぼ平坦で、締まりの軟弱なロームである。ピットは、5か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>は、上端直径20~26cm・深さ30~51cmであり、いずれも本跡に伴う柱穴と考えられる。炉や貯蔵穴は、検出されなかった。

覆土は、少量のローム粒子を含む黒褐色土を主体とし、壁際に多量のローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。堆積状況等から、自然堆積と思われる。

遺物は、ハケ目が施された甕形土器胴部片や流れ込みと考えられる内耳土器片が出土しているが、小破片であり、図示することはできなかった。

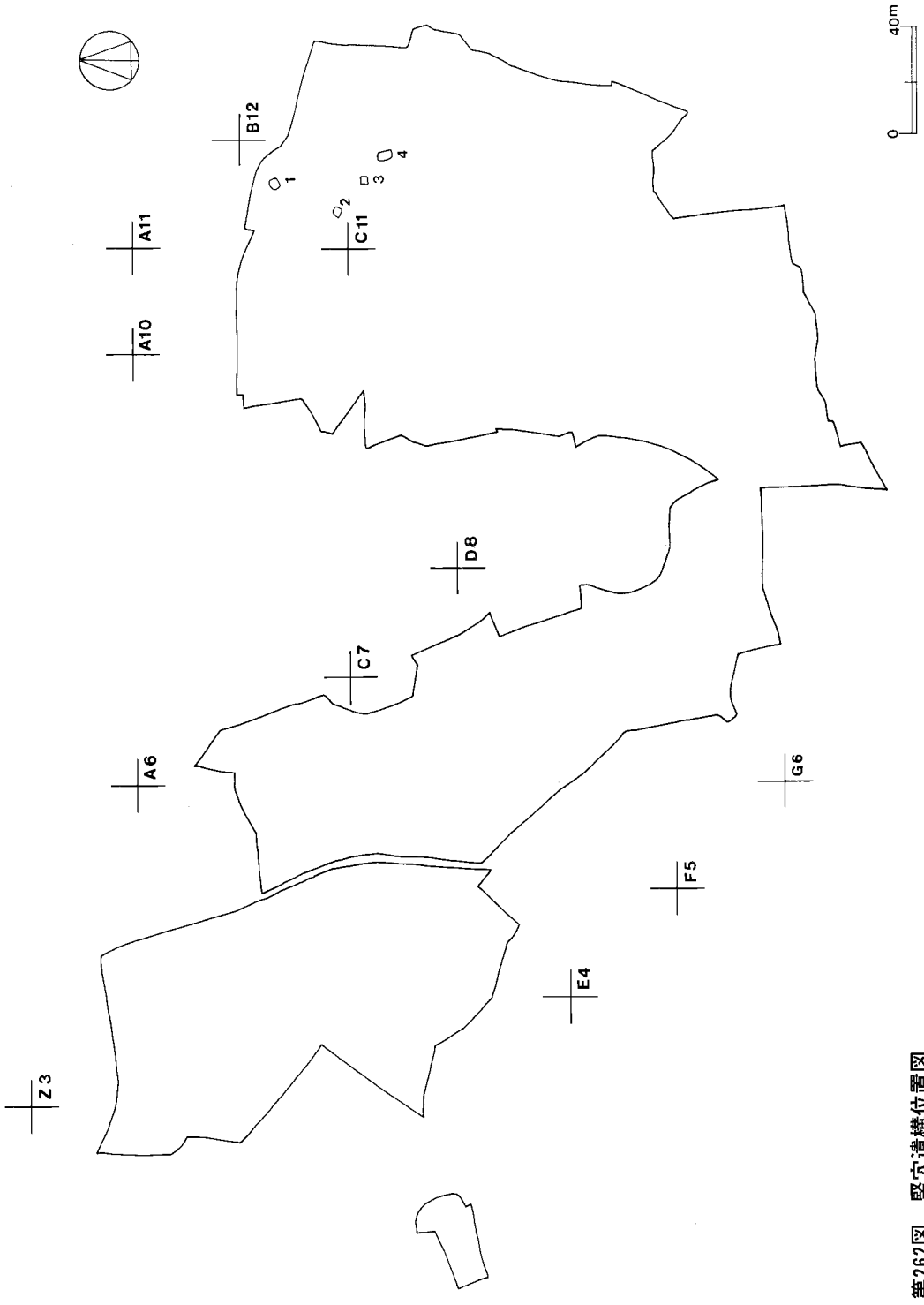
本跡は、炉もなく床面も軟弱であり、住居跡とは考えられないことから竪穴遺構として扱った。時期は不明である。



第261図 第4号竪穴遺構実測図

表6 竪穴遺構一覧表

住居跡 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模		床面 凹凸	ピット 数	炉	貯蔵穴	床面積 (㎡)	主な出土遺物	備 考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)							
1	B11d <sub>6</sub>	「N-62°-E」	隅丸長方形	「3.40」×2.64	21~23 外傾	大きな 起伏	-	-	-	6.8	土師器片7点, 弥生式 土器片2点	
2	B11j <sub>4</sub>	N-55°-W	隅丸長方形	3.66×3.20	13~24 外傾	浅い 皿状	-	-	-	9.2	土師器片8点, 弥生式 土器片2点	焼失遺構
3	C11b <sub>7</sub>	N-82°-E	方 形	2.90×2.80	12~29 外傾	平坦	-	-	-	6.4	土師器片30点, 弥生式 土器片2点, 球状土錘 1点	焼失遺構
4	C11d <sub>8</sub>	N-5°-W	長方形	5.08×3.56	10~20 緩傾	平坦	5	-	-	15.2	-	



第262図 竖穴遺構位置図

## 第4節 古墳と出土遺物

### 1 古墳の概要

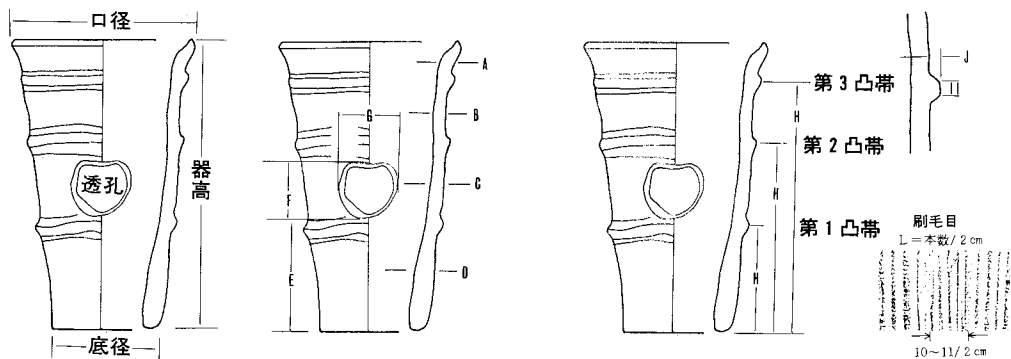
当遺跡は、茨城県遺跡地図によると「長峰古墳群」となっているが、当地区の分布調査の結果住居跡等に伴うと思われる土器片等の遺物も多量に確認され、複合遺跡であるとの判断により、長峰遺跡として調査を進めることになった。

調査を開始して、表土である耕作土等を除去すると、古墳の周溝や住居跡、土坑等が重複していた。そこで、埋葬施設の検出は勿論、遺物の帰属と切り合い関係を重視し、土層観察用ベルトを設定して調査を行った。その結果は以下のようなものである。

- ・マウンドと周溝を残していた古墳 4基
- ・周溝だけを残していた古墳 31基

これらを、古墳の形状に分類すると次のようになる。

- ・円墳 29基 (埴輪出土3基・埋葬施設3基)
- ・方墳 2基 (埋葬施設1基)
- ・前方後円墳 4基 (埴輪出土3基)



#### ・円筒・朝顔形円筒埴輪観察表

図版番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2 cm	成形と内面の状況	色調	備考
					下段	上段	1	2	3				

#### ・形象埴輪観察表

番号	種別・部位	形態、成形技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
1					
2					

1 数値の単位はcmで、「」は推定値、( )は現存値を示した。

2 凸帯の断面形が矩形ないし台形で2本の稜を明確に残すものをA型、三角形で稜の明確なものをB型、その中間型をA'型とする。数値は上から順に、底部から凸帯までの高さ(H)、幅(I)、厚さ(J)を示した。なお、破片部の凸帯については現存部下端から順に第1・2・3とした。

## 2 古墳の調査

### 第1号古墳（第263・264・265図）

#### (1) 古墳の現状

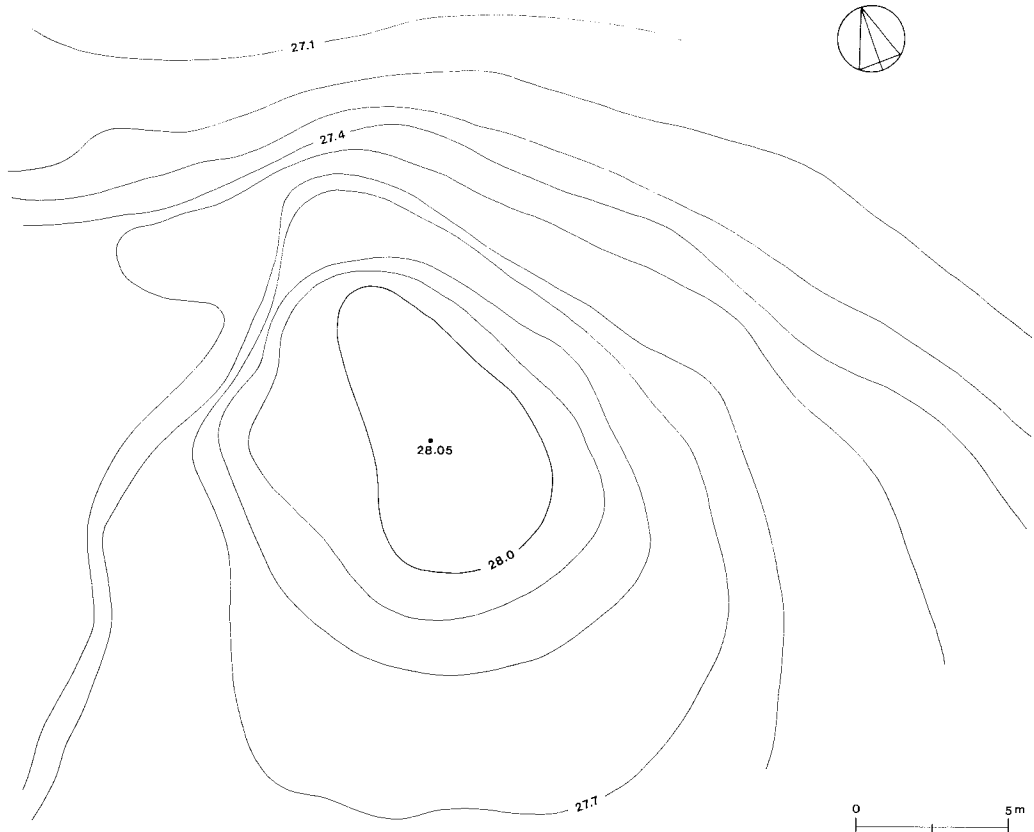
本墳は、C6・D6区を中心に、宿二ノ谷に面した宿台地の東縁の傾斜部に位置している。本墳の占地している部分は、平坦部から谷に至る緩斜面であり、その先の東側は急傾斜の崖になっている。南側4m程には第16号古墳が存在している。また、南側周溝と第1号溝、東側周溝と第2～4号溝が重複しており、いずれも周溝部が各溝に切られている。

#### (2) 古墳の構造

##### 〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって著しく削平され、なだらかな丘状に変形している。調査前に墳丘測量を実施した結果、墳丘の最頂部の標高は27.95mである。

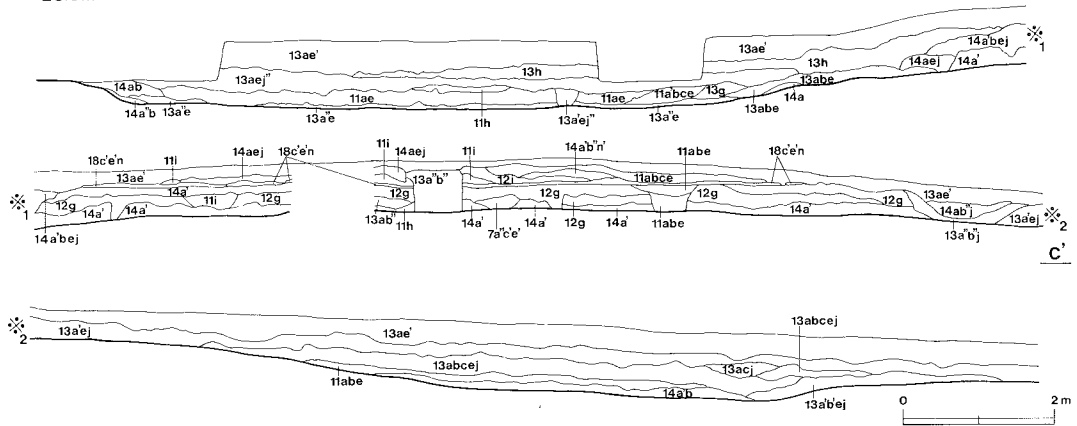
封土の構成は、褐色のローム層の上に旧表土である極暗褐色土～黒褐色土が16cmのっており、その上に墳丘を築く際に火を使用したことを示す2cm前後を測る草木灰層がある。その上に封土



第263図 第1号古墳墳丘図



C 28.0m



第265図 第1号古墳実測図-2

は黒褐色土・暗褐色土・褐色土等が25cm盛土されている。さらにその上に耕作土と思われる攪乱を受けた暗褐色土が15cm堆積している。旧表土は周溝から1.4~4.7m内側に、径12.4mの円形状に残っている。周溝はブリッジ部を除いてほぼ円形状に廻っている。これらの旧表土と周溝から判断すると、墳形は円墳と思われる。規模は、周溝の内側で長径20.2m、短径17.9mである。

#### 〈周溝〉

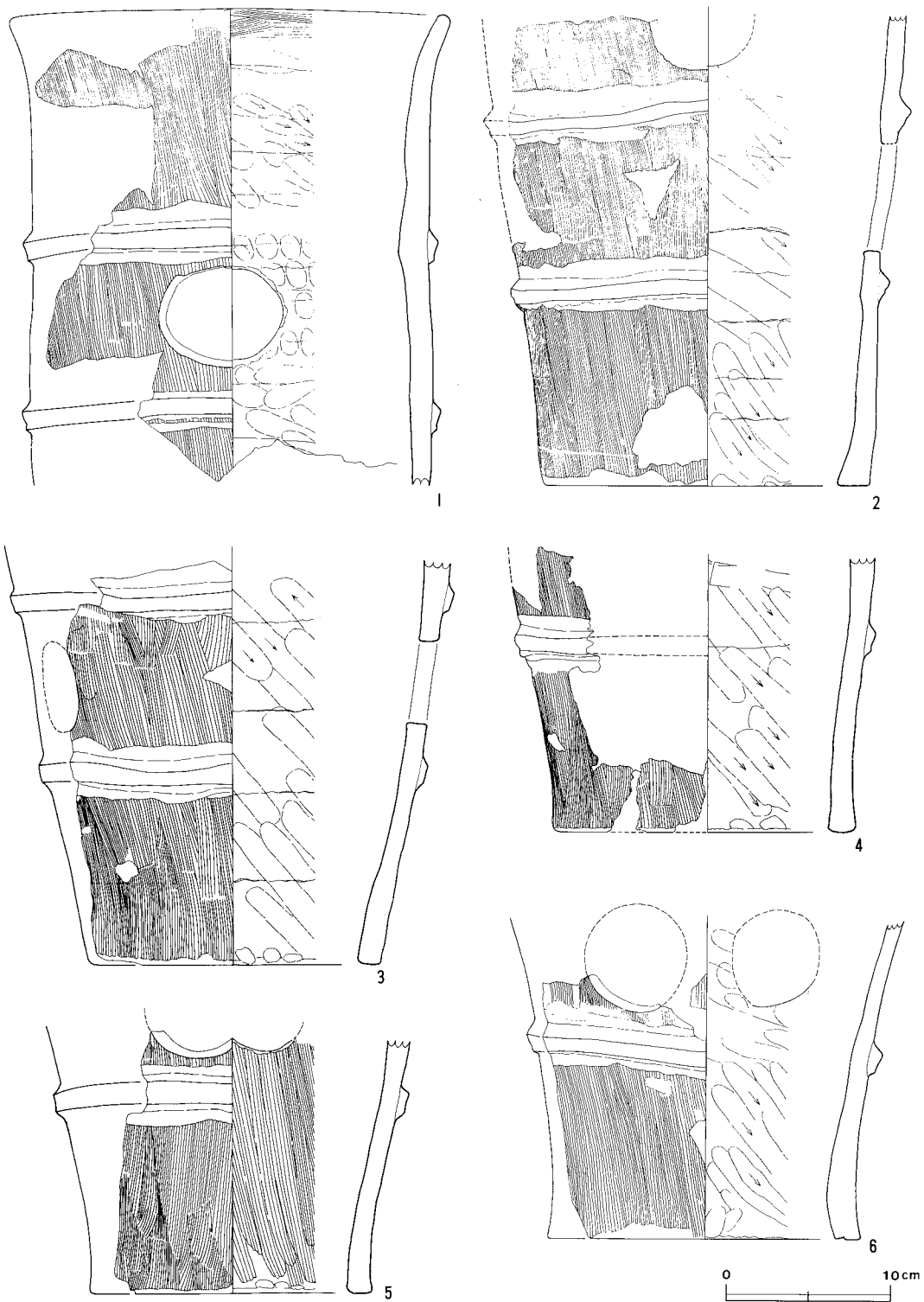
周溝は幅の広い部分と狭い部分があって一定ではなく、平面形は墳丘を取り囲むように円形状に掘られている。なお西側にブリッジが認められ、周溝からなだらかに掘り残され、墳丘側が狭くなっている。狭い部分は7.1mである。周溝の幅は溝と重複している部分や削平された部分があるが、上幅の最大幅は西側で9.9m、最小幅は北側で2.4mである。下幅は1.2~6.5mである。深さは0.3~0.7mであるが、ブリッジの右・左は幅も広く深い。北側と東側は浅い。壁面はロームで、墳丘側、外側ともゆるやかに立ち上がっている。溝底はゆるい起伏を示し標高は南側で25.86m、東側で26.11mである。覆土は大きく二層に分けられ、上層に多量のローム粒子や少量の炭化粒子等を含むやや締まった暗褐色土、下層には多量のローム粒子や少量のローム小ブロック等を含む褐色土がやや締まって堆積している。

#### (3) 埋葬施設

墳丘の旧表土層を、さらに東~西、南~北へ幅1mのトレンチを設定して掘り込んだが埋葬施設は確認されなかった。周溝内も精査したが検出されなかった。

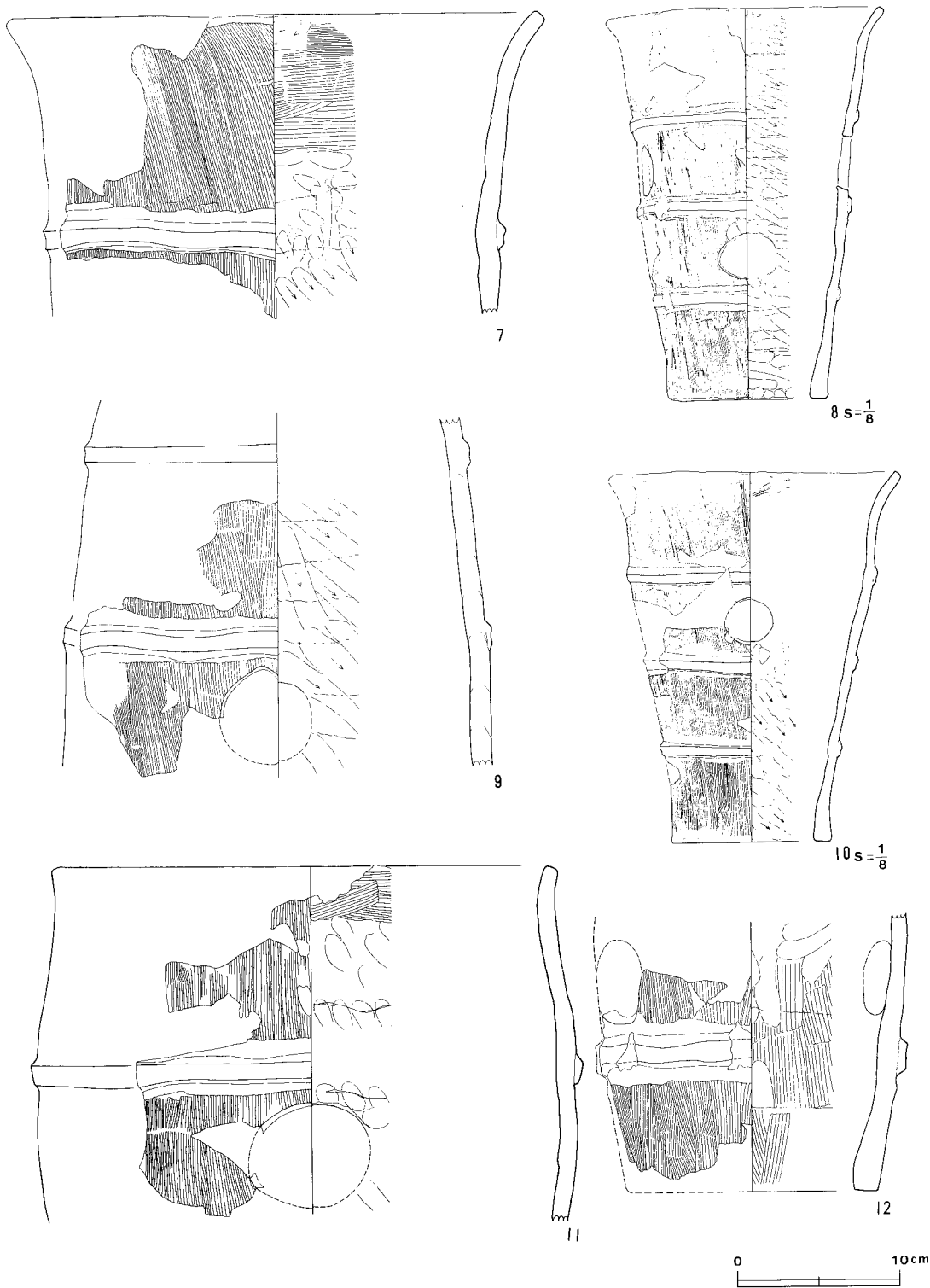
#### (4) 古墳からの出土遺物(第266・267・268・269図)

周溝内からは多量の円筒埴輪片が出土し、15個体を復元した。また、第2号溝と重複している付近の覆土から球状土錘3点や極少量の土師器片も出土した。特に、第2号溝内には攪乱を受けた状態で埴輪片が列をなして出土している。ブリッジの北側周溝からは第268図16の鶏形の頭部の

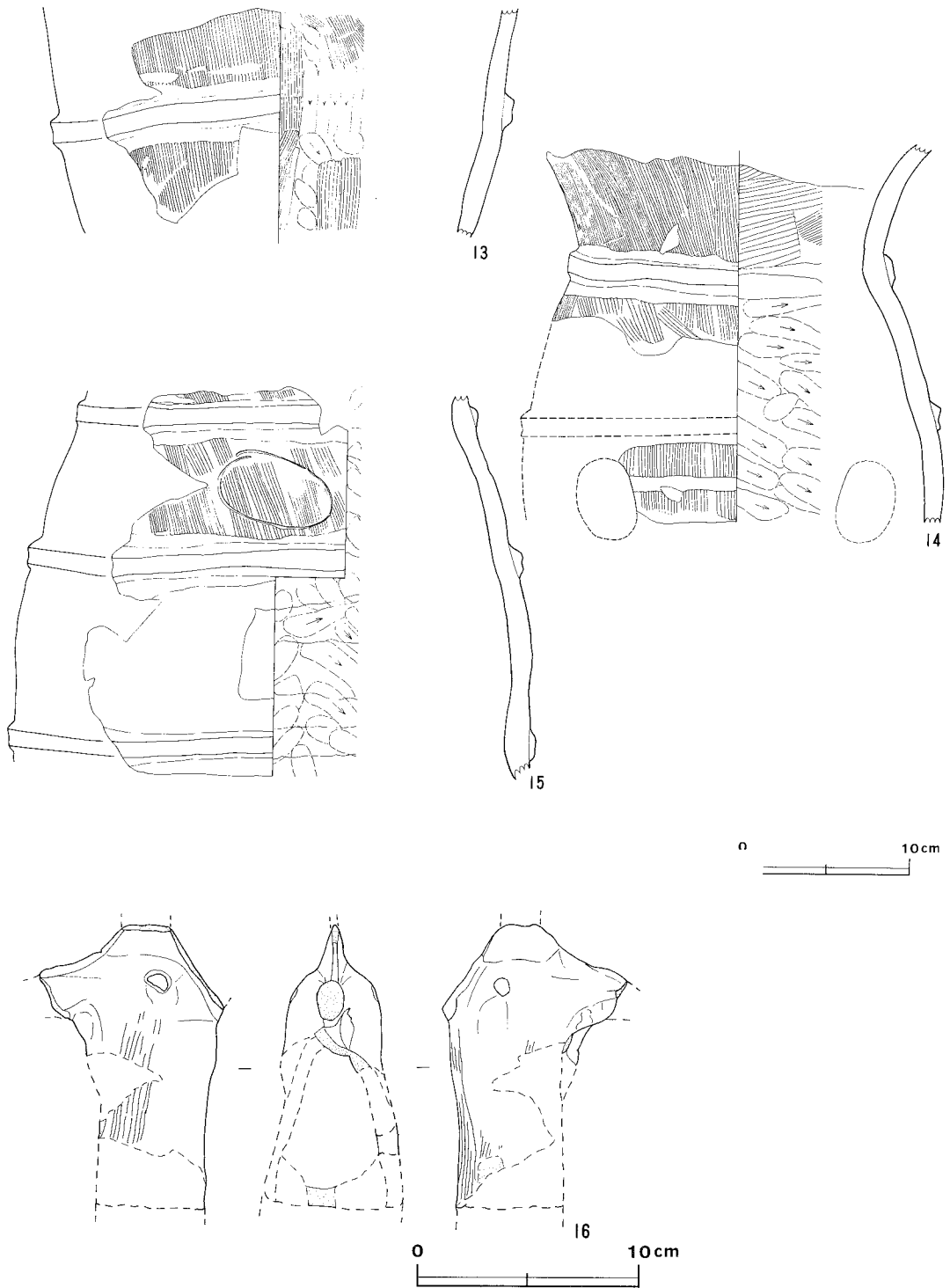


第266图 第1号古墳出土遺物実測図一 1



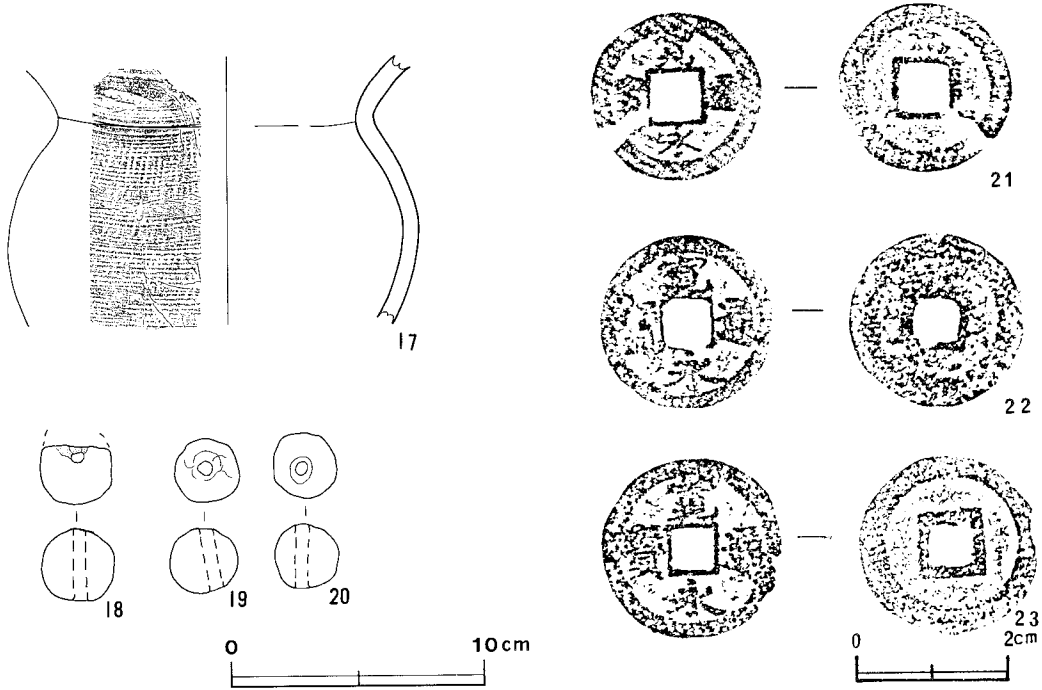


第267图 第1号古墳出土遺物実測図-2



第268图 第1号古墳出土遺物実測図-3

形象埴輪片が、東側周溝の底付近からは第269図17の須恵器の壺と思われる破片、南東側で旧表土の上にある灰層に混じった土師器片が出土した。その他、表土から古銭3点も出土している。また墳丘を掘り下げた際、その中央部から古墳時代前期の住居跡が検出された。



第269図 第1号古墳出土遺物実測・拓影図-4

第1号古墳出土土円筒・朝顔形円筒埴輪観察表

図版 番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2cm	成形と内面の状況	色調	備考				
					下段	上段	1	2	3								
第266図 1	(29.0)	26.7	-	A1.5 B1.4 C1.2	(7.2) 6.3 7.5	- - -	(4.0) 1.1 0.5	(14.5) 1.0 0.6	- - -	14~17	左回り巻き上げ 紐幅2.5~3cm 斜方向の指押圧 口縁から2.5cm位まで外面と同じ ハケ目横走 口唇下はわずかに横ナデ 基部付近に外面と同じハケ目縦走 巻き上げ痕明瞭	橙色	DP115 体~口縁部 片 外面口唇下0.8cm幅 で横ナデ 凸帯の下側のナデ雑				
	2	(29.2)	-	19.9	B1.2 C0.9 D1.3	(25.6) - -	- 0.9 0.6	12.2 0.7 0.8	- - -					12~15	左回り巻き上げ 基部幅4.2~4.5cm 紐幅 2.5~2.6cm 斜方向の指整形	橙色	DP116 底~体部 凸帯下側のナデ雑 透孔は穿孔後ナデ
					B A'	B A'	- -	- -	14~16								
3	(25.6)	-	17.7	B1.6 C1.1 D1.4	- - -	- - -	12.0 1.1 0.4	22.3 1.1 0.4		- - -							

図版 番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 /2cm	成形と内面の状況	色調	備 考
					下段	上段	1	2	3				
第266図 4	(17.1)	—	18.4	C1.4	—	—	11.8	—	—	12~13	左回り巻き上げ 紐幅2.5cm 斜方向の指整形	にぶい 褐色	DP120 底~体部片 凸帯下側のナデ雑
				D1.3	—	—	0.8	—	—				
				—	—	0.5	—	—					
5	(15.3)	—	17.1	C1.3	14.4	—	11.5	—	—	12~15	左回り巻き上げ 基部幅4.7~4.8cm 紐幅1.4~2.0cm 縦方向の表面と同じハケ目	にぶい 褐色	DP121 底~体部 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				D1.2	—	—	1.3	—	—				
				—	—	0.5	—	—					
6	(19.8)	—	19.0	C0.9	13.7	—	11.3	—	—	15~17	斜方向の指ナデ整形良好	明褐色	DP127 底~体部 凸帯下側のナデ良好 透孔は右回り穿孔後 ナデ
				D1.8	—	—	0.9	—	—				
				—	—	0.8	—	—					
第267図 7	(18.7)	「33.0」	—	A1.0	—	—	(5.0)	—	—	12~15	左回り巻き上げ 紐幅2.5cm 斜方向の指押圧 口唇下6.8~7.4cm幅間を13/2~ 15/2ハケ目横走 巻き上げ痕明瞭	明褐色	DP122 体部~口縁 部片 凸帯下側のナデ雑
				B1.3	—	—	1.1	—	—				
				—	—	0.5	—	—					
8	48.2	「34.2」	19.8	A1.0	15.0	—	12.6	24.0	35.0	14~15	左回り巻き上げ 基部幅4.2~6.4cm 紐幅2.2~2.5cm 斜方向の指押圧 巻き上げ痕明瞭	明褐色	DP114 底~口縁部 凸帯下側のナデ良好 透孔は右回り穿孔後 ナデ
				B1.0	5.2	—	1.4	0.8	1.0				
				C1.2	7.2	—	0.4	0.4	0.4				
9	(22.5)	—	—	A1.1	(5.2)	—	(8.0)	(19.2)	—	13~16	左回り巻き上げ 紐幅2.5cm 斜方向の指ナデ整形 巻き上げ痕明瞭	明褐色	DP125 体部片 凸帯下側のナデ雑 透孔は穿孔ナデ
				B1.1	—	—	1.0	1.0	—				
				C1.3	「5.6」	—	0.3	0.4	—				
10	45.8	「36.0」	19.6	A1.2	24.6	—	11.4	22.0	33.0	12~13	左回り巻き上げ 基部幅5.1~5.6cm 紐幅3.0~3.4cm 斜方向の指ナデ整形 口唇下5cm幅で12/2~11/2cmハケ 目横走 巻き上げ痕明瞭	褐色	DP128 底~口縁部 片 表面口唇下1~1.2 cm幅で横ナデ 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				B1.2	5.2	—	1.0	1.0	1.0				
				C1.0	「6.0」	—	0.4	0.4	0.4				
11	(21.5)	「31.1」	—	A1.1	(0.5)	—	(9.2)	—	—	16~18	斜方向の指ナデ整形 口縁部付近は表面と同じハケ目の 横走	明褐色	DP123 体部片 凸帯下側のナデ雑 透孔は穿孔後ナデ
				B1.2	「6.5」	—	1.4	—	—				
				—	「7.5」	—	0.5	—	—				
12	(16.7)	—	「15.5」	C0.9	—	—	8.0	—	—	11~14	基部幅4.5cm 紐幅1.9cm 縦方向の表面と同じハケ目	明褐色	DP124 底~体部片 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				D1.5	—	—	1.0	—	—				
				—	—	0.5	—	—					
第268図 13	(13.9)	—	—	B0.9	—	—	(7.7)	—	—	13~20	縦方向の13/2~16/2cmのハケ目と 斜方向の指ナデ整形	明褐色	DP126 体部片 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				C1.3	—	—	1.1	—	—				
				—	—	0.5	—	—					
14	(22.8)	—	—	A1.1	—	—	(6.3)	(15.0)	—	11~13	肩部・頸部・花状部の一部 紐幅2.1~2.2cm 斜方向の指ナデ整形 花状部は横・斜走の表面と同じハ ケ目整形	にぶい 橙 色	DP118 体部 凸帯下側のナデ良好 透孔は右回しの切放 し穿孔のまま
				B1.1	—	—	「1.1」	1.0	—				
				C1.3	—	—	0.5	0.4	—				

図版番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2 cm	成形と内面の状況	色調	備考
					下段	上段	1	2	3				
第268図 15	(23.1)	—	—	A1.0 B1.1 C1.2	— — —	— — —	(2.0) 0.8 0.4	(13.0) 1.1 0.5	(22.0) 1.0 1.3	10~13	体部上半から肩部付近までの一部 紐幅2.2~2.5cm 斜方向の指ナデ整形と指頭押圧 巻き上げ痕明瞭	橙色	DP119 体部 凸部下側のナデ雑 2と3凸帯の間のハ ケ目上に「○」印が付 されている

### 第1号古墳出土形象埴輪観察表

図版番号	種別・部位	形態、成形技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
第268図 16	形象埴輪 鶏 首～頭	首から上部の破片で、口ばしと鶏冠の一部が欠損している。首はほぼ垂直に立ち、頭・顔部は横を向いている。目は棒状工具で穿孔している。 外面ハケ目整形後、鶏冠と肉垂を貼付けて全面にナデ整形をしているが、一部にハケ目が残っている。内面は指ナデ整形。	細砂・雲母を多量、砂粒を少量含む。焼成は良好。	橙色	DP129

### 第1号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第269図 17	壺 須恵器	B(10.7)	胴下半部から半球状に立ち上がり、胴部中央部に最大径をもってそこからつばまり、頸部でくの字状になり、外反して開いている。	胴部・頸部内面右回転利用の水挽き。胴部外面絞込みの後、右回転利用の回転範ナデ整形。	砂粒 灰黄褐色 普通	5% P114

## 第2号古墳(第270・271・272図)

### (1) 古墳の現状

本墳は、C3区を中心に、オノ谷に面したオノ谷上台地の西側の傾斜部に位置している。本墳の占地している部分は、平坦部から谷に至る緩斜面であり、その先20m程の西側は急斜面の崖になっている。本墳の北東側は、貝原塚町と長峰町を結ぶ旧阿波街道といわれる北西～南東に延びている道路に面し、道路と墳丘の間はほぼ平坦になっていて墳丘へ登れる状況になっている。この墳丘の周囲は道路側を短辺とする長方形に地境的な小溝が掘り廻らされ、墳丘の周囲はかつて畑として耕作されていた様子を見せている。南西側は半円形状の塊を伏せたような状況を呈し、墳丘の最高点となり、そこには「宅地開発公団の三角点(28.653m)」が設置されている。

### (2) 古墳の構造

#### <墳丘>

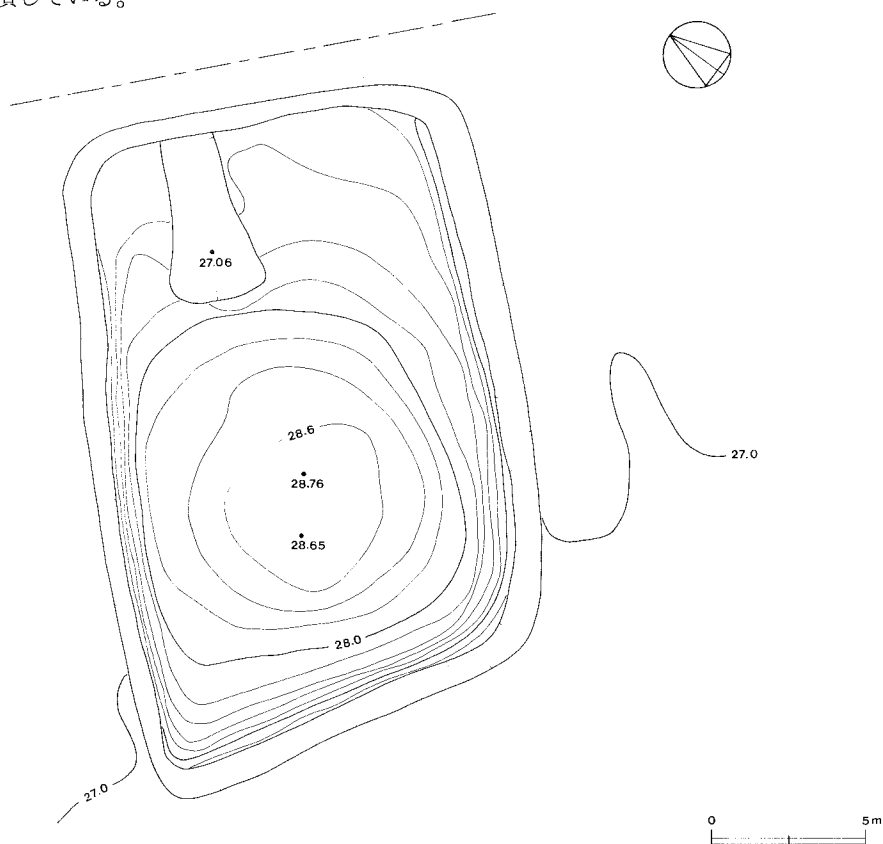
墳丘は調査前に測量を実施した結果、最も高い標高は三角点の北東側で28.78mであった。等高線はほぼ円形に廻っている。畑との比高は1.78mである。

調査は東～西、南～北、それに道路と直角に交差するような幅1mのベルト3本を×状に設定して、ベルトの部分を残す形で表土から分層発掘をした。その結果、封土は、墳丘端部が削平されていて、旧表土層とともに残っていたのは長方形の12×8.7mの範囲であった。それは褐色のローム土の上に20～25cmの旧表土層があり、その上面に薄い草木灰と焼土がほぼ一面に見られる。

これは、或る程度墳丘の残っていた第1・3・17号古墳にも見られたが、墳丘を築く際に火を使った様相を示すものである。その上に封土は、黒褐色土、極暗褐色土・暗褐色土・褐色土や、周溝を掘った際のローム土を、ほぼ平行に1.2～1.3m盛り上げて築いている。西側の一部は墳丘中心部に向かってやや皿状に低くなっている。形状は墳丘と周溝から判断して円墳であったと判断される。規模は北東～南西が長く周溝の内側で22.1m、北西～南東がやや短く20.4mである。

〈周溝〉

周溝は道路に沿って激しい攪乱が広範囲に見られ、道路側の周溝の一部は攪乱溝によって切られている。また、周溝の外側が道路下に有るために調査が出来ない等、不明の部分が多い。周溝は部分的に幅の広・狭を呈し、平面形は墳丘下をほぼ円形状に掘られている。上幅は北西側が傾斜地のため不明確であるが最も広くて7.1m、西側が削平されていて最も狭く1.6m、下幅は0.5～4.3mである。深さは、北側0.6m・東側0.4m・南東側0.6m・南側0.4m・西側0.5m・北西側0.6mである。壁面はロームで、墳丘側が溝底からほぼ垂直気味に、外側が溝底からゆるやかに立ち上がっている。溝底は、道路側が凹凸が激しい他はゆるい起伏を呈し、標高は南側で25.05m、北側で26.66mである。覆土は、多量のローム粒子を含む黒褐色土・暗褐色土等が良く締まって堆積している。



第270図 第2号古墳墳丘図







### (3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。なお、墳丘端部に旧表土層を取り囲むようにコの字状に土坑が26基、道路側の周溝内に5基掘られているが、それらの覆土は多量のローム粒子や腐朽した草木片等を含む軟らかいもので、周溝の覆土とは色調や締まり具合等も著しく異にし、ごく新しい様相を呈している。これらのことから、本墳と係わりは全くないと思われる。

### (4) 古墳からの出土遺物 (第273図)

墳丘中央部からやや西側の旧表土中から古墳時代後期と思われる第273図3の甕形土器片、その近くから木葉痕をもつ1の弥生式土器の底部、東側から須恵器の小片、その他土師器の胴部片少量が出土している。また、道路側に設定したベルト内の上層からは古墳時代後期と思われる2の坏形土器片が出土している。

第2号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第273図 1	壺 弥生式土器	B (5.7) C 8.6	底部は平坦で、鮮明な木葉痕がある。胴下半部は、底部から直線的に外傾している。胴部外面には付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形であるが剥離が激しい。	砂粒 橙色 普通	10% P115
2	坏形土器 土師器	A 13.0 B 4.9	底部は丸底で、体部はやや内彎して斜方向に開いて、そこから外反して口縁部に至る。	底部篋ナデ整形。口縁部内・外面、体部内面ナデ整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	98% P117
3	甕形土器 土師器	A「19.4」 B(15.0)	胴上半部は器厚を一定に保って内彎して頸部に至り、頸部で器厚を減じてくの字状になり、再び器厚を増して直線的に外傾して口縁部に至る。頸部外面に带状の貼付をしている。外面に煤が付着している。	胴部内・外面篋ナデ整形。口縁部内・外面ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	10% P116

### 第3号古墳 (第274・275・276図)

#### (1) 古墳の現状

本墳は、C1区を中心にD1区とD2区にまたがり、宿台地の西側のオノ谷上の台地に位置する。本墳の範囲だけが、東側にある宿台地から離れて残丘状になっている。また、西側から南側にかけては、ごく近年に周溝底よりも低く土取り整地され急崖となっている。北側は本墳より低い山林になっており、開発エリア外である。北東側は低くなっているが、ここには本墳の周溝が残っている。現地地形から判断すると、本墳は当台地の南西縁部に構築されていたものと思われる。

最近まで、墳丘とその西側～南側にかけては、付近の人々の墓域となっており、灌木と杉の大木におおわれていた。近年その墓の移転が行なわれ、その折、墳丘は掘り返されて8ヶ所前後が

凹み、墓石の石片が散乱していた。墳丘の清掃とその実測をした所、第274図のように北・東・西側の一部も南側程ではないがほぼ直線的に土取りされており、南側は波うつように凹凸を呈している。残された墳丘の平面形は、長方形で長辺12m、短辺8m、断面形は台形状である。また、北西側の角付近には、墳丘に登り降りする凝灰岩の石段が東～西に向いて12段ほど設置されている。これらのことから、調査前は方墳であるものと考え、調査は、墳丘の長軸（東～西）に1本、短軸（南～北）に2本と、周溝部に幅1mのトレンチを設定し、これによって墳丘規模・形態等を確認した後、マウンド部分と周溝を完掘することにした。

## (2) 古墳の構造

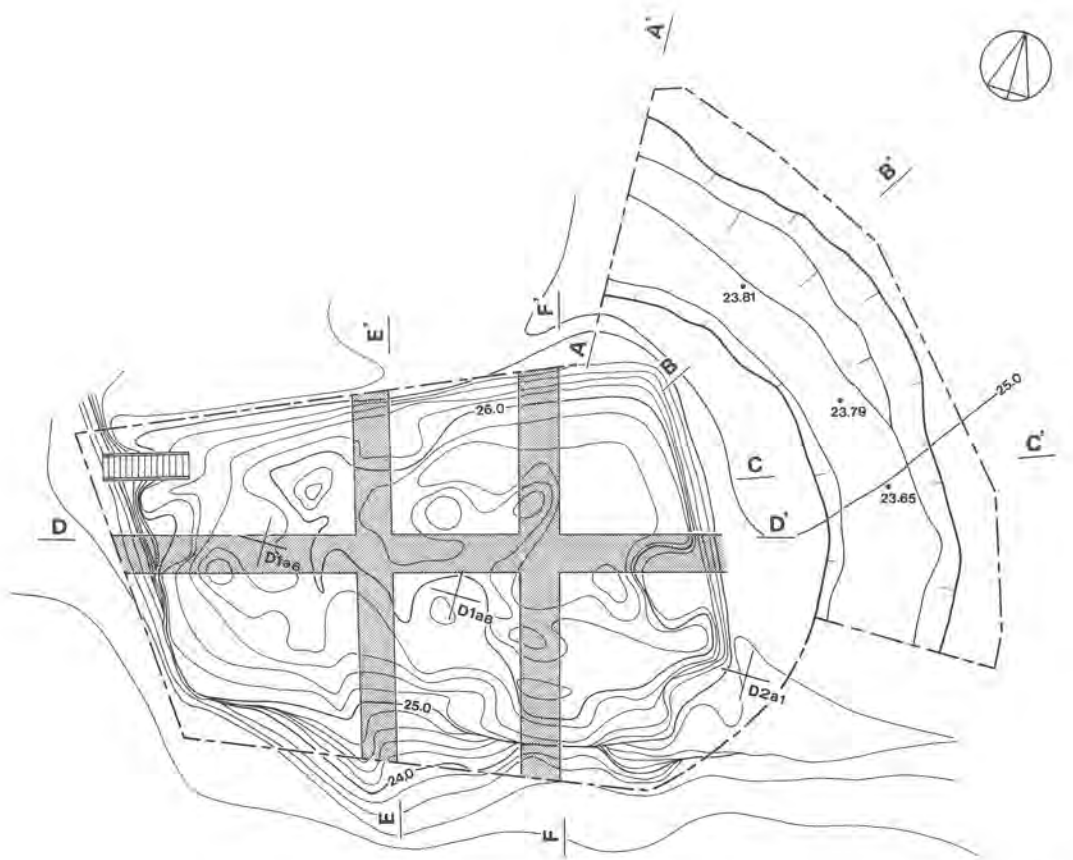
### 〈墳丘〉

トレンチによって確認された盛土の構成は、旧表土層面を平坦にすることなしに、その上に赤褐色・明褐色・褐色のローム土を主とし、一部分に旧表土層を切り込んだ際の少量の暗褐色土が、無意図的に1.3m盛り上げられている。この盛土で攪乱を受けていない所はやや締まりを帯び、一部でつき固めた様相を示す部分も見られる。盛土の大部分は褐色系のローム層土であるが、中央部に旧表土層下までとどく墓移転の際の攪乱穴が見られる（この中には花輪の部品や布切れ・新しい花崗岩の石くず等が旧表土層下にも見られた。）ことや、墳丘の周囲、特に北西側～南西側～南東側にかけては、墳丘上に登り降りした重機の通路があるなど墳丘の内・外とも相当な攪乱を受けていた。調査中に、西側の南～北トレンチの南側部から円筒埴輪列を思わせる埴輪基部が出土した。この面から注意深く表土を除去していくと、ほぼ同じレベル上で、図面上復元したくびれ部と思われる部分から前方部にかけて、8個分と思われる埴輪埋設跡が検出された。それらはいずれも旧表土層からソフトローム層まで掘り込み、埴輪の周囲をつき固めている様子がうかがえる。また、このトレンチの北側からも同様の埴輪列の一部と思われる円筒埴輪の基部1個を検出した。また、北東部の周溝内からも円筒埴輪片が出土している。しかし、墳丘やその他の地点からは埴輪の出土はなかった。

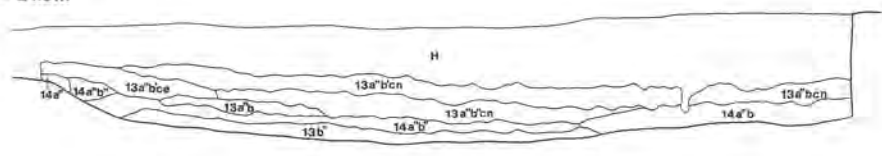
以上のことから、埴輪はくびれ部から前方部にかけてと、後円部の北東側に立てられていたものと思われる。その他は、未調査の部分と土取り等がされていて不明である。周溝から墳丘を想定し、また西側に残された前方部墳丘の一部から図面上で復元推定すると、前方部が比較的長いことから、本墳は帆立貝状の前方後円墳と推定される。

### 〈周溝〉

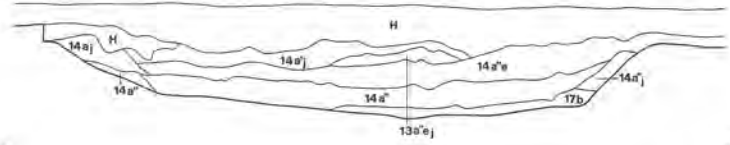
周溝は北東側の後円部側の一部分だけの調査であった。4本のトレンチを入れたところ、覆土中・下層から埴輪片が出土した。周溝は、墳丘側・外側とも波状に屈曲しながら円弧を描いて、平面形は墳丘を取り囲むように扇形状に掘られている。上幅は東側で2.6m、北側で3.6m、下幅は1.9～3.8mで、深さは0.6～0.8mである。溝底はほぼ平坦で、標高は23.55～23.81mである。壁面



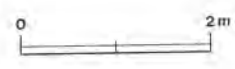
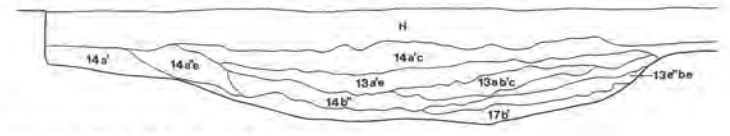
A 24.5m A'



B B'



C C'



第274図 第3号古墳実測・墳丘図-1



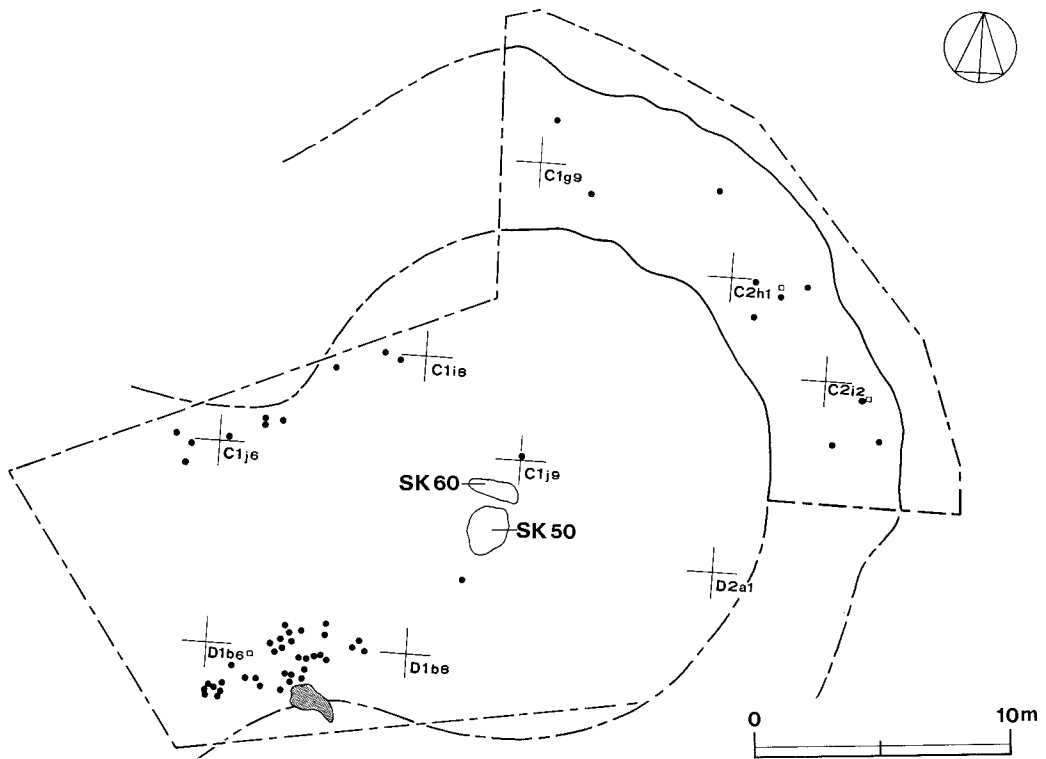
は墳丘側も外側もほとんど同じ形で、溝底からゆるやかに立ち上がっている。覆土は上層に多量のローム粒子を含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子を含む褐色土が良く締まって堆積している。

### (3) 埋葬施設

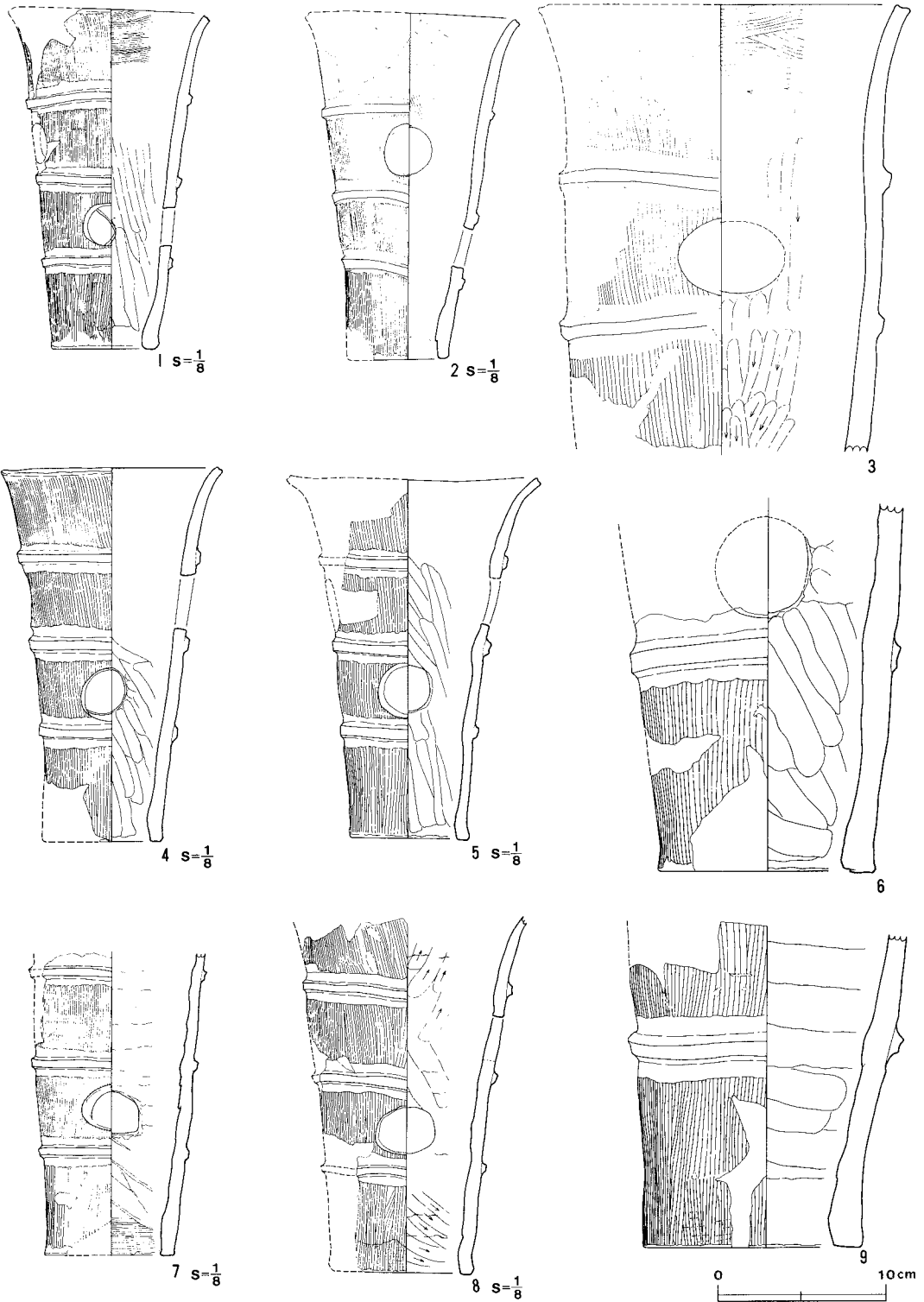
墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。ただ、墳丘中央部の大きく攪乱を受けている部分から腐食した鉄製品の破片が出土したことから、主体部の存在した可能性も大きい。なお、旧表土層下に第50・60号土坑を検出したが、覆土はローム土とあまり差のない褐色土が堆積していることから、本墳の埋葬施設ではなく、本墳より古い土坑と思われる。

### (4) 古墳からの出土遺物（第276・277・278・279・280・281図）

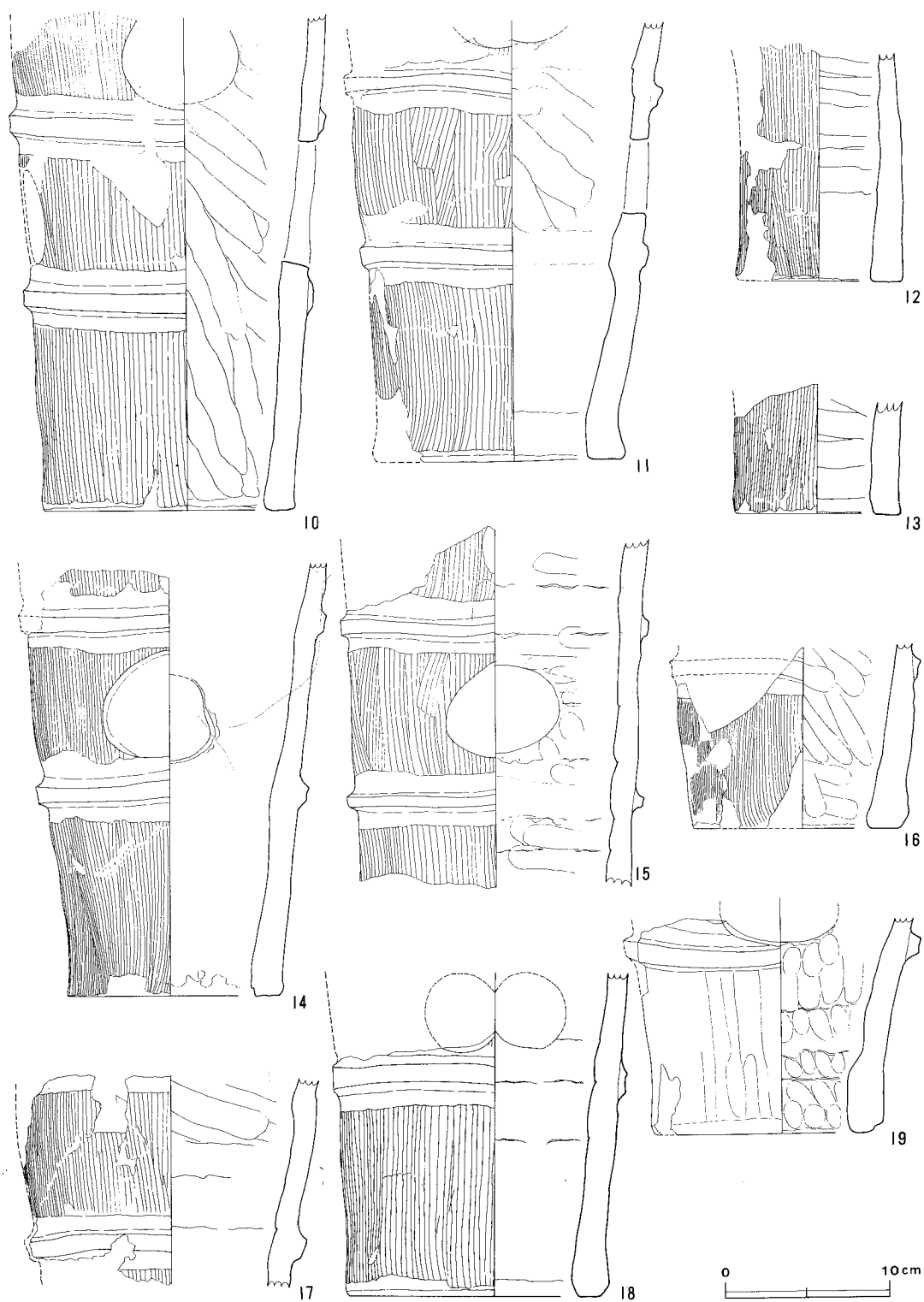
墳丘のくびれ部付近から前方部にかけての旧表土層付近から、円筒埴輪と思われる9個体分の基部、周溝へある程度覆土が堆積した後に、墳丘側でなく周溝内の外側部へ転倒したと思われる埴輪片と鉄製品2点、その他、墳丘中央部から鉄製品1点が出土している。なお、盛土中から縄文時代前期の土器片も少量混じって出土した。



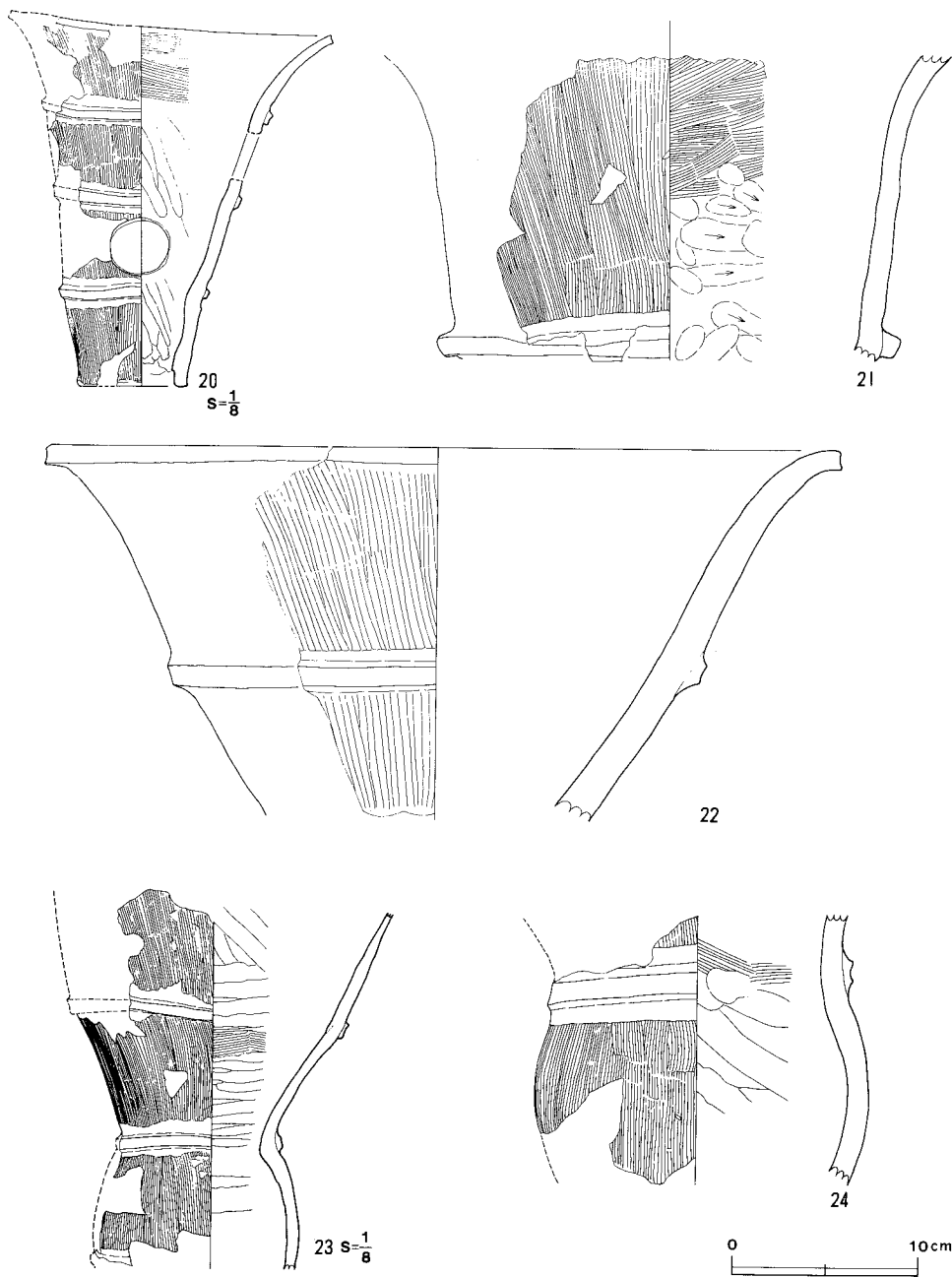
第276図 第3号古墳出土遺物位置図



第277图 第3号古墳出土遺物実測図—1

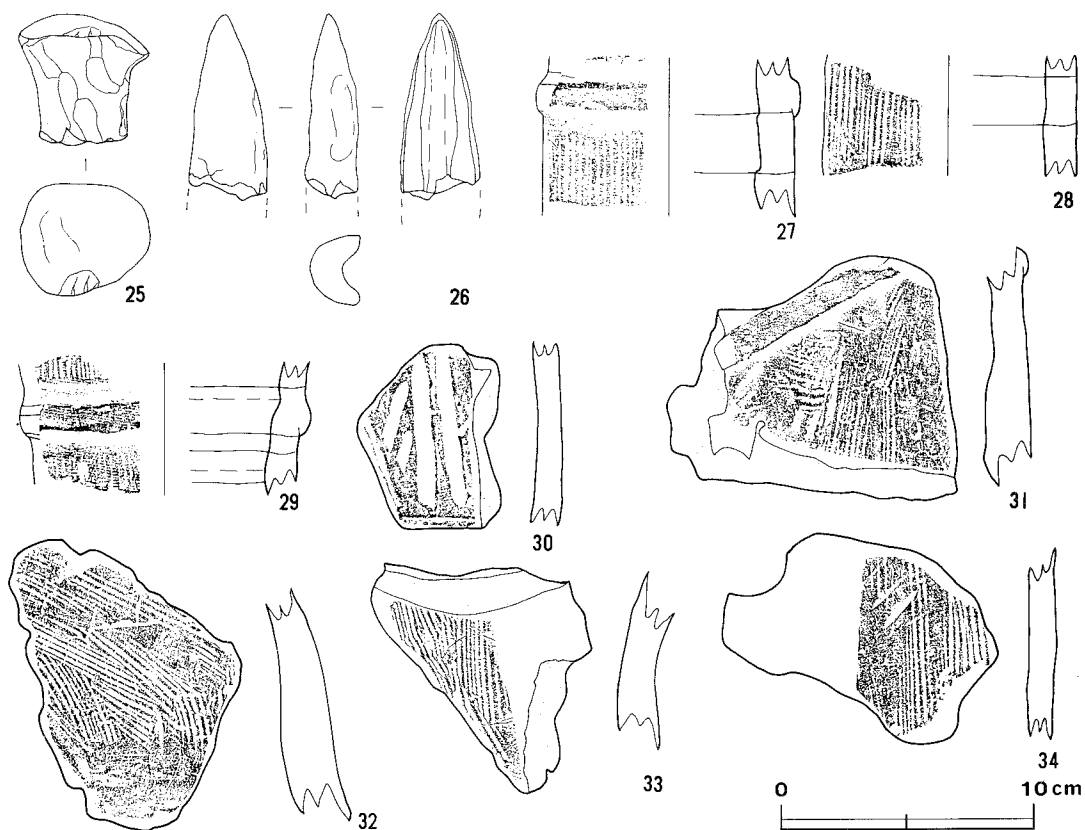


第278图 第3号古墳出土遺物実測図-2

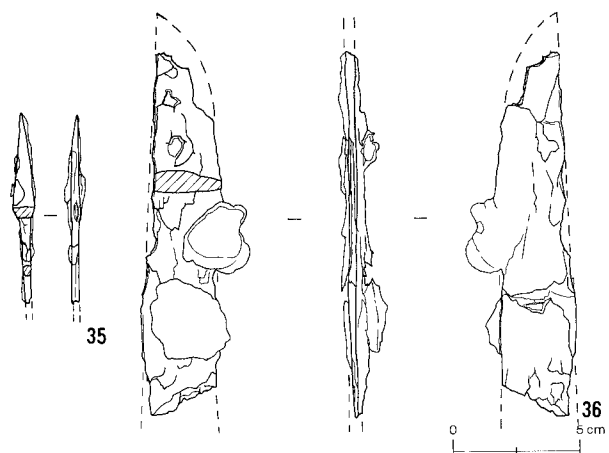


第279图 第3号古墳出土遺物実測図-3





第280图 第3号古墳出土遺物実測・拓影図一 4



第281图 第3号古墳出土遺物実測図一 5

第3号古墳出土円筒・朝顔形円筒埴輪観察表

図版 番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2 cm	成形と内面の状況	色調	備考
					下段	上段	1	2	3				
第277図 1	41.8	「24.4」	13.2	A1.0	12.6	22.3	10.4	20.2	30.8	8~9	左回り巻き上げ 基部幅3.2~3.3cm 紐幅1.5~3.5cm 斜方向の指ナデ整形良好 口唇下5.6~6.7cm幅で表面と同じハケ目横走 ハケ目内に「○」印	明褐色	DP130 底~口縁部 口唇部ハケナデ 表面口唇下1~3.4cm幅で横ナデ 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				B1.4	5.0	5.4	0.8	0.8	1.0				
				C1.4	5.8	6.3	0.4	0.6	0.6				
				D1.4			A	A'	A'				
2	42.4	「26.0」	「12.4」	A1.2	13.0	22.5	9.0	16.8	29.6	8~10	左回り巻き上げ 基部幅3.5~4cm 紐幅2.0~2.5cm 縦方向の指ナデ整形 口唇下9.6~12.5cm幅で表面と同じハケ目斜走 口唇下0.5~0.7cm幅で横ナデ	にぶい 赤褐色	DP132 底~口縁部 口唇部、表面口唇下0.3~0.4cm横ナデ 凸帯下側のナデ良好 透孔は右廻り穿孔後ナデ、表面に煤付着
				B1.4	5.3	6.2	1.2	1.0	1.0				
				C1.2	6.5	5.6	0.4	0.4	0.4				
				D2.0			A	A	A'				
3	(27.3)	「22.5」	-	A1.0	(9.7)	-	(7.8)	(16.6)	-	7~9	左回り巻き上げ 紐幅1.5~3.5cm 縦方向の指ナデ整形良好 口縁下5~6.2cmまで表面と同じハケ目横走	にぶい 橙 色	DP138 底~体部片 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				B1.0	「4.8」	-	0.8	0.8	-				
				C1.4	「6.5」	-	0.4	0.4	-				
							A	A'					
4	45.8	27.0	「14.8」	A1.4	14.7	26.3	13.0	24.0	34.6		基部幅6.3~6.4cm, 紐幅1.5~3cm 斜方向の指ナデ良好の為巻き上げ方向不明 口唇下6.8~7.8cm幅で横ナデ 口縁部で大きく開く	にぶい 橙 色	DP131 表面口唇下0.9~1.2cm幅で横ナデ 凸帯下側のナデ良好 底部表面はわずかにナデ 透孔は右廻り穿孔後ナデ
				B1.6	7.0	7.3	1.0	1.0	0.8				
				C1.4	7.1	7.8	0.6	0.6	0.6				
				D1.6			A	A	A				
5	43.8	「30.6」	「14.6」	A1.2	15.3	24.8	13.0	23.2	33.8	9~12	左回り巻き上げ 基部幅4.2~5cm 斜方向へ指ナデ整形良好	にぶい 橙 色	DP133 底~口縁部 凸帯下側のナデ良好 透孔は右廻り穿孔後ナデ
				B1.2	6.8	(5.5)	1.2	1.0	1.0				
				C1.0	6.9	(7.0)	0.6	0.8	0.6				
				D1.2			A	A	A				
6	(22.7)	-	13.0	C1.6	15.5	-	13.5	-	-	6~7	輪積である 紐幅2.7~3.4cm 斜方向の指ナデ整形 輪積痕明瞭	にぶい 橙 色	DP142 底~体部 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				D1.5	「6.2」	-	1.1	-	-				
					「5.7」	-	0.3	-	-				
							A						
7	(37.2)	-	16.0	A1.0	14.4	-	12.6	23.2	34.4	8~10	左回り巻き上げ 基部幅5.5~6cm 紐幅1.5~3.0cm, 斜方向窪ナデ整形 巻き上げ痕明瞭 基部に表面と同じハケ目横走	橙 色	DP135 底~体部 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				B1.4	6.0	-	1.0	1.0	1.2				
				C1.6	7.4	-	0.6	0.6	0.4				
				D1.6			A	A	A				
8	(43.8)	-	「16.6」	A1.4	14.5	-	(13.2)	(24.0)	(35.0)	6~8	左回り巻き上げ 基部幅4.9~5cm 紐幅2.2~2.8cm 下半部斜方向の指ナデ整形良好 上半部斜方向の指ナデ不良 基部はナデ整形	にぶい 橙 色	DP153 底~口縁部片 凸帯の下側のナデ良好 基部の表面はハケ目横走後、縦のハケ目整形 透孔は左廻り穿孔後ナデ
				B1.6	6.0	-	0.8	0.8	0.8				
				C1.4	7.0	-	0.6	0.6	0.6				
				D1.8			A'	A'	A'				
9	(19.6)	-	13.2	C1.2	-	-	12.5	-	-	9~10	輪積である 紐幅2.5~4cm 横方向の指ナデ整形 輪積痕明瞭	にぶい 橙 色	DP143 底~体部 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				D1.7	-	-	0.8	-	-				
					-	-	0.5	-	-				
							A						
第278図 10	(30.5)	-	15.5	B1.0	-	25.4	13.0	24.0	-	6~7	基部幅3.1~5.2cm 斜方向の指ナデ整形非常に良好のため、巻き上げ方向、紐幅等不明	浅黄橙	DP139 底~体部 凸帯の下側のナデ良好 底部付近の表面をわずかにナデ 透孔は穿孔後ナデ
				C1.0	-	「7.2」	1.0	1.3	-				
				D1.5	-	「6.0」	0.4	0.4	-				
							A	A'					

図版 番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2cm	成形と内面の状況	色調	備考
					下段	上段	1	2	3				
第278図 11	(27.1)	-	「15.4」	B1.3	25.6	-	12.5	22.5	-	7~8	左回り巻き上げ 基部幅6.2~6.4cm 斜方向の指ナデ良好のため紐幅 不明	明褐色	DP140 底~体部 凸帯下側のナデ良好 底部付近の表面にわずかにナデ
				C1.4	-	-	0.9	0.7	-				
				D1.8	-	-	0.5	0.5	-				
12	(14.5)	-	10.1	D1.5	-	-	-	-	-	10~11	左回り巻き上げ 基部幅2.4~2.9cm 紐幅2.3~3.1cm 斜方向の指ナデ整形	橙色	DP146 台部
				-	-	-	-	-	-				
				-	-	-	-	-	-				
13	(8.0)	-	10.0	D1.5	-	-	-	-	-	9~12	斜方向の指ナデ整形良好のため、 基部幅、紐幅等不明	明褐色	DP147 台部
				-	-	-	-	-	-				
				-	-	-	-	-	-				
14	(25.9)	-	13.4	B1.1	14.8	-	12.5	23.0	-	12~14	斜方向の指ナデ整形良好のため、 基部幅、紐幅等不明 底部付近をわずかにナデ整形	にぶい 黄褐色	DP141 底~体部 凸帯下側のナデ良好 透孔は右・左巡り穿孔後 ナデ
				C1.1	7.0	-	0.9	0.9	-				
				D1.7	7.7	-	0.5	0.4	-				
15	(22.0)	-	-	A1.5	(8.0)	-	(5.3)	(15.9)	-	7~8	左回り巻き上げ 紐幅1.5~2.5cm 斜方向の指ナデ整形 巻き上げ痕明瞭	橙色	DP151 体部片 凸帯下側のナデ非常に良 好 透孔は右巡り穿孔後ナデ
				B1.3	5.9	-	0.6	0.7	-				
				C1.5	6.8	-	0.6	0.4	-				
16	(11.4)	-	12.6	C0.9	-	-	10.0	-	-	12~13	基部幅4.1~5.8cm 斜方向の指ナデ整形	褐色	DP148 底部 凸帯下側のナデ非常に良 好
				D1.9	-	-	(0.8)	-	-				
				-	-	-	0.3	-	-				
17	(12.8)	-	-	B1.5	-	-	(2.5)	-	-	7~8	左回り巻き上げ 紐幅2.9~3.3cm 斜方向の指ナデ整形	浅黄 褐色	DP150 体部片 凸帯下側のナデ良好
				C1.5	-	-	1.0	-	-				
				-	-	-	0.7	-	-				
18	(20.0)	-	16.0	C1.3	15.2	-	(13.5)	-	-	6~7	左回り巻き上げ 基部幅4~5.7cm 紐幅2~2.5cm 斜方向の指ナデ整形	橙色	DP144 底部 凸帯下側のナデ非常に良 好 透孔は穿孔後ナデ
				D1.9	「4.9」	-	1.0	-	-				
				-	「4.5」	-	0.4	-	-				
19	(13.3)	-	13.6	C1.1	11.6	-	11.5	-	-	なし	左回り巻き上げ 基部幅3~3.8cm 紐幅1.8~1.9cm 縦方向の指押圧と指ナデ整形	明褐色	DP145 底部 凸帯下側のナデ良好
				D1.5	-	-	1.1	-	-				
				-	-	-	0.7	-	-				
第279図 20	38.6	「34.8」	11.4	A1.2	11.8	-	10.0	20.0	30.0	10~12	基部幅2.1~3.8cm 斜方向の指ナデ良好のため巻き 上げ方向、紐幅不明 口唇下10.1 cm幅で表面と同じハケ目横走 口縁部で大きく開く	にぶい 橙 色	DP134 底~口縁部 口唇部、表面口唇下わず かにナデ 凸帯下側ナデ雑
				B1.4	6.2	-	1.0	1.0	0.8				
				C1.2	「6.6」	-	0.4	0.4	0.4				
				D1.4	-	-	A'	A	A'				
21	(18.4)	-	-	A1.1	-	-	(1.0)	-	-	13~14	上部は6.1~12.1cm幅で表面と同 じハケ目整形 下側は丁寧な斜 方向のナデ整形のため、巻き上げ 方向、紐幅等不明	にぶい 橙 色	DP152 体部片 凸帯下側のナデ良好 透穴は穿孔後ナデ
				-	-	-	1.0	-	-				
				-	-	-	0.8	-	-				
22	(19.9)	42.2	-	A1.7	-	-	(7.5)	-	-	7~9	花状部の一部 丁寧なナデ整形のため紐幅等は 不明	明褐色	DP137 口縁部片 ほぼ中間部に凸帯が回 り、凸帯下側のナデ良好 口唇部のナデも良好
				B1.8	-	-	1.3	-	-				
				-	-	-	0.6	-	-				

図版番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2 cm	成形と内面の状況	色調	備考
					下段	上段	1	2	3				
第279図 23	(40.6)	—	—	A1.2 B1.0 C1.2	— — —	— — —	(15.4) 1.0 0.6 A'	(26.0) 1.0 0.4 A'	— — —	9~10	体部上半と花状部の下半部 左回り巻き上げ 紐幅1.8~2.1cm 斜方向指ナデ整形 巻き上げ痕 明瞭 胴部と花状部は接合している 体部上半の上端に表面と同じハケ目横走	橙色	DP136 体~口縁部 凸帯下側のナデ良好
24	(14.5)	—	—	B1.0 C1.2	— — —	— — —	(11.3) 1.0 0.4 A	— — —	— — —	11~13	体部上半と思われる 左回り巻き上げ 紐幅2.2~2.3cm 斜方向の指ナデ整形 凸帯部のある位置より上は表面と同じハケ目斜走	橙色	DP149 体部 凸帯下側ナデ良好

### 第3号古墳形象埴輪観察表

図版番号	種別・部位	形態、整形技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
第280図 25	人物埴輪 佩刀	人物埴輪の左側腰部に装着されていたと推定される。現存部は柄の部分である。断面は楕円形で、柄頭は倒卵形を呈す。柄頭表面はナデ整形。裏面は指押え。	細砂・少量のスコリアを含む。焼成は良好。	橙色	DP236
26	形象埴輪 動物	耳片と思われる。つけ根は幅広く、先端は尖り、彎曲している。内・外面ともナデ整形。	細砂・少量のスコリアを含む。焼成は良好。	橙色	DP235
27	形象埴輪 台部	台部片である。凸帯がありその上下が彎曲している。外面ハケ目整形、その後凸帯を廻らし、凸帯をナデている。内面ナデ整形。	細砂・少量のスコリアを含む。焼成は良好。	浅黄 橙色	DP230
28	形象埴輪 台部	台部片である。彎曲している。外面ハケ目整形。内面ナデ整形。	細砂・少量のスコリアを含む。焼成は良好。	橙色	DP231
29	形象埴輪 台部	台部片である。凸帯がありその上下が彎曲している。外面ハケ目整形、その後凸帯を廻らし、凸帯をナデている。内面ナデ整形。	細砂・少量のスコリアを含む。焼成は良好。	浅黄 橙色	DP233
30	形象埴輪 不明	部位不明であるがやや彎曲している。径0.6cm程の竹管状工具で上下、斜方向に直線的な沈線を引いている。外面ナデ整形後、沈線を施している。内面ナデ整形。	細砂・少量のスコリアを含む。焼成は良好。	浅黄 橙色	DP234
31	形象埴輪 不明	円筒状の破片で、曲面に帯状の粘土紐を斜に貼付けている。外面ハケ目整形後、帯状の粘土紐を付してナデている。内面横ナデ整形。	細砂・少量のスコリアを含む。焼成は良好。	橙色	DP227
32	形象埴輪 不明	接合部らしい破片。外面ハケ目整形後、一部ナデている。内面指ナデ整形。	砂粒・少量スコリアを含む。焼成は良好。	橙色	DP228
33	形象埴輪 不明	接合部付近である。外面ハケ目整形後、ナデ整形をしている。外面指ナデ整形。	細粒・少量のスコリアを含む。焼成は良好。	浅黄 橙色	DP232
34	形象埴輪 不明	円孔が半分程残っている破片。円筒状であるが台部ではない。外面ハケ目整形。内面筋ナデ整形。	砂粒・スコリアを含む。焼成は良好。	橙色	DP229

#### 第4号古墳（第282図）

##### (1) 古墳の現状

本墳は、A2・A3区における瘦峰台地の平坦部に位置している。南側8m程には第5号古墳が隣接している。また、北東側周溝と第44号住居跡・第62号土坑、東側周溝と第3号土坑、南東側周溝と第3号住居跡、南南西側周溝と第2号住居跡、西北西側周溝と第1号住居跡が重複している。

##### (2) 古墳の構造

###### 〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、墳形はほぼ円墳である。規模は、周溝の内側で長径11.3m・短径11.3mである。標高は26.29mである。

###### 〈周溝〉

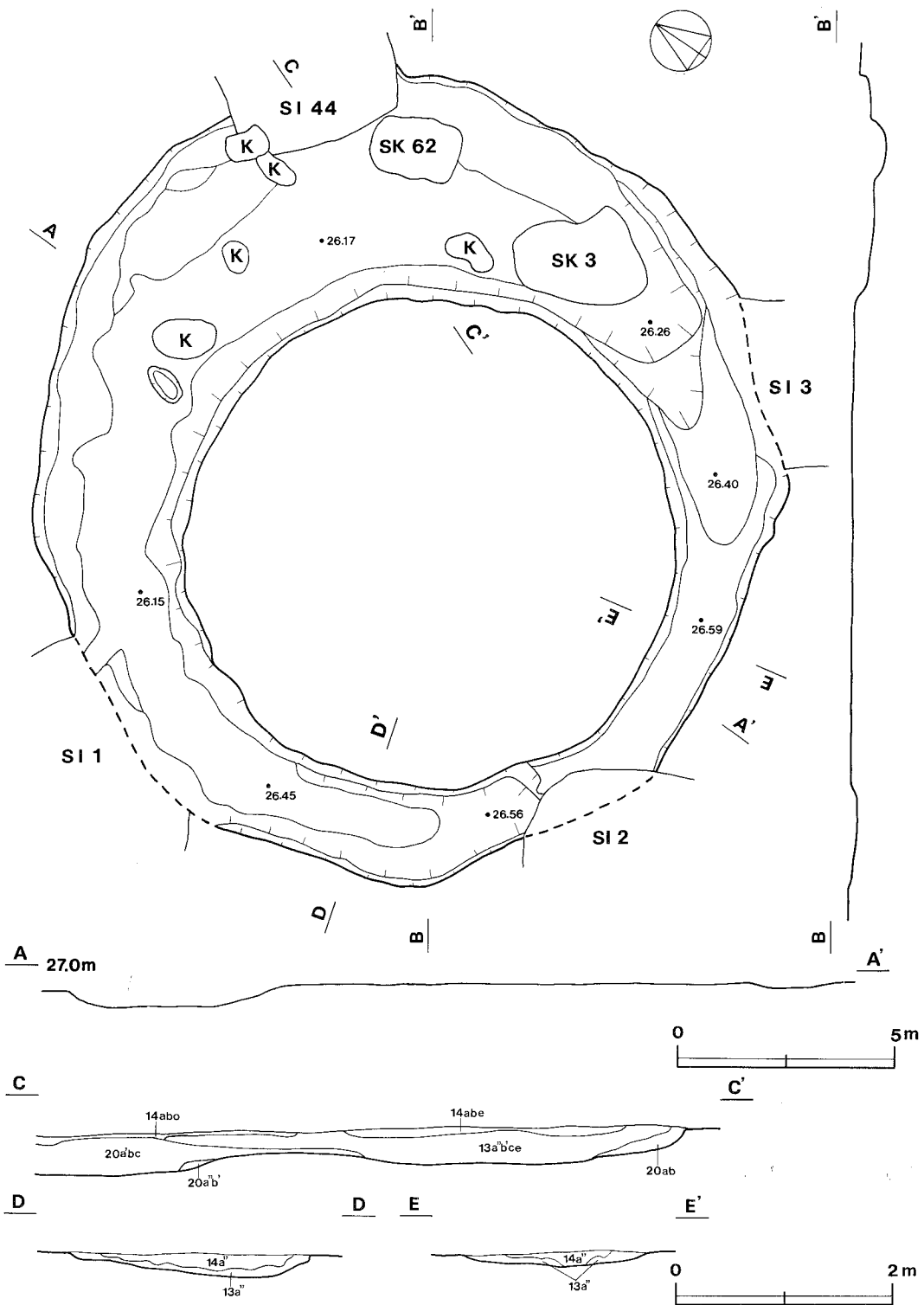
周溝の外側部が4軒の住居跡と重複しているが、残っている周溝は北側が広く南側が狭い。また、平面形は墳丘を取り囲むように円形状に掘られている。周溝の上幅は1.6～5.2m、下幅は1.1～4.2mである。深さは南側が浅くて0.1m、北側が深く0.5mである。壁面はロームで、墳丘側は溝底から外傾し、外側はゆるやかに立ち上がっている。溝底はほぼ平坦で標高は26.01～26.60mである。覆土は多量のローム粒子を含む暗褐色土を主体にして良く締まって堆積している。重複している住居跡との新旧関係は、土層を観察すると住居跡の覆土を切って周溝を造っていることがわかり、本墳の方が新しい。

##### (3) 埋葬施設

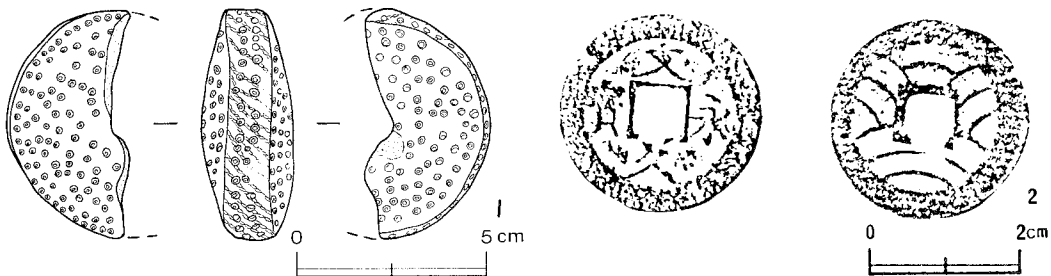
墳丘下と周溝内を精査したが、検出されなかった。なお、第3・62号土坑は周溝の覆土を切って造られているので土坑の方が新しい。さらに、北側に4か所攪乱穴があるが、本跡とは無関係である。

##### (4) 古墳からの出土遺物（第283図）

第3号住居跡との重複部の周溝底から弥生式土器片5点、第283図2の古銭1点（文久永宝（1863））が北東側の周溝内覆土から1の土製紡錘車が出土した。しかし、本跡に関係あるものとは思われない。



第282図 第4号古墳実測図



第283図 第4号古墳出土遺物実測・拓影図

### 第5号古墳 (第284図)

#### (1) 古墳の現状

本墳は、A2・A3・B2・B3区における瘦峰台地の平坦部に位置している。北側8m程には第4号古墳が隣接している。また、北北東側周溝内で第9号土坑と重複している。さらに、本墳の墳丘上に北西～南東へ延びる小路が通っており、その部分までが調査エリアのため南側は未調査である。なお、地権者の話によると、かつてここには塚が有りその上に大木が立っていたと言う。また、畑耕作のためその周囲へ根切り溝を掘ったり、耕作していた時に埴輪片などが出土し、この塚は古墳ではないかと思ひ、花を供えたりしていたという。

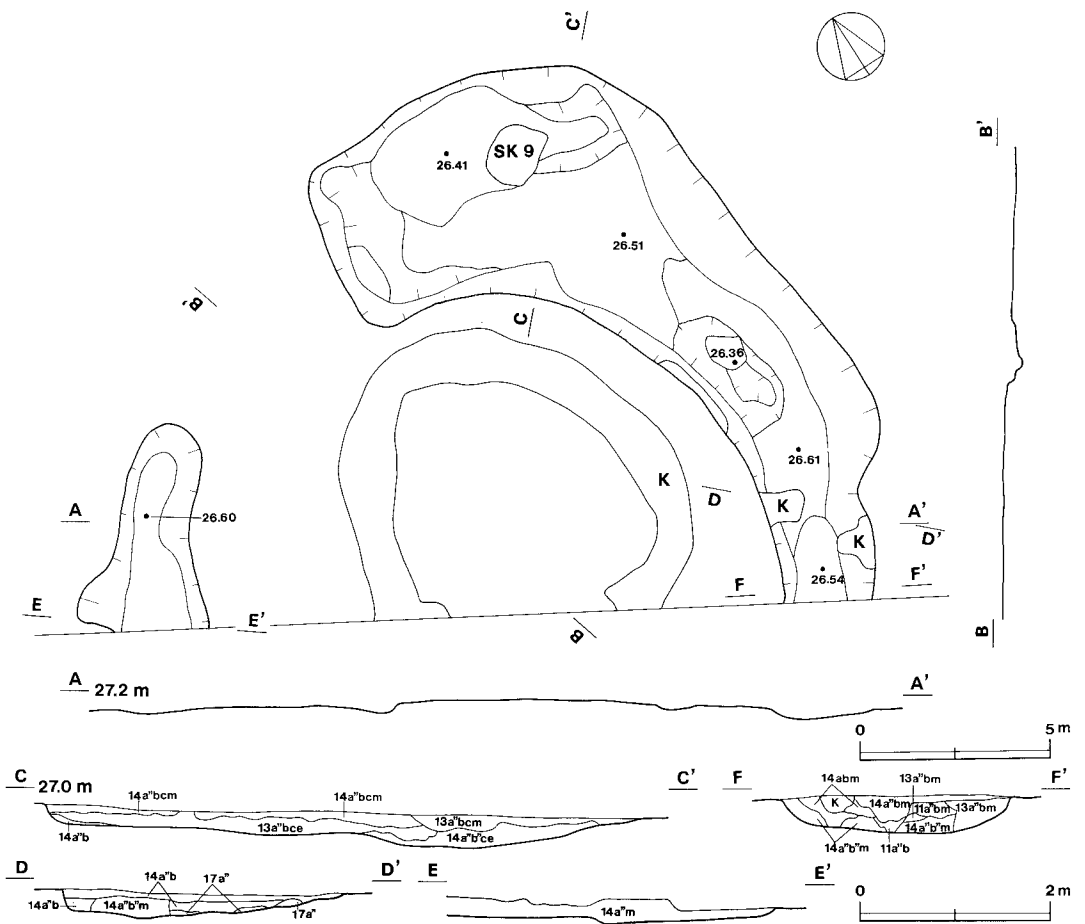
#### (2) 古墳の構造

##### 〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。また、墳丘下には根切り溝が周溝のように廻っているが、本墳とは全く無関係である。周溝はほぼ北側で幅5.5mがブリッジ状になっている。なお、南側の一部が未調査であるが、調査した周溝から判断すると、墳形は円墳と思われる。規模は周溝の内側で15m前後を測り、標高は26.96mである。

##### 〈周溝〉

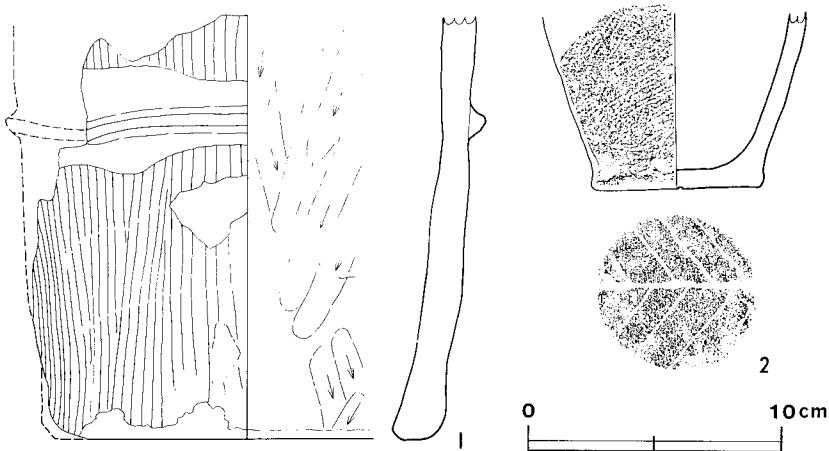
周溝は北側がブリッジ状に掘り残されているが、ここを除いて幅の広い部分と狭い部分、さらに波状に屈曲している部分があるものの、平面形は墳丘を取り囲むように小路まで円形状に掘られている。なお、北側にブリッジが認められ、それは周溝からなだらかに掘り残され、墳丘側が狭くなっている。狭い部分は5.4mである。ブリッジの東側の周溝は幅広く、西側は幅が狭い。周溝をよく観察するといずれも周溝の溝底付近らしい様相を呈しており、削平前は左右が続いていた可能性もある。いずれにしても現況で確認できる周溝の上幅は2.3～6.2m、下幅は1.3～3.6mである。壁面はロームで墳丘側は外傾し、外側はゆるやかに立ち上がっている。溝底はほぼ平坦で



第284図 第5号古墳実測図

浅く、標高は26.36~26.61mである。周溝の覆土は、多量のローム粒子を含む褐色土が主体で、黒

褐色土と暗褐色土が混じって堆積している。



第285図 第5号古墳出土遺物実測・拓影図



(3) 埋葬施設

墳丘下と周溝内を精査したが、検出されなかった。なお、周溝内にある土坑は、覆土を観察すると比較的新しいものであり、周溝内覆土を切って造られているもので埋葬施設ではない。

(4) 古墳からの出土遺物 (第285図)

ブリッジに近い幅広い周溝底から第285図1の円筒埴輪片、東側の小路に近い周溝底から、2の弥生式土器の壺の胴下半部と思われるもの1点が出土した。

第5号古墳出土円筒・朝顔形円筒埴輪観察表

図版番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2 cm	成形と内面の状況	色調	備考
					下段	上段	1	2	3				
第285図 1	(17.0)	—	15.0	C1.3	—	—	12.5	—	—	6~7	左回り巻き上げ 紐幅3.4~3.9cm 斜方向の指ナデ整形 摩滅している	明褐色	DP154 底~体部片 凸帯下側のナデ比較的良好 透孔は穿孔後ナデ
				D1.4	—	—	0.5	—	—				
				—	—	—	0.6	—	—				

第5号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第285図 2	壺 弥生式土器	B (7.0) C 6.5	底部は平底で小さいが、鮮明な木葉痕がある。胴下半部は底部から直線的に外傾して立ち上がっている。胴部外面には付加条の縄文を施している。	内面はナデ整形であるが、剝離が激しい。	砂粒 浅黄橙色 普通	20% P118

第6号古墳 (第286図)

(1) 古墳の現状

本墳は、A3区を中心に、瘦峰台地の平坦部に位置している。南南西側6m程には第7号古墳が隣接している。

(2) 古墳の構造

〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。また、墳丘下の中程から南側には耕作によるトレンチャーの跡が見られる等削平と攪乱が著しく進んでいる。周溝にもトレンチャーの痕跡が見られる。墳丘の形状は、周溝の東側と南西側の2か所が途切れているが、調査した周溝から判断すると、東西にやや長い円墳であると思われる。規模は、墳丘を推定したラインから計測して、周溝の内側で長径 (ほぼ東~西) 9.3m・短径 (ほぼ南~北) 8.3mである。標高は26.66mである。

〈周溝〉

周溝は幅の広い部分と狭い部分があり、平面形は墳丘を取り囲むように円形状に掘られている。

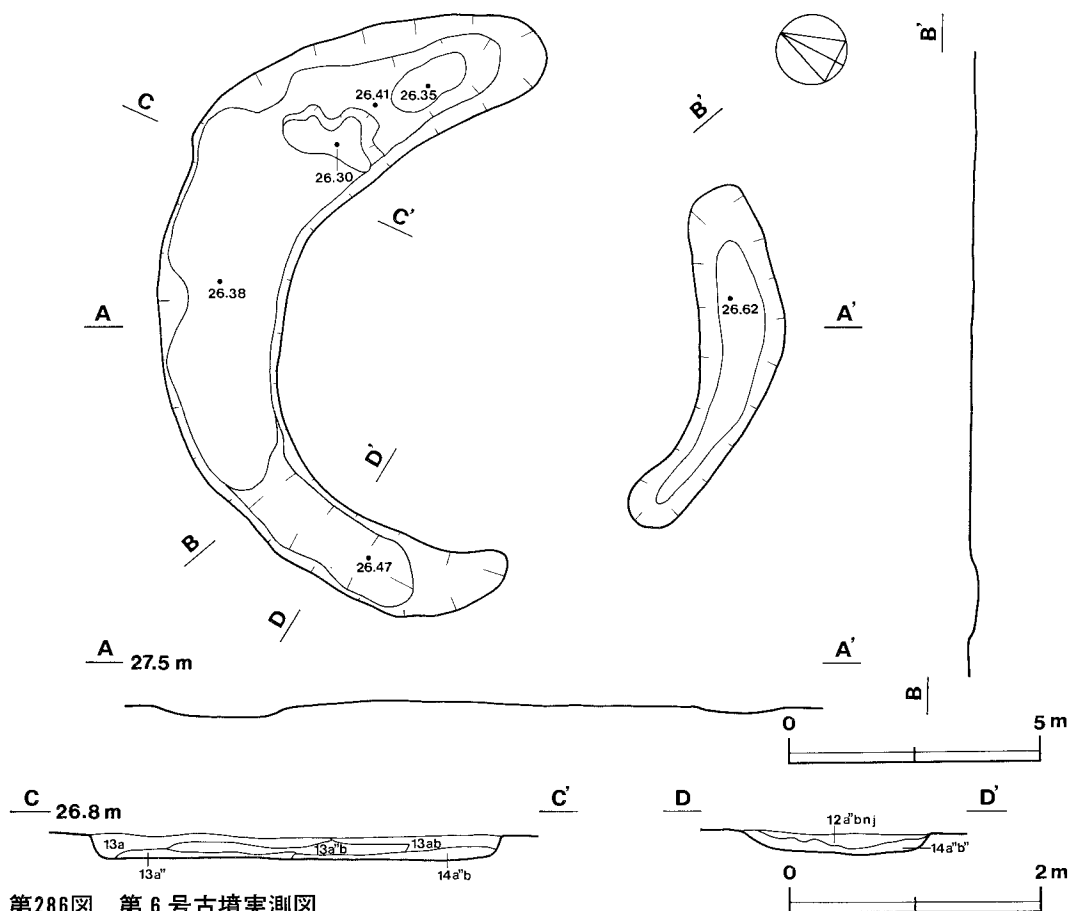
なお、ほぼ東側と南西側がブリッジ状に周溝からなだらかに掘り残されているが、削平が著しいため、ブリッジであったかどうかは判断しかねる。しかし、当古墳群のブリッジをもつ古墳から類似性を求めれば、第32・35号古墳の長径とブリッジにおける関係から判断して、東側がブリッジで、周溝の両端が丸味をもって幅4m程が掘り残されている。南西側は溝底までが削平されてしまい、ブリッジのようになってしまったものと推定される。周溝の上幅は南側で1.0m、北側で3.2m、下幅は0.5~3.6mである。深さは0.1~0.2mでごく浅い。壁面はロームで、ゆるやかに立ち上がり、周溝底付近だけが削平されずに残ったものと思われる。溝底はほぼ平坦で、標高は26.35~26.47mである。覆土は多量のローム粒子を含む暗褐色土と褐色土が締まって堆積している。

### (3) 埋葬施設

墳丘下と周溝内を精査したが、検出されなかった。

### (4) 古墳からの出土遺物

西側ブリッジ付近から弥生式の土器片13点と、東側ブリッジ付近から土師器の高坏形土器の脚部片1点等が出土した。しかし、いずれも本墳に関係あるものとは思われない。



第286図 第6号古墳実測図

第7号古墳 (第287図)

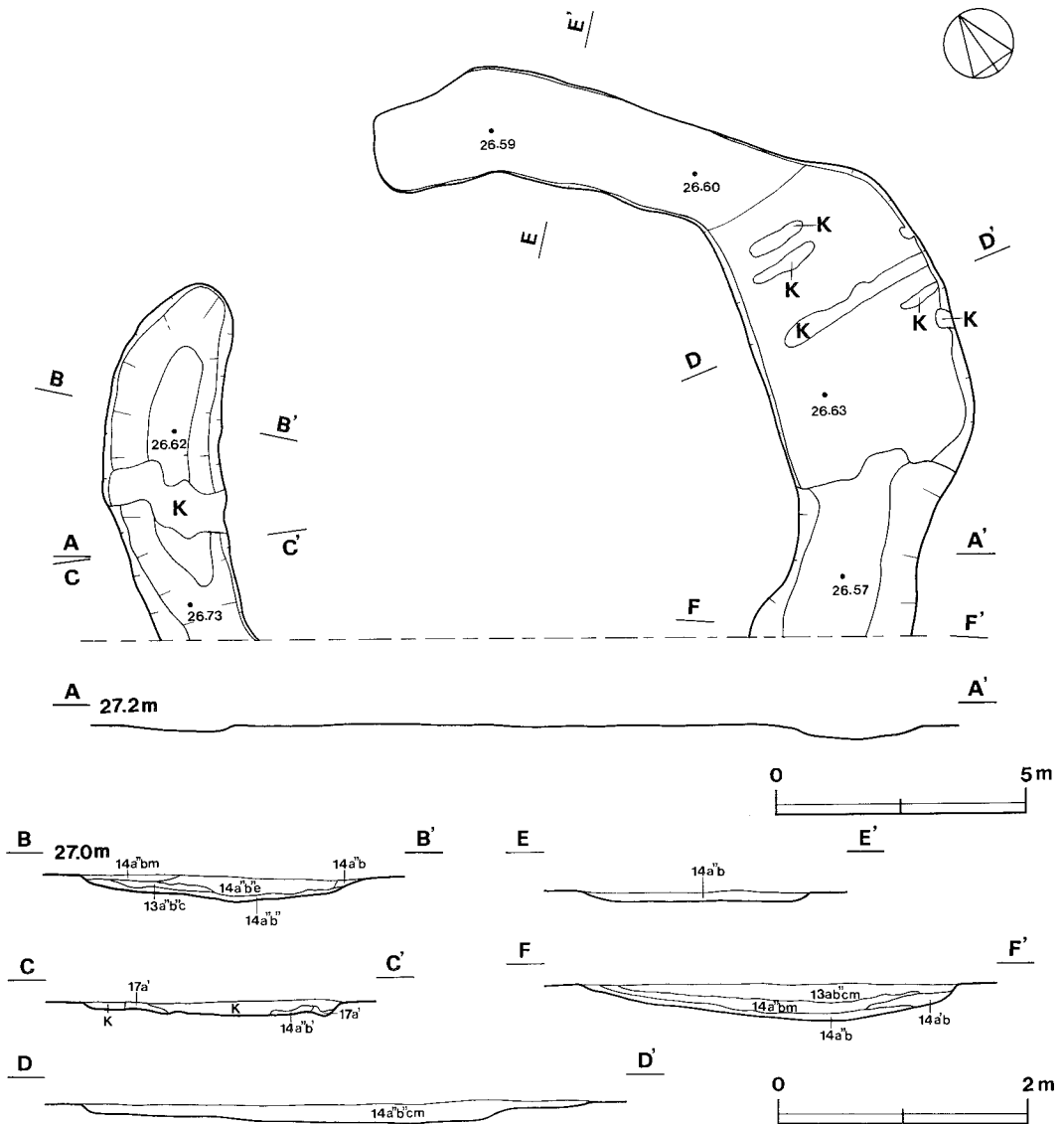
(1) 古墳の現状

本墳は、B3区の瘦峰台地の平坦部に位置している。東側3m程には第9号古墳が隣接している。本墳の南側1/3程は生活道路の下に延びているため未調査である。

(2) 古墳の構造

〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。また、東側は大きく後世の攪乱を受け、周溝が幅広く、墳丘側も直線的になっている。調査



第287図 第7号古墳実測図

した周溝から判断すると、墳形は円墳と思われる。規模は、ほぼ北側がブリッジ状に周溝が途切れ、南側が調査不可能であるが、調査した周溝の内側で最大径を計測すると径11.5mである。標高は26.82mである。

#### 〈周 溝〉

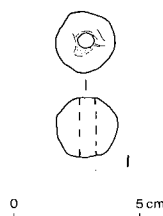
周溝は攪乱部を除けばほぼ一定の幅であり、平面形は墳丘を取り囲むように円形状に掘れられている。なお、ほぼ北側がブリッジ状に周溝の両端が丸味をもって4m程が掘り残されている。調査できた周溝の上幅は1.7~3.1m、下幅は1.5~1.8mで、深さは0.3~0.7mである。壁面はロームで、墳丘側・外側ともゆるやかに立ち上がっている。溝底はほぼ平坦で標高は26.57~26.73mである。周溝の覆土は、多量のローム粒子を含む暗褐色土と褐色土が締まって堆積している。

### (3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。

#### (4) 古墳からの出土遺物 (第288図)

東側の周溝内の攪乱を受けている辺りから球状土錘1点が出土した。



第288図 第7号古墳出土  
遺物実測図

### 第8号古墳 (第289図)

#### (1) 古墳の現状

本墳は、A4・B4区における、瘦峰台地の平坦部に位置している。南側12m程には第10号古墳が隣接している。西側周溝内には第63号土坑が重複している。

#### (2) 古墳の構造

##### 〈墳 丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、墳形は円墳である。規模は、南~北がやや長くて周溝の内側で12.9m、東~西が12.5mである。標高は26.30mである。

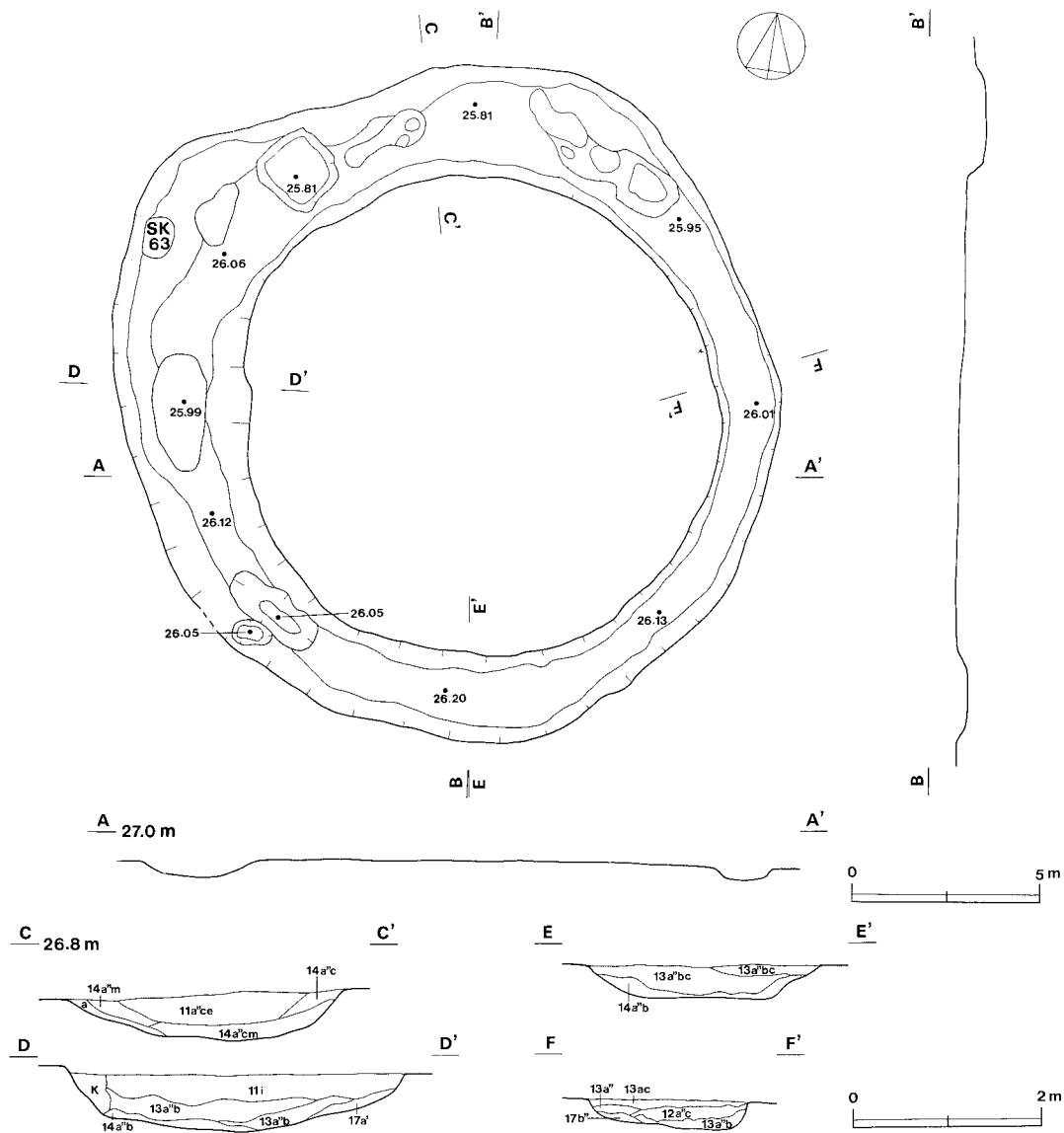
##### 〈周 溝〉

周溝は東側で幅が狭く、西側によるに従って幅が広がっている。平面形は墳丘を取り囲むように円形に掘られている。周溝の上幅は1.4~4.1m、下幅は0.9~3.5mである。深さはおおむね東側が浅くて西側が深く、0.3~0.6mである。壁面はロームで、東側の墳丘側だけが溝底から垂直気味に外傾し、他は墳丘側・外側ともなだらかに立ち上がっている。溝底は東側がほぼ平坦で、

西側がやや凹凸を示している。標高は北側が低く25.70m，南側が高く26.20mである。周溝の覆土は、多量のローム粒子を含む黒褐色土・極暗褐色土を主体として暗褐色土と褐色土等が締まって堆積している。

(3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。なお、西側周溝内にある第63号土坑は、覆土が非常に軟かくごく新しい遺構と思われる。

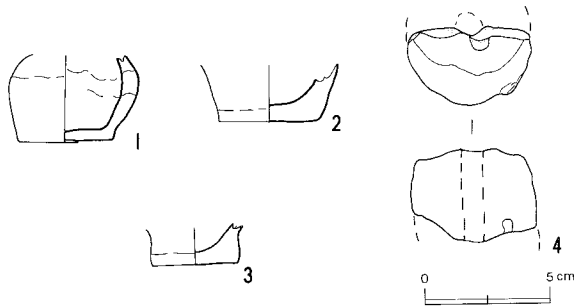


第289図 第8号古墳実測図

(4) 古墳からの出土遺物

(第290図)

周溝内から流れ込みと思われる弥生式土器の小片、土師器の小片が多量に出土した。また、南西側周溝底部から第290図1～3の土師器のミニチュア土器3点、4の土製紡錘車1点が出土した。



第290図 第8号古墳出土遺物実測図

第8号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第290図 1	ミニチュア 土器 土師器	B (3.5) C 3.8	底部は中央部がやや凹む平底である。胴部は底部から半球状に立ち上がっている。内面に輪痕が見られる。	底部・胴部内・外面とも篋削り整形。粗雑な作りである。	砂粒 浅黄橙色 普通	50% P119
2	ミニチュア 土器 土師器	B (2.3) C 3.9	底部は平底である。胴下半部は底部から外傾して立ち上がっている。	内・外面とも篋削り整形。	砂粒 橙色 普通	15% P120
3	ミニチュア 土器 土師器	B (1.5) C 3.4	底部は平底である。胴下半部は底部から外傾気味に立ち上がっている。	内・外面とも篋削り整形。	砂粒 橙色 普通	7% P121

第9号古墳 (第291図)

(1) 古墳の現状

本墳は、B3・B4区における瘦峰台地の平坦部に位置している。西側3m程には第7号古墳が隣接している。周溝部はいたる所に溝底にとどく攪乱を受けている。

(2) 古墳の構造

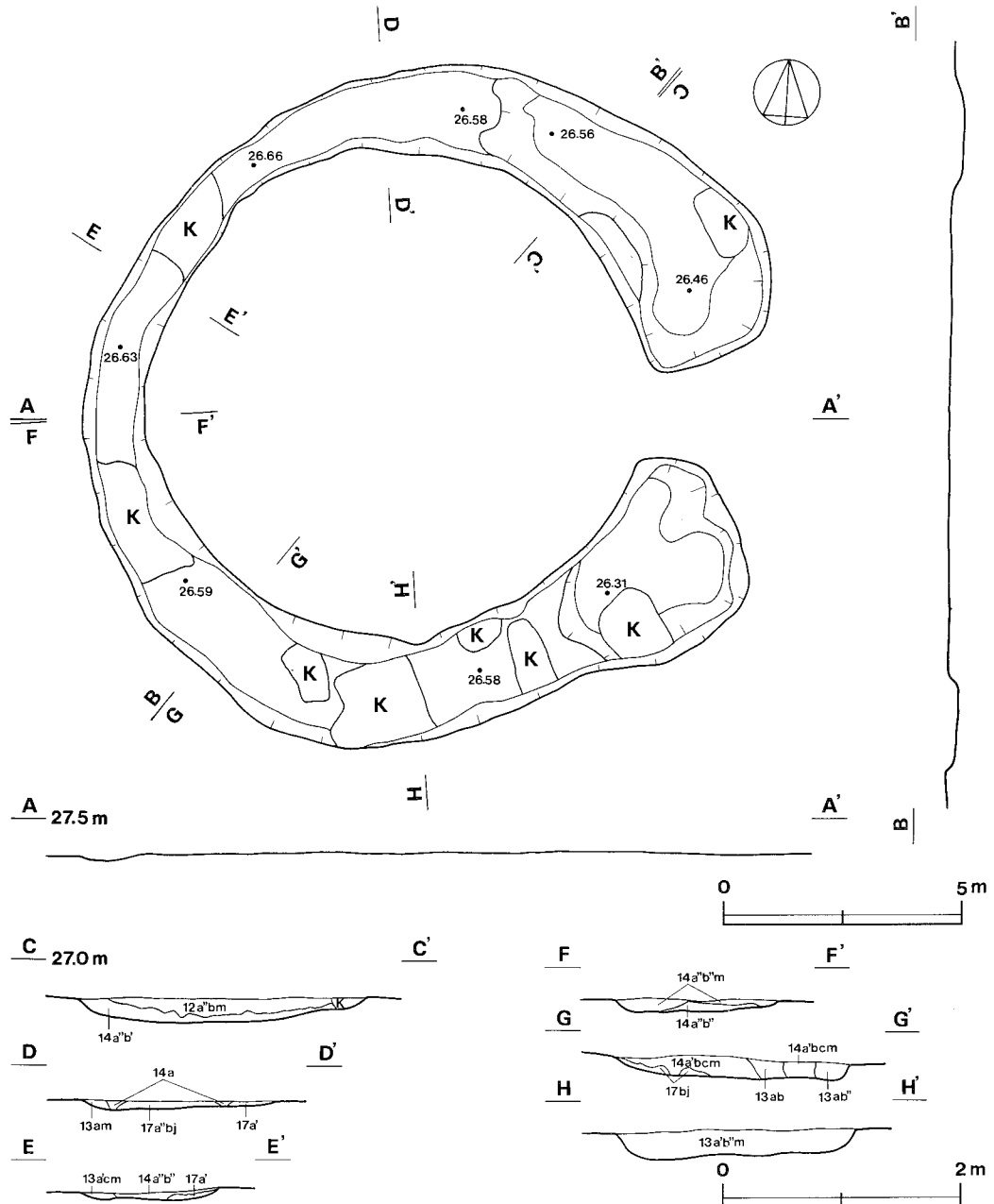
〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、墳形は円墳である。規模は東側で幅1.9mがブリッジ状に周溝が途切れているがブリッジ側がやや長く、墳丘を推定したラインから計測して、周溝の内側で東～西が10.8m、南北が10.2mである。標高は26.82mである。

〈周溝〉

周溝は、東側がブリッジ状に掘り残されており、西側が幅狭く、東側に至るに従って幅が広くなり、特にブリッジの両側は極端に広がっている。平面形は墳丘を取り囲むように円形状に掘

られている。周溝の上幅は1.2~3.3m, 下幅は0.9~3.5mである。深さは0.2~0.7mで、特にブリッジの両側が幅が広く深い。壁面はロームで、墳丘側がやや急角度で溝底から立ち上がっている部分があるが、大部分は墳丘側も外側も溝底から外傾、もしくはゆるやかに立ち上がっている。溝底は、攪乱が多く、小さい凹凸が随所に見られるが、標高は26.31~26.66mである。周溝の覆土は、溝底付近に多量のローム粒子を含む極暗褐色土と暗褐色土の堆積が見られるものの、大部分の所は、多量のローム粒子を含む褐色土が主として堆積している。



第291図 第9号古墳実測図

### (3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。

### (4) 古墳からの出土遺物

周溝の南側底部付近の2地点から土師器の高环形土器の坏部片と脚部片が別々に出土している。他に、礫1点、ブリッジの東側から木葉痕のある弥生式土器の底部片1点、その他土師器の小片が少量出土している。

## 第10号古墳（第292図）

### (1) 古墳の現状

本墳は、B4区の瘦峰台地の平坦部に位置している。西北西側5m程には第9号古墳が隣接している。本墳上の東側を南～北に第6号溝が延びている。しかし、この溝は周溝よりも高いレベルに構築されており、本墳より新しい。

### (2) 古墳の構造

#### 〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平され、また、耕作によるトレンチャーの跡が東～西一面に残っている。調査した周溝から判断すると、墳形は円墳である。規模は、南側で幅3.2mがブリッジ状に周溝が途切れているが、ブリッジ側がやや長いので墳丘を推定したラインから計測して、周溝の内側で、南～北が8.2m、東～西が8.1mである。標高は26.86mである。

#### 〈周溝〉

周溝はブリッジを除いてほぼ同じ幅であり、平面形は墳丘を取り囲むように円形状に掘られている。周溝の上幅は0.9～1.4m、下幅は0.4～0.9mである。深さは0.2～0.7mで、おおむね東側と西側が深い。また、南側はブリッジ状に周溝の両端が丸味をもって周溝底からゆるやかに掘り残されている。壁面はロームで、墳丘側・外側とも溝底から外傾して立ち上がっている。溝底は耕作によると思われる攪乱が随所に見られ、小さな凹凸を示しているが、標高は26.56～26.75mである。覆土は北側が少量のローム粒子を含む暗褐色土であるが、他は上層に攪乱土が多く、その下に少量のローム粒子を含む褐色土が締まって堆積している。

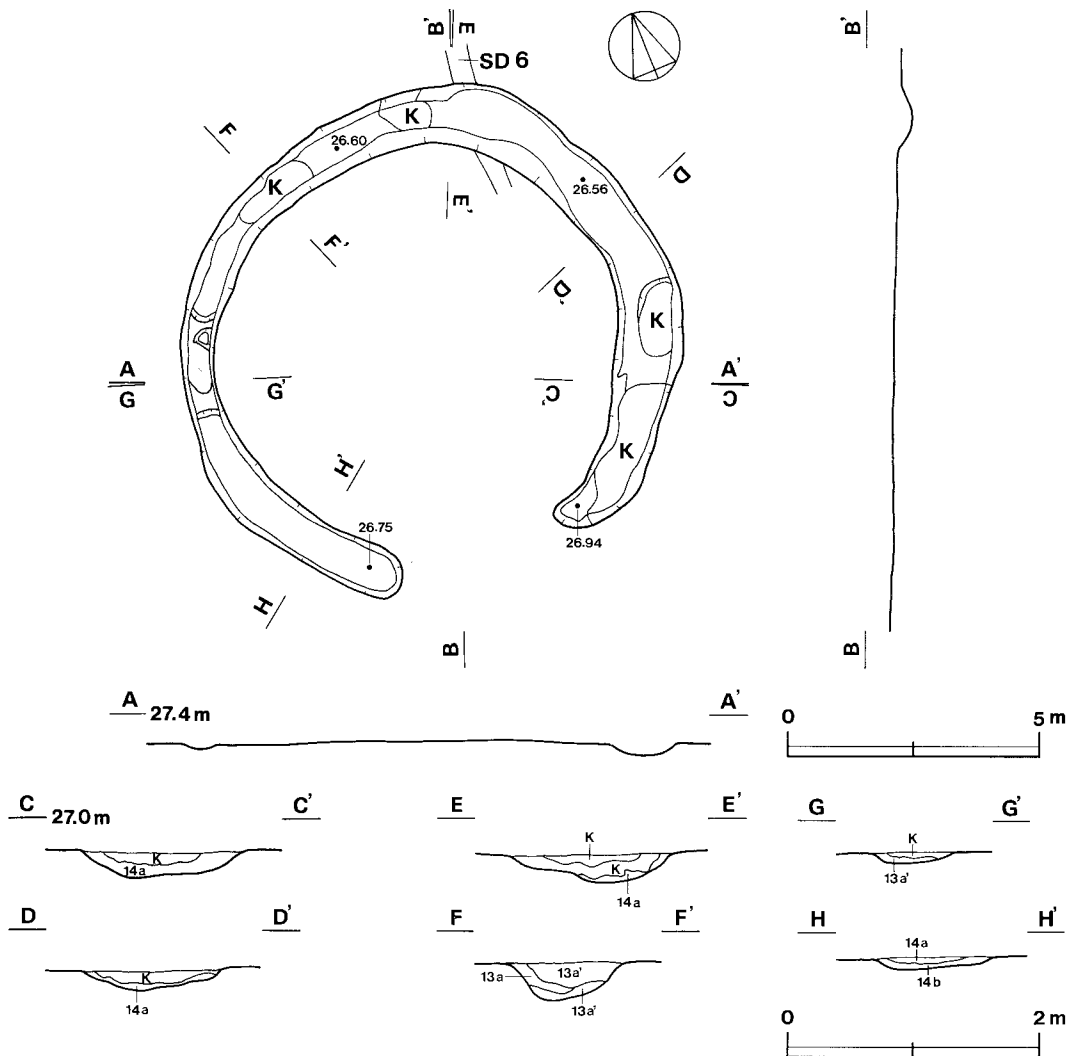
### (3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。

### (4) 古墳からの出土遺物

西側周溝の攪乱を受けた覆土中から、土師器の高环形土器の脚部片と甕形土器の口縁部片、東側周溝から流れ込みと思われる弥生式の土器片1点が出土した。





第292図 第10号古墳実測図

第11号古墳 (第293図)

(1) 古墳の現状

本墳は、C6区の平坦部から傾斜部に移る宿台地の東縁に位置している。本墳の東側は、ゆるく傾斜しており、その先は急傾斜の崖になって宿二ノ谷となる。本墳の南東側15mには第1号古墳が隣接している。

(2) 古墳の構造

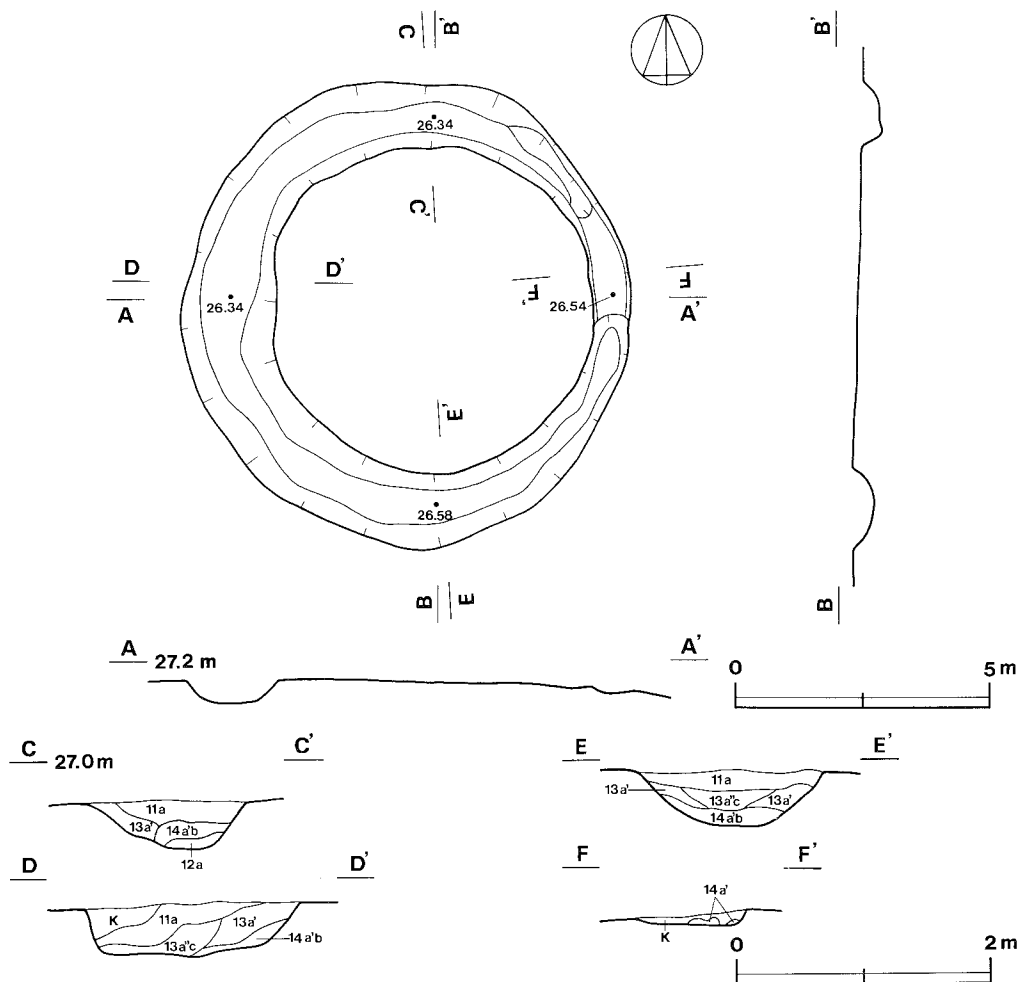
〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明であ

る。調査した周溝から判断して、墳形は円墳である。規模は、周溝の内側で、南～北がやや長く6.5m、東～西は6.4mである。標高は南側が高くて26.92mである。

〈周溝〉

周溝は西側が幅広く、東側が狭いが、平面形は墳丘を取り囲むように円形状に掘られている。図面上で、墳丘下を平坦にして東側の周溝を壁面なりに上部へ延長してみると、その幅はほぼ西側の幅と一致することから、本来は平坦な面に墳丘が作られ、周溝が掘られていたものの、墳丘と周溝・その周辺の東側が低く流出してしまったものと思われる。検出した周溝の上幅は西側が広くて1.9m、東側が狭くて0.8m、下幅は0.3~1.1mである。深さは上幅に比較してやや深く、0.3~0.5mを掘っている。なお、意識的に東側の溝底を墳丘に沿って、幅2.1mの部分で0.2m前後溝底からゆるやかでやや高目にブリッジ状に掘り残している。壁面はロームで、おおむね墳丘側・外側ともに溝底から直線的に外傾して立ち上がっている。溝底は東側の一部を除いてほぼ平坦で



第293図 第11号古墳実測図

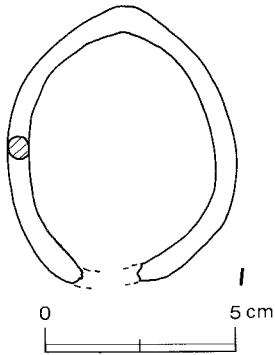
標高は26.38～26.48mである。覆土はローム粒子を含む黒褐色土と暗褐色土を主体として、褐色土等がよく締まって堆積している。

### (3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。

### (4) 古墳からの出土遺物（第294図）

周溝内の覆土上面から第294図1の銅製品の他に土師器片が少量出土したが、本跡との係わりはないものと思われる。



第294図 第11号古墳出土  
遺物実測図

## 第12号古墳（第295・296図）

### (1) 古墳の現状

本墳は、C4・C5区を中心に、瘦峰台地の南部と宿台地との境界部の平坦地に位置している。東側32mには第11号古墳、南東側4m程には第13号古墳が隣接している。また、東側周溝の一部と墳丘の一部の上を南～北に延びる農道が、南西側周溝上を北西～南東へ伸びる旧阿波街道が走っている。なお、この2本の道路をつなぐように東～西にかけて第8号溝が本墳の周溝部とくびれ部付近を通って掘られ、さらに、南～北に延びる道路に沿って第9号溝が周溝から道路下へ延びている。

### (2) 古墳の構造

#### 〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、墳形は前方部がやや短い帆立貝状の前方後円墳である。規模は周溝の内側で全長（北西～南東）26.8m（周溝部を含めて全長36.2m）、後円部径19.6m・推定幅20.0m、前方部長7.2m・推定最大幅9.2m・推定くびれ部幅7.0mとなり、前方部長対後円部径の比率は1：2.7である。主軸方向はN-43°-Wを指している。前方部を切っている第8号溝は本墳より新しい地境溝である。標高は27.60mである。

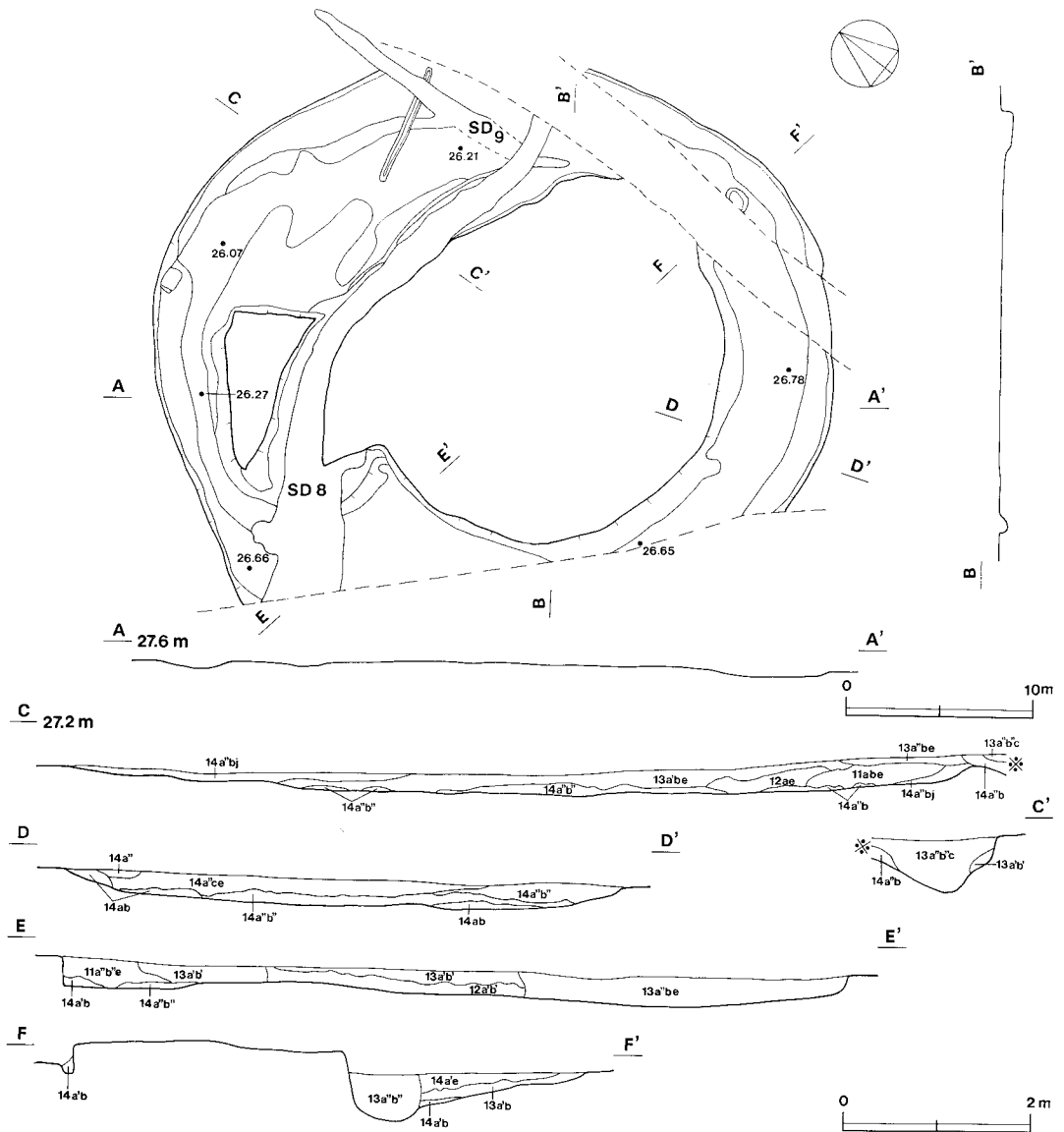
#### 〈周溝〉

周溝の一部が生活道路下であり、また、一部が第8・9号溝に切られ不明な部分があるが、周溝の平面形は、墳丘側が墳丘下の形状に沿って前方後円形状に掘られ、外側は北西～南東にやや長い楕円形に掘られている。周溝の上幅は北側くびれ部付近が広くて推定11.0m、北西側前方部側

付近が狭くて2.6m，下幅で1.5～7.5mである。深さは0.2～0.3mである。溝底はほぼ平坦で標高は南側後円部付近が高く26.9m，そこから北西側前方部が低くなって26.0mで，南側から北西側へゆるやかな傾斜を示している。壁面はロームで，填丘側・外側ともに溝底からゆるやかに立ち上がっている。周溝の覆土は，一部分に暗褐色土が見られるものの大部分が多量のローム粒子を含む褐色土で，比較的締まりを帯びて堆積している。周溝と切り合っている溝はいずれもごく新しいものである。

### (3) 埋葬施設

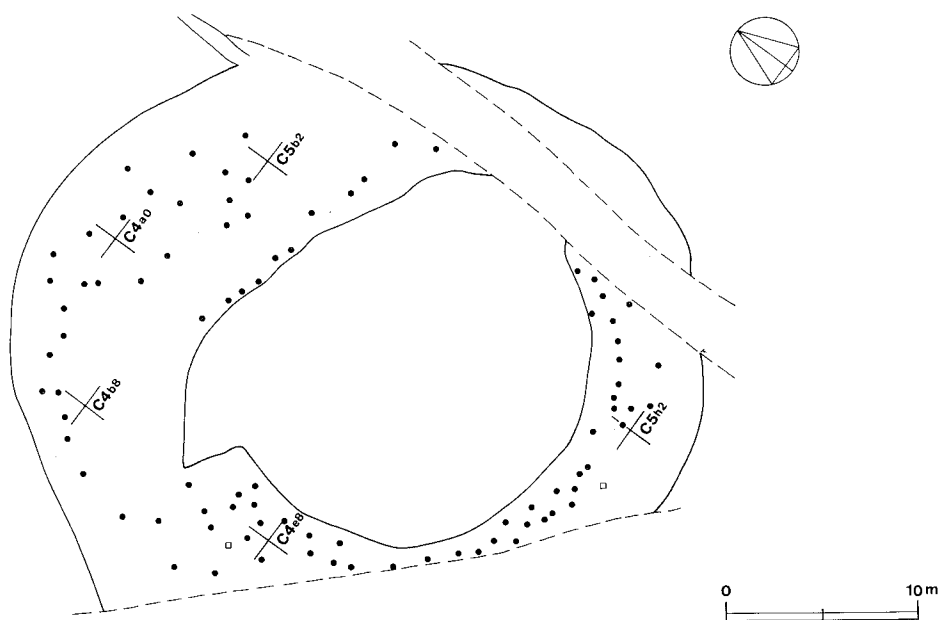
填丘と周溝内を精査したが，検出されなかった。



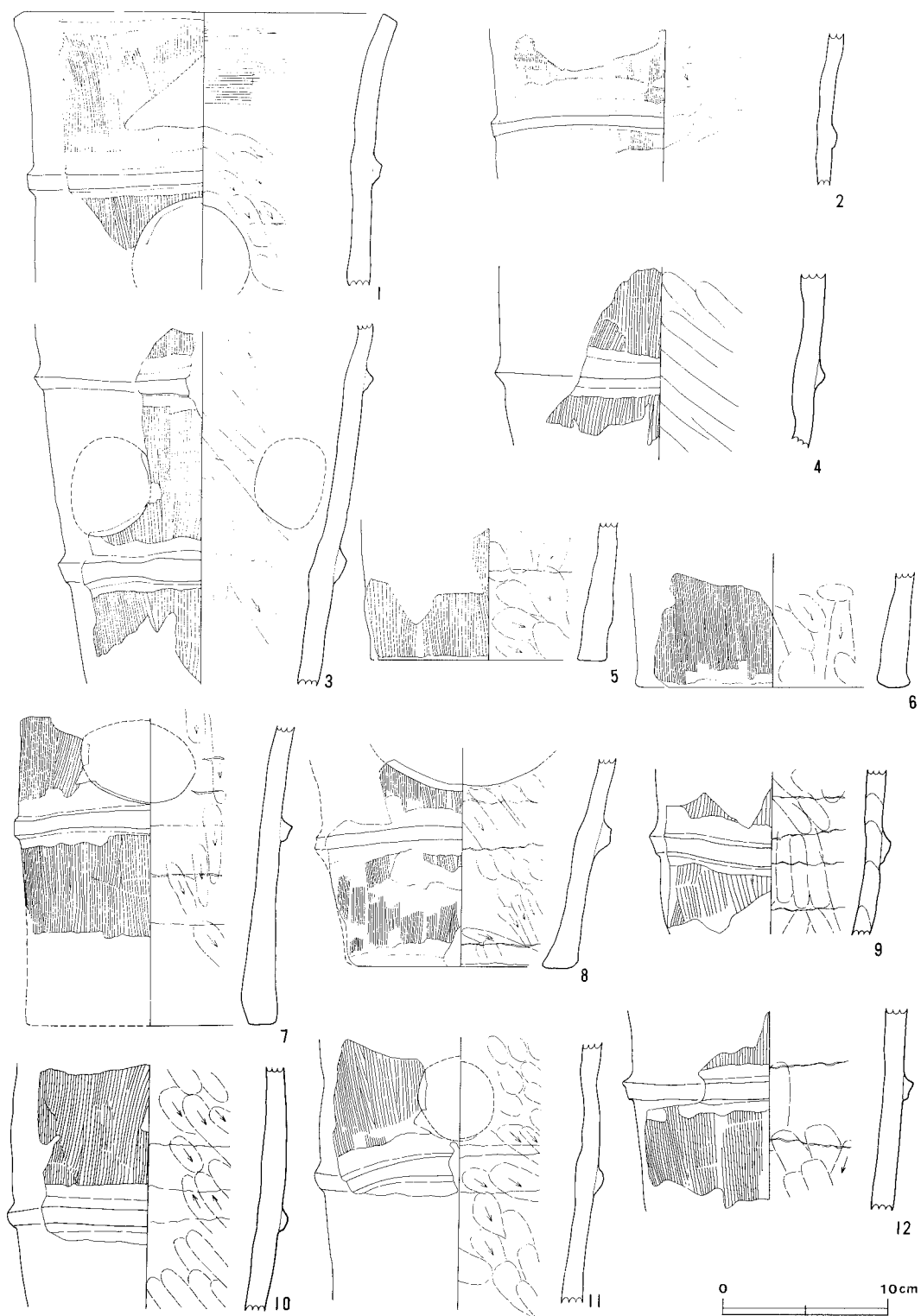
第295図 第12号古墳実測図

(4) 古墳からの出土遺物（第297・298図）

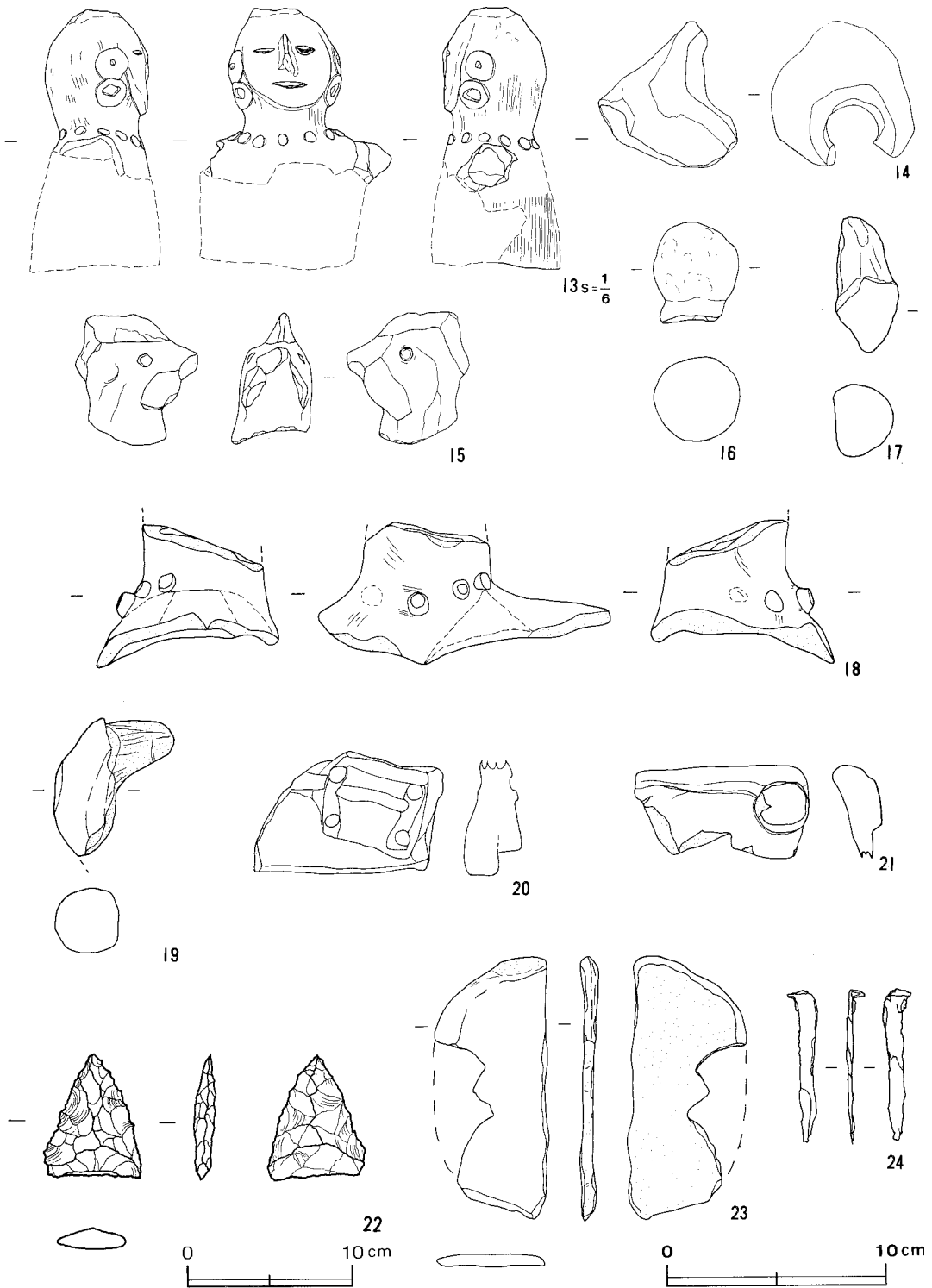
周溝の覆土上層の全域から埴輪の破片が散乱して出土している。また、第8号溝内覆土からも多量の埴輪片が出土している。南西側道路のすぐ下からは第298図13の人物埴輪の頭部、西側道路際には18の人物埴輪の首部が出土している。そのほかの埴輪は全て円筒埴輪であり、12個体を復元した。なお、流れこみと思われる弥生式土器片少量、土師器片少量、22・23の石器・石製品2点、24の鉄製の楔1点も出土している。



第296図 第12号古墳出土遺物位置図



第297图 第12号古墳出土遺物実測図-1



第298图 第12号古墳出土遺物実測図—2

第12号古墳出土円筒・朝顔形円筒埴輪観察表

図版 番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2 cm	成形と内面の状況	色調	備 考
					下段	上段	1	2	3				
第297図 1	(17.0)	「23.2」	—	A1.1	—	—	(7.0)	—	—	12~13	斜方向の指ナデ良好のため紐幅等不明 口唇下3.6~7.2cm幅で表面と同じハケ目横走	明褐色	DP155 体~口縁部片 凸帯下側のナデ良好 口唇部ハケ目整形後ナデ 口唇下わずかにハケ目整形 透孔は穿孔後ナデ
				B1.1	「6.5」	—	0.9	—	—				
2	(9.4)	—	—	B0.9	—	—	(2.9)	—	—	15~16	多方向の指ナデ整形	にぶい 褐色	DP164 体部片 凸帯下側のナデ雑
				C0.9	—	—	0.5	—	—				
3	(21.6)	—	—	B0.9	(9.5)	—	(7.4)	(18.5)	—	11~12	基部幅, 巻き上げ方向, 紐幅等不明 斜方向の指ナデ整形であるが, 胎土に小礫多く, 凹凸が激しい	灰褐色	DP161 底~体部片 凸帯下側のナデ良好 透孔は右廻り穿孔後ナデ
				C1.2	「6.0」	—	1.1	0.9	—				
4	(11.7)	—	—	B1.7	—	—	(4.3)	—	—	10~12	斜方向の指ナデ整形	暗赤 褐色	DP166 体部片 凸帯下側のナデ良好
				C1.0	—	—	—	—	—				
5	(8.0)	—	14.3	D1.7	—	—	—	—	—	11~12	基部幅3.7~3.9cm 斜方向の指ナデ良好のため巻き上げ方向, 紐幅等不明 磨滅	明赤 褐色	DP160 底部片
				—	—	—	—	—	—				
6	(8.2)	—	「16.5」	D1.7	—	—	—	—	—	18~19	大部分が基部である 斜方向の指ナデ整形	明赤 褐色	DP159 底部片 底部付近表面わずかにナデ
				—	—	—	—	—	—				
7	(18.8)	—	「15.2」	C1.2	13.5	—	11.8	—	—	11~12	左回り巻き上げ 紐幅1.2~1.6cm 斜方向の指ナデ整形	にぶい 褐色	DP157 底~体部片 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				D1.9	「5.2」	—	0.8	—	—				
8	(13.5)	—	14.3	C1.0	10.8	—	7.8	—	—	14~17	左回り巻き上げ 紐幅1.5cm 斜方向の指ナデ整形	にぶい 橙色	DP156 底部片 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				D1.2	—	—	0.8	—	—				
9	(10.0)	—	—	B1.1	—	—	(5.4)	—	—	10~13	紐幅1.4~2.0cm 斜方向の指ナデ良好のため, 巻き上げ方向等不明	にぶい 褐色	DP165 体部片 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				C1.1	—	—	1.0	—	—				
10	(15.0)	—	—	B1.3	—	—	(5.5)	—	—	9~11	巻き上げ方向不明 紐幅2.8~3.9cm 斜方向の指ナデ整形	にぶい 褐色	DP162 体部片 凸帯下側のナデ良好
				C1.3	—	—	1.0	—	—				
11	(16.6)	—	—	B0.9	(10.3)	—	(7.5)	—	—	12~13	左回り巻き上げ 紐幅1.1~1.5cm 斜方向の指ナデ整形であるが, 胎土に小礫多く凹凸が激しい	灰褐色	DP158 体部片 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				C1.0	「5.2」	—	—	—	—				
					「5.1」	—	0.5	—	—				

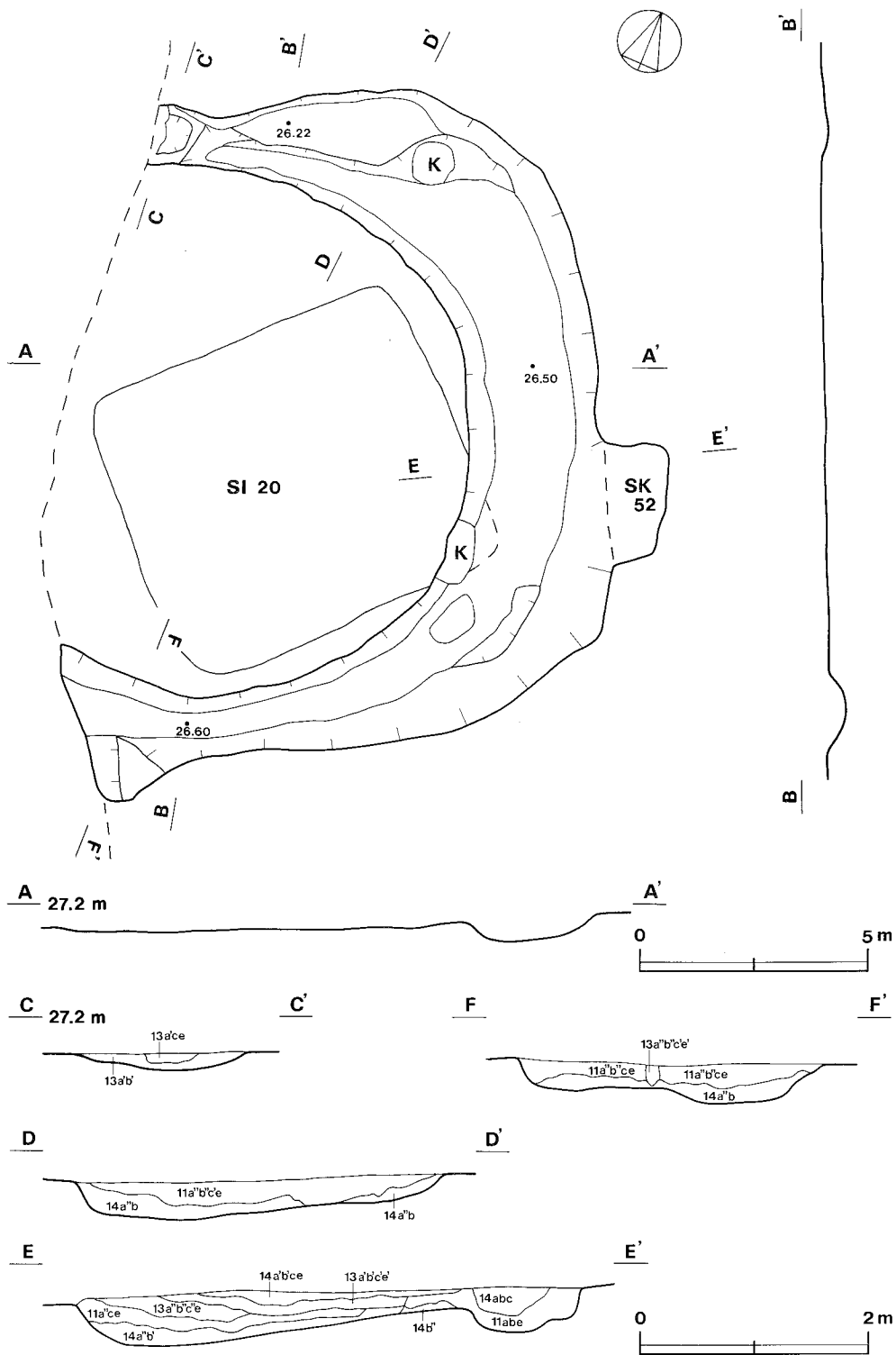


図版 番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2 cm	成形と内面の状況	色調	備考
					下段	上段	1	2	3				
第297図 12	(12.3)	—	—	B1.3 C1.2	— — —	— — —	(7.5) — —	— — —	— — —	11~12	左回り巻き上げ 紐幅2.5cm 斜方向の指押圧	灰褐色	DP163 底部片 凸帯下側のナデ良好

## 第12号古墳出土形象埴輪観察表

図版番号	種別・部位	形態、整形技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
第298図 13	人物埴輪 胴～頭部	現存高24.5cm。上半身の埴輪であり、下半部には台部が付くと思われる。頭頂部、胴部前面、右腕、鼻の一部は欠損。顔は楕円形の粘土板を貼って輪郭をつくっている。目と口は篋状工具で細長い木の葉状に穿孔、鼻は棒状の粘土を貼り付けている。耳は小さい円形の粘土板を貼り付けた後、中心部を丸棒状工具で穿孔し、耳の下側に接して細い粘土紐を円形に貼り付けて耳環を表現している。眉の表現はない。首の付け根へは玉を模した粘土瘤が13個貼付けられて首飾りを表している。全体的には柔和な表情をかもし出している。胴部は粘土紐で輪積し、頭部は粘土紐を巻き上げて別々に成形し、首節で接合している。首節に接合痕が見られる。左腕部は棒状の粘土を肩部に差し込んでいる。胸部から首の下までの外面はナデ整形。背中部外面は7/2cm本の縦ハケ目整形。胴部内面は指の押圧とナデ整形であるが、輪積痕が明瞭に残っている。頭部と顔部は外面をハケ目整形後ナデ整形をしているが、左側頭部の下半部と右顎下には不明瞭なハケ目痕が残っている。	細砂・雲母を多量、小礫・スコリアを少量含む精良な胎土。焼成は良好。	橙色	DP167
14	形象埴輪 動物	中空の鼻部片と思われる。外面ナデ整形。内面ナデ整形。内面に紐痕が残る。	細砂・雲母を多量に含む精良な胎土。焼成は良好。	橙色	DP245
15	形象埴輪 鶏 首～頭・顔	首から上部片で、口ばしと鶏冠の一部が欠損している。首はほぼ垂直に立ち、頭・顔部は横を向いている。目は竹管状工具で突き刺している。首・頭部をナデ整形した後、鶏冠と肉垂を貼付け、再びナデを加えている。内面はナデ整形である。	細砂・雲母を多量に含む精良な胎土。焼成は良好。	橙色	DP237
16	形象埴輪 不明	中実で断面形が円形の粘土棒の下端を、指で押圧して球状に作る。ナデを施している。人物埴輪の美豆良か馬形埴輪の飾りか。	砂粒・少量の小礫・雲母を含む。焼成は良好。	橙色	DP242
17	人物埴輪 腕接合部	左右不明だが腕の接合部。全面ナデ整形。	細砂・雲母を多量、極少量のスコリアを含む。焼成良好。	橙色	DP241
18	人物埴輪 肩～首部	首部付近の埴輪片で、胸と背はやや膨らみ肩は横に直線的に伸び、首はほぼ垂直に立っている。首下部には玉を模した瘤が3個付き、剝落痕が7か所見られる。外面指ナデ整形。内面指ナデ整形であるが一部に紐痕が残る。	細砂・雲母を多量に含んだ精良な胎土。焼成良好。	橙色	DP168
19	人物埴輪 腕接合部	左右不明だが腕の接合部。全面ナデ整形。	細砂・雲母を多量、極少量のスコリアを含む。焼成は良好。	橙色	DP240
20	形象埴輪 不明	大小の板状粘土を重ね、その小粘土板上へ細い紐状粘土を「円」状に貼付け、さらにその紐状の角と端部付近に玉状の瘤を4個貼付けている。なお、大粘土板上へも1本の紐状粘土を貼付けている。全面ナデ整形。	細砂・雲母を多量に含む精良な胎土。焼成は良好。	橙色	DP244
21	形象埴輪 不明	下から彎曲して立ち上がった後、板状粘土を水平に貼付け、その境へ玉状の瘤を1個付けている。外面はナデ整形。内面は雑なナデを施している。	細砂・雲母を多量、少量の礫を含む。焼成は良好	橙色	DP243

第13号古墳 (第299図)



第299图 第13号古墳実測図

(1) 古墳の現状

本墳は、C5区における、宿台地の平坦部のほぼ中央に位置している。北西側4m程には第12号古墳が隣接している。本墳の西側は生活道路の下に延びているため調査はできなかった。

(2) 古墳の構造

〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。また、西側は道路の下に延びており、5分の2程が未調査である。調査した周溝から判断して、墳形はほぼ円形を呈する円墳である。規模は周溝の内側で径11.7mである。墳丘下に構築されている第20号住居跡の東側は明らかに周溝に切られており、本墳の方が新しいものである。標高は26.77mである。

〈周溝〉

周溝の幅は南と北側が狭く、東側が広い。平面形は墳丘を取り囲むように円形状に掘られている。周溝の上幅は1.2～3.6m、下幅は0.5～2.0mである。深さは、狭い所で0.2m、広い所で0.4mを測り、広い所ほど深い傾向がみられる。壁面はロームで、墳丘側の大部分が溝底から外傾し、外側はゆるやかに立ち上がっている。覆土は多量のローム粒子を含む黒褐色土と暗褐色土を主として、溝底付近には褐色土が締まって堆積している。溝底は、一部に攪乱が見られるもののほぼ平坦で、標高は26.44～26.74mである。

(3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、調査できた範囲からは検出されなかった。なお、周溝と第52号土坑が重複しているが、土層などから観察してもその新旧関係は不明であった。

(4) 古墳からの出土遺物

墳丘、周溝内から、ともに皆無である。

**第14号古墳（第300図）**

(1) 古墳の現状

本墳は、D6区における宿台地の平坦部に位置している。北東側4m程には第1号古墳が隣接している。

(2) 古墳の構造

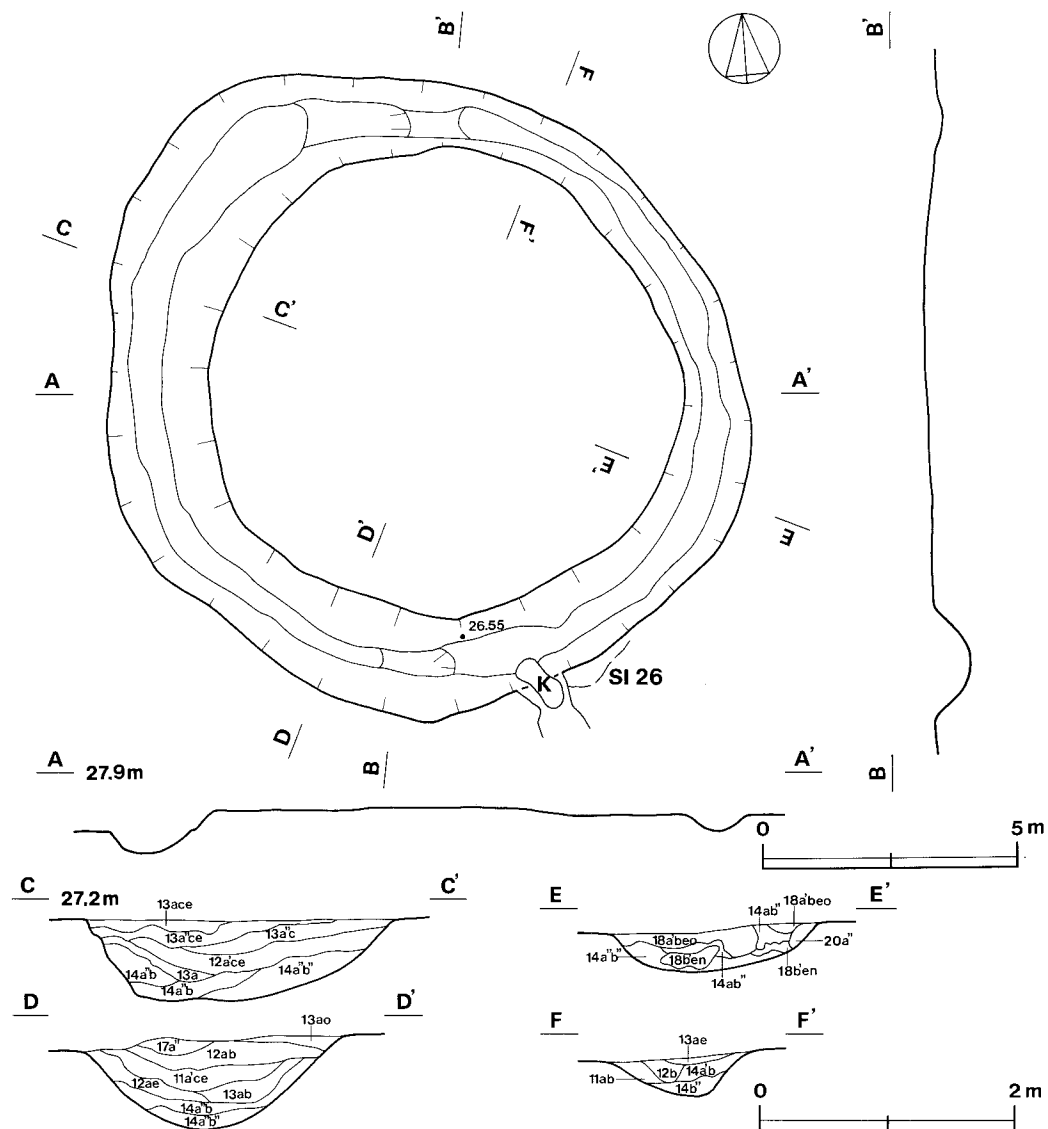
〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明であるが、中央部がやや高まっており、墳丘の存在したことを推測させる。調査した周溝から判断すると、墳形は東（東南東）から西（西北西）にやや長い円形状を呈する円墳と思われる。規模は

周溝の内側で長径9.4m・短径9.2mである。標高は26.28mである。

〈周溝〉

周溝は北側が狭く、北西側が広い。平面形は、墳丘を取り囲むように円形状に掘られている。周溝の上幅は北側が狭くて1.1m、北西側が広くて2.7m、下幅は0.3~1.2mである。深さは北側が0.2m、南~北東にかけて0.7mで、周溝の広いところほど深い傾向がみられる。壁面はロームで、墳丘側・外側とも大部分は溝底から外傾して立ち上がっている。溝底はゆるい起伏を示し標高は26.29~26.74mである。覆土は、多量のローム粒子を含む極暗褐色土と暗褐色土を主として、褐色土・明褐色土・黒色土が部分的にそれぞれ縮まって堆積している。なお、南側には小さい攪乱穴



第300図 第14号古墳実測図

がある。

(3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。

(4) 古墳からの出土遺物

墳丘、周溝内から、ともに出土していない。

**第15号古墳（第301図）**

(1) 古墳の現状

本墳は、D7区における宿台地の傾斜部に位置している。東側半分程はエリア外となり、続いてすぐ東側の急傾斜の崖となって宿二ノ谷に至る。西側には第16号古墳が接し、北西側16m程には第1号古墳が隣接している。なお、南側の周溝から墳丘にかけては、第11号溝が本墳を切って重複している。

(2) 古墳の構造

〈墳丘〉

墳丘が傾斜地に存在したため封土が流出したり、また、耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平され、封土等の状況は不明である。また、本墳の半分はエリア外になっているため、未調査である。調査した周溝から判断して、墳形は円墳と思われる。墳丘の南側は第11号溝によって切られている。規模はエリア内・外の境目が最大径であり、周溝の内側で10.4mである。標高は27.10mである。

〈周溝〉

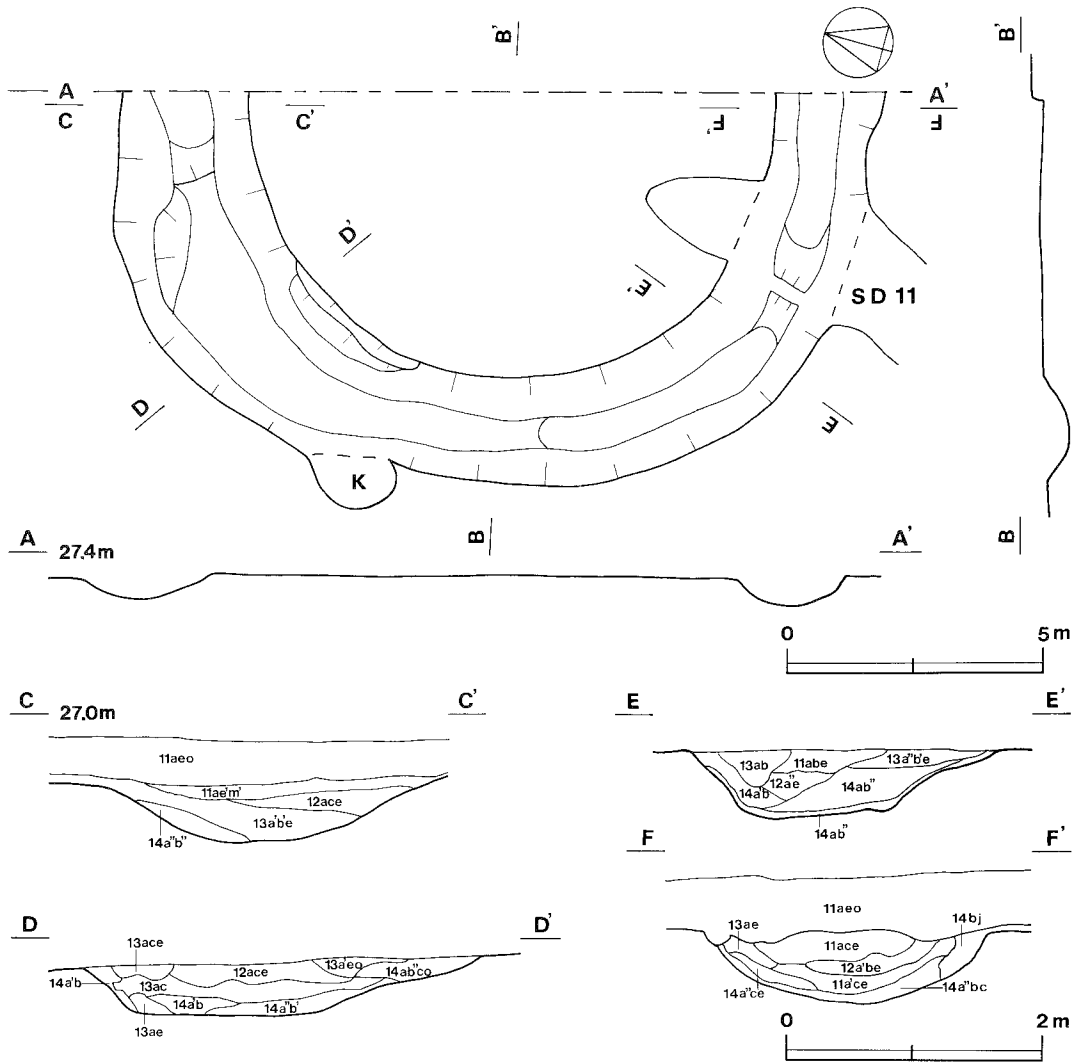
周溝は西側のほぼ半分の調査であるが、平面形はほぼ同じ幅で墳丘を囲むように円形状に掘られている。周溝の上幅は南側がやや狭くて1.9m、北西側が広くて3.2m、下幅は0.7～1.9mである。深さは0.4～0.5mである。壁面はロームであり、墳丘側・外側ともにほぼ平坦な溝底から外傾して立ち上がっている。溝底は平坦で標高は北側が低く25.17m、北西側が高く26.58mである。なお、西側の一部に丸く凹んだ攪乱穴がある。覆土は極暗赤褐色土・赤褐色土・暗褐色土を主に、黒色土を一部に含んで良く締まって堆積している。なお、南側で周溝の覆土を溝が切って掘られており、本墳が溝より古いものであることがわかる。

(3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。

(4) 古墳からの出土遺物

南側周溝の底面から土師器片5点が出土しているが、器種を特定できない小片である。



第301図 第15号古墳実測図

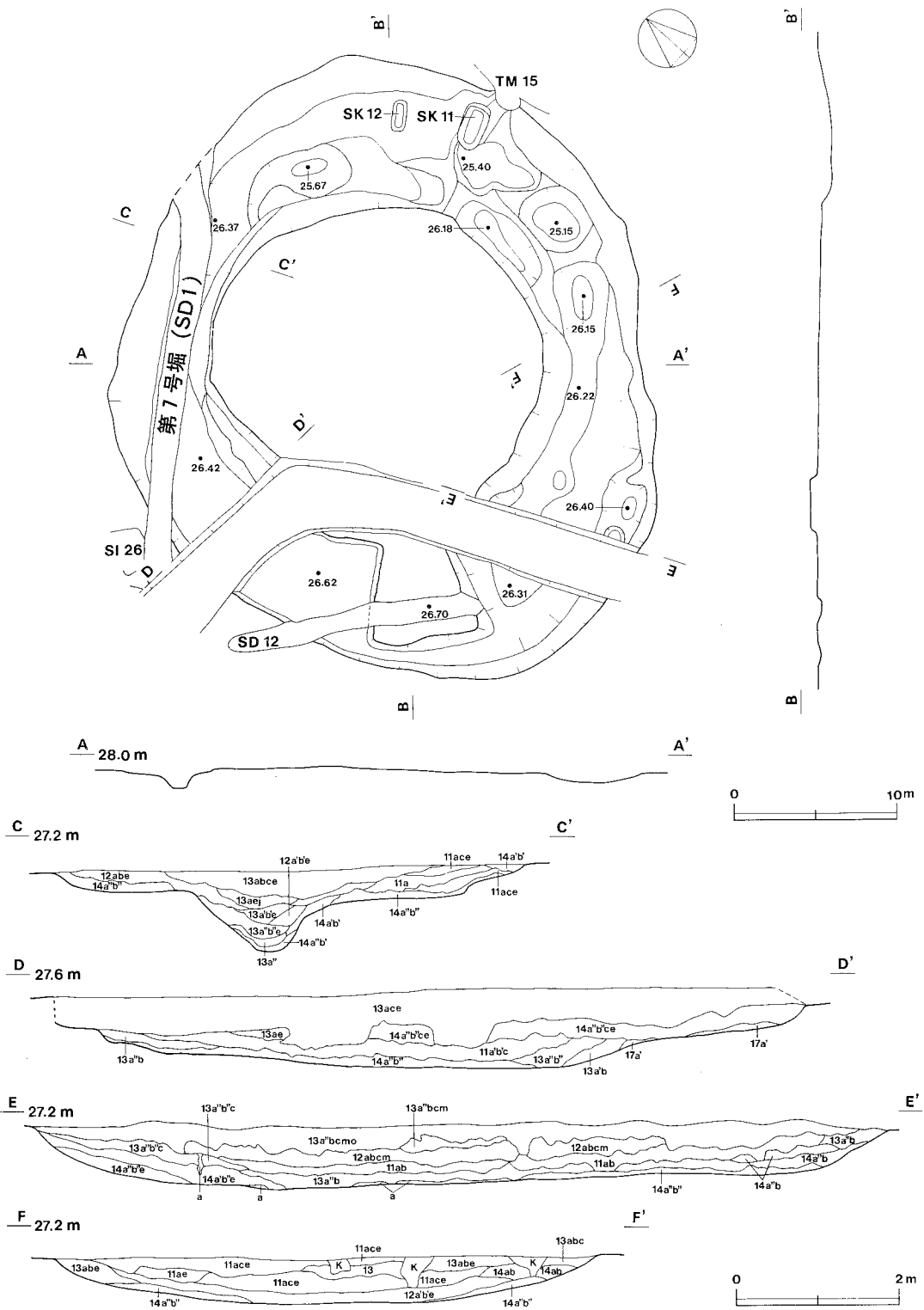
第16号古墳 (第302図)

(1) 古墳の現状

本跡は、D6・D7・E6区にかけて、宿台地が才ノ谷上と宿二ノ谷にはさまれてせばまっている平坦部に位置している。北側4m程には第1号古墳が隣接している。また、前方部から後円部付近の墳丘と周溝上に生活道路が伸び、さらに、前方部と周溝が第12号溝に切れ、北側周溝部が第1号溝（整理の段階で第7号堀に変更）に切られている。

(2) 古墳の構造

〈墳丘〉

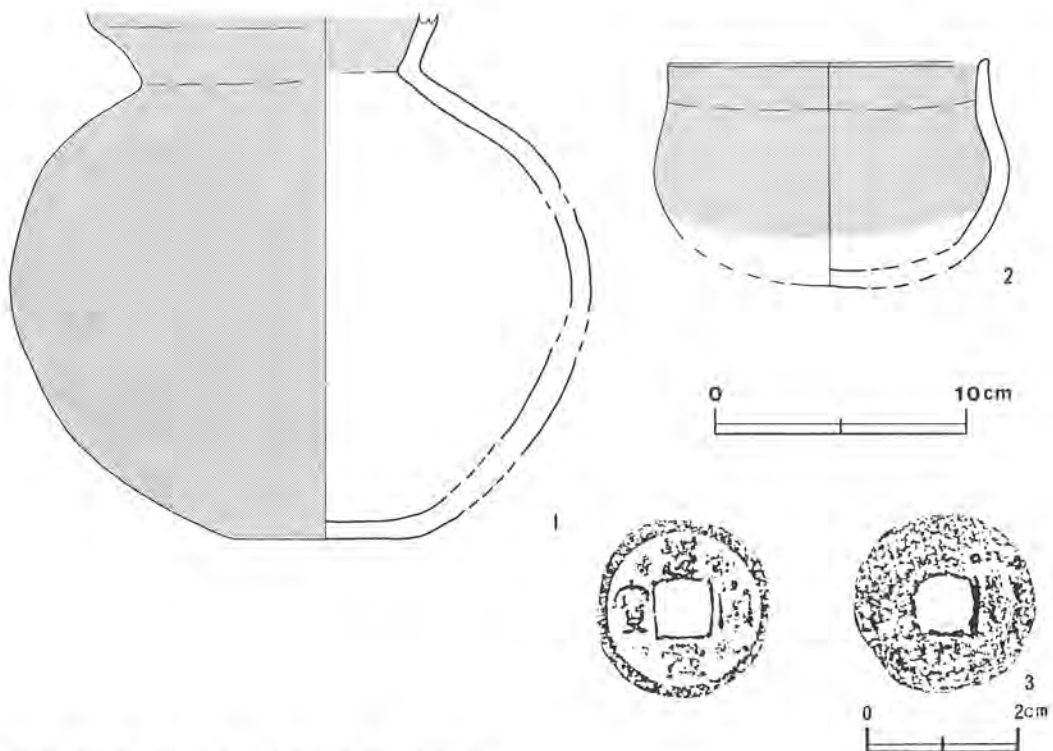


第302图 第16号古墳実測图

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。調査した墳丘と周溝の状況から判断すると、墳形は帆立貝状の前方後円墳である。規模は周溝の内側で全長26.5m(周溝部を含めて全長38.8m)、後円部径21.0m・幅20.4m、前方部長5.5m・最大幅6.4m・くびれ部幅3.6mで、前方部長対後円部径の比率は1:3.8である。主軸方向はN-43°-Eを指している。前方部墳丘を切っている第12号溝は本跡より新しい。標高は27.62mである。

〈周溝〉

周溝は一部が道路下であり、また一部は、第1・12号溝に切られていて不明な部分があるが、周溝の平面形は墳丘側が墳丘下の形状に沿って、前方後円形状に掘られ、外側は北東～南西にやや長い楕円形状に掘って全周している。周溝の上幅は南側くびれ部付近が広くて5.3m、北側が狭くて2.4m、下幅は0.6～6.3mである。深さは0.4～0.7mである。壁面はロームで、墳丘側・外側ともに溝底から外傾してゆるやかに立ち上がっている。また、あたかもブリッジを想定したかのように、幅2m程が東側墳丘から舌状に周溝の1/3程の所までを周溝底の両側からゆるやかに掘り残して高まりを造っている。溝底は西側が比較的平坦であるが、東側が凹凸を示し標高は東側が低く25.15m、南西側が高くて26.69mである。周溝の覆土は、上層に黒褐色土と極暗褐色土、中



第303図 第16号古墳出土遺物実測・拓影図



層に極暗褐色土と暗褐色土，下層に暗褐色土と褐色土がほぼレンズ状を呈してよく締まって自然堆積している。なお，第1号溝は周溝の覆土を切って掘っていることが土層からもよくわかる。

### (3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが，検出されなかった。なお，第11・12号土坑は周溝の覆土の下から確認されたが，その覆土はあくまで人為的なものではなく，主体部の要素は感じられなかった。

### (4) 古墳からの出土遺物（第303図）

南東側周溝内の覆土下層から，本墳に関係あると思われる第303図1の古墳時代後期初頭の朱彩した土師器の壺形土器が出土し，また，東側周溝内の覆土上層からは2の朱彩した土師器の鉢形土器や3の古銭1点（聖宋元宝，（1101年），北宋）が出土している。

第16号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第303図 1	壺形土器 土師器	B 21.0) C 6.4	底部は平底で，胴部は底部から半球状に立ち上がり，頸部でくの字状を呈し，口縁部は外傾して開く。	底部，胴部内面ナデ整形，胴部外面，口縁部内・外面篋磨き整形。胴部外面・口縁部内・外面へ朱を施している。	砂粒 橙色 普通	75% P123
2	鉢形土器 土師器	A 12.8 B 9.0	底部はやや平坦な丸底である。体部は底部から器厚を一定に保って内彎し，頸部から器厚を減じながらほぼ垂直に立ち上がっている。	内・外面とも篋ナデ整形。その後，底部外面を除く全てを篋磨きをし，朱を施している。	砂粒 明赤褐色 普通	70% P124

### 第17号古墳（第304・305・306・307図）

#### (1) 古墳の現状

本墳は，E7・F7区における宿台地の東縁の平坦部に位置している。東側7m程先は，急傾斜の崖になり宿二ノ谷に至る。北側25m程には第15号古墳が存在し，南側で第20号古墳と接している。また，本墳と第3～6号堀，第20号溝が重複しているが，それらはいずれも新しいものである。

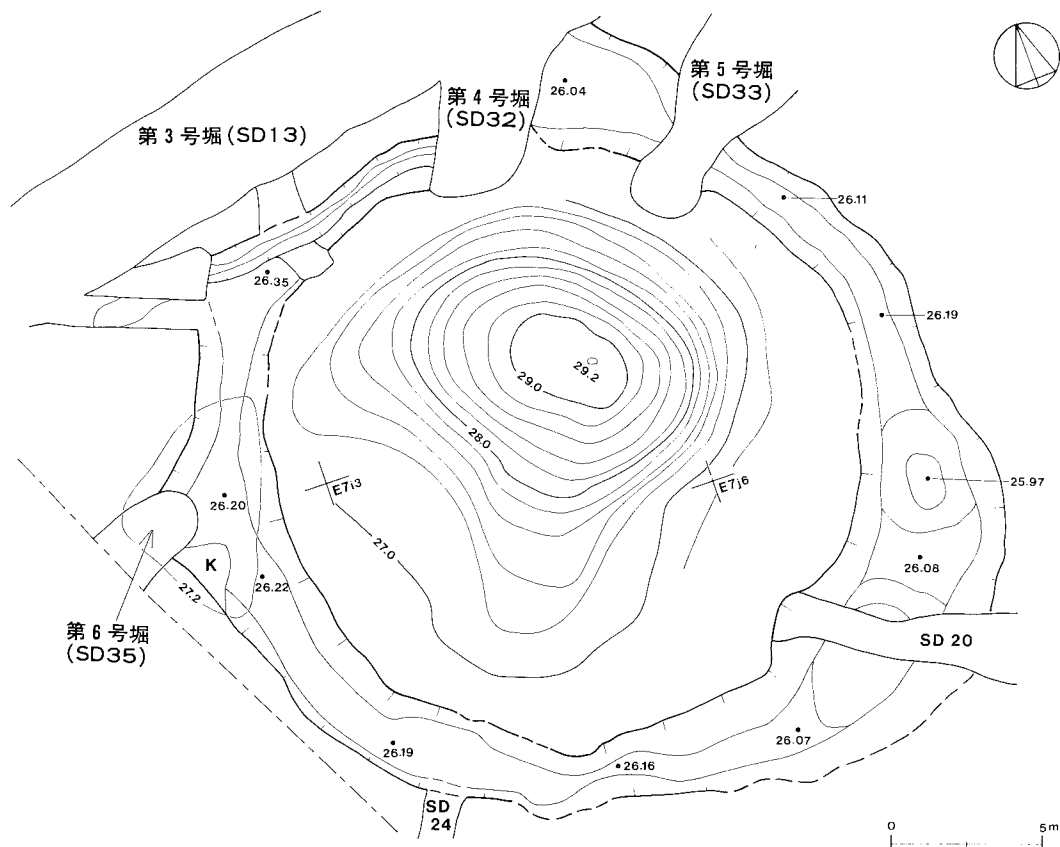
本墳は北西側の貝原塚町と南東側の長峰町を結ぶ旧阿波街道といわれる小路に面し，等高線は楕円形を呈して標高27.0～29.0mの間を測る。墳形は北東側がやや急斜面をなし，反対の南西側はややなだらかな斜面を呈して小路に至っている。北西側と南東側はほぼその中間の傾斜をなしている。墳頂部の標高29.0mライン付近はほぼ平坦な面を呈しており，全体としての墳形は土饅頭状をなしている。なお，墳頂は小路の北東側に有って，周溝から見ても北東側に片寄っている。また，墳頂部の標高29.0m付近には大きい雑木が4本生えていて，2.5×4m程の平坦地を守るかのようである。さらに，本墳は堀との位置関係から判断すると二次的に塚として使用されたものと

思われる。

〈墳 丘〉

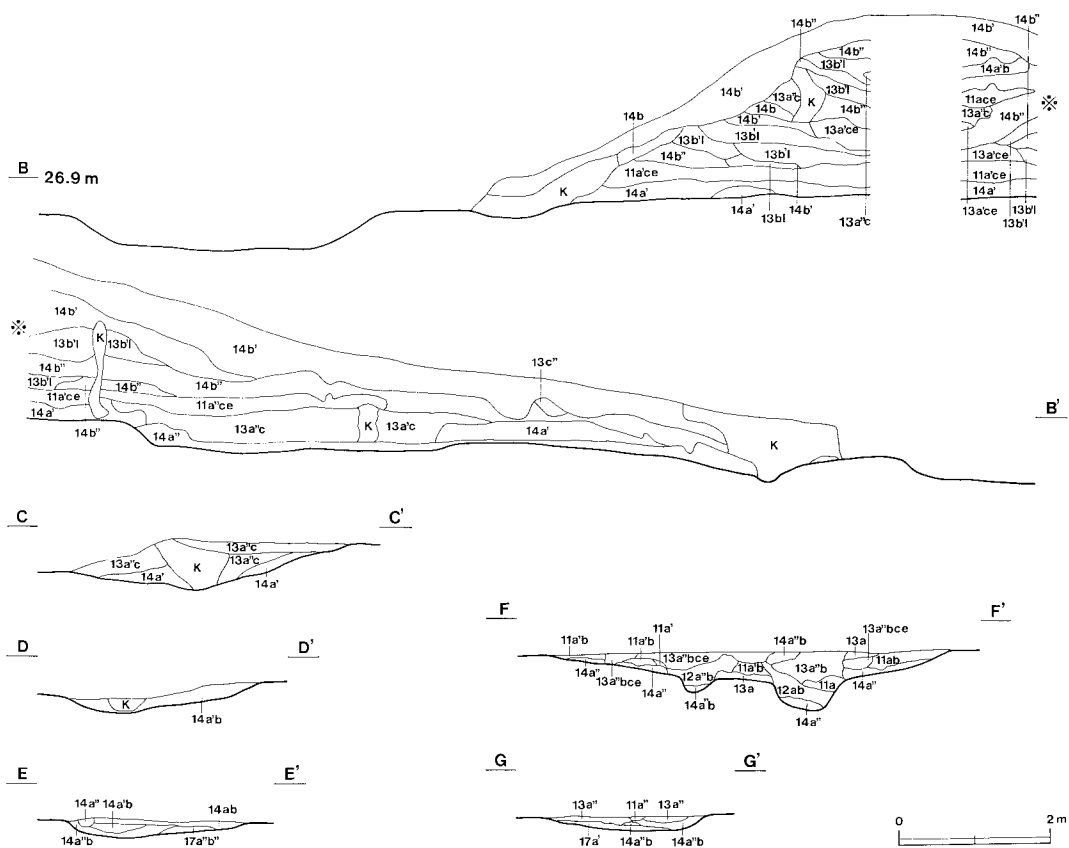
調査前は、土饅頭状の塚一面が大・小の雑木でおおわれていた。そのため、雑木を伐開して墳丘測量を実施した。標高は墳頂部のやや東側にあって29.20mであり、南西側の小路との比高は2.16mである。

調査は2年次に亘って行われ、1年次は東側の周溝と墳丘の一部を調査した。2年次は、大木の根をさけるように北北西～南南西、西北西～東南東へと、幅1mのベルト2本を十文字状に残して表土から分層発掘を行い、古墳の埋葬施設、墳丘の規模・形態の調査をし、旧表土層まで封土の除去をした。さらに、ベルトの両側の旧表土層下を1m幅で0.5m掘り下げて調査を行った。その結果、黒褐色土の旧表土層が24cm程見られ、その上に図化できない薄い草木灰と焼土の層が一面に見られた。これは本墳を造る時に火を燃やした事を示すものと思われる。封土は、旧表土層や周溝を掘った際の土と思われるロームブロックを含む暗褐色土とロームブロックを含む褐色土等をほぼ交互に、そして中央部がやや凹むようにして周囲を高く皿状に盛土しながら積み上げている。旧表土層から墳頂までの高さは1.95mである。周溝の墳形から判断すると円墳である。規模



第304図 第17号古墳実測・墳丘図-1





第306図 第27号古墳実測図-3

は周溝の内側で長径（南北）20.2m・短径（東西）19.6mである。標高は29.20mである。なお、調査した土饅頭状の封土は、周溝との位置関係から判断すると北東側に片寄っている。

〈周溝〉

周溝は北側でほぼ西～東に延びる第3号堀と、それに接して北東～南西に延びる第4号堀に、西側で第6号堀に、北東側で第5号堀に、南側で第20・24号溝に切られている。周溝の上端は削平されていて墳丘側・外側とも平面形が大きい波状を呈しているが、平面形は墳丘を取り囲むように円形に全周している。幅は広・狭を呈し、南東側の第20号溝付近が広くて5.1m、北東側の第5号堀付近が狭くて1.7m、下幅は0.2～3.4mである。深さは0.2～0.5mである。壁面は、墳丘側・外側ともロームで外傾し、浅い所はなだらかに立ち上がっている。溝底はほぼ平坦で起伏はほとんどない。標高は25.95～26.35mである。

覆土は、深い部分は大部分がローム粒子を含む暗褐色土、一部に多量のローム粒子を含む褐色土がそれぞれよく締まって堆積している。浅い部分は、多量のローム粒子を含む褐色土が比較的好く締まって堆積している。周溝と重複している堀及び溝は、いずれも本跡より新しいものである。

(3) 埋葬施設

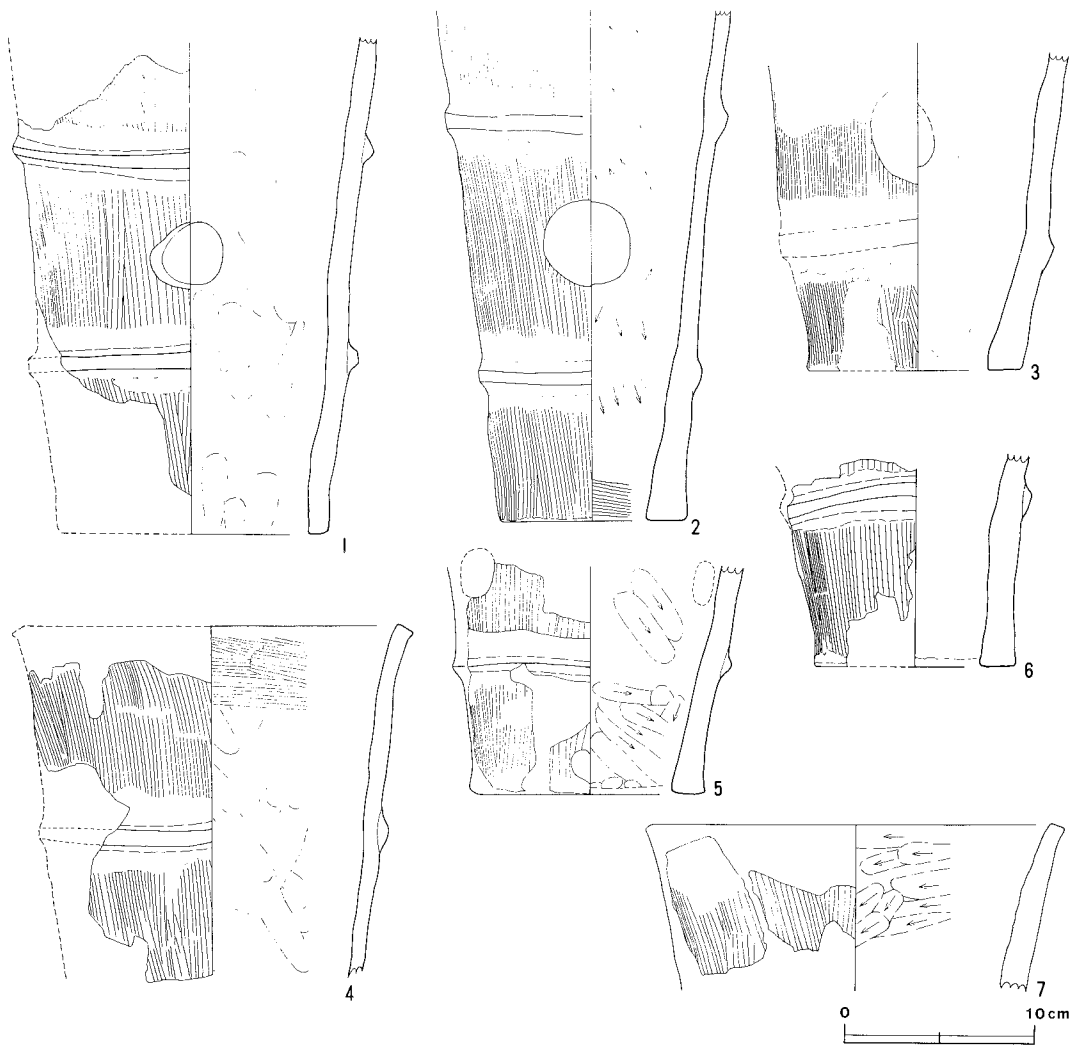
墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。また、残したベルト内を観察したがそれらしい様子は全く見られなかった。さらに、旧表土層下も観察したがそれらしい痕跡はなかった。

(4) 古墳からの出土遺物（第308・309・310・311・312図）

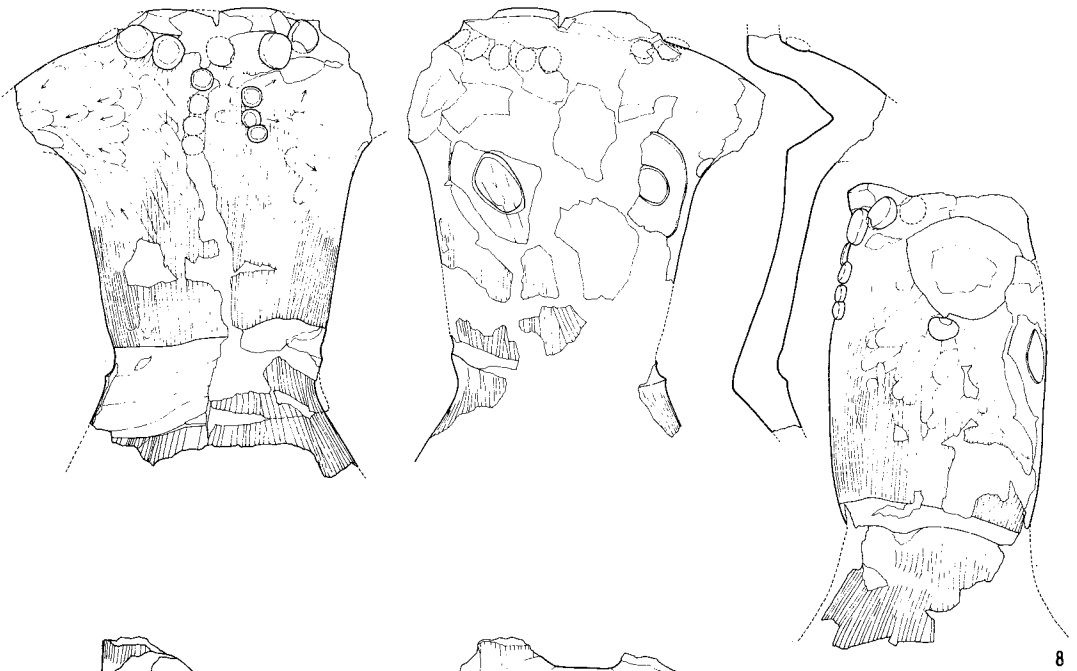
周溝内覆土の下層、溝底20cm程上から埴輪片が出土している。特に、1年次に調査した東側と2年次に調査した道路際に集中している。復元した円筒埴輪は7個体分、形象埴輪は4個体分である。その他、周溝内からは第311図32の球状土錘1点、古墳時代後期と思われる30・31の土師器2点、墳丘上からは、33の砥石1点の他に第312図35の不明の鉄製品1点、36の寛永通宝(1636年)1点、37の洪武通宝(1368年)1点が出土している。



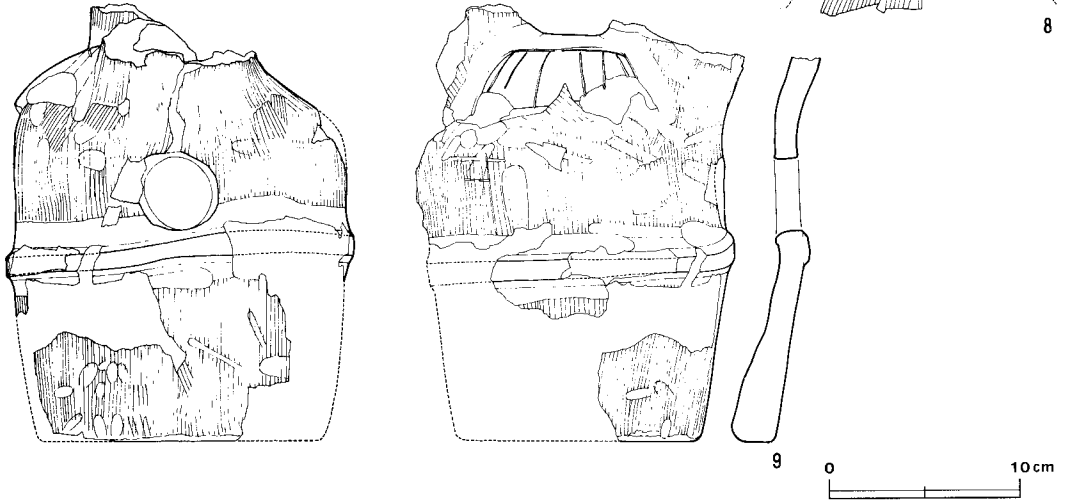
第307図 第17号古墳出土遺物位置図



第308図 第17号古墳出土遺物実測図-1

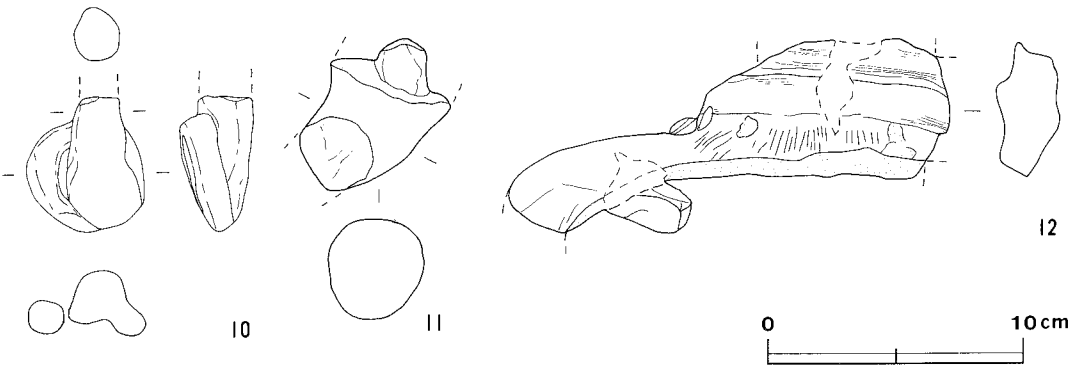


8



9

0 10 cm



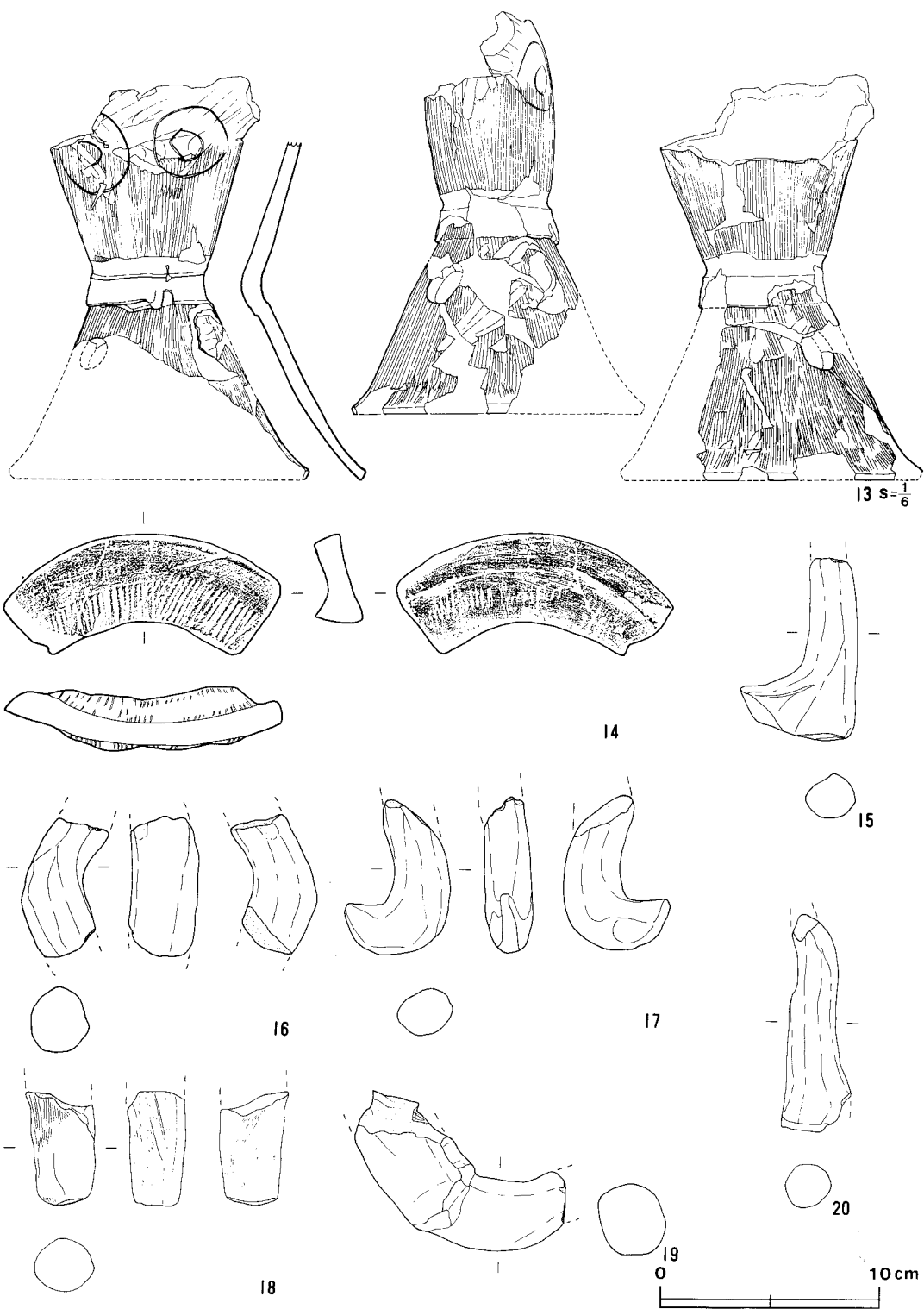
10

11

12

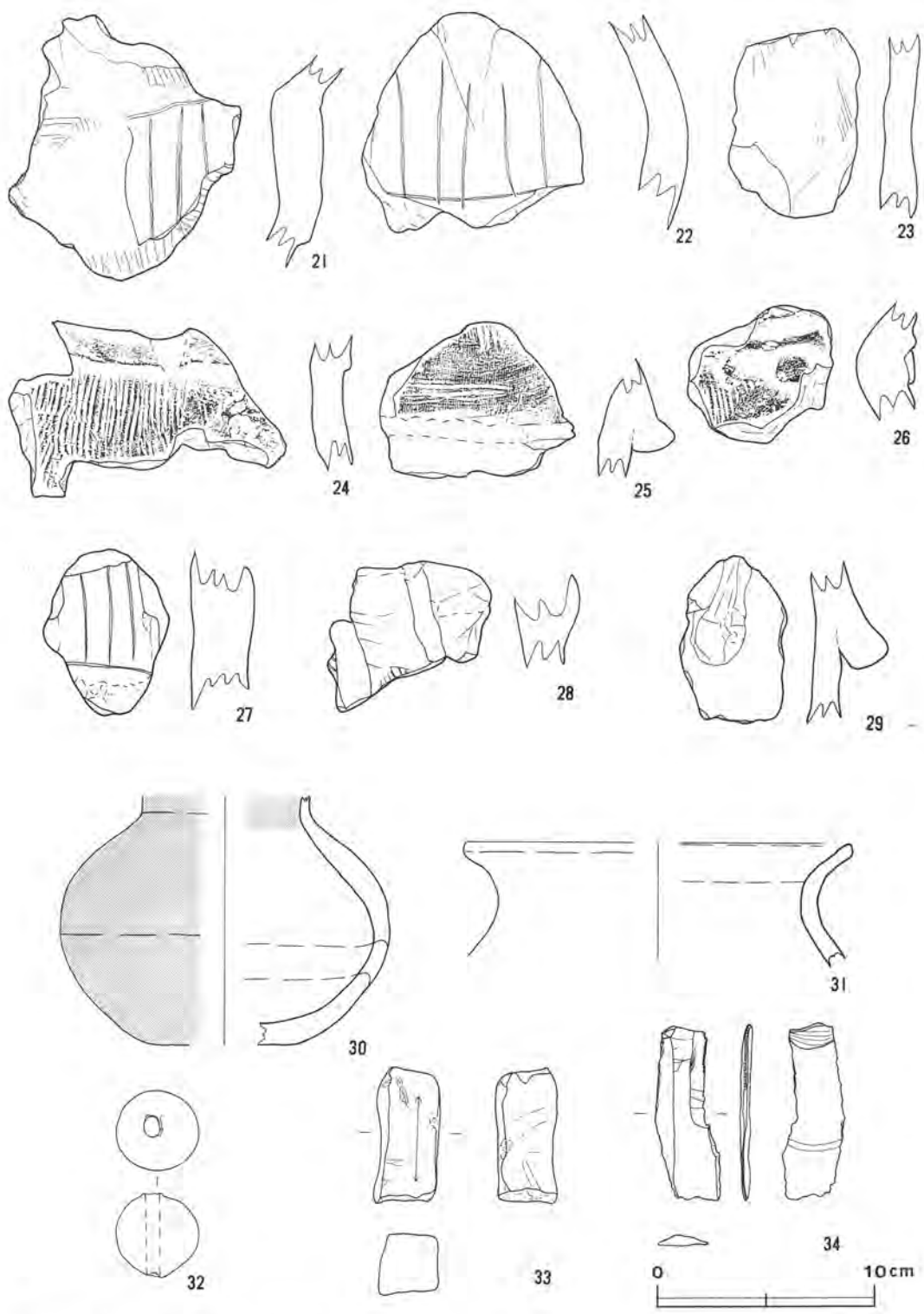
0 10 cm

第309图 第17号古墳出土遺物実測図-2

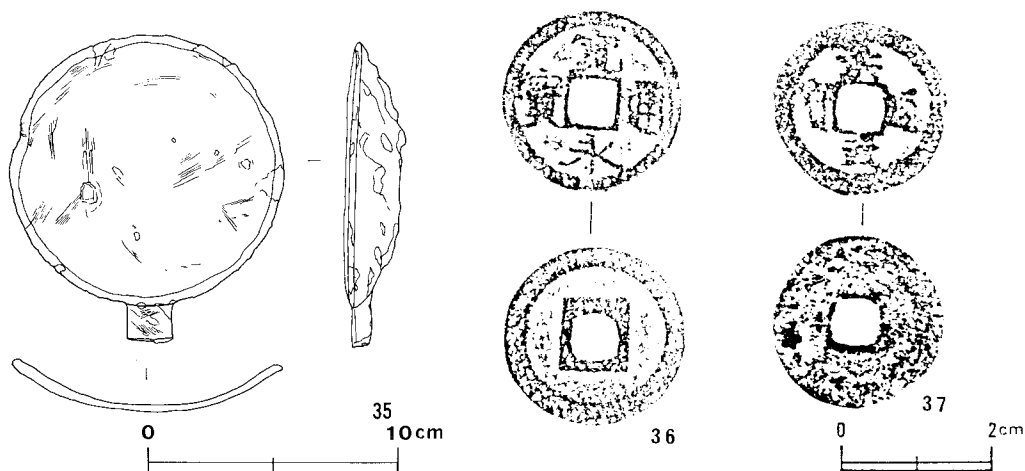


第310图 第17号古墳出土遺物実測・拓影図-3





第311图 第17号古墳出土遺物実測・拓影図-4



第312図 第17号古墳出土遺物実測・拓影図-5

第17号古墳出土円筒・朝顔形円筒埴輪観察表

図版 番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2 cm	成形と内面の状況	色調	備考
					下段	上段	1	2	3				
第308図 1	{26.0}	-	「14.2」	B1.1	13.4	-	(9.4)	(20.5)	-	9~10	斜方向の指ナデ整形良好のため 紐幅等不明	明灰 褐色	DP171 底～体部片 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ 透孔は小さい
				C1.1	3.6	-	0.8	-	-				
				D1.3	4.0	-	0.6	0.5	-				
2	{27.0}	-	9.8	B0.7	12.4	-	7.5	21.3	-	8~11	基部幅4.1~4.4cm 斜方向の指ナデ良好 基部6/2cmのハケ目整形後、指 ナデ整形	にぶい 橙 色	DP169 底～体部片 凸帯下側のナデ雑 透孔は切放し
				C0.8	4.6	-	0.6	-	-				
				D1.8	「4.7」	-	0.3	0.5	-				
3	{17.2}	-	11.2	C1.2	9.9	-	6.3	-	-	10~11	縦方向の指ナデ整形	明褐色	DP170 上部 凸帯下側ナデ雑 透孔は切放し 全体的に粗雑
				D1.7	「4.5」	-	-	-	-				
					「4.5」	-	0.4	-	-				
4	{18.4}	「21.2」	-	A0.9	-	-	(8.0)	-	-	8~9	多方向の指ナデ整形 口唇下4.6~5.1cm幅で表面と同 じハケ目横走 口唇下わずかにナデ	にぶい 橙 色	DP172 体～口縁部片 凸帯下側のナデ雑 口唇部、表面の口唇下 わずかにナデ
				B0.7	-	-	0.8	-	-				
					-	-	0.6	-	-				
5	{12.0}	-	「12.4」	C1.1	10.5	-	6.7	-	-	7~8	基部幅5.5~7.0cm 斜方向の指ナデ整形良好	にぶい 橙 色	DP175 底部片 凸帯下側のナデ雑 透孔は穿孔後ナデ 透孔は小さい
				D1.2	「2.5」	-	-	-	-				
					「3.5」	-	0.4	-	-				
6	{10.7}	-	10.5	C1.1	-	-	8.6	-	-	10~13	左回り巻き上げ 縦方向のナデ整形	にぶい 橙 色	DP173 上部 凸帯下側のナデ雑
				D1.4	-	-	-	-	-				
					-	-	0.4	-	-				
7	{8.6}	「22.0」	-	A1.2	-	-	-	-	-	8~9	横～斜方向の筥ナデ整形 口唇下1.1~1.9cm幅でナデ整形	暗赤 褐色	DP174 口唇部、表面口唇下 1.1~2.4cm幅でナデ
					-	-	-	-	-				
					-	-	-	-	-				

第17号古墳出土形象埴輪観察表

図版番号	種別・部位	形態, 整形技法等の特徴	胎土, 焼成等の特徴	色調	備考
第309図 8	女子人物埴輪 腰～肩部	現存高24.5cm。腰部から肩部までの埴輪である。下半部にはスカートがつくと思われる。腰部前面, 両腕, 腰紐の一部は欠損。腰部は横長の楕円形状。スカート部はハの字状に開こうとしている。胴部は胴のくびれた所から直線的に外傾し腕部と首部へ立ち上がっている。くびれ部へは粘土帯を廻らして腰紐を表し, 胴部前面には乳房を表わしたと思われる棒状工具で描かれた二重円が左右に見られる。着衣の外側で衿元から背中へは玉を模した粘土瘤を8個(推定28個)貼付けて装飾品の表現をしている。右腕は棒状の粘土を背部に差し込んでいる。成形はくびれ部を境にして, 上と下を別々に作り, ここで接合し, その上へ帯状の粘土を廻らして補強している。外面は8/2cm本の縦ハケ目成形をし, その後くびれ部に廻らした帯と前面の胴上半部, 腕の接合部周辺をナデ整形している。内面は指ナデ整形をしていねいにしている。内面のくびれ部と腕の接合部には接合痕が明瞭に残っている。なお, 左右の腕接合部の下側には焼成時の割れ防止と思われる小穴が斜上方に向かって棒状工具で穿孔されている。	細砂を多量, 小礫とスコリアを極少量含む精良な胎土。焼成は良好。	橙色	DP176
	形象埴輪 台	現存高22.9cm。円筒状の形象埴輪の台部で後面3分の1程が欠損している。円筒状の台部表面は10/2cm本のハケ目整形をし, 中段に一条の凸帯を廻らした後で横ナデ整形をし, さらに, 脚部間と思われる部位に, 二又に分かれる水鳥の水掻きを連想させる粘土板を貼付け, ナデ整形をした後, 鋭利な篋状工具で上端に1本の横線, そこに接して手前へ3本1単位の縦線を2単位描いている。この辺りから内斂してつままっている。左右には脚部が接合されていたと思われる円形状の欠損部が見られ, 全身像の人物埴輪の台部の可能性が大きい。脚部下で, 凸帯に接して凸帯のナデ整形後に穿孔された円孔が1か所(推定一対)開けられ, その後切放し面へナデ整形がされている。内面は基部が厚く, その上部はやや薄い, いずれも比較的ていねいな指ナデ整形をしている。	細砂を多量, スコリアを極少量含む精良な胎土。焼成は良好。	橙色	DP177
10	形象埴輪 不	粘土紐で環状を作り, その上から中実の断面形が円形の棒状粘土紐を接合させている。いずれにしても焼き具合から環が内側か下側, 棒状粘土紐が外側か上側で, 何かに接合していたものと思われる。全面丁寧なナデ整形	細砂・雲母を多量, 極少量のスコリアを含む。焼成は良好。	橙色	DP263
11	人物埴輪 腕	腕で肩と接合する部分の右側の破片である。接合部が明瞭に残り, 肩から左前方へやや曲っている。全面丁寧なナデ整形。	細砂多量・スコリア極少量。焼成は良好。	橙色	DP257
12	人物埴輪 背～肩部	首付付近の後側部破片である。首付近には凸帯を廻らし, その下に玉を模した瘤が1個付き, 剥落痕が4か所見られる。腕部は肩部に差し込まれている。外面ハケ目整形後凸帯を廻らし, 腕を付けてナデ整形をし, 瘤を貼付けている。内面ナデ整形。	細砂・極少量の雲母とスコリアを含む。焼成は良好。	橙色	DP179
第310図 13	女子人物埴輪 スカート～胴下半部	現存高37.4cm。スカート部と胴下半部の埴輪である。スカート部の半分程, 腰飾り, 腰紐の一部は欠損。スカート部は胴のくびれ部からハの字状に開いて中空の円錐台状を呈している。このくびれ部は横長の楕円形をしている。胴部はここから直線的に開いて立ち上がっている。また, このくびれ部には腰紐を表したと思われる帯が廻り, 前面でその端部が重なっている。なお, 胴部前面には乳房を表わしたと思われる棒状工具で描かれた二重円が左右に見られ, スカートの左側には斜になって欠損した腰飾りの痕跡が認められる。成形はくびれ部を境にして上と下を別個に作って, ここで接合し, その上に帯状の粘土を廻らして補強している。外面は8/2cm本の縦ハケ目整形をし, その後くびれ部に廻らした帯と前面の上半部, 腕の接合部周辺をナデ整形している。内面はスカート部の端部へハケ目整形をし, その後ていねいに指ナデ整形をしている。内面のくびれ部と右腕の接合部には接合痕が明瞭に残っている。	細砂を多量, 小礫とスコリアを極少量含む精良な胎土。焼成は良好。	橙色	DP178
	人物埴輪 スカート 端部	人物埴輪の胴部から下へ続く円筒状の途中へ板状の粘土輪を貼り付けて引き伸ばしたスカート端部片である。表・裏面とも9/2cm本のハケ目で接合整形をし, その後表面端部にていねいなナデを施している。裏面は雑なナデでハケ目が残っている。また, 接合部が剥落した痕が明瞭に残っている。	細砂を多量に含む精良な胎土。焼成は良好。	橙色	DP254
15	人物埴輪 美豆良	中実の断面形が円形で棒状粘土の下端を指で押圧して引き出し, あたかもL字状に作り, その先端を尖らせている。全面丁寧なナデ整形であるが, 火裏に当たる部分に照りがなく, 左側の美豆良である。	細砂多量, スコリア極少量を含む。焼成は良好。	橙色	DP259
16	人物埴輪 腕	腕の破片であり, 肘部と考えられるが左右の判断はできない。全面丁寧なナデ整形。	細砂多量, スコリア極少量を含む。焼成は良好。	橙色	DP258
17	人物埴輪 美豆良	中実の断面形が楕円形で棒状粘土の下端を指で押圧して引き出し, あたかもL字状に作り, その先端を尖らせている。全面丁寧なナデ整形であるが, 火裏に当たる部分に照りがなく, 左側の美豆良である。	細砂多量, スコリア極少量を含む。焼成は良好。	橙色	DP260
18	形象埴輪 不	中実の断面形はほぼ円形の棒状粘土で, 端部を平坦に作っている破片である。全面ナデ整形。	細砂・雲母を多量, 極少量のスコリアを含む。焼成は良好。	橙色	DP262

図版番号	種別・部位	形態、整形技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
第310図 19	人物埴輪 腕	中実の断面形が円形の棒状粘土2本を作って、半円を描くように接合して曲げ、また、肩部へ差し込む接合部も作っている右側の腕である。なお、曲っている腕の接合部は上部をやや引き出して着衣を表現しているようである。 全面丁寧なナデ整形。	細砂多量、スコリア極少量を含む。焼成は良好。	橙色	DP256
20	人物埴輪 美豆良	中実の断面形が円形の棒状粘土の下端を指で押圧して引き出しているが、その先端部は欠損している。接合部と火裏や照りの具合から判断すると左側の美豆良と思われる。 下端部がDP259・DP260とはやや趣を異にして、平坦で丁寧に仕上げている。全面丁寧なナデ整形。	細砂・雲母を多量、極少量のスコリアを含む。焼成は良好。	橙色	DP261
第311図 21	形象埴輪 不明	台部と何らかの脚部と思われる接合部片である。 生地に薄い板状粘土を貼り付け、ここへ棒状工具で横へ1本、手前へ3本の直線を描いている。外面はハケ目整形後、接合部と貼付部をナデ整形。 内面ナデ整形。	細砂・雲母を多量に含む精良な胎土。焼成良好。	橙色	DP246
22	形象埴輪 不明	DP177の脚部間と思われる部位に見られた、二又に分かれる水鳥の水掻きを連想させる粘土板を貼付けたものと類似している。 この粘土板上へ籠状工具で横へ1本、向かって左側へ2本、右側へ3本の線を手前へ描いている。外面はていねいなナデ整形、内側は指ナデ整形。	細砂を多量、極少量のスコリアを含む精良な胎土。焼成は良好。	橙色	DP247
23	形象埴輪 不明	接合部片。彎曲している。 外面ハケ目整形後ナデを施している。接合部痕が残る。内面比較的雑なナデ整形。	細砂を多量に含む。焼成は良好。	橙色	DP250
24	形象埴輪 不明	外側に彎曲した一部接合部と凸帯のある破片である。 外面、8/2cm本のハケ目整形。その後凸帯を貼り付けてナデ整形を施している。	細砂、極少量のスコリアを含む精良な胎土。焼成は良好。	橙色	DP248
25	形象埴輪 不明	接合部片。部位全く不明。円筒状の一部であるが外側にやや内傾してもう1つが接合している。 外面ハケ目整形後ナデを施している。内面ナデ整形。	細砂を多量に含む。焼成は良好。	橙色	DP249
26	形象埴輪 不明	くの字状に曲った所へ断面が三角形の凸帯らしきものを廻らし、それに接して玉を模したような瘤を1個(1個は剝落)付けている。 外面ハケ目整形後ナデを施している。	細砂を多量、スコリアを極少量含む。焼成は良好。	橙色	DP251
27	形象埴輪 不明	DP177・DP247の貼付した粘土板と酷似した破片。横に1本の線、それに接して手前に3本の直線が描かれている。 外面丁寧なナデ整形。内面ナデ整形。	細砂を多量に含む精良な胎土。焼成は普通	浅黄橙色	DP252
28	形象埴輪 不明	接合部片である。ナデがていねいに施されて接合され、その上に細紐が2本貼付けられている。 外面ハケ目整形後、接合がなされ、その後ナデ整形。内面ナデ整形。	細砂を多量に含む精良な胎土。焼成は良好。	橙色	DP253
29	形象埴輪 不明	部位全く不明の破片である。表面は彎曲し、その上に棒状粘土を貼付け、先端部をやや球状のように仕上げている。 丁寧なナデ整形をしている。内面も比較的丁寧なナデ整形である。	細砂多量、スコリア極少量を含む。焼成は良好。	橙色	DP255

### 第17号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器器の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第311図 30	壺形土器 土師器	B(11.5) C「6.6」	底部は平底である。胴部はやや扁平な半球状を呈している。頸部は器厚を極く薄くして、やや外傾して立ち上がっている。胴部内面に輪積痕が見られる。	内・外面とも籠ナデ整形。その後胴部外面、頸部内・外面へ朱を施している。	砂粒 に お い 橙 色 普 通	40% P126
31	甕形土器 土師器	A「17.8」 B(5.3)	頸部はゆるいくの字状を呈し、口縁部は頸部から大きく外反して開いている。	内・外面とも籠ナデ整形。その後頸部外面、口縁部内・外面をナデ整形している。	砂粒・スコリア 明褐色 普通	5% P125

第18号古墳 (第313図)

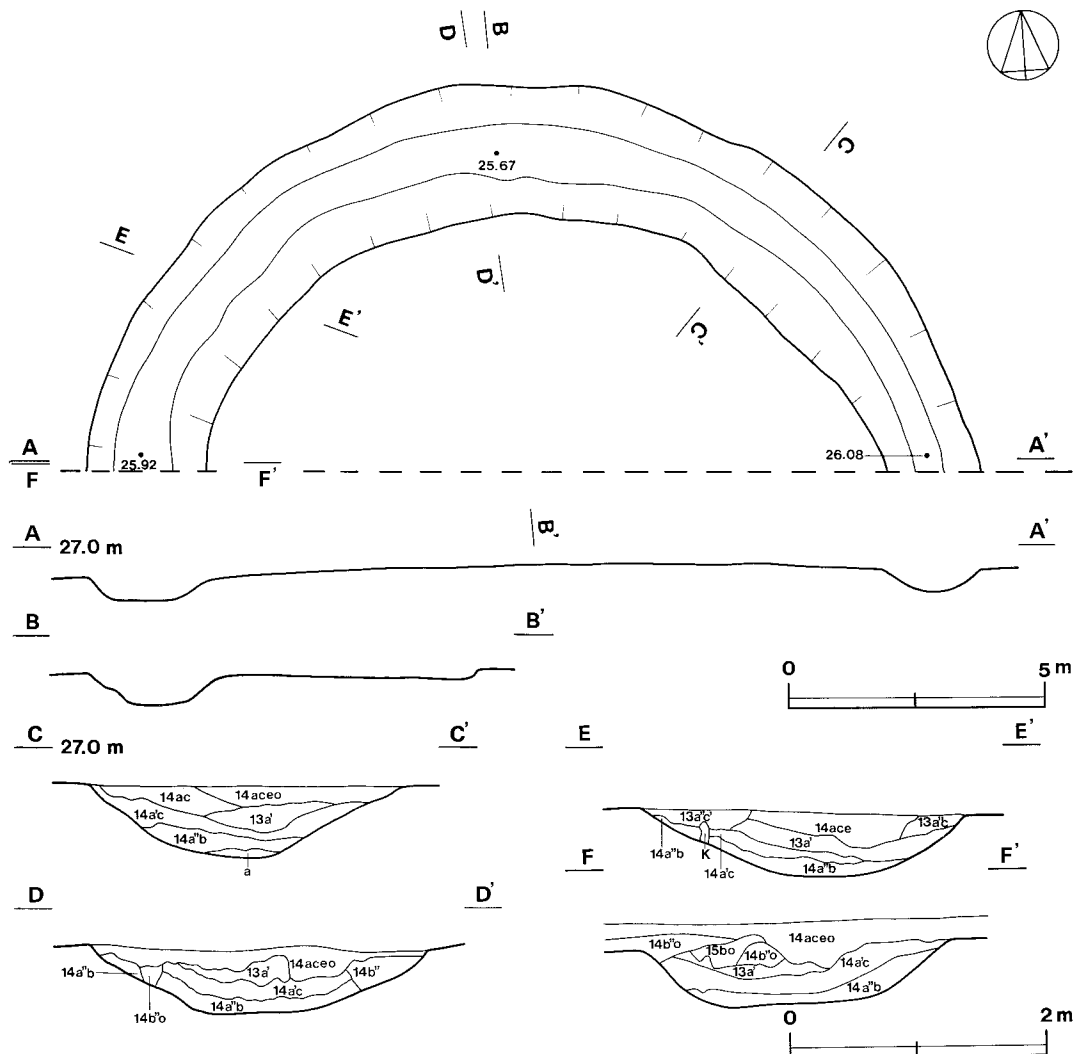
(1) 古墳の現状

本墳は、F8区における宿台地の平坦部、宿二ノ谷の南側に位置している。東南東42m程には第37号古墳(整理の段階で第1号塚)、南南東側37m程には第38号古墳(整理の段階で第2号塚)、北西側35m程には第17号古墳がそれぞれ隣接している。本墳の南側は調査エリア外であるため、約半分が未調査である。

(2) 古墳の構造

〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明であ



第313図 第18号古墳実測図

る。調査した周溝と半円状の平坦な墳丘下から判断すると、その形状は円墳と思われる。計測できた最大径は周溝の内側で13.6mである。標高は26.78mである。

#### 〈周 溝〉

周溝の上端は墳丘側・外側ともに比較的なだらかなカーブを描いて、平面形は墳丘を取り囲むように半円状に掘られている。上幅は1.8～2.8m、下幅は0.5～1.1m、深さは0.5～0.6mである。壁面はロームで、墳丘側・外側ともに溝底から同じような角度でゆるやかに立ち上がっている。溝底はほぼ平坦で標高は25.67～26.08mである。覆土は上層に多量のローム粒子を含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子を含む褐色土がそれぞれ締まって堆積している。

#### (3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。

#### (4) 古墳からの出土遺物

北側の周溝上から土師器片少量を採集したが、墳丘や周溝内覆土等からの遺物の出土はない。

### 第19号古墳（第314図）

#### (1) 古墳の現状

本墳は、E6区における宿台地の平坦部に位置している。本墳の西側20m程は平坦部であるが、その先は土取りがなされて急傾斜の崖となり、才ノ谷上となる。南南東側10m程には第17号古墳が隣接している。

#### (2) 古墳の構造

##### 〈墳 丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。周溝の北側半分は第13号溝（整理の段階で第3号堀に変更）によって切られている。そのため墳丘下はほぼ平坦で半円形に残り、また、調査した周溝から判断するとその形状は南北にやや長い円墳であると推定される。計測できた最大径は周溝の内側で南～北が9.3m、短径は東～西で6.9mである。標高は27.02mである。

##### 〈周 溝〉

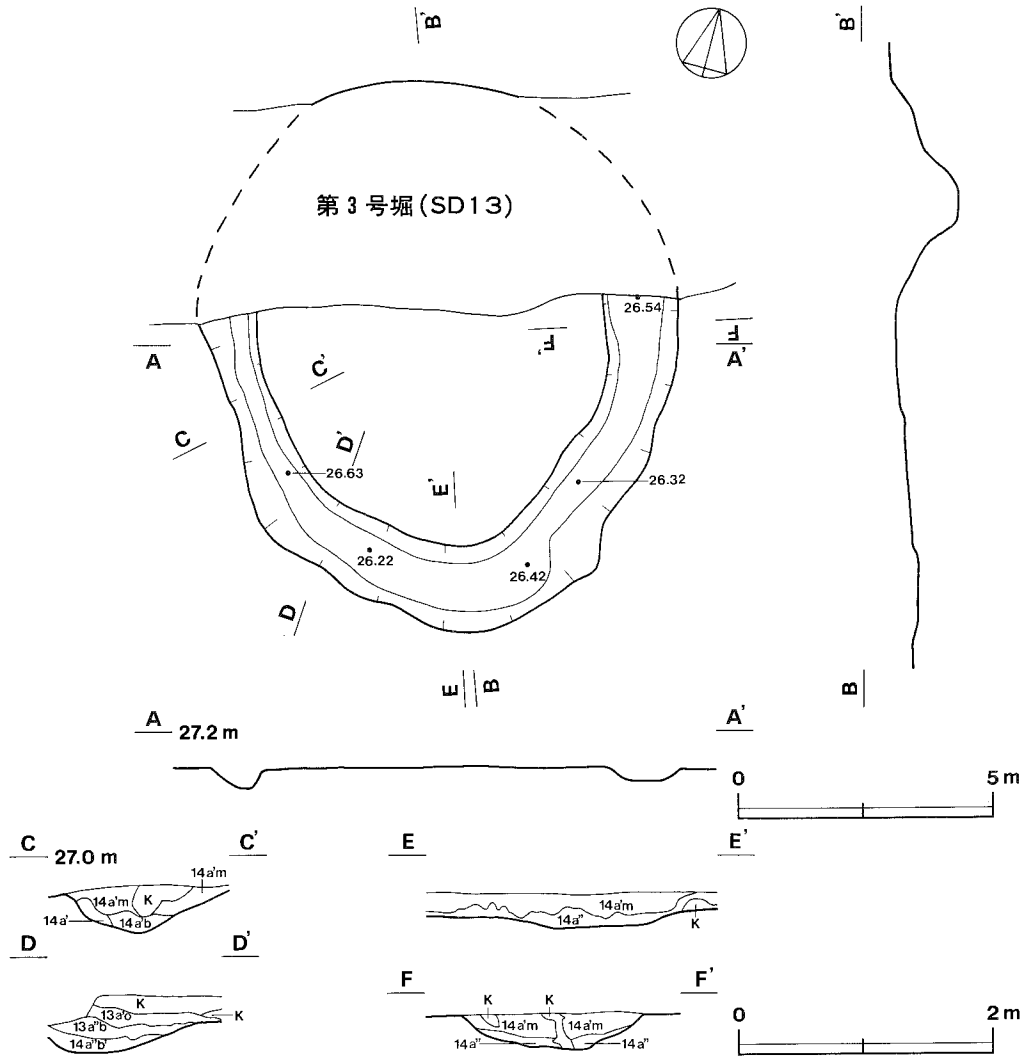
南側に残存した半円形状の周溝は、その上端が墳丘側・外側ともにゆるい波状を呈している。また、周溝は幅の広・狭を呈し、平面形は墳丘を取り囲むように半円形状に掘られている。最大幅は南側で1.8m、最小幅は西側で0.8m、下幅は0.3～1.0mである。深さは0.2～0.4mである。溝底は平坦で、標高は26.22～26.54mである。壁面はソフトロームで、墳丘側・外側ともに溝底からゆるやかに立ち上がっている。覆土は上層に薄くローム粒子を含む暗褐色土が、下層にローム粒子を多量に含む褐色土が締まって堆積している。

(3) 埋葬施設

墳丘の下面と周溝内を精査したが、検出されなかった。

(4) 古墳からの出土遺物

墳丘・周溝内からの出土遺物は皆無である。

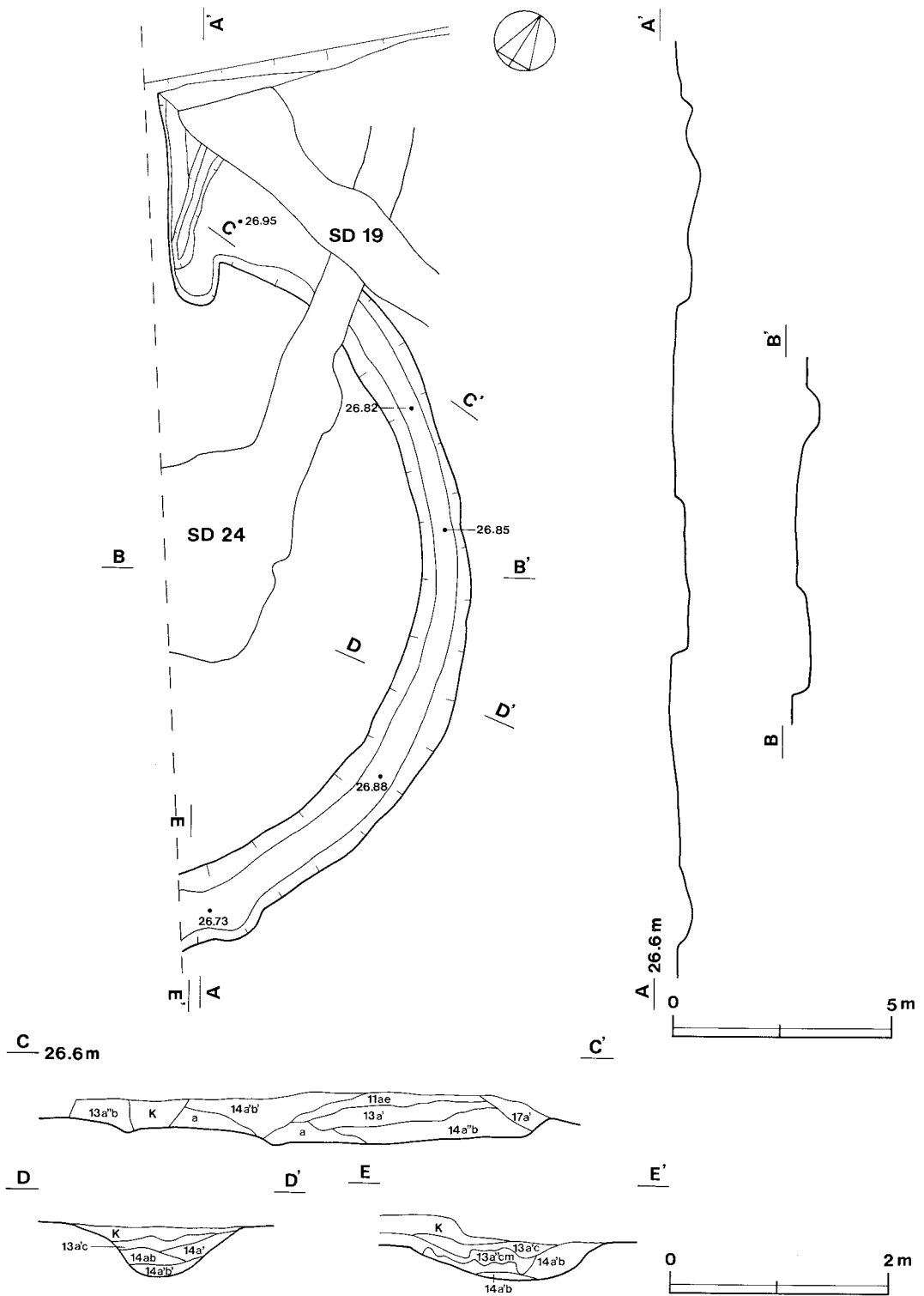


第314図 第19号古墳実測図

第20号古墳 (第315図)

(1) 古墳の現状

本墳は、F7区における宿台地の平坦部に位置している。本墳の西側には生活道路が北北西～南南西へ延び、そこから6m先は最近土取りされて急傾斜の崖となっている。本墳の北側に第17号古



第315图 第20号古墳実測図



墳が接し、東南東側31m程には第18号古墳が隣接している。

(2) 古墳の構造

〈墳 丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。また、本墳の西側部2分の1は生活道路下とエリア外となっていて未調査である。墳丘下は、中央部がやや高まりを残しているが、そのほぼ中央部でくの字状に北と西へ曲る第24号溝に切られている。調査した周溝から判断すると、墳形は円墳と思われる。規模はエリア内・外の境目が最大径で、周溝の内側が14.5mである。標高は26.36mである。

〈周 溝〉

周溝は西側2分の1がエリア外になっている。周溝は北側部の一部が第24号溝に切られ、また、第17号古墳と接している所以外は、上端が墳丘側・外側とも半円形状を描いてほぼ同じ幅で、また、平面形は墳丘を取り囲むように円形状に掘られている。上幅は1.0～1.6m、下幅は0.4～0.7m、深さは0.3～0.5mである。溝底はほぼ平坦で、標高は26.73～26.95mである。壁面はロームで、北東側は墳丘側・外側とも直線的に外傾し、その他は溝底からゆるやかに立ち上がっている。覆土は、多量のローム粒子を含む暗褐色土と褐色土が締まって堆積している。

(3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。

(4) 古墳からの出土遺物

墳丘と周溝内からの出土遺物は、皆無である。

**第21号古墳（第316図）**

(1) 古墳の現状

本墳は、B5区における瘦峰台地の平坦地に位置している。南西側12m程には第12号古墳が隣接している。また、本墳の南東側周溝と第38号住居跡が重複している。

(2) 古墳の構造

〈墳 丘〉

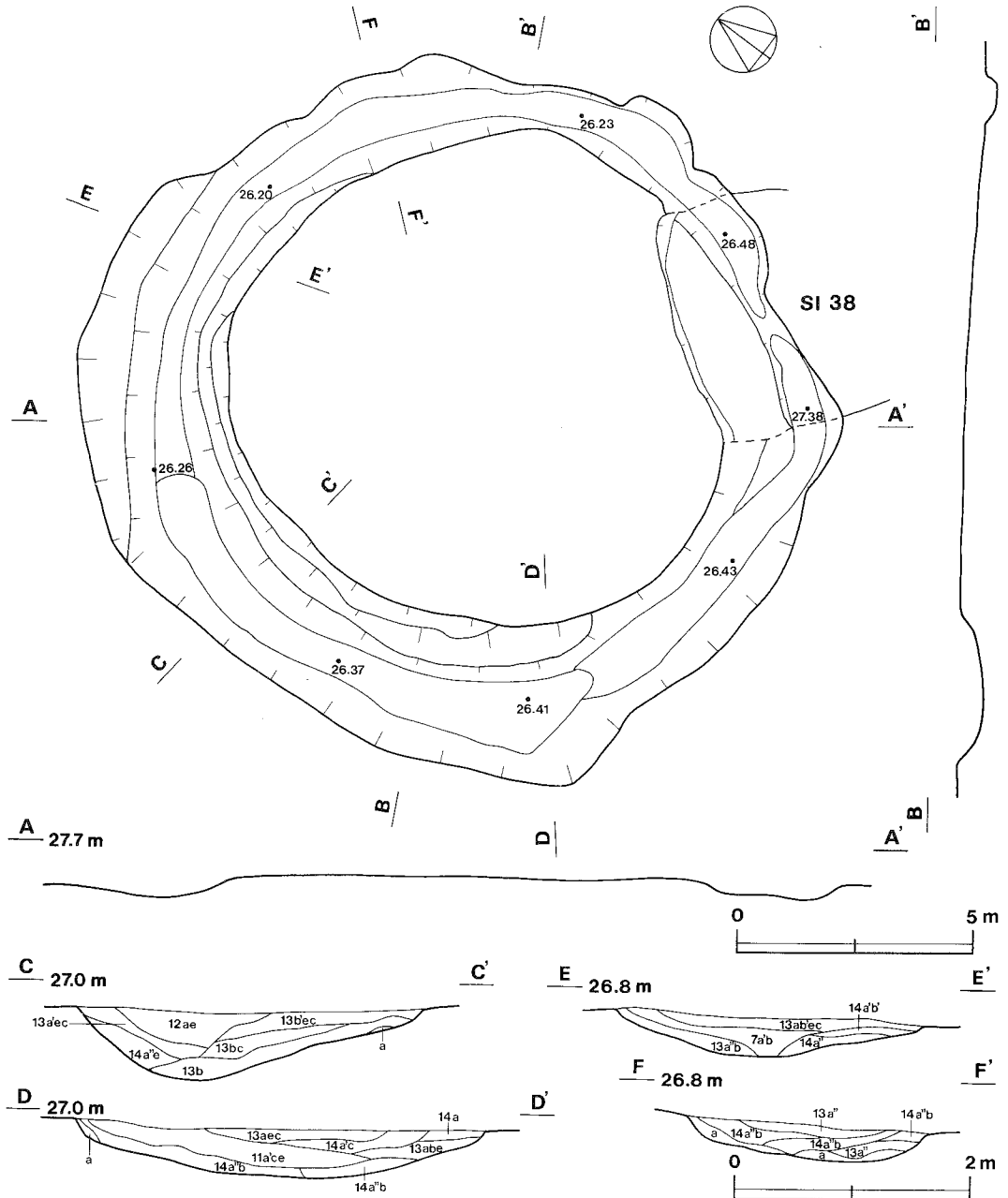
墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されており、封土の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、墳形は円墳である。規模は周溝の内側で長径10.8m・短径10.5mである。標高は27.11mである。

〈周 溝〉

周溝はおおむね西側が広く、北東側が狭い。平面形は墳丘を取り囲むように円形に掘られている。上幅の最大は3.5m、最小は0.9m、下幅は0.4～1.2mである。深さは0.3～0.6mである。溝底

はほぼ平坦で標高は南東側の一部が高く27.38m、西側が低く26.14mである。壁面はロームで、墳丘側は外傾、外側はゆるやかに溝底から立ち上がっている。覆土は暗褐色土と褐色土が主体で、レンズ状に自然堆積している。

なお、南東側の周溝と第38号住居跡が重複しているが、土層から観察すると、古墳時代前期の住居跡の覆土を周溝が切っている様子がうかがえる。



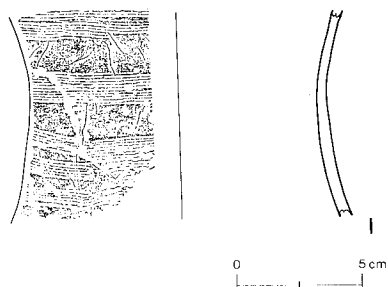
第316図 第21号古墳実測図

(3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。

(4) 古墳からの出土遺物 (第317図)

周溝から流れこみと思われる弥生式土器片が出土したが、本跡に伴うと思われる遺物は出土しない。



第317図 第21号古墳出土遺物  
実測・拓影図

第21号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第317図 1	長頸壺 弥生式土器	B (8.3)	頸部は外反して立ち上がっている。外面には6本1単位の櫛描による直線文を4単位廻らしている。	内・外面ともナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	3% P127

第22号古墳 (第318図)

(1) 古墳の現状

本墳は、Z2・A2区における瘦峰台地の平坦部に位置している。南東側9m程には、第4号古墳が隣接している。なお、西側の約半分は調査区外である。

(2) 古墳の構造

〈墳丘〉

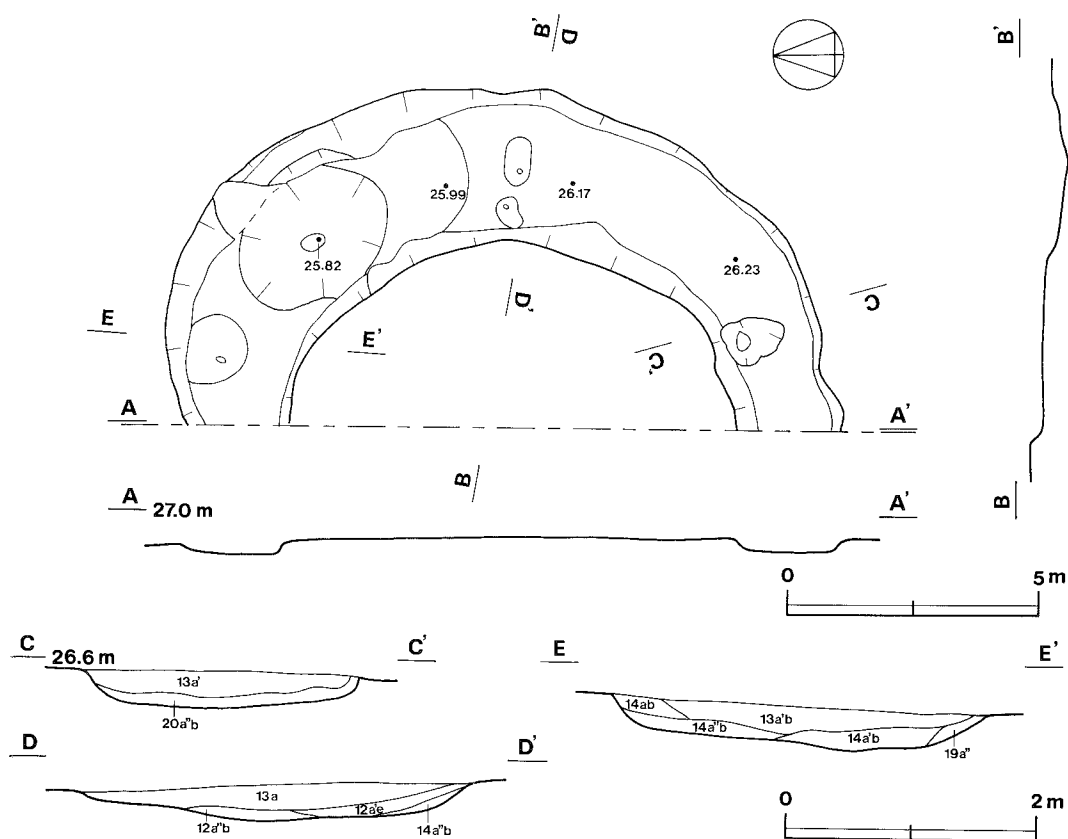
墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。また、西側が調査区外であるため未調査である。周溝が弧状に廻っていることから判断すると円墳である。規模は、調査した周溝の内側の最大長径が8.9mである。標高は26.60mである。

〈周溝〉

調査した周溝はおおむね東側が広く、北側と南側が狭い。平面形は墳丘を取り囲むように円形に掘られている。上幅は2.8~3.5m、下幅は1.4~2.4mである。深さは0.3~0.4mである。溝底はほぼ平坦で、標高は南側が高く26.26m、北東側が低く25.85mである。壁面はロームで、墳丘側は一部がやや外傾しているが大部分は外側とともにゆるやかに溝底から立ち上がっている。周溝の覆土は主として上層にローム粒子を含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子を含む褐色土がよく締まって堆積している。

(3) 埋葬施設

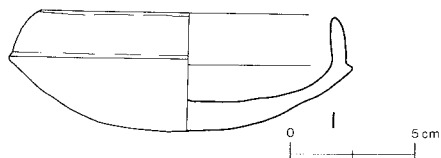
墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。



第318図 第22号古墳実測図

(4) 古墳からの出土遺物 (第319図)

北東側の周溝の底面から、第319図1の古墳時代後期に比定される土師器の環形土器片1点が出土している。



第319図 第22号古墳出土遺物実測図

第22号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第319図 1	環形土器 土師器	A 11.7 B 4.7	丸底を呈し、体部は内彎しながら斜上方に立ち上がる。口辺部はわずかに内傾して垂直に立ち上がる。体部と口辺部の境に稜が見られる。	底部外面へラ削り整形、体部内面、口縁部内・外面ともナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	98% P128

## 第23号古墳（第320図）

### (1) 古墳の現状

本墳は、C9・C10区を中心に、宿二ノ谷に面した宿台地の平坦部の西縁部に位置している。東側10m程には第26号古墳が隣接している。

### (2) 古墳の構造

#### 〈墳 丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、墳形は円墳である。規模は周溝の内側で長径18.9m・短径16.7m、標高27.16mである。

#### 〈周 溝〉

周溝の上端は墳丘側・外側とも円形に全周し、その幅はおおむね東側～南側が広く、西側は狭い。平面形は墳丘を取り囲むように円形に掘られている。上幅は2.6～6.8m、下幅は1.2～4.6mである。深さは0.3～0.5mである。溝底はほぼ平坦で、標高は26.24～26.73mである。壁面はロームで、墳丘側・外側とも溝底からゆるやかに立ち上がっている。覆土は大部分がローム粒子を含む暗褐色土で、一部にローム粒子を含む黒褐色土が含まれ、溝底付近は多量のローム粒子を含む褐色土がよく締まって堆積している。

### (3) 埋葬施設

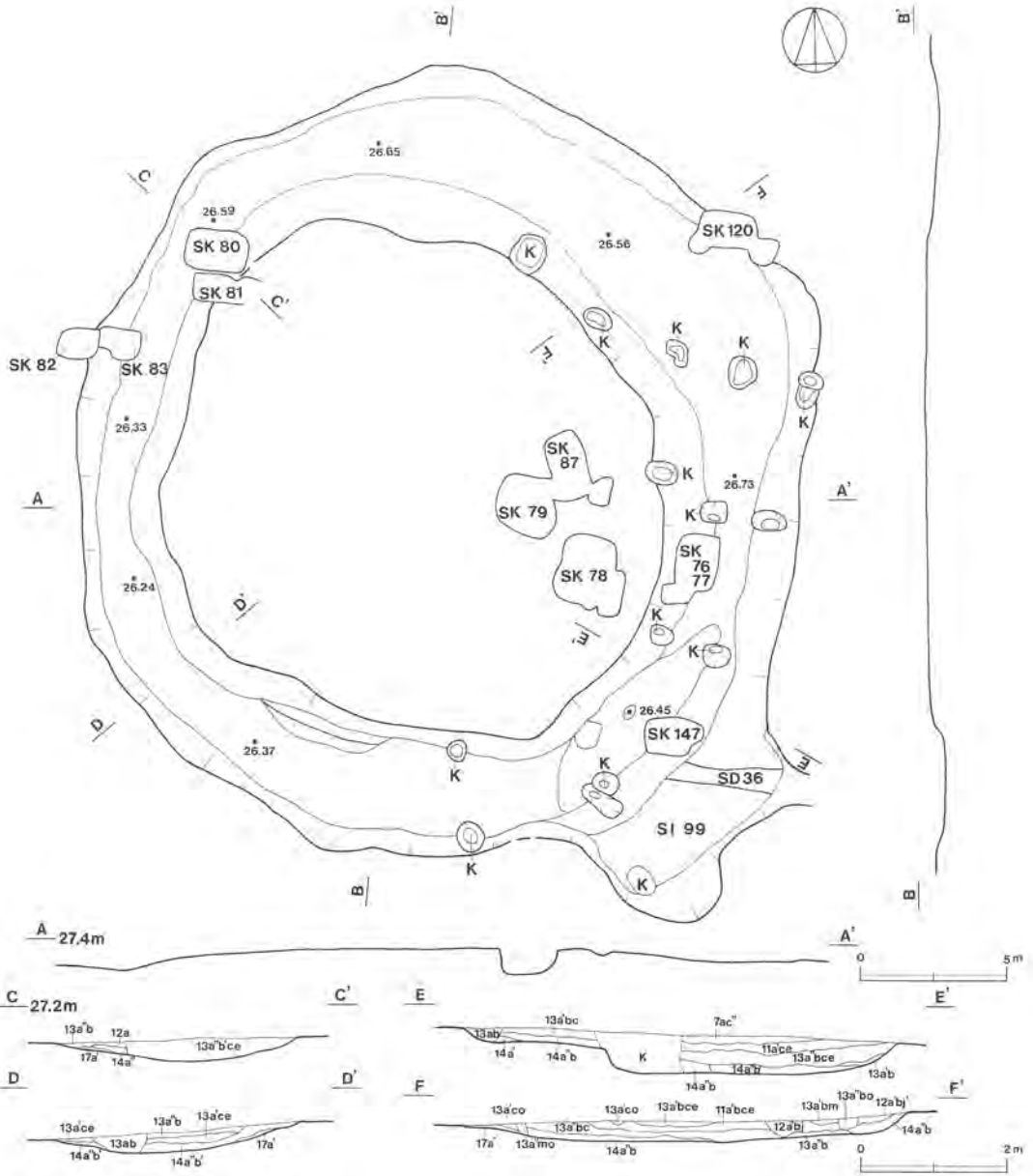
墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。なお、墳丘下にある第78・79・87号の3基の土坑は、覆土を観察するといずれも当古墳より新しい時代に掘られたものと思われる。また、周溝と重複している第76・77・80～83・120・147号の8基の土坑があるが、土層を観察すると、いずれの土坑も周溝の覆土を切っている様子がうかがえ、当古墳より新しいものであり、本墳との関係はないものと思われる。

### (4) 古墳からの出土遺物（第321図）

東側の周溝上部から、流れ込みと思われる近世の陶器片、西側周溝上部から、古墳時代前期の高坏形土器の脚部小片、その他、第321図1の弥生式土器の壺口縁部片1点、2の球状土錘1点、土師器片が出土しているが、いずれの遺物も本跡に伴うものとは思われない。

第23号古墳出土土器観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第321図 1	壺 弥生式土器	A「13.1」 B (6.5)	頸部はくの字状を呈し、器厚を減じながら口縁部へ外反して開いている。口縁部は複合口縁で、下端には棒状工具でキザミ目を廻らしている。	内・外面ともナデ整形後に、赤彩。	砂粒 橙色 普通	10% P131



第320图 第23号古墳実測図



第321图 第23号古墳出土遺物実測・拓影図

## 第24号古墳（第322図）

### (1) 古墳の現状

本墳は、C10・C11区における宿台地のほぼ中央部の平坦地に位置している。本墳の占地する辺りから北側に向かってゆるやかに傾斜し、墳丘の南側と北側では北側が0.4m程低くなっている。南南西側7m程には第26号古墳が隣接している。

### (2) 古墳の構造

#### 〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、墳形は円墳である。規模は周溝の内側で長径12.4m・短径12.0m、標高は26.64mである。

#### 〈周溝〉

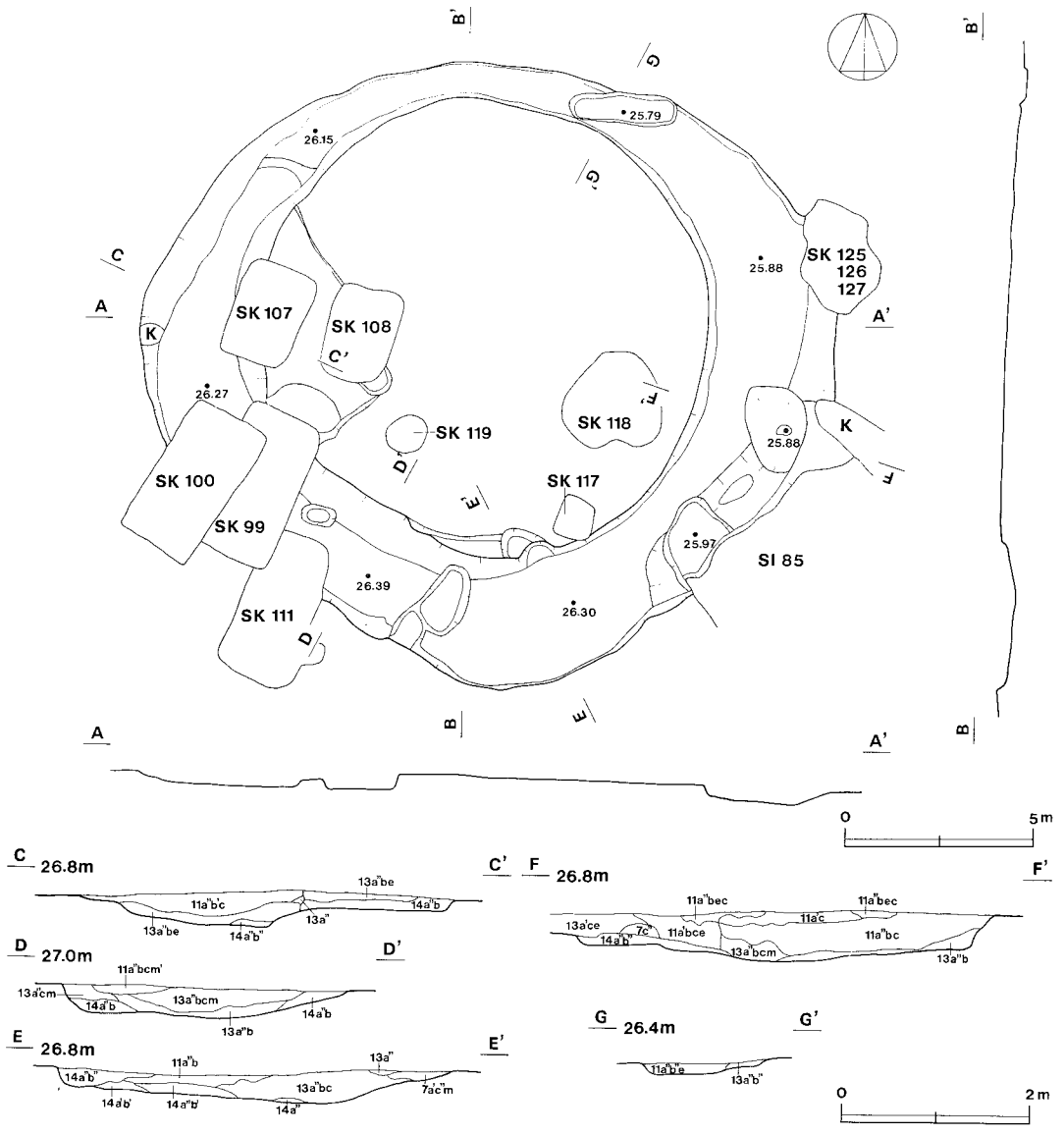
周溝の平面形は、墳丘を取り囲むように円形に掘られている。地形は南側より北側が0.4m低くなっているため、溝の幅と深さは北側が狭くて浅い。周溝の上幅は0.9～3.6m、下幅は0.7～3.0mである。深さは0.1～0.5mである。溝底はほぼ平坦で、標高は、25.88～26.39mである。壁面はロームで、墳丘側の一部がやや外傾するものの、他はゆるやかに立ち上がっている。周溝の覆土は大部分が多量のローム粒子を含む黒褐色土・暗褐色土で、溝底付近に多量のローム粒子を含む褐色土が粘性を帯びて良く締まって堆積している。なお、南西側周溝と古墳時代前期の第85号住居跡が重複しているが、土層を観察すると、住居跡の覆土を切って周溝が掘られており、当古墳は住居跡より新しい遺構であると判断される。

### (3) 埋葬施設

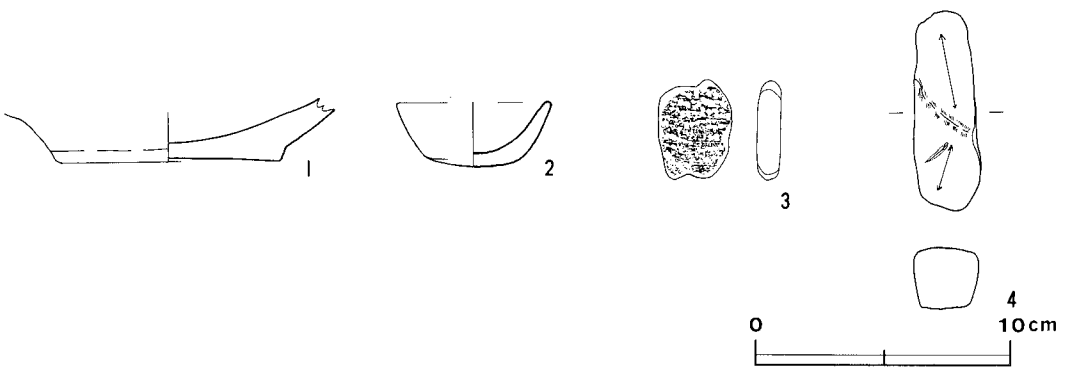
墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。なお、墳丘内にある第107・108・117・119号土坑は、覆土を観察するといずれも新しいものであり、埋葬施設等との関連はないものと思われる。また、周溝と第99・100・111・125～127号土坑が重複しているが、土層を観察すると周溝内覆土を土坑が切っている様子うかがえ、当古墳との関係は認められない。

### (4) 古墳からの出土遺物（第323図）

第85号住居跡や土坑と重複している周溝内覆土から、第323図1の土師器の甕形土器底部や2のミニチュア土器、3の土器片錘や4の砥石の他に、弥生式土器片2点、土師器4点が出土している。



第322图 第24号古墳実測図



第323图 第24号古墳出土遺物実測・拓影図



## 第24号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第323図 1	壺形土器 土師器	B (2.0) C 8.8	底部は平底で中央部が凹み、器厚が薄い。胴下半部は底部から直線的に大きく外傾して立ち上がる。	内面剝離が激しく、整形法は不明。外面は篋ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	10% P132
2	ミニチュア 土器 土師器	A (6.1) B 2.6	底部は丸底で不安定である。胴部は内彎して立ち上がっている。	内・外面ともナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P139

## 第25号古墳 (第324図)

### (1) 古墳の現状

本墳は、C11・D11区における宿台地のほぼ中央部に位置している。本墳の占地する辺りから北側に向ってゆるやかに低く傾斜し、墳丘の南側と北側では北側が0.5m程低くなっている。南東側6m程には第29号古墳が隣接している。また、墳丘下には第69～72・74・75号土坑、北側には周溝に切られている第91号住居跡が重複している。

### (2) 古墳の構造

#### 〈墳丘〉

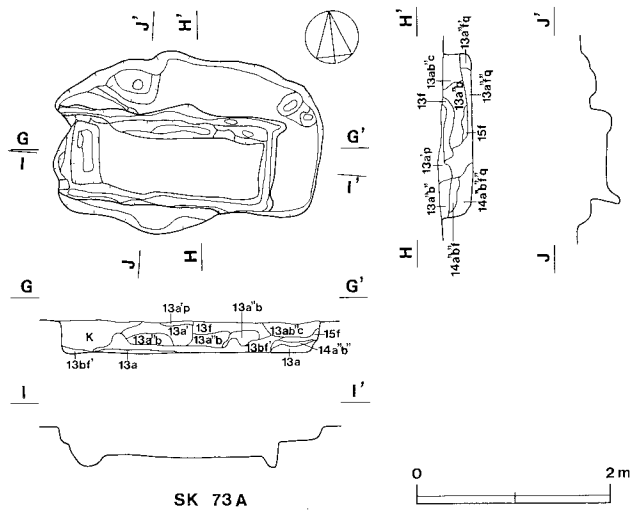
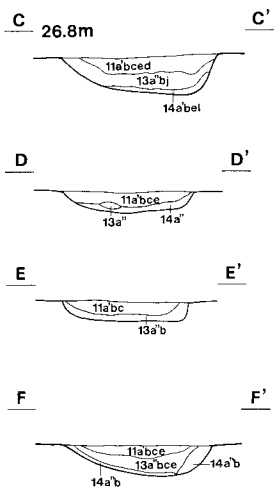
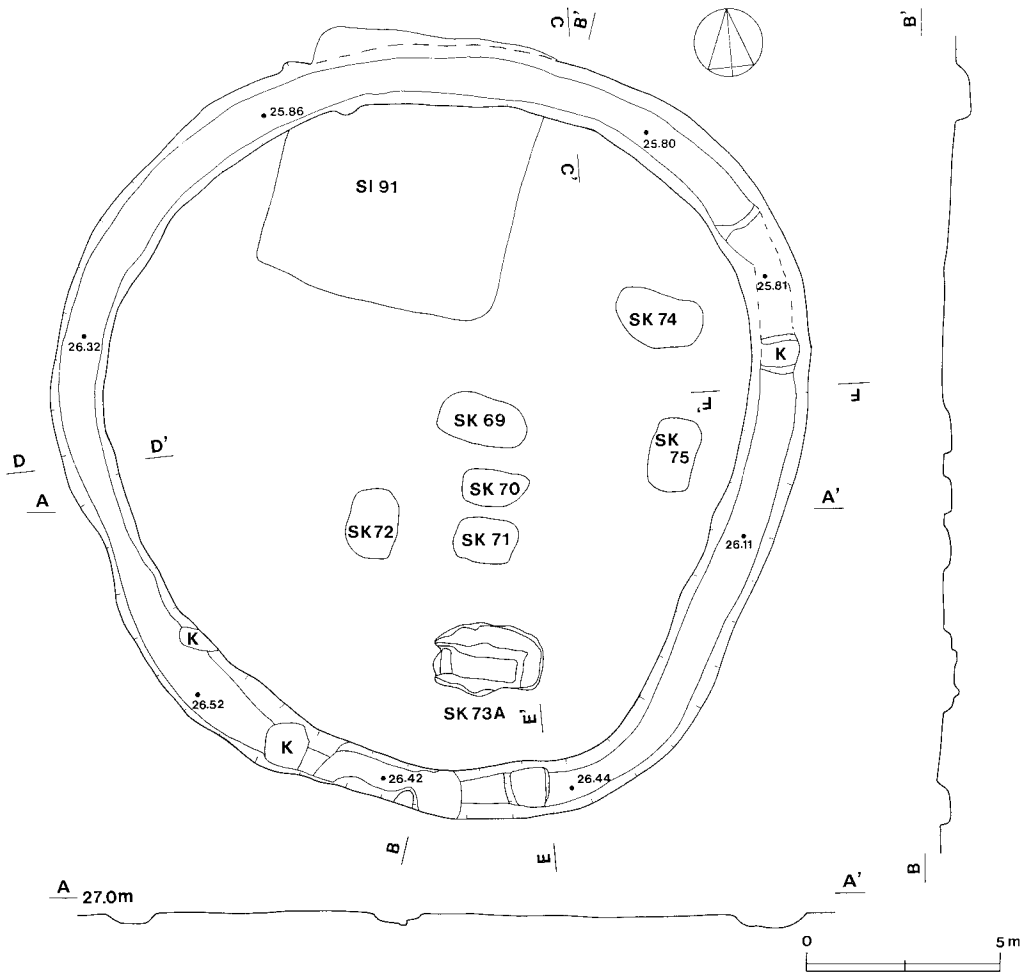
墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、墳形は円墳である。規模は周溝の内側で長径17.6m・短径17.4m、標高は26.71mである。

#### 〈周溝〉

周溝の平面形は墳丘を取り囲むように円形に掘られている。周溝の上幅は1.1～1.7m、下幅は0.5～1.1mである。深さは南西側より北東側がやや深く0.2～0.4mである。なお、周溝の一部は住居跡と重複している。溝底はほぼ平坦で標高は25.80～26.52mである。壁面はロームで、墳丘側は周溝底から外傾、もしくは垂直に近い角度で立ち上がり、外側はゆるやか、もしくは外傾気味に立ち上がっている。周溝の覆土はローム粒子を含む黒褐色土・暗褐色土を主体とし、下層にローム粒子を含む褐色土等が良く締まって堆積している。

### (3) 埋葬施設

埋葬施設は、ほぼ長径上の南側の周溝近くの第73A号土坑に設置された箱式石棺と思われる。当初、土坑として調査を開始したが、掘り込むうちに粘土の小塊が検出されたので、主体部としての調査をすすめたが、ほとんど破壊されていた。攪乱を受けている粘土の小塊を含む暗褐色土・褐色土・灰褐色土の覆土を除去すると土坑の底面から、石棺の底石として使用されたとと思われる雲母片岩の小片が数片散在して出土した。土坑は攪乱を受けて不整形円形状になっている。土坑内

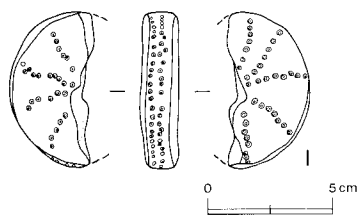


第324图 第25号古墳実測図

壁下には側石や妻石を立てたと思われるU字状の溝が上端15~36cm、下端6~10cm程で、ほぼ東~西に長い長方形に検出された。西側の妻石があったと思われる部分には、土坑底をも抜く攪乱穴があったが、残っていた凹み等から推定すると、内法長辺1.7m、短辺0.6m規模の石棺が存在したと思われる。長軸はほぼ東~西でN-77°-Wを指している。なお、この埋葬施設は現存している墳丘下から土坑底までが0.33mと浅いことから、当初は旧表土層上から掘り込んでいたものと思われる。さらに、覆土をフルイにかけて調べたが遺物は全く出土しなかった。なお、墳丘内にある土坑は、土坑内覆土から判断すると、いずれも本墳より新しいものである。また、北側にある住居跡は本墳より古いものである。

#### (4) 古墳からの出土遺物 (第325図)

北東側の周溝内覆土中に、流れ込みと思われる縄文時代早期の尖底土器底部や土師器片7点の他に、第325図1の土製紡錘車1点が出土している。本跡に伴うと思われる遺物の出土はなかった。



第325図 第25号古墳出土遺物実測図

### 第26号古墳 (第326図)

#### (1) 古墳の現状

本墳は、C10・D10区における宿台地のほぼ中央部の平坦地に位置している。北北東側7m程には第24号古墳が隣接している。また、墳丘と第124・142・159・160号土坑、周溝と第141・143号土坑や攪乱穴等が重複している。

#### (2) 古墳の構造

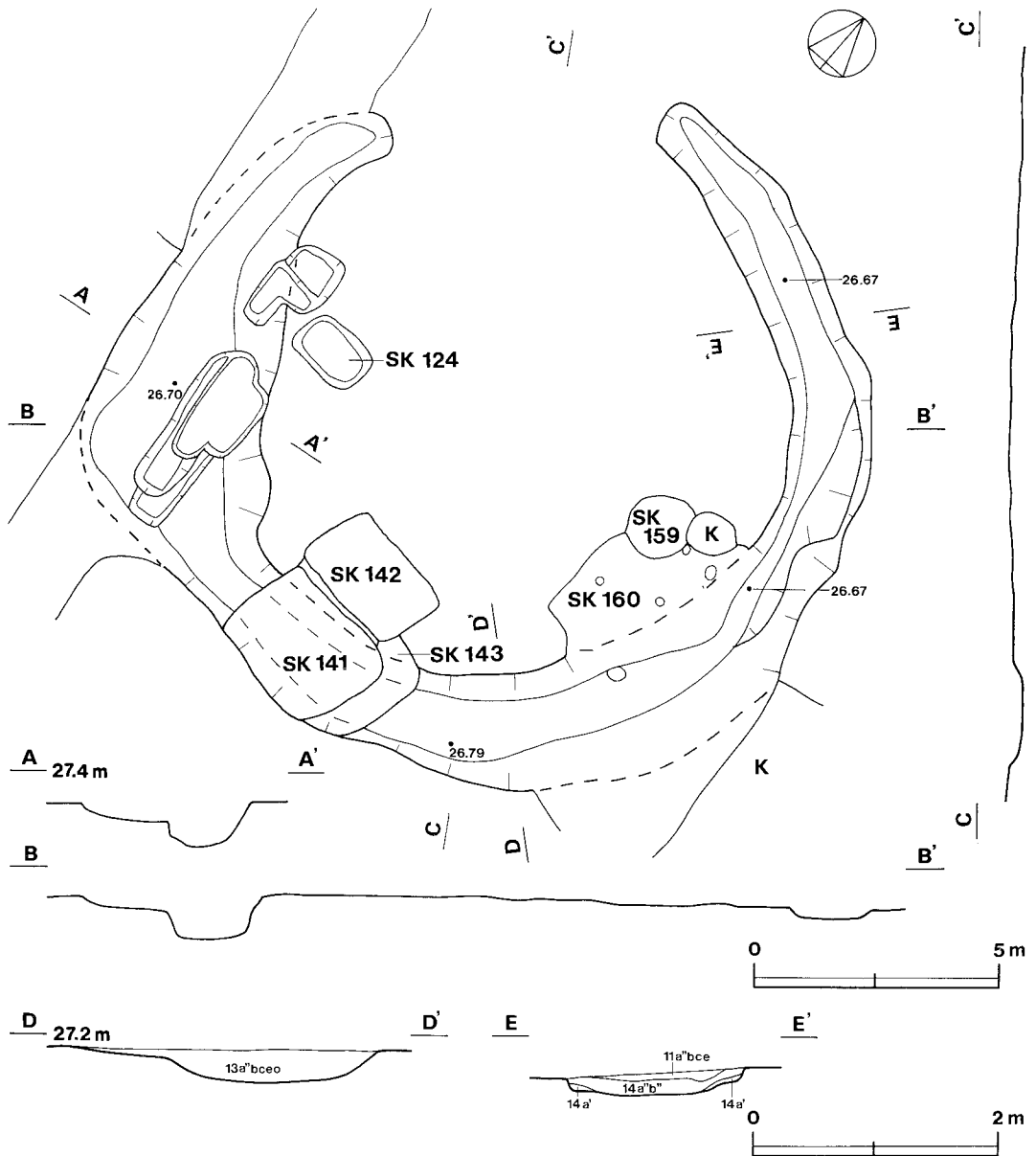
##### 〈墳丘〉

墳丘は、耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。墳形は調査した周溝から判断すると円墳である。規模は、北西側がブリッジ状を呈し、周溝の途切れる所があるが、墳丘を推定したラインから計測して、長径11.5m・短径11.0mである。標高は27.15m程である。なお、墳丘の南側第142号土坑付近には径50cm程の範囲に少量の焼土が観察された。しかし、それが何に関係するものかは不明である。

##### 〈周溝〉

周溝は北西側がブリッジ状に掘り残されているが、平面形は墳丘を取り囲むように、円形状に掘られている。周溝の幅はブリッジに近づくにつれて狭くなるが、上幅1.5~1.8m、下幅0.3~1.2

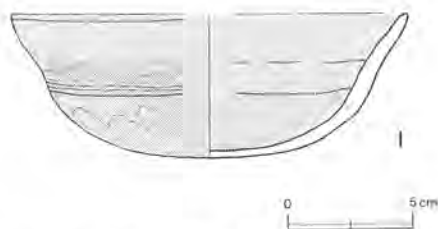
mである。深さは0.1~0.5mである。溝底は平坦で、標高は26.67~26.79mである。壁面はロームで、墳丘側・外側ともに溝底からゆるやかに立ち上がっている。周溝の覆土はおおむね2層で、上層は多量のローム粒子等を含む黒褐色土、下層は極多量のローム粒子を含む暗褐色土等が良く締まって堆積している。



第326図 第26号古墳実測図

### (3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。なお、墳丘下にある土坑等は、土坑内覆土から判断すると、いずれも本墳より新しいものである。



### (4) 古墳からの出土遺物 (第327図)

ブリッジ付近の北側周溝のほぼ底面から、第327図1の古墳時代後期の環形土器が出土している。

第327図 第26号古墳出土遺物実測図

第26号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第327図 1	環形土器 土器器	A「15.9」 B 5.8	底部は丸底を呈し、体部は内彎しながら斜上方に立ち上がる。口縁部はそこからやや外反気味に大きく開く。	底部外面は寛削り。体部内面、口縁部内・外面はナデ整形。底部外面を除く全面に朱を施している。	砂粒 におい橙色 普通	80% P140

## 第27号古墳 (第328・329図)

### (1) 古墳の現状

本墳は、D10・D11区における宿台地のほぼ中央部の平坦地に位置している。北西側4m程には第26号古墳が隣接し、南東側0.5m程には第28号古墳が接近している。また、墳丘と第134(第1埋葬施設)・139・140・152(第2埋葬施設)・156・164号土坑、第96・102・103号住居跡、周溝と第103・135・148・149号土坑、第103・105・125号住居跡が重複している。

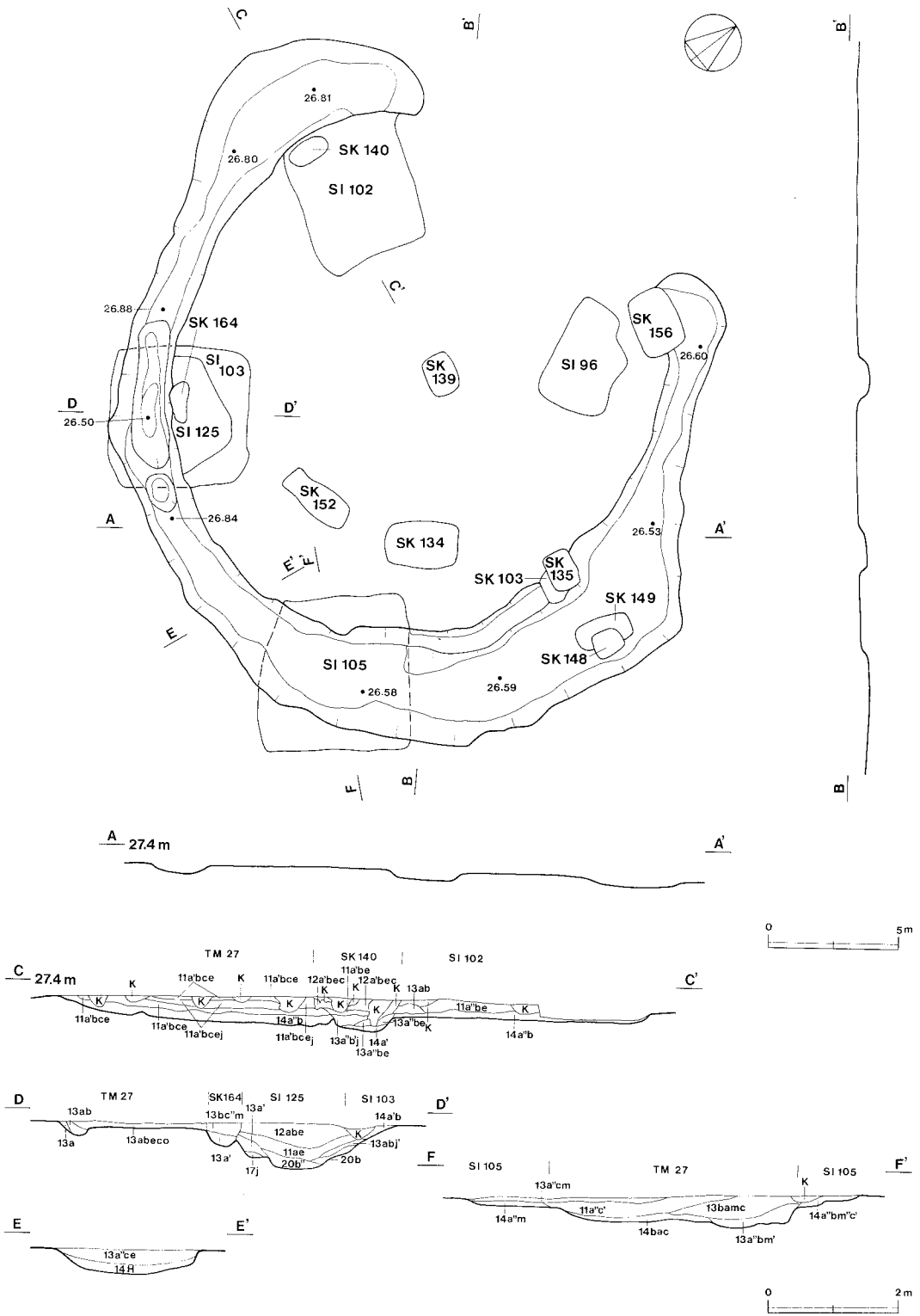
### (2) 古墳の構造

#### 〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって、旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、墳形は円墳である。規模は、北北西側で幅11.3mがブリッジ状に周溝が途切れているが、墳丘を推定したラインから計測して、周溝の内側で長径19.5m・短径18.1mである。標高は27.30mである。なお、埋葬施設は南東側の周溝寄りに、長軸方向は南西～北東にして設置されている。

#### 〈周溝〉

周溝は北北西側がブリッジ状に掘り残され、幅の広・狭はあるものの、平面形は墳丘を取り囲むように円形状に掘られている。上幅は1.3～4.6m、下幅は0.4～3.2mである。深さは住居跡と重

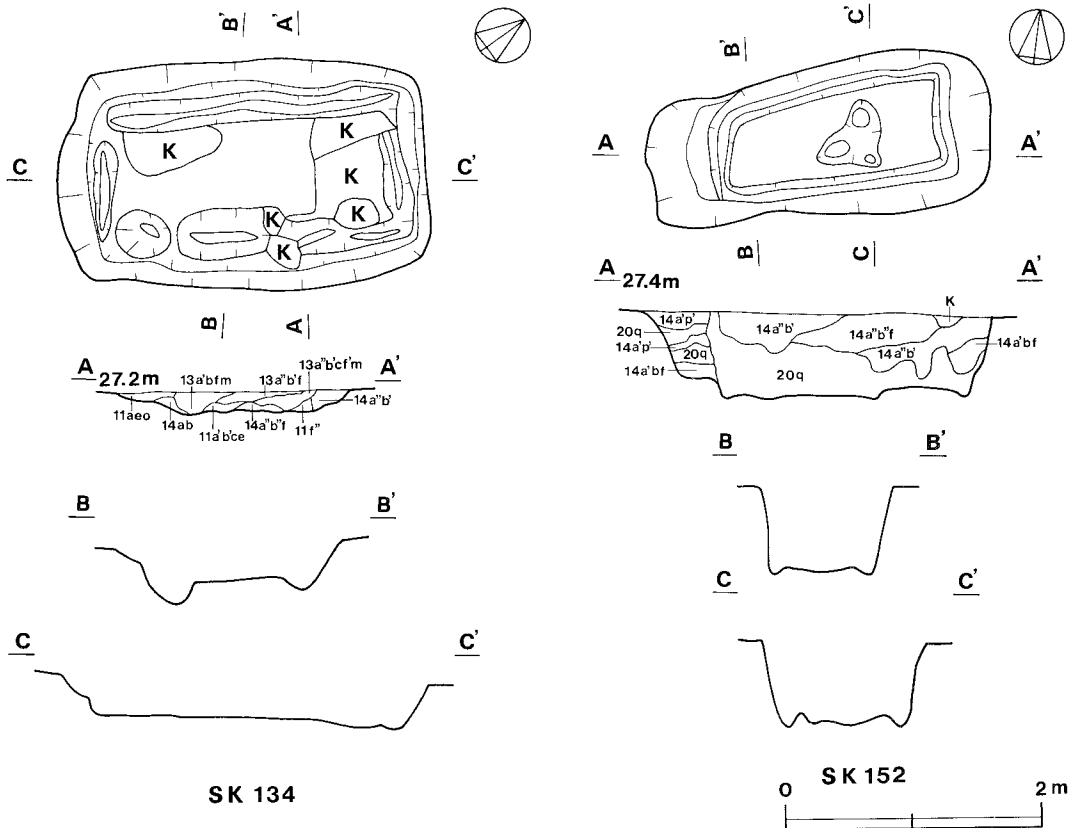


第328图 第27号古墳実測図

復する所が周辺より深くなっているが0.2~0.7mである。溝底はなだらかに起伏し、標高は26.35~26.84mである。壁面はロームで、墳丘側が外側よりやや急傾斜で溝底から外傾して立ち上がっている。外側は溝底からゆるやかに立ち上がっている。周溝の覆土はローム粒子を含む黒褐色土・暗褐色土が主体で、一部に極暗褐色土と褐色土が混じるが良く締まって堆積している。周溝と切り合っている住居跡は、土層の観察からいずれも本墳より古いものと判断する。

(3) 埋葬施設

第1埋葬施設は、墳丘中央部から南東側、周溝寄りの第134号土坑に設置された箱式石棺と思われる。当初、粘土貼り遺構として2分割して掘り込んだ。土坑は長軸2.9m・短軸1.9mの長方形を呈し、深さは0.4~0.6mである。覆土は、ローム粒子とブロック・粘土の混じった攪乱を受けていた。覆土を除去すると、掘り方である土坑が検出され、土坑底部からは2点の雲母片岩、側石が立てられたと思われる下部にあたる所から雲母片岩の剝落したもの、土坑壁面のいたる所と側石の下部外側にあたる部分から、裏込めもしくは目貼りとして使用されたと思われる青灰色の粘土が、貼り付けたような状態で検出された。土坑底部は長方形を呈して平坦で、踏みつけられたようにロームが硬く締まっている。壁下は、一部に攪乱があるものの、側石や妻石が立てられたと



第329図 第27号古墳主体部実測図

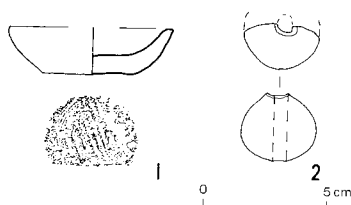
思われる溝が、周溝状にU字状を呈して上幅23~28cm、下幅3~10cm、深さは13~15cmで凹んでいる。この残された凹みから埋葬施設を復元して推定すると、内法長辺2.3m、短辺1.1mの規模の石棺が存在したと思われる。なお、棺材を引き抜く際に攪乱を受けたと思われるロームの軟かい部分が土坑底部の側石側に数か所見られた。長軸方向はN-33°-Eと思われる。また、土坑内の覆土をフルイにかけて遺物の検出を試みたが、粘土と棺材の小片、攪乱時に流入したと思われる土師器の小片と陶器の小片1点が出土しただけである。

第2埋葬施設は、墳丘中央部から南側、周溝寄りの第152号土坑に設置された箱式石棺と思われる。当初、攪乱を受けている粘土貼り土坑として2分割して掘り込んだ。土坑は長軸2.7m・短軸1.2mの不整長方形を呈し、深さ0.6~0.67mである。覆土は、主として多量のローム粒子・ロームブロック・粘土ブロック・棺材に使われたと思われるこぶし大の石片等が混じり、攪乱を受けている褐色土が全体に柔かく堆積していた。覆土を除去すると、坑底部付近から敷石に使用したと思われる雲母片岩のこぶし大から手の平大の扁平な割石30点が散乱して、また、流れ込みと思われる土師器片3点も出土した。これらの遺物を除去すると、壁下に上幅12~24cm、下幅は6~12cm、深さは6~12cmのU字状を呈した凹みが全周している。これは、おそらく側石や妻石として一枚石を立てた跡と思われる。この残された凹みから埋葬施設を推定すると、内法長辺1.8m・短辺0.9m程の規模の石棺が存在したと思われる。長軸方向はN-75°-Eである。この壁溝状の内側の坑底は中央部が攪乱を受けて3か所程浅く凹み、また、その付近も攪乱を受けているらしい小さい凹凸を示して軟かい。壁はロームで側石側がほぼ垂直、妻石側が外傾している。さらに精査を続けた結果、西側の妻石側の掘り方部には妻石と壁の間が、粘土と雲母片岩の小片14点が混る褐色土で硬くつきかためたようになっていた。また、覆土をフルイにかけて遺物の検出を試みた結果、弥生式土器片2点、土師器の壺底部片6点と土師器片19点、陶器の小片8点が出土している。

なお、第1・第2埋葬施設の新旧関係は不明である。さらに、墳丘下にあるその他の土坑は、その覆土から判断して、いずれも本墳より新しいものである。

#### (4) 古墳からの出土遺物 (第330図)

第105号住居跡付近の周溝底から、第330図1の土師質土器(皿)片1点、2の球状土錘1点が出土している。



第330図 第27号古墳出土遺物  
実測・拓影図



## 第27号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第330図 1	皿 土師質土器	A 「6.6」 B 1.9 C 3.6	底部は平底で厚い。体部は器厚を減じながら内彎して立ち上がっている。	底部は回転糸切り。内・外面ナデ整形。	砂粒 橙色 普通	70% P142

## 第28号古墳（第331図）

### (1) 古墳の現状

本墳は、D11区における宿台地のほぼ中央部寄りの平坦地に位置している。南西側10m程には第32号古墳が隣接し、北西側0.5m程には第27号古墳が接近している。また、墳丘と周溝にかけて第106・107号住居跡、第1号掘立柱建築跡、南側周溝と第110号住居跡、東側周溝と第108号住居跡の一部がそれぞれ重複している。

### (2) 古墳の構造

#### 〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、墳形は円墳である。規模は、ほぼ北側で幅0.5mがブリッジ状になっていて周溝が途切れているが、墳丘を推定したラインから計測して、周溝の内側で長径(南～北) 8.2m・短径8.0mである。標高は26.98mである。なお墳丘下に有る第106・107号住居跡は墳丘下を0.1～0.2m掘り込んでいるが、出土遺物から判断すると住居跡の方が古い。

#### 〈周溝〉

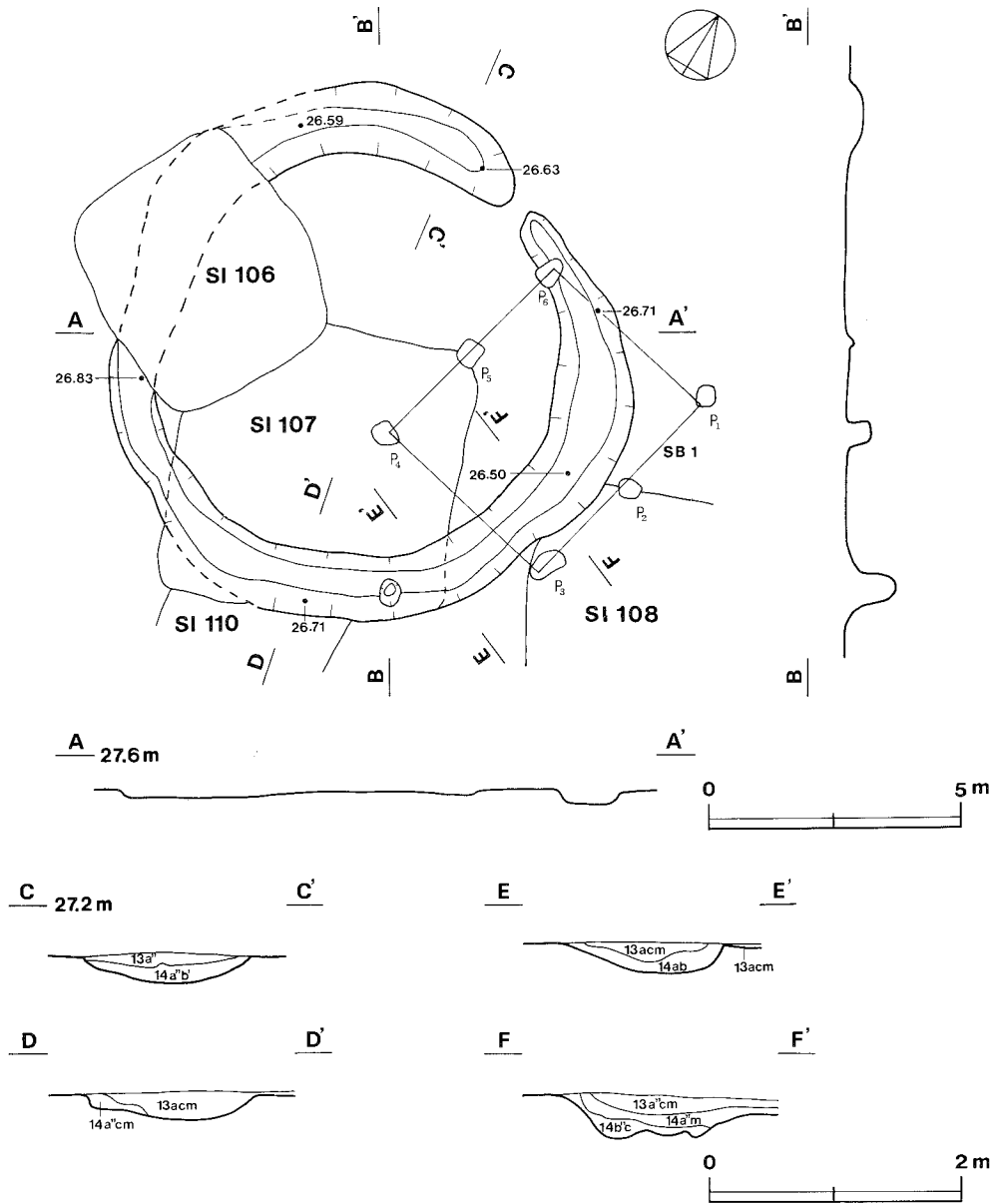
周溝はほぼ北側がブリッジ状に掘り残されているが、ここを除いてほぼ一定の幅で、平面形は墳丘を取り囲むように円形に掘られている。上幅は0.9～1.6m、下幅は0.3～0.9mである。深さは南側がやや浅いが、ほぼ一定していて0.2～0.4mである。溝底はほぼ平坦で、標高は26.44～26.83mである。壁面はロームで、墳丘側の南側一部がやや急角度で外傾するほかは、墳丘側・外側とも溝底からゆるやかに立ち上がっている。周溝の覆土はローム粒子等を含んだ締まりのある黒褐色土・暗褐色土が2～3層に自然堆積している。なお、4軒の住居跡と周溝が切り合っているが、土層を観察すると、いずれも住居跡の覆土を切って周溝を掘っている様子がうかがえ、本墳の方が新しいものと判断される。

### (3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。

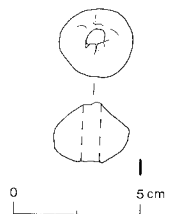
### (4) 古墳からの出土遺物（第332図）

第108号住居跡と重複する周溝底から土師器の甕形土器片、第110号住居跡と重複する周溝内から土師器片数片が出土したが住居跡からの流れ込みと考えられる。この他に、北側の周溝内の覆



第331図 第28号古墳実測図

土から第332図1の球状土錘1点が出土している。



第332図 第28号古墳  
出土遺物実測図

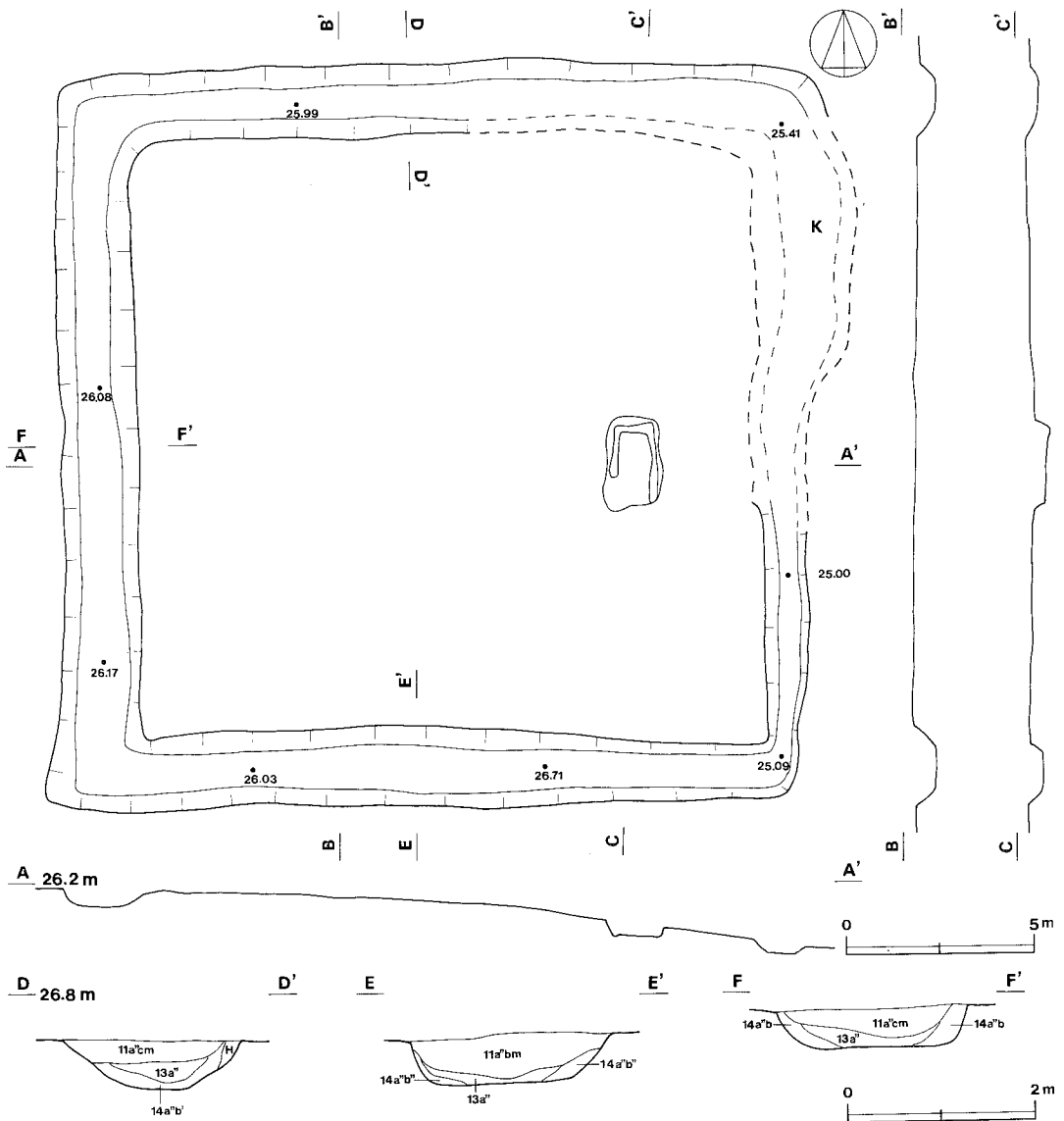
第29号古墳 (第333・334図)

(1) 古墳の現状

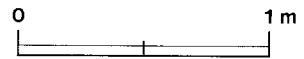
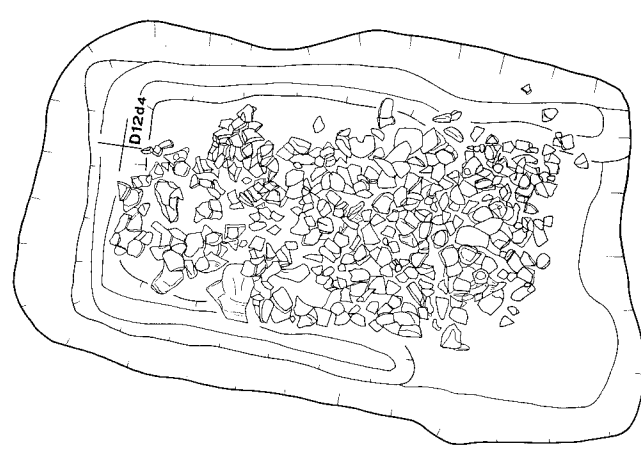
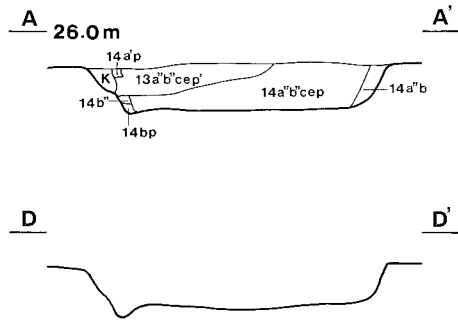
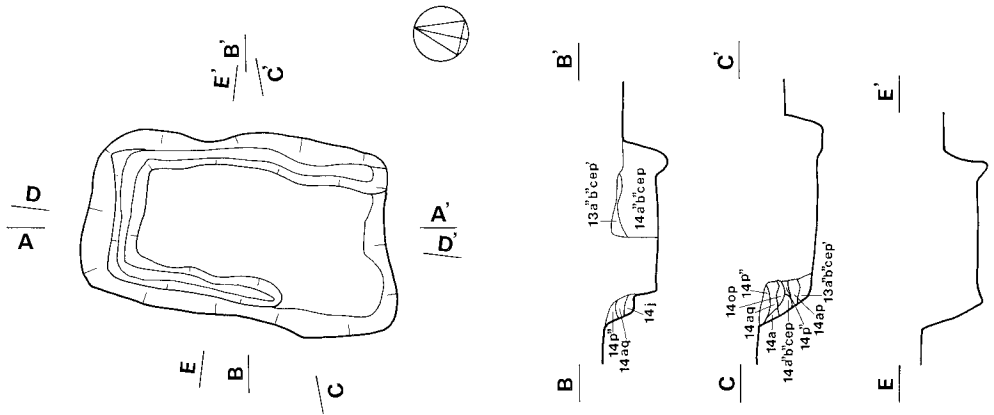
本墳は、D11・D12区における宿一ノ谷に面した宿台地の平坦部の東縁に位置している。本墳の占地している部分は平坦部から谷に至る傾斜部である。南側3m程には第30号古墳が隣接している。なお、西側から東側に向かって1m以上傾斜しており、東側の墳丘と周溝は幅広く攪乱を受けている。

(2) 古墳の構造

〈墳丘〉



第333図 第29号古墳実測図



第334图 第29号古墳主体部実測図

調査前は低い雑木と植林された高い杉の木におおわれていた。表土を除去すると墳丘下は、西側から東側へ1.4m程低く傾斜し、北東側の一部はロームも東側の谷津に流出している。そのため、旧表土層や封土の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、墳形は方墳である。規模は、長辺が16.6m・短辺が15.9mの方形を呈している。標高は西側で26.68m・東側で25.30mである。埋葬施設は長辺上の西寄りに、長軸方向は南～北を指して設置されている。

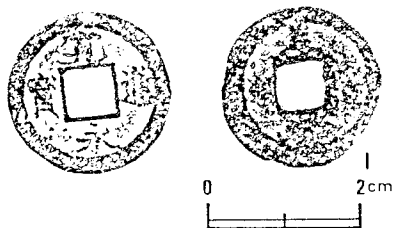
#### 〈周溝〉

周溝は東側の半分程が攪乱を受けているが、平面形は方形状に掘られている。周溝の幅は、低く傾斜している東側程狭くなっている。現存している上幅は0.8～2.2m、下幅は0.4～1.3m、深さは0.4～0.5mである。溝底はほぼ平坦であるが、標高は、北西コーナー付近が高くして27.64m、東側の攪乱を受けていない最低の所が25.00mである。壁面はロームで、墳丘側・外側ともほぼ同じ角度で溝底から直線的に外傾して立ち上がっている。覆土は多量のローム粒子等を含む黒褐色土が上層にあって大部分を占め、溝底付近の下層に多量のローム粒子を含む暗褐色土、壁面側には少量の褐色土がよく締まって堆積している。

#### (3) 埋葬施設

埋葬施設は、ほぼ東～西の長辺上の西側墳丘内の土坑に設置された箱式石棺と思われる。土坑は攪乱を受けており、残存している覆土から観察すると極暗赤褐色・暗褐色土と粘土小塊が混じって堆積している。覆土を除去すると、土坑の壁と坑底のU字状を呈した凹みの外側には粘土が貼り付けたように厚くこびりついている。また、坑底には雲母片岩の小片がぎっしりと平坦に敷き詰められて敷石状を呈している。

なお、側石と妻石は既に抜き去られてしまったものと思われる。坑内にあるこのU字状の凹みは、枚数を特定できないが一枚石の側石と妻石が立てられていた跡であると判断される。これらの残された敷石と坑内の溝から主体部を推定すると、内法長辺1.75m・短辺0.8mの規模の石棺が存在したと思われる。なお、土坑は長辺2.4m・短辺1.5mの不整長方形を呈し、深さは0.4mである。壁はロームで、垂直あるいは外傾して立ち上がっている。東側の壁の一部付近には砂・粘土等が混じった褐色土が裏込め状につきかためられて残っている。主軸方向はN-2°-Eを指している。



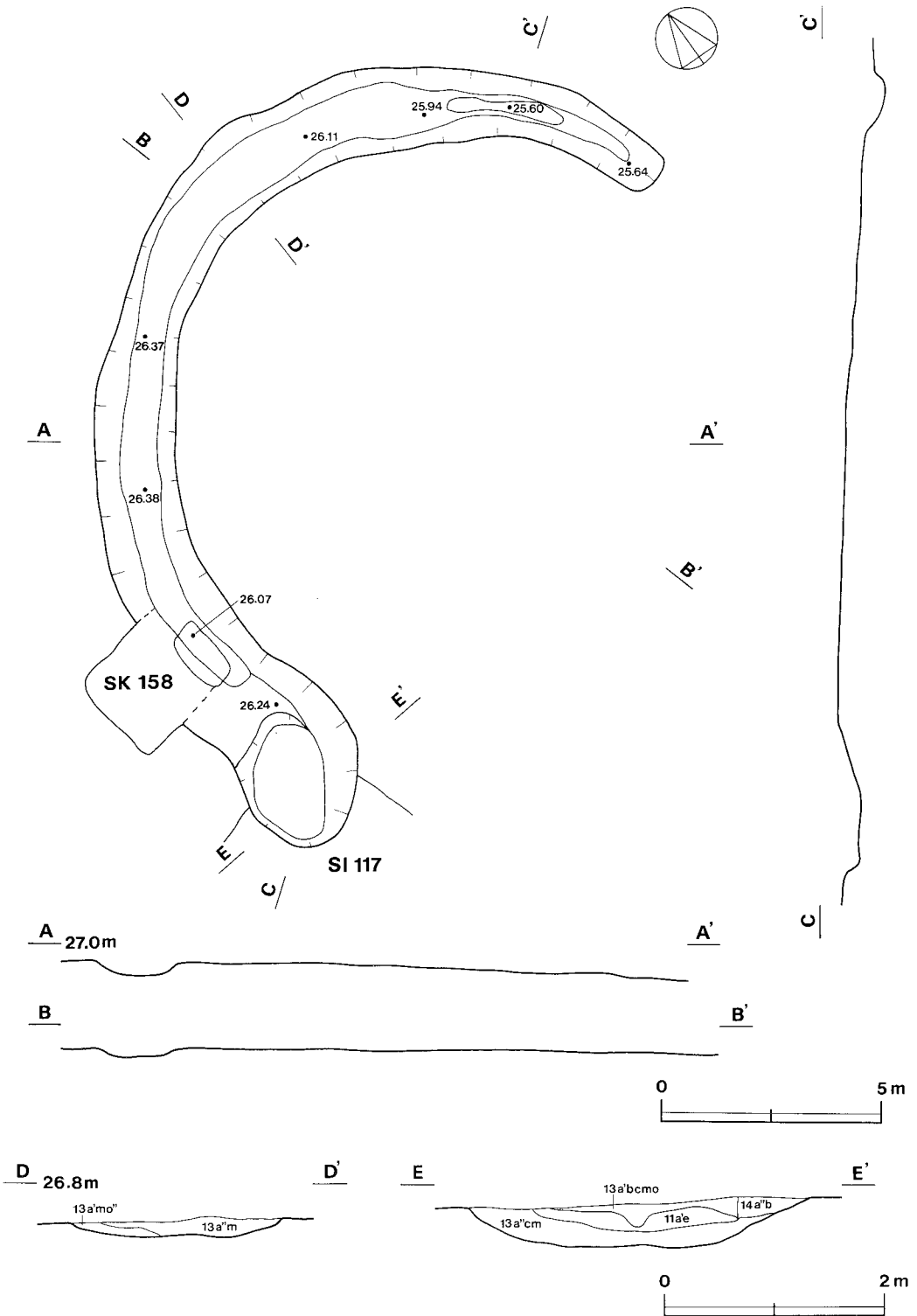
第335図 第29号古墳出土遺物実測・拓影図

いる。

#### (4) 古墳からの出土遺物 (第335図)

東側の攪乱を受けている周溝部分から、第335図1の古銭1点が出土している。

第30号古墳 (第336図)



第336図 第30号古墳実測図

(1) 古墳の現状

本墳は、D11・D12区における宿一ノ谷に面した宿台地の平坦部の東縁に位置している。本墳の占地している辺りから東側に向かってゆるやかに傾斜しており、墳丘の東側は、西側より0.63m低くなっている。北側3mには第29号古墳が隣接している。東側周溝は、第158号土坑や攪乱穴と重複している。

(2) 古墳の構造

〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。周溝は北側約半分が弧状に検出され、そこから判断すると、墳形は円墳の様相を呈している。南側半分は周溝が掘られなかったのか、削平されて消滅してしまったのか不明であるが、周溝の内側を測るとその径は13.4mである。標高は26.62mである。

〈周溝〉

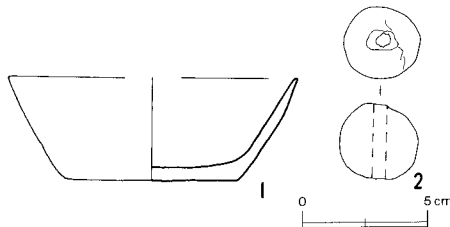
周溝は北側半分だけが検出され、周溝の平面形は墳丘を取り囲むように、半円形に掘られている。上幅1.2~1.9m、下幅0.5~1.3m、深さは0.2~0.4mである。溝底はゆるやかな起伏を呈し、標高は25.55m（東側）~26.38m（北西側）である。壁面はロームで、墳丘側・外側とも溝底から同じようにゆるやかに立ち上がっている。覆土はローム粒子を含む暗褐色土が上・下層にあり、中層に黒褐色土層が見られ、良く締まって堆積している。

(3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。なお、第158号土坑は、その土層を観察すると本墳より新しい。

(4) 古墳からの出土遺物（第337図）

西側の周溝内覆土から、雲母片岩の小片と第337図1の土師器の埴形土器片や2の球状土錘1点が出土したが、流れ込みと思われる。

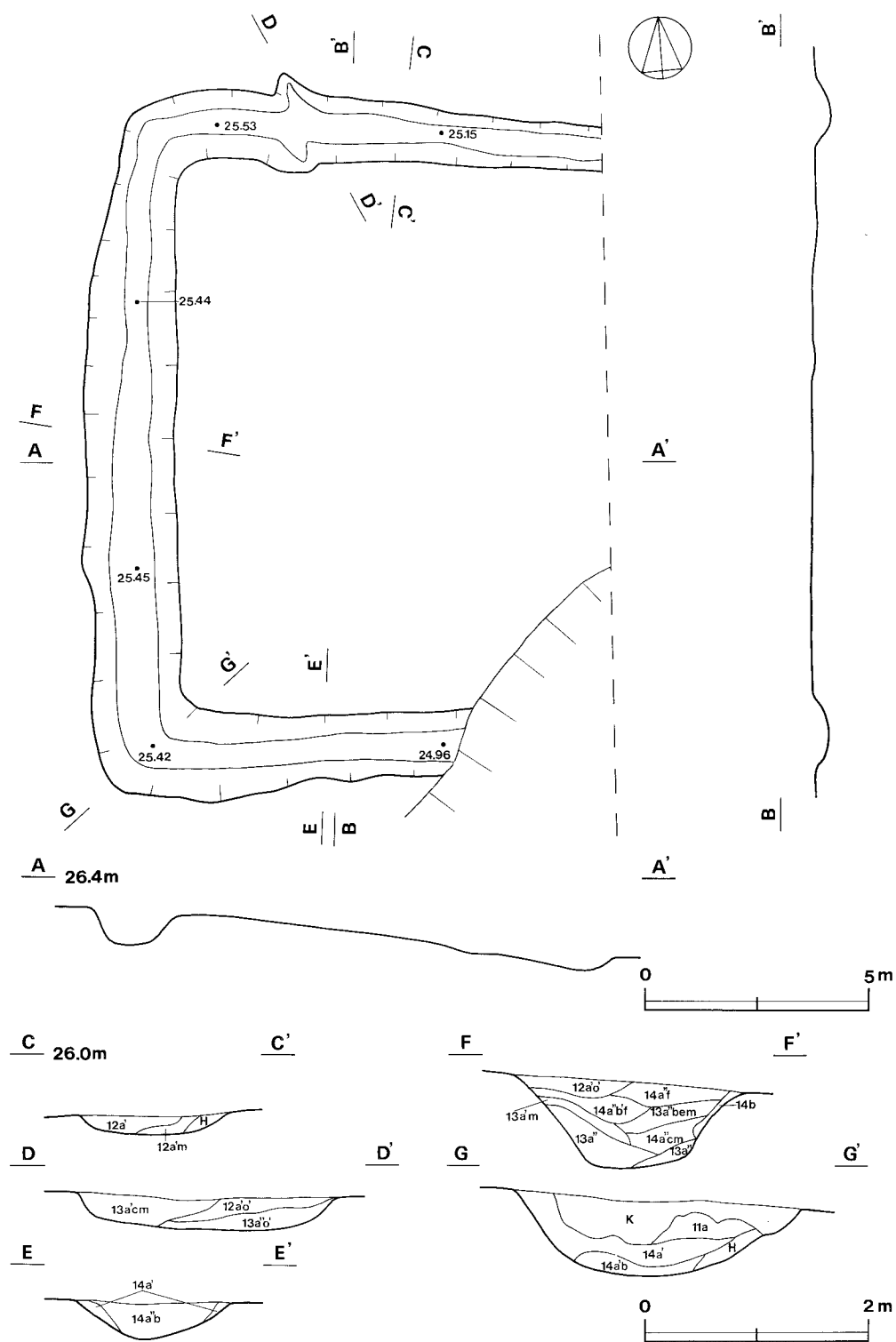


第337図 第30号古墳出土遺物実測図

第30号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第337図 1	埴形土器 土師器	A「11.6」 B 4.1 C 6.9	底部は平底であるがやや凹凸があつて不安定である。体部は底部から直線的に外傾して立ち上がっている。	底部は篋削り整形。その他の内・外面はナデ整形。内・外面に剝離痕が有る。	砂粒 浅黄橙色 普通	40% P148

第31号古墳 (第338図)



第338図 第31号古墳実測図



### (1) 古墳の現状

本墳は、E12区における宿一ノ谷に面した宿台地の東縁の傾斜部に位置している。本墳の占地している部分は、平坦部から谷に面する緩傾斜面であり、その先の東側は急傾斜の谷となり、エリア外となっている。墳丘の西部と調査できた東側の墳丘部では、約1m以上東側が低くなっている。北西側の推定2m程には第30号古墳が隣接している。

### (2) 古墳の構造

#### 〈墳丘〉

墳丘は傾斜面に造られていたため、長年の間に旧表土層下のローム層面まで耕作による削平、或いは、流出により封土等の状況は不明である。周溝は東側が開いているコの字状を呈し、東側は消滅してしまったものと思われる。調査した周溝から判断すると、墳形は方墳である。規模は、周溝の内側で南～北は12.5m、東～西は不明である。標高は西側で26.24m、東側でローム面が25.22mである。

#### 〈周溝〉

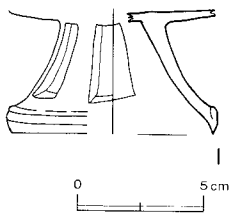
周溝は東側が削平により検出できなかったが、平面形は墳丘を取り囲むように方形状に掘られている。上幅は西側が広くて2.0m、南と北側は東側に至る程狭くなって1m前後である。下幅は0.4～0.9mである。深さはやはり西側が深くて2.0mである。他は次第に浅くなっている。溝底はほぼ平坦であるが、標高は南側の谷付近で24.96m、西側で25.45mである。なお、北側のコーナー付近の一部がやや広がっているが、土層を観察した限りでは特別な施設等の跡ではない。壁面はロームで、墳丘側・外側ともに溝底からほぼ直線的に外傾して立ち上がっている。覆土はローム粒子を含む暗褐色土と褐色土がほぼ交互に良く締まって堆積している。

### (3) 埋葬施設

墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。

### (4) 古墳からの出土遺物 (第339図)

南西側周溝内から土師器4点、内耳土器片1点、第339図1の須恵器の高坏1点等が出土している。



第339図 第31号古墳  
出土遺物実測図

### 第31号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第339図	高須恵器	B (5.0) C 「8.0」	脚部は直線的に開き、そこに縦長の長方形の透しが3か所見られる。裾部端は折返され、接地面がやや尖る。坏底部は平坦である。	脚部内・外面は水挽き整形。坏底部も水挽き整形であるが凹凸を呈している。	砂粒 褐灰色 普通	25% P149

### 第32号古墳 (第340図)

#### (1) 古墳の現状

本墳は、E11区を中心に宿台地の平坦部のほぼ中央部に位置している。北側 8 m程には第27号古墳が隣接し、南側0.5m程には第35号古墳、南西側1.5m程には第33号古墳が隣接している。また、墳丘下に第120号住居跡、第176号土坑、北西側周溝に第116・118号住居跡が重複している。さらに、南西～南側と北東側周溝内には、新しい攪乱穴がある。

#### (2) 古墳の構造

##### 〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、東～西にやや長い円墳である。規模は、西側で幅6.2mがブリッジ状になって周溝が途切れているが、墳丘を推定したラインから計測して、周溝の内側で長径(東～西) 18.0m・短径12.6mである。標高は27.32mである。墳丘下にある住居跡は、確認面を掘り込んで構築している弥生時代後期のものである。

##### 〈周溝〉

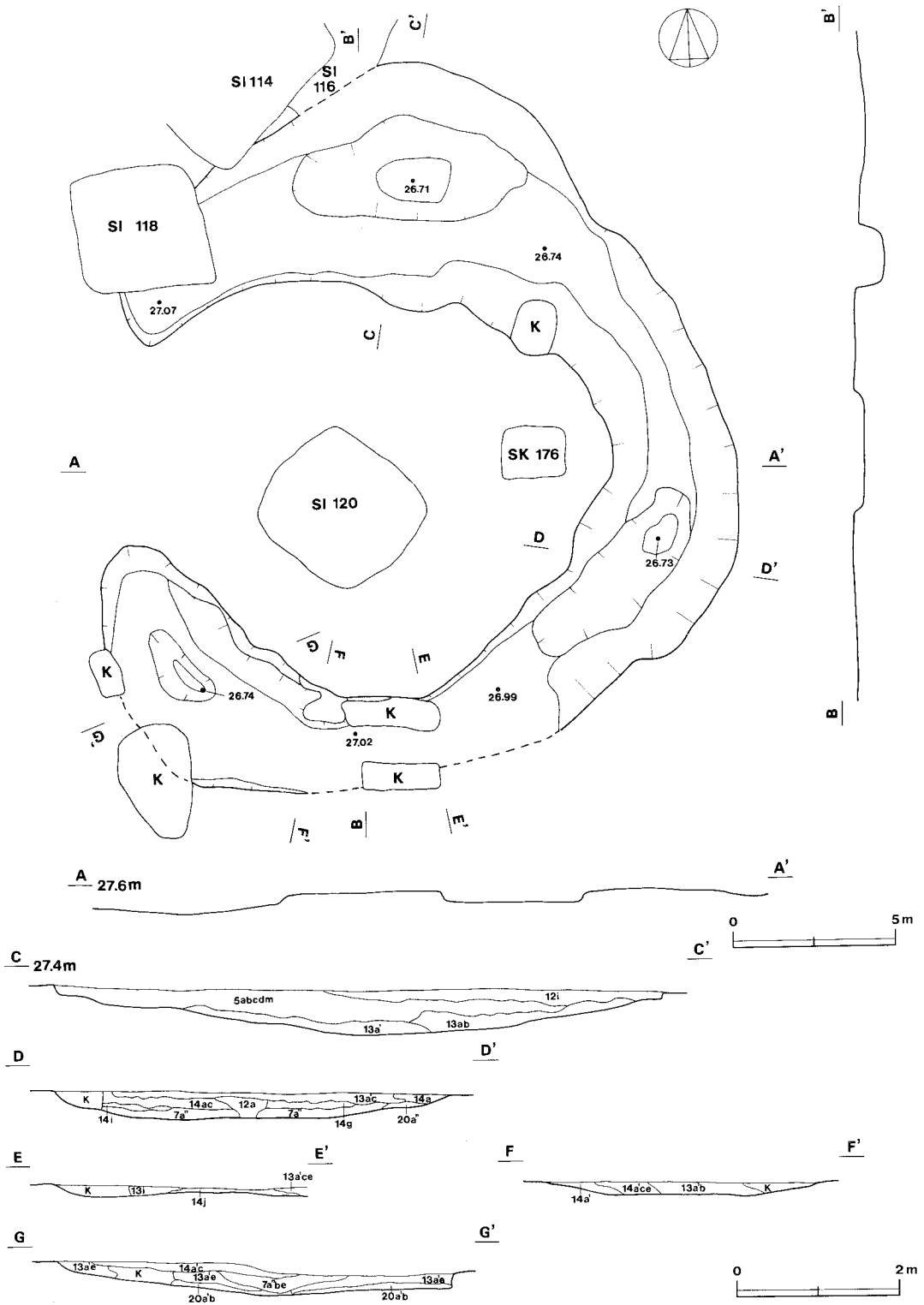
周溝は西側がブリッジ状に掘り残されており、上幅の広・狭と波状に屈曲している所もあるが、平面形は円形状に掘られている。上幅は3.4～7.6m、下幅は0.8～4.9m、深さは0.3～0.5mである。溝底は北・東・南東側でやや低くなるなど、ゆるい起伏を呈し、標高は、26.71～27.07mである。壁面はロームで、幅広い割には深さが浅く、墳丘側・外側ともに溝底からゆるやかに立ち上がっている。なお、3軒の住居跡の一部と周溝が重複しているが、遺構確認時において、周溝が住居跡を切っている様子が見えなかった。覆土はローム粒子少量を含んだ締めりのある暗褐色土と褐色土を主体に自然堆積している。

#### (3) 埋葬施設

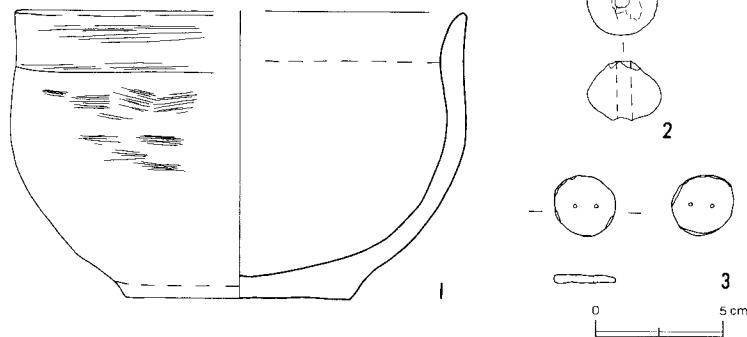
墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。なお、第176号土坑は、覆土を観察するとごく新しいものであり、埋葬施設ではない。

#### (4) 古墳からの出土遺物 (第341図)

南東側の周溝内覆土から、第341図1の古墳時代後期の鉢形土器、3の有孔円板1点、北側の周



第340图 第32号古墳実測図



溝内覆土から2の球状土錘1点が出土した。

第341図 第32号古墳出土遺物実測図

第32号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第341図 1	鉢形土器 土師器	A「9.0」 B 11.5 C 9.0	底部は平底で厚い。体部は器厚を一定に保って底部から斜上方に内彎して立ち上がっている。口辺部はやや内傾して垂直に立ち上がっている。	内・外面とも篋ナデ整形。その後内面と口辺部をナデ整形している。内面は剝離が激しい。やや粗雑な作りである。	砂粒・スコリア 橙色 普通	30% P150

第33号古墳（第342・343図）

(1) 古墳の現状

本墳は、E10区における宿台地の平坦部の西端に位置している。本墳の西側は宿二ノ谷へ傾斜しているがその中程に第2号堀がある。北東側1.5mには第32号古墳、東南東側4.5mには第35号古墳が接近し、南側20mには第36号古墳が隣接している。また、墳丘下と第121号住居跡、第168・169号土坑が重複している。

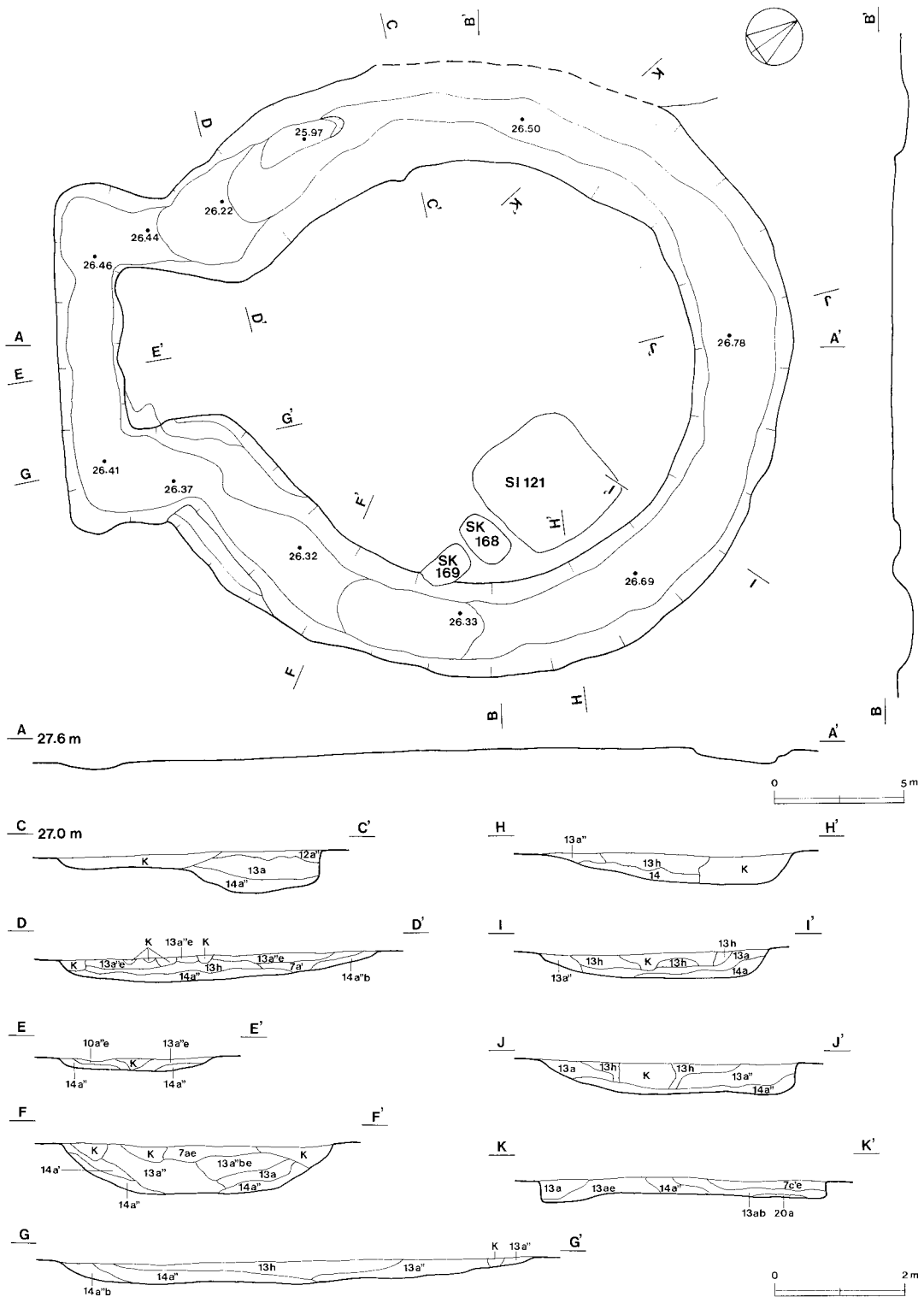
(2) 古墳の構造

〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、墳形は帆立貝状の前方後円墳である。規模は、周溝の内側で全長22.1m（周溝部を含めて全長27.92m）、後円部径17.8m・幅16.4m・前方部4.3m・最大幅6.3m・くびれ部幅3.52mとなり、前方部長後対円部径の比率は1：4.1である。主軸方向はN-38°-Eである。標高は26.78mである。墳丘下にある住居跡は古墳時代前期の遺物を出土し、本墳より古いものと思われる。

〈周溝〉

周溝の平面形は墳丘を取り囲むように、墳丘側・外側とも前方後円形に掘られている。後円部



第342图 第33号古墳実測図

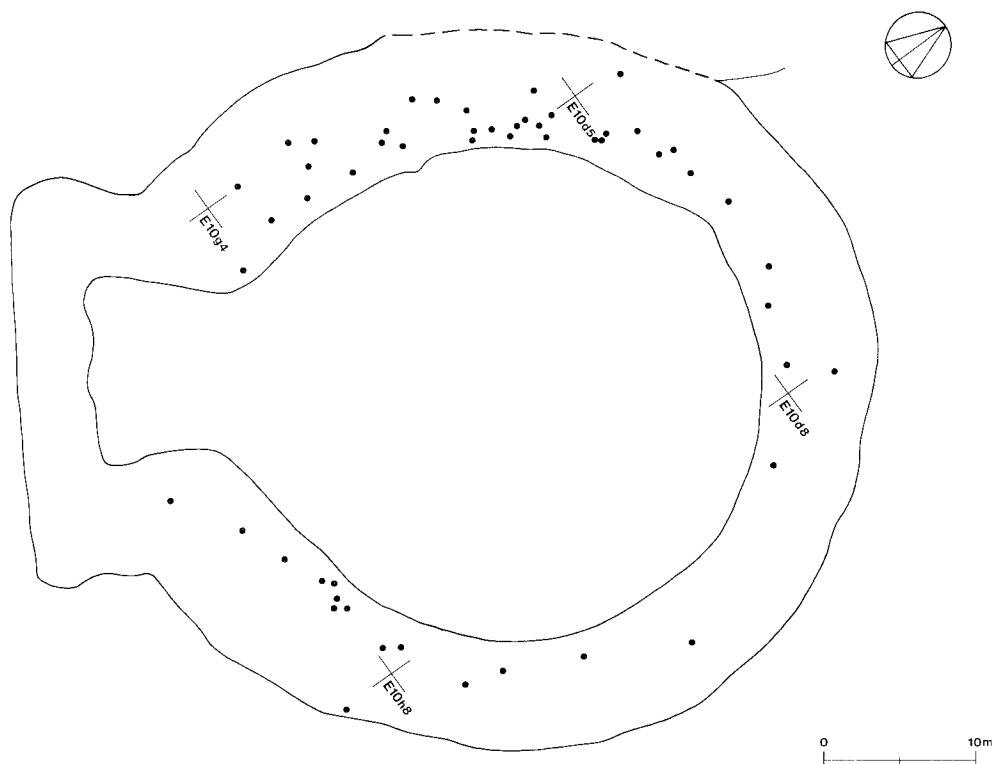
の周溝の最大幅は西側のくびれ部付近にあって上幅4.6m, 最小幅は北東側の主軸線上にあって上幅3.6mである。前方部で周溝の最大幅はくびれ部付近にあって上幅4.6m, 最小幅は主軸線上付近で上幅2.2mである。なお, くびれ部付近の周溝はそれぞれ4.6mと4.2mであり, 比較的広い。下幅は0.8~3.0mである。深さは0.4~0.8mである。壁面はロームで, 墳丘側は溝底からほぼ垂直に立ち上がり, 外側は全体がゆるやかに立ち上がっている。溝底は北東側が高く, 前方部に近づくにつれてやや低く掘られている。また, 前方の周溝は後円部より浅く, ほぼ平坦で, 標高は26.08~26.78mである。周溝の覆土は攪乱部以外はローム粒子等を含む暗褐色土が主体をなし, 壁面側と溝底付近にローム粒子を含む褐色土が堆積している。

### (3) 埋葬施設

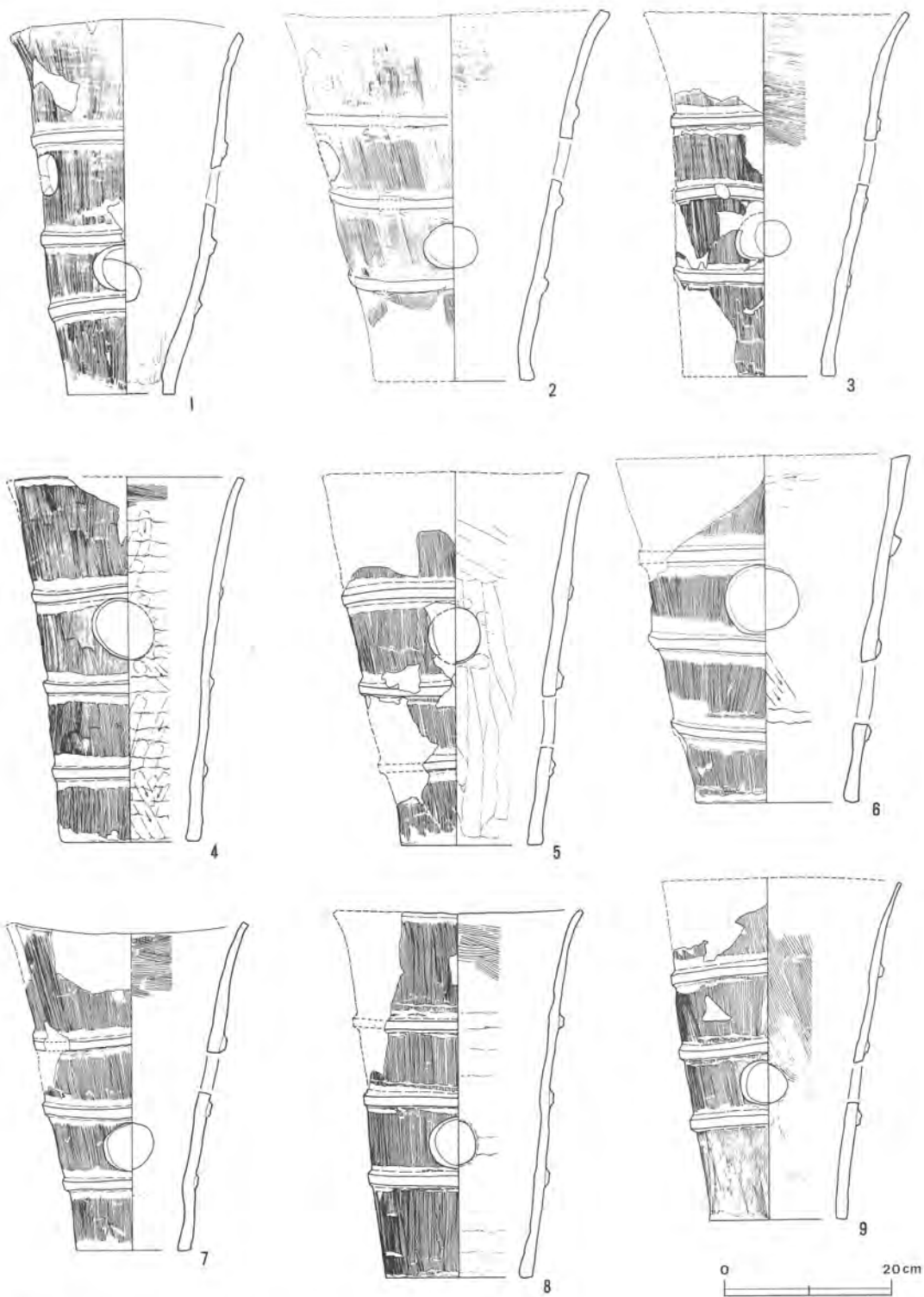
墳丘と周溝内を精査したが, 検出されなかった。なお, 第168・169号土坑は, 土層を観察すると本墳よりは新しいものである。

### (4) 古墳からの出土遺物 (第344・345・346・347・348・349・350図)

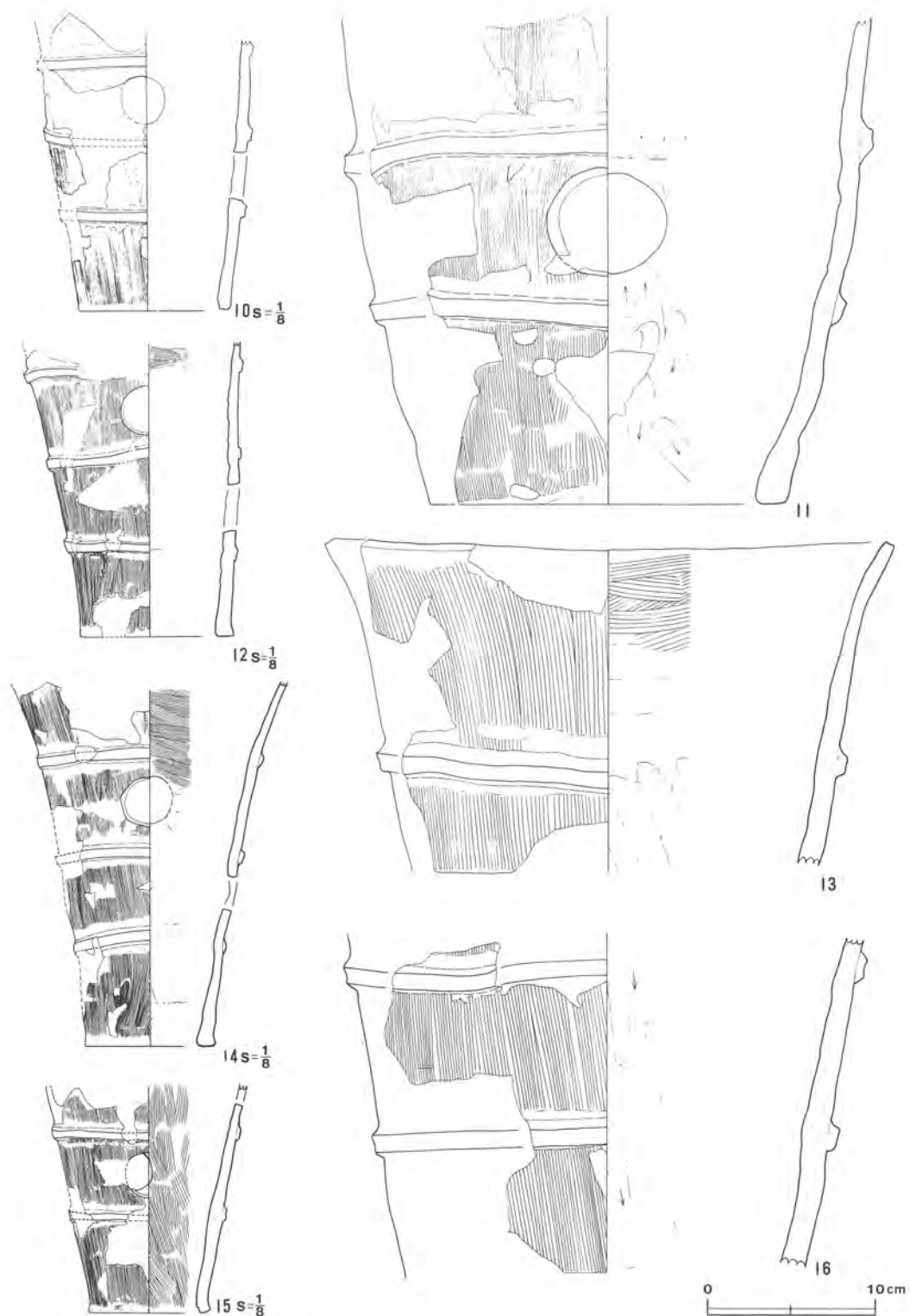
円筒埴輪片が, 後円部墳丘から流れ込んで, 周溝の溝底から10~20cm前後浮いた状態で出土している。接合できた個体数は38個 (うち朝顔形4個) であり, 主なものは西側くびれ部付近から第349図38の朝顔形円筒埴輪, 東側くびれ部付近から第348図35の朝顔形円筒埴輪, 東側前方部付



第343図 第33号古墳出土遺物位置図

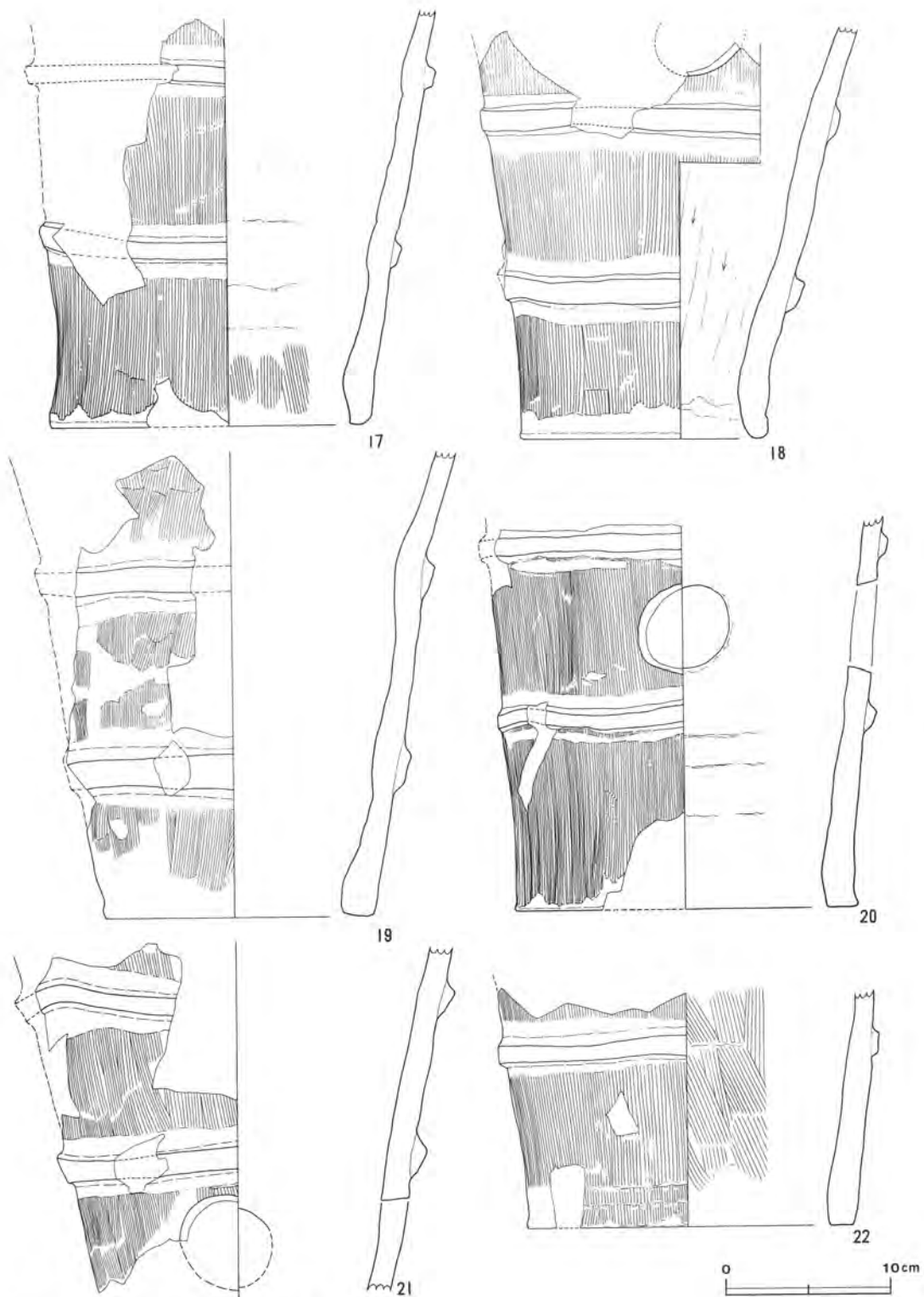


第344図 第33号古墳出土遺物実測図-1

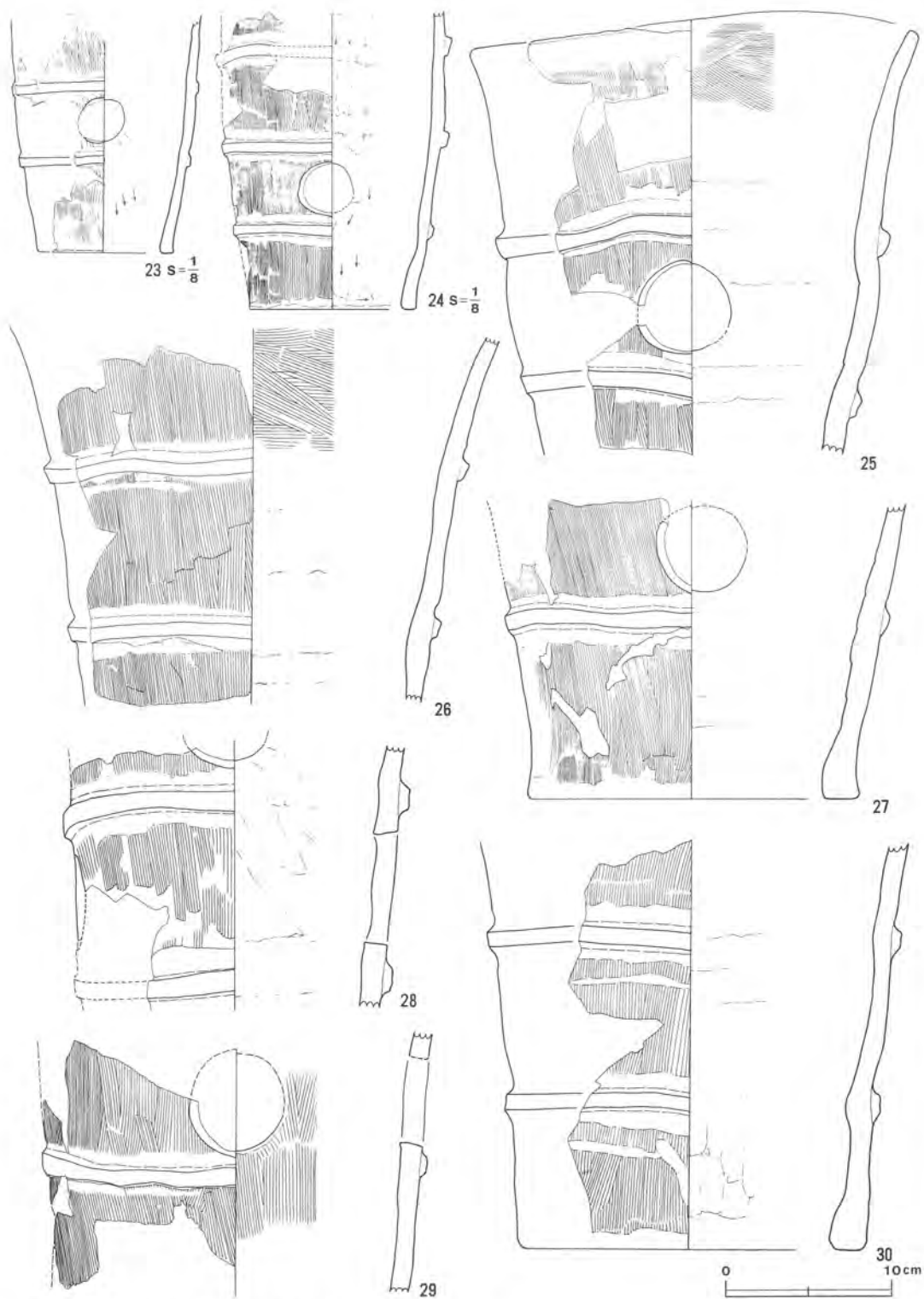


第345图 第33号古墳出土遺物実測図—2

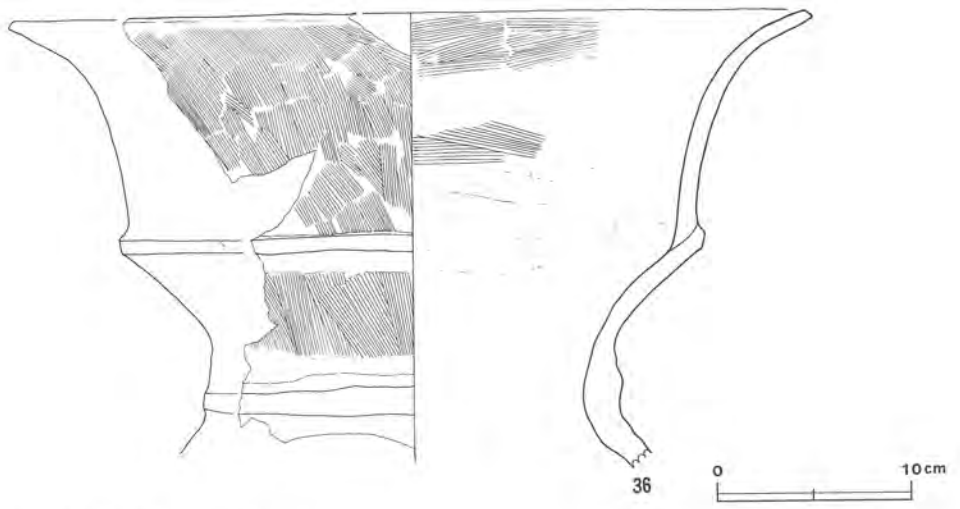
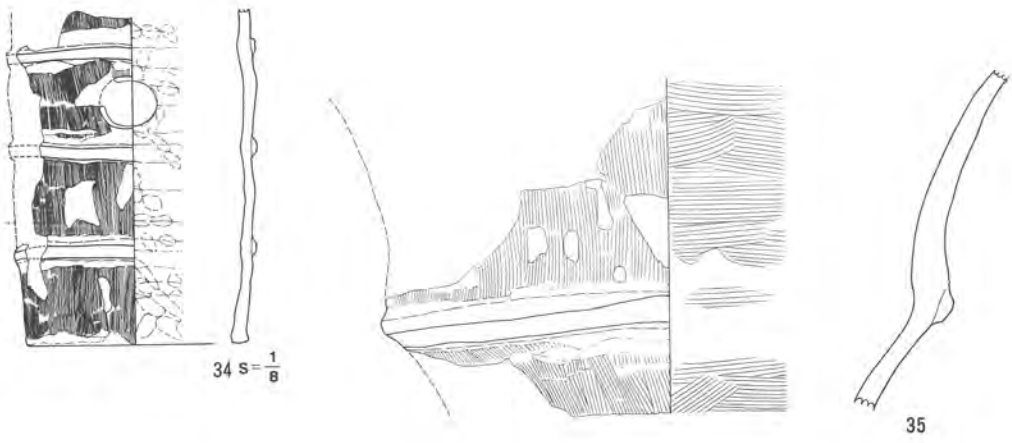
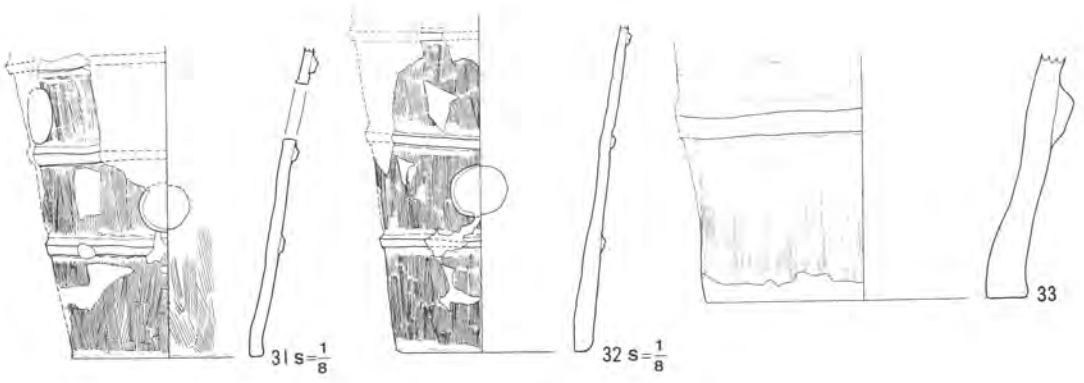




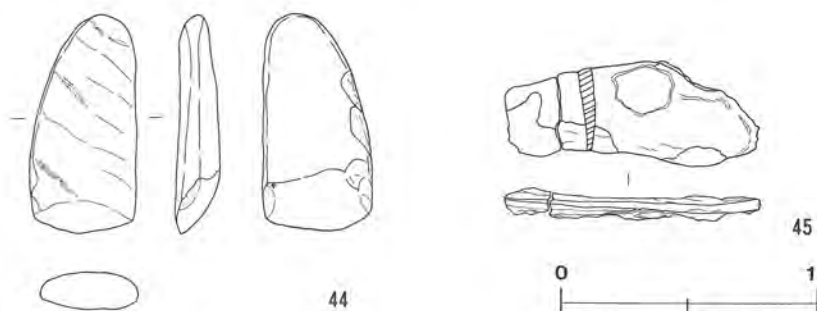
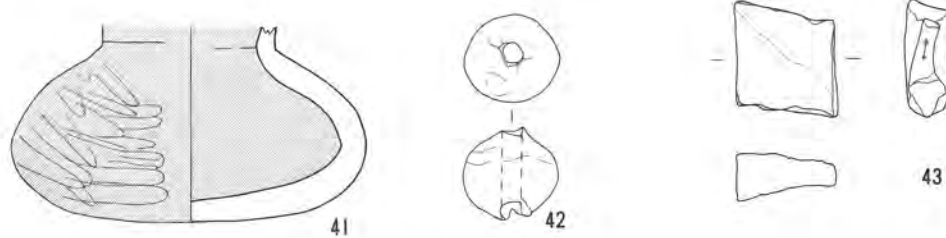
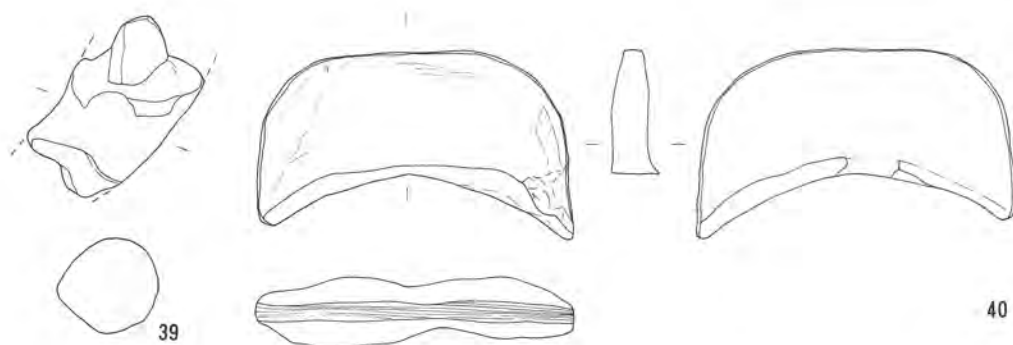
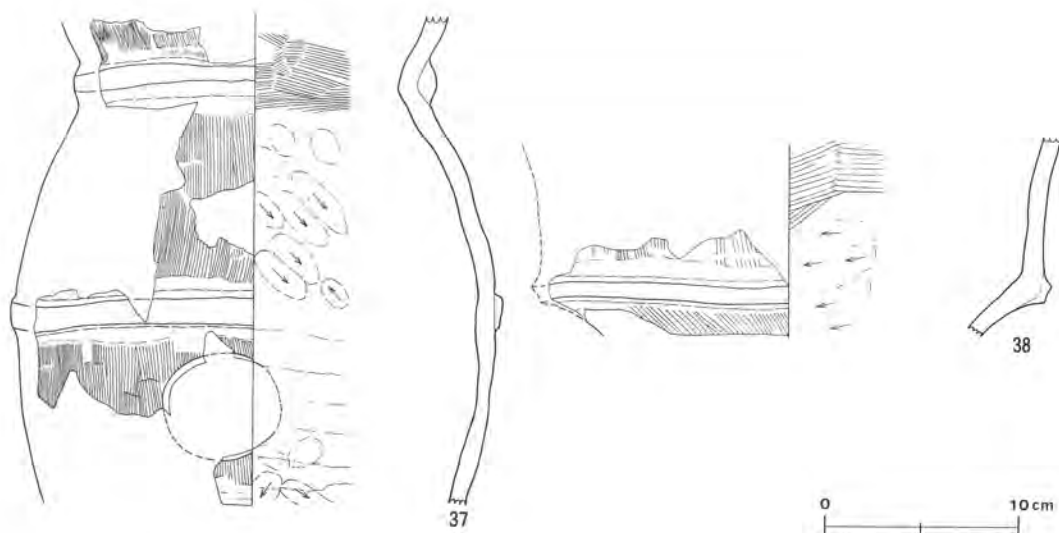
第346图 第33号古墳出土遺物実測図-3



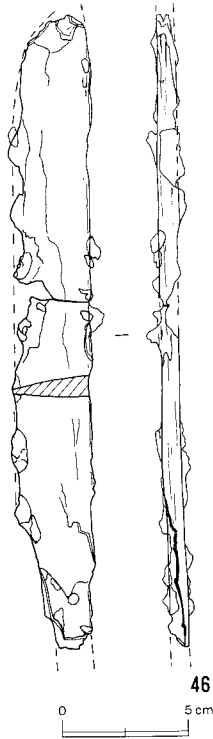
第347图 第33号古墳出土遺物実測図—4



第348図 第33号古墳出土遺物実測図-5



第349图 第33号古墳出土遺物実測図-6



第350図 第33号古墳  
出土遺物実測図-7

近から第349図37の朝顔形円筒埴輪, 第348図36の朝顔形円筒埴輪が出土している。その他南東側くびれ部付近の周溝内から第349図41の古墳時代後期と思われる埴形土器片1点, その他の周溝から, 43の砥石1点, 44の石斧片1点, 42の球状土錘1点, 45の鉄製の鎌1点, 第350図の鉄製の短刀1点が出土している。前方部付近の周溝からは遺物の出土がなかった。

第33号古墳出土円筒・朝顔形円筒埴輪観察表

図版番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2cm	成形と内面の状況	色調	備考
					下段	上段	1	2	3				
第344図 1	45.8	28.6	13.4	A1.0 B1.2 C1.4 D2.0	13.0 5.5 7.3	24.4 5.9 7.1	10.0 1.2 0.6	18.0 1.0 0.6	30.0 1.4 0.4	15~16	左回り巻き上げ 紐幅1.6~1.9cm 縦方向の指ナデ強く整形	にぶい 橙 色	DP180 底~口縁部 口唇部, 表面口唇下わずかにナデ 凸帯下側のナデ雑 透孔は右回り切放し
2	44.8	「39.6」	「19.6」	A1.0 B1.2 C1.4 D1.6	14.5 5.8 7.2	— — —	11.4 1.2 0.6	22.0 1.0 0.6	33.0 1.2 0.6	16~17	左回り巻き上げ 基部幅5.2~5.4cm 紐幅2.5~3.5cm 縦方向の指ナデ整形 口唇下13~13.8cm幅で表面と同じハケ目横走 口唇下わずかにナデ, ハケ目内に「○」印	にぶい 赤褐色	DP181 底~口縁部 表面口唇下わずかにナデ 凸帯下側のナデ雑 透孔は右回りの切放し
3	44.4	「32.0」	「18.4」	A1.2 B1.2 C1.2 D1.4	14.2 「6.0」 6.3	— — —	11.4 1.0 0.4	20.4 1.0 0.2	31.0 1.0 0.4	14~15	左回り巻き上げ 基部幅3.3~3.4cm 紐幅2.2~2.4cm 縦方向の指ナデ整形	明赤 褐色	DP182 底~口縁部 凸帯下側のナデ雑 透孔は右回りの切放し
4	44.6	「29.0」	17.2	A1.2 B1.2 C1.0 D1.4	— — —	22.5 7.5 「7.9」	8.6 1.2 0.5	19.4 1.0 0.6	30.6 0.8 0.4	15~17	左回り巻き上げ 基部幅3.3~3.4cm 紐幅1.5~2.3cm 斜方向の指ナデ整形 口唇下3.9~5.1cm幅で表面と同じハケ目横走, 口唇下0.7cm幅でナデ	明赤 褐色	DP183 底~口縁部 口唇部, 表面口唇下0.9cm幅でナデ 凸帯下側のナデ雑 透孔は穿孔後ナデ

図版 番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2 cm	成形と内面の状況	色調	備 考
					下段	上段	1	2	3				
第344図 5	45.4	「31.4」	17.6	A1.4	—	21.3	9.0	20.0	30.6	11~12	左回り巻き上げ 基部幅5.5~5.8cm 紐幅約2.1cm 下半部縦方向,上半部斜方向の指 ナデ整形 口唇下わずかにナデ	赤褐色	DP184 表面口唇下わずかにナ デ 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
				B1.6	—	7.5	1.0	0.8	1.0				
6	41.2	「35.4」	19.6	A1.8	—	21.6	8.4	19.0	31.2	17~18	右回り巻き上げ 基部幅3.5~3.7cm 紐幅0.9~1.6cm 斜方向の指ナデ整形 口唇下2.4~2.8cm幅でナデ	にぶい 橙 色	DP185 底~口縁部 表面口唇下0.9cm幅で ナデ 凸帯下側のナデ良好, 底部付近表面わずかに ナデ 透孔は右回しの切放し
				B1.2	—	8.6	1.0	1.4	1.4				
7	38.4	29.8	14.2	A1.2	9.6	—	8.6	17.2	25.6	12~13	左回り巻き上げ 基部幅4.9~ 5.3cm 紐幅1.1~1.7cm 斜方向の指ナデ整形 口唇下8.4~9.0cm幅で表面と同 じハケ目横走 口唇下わずかにナデ	明赤 褐色	DP186 底~口縁部 表面口唇下0.8cm幅で ナデ 凸帯下側のナデ良好 透孔は右回しの切放し
				B1.4	6.3	—	1.0	1.0	1.0				
8	44.4	「30.4」	18.0	A0.8	14.0	—	12.0	22.2	31.4	11~12	左回り巻き上げ 紐幅2~2.5cm 縦方向の指ナデ整形 口唇下9.8~10.6cm幅で表面と同 じハケ目斜走 口唇下0.7cm幅でナデ	赤褐色	DP187 底~口縁部片 表面口唇下1.4~1.6cm 幅でナデ 凸帯下側のナデ雑 透孔は穿孔後ナデ
				B1.0	6.4	—	1.2	1.0	1.0				
9	41.6	「29.0」	16.4	A0.8	14.5	—	12.4	21.0	30.6	9~12	左回り巻き上げ 基部幅2.6~2.8cm 紐幅2.1~2.3cm 斜・縦方向のハケ目整形	にぶい 褐色	DP188 底~口縁部 凸帯下側のナデ雑 透孔は右回し穿孔後ナ デ
				B0.8	5.6	—	1.0	1.0	1.0				
第345図 10	(34.2)	—	18.4	B1.4	—	23.2	12.4	22.0	32.0	13~14	左回り巻き上げ 紐幅2~2.6cm 斜方向のヘラナデ整形,その後下 半部を指ナデ整形 上半部には9/2cmのハケ目が 斜・縦走	明褐色	DP189 底~体部 凸帯下側のナデ雑 透孔は右回しの切放し
				C1.6	—	「6.2」	1.0	1.0	1.2				
11	(30.0)	—	「21.7」	B1.1	14.0	—	12.0	22.0	—	11~12	左回り巻き上げ 基部幅5~5.1cm 紐幅2.5~3.0cm 斜方向の指ナデ整形	明赤 褐色	DP197 凸帯下側のナデ雑 透孔は右回り切放し
				C1.2	6.5	—	1.1	0.9	—				
12	(36.0)	—	18.8	B1.2	—	25.2	10.0	22.6	33.2	15~17	左回り巻き上げ 基部幅4.5~ 4.7cm 紐幅1.8~2.5cm 斜方向の指ナデ整形 口縁部に 表面と同じハケ目横走 巻き上 げ明瞭	明赤 褐色	DP190 底~口縁部 凸帯下側のナデ雑 透孔は右回し穿孔後ナ デ
				C1.6	—	「6.1」	1.0	0.8	1.0				
13	(19.5)	「34.4」	—	A0.8	—	—	(6.0)	—	—	10~12	右回り巻き上げ 紐幅2.2~2.7cm 斜方向の指ナデ整形 口唇下6.4~7.0cm幅で表面と同 じハケ目横走 口唇下わずかにナデ	明赤 褐色	DP211 体~口縁部片 口唇部,表面口唇下わ ずかにナデ 凸帯下側のナデ雑
				B1.3	—	—	0.9	—	—				
14	(43.6)	—	「16.2」	A1.0	—	26.5	12.0	23.2	35.0	17~19	右回り巻き上げ 基部幅4.3~ 5.1cm 紐幅1.4~1.7cm 斜方向の指ナデ整形 口縁部に表面と同じハケ目横走	にぶい 橙 色	DP191 底~口縁部片 凸帯下側のナデ雑 透孔は右回し穿孔後ナ デ
				B1.2	—	6.2	1.0	1.0	1.2				
15	(28.0)	—	15.4	C1.4	13.9	—	12.0	22.4	—	11~13	右回り巻き上げ 紐幅1.8~2.6cm 縦・斜方向の12/2cmのハケ目整 形	にぶい 赤褐色	DP192 底~体部 凸帯下側のナデ雑 透孔は右回し穿孔後ナ デ
				D1.4	「6.8」 「5.7」	—	0.8	0.8	—				
16	(21.3)	—	—	B1.3	—	—	(7.9)	18.5	—	11~12	紐幅1.9~2.4cm 斜方向の指ナデ整形	赤褐色	DP212 体部片 凸帯下側のナデ雑
				C1.4	—	—	1.1	0.9	—				

図版 番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2 cm	成形と内面の状況	色調	備 考
					下段	上段	1	2	3				
第346図 17	(25.3)	—	20.0	B1.0 C1.2 D1.7	— — —	— — —	10.2 1.0 0.4	21.6 0.9 0.6	— — —	16~17	左回り巻き上げ 基部幅5.3~ 5.4cm 紐幅1.9~2.4cm 基部は ハケ目整形,その後指の押圧 指 紋が残る その他は指ナデ整形 巻き上げ痕明瞭	にぶい 褐色	DP199 底~体部 凸帯下側のナデ雑 透孔は切放し
18	(26.0)	—	15.4	B1.2 C1.5 D1.6	— — —	22.6 「5.0」 「5.8」	9.0 1.3 0.7	19.5 1.2 0.5	— — —	12~13	基部幅3.4~3.5cm 紐幅2~2.2cm 縦方向の指ナデ整形	にぶい 橙色	DP198 底~体部 凸帯下側のナデ良好 透孔は右回し穿孔後ナ デ
19	(29.0)	—	16.9	B1.2 C1.3 D2.0	— — —	— — —	9.5 1.5 0.6	21.2 1.4 0.6	— — —	15~17	左回り巻き上げ 基部幅3.6~ 4.8cm 紐幅1.6~1.9cm 縦方向の指ナデ整形 基部は横 ナデ整形	にぶい 褐色	DP200 底~体部片 凸帯下側のナデ良好
20	(24.0)	—	「21.2」	C1.3 D1.9	14.6 5.9 —	— — —	12.0 0.8 0.5	22.5 0.9 0.5	— — —	15~16	左回り巻き上げ 基部幅2.8~3.4cm 紐幅1.5~2cm 縦方向の指ナデ整形 巻き上げ痕明瞭	にぶい 褐色	DP201 底~体部片 凸帯下側のナデ雑 透孔は右回しの切放し
21	(22.5)	—	—	B1.5 C1.3	(0.6) 「6.2」 「6.8」	— — —	(8.0) 1.2 1.4	(18.5) 1.0 0.7	— — —	11~12	縦方向の指ナデ整形良好のため 紐幅等不明	にぶい 褐色	DP204 体部片 凸帯下側のナデ良好 透孔は左回し穿孔後ナ デ
22	(14.5)	—	20.2	C1.1 D1.7	— — —	— — —	11.5 0.9 0.5	— — —	— — —	11~12	基部幅2.8~3cm 紐幅2.1~2.2cm 斜方向の表面と同じハケ目整形	にぶい 褐色	DP206 底~体部 凸帯下側のナデ雑 透孔は穿孔後ナデ
第347図 23	(29.6)	—	「17.0」	B1.0 C1.4 D1.2	14.5 5.6 「6.2」	— — —	12.0 1.0 0.4	21.0 1.0 0.4	— — —	10~12	左回り巻き上げ 基部幅3.4~ 4.2cm 紐幅1.8~2.0cm 底部から8cm程上まで6/2cmの ハケ目整形で,その後斜方向の指 ナデ整形	にぶい 赤褐色	DP193 底~体部 凸帯下側のナデ良好 透孔は左回し穿孔後ナ デ
24	(36.6)	—	20.4	B1.6 C1.2 D1.6	12.0 7.0 6.7	— — —	9.8 1.0 0.6	21.0 1.2 0.6	33.0 1.4 0.6	9~11	左回り巻き上げ 基部幅6.4~7.3cm 紐幅1.6~2.4cm 縦方向の指ナデ整形	にぶい 褐色	DP194 底~体部片 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
25	(26.8)	「27.4」	—	A1.4 B1.3 C1.2	(5.9) 6.0 「6.1」	— — —	(3.0) 1.0 0.4	(13.0) 0.8 0.7	— — —	13~14	右回り巻き上げ 紐幅1.8~2.3cm 斜方向の指ナデ整形 口唇下11.8~12.9cm幅でハケ目 横走	にぶい 褐色	DP203 表面口唇下1.8cmはナ デ 凸帯下側のナデ雑 透孔は右回しの切放し
26	(23.2)	—	—	A1.0 B0.9 C1.2	— — —	— — —	(4.5) (0.8) 0.4	(14.3) 0.7 0.4	— — —	16~17	左回り巻き上げ 紐幅1.5~2.4cm 斜方向の指ナデ整形 上部に幅7.8~12.8cmに14/2cm のハケ目斜走	にぶい 褐色	DP213 体~口縁部片 凸帯下側のナデ雑
27	(18.4)	—	20.3	C1.3 D1.6	12.9 「6.0」 「6.3」	— — —	11.0 0.8 0.5	— — —	— — —	14~16	左回り巻き上げ 基部幅3~3.4 cm 紐幅1.4~2cm 縦方向の指ナデ整形 巻き上げ痕跡明瞭	にぶい 褐色	DP209 底~体部片 凸帯下側のナデ良好 透孔は穿孔後ナデ
28	(16.7)	—	—	B1.1 C1.3	(14.9) — 「5.3」	— — —	(2.0) 1.3 0.5	(12.8) 1.0 0.6	— — —	11~12	左回り巻き上げ 紐幅2.1~3.2cm 斜方向の指ナデ整形 やや摩滅	橙色	DP215 体部片 凸帯下側のナデ雑 透孔は穿孔後ナデ

図版 番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	透孔 (cm)		凸帯 (cm)			刷毛目 / 2cm	成形と内面の状況	色調	備 考
					下段	上段	1	2	3				
第347図 29	(15.8)	—	—	B1.3 C1.1	— — —	(8.5) 「6.0」 「6.6」	(7.8) 0.9 0.4	— — —	— — —	11~14	紐幅1.5~2.1cm 縦方向の表面と同じハケ目整形	にぶい 褐色	DP216 体部片 凸帯下側のナデ雑 透孔は穿孔後ナデ
30	(25.3)	—	「21.3」	B1.2 C1.2 D1.8	— — —	— — —	9.6 0.9 0.6	19.5 1.0 0.6	— — —	11~12	左回り巻き上げ 基部幅3.5~3.9cm 紐幅1.3~1.9cm 縦方向の指ナデ整形	にぶい 赤褐色	DP207 底~体部片 凸帯下側のナデ良好
第348図 31	(32.8)	—	20.4	B1.2 C1.2 D1.4	13.4 「5.4」 「6.0」	— — —	11.4 1.0 0.4	22.0 1.0 0.6	31.0 「1.0」 0.8	9~11	基部幅5.1~5.9cm 紐幅1.6~1.8cm 斜方向の10/2cmのハケ目整形	にぶい 橙 色	DP205 底~体部片 凸帯下側のナデ雑 透孔は穿孔後ナデ
32	(35.8)	—	20.4	B1.0 C1.2 D2.0	14.4 5.7 6.1	— — —	11.4 0.8 0.4	22.0 1.0 0.4	33.0 0.8 0.4	18~19	左回り巻き上げ 基部幅5.5~5.7cm 紐幅1.7~1.8cm 斜方向の指ナデ整形	明赤 褐色	DP196 底~体部 凸帯下側のナデ良好 透孔は右回し穿孔後ナ デ
33	(12.9)	—	「16.8」	D1.5	— — —	— — —	9.5 1.1 0.8	— — —	— — —	16~17	左回り巻き上げ 基部幅3.2~3.8cm 紐幅0.9~1.2cm 縦方向の指ナデ整形	にぶい 褐色	DP210 底部 凸帯下側のナデ良好
34	(34.6)	—	「23.6」	B1.4 C1.0 D1.2	23.0 5.6 6.2	— — —	10.0 1.2 0.4	20.6 1.2 0.6	33.4 1.0 0.4	16~17	左回り巻き上げ 基部幅3.3~4.5cm 紐幅1.4~1.8cm 斜方向の指ナデ整形 基部は横ナデ整形 巻き上げ痕明瞭	にぶい 橙 色	DP195 底~体部片 凸帯下側のナデ雑 透孔は右回し穿孔後ナ デ
35	(17.5)	—	—	A1.2 B0.9	— — —	— — —	(5.5) 1.0 0.7	— — —	— — —	11~12	花状部の一部 紐幅3.0~3.2cm 横方向のハケ目整形で、凸帯の裏 側は、さらに指ナデ整形	明褐色	DP214 凸帯下側は雑 なナデ この凸帯は上・下部か らのつまみ出しによっ て接合部に作られてい る
36	(23.6)	「42.2」	—	A1.0 B1.0	— — —	— — —	(12.5) 0.7 0.7	— — —	— — —	15~16	頸部から花状部の一部 口唇下7.9cmまでは表面と同じハ ケ目横走 その下は指ナデ整形 一部に剝離痕	橙 色	DP208 体~口縁部片 凸帯下側のナデ比較的 良好 この凸帯は頸部 と花状部の中間にあつ て、それぞれの接合部 の補強の正確が強い 頸部下側はナデ整形が 見られる 剝離痕が多く見られる
第349図 37	(25.9)	—	—	B1.0 C1.0 D0.9	— — —	— — —	(10.0) 1.3 0.4	(22.3) 0.7 1.0	— — —	17~18	体部上半から頸部の一部 頸部より上は表面と同じハケ目 横走 頸部より下は右回り巻き上げ痕 が明瞭で、その上は斜方向の指ナ デ整形	橙 色	DP202 体部 凸帯下側のナデ比較的 良好 透孔は穿孔後ナデ
38	(10.2)	—	—	A1.0 B0.9	— — —	— — —	(2.0) 0.9 0.4	— — —	— — —	11~13	花状部の中間部の一部 凸帯の裏側はハケ目整形、その後 指ナデ整形 その上部は表面と同じハケ目横 走	にぶい 橙 色	DP217 口縁部片 凸帯下側のナデ良好 凸帯は上・下部からの つまみ出しによって接 合部に作られている



### 第33号古墳出土形象埴輪観察表

図版番号	種別・部位	形態、整形技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
第349図 39	人物埴輪 腕接合部	右腕と思われる。棒状に作り接合部が明瞭に残る。 全面ナデ整形。	細砂・極少量の雲母を含む精良な胎土。 焼成は良好。	橙色	DP239
40	形象埴輪 鞍の一部か	後輪と思われる。板状粘土を肩庇板状にヘラナデ整形、下端の接合部へは両面から粘土板を貼付けて補強し、ナデを加えている。	細砂・雲母を多量に含む精良な胎土。焼成は良好。	橙色	DP238

### 第33号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第349図 41	埴形土器 土師器	B (7.8)	底部は丸底である。胴部は底部から扁平な半球状に立ち上がっている。頸部は器厚をやや減じ、外傾して立ち上がる。	底部は篋ナデ整形。胴部・頸部外面は篋磨き整形、頸部内面はナデ整形、その後、胴部外面と頸部内・外面へ朱を施している。	砂粒 明赤褐色 普通	85% P151

### 第35号古墳（第351図）

#### (1) 古墳の現状

本墳は、E10・E11区における宿台地の平坦部に位置している。北側0.5mには第32号古墳、西北西側4.5mには第33号古墳が接近している。また、墳丘と第171号土坑、北東側周溝と第124号住居跡の一部が重複している。

#### (2) 古墳の構造

##### 〈墳丘〉

墳丘は耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。調査した周溝から判断すると、墳形は、東～西にやや長い円墳である。規模は、東側で幅3.4mがブリッジ状を呈して周溝が切られているが、墳丘を推定したラインから計測して、周溝の内側で長径（東～西）15.1m・短径14.3mである。標高は27.18mである。

##### 〈周溝〉

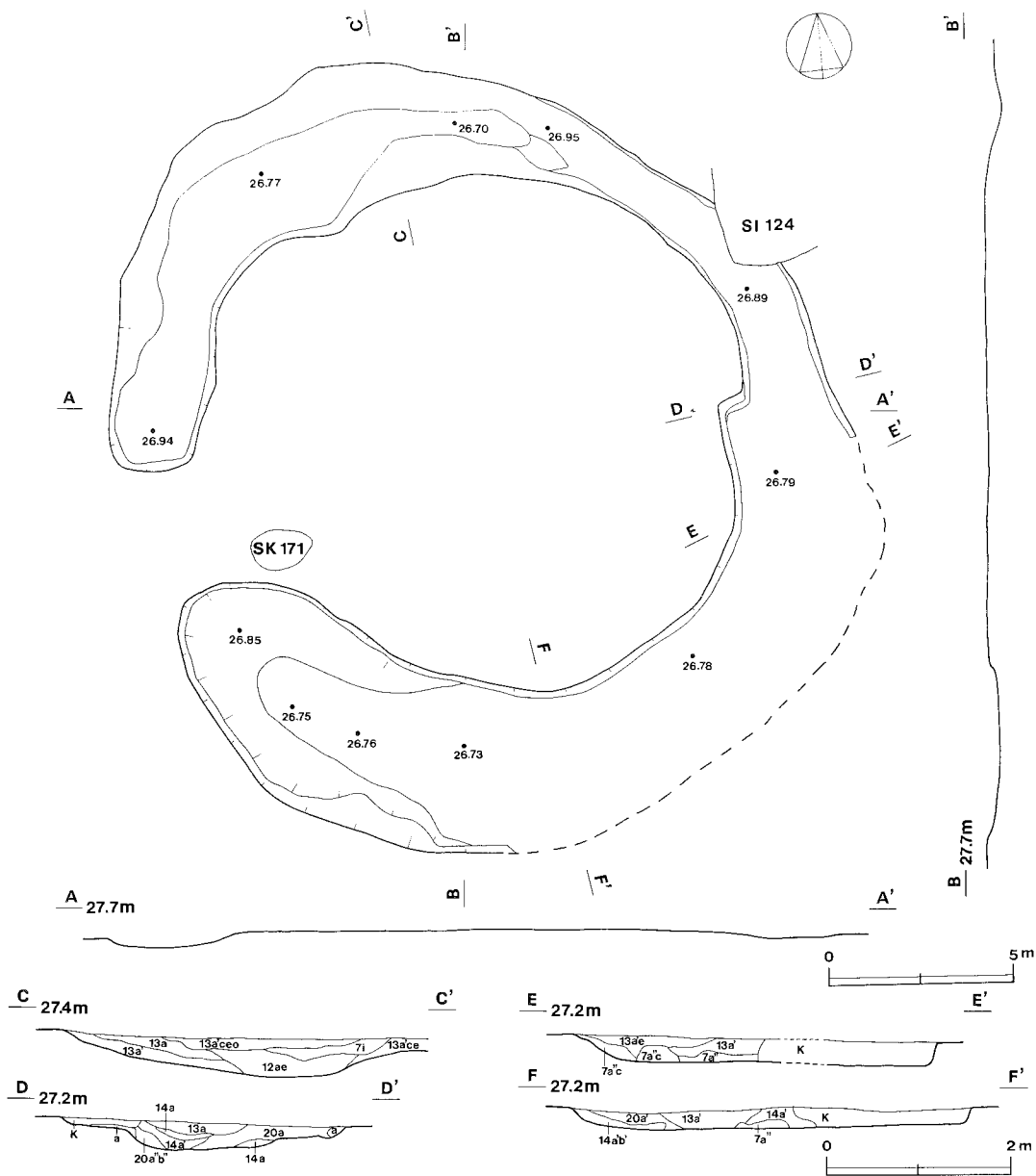
周溝は東側がブリッジ状に掘り残されているが、上幅の広・狭と波状に屈曲している部分があるものの、平面形は墳丘を取り囲むように円形状に掘られている。なお、東～南東にかけては攪乱を受けており、外側ラインは推定したラインである。上幅は1.4～4.9m、下幅は1.1～2.6mである。深さは0.2～0.4mである。溝底はほぼ平坦で、標高は26.64～26.98mである。壁面はロームで、幅の割には深さが浅く、墳丘側・外側とも溝底からゆるやかに立ち上がっている。なお、北東側で住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。覆土はローム粒子を含む暗褐色土が主体をなし、溝底部付近には多量のローム粒子を含む暗赤褐色土がよく締まって堆積している。

#### (3) 埋葬施設

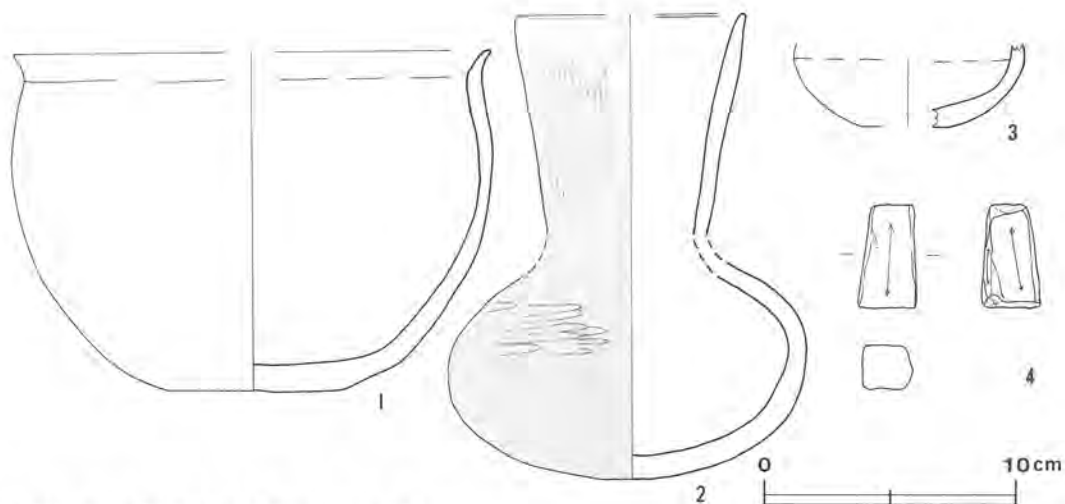
墳丘と周溝内を精査したが、検出されなかった。

(4) 古墳からの出土遺物 (第352図)

東側周溝内から古墳時代後期と思われる第352図1の土師器の鉢形土器、2・3の埴形土器、4の砥石1点が出土している。



第351図 第35号古墳実測図



第352図 第35号古墳出土遺物実測図

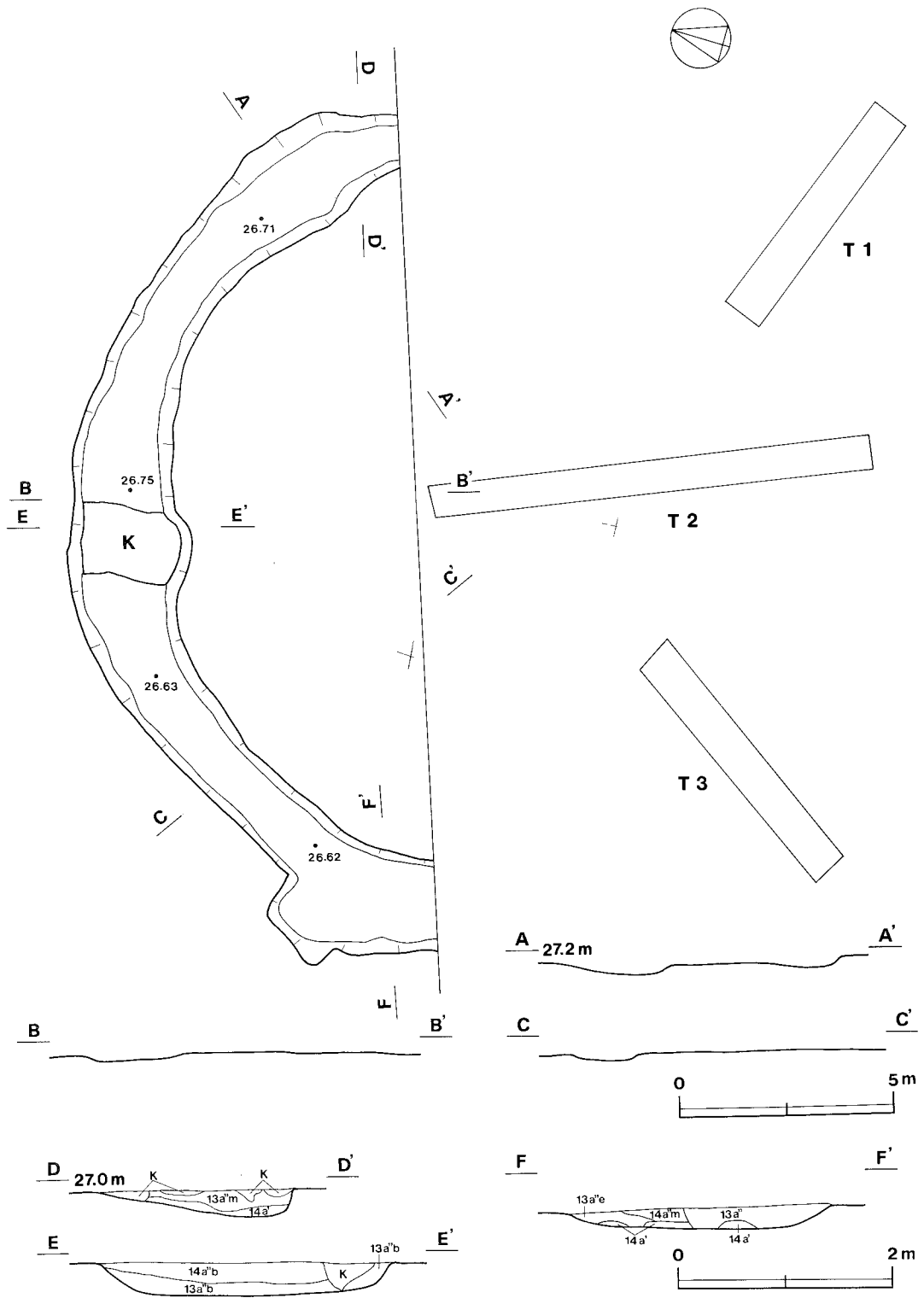
第35号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第352図 1	鉢形土器 土師器	A「19.1」 B 13.5 C 7.0	底部は平底で小さい。体部は次第に器厚を減じながら底部から内彎して立ち上がっている。頸部でややくびれて、口辺部で小さく外傾している。	内面、口辺部内・外面はナデ整形。底部・胴部外面は篋ナデ整形。胴下半部と底部を厚めに作り、安定感あり。	砂粒 にぶい褐色 普通	70% P153
2	埴形土器 土師器	A「9.2」 B (18.7)	底部は丸底で器厚が厚い。胴部は下半部から器厚を一定に保って内彎し、中央部で最大径を測り、上半部で器厚を減じながらつばまり、扁平な半球状を呈している。頸部は欠損。口辺部は外傾して高く立ち上がっている。	底部は篋ナデ整形。胴部外面、口辺部内・外面篋磨き整形。その後朱を施している。胴部内面は篋ナデ整形。その後ナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	80% P152
3	埴形土器 土師器	B (3.3) C「3.4」	底部は平底で小さい。胴下半部は器厚を減じながら内彎して胴中央部まで立ち上がっている。	内面はナデ整形。外面は篋ナデ整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% P154

第36号古墳 (第353図)

(1) 古墳の現状

本墳は、F10区における宿台地の平坦部の南縁に位置している。北側20mには第33号古墳が隣接している。墳丘の丁度中程の南西～北東にかけては道路が通っている。この道路を境にして南側へゆるやかに低く傾斜し、その先は急崖になっている。その崖下に人家があり、非常に危険なため、南側半分の調査は幅1mのトレンチ3本を設定し、周溝等を確認する調査を行った。



第353图 第36号古墳実測図

## (2) 古墳の構造

### 〈墳丘〉

北側半分程の墳丘は、耕作等によって旧表土層下のローム層面まで削平されていて、封土等の状況は不明である。また、南側半分程へはトレンチ3本(T1～T3)を入れた所、道路から南側はほぼ直線的に急傾斜で谷になっており、墳丘も周溝も確認できなかった。表土を除去した北側から検出した半円状の墳丘下は、調査した周溝から判断すると、その形状は円墳と推定される。計測できた周溝の最大径は16.3mである。標高は26.72mである。

### 〈周溝〉

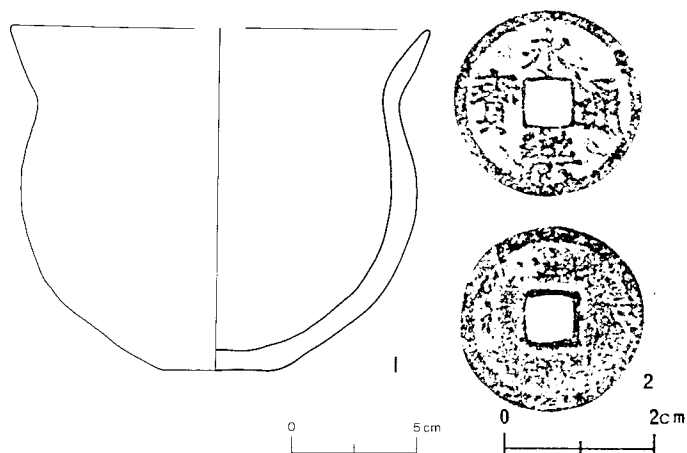
周溝は北側を全掘し、南側は崖崩れの危険があるためにトレンチによる調査を実施した。その結果、南側は墳丘とともにローム面まで削平もしくは流出して谷となっていたため、周溝は確認されなかった。平面形は墳丘を取り囲むように円形状に掘られている。上幅は1.5～2.4m、下幅は0.8～1.9mである。深さは0.2～0.3mである。溝底はほぼ平坦で、標高は26.45～26.75mである。壁面はロームで、墳丘側の一部が溝底から垂直気味に立ち上がる部分があるが、他は墳丘側・外側ともに溝底からゆるやかに立ち上がっている。覆土は上層に攪乱部が広範囲に見られるが、その下は多量のローム粒子を含んだ暗褐色土と褐色土が比較的良く締まって堆積している。

## (3) 埋葬施設

約半分程を全掘し、その範囲の墳丘下と周溝内を精査したが、検出されなかった。

## (4) 古墳からの出土遺物(第354図)

北側周溝内から第354図1の土師器の甕形土器1点、攪乱穴付近から土師器の甕形土器片と2の古銭(永楽通宝(1587))1点が出土している。



第354図 第36号古墳出土遺物実測・拓影図

第36号古墳出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第354図 1	甕形土器 土師器	A「16.7」 B 13.7 C 4.4	底部は平底で小さい。体部は底部からはば器厚を一定に保って内彎して立ち上がり、頸部付近でややつばまる。頸部はゆるい「く」の字状を呈し、口辺部は外傾し、口縁部は薄く尖り気味である。	内・外面とも甕ナデ整形。その後体部内面、口辺部内・外面ともナデ整形。体部内面にわずかな剝離痕が見られる。	砂粒 明褐色 普通	80% P155

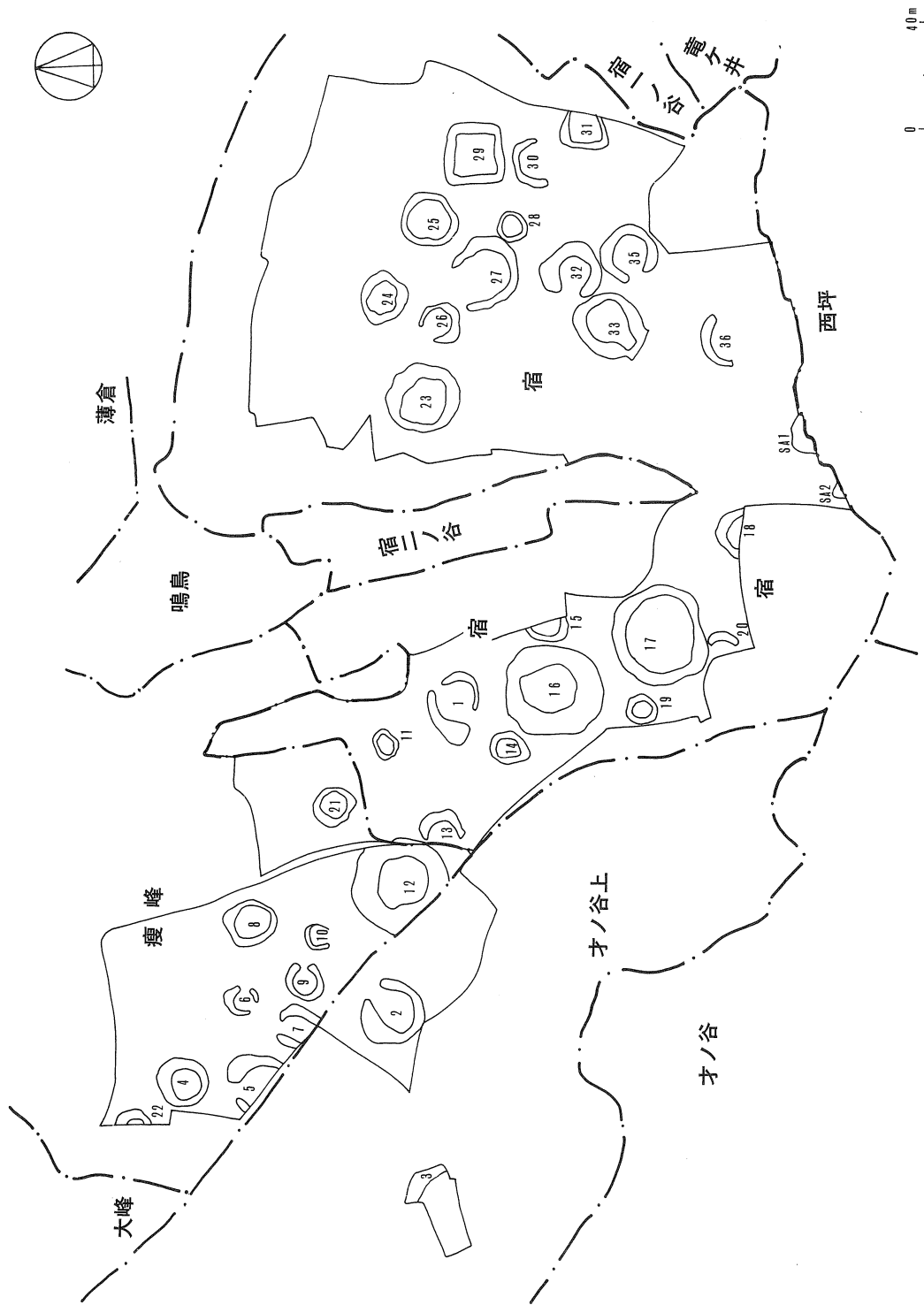
表7 円墳・方墳一覧表

古墳名	位置(区)	墳形	墳丘規模(m) 長径(辺)×短径(辺)	埋葬施設			周溝		その他の遺物	備考
				主体部	主軸方向	遺物	平面形	断面形		
第1号古墳	C6・D6	円墳	20.2×17.9	不明			円形状	ゆるやか	形象、円筒埴輪・古銭・須恵器片・土師器片	ブリッジ・西側 マウンド0.4m
第2号古墳	C3	円墳	22.1×20.3	不明			円形状	ゆるやか	土師器片・弥生式土器片・須恵器片	マウンド1.3m
第4号古墳	A2・A3	円墳	11.34×11.3	不明			円形状	墳丘側-外傾 外側-ゆるやか	土製紡錘車・弥生式土器片・古銭	
第5号古墳	A2・A3 B2・B3	円墳	15×15	不明			円形状	墳丘側-外傾 外側-ゆるやか	円筒埴輪片・弥生式土器片	ブリッジ・北側
第6号古墳	A3	円墳	9.3×8.3	不明			円形状	皿状で ゆるやか	土師器片・弥生式土器片	ブリッジ・東側
第7号古墳	B3	円墳	(11.5)	不明			円形状	ゆるやか	球状土錘	ブリッジ・北側
第8号古墳	A4・B4	円墳	12.9×12.5	不明			円形	墳丘側-外傾 外側-なだらか	弥生式土器片・土師器片・ミニチュア・土製紡錘車	
第9号古墳	B3・B4	円墳	10.8×10.2	不明			円形状	浅いU字状	土師器片・弥生式土器片	ブリッジ・東側
第10号古墳	B4	円墳	8.2×8.1	不明			円形状	外傾	土師器片・弥生式土器片	ブリッジ・南側
第11号古墳	C6	円墳	6.52×6.4	不明			円形状	逆台形状	土師器片・銅製品	
第13号古墳	C5	円墳	(11.65)	不明			(円形状)	墳丘側-外傾 外側-ゆるやか	なし	
第14号古墳	D6	円墳	9.4×9.15	不明			円形	U字状	なし	
第15号古墳	D7	円墳	(10.4)	不明			半円形状	外傾	土師器片	半分未調査
第17号古墳	E7・F7	円墳	20.2×19.6	不明			円形状	逆台形状	土師器片・砥石・鉄製品・形象、円筒埴輪・球状土錘・古銭	マウンド1.95m
第18号古墳	F8	円墳	(13.6)	不明			半円形状	ゆるやか	土師器片	半分未調査
第19号古墳	E6	円墳	9.33×6.92	不明			半円形状	ゆるやか	なし	
第20号古墳	F7	円墳	(14.5)	不明			半円形状	逆台形状	なし	2/3未調査
第21号古墳	B5	円墳	10.78×10.5	不明			円形	ゆるやか	弥生式土器片	
第22号古墳	Z2・A2	円墳	(8.9)	不明			半円形状	ゆるやか	土師器片	半分未調査
第23号古墳	C9・C10	円墳	18.9×16.7	不明			円形	ゆるやか	土師器片・陶器片・球状土錘・弥生式土器片	
第24号古墳	C10・C11	円墳	12.4×12.0	不明			円形	ゆるやか	弥生式土器片・土師器片・土器片・石・ミニチュア土器	

古墳名	位置(区)	墳形	墳丘規模(m) 長径(辺)×短径(辺)	埋葬施設			周溝		その他の遺物	備考
				主体部	主軸方向	遺物	平面形	断面形		
第25号古墳	C11・D11	円墳	17.6×17.4	箱式石棺	N-77°-W	雲母片岩の 小片	円形	墳丘側-外傾 外側-ゆるやか	土製紡錘車・土師 器片・縄文式土器	
第26号古墳	C10・D10	円墳	11.5×11.0	不明			円形状	ゆるやか	土師器片	ブリッジ・北西 側
第27号古墳	D10・D11	円墳	19.5×18.1	(第1) 箱式石棺	N-33°-E	雲母片岩の 粘土	長円形状	墳丘側-外傾 外側-ゆるやか	土師器片・球状土 錘	ブリッジ・北北 西側
第27号古墳	D10・D11	円墳	19.5×18.1	(第2) 箱式石棺	N-75°-E	雲母片岩の 粘土	長円形状	墳丘側-外傾 外側-ゆるやか	土師器片・球状土 錘	ブリッジ・北北 西側
第28号古墳	D11	円墳	8.2×8.0	不明			円形状	墳丘側-外傾 外側-ゆるやか	土師器片・球状土 錘	ブリッジ・北側
第29号古墳	D11・D12	方墳	16.6×15.9	箱式石棺	N-2°-E	粘土 雲母片岩 の小片	方形	逆台形状	球状土錘・古銭	
第30号古墳	D11・D12	円墳	(13.4)	不明			半円形状		雲母片岩小片・土 師器片・球状土錘	
第31号古墳	E12	方墳	(12.5)	不明			(方形状)	逆台形状	土師器・須恵器 片・内耳片	東側エリア外
第32号古墳	E11	円墳	18.0×12.6	不明			長円形状	ゆるやか	土師器・有孔円 板・球状土錘	ブリッジ・西側
第35号古墳	E10・E11	円墳	15.1×14.3	不明			長円形状	ゆるやか	土師器片・砥石	ブリッジ・東側
第36号古墳	F10	(円墳)	(16.25)	不明			半円形	ゆるやか	土師器片・古銭	南側谷

表 8 前方後円墳一覧表

古墳名	位置(区)	主軸方向	前方部長:後円部径 主軸長(m)=前方部長(m)+後円部径(m)	前方部幅(m)		後円部幅 (m)	埋葬施設	遺物・その他
				最大幅	くびれ部幅			
第3号古墳	C1・D1 D2	不明	不明	不明	不明	不明	不明	縄文式土器片・埴輪・鉄製 品。マウンド1.3m
第12号古墳	C4・C5	N-43°-W	1:2.7 26.8=7.2+19.6	9.2	7.0	20.0	不明	形象, 円筒埴輪・弥生式土 器片・土師器片・石製品・ 鉄製釘
第16号古墳	D6・D7 E6	N-43°-E	1:3.8 26.5=5.5+21.0	6.4	3.61	20.36	不明	土師器片・古銭
第33号古墳	E10	N-38°-E	1:4.1 22.1=4.3+17.8	6.3	3.52	16.4	不明	土師器片・円筒埴輪片・鉄 製品・球状土錘・砥石・石 斧片



第355図 字名・古墳・塚・位置図



茨城県教育財団文化財調査報告第58集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19

長峰遺跡（上）

平成2年3月25日印刷

平成2年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
水戸市南町3丁目4番57号

印刷 有限会社 川田プリント  
水戸市上水戸4丁目6番53号  
TEL：0292（53）5551代

